
C E S T G D F ～命断のクロウ～

ゑ D o

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C E S T G D F 〈命断のクロウ〉

【Nコード】

N 1 0 6 8 H

【作者名】

ゑ D O

【あらすじ】

幼い頃から両親や友人を自らの呪いのようなもので亡くしてきた主人公、藤草久郎^{ふじくさくろう}は、引き取られた先の祖父にも大怪我をさせてしまう。呪いの存在に改めて絶望し自殺を決意した久郎の上に都合良く鉄骨が落ちてきて、久郎は死を受け入れようとするが……。破壊神から世界を救う英雄たちの物語『C E S T G D F』（セストグドフ）第一章。始まりは運命を断つことから。

Cのプロローグ「破壊神は唐突に」(前書き)

恐れ入ります、急D Oです。この作品は処女作（というのでしょうか？）だったので、とても下手な文及び超展開ワロタだとは思いますが、読んでくれましたらありがたいです。次作ではそんな事がな
いよう努めます。

Cのプロローグ「破壊神は唐突に」

ある日、うららかな陽気に和んでいた僕の前に神様が現れて言い
ました。

「おい、ノフィーネ。突然だが、数年後、破壊神が現れてこの人間
界を滅ぼしに来るらしい。撃退する手伝いをしてくれ」

ノフィーネ、っていうのは僕の名前。一人称からはわかりづらい
と思うけど、一応、僕は女です。

神様と僕とは知り合い・・・というか関係者で、いつもいろいろ
な用事を頼まれたことがあったけど。

え、何？ 破壊神？ 撃退？・・・冗談だよね？

「いや、本当だ。さっき観測されたらしい」

フーン、そうですか・・・。って、できるかー！！

「おお、ノフィーネがキレた」

キレますよ。ええ、それはもう。なにあっさり終末宣言しちゃっ
てるんですか！

「事実なんだ、しかたがない」

私が破壊神なんか倒せるわけないでしょう！ 神様がやってくだ
さいよ！

「無茶言うな。あんな奴に勝てるわけがない」

じゃあなんでボクに頼むんですか!？
神様でも倒せないものをどう倒せと!？

「むゝ・・・、気合いと根性、か？」

そんなもので倒せたら経験値とか伝説の武器いりませんから。

「そうは言うが、気合と根性をなめてはいけない、と俺は思うが」

あんたが破壊神をなめるな! どんなのか知りませんが!

「まあ、冗談はさて置く」

あ、冗談だったんですか。ま、突然、破壊神なんて

「あ、そちらはホントだ」

ですよね。この展開でそれはありませんよね。・・・泣いて
もいいですか？

「まあ、そう嘆かないでくれ。誰もノフィーネ一人でやれとは言っ
てない。仲間がいれば太刀打ちできるかもしれない」

でも神様は手伝わないんですね。

「当然だ。俺はこの世界には直接干渉しない。というか、逃げたい
くらいだ」

あははゝ・・・なんて情けない神様なんだろう。ホントに神様？

「そう言うな。俺は創造神、ゆえに破壊神とは勝負になりさえしない。そもそも俺の実力は、ドラゴンを倒せるぐらいの勇者と同等ほどだ」

そんな神様がいていいんですか？

「俺はさまざまな世界を創ってきたが、その世界で生まれた武神に倒されそうになったり、征神に力を盗られそうになったこともある。親が子より強いというわけではない」

・・・なんか、大変だったんですね。

でも、見捨てることにはわりはないですよね・・・。

「そうだな。だが救いはある」

救い？

「破壊神は強い。だが百パーセント倒せない相手ってわけではない」

そ、それは本当ですか神様。

「あくまで可能性だがな。だが、王界の王たちも破壊神を危惧し、動き出しているって話だ。諦めるにはまだ早い」

・・・なんにせよ、やらなくちゃいけない・・・と。

「・・・すまん、俺が死ねば代わりはそういない。だから後継者なんかができるまで、おれは死ぬわけにはいかないんだ」

・・・分かりました。僕頑張ってみます。・・・あれ？　そういえば、なんで僕なんですか？　他の魔術師さんとかの方がいいような気がします。・・・

「ほかの奴らに言っても、逃げる準備しかないからな。お前なら破壊神に立ち向かってくれると思って、お前に頼んだ」

あまり期待しないでくださいね。神様がくれた『不老不死』の力があるからといって、僕自身は無力なんですから。

「まあ、無理だとしてもお前らにとってはやるしか滅亡を回避する方法はない。だが、少しなら手伝ってやろう。早速、手伝ってくれそうな奴に連絡を取ってくる」

あ、ちょっと待つ・・・、行っちゃった。

仕方がない、早速始めますか。

って、そもそも何をすればいいんだろ？

「あ、言い忘れてたが」

のわっ！　いきなりひょっこり現れないで下さい。

「すまんすまん、言い忘れてたことがあった。俺が昔に創った『命断』ってバィムがあるんだが、そのコードが最近、頻繁に発動するんだ」

は、はあ。でも、それが破壊神と何の関係が・・・

「関係大ありなところか、打倒『破壊神』の重要な鍵だ。深層バィムの『命断』を、一人の人間が発動させてるんだからな。・・・い

「つたい、なんでなのやら」

え、つまり・・・その人がいれば、破壊神が倒せるってことですか？

「正確には、倒せるかもしれないがな。それに、本人は無自覚らしい。だから場所の特定は困難を極めるだろう」

え、神様場所知ってるんじゃない？

「いや知らん。無自覚だと分かったのも、そのコードの不規則かつ微妙な発動時間から推測しただけだ。自覚していれば、裏社会で噂にでもなっているだろうがな」

そのバイムは何なんですか？ そんなに強いんですか？

「それはまだ秘密だ」

え、ケチ。

「教えられないものは教えられん。だがお前も深層バイムの『不老不死』を発動させる力の保持者だ。見つけたら第6感のようなもので分かるだろう。連絡してくれたら俺が確認に行つてやる」

はあ、なんか途方もない話だなあ・・・。

「まあ、応援している。多分、東の方にいると俺は思うが」

え？ その情報はどこから？

「勘だ」

・・・さうて、西の方でも探すかな・・・。

「ん？　なぜ西の方に向いて歩きだす？　神の勘は当たるぞノフィ
ーネ。多、極東が怪し・・・」

神様がなんか言ってるけど、無視です、無視。

さうて、どこに行こつかな・・・。やっぱり魔法といったらい
ギリスか、それとも・・・。

Cの1話「藤草久郎」

突然だが、俺は呪われている。

いや、もしかしたら、俺自身が呪いの根元なのかもしれない。

その呪いは、縄で頭の中を締め付けられるような頭痛と共に起り、周りの人間を殺してきた。

その呪いの始まりは俺が7歳のころ。デパートに買い物にいった帰り道、俺の母さんが歩道に突っ込んできた暴走車から俺をかばってひかれた。母さんはその晩、病院で死んだ。

そして父さんも、俺の8歳の誕生日とき、家に押し入って来た強盗に刺されて、強盗が逃げた後救急車を呼んだが、社内にて息を引きとった。

早いうちに両親を亡くした俺は母方の爺さんの家で過ごすことになった。

後で聞いた話によると、爺さんは自ら俺を引き取りたいと申し出たらしい。実際、爺さんは俺を歓迎してくれていた。

爺さんは有名な資産家で、家は、外周するのに十分以上かかるほど広い。ここに来たころはどこのテーマパークかと思ったほどだ。実際、迷子に何度もなった。

今思えば、もしかしたら爺さんは俺に家督を継がせるために、俺を引き取ったのかもしれない。爺さんの血を引くのは一人娘だった母さんの息子である俺だけだ。

いや、そう言ったら爺さんに失礼だな。爺さんは本当によくしてくれた。

俺が何かを欲しがれば、テストの高得点や短距離走の一位なんかの見返りに買ってくれたし、俺が物を壊したら、叱られはしたが、謝ったら許してくれた。

ただ甘やかすだけでなく、俺を育ててくれた。

だが一方、その間も俺の呪いは止まることを知らなかった。

小学五年のとき、プールで同級生が死んだ。

中学二年のとき、部活で先輩が死んだ。

中学三年のとき、引きこもった俺のために爺さんが雇ったハウスメイドが死んだ。

そして、それら全てに俺が関わった。これで俺は何人の人を殺してきたのか。

だからある日、俺は爺さんに告げたことがある。

「死にたい」と。

そんな俺を爺さんは本気でぶっ叩いた。そして泣いてくれた。

爺さんは俺のことを理解してくれていたから、街から少し離れた山のふもとにある別荘に、俺を一人で住まわせてくれた。

人と会うのは、生活必需品や食べ物を届けにくる爺さんと数分だけ。

ただ養ってもらっただけじゃ悪いからと、爺さんから学んだデートリードもなかなか様になってきた。

人と会わず、一日を過ごす。万事順調・・・のはずだった。

爺さんが意識不明の重体で、入院するまでは。

C

「・・・はい、お願いします。それでは」

俺、藤草久郎ふじくさくろうは手に持った受話器を静かに下ろした。

電話は本家に勤めている家政婦からで、内容は爺さんが大けがで入院した、という予想だにしないことだった。

俺はしばらく呆然としていて、前半はよく聞き取れていなかったが、おそらく、爺さんは車でこっちへ来る途中に、トラックに衝突されたらしい。

しかもかなり危険な状態らしく、助かる見込みは五分五分なんだそうだ。

とりあえず今は、その家政婦が爺さんが爺さんのそばについているらしい。

俺はしばらく電話の前から動けずにいて、壁にかかったカレンダーを見る。

今日は12月24日。クリスマスイブ。

本当なら、今日は爺さんが似合わない三角帽をかぶって、わざわざ俺へのプレゼントを持ってきて、変なイントネーションの英語で「メリークリスマス」とか言ってただろう。

それだけじゃない、今年は俺も爺さんへのプレゼントを買っていた。今も机の引き出しにしまっている。それが・・・どうしてこんなことに。

いや、理由は分かっている。どうせ俺の呪いだろう。今回はなぜか頭痛がこなかったが・・・。

しかし、こんなの俺の呪いに決まっている。俺の呪いは爺さんにまで手を出した。

この呪いが何なのかは知らないが、どれだけ俺の大切な人たちを奪えば気が済むのだろうか。

「・・・もういやだ。こんなのは」

そして俺は、前に一度断念したことを、もう一度すること思い出した。

そう・・・『自殺』だ。

そうと決まれば、俺は財布だけを持って別荘の外に出る。

外は静かに雪が降っていた。木々や地面には一面雪が降り積もっていて、コートを着ているにも関わらず、かなり寒かった。

さて、俺はどこに行こうとしているのか？

ただ、野垂れ死ぬなら、山の奥に向かって歩けばいいはずだ。

しかし、俺の足はその逆、街の方に向かって歩いていた。

死にたくないわけじゃない。

だけど、死ぬ前に一度、街や人を見たかった。そして、どこかの店で外食して、ゲーセンで遊んで・・・俺の歳、十六歳らしいこ

とをしたかっただけだ。

街までは、通常時でも歩きだと一時間はかかる。さらにこの雪だ。プラス三十分はかかるだろう。

ザリッ、ザリッ、っと歩く度に雪が鳴る。一応、舗装はされているとはいえ、雪の中の山道とは、非常につらい。運動不足のこの体には非常にきついものだ。

だが、不思議と疲れがない。いろいろと麻痺しているのだろうか。機械的に歩きながら、いろんなことを考えていた。

爺さんは助かるだろうか？

自殺というのは、どうすればできるのだろうか？

最後の夕食は何を食べようか？

そういえば、昔、爺さんと『最後の晚餐』を見に行ったことがあったな。

あのとき食べた本場のパスタはうまかったな。爺さんはものすごい高いワインを何本も飲んだな。全然、酔ってなかったけど。

・・・爺さん、大丈夫かな。

いや、爺さんのことは忘れよう。

これ以上爺さんについて考えたら、覚悟が鈍りそうだったから、俺はなにも考えず歩くことにした。

C

街についた・・・。

俺の足はもう既にガクガクだったが、街に対する好奇心がそれを上回り、気づけば自分がどこにいるのかさえ全くわからなくなってしまった。

これがクリスマスムードってやつか、街のいたる所にイルミネーションがあり、広場の真ん中にはクリスマスツリーが立っている。町には気のせいかカップルが目立つ。って、当たり前のことか。街角に立ってチラシを配っているサンタ。こんな日でも路上ライ

づをしている若者。笑いあいながら話し合っている学生たち。そんな生き生きとした人の中にぽつんと死のうとしている俺一人。

俺は妙な孤独感を味わっていた。・・・もしかしたら俺は、最後の時ぐらい他の人と一緒に過ごしたいのかもしれない。

だが、そんなことは願っちゃいけない。一緒にいればその人が死ぬ。

俺は孤独感を違った幸福で埋めることにした。

まずは、何か食べに行くでしょう。パスタとか・・・最後の晩餐を・・・、

そう思っていた時だった、

ガコオン！！

何だ・・・、今・・・頭上から変な音が聞こえた。

俺は顔を上に向け、その音の正体を、探ろうとした。そして知った。

頭上にあるビルの工事中の部分から、長くて太い三、四本の鉄骨が、俺に向かって、落ちてきているのを。

完全に直撃コース。鉄骨が真上に見えて、その真下に俺がいる。間違いなく当たる。

・・・なんなんだろうこれは、確かに俺は死のうと思った。けど、まだ街に來たばかりだ。まだ何もやっていない。何もやれていない。

ああでも、ま、これでいいか。

自分で手を下さずに死ねるんだ。楽でいい。あれに潰されて死ぬでしょう。

そう達観すると、落ちてくる鉄骨が、やけに遅く見える。

避けようと思えば避けられるような気がする。が、俺は動く気がない。

これでいい。どうせ自殺しようとしても、ためらってしまうに違

いないから。

視界の中の鉄骨は、まだビルの中程の高さにある。

まだ落ちるには時間がありそうだ。

もしかやこれは、神様なんかくれた、死ぬ前の走馬灯を見る時間なのかもしれない。

俺は残りの時間を、これまでの人生を思い返すことに使おうとした。だが頭に思い浮かぶのは・・・、

爺さんは大丈夫だろうか。

あの鉄骨に潰された俺の体は、どうなるのだろうか。

死ぬってのは痛いのだろうか。

俺の死体を見て、トラウマになる人がいるのではないだろうか。

そういった事だけが、頭に浮かび消えていく。

ははは・・・、なんだこれ？

思い浮かぶのは過去のことじゃなく、未来のことだけじゃないか。これじゃあまるで・・・、まだ生に執着があるような。

俺は・・・、俺は・・・、俺は・・・、俺は・・・、俺は・・・！

生きたい・・・のか？

そう思った瞬間、さっきまで止まっていたようだった鉄骨が、急に加速を始めた。

俺はとっさに足を動かそうとしたが・・・、

ズキンッ！

くっ・・・！　こんな時に、呪いの頭痛か！？

しかも、今までに感じたことがないほどの、強い痛みだった。

その痛みに、俺はふらつかずにはいられず。

そんな体たらくで、思い通りに体が動かせるわけもなく。

鉄骨が降りかかってくるのを避けることはかなわない・・・！
くそっ・・・たれ・・・！

「危ない!!」

薄れゆく意識、誰かの声を聞いた気がした。

だが次の瞬間、俺の耳に鉄骨が落ちた音が響き、その声の余韻をかき消した。

Cの2話「ノフィーネ」

体が冷たい・・・雪のせいかな？

・・・俺はどうなったんだ？

確か鉄骨が落ちてきたときに、頭痛が起こって・・・、「危ない！！」の声と同時に・・・後ろから突き飛ばされて・・・って。

はっ・・・！！？

俺は目を覚まし、慌てて起き上がり、振り向く。

そこ——さっきまで俺が立っていた場所には、落ちた衝撃で曲がった鉄骨が折り重なっていて・・・。

その中心には・・・、鉄骨に・・・腹を刺された少女が・・・。
俺は思わず目をそらす。

そうだ、思い出した。頭痛が起きたとき、俺は後ろから突き飛ばされて・・・それから気を失っていたのか？

少女の周りには人だかりが出来ていた。中には少女に対して呼びかけをする人や、何とか鉄骨を抜こうと周囲の人と動かそうとする人もいた。

だが、あの出血量では・・・、助からないどころか・・・既に・・・。
いや、それを分かっているからこそその行動か・・・。

「キミ、大丈夫かい！？」

俺にも声かけられる。二十歳前半ぐらいの男性だ。

「・・・大丈夫・・・です」

なんとか答えられたが、もう精神的に、つらかった。俺はまた人を殺してしまった。

さっきの呪いの頭痛は、きっとこれの原因だろう。俺はもう一度、さっき目をそらしてしまった少女の死体に目を向ける。

・・・降ってきた四本の鉄骨の内、三本はそれぞれ誰にも当たらずに落ちていたが、残りの一本は、その少女の腹部のど真ん中に突き立っていた・・・。

顔に当たらなかったのは、こう言っては何だが・・・、不幸中の幸いだったかもしれない。

その少女は見たところ、高校生ぐらいだ。今時の女子高校生な服を身にまとい、綺麗な顔には、薄く化粧もされている。

何よりその肌は、地面の雪と同じくらい透き通るように白く。整った目鼻立ちの顔にはデキモノ一つすらない。

そして髪は、鮮やかな栗色の長髪。・・・今は乱れているが。

俺は、昔ドラマで見たように、少女のまぶたを静かに閉じさせてみる。・・・これぐらいしか、俺が今できることは無い。

隣では、大柄な男性たちが少女の体に刺さった鉄骨を、なんとか抜き終わったようだ。その傷口からはもう血は出てこない。・・・あまりに無残な状態で、直視できないが・・・、

ブンッ・・・!!

・・・つつ！・・・何だ、今のは？ 突然、呪いとは違った痛みと立ち眩みが俺を襲った。

そして、しばらくして立ち眩みから復活した俺の目は、ありえないものを

——さっき閉じさせたはずのまぶたを開け、こっちを見ている少女の姿を映した・・・！

「・・・っ!？」

なんだ？ 幻覚でも見てるのか？

少女の顔にはまるで、不思議なものを見るような表情が浮かんでいて、しばらく俺と目を合わせていた。また、それに気づいた周りの人たちが、驚愕の目で少女を見る。そして少女は・・・腹の傷が何ともないかのように立ち上がった。

それを見た周囲の反応は、なにが起こったのか理解しきれない、といった様子が半分、化け物を見たかの様子が半分、ってところか。

「お、おいキミ・・・、大丈夫・・・なのか？」

戸惑いながらも一人の男がきく。

が、少女は、

「はい。僕は大丈夫です。お騒がせしました」

と、何事もなかったかのように言い、スタスタとその場から立ち去ろうとする。

俺の手を掴みながら。

「え？　ちよっ・・・何だ？」

事態が飲み込めない俺を引っ張り、少女は困惑中の周りの奴らの間を、早足で抜けていく。

人だかりを抜けた後も、早足・・・いや、もはや走って、進み続けている。

あまりの早さに、足がもつれそうだ。

「ま、待った！　・・・どこに、俺を・・・？」

「ここから離れたところならどこでも！」

そう言って少女はさらにスピードを上げる。

「ちよっ・・・速っ・・・」

「ゆっくりしてたら、質問責めとかにあって大変でしょ？　ほら、急ぐよ」

いや、むしろ俺が質問責めしたいところなんだが。

結局、五分ほど全力で走ってやっと、休むことを許された。

C

「はぁ・・・はぁ・・・」

約五分間の全力走の結果、レストラン街のような所に着いた。

「ふう、ここまでくれば、もう大丈夫だね」

少女はあんなに走ったっていうのに、あまり疲れた様子がない。

・ 化け物か？

「は、・・・速いな、足。・・・お前」

「そう？ ふつうだと思うけど……。むしろキミの足が遅いんだと思うよ？」

ん……。確かに……。それは一理ある。

別荘では運動なんてほとんどしなかったし……。太ってはいないが、筋肉は確かについていないように思う。

「ちゃんと、運動してる？」

「……。余計なお世話だ。……。それより、なんで俺をここに連れてきたんだ？ というかお前、腹の傷は……」

と、言いかけたところで気づいた。

服の敗れたところから覗く白く引き締まった腹には、傷跡が一つさえもなかった。

ありえない……。確かに鉄骨は刺さっていたはずだ。

現に、少女の服の腹部周辺には、固まった血がベットリと付いている。

「うん、言いたいことは分かってる。……。安心して、つれてきたことも含めて、ちゃんと説明するよ」

俺の様子を見て、少し落ち込んだように目を伏せる少女。

「取り合えず、名前を聞いてもいいかな？」

……。そういや、最後に自分の名前を人に教えたのはいつだったか。

「藤草、久郎だ」

「藤草久郎……。それじゃあ久郎君だね。あ、僕の名前はノフィーネ。よろしくね」

ノフィーネ……。外国人か？

腰まで届く長い髪の色は栗色。瞳の色はブルー。肌は少し色白。なるほど、まず東洋人じゃない。

「ノフィーネ、お前はどこの国の出身なんだ？」

何気ない会話としてきいてみる。しばらく爺さんと家政婦としか会話したことがないから、どんな話題を出して良いのかは分からなかったが、多分これでいいだろう。

「え？ 最初の詩うもんがそれ？ まあいいけど。えーと・・・ヨ
ーロッパかな・・・」

やけに規模がでかいな。

「なんでそんなにアバウトなんだ？」

「いや、昔のことすぎてあまりよく覚えてないの」

昔のこと過ぎてって・・・。

「いや、何歳だよ？」

ほんの冗談のつもりで言ったんだが。

「うーん・・・それもわかんない。・・・あ、でも確か、子供の頃
に十字軍が・・・」

十字軍——ヨーロッパにて、約十一世紀末から二世紀に渡って
何度も派遣された遠征軍。

って、最低でも七百年は生きている計算になるぞ。

「・・・おもしろい冗談だな」

「うん。これが、冗談だったらすごくおもしろいと思う」
・・・。

「とりあえず、どこか落ち着ける所で話そうよ。ここは寒いし、ボ
クすっかりお腹が冷えちゃったよ」

そう言って、両手で腹部を覆うノフィーネ。

「まあ、別にいいが・・・。その服でか？」

「えっ？ あ・・・」

そう、ノフィーネの服は血だらけで、今もさっきから嫌でも目立
っている。

どんな店へ行っても落ち着けないだろう。

「どうしようか・・・、こんなにベットリついてちゃ、ごまかせな
いし・・・」

・・・よし、こういう場合は・・・、

俺はさっきのお返しとばかりに、ノフィーネの腕を掴み、引っ張
り連れて行く。

「え、ちよつと久郎君！？ どこに・・・」

ノフィーネの手を引いて三分ほど、俺たちは目的の所にたどり着いた。迷って見つけれないかなとも思っていたが、案外あっさり見つかった。

「え？　ここって・・・」

そう、ブティック・・・と言うんだったか？　女性ものの服がある店だ。

「あ、でも・・・」

「ん？　何か問題があったか？」

そうきくと、ノフィーネはとも言いにくそうに言った。

「・・・ごめん。ボクあまりお金持っていないんだ・・・」

・・・なんだ、そんな事なら。

「心配しなくてもいい。俺が買ってやる」

「え？　ちょっと待って久郎君。服って久郎君が思ってるほど安くないよ。きっと久郎君の財布の中身じゃあ・・・」

俺の財布の中身か・・・。

「問題無い」

俺は財布の中身――ブラックカードをノフィーネに見せる。

「ブ、ブブ、ブラックカードおお！？　え、久郎君って何者！？」

「ただの金持ちだ」

といっても、この金は爺さんのだけだな。

「とりあえず、好きな物を選べばいい」

「え、でも・・・なんか悪いよ」

そんなに遠慮する必要はないのに。というか、遠慮してその服のまま、というわけにもいかないだろう。

・・・仕方がない。

「・・・気にするな。これは助けてくれた礼だ。さっさと返さないと心証が悪い」

はたして俺は、助けてくれてありがとう、なんて思っているのだろうか。

でも、今の俺には、あの時のような、死にたい気持ちはない。

今ある気持ちは・・・、何だろうな。

「早くしないと、俺が困るぞ」

この言葉がとどめの一撃だ。 ノフィーネはそれでも少し迷っていたが・・・。

「うん・・・そだね。じゃあお願いするよ」

とうとう折れた。

取りあえず店内に入る。・・・入った方がいいが、俺は何をすればいいんだ。

「久郎君、久郎君」

ノフィーネに呼ばれ、向かう。と、

「どう？ 似合う？」

頭の後ろで、その栗色の髪をポニーテールにしたノフィーネは、髪と同じ栗色のジャケット、雪のような肌と同じ白のブラウス、青いジーンズをまるでモデルのように着こなしていた。

しばらく、呆然としていると、ノフィーネが悲しそうな声で言う。

「・・・似合っていないかな」

俺は即否定。

「そんな事はない。ただ少し見とれていて・・・」
でも、そうだな・・・。

「そうだ、ジーンズじゃなくてスカートはどうだ？」

「え、スカート？」

途端に顔を少し紅潮させるノフィーネ。

「何か問題があったか？」

「え、と。その・・・無いけど。・・・は、恥ずかしいというか・・・？」

「ボク、あまりスカートをはいたことがなくて・・・」

ああ確かに。ボクという一人称からも、自分ではボーイッシュなつもりなんだろう。

俺から見れば、そうでもないが。

「似合うと思うぞ。きっと」

「・・・久郎君がそう言うなら、そうするけど・・・」
よし、折れた。

待つこと十数分。

「ど、どうかな？」

試着室のカーテンを開けて出てきたノフィーネに、俺はつい見とれてしまった。

先程のように、頭の後ろにはポニーテール。そしてグレーのジャケット、ブラウスは白、俺が勧めたスカートは膝上ぐらいの高さの明るいブラウンの物。

取りあえず、さっきのような間は作るまいと、正直に言う。

「すごく似合っている。うん、可愛いと思うぞ」

「そ、そうかな・・・。お世辞でも、ありがとう」

決して世辞では無いんだけどな。

さて、会計をすませるとするか。

・・・以外に安かったな。そう思うのは、ノフィーネが遠慮して安いものを選んだからか？

それとも俺の金銭感覚が変なのか？

C

「さて、服も買ったところで本題に入る必要があるな。さて、何を食べるか・・・」

「・・・そこは本題じゃないと思うけどなあ」

分かってはいるが・・・。現在八時半、今まで歩いて走って、さすがに限界だ。

「飲食店なら落ち着けると思うが？」

「それもそうだね。どこに行くかは任せるよ」

任されたか・・・、ここは初志貫徹でいくか。

「パスタが食いたいから、いいか？」

「うん、いいよ」

よし、それじゃ行くか。場所は・・・そうだ、昔爺さんと何度も一緒にいった店が近くにあったな。
あそこのパスタはうまかったからな。非常に楽しみだ。

C

「く、久郎君？ パスタが食べたいんだよね？」

「その通りだが？」

あらためて目の前の店を見る。・・・あってるはずだが？

「いや、パスタが食べたいな、と思ってくる所じゃないよ、ここ。」

「ん？ パスタはイタリア料理だろ？」

さらに再び目の前の店を見る。・・・あきらかにイタリアンの店だ。

「そうじゃなくて・・・、ここは高級イタリア料理店だよ！ コースとかで出てくる！」

その通りだ。それくらい俺も承知している。

「予約とかしてないでしょ？ ふと、思いついただけなら」

「予約か・・・、そんなのは必要ないぞ」

ここで話してもらちがあかないので、俺はさっさと店内に入る。

「ちよっ・・・いくらブラックカード持ってる久郎君でも予約なしじゃ・・・」

そうだろうな、他の店だったら。

「すみません、お客様。ご予約は・・・」

出てきたウェイターはベテランそうな雰囲気を持つ男。というか、気づいてないのか？

俺は黙って、財布に付けている指輪を、そのウェイターに見せる。すると、予想通り。

「・・・く、草木の中に咲く、藤の花の紋章。・・・まさか、久郎様か？ すみません私、あまりの成長ぶりに気付けませんでした。」

大きくなられて・・・」

「久しぶりです真田さん。・・・四年ぶりですか？　変わりませんか」

目の前の人物は、俺の記憶の中と何ら変わってないように思えた。「はっはっ、若い人たちとは違って、数年くらいでは変わりませんよ。・・・ところで、そちら方は・・・いや、野暮なことは聞きません。・・・少しお待ちください。今、シェフを呼んで参ります」急ぎつつも優雅に歩く真田の様子も相変わらずだ。

ツンツン

後ろからノフィーネにつつかれたので、振り向く。

「・・・ホントに久郎君って何者？」

「だから、ただの金持ちだ。ま、こうして予約もなしで食べられるのは、三十年ほど前、ここが開業するときに、爺さんが資金援助をしたからだが」

シェフや開業当初から勤めていた真田さんは、その恩を今でも感じてくれているらしく、俺にも親切に接してくれていた。

と噂をすれば、厨房の方からシェフの多川さんがやってきた。

「久郎君！　久しぶりだねえ！」

多川さんが右手を差しだし握手を求めてきたので、俺はそれに応じる。

「お久しぶりです多川さん。・・・すみませんお忙しい中」

「いやいや。懐かしい顔が見えたら会いに行く、それが私のポリシーだからね。それに気にしなくてもすぐ戻るよ。クリスマスは忙しくてね。・・・そういえば、重蔵さんは・・・」

重蔵ってのは爺さんの名前だ。

・・・電話でのことを思い出してしまって、悪い気分が俺の中に戻ってくる。

だが、今だけは・・・、その感情を抑えるべきだろう。

取りあえず無難に答える。

「ちよっと体調を崩して入院してます」

「そうか……。元気になれたら、是非とも来てほしいものだ。
・さて、そろそろ私は戻るよそちらの……。お嬢さんもゆつくり
していってください」

そう言って厨房に戻った多川さんと入れ替わりに、真田さんが来た。
た。

「それでは、席にご案内します。こちらへどうぞ」

とりあえず、俺とノフィーネは、真田さんが案内する席に着こう
と動いた。

Cの3話「バイオアム」

「うう・・・、こんな高級店じゃ、逆に落ち着かないよお。・・・マナーとか分かんないし」

案内された席についたノフィーネが、そんな不平をもらす。

「ここはそんなにマナーを気にする必要はない。・・・というか、さつき、ぜんぜん話に入ってこなかったな」

まるで借りてきた猫のような静かさだった。

「だって、久郎君が私の知らない人と話をしてたし」とは言うが。

「・・・いや、俺とお前も充分初対面なんだが・・・」
なんで、こうまで打ち解けた感があるんだろうか？

「そういえば、そうだね。なんか、昔からの仲のように接してたよ。大体、今日クリスマスに洋服を買ってもらって、イタリアンの店で食事って・・・、なんだかすごく、こ、恋人みたいだったよ・・・」

言ってる途中で恥ずかしくなったのか、最後の方はかなり小さな声になっていた。

「そういえば、何でここに来たんだったかな・・・。・・・思い出した。この話はこっちから切り出そう。」

「なあノフィーネ。ずいぶんとくままでに時間がかかったが、きいていいか？」

さすがにいきなりか・・・。

しかしノフィーネは、このタイミングで俺が言うことを予想していたようだ。

「いいよ。どっちからにする？」

どっちから、か・・・。

「・・・それじゃあまず、お前の腹の傷についてから頼む」

こっちを先にしたのは、・・・ノフィーネがいったい何者なのか、を確定させておきたかったからだ。

「うんいいよ」

ノフィーネはコップの水を少し飲み、少し間を空けてから、ゆっくり話し始めた。

「先に行っておくと、ボクのあの傷は手品や劇の類じゃなくて、本当にホントの傷だったよ。でも今はない。それはさっき久郎君も見ただから分かってるよね？」

「ああ、確かに傷はなかった。だが、血はベツトリと付いていた」あの血に見えたものは、間違いなく血だ。偽血糊なら固まったりはしないし、ケチャップなんかは論外。絵の具にも見えなかった。

「そうだね。それじゃあ、『鉄骨による傷は本物だった』『後で見ると、傷がなかった』、これらの事実からくる結論は？」

考えさせているのか……。しばらく黙考する。二つほど思いついた。

「その二つの間で入れ替わったとか……」

「そんなことができたと思う？」

思わない。だからこそ、先に可能性を潰したかった。

俺の真の結論はこっち。

「普通なら思考停止の結論だが、これしかない……。つまり……『魔法』かなんかか？」

「へえ……。意外だな。わりとあっさり、その結論を出したね。普通の人なら全否定するのに」

俺が呪いを信じているのに、魔法を信じないのは変な話だからな。……それに、今思うと魔法には少し心当たりがあるような気がした。確か爺さんといたときだったはずだが……。よく思い出せない。

考え込むわけにもいかないから、話を続ける。

「その反応からして、どうやら正解みたいだが……」

「うん、八割くらいは正解」

まだ二割あるのか……。

「とりあえず整理すると……」

ノフィーネの説明によると、この世界には普通の人たちが気づいてないだけで、魔法・・・正確に言えば魔術が存在していて、魔術師のような者も少なからずいるという。

「で、僕の傷が治ったのは、『バイオアム』にある力の一つによるものなんだよ」

バイオアム？

・・・また新しい単語が出てきたな。

「Basic Intelligence Of the World And Magic。略してバイオアム。さらに、バイムって略す事もあるよ。意味は『世界と魔術の基礎情報』。バイオアムは世界のプログラム・・・って言えば分かるかな？ えーと、パソコンの中身に基盤があるよね？ あんな感じ、って思ってくれれば多分いいと思う」

・・・分かったかどうかは微妙だ。

「さらに、バイオアムには、浅層、中層、深層、の三つがあるんだけど、それぞれ役割が違って・・・」

・・・頭が痛いな。

「まずは浅層。これには占いや呪いなんかの簡単に出来る便利な魔術が刻まれている。起動には魔法陣や呪文や動作を使うから、たまに偶然普通の人が起動させてしまう事もあるんだけどね」

呪い・・・。まさか、と俺は自分の呪いを思い返す。まさか、俺の何かがそれを引き起こしたのか？

いや・・・人を殺すことが占いと同列の、簡単な、に当てはまるのか・・・？

「それと、回路が焼き切れるように、バイオアムも焼き切れるんだけど、浅層バイムは焼き切れやすい代わりに、修復もされやすい特徴があるんだよ」

そんな話を聞いているうちに、真田さんが前菜を持ってきた。とりあえず食べながら続きを聞く。

「次に中層バイム。これの起動には魔力が必要だから魔術師にしか

使えないけど、火球や雷撃といった殺傷性のあるものが刻まれている、俗にこれらを魔術の一つとして、バィム魔術って呼ばれるんだけど、魔力を注げばいいだけだから魔術かどうかは怪しいと僕は思う」

俺は前菜を平らげながら言う。

「俺としては、火球なんかが撃てる時点で、魔術でいいと思うが・・・」

「でも、久郎君はただ剣を振り回すのを剣術って呼ぶ？」

そう言われると確かに、そうなのかもな。

「中層バィムは、たまに使用数が多くて焼き切れることがあるんだけど、浅層バィムみたいにすぐには修復されないから、使えないことも多いのが特徴」

前菜を食べつつも、詰まることなくしゃべるノフィーネ。

・・・なんだか眠くなってきた・・・。

「眠そうだね。最後に、深層バィム。これは他のとは違って人には手が出せないけど、他のバィオアムより重要な部分を担っているんだよ」

・・・。

「他のバィオアムが、パソコンでいう便利機能のプログラムだったら、深層バィムは基本システムのプログラム」

・・・。

「過去の科学者たちが発見した法則や、自然サイクルの仕組み。さらには中層や浅層が起動する仕組みや、魔術法則なんかも全て。この世界が存在するために最低限必要なものを刻んだのが、深層バィム、って・・・分かった？」

・・・全然。さっき持ってこられたパスタを平らげながら聞いてたけど、半分も理解できなかった。

ところで、何でこんな話に？

「確かお前の腹の傷の話じゃなかったか？」

「あ、それが今の話と関係あるんだよ」

とすると、

「中層のバイオアムを使ったバイム魔術・・・とかいうやつで回復した、ってことか」

「残念ながら不正解だよ」

はずれか、それなら、

「浅層のバイオアムか？　だが体の回復ってのは、そんなに簡単で
きるものか？」

「うん。浅層バイムじゃ無理だよ。それに中層バイムでも、自己回復を促進させることぐらいしかできないんだよ」

・・・となると、だ。

「今の話、関係ない・・・」

「ううん。もう一つあるでしょ。バイオアム」

もう一つ・・・か。

「そう、深層バイム。そこには僕の『不老不死』が刻まれているというわけ」

ちよっと待て。

「さっき、深層バイムは人が手出しできないって・・・」

「人にはね。でも、この世界を創った神様、・・・創造神にのみ可能なんだよ」

創造神・・・とてつもなく飛んだ話になったな。

「昔、神様がね、この世界に対して恒久的に働きかけるための駒が欲しいと思ったらいいんだよ。それで、たまたま死にかけていた僕が選ばれて、かねてから創ってあった『不老不死』のバイオアムの対象を僕にした、ってわけ」

・・・まあ、何にせよ。ノフィーネは不老不死・・・ってわけか。テーブルの上には、デザートが置いてある。・・・そう言えば、メインはいつの間に食ったのだろうか。話を理解するのに必死で、食べた記憶がない。

「不老不死ってことは、前の十字軍がどうの、という話は本当なんだな」

「うん。体はあの時のまんま。永遠の十八歳ってよく言うよね。記憶とかは、妙な仕組みで二百年分以上あるけど」

そう言えばテレビで言ってたな。脳には約二百年分の記憶を蓄積できる、と。

忘却するのを含めても、さすがに普通ならオーバーしているか。

・・・しかし、ノフィーネが、あの時、と言ったとき、なんかも悲しそうで、つらそうだったな。

ま、今ではいつも通りの笑顔に戻って、デザートに舌鼓を打てるわけだが。何かあるんだろうか？

「このデザートおいしいね。こんなの食べたの久しぶりだよ」

「ホントにな。もしかしたら、昔よりもうまいかもしれん」

さて、時計を見ると・・・九時半か。

「そーいやまだ、俺があの場合から連れてこられた理由を聞いてなかったんだが・・・」

でも、もう食い終わってしまったし、そろそろ帰らないと・・・ん？　そう言えば俺。つい何時間前まで、死ぬだの何だの言ってたかったか？

正直、あまり帰るつもりなんてなくて、悔いを残さないために来たんじゃないかったか？　・・・まあ、今でも呪いの事を気にしているが。

だけど、久しぶりに他の人と過ごしたからか、それともあり得ないものを見たからか。

もしくは、死の恐怖を感じたからか。

今、俺の中に死ぬという気は無かった。・・・本当に勝手な話だろうな。

さて、長い説明の後の長い回想はこれで終わりだ。

とにかく疲れた。早く帰りたい。

俺は会計を済ませようと席を立つ。

「あれ？　理由を聞かないの？」

「そうは言っても、これ以上は集中力が保たない・・・。悪いが今

度にしてほしい・・・」

俺は会計をするため真田さんと呼ぶ。

お代はいらないと言われたが、急に來て迷惑をかけたんだ。それくらいちゃんと払わせてほしい。

そう伝えたら、あっさり受け取ってくれた。

さて、俺はそのまま店から出る。

「ま、待って久郎君」

後ろから慌ててノフィーネが追ってくる。そう言えば聞き忘れていた。

店から出てすぐの所で振り返る。

「なあ、ノフィーネ。続きの話はいつがいい？　俺は今から帰るつもりだが」

「そのこと何だけど・・・、僕も一緒に行っていいかな？」

・・・ん？　今なんて？

「いや、できたら泊めて欲しいなく、と」

「待て待て待て待て」

なんだこの展開？

「お前、何とも思わないのか？」

「あ、やっぱり、ずうずうしかったかな？　久郎君の親御さんも何て言うか分からないし・・・なんなら、外に居させてもらうだけでも・・・」

いや、そこじゃない。

「今、家には俺一人だ」

「あ、そうなんだ。じゃあ大丈夫そうだね」

いや、だから、大丈夫じゃないだろ！

「お前、異性の家に泊まって、しかも二人きり・・・何とも思わないのか？」

「あー、そこか。うん、大丈夫だよ。久郎君の事信用してるし」
いや、信用されてもな・・・。

「ホテルとかじゃ駄目なのか？　代金なら俺が出すし・・・」

「そうじゃないよ。じゃあこう言えがいい？　・・・久郎君は命を狙われていて、僕は久郎君を守りにきたエージェントなんだ。だから久郎君のそばにいないくちやならない」

「・・・それは事実か？」

「どうだろね？　フフツ、もしかしたらそうなるかも」

ノフィーネが面白そうに笑って言う。

だが、事実なら俺は笑ってられないんだが。

「それに話の続き、今日中に話しておきたいし。帰り道に話させてほしいな」

・・・そこまで言うってことは、結構重要なことなのか・・・。

「・・・分かった。ら、駄目なのかもしれないけど。まあ、仕方がない・・・、いいよ」

「ホント！？　ありがとう！　じゃ、早速行こう！」

取りあえず俺は、なんか物凄くハイテンションなノフィーネを連れて、別荘に帰ることにした。・・・こんなことになったのは、クリスマスマジック・・・というやつの子供だろうか？
どんなものかは知らないが。

Cの4話「襲撃」

現在時刻は十時をまわったところ。俺たちは別荘へと帰る道の途中にいた。

融雪装置がついていない上に、まだ除雪車が通っていないらしく、電灯が点いている薄暗い小さな山の道路には、すねのあたりまで雪が積もっていた。

こちら辺でこのくらい積もるのは珍しく、当然長靴など履いてはいない。

だから、さっきから靴の中に雪が入って冷たいのを我慢しながら歩いている。

「呪い？」

別荘へ帰る途中の話として、俺の呪いについて、身の上話を交えながら話すことにした。

・・・いや、正確には相談だな。

この忌まわしき呪いを解決する方法があれば、と思い、ノフィーネに話してみた。

「・・・ごめん。そんな事情があったのに・・・」

ノフィーネはホントに悪そうに言う。

「氣にするな。別に同情してもらいたくて言ったわけじゃない」
本心はどうかわからないが。

言えば気持ち軽くなる、っていうから、それにすがっているのかもしれない。

「それよりも、何か知っていることはないか？」

ノフィーネに気分を取り直させるために、返答を促し、ノフィーネが口を開く。

「それはきつと・・・、今から話す話に関係あると思う」

「俺を連れ出した理由と呪いがか？」

「そもそも呪いじゃ無いと僕は思うよ。・・・いや、それに今まで

苦しんできた久郎君にとっては、呪いだったかもしれないけど……」

また、気分が落ち込んでいるようだ。

「そんな暗い顔をするな。そんな顔をされるぐらいだったら、笑顔のほうが断然いい」

そっちの方が可愛いのだから……と、言おうとしたのだが、さすがに恥ずかしくてやめた。

だが、効果はあったようだ。

「うん、そうだよ。明るく行こう、明るく！」

笑顔を取り戻し、さっきまで声に含まれていた暗さは既に無い。

やはりノフィーネは笑っている方がいい。

ん、と。そう言えばなんか話の途中だったな。

「ノフィーネ。さっきの呪いなんかじゃないって話は……」

「ああ、それなんだけど。もしかしたら僕と同じなのかもしれない」

同じ……？

「そこでごめんなんだけど、詳しくは神様に聞いてほしい」

「神様？　というと……さっきの話に出てきた創造神？」

「うん、そう。僕も神様からよく教えてもらってないから……明日にでも呼ぶね」

ふむ……何にせよ。明日その創造神に聞けばいいってことか。

というか、

「そんな簡単に呼べるのか？　神様って忙しかったり……」

「あー、今は長期休暇中なんだって。というか、そうでなくても暇らしいけど」

それって、長期休暇どころじゃない気もするが。

「気楽だな、神様。何にせよ明日か……」

「うん、明日だね」

「……明日……か」

……話が終わって、会話がとぎれた。

えーと、気まづくはないが、何か妙な沈黙が俺たちの間に流れる。

何か話題は無いものか・・・。

しかし、疲れきった俺の頭では気の利いた話が思いつかない。
ノフィーネも、何かないかと探しているようだが、あの様子では無理そうだな。

黙々と進む足がたてる、ジャリジャリという音が、無性に寂しく響く。

いや？　こういう場合はもう話をしないほうが良いのか？

とか、考えていたが、ノフィーネはどうも沈黙に耐えられない性分らしく。

「ね、ねえ。・・・えーと、久郎君って、あの時、死のうとしてた？」

その話題はどうかと思うぞ・・・。

だがまあ、ふられた話題だし、せめて明るく答えてやろう。

「そうだな、途中までは。だけど途中から怖くなって、死にたくなかったけどな。ははっ、・・・我ながら情けない男だ」

結局、明るくなんてできずに苦笑しながら言った俺だった。

しかし、ノフィーネはどこか安堵の表情を浮かべて言う。

「そうかな？　きっと、それが正常な反応だよ。・・・久郎君がまだ大丈夫でよかった。・・・僕は、死に対する恐怖なんてもう忘れてしまったから。・・・あ、でも、それはそれで良いというか・・・」

「

話が暗くなりかけたのを慌てて戻そうとするノフィーネ。だが・・・
・普通は手遅れな空気だ。

とは言え、暗い空気は俺も好きじゃない。無理やり話を変えてみる。

「そんなに慌てなくても分かっているって。それよりも・・・ノフィーネって彼氏とかいないのか？」

「ふえ！？」　い、いいい、いきなり何を！？　完全に不意打ちだよ！」

・・・予想以上の反応だ。わざとじゃないかと疑うほどに。

ま、おもしろいので続けてみる。

「どうなんだ？ いるのか？ いないのか？」

「い、いないよ。・・・現在どころか過去にすら」

「・・・そうなのか？ 七百年間も生きていて・・・？」

「・・・」

「何かな！？ その憐憫の目は！？」

いや、まあ。

「よく考えたら七百歳オーバーの超熟女なんだよな。・・・」

「だからその目はやめてえー！！」

そろそろノフィーネが発狂しそうだ。いい加減やめてやるとする。

「ううっ・・・。僕は今日、目で人を傷つけることができると思いました」

ノフィーネがシクシクと泣く。

「ははっ、悪かった。結構冗談が含まれてた・・・二割くらい」

「残りの、八割・・・」

ははっ。なんか本心から笑ってしまう。

ホントに久しぶりだこんな話をするのは。

んっと、いつの間にか、別荘に続く短い山道の下に着いていた。

木々に囲まれ、人一人ぐらいいしか通れないこの山道には、意外に雪が積もっていない。

そういや、じいさんが融雪装置をつけたとか言ってたな。外見上じゃよくわからないが。

「ここを登れば別荘に着く」

早く、冷えた足や体を暖めたい。が、

ん？ ノフィーネ？ どうした、そんな所で立ち止まって・・・。

「・・・ねえ、久郎君。別荘には誰もいないんだよね」

なんだ、その質問・・・？ いやな予感がする・・・。

「・・・ああ。別荘もオートロックだから泥棒も入り込まないはずだが・・・」

「そう・・・。久郎君、くれぐれも気をつけてね」

何に・・・、そう訊く前にノフィーネが歩き始めたので、仕方なくついて行く。と、

「これは・・・」

なるほど、この暗さでは、注意深く見なければ分からないな、これは。

若干だが・・・、山道の雪が、複数の足跡に踏み荒らされている。これの意味するところは・・・。

「・・・ごめん、久郎君」

ノフィーネがふと立ち止まって言った。

「3、2、1、今・・・って言ったら、思いつ切り走って」

自然と、ノフィーネが言いたいことは伝わってくる。

・・・まったく、ベタな展開だ。

「3・・・」

足を身構える。

「2・・・」

別荘の入り口までは、走って一分はかかるだろうか？ やるしかない・・・。

「いっ・・・、やっぱり今！」

えっ、ちよっ！

ヒュン！

弾丸が足首をかすった。動き出すのが遅かったらやばかっただろう。

「久郎君、走って！」

言われなくとも・・・おっと！

ヒュン！

今度の弾は肩をかすめた。寸前にバランスを崩したのが幸運だった。とにかく、俺は走る。

雪に足を取られそうだが、無理やり前に体をはじき出す。

ヒュン！

今度の弾は俺には向かってこなかったようだ。

だが、

「うっ・・・くっ！」

ノフィーネ！？

「僕は大丈夫だから！ 早く！」

言われて俺は、振り返る暇もなくひたすら走る。

別荘が見えてきた。

相手が何人なのかはわからないが、いろんな幸運が重なり俺は無傷だ。

後ろからは誰かが追ってくる音が聞こえてくる。

ノフィーネであれば吉。

敵であれば凶。

だが、それを確認してる暇もない。

別荘の前の開けたところに出た。

住み慣れた別荘は、西洋の家を元にした洋館で壁は白を基調としている。

「あと30・・・」

ヒュン、ヒュン！

耳元を弾丸がかすめる。

当たってはいなくともこの音にはヒヤツとする。

「あと10・・・」

あせって足がもつれそうになる。しかし、扉にはオートロックがかかっているから、体当たりのように転げ入るということは不可能。即、死に直結する。

「開けっ！」

ガチャッ！

扉から物音が聞こえる。最新の音声認証システムだ。

俺は鍵がかかっていない扉に向かって、体当たりをするように転がる。

バタン！

俺は刹那に呼びかける。

「ノフィーネ！」

「大丈夫、いるよ！」

すぐ後ろから返事が返ってきた。

俺は、ノフィーネが入ってきたのを確認した後、扉を急いで閉め、そこらに座り込む。

「はあ、はあ・・・。・・・っ」

今更になって恐怖が押し寄せてきた。

しかし体はどこも痛くない。どうやら俺は無事なようだ。

「はあ、はあ・・・ふう」

同じく緊張が解けたノフィーネの方を見る。

・・・肩のあたりに血の後があるが、傷跡は全くない。

「そ、そういえば。ここって大丈夫なの？」

「心配ない。戦車の砲撃でもびくともしないらしい」

それは扉も窓も同様だ。

プルルル・・・。

電話？

「もしもし？」

「あ、久郎様？ 家政婦の山中です。・・・どうやら今の重蔵様の状況を知った奴らが襲撃をかけてきたようです。こちらも応戦中ですが、そちらは・・・」

「たった今、襲われているところだ。というかなんで・・・」

「彼らは藤草の家に恨みを持っている者たちです。・・・言っしまえば逆恨みですが。・・・とにかく、そちらにはまだ応援を出せそうにありません。くれぐれもお気をつけて」

そこで電話が切れた。・・・おいおい、爺さんなんてやつらに恨みを買ってるんだ。

俺は呆れつつ、傍らでしゃがんでいるノフィーネに俺は言う。

「どうやら、俺が原因らしい。すまん、巻き込んで」

「それは別にいいけど・・・。久郎君、武器か何かない？」

武器？ まさか、戦う気か？

「このまま待っていれば、そのうち助けが来ると思うが？」

「それまで持てばいいんだけどね・・・」

何を言ってるんだ？ さっきも言ったように、ここは戦車の砲撃でも・・・、

「さっきチラッと、ヤクザに混ざって一人だけ、魔術師がいた」

・・・魔術師？

「だから、こっちから攻めないと、手遅れになるよ」

・・・ホントに爺さん、なんてやつらの恨み買ってんだよ・・・。

「・・・分かった。しかし、武器か・・・、なんかあったかな？」

記憶を探ってみる。あ、そういえば確かあれが・・・。

「・・・こっちだ」

俺はノフィーネを連れて物置に向かう。

「あった、あった」

それはあまり探さなくても見つかった。

桐の箱はほこりをかぶっているが、重要なのは中身だ。

「これって、なに？」

ノフィーネがきいてくるが、それは見てのお楽しみだ。

箱にかかったひもをほどいて、ふたを開ける。 やっぱり、これだったか・・・。

「おお・・・、これってもしかして・・・日本刀？」

その通り、これは日本刀だ。だが、ただの太刀とは違い、俺はそれを見せるために刀を抜いてみせる。

「あれ？ おかしくない、この日本刀。先の方が両刃になってるよ」

そう、この刀は長さは普通の太刀と同じほどだが、特徴として、切っ先から刀身の半ばぐらいまでが両刃になっている。

「『小烏丸』こからすまるという種類の刀らしく、普通なら切るよりも、刺突に適しているらしい。・・・普通なら」

「その、普通なら、に引っかかるなあ・・・」

いや、大したことでもないんだが。

「じいさんから聞いた話によると、『幻刀』なんだそうだ」

「幻刀？ 妖刀じゃなくて？」

それについては、はっきり否定しておく。

「じいさんが言うには、あくまで『幻刀』なんだそうだ。なんでも、ある流派でないと、真の力を発揮できないとか」

だったらその流派の人が持っていれば良いだろう、と昔じいさんに言ってみたが、どうやらその流派は既に廃れてしまっているらしい。

「取り合えずは、これで大丈夫か？」

「うん、むしろ刺突向きなら僕も使いやすいよ。それじゃ・・・反撃といきますか！」

こうして俺たちは最初の試練を迎えることになるわけだが。

・・・俺は刺突、つまりアの刀は、峰打ちが出来ないということ
を気にしていた。

別に血が見たくないとか、そういうわけじゃない。

ただ、ノフィーネの手は、血なんかを被るべきではない。
なんとなく、そう思った。

Cの5話「時神」

パン、パン。

ドゴオン！

「・・・ダイナマイトまで使ってるぞ。なりふり構ってないな」
それで傷一つさえつかないこの別荘もあれだけど。

「敵は六人。魔術師は一人だけみたいだけど・・・」

さつき窓越しにみたが、拳銃を持った黒服サングラスが五人と、
黒いローブを被った奴が一人見えた。

あの黒いローブが魔術師なんだろうか、別荘から少し離れた所に
立っていた。

「きつと敵は、武器では歯が立たないと分かったら、魔術を使って
くるよ。その前に・・・」

敵を殲滅する・・・か。

と言っても、俺には出来ることがない。

他に使える武器もなく、下手に前にでれば的になるだけだからな。
・・・ノフィーネに頼るしかないなんて、ホントに情けない。

「それじゃあ久郎君。行ってくるよ」

そう言って、ノフィーネは鞘から刀を引き抜く。 示し合わせた
通りに、俺が勢いよく扉を開けると同時に、ノフィーネは飛び出す。

「久郎君、閉めて！」

ボタン！

重い音を立てて扉を閉める。

窓から外を見ると、ノフィーネが黒スーツ五人に対し、やや不格
好な立ち回りを見せていた。

やはり、あまり戦いは得意ではないんだろう。

さつき、反撃準備中に、ノフィーネがこう言っていた。

「心配しなくても大丈夫だよ。僕の傷は勝手に回復する、だから負
けないよ」

・・・だが、負けない!!勝てる、ではないだろう。
それに、勝てたにしても、あの戦い方では何発も弾を体に受けることになる。

たとえば、勝手に回復するといっても、その苦痛は受けることになる。

外では黒スーツ五人が、ノフィーネから間合いを取りつつ、拳銃を撃っている。

さすがに五対一では、分が悪すぎる・・・。

と、いきなり外が光に満たされた。

その光は、今までただ立っていただけだった、黒ローブの男が広げた手から放たれていた。

その光は球形を形作り、次第に大きくなって、夜の闇を飲み込んでいく。

「・・・あれが、魔術」

俺は、ただそう言うだけで精一杯だった。

そして、その光がノフィーネではなく、俺を狙っていることを知っても、俺はその光に魅入られたように動けなかった。

いや・・・違う、俺はあの光から、何かを思い出しそうだった。
・・・そう、大切なことを・・・。

何だったか・・・?

と、本当は、こんなことを考えている場合ではなかった。

ドカン!!!

さっきから何をして、壊れることなかった堅牢な壁が、あっさり弾け飛び、衝撃をもら浴びた俺は、後ろの壁に強く背中を打ち付ける。

「がはっ・・・、けほっ・・・」

ひどく息を詰まらせる。何とか、前を見ようと目を開くと、派手に壊された壁と、・・・そこに立ち、銃を俺に向け構えた黒スーツの一人が見えた。・・・見えてしまった。

「・・・ッ!」

銃口は、俺の頭に向けられている。

「久郎君っ・・・！」

ノフィーネの悲鳴も聞こえる。

そして、拳銃の引き金が引かれゆこうとしたその時・・・。

世界の歩みが遅くなった。

これは、そう。まるで落ちてくる鉄骨を見ていたときの様。

俺の動きが早くなつたわけじゃない。

だが、こんなに遅く見えるのなら、かわせる気がする・・・！

「・・・っつ！」

パァン！

乾いた音一発。

そこから出た弾丸は、首を思いっきり横にそらせた俺の側頭部、そのそばをかすめていった。

「久郎君！」

ノフィーネの体当たりで、目の前の黒スーツが倒れる。

そのすきにあわてて立ち上がる俺。

まだ背中痛んだが・・・。・・・っ！？

「ノフィーネ、後ろ！！」

「え？」

ノフィーネが振り向くと同時、さっきの光の球が、今度はノフィーネに直撃した。

ドガァン！

吹き飛ばされるノフィーネ。

それを見ていた俺の頭に・・・昔の記憶と共に、あるイメージが浮かび上がった。

ピキィイイン！

・・・俺の、過去。

一人の男とその後ろの銃を構えた男たち、それに対峙するじいさん。

『藤草重蔵！ 貴様の命もここまでだ！』

じいさん。大丈夫なのか？

『心配するな、久郎。・・・中沢よ、ちょっと、おまえさんは調子にのりすぎじゃ。藤草の名は、伊達に続いてきたわけではないぞ・・・！』

じいさんは指輪をかざして唱えた・・・。

・・・そのイメージは、草花の紋によって封印された牢。中に居るのは眠っている少女。

ピキイイイン！

「・・・・・・・・・・」

黒スーツの一人と黒ローブの男が近づいてくる。

「手間かけさせやがって・・・しゃれになんねえぞ、まったく」

黒スーツが初めて喋った。

そういえば、俺はどのくらい意識を飛ばしていたんだろうか。

「・・・ノフィーネ？」

「ああ、あの化け物か。あいつなら今、こいつの束縛魔術で・・・
・・・気に食わない。」

「あいつは化け物なんかじゃない」

「は？ あんな無限再生するゾンビみたいな奴が化け物じゃないってのか？」

ああ、そうだ。少なくとも中身は優しい人間だ。

俺を助けてくれた。その恩に報いるべき人だ。 そんなあいつを・・・。

「訂正しろ・・・」

「何だと？」

「あいつのことを、化け物って呼ぶのを、訂正しろ」

「お前、この状況が分かっているのか？」

そんなもの、知るか。

「訂正しろ、と言っている。聞こえないのか？　それとも、馬鹿なのか？」

「っ・・・てめえ。バカはそっちだぜ。・・・どうせ殺すつもりだったんだ、死ぬ間際に時間をやろうと思っていたが・・・」

男は俺に向けて銃口を向ける。

「・・・やめだ。さっさと、死ね！」

引き金が引き絞られようとしていた。

その時、

世界の歩みが遅くなった。

これは賭けだった。これが、どういう感覚なのかはわからない。だが、この状態になれば、体は動かさなくても、思考時間が稼げる。

さっきから俺はポケットの中に左手を突っ込んでいる。

指に触れているのは、今ははずしてあるが、さっきまで財布に付けていた、藤草の紋が描かれた指輪。

じいさんが言っていた言葉は確か・・・こうだったはずだ。

体感時間の長さが元に戻った瞬間。

俺は指輪の前に突き出す。

「なんだ？　何のつもりだ」

そして男は引き金を引かずに、様子を見た。

その時点で、俺の勝ちだ。

俺は唱える。

「藤の紋・・・」

パン！

・・・今の銃声は、ローブの男からだった。手には拳銃が握られている。

おそらく魔術師であるから、詠唱の雰囲気を感じたんだろう。

判断力がいい。だが、

「遅いな・・・」

「「なっ・・・」」

放たれた弾丸は宙に浮かんだまま止まっていた。

なぜなら、詠唱が始まった時点で、既に影響が出始めているからだ。

俺は詠唱を続ける。

「藤の紋、草花の封印と結びし時、その封印は解かれん」

詠唱完了と同時に、目の前に、光る魔法陣が出現する。

俺はその名を呼ぶ。

「出でよ・・・、トキガミ」

魔法陣から現れし者は、イメージの中でみた少女。

着物を着た体軀は小柄で幼く。黒い艶やかな髪は、足のあたりまで届いている。

だが、その整った顔、その眠そうな目には、余裕のある大人・・・いや、老人が見せる表情が浮かんでいた。

「・・・ん？ 久しぶりに妾の出番かと思ったら。誰じゃ御前？

重蔵はどこじゃ？」

「・・・俺は藤草久郎。重蔵の孫だ」

本当に、できてしまった・・・。と、いまさら思う。

黒スーツとローブの二人は、時神に向かって、銃弾を浴びせようとするが、放たれた弾丸は、さっきのように宙にとまった。それはまるで、時の歩みを忘れてしまったように。

一方、時神はその二人をまったく気にすることはなく。俺に向かって言う。

「孫・・・？ おおっ、あの時のか！ あの時はものの一分ほどで

けりがついたんだったかの？」

さっきの映像の時の事だ。

「それより、時神^{トキガミ}。俺はお前に助けを求める。敵を殲滅してくれ。・

・ただし殺さずに」

慣れない命令だ。それに、名前は知っていても、こいつがどういう存在なのかは知らない。

この命令は有効なのか？

しかし、そんな心配は杞憂に終わった。

「了解じゃ。藤草の血には逆らえん」

そう言って時神は、両手を打つ。

パアアン！

その音の波動が、辺りに響いた時、・・・敵の動きが急に停止した。

「後は、ゆるりとやるかの」

時神は動きの止まった敵を一人一人、当て身で丁寧^{テイネイ}に気絶させていく。

その内に、俺は外にノフィーネの姿を探す。

「ノフィーネ！ どこだ？」

「く、久郎君？ 無事なの？ よかった・・・」

向こうから安堵したような声が聞こえた。

近づいて行ってみると、手を後ろに組まれた状態で、ノフィーネが仰向けに転がっていた。

「うう・・・面目ない・・・。ちよつと僕の上のあたりを蹴ってくれない？」

・・・？ よくわからないが、言われた通りにする。
パリン！

なんか割れた音がした。

と、同時にノフィーネも後ろに組んでいた腕を放して、立ち上がる。

「ふう・・・、ふえくしゅ！ さ、寒かったあ。でも久郎君、何で

無事なの？」

ああ、それは……。俺は黙って、最後の一人に当て身を、した時神を指差す。

「……？ あの子は？」

「さあ？ じいさんの見よう見まねで召喚してみたから……。時神って名前なんだが……」

それを聞いたノフィーネの顔が青ざめた。

「どうした？」

「どうしたじゃないよ！ 何で神様を召喚できるの！」

「それは妾から説明しよう」

「「どわあ！？」」

いきなり、ニュツと出て来たものだから、ノフィーネと二人して驚いてしまった。

「あれは千年ほど前……。妾が神に成りたてだったところに久郎、お前の先祖が妾と勝負をし、妾を封印したのじゃ。その結果、何度も何度も藤草家の奴らに利用され続けておるのじゃ」

一通りしゃべり終えて、ズズズ。と、どこから出したのか、湯飲

みの中のお茶を飲み始め、一言。

「なるの。用があつたら呼ぶがいいのじゃ」

そう言っ、時神の姿は霧散するように消えた。

「……嵐のようなマイペースだな。説明するとか言ってたくせに、あまり要領を得てないぞ」

妾、とか言ってたし、わがままなお嬢様タイプなのだろうか。

「……はあー、でもビックリした……。まさか神様を従える人がいたなんて？」

まるで漫画みたいだよな。召喚した張本人が言うのもなんだけど。「というか、あれは本当に神様なのか？ 人に封印されてるぞ？」

「神様だからといって、鬨に強いってわけじゃないらしいよ。相性とかもある、って言ってたし」

ということは、時神にとって俺のご先祖は相性最悪だったわけか。

「さて、この人たちはどうする？」

うーん……。そうだな。

「時神、出てきてくれ」

まさに、困ったときの神頼み。

「なんじゃ、もう用事ができたのか？ 妾は優雅な、ていーたいむ中だったんじゃないが」

緑茶のくせに、ていーたいむ、か？

いや、それより。

「こいつらを、動けないようにできるか？」

「うん？ それならこれを使うがよいぞ」

と言って差し出してきたのは、キョンシーが頭に付けているようなお札。

「これは？」

「うむ。あやつらの額にこれを貼り付ければ、はがすまで時が止まり続けるぞ」

そう言って、また消える時神。……思えばどこでその、ていーたいむ、をしてるのだろうか。

まあ、そんな事より。

「ノフィーネ、これを貼るのを手伝ってくれ」

「うん、分かった」

黒スーツとローブたち六人にお札を貼る作業には、そう時間はかからなかった。

「あ、そういえばノフィーネ。刀は？」

「あ、……」

……。どうやら、戦闘中に取り落としてしまったらしい。
……。また作業が増えた。

「おい、時が……」

「妾は便利屋ではないぞ。それぐらい御前がやるのじゃ」
声だけがどこからともなく聞こえた。

「しょうがないよ久郎君。がんばって探そ」

といっても、この雪の中から探すのは、骨が折れる。ま、やるしかないが。

とりあえず、適当にあたりをつけて探すこと十数分。

「あ、あったぞ・・・」

や、やっと見つかった・・・。

外で刀を探す間にだいぶ体を冷やした俺たちは、さっさと、別荘の中に入って刀を鞘に納める。

「そういえば、この刀の銘、って何？」

元の箱に戻そうと、物置に行く途中でノフィーネがきいてきた。

「えーと、確か・・・『型破』^{かたやぶり}だな。それがどうかしたか？」

「別に意味はないよ。なんか知っておきたくて」

俺は刀を物置に戻した後、とつくに限界を超えていた体を休ませるためにベットに横たわり、すぐに寝た。

といってもこれは仮眠だ。

二時間ほど寝たら、またやることがあるからな。

俺は、つかの間の休息を、最大限に活用し、爆睡した。

Cの6話「創造神」

「・・・郎君。久郎君。起きて」

うーん・・・？　・・・。

「あ、起きた。おはよう久郎君」

・・・あ、そうか。

「創造神を呼ぶんだったか？」

二時間だけ仮眠をとることにし、今まで寝ていた理由がこれだ。
ノフィーネはずっと準備をしていたようだが、『不老不死』の影響で疲労がたまらないらしい。ゆえに寝なくても大丈夫なそうだ。

「うん。準備はできたよ。あ、それとさっき電話があって、病院の方は大丈夫らしいよ。おじいさんも峠を越えて、あとは目が覚めるのを待つだけだって」

「・・・本当か・・・？　よかった・・・」

じいさんが無事、それを聞いただけで体の疲れが一気にとれた気がした。

それと・・・、とノフィーネが続ける。

「はいこれ。メリークリスマス！」

ノフィーネが俺に差し出してきたのは、赤い包装紙とピンクのリボンに包まれた四角い箱。

「これは？」

「僕からのクリスマスプレゼント！　開けてみて」

いつものまに用意したんだ・・・？

言われた通り、包装紙とリボンを外し、中にあった小箱を開ける。

「・・・ペンダント？」

それは小石ほどの大きさの、紅よりも紅く、蒼よりも蒼い、二つの光が中に混在する宝石がついたペンダント。

「こんなのどこに・・・というか、高そうだな」

「実は、ずっと首にかけてたよ。あと、これは神様からのもらい物

だから、値段はわからないよ」

いや絶対に価値が高そうだから。

「でも、別に特殊能力が付いてるわけじゃないみたいだし、別にいいよ」

・・・そう言うなら受け取っておくか。プレゼントを拒むのも悪いしな。

「このお返しは、正月にでも返そうか？」

「・・・君はお年玉をあげるおじいちゃんですか・・・。でも、楽しみにしてるよ」

ノフィーネは準備が終了したリビングに戻っていった。

「ペンダントか・・・」

そういや、今までつけた経験がなかったな。

俺はペンダントを首にかけ、髪の毛を手で少し直してからリビングに向かった。

「あ、早速付けてくれてるんだね。ありがとう！」

リビングには、何か呪文がかかれた魔法陣と一緒に、嬉しそうなノフィーネの姿があった。

「これがそうなのか？」

「うん、そうだよ。中層バイムを使ったバイム魔術。久郎君みたいな召喚じゃなくて、ただの通信だけど」

そう言っつてノフィーネは目をつむり、魔法陣に手を添える。

「ノフィーネは魔術師なのか」

少し興味があつてきいてみた。

「違うよ。普通の人でも、少なからず0ではない魔力を持ってるから、使おうと思って知識を身につければバイム魔術を使えるし、今回の場合も神様に合図が届けばいいだけだから、少ない魔力でもできるんだよ」

「へえー、と言うことは俺の中にもあるのか」

そんな感じは全くしないが。

「そうだよ。なんなら時間もあるし、計ってみる？」

ノフィーネは魔法陣から手を離れた。いつの間にか終わっていたらしい。

そして、その手に鉛筆を持って、紙に何かを書き始める。

「・・・できた！ これは、浅層バイムを使った、簡単な魔力測定器。例えば僕に使うと・・・」

そう言って、さっき書いたものに手を乗せる。

すると、紙に書かれた、不可解な黒い二本の曲線が、端から赤と青にそれぞれ変わっていく。・・・と思ったら、赤い方はすぐに変化が止まった。

続いて、青の方も止まる。

「はい、できました。この赤の長さが現在の保有魔力値。で、この青の長さが最大可保有魔力値」

「なにが違うんだ？」

ろくに考えずに訊く。

「青の方は、自分が持てる最大の魔力の量。つまり容器の大きさだね。で、赤い方は今自分が持っている魔力の量。例えるなら、容器の中に入っている水。使えば減るし、足せば増える。ま、容器の大きさという限界があるけど」

なるほど。

「あと、魔力は寝たりとか音楽とかで、精神的に休むことで回復するよ。あと容器の大きさは産まれたときから一生変わらないみたい・・・ま、そんなわけで、レッツトライ！」

ま、やってみるか。

俺は紙の上に手を置く。しかし、こちらからでは腕が邪魔で、途中経過が見えなかった。

それなのに、ノフィーネが、あれ？、と言うものだから、気になつて手を離しそうになる。

だが、途中で手を離してはいけならしいから、離せない。・・・あー、早く見たい。

「・・・はい、久郎君。終わったよ。・・・でも、何かおかしなことに・・・」

どれどれ、・・・なんだこれ？

青い線はノフィーネよりもあるぐらいなのに、赤い線は、一ミリほどしかない。

「・・・さっきの召喚で使ったからか？ にしても、ぎりぎりだな」

「いや、違うよ・・・。神様を呼び出す全行程を自前の魔力で補うとしたら、こんなぐらいじゃ足りない。きっと久郎君は神様に魔力を肩代わりしてもらったはず」

肩代わり？

そんな事ができるのか、という俺の表情を読み取ってノフィーネが答える。

「あの時の神様は、久郎君のご先祖様に負けて、それで使役される、って言ってたから、あの指輪があれば、肩代わりしてくれるような契約になっているんだよ。・・・でもだったら、なんで・・・？」

なんだ？ 何で俺に対して謎がつのるんだ？

なぜか使われている魔力・・・。それも呪いのせいなのか？

・・・あー、考えるのは嫌いだ・・・。話を変えよう。

「・・・そういや、あとどのぐらいで来そうだ？」

「そうだな・・・、もうそろそろじゃないかな？」

ピンポーン。

「あ、はい」

気の抜けた音が響く。・・・というか、ノフィーネ。なに勝手に応対しようとしているんだ。

仕方がないので俺も玄関に出ると、

「あー、寒い・・・。温暖化はどこ吹く風だな」

コートを着た変な男がいた。見た感じでは二十代後半に見える。

「えーと、どちら様で？」

「ん？ 神様だが」

まるで当たり前じゃないか、と言わんばかり。

「そうは見えないんですが・・・」

「む、そうか？ 体からにじみ出る、神々しいオーラなんかとか・・・」

・・・目を凝らしても、フリーターの落ちぶれたオーラしか見えない。

「・・・・・・・・」

俺のその視線を感じとったのか、かなりしよげていた。

しばし沈黙が流れていったが、沈黙嫌いのノフィーネが話を進める。

「そんな事より、久郎君、神様、早く話を」

「ああ、そうだったな。お邪魔する」
立ち直り早いな。

「てかちよっ、コート of 雪落としてけ・・・」

「ああ、すまん。気がつかなかった」

何なんだこいつは・・・。

「あらためて自己紹介するが、俺は創造神。この世界を創った者だ」
その創造神は居間のソファアにどっかりと座っている。

俺はその向かい側、ノフィーネは俺から見て左側に座っている。

「創造神だったか、俺はお前から色々と訊くように、とノフィーネに言われたんだが」

「そうか・・・、つまり、ノフィーネ。彼がそうだということか？」
創造神はなぜかノフィーネにふる。

「多分・・・、今日はそれを見てもらおうと・・・」

「ちよっと待った。一体なんの話だ？」

「なんのって・・・お前に宿る力の話だ。俺が見る限り、間違いない
くお前はその力を宿している」

宿る力・・・？

なんか話がぶっ飛んだな。

「時にノフィーネ。確か俺は極東に居るって言ったはずだが・・・」

ビクツ、とノフィーネが反応する。

「え、えくと……。でも、あれは勘……」

「神様が言ったことは勘でも信じるものだ」

暴論すぎるだろ。

「というわけだ、ノフィーネには罰として、何か料理を作ってもらおうか」

どういうことでだ。

……グギュルル。

あー、そういうことか。

「ノフィーネ。台所は好きに使っていいぞ」

「あれ！？ 久郎君は神様側なの！？」

そうは言っても、創造神が遠まわしに食べたいといっているんだし。

「いいだろう、別に。その間に俺が説明しておく」

「うゝ……。わかりましたよゝ」

ブツクサ言いながらも、やる気はあるようだ。

ノフィーネは台所に向かっていった。

「……。で、そうまでして、俺だけに話したい話って、何なんだ？」

「む、バレてたのか。……。まあ、話しておいた方がいいから、話させてもらおう」

そう言うと、創造神の今までの若干ふざけた雰囲気、急に真面目なものに変わった。

「唐突だが、今の彼女の名の意味は分かるか？」

「名の意味？ ……どういう意味だ？」

「そのままの意味だ。ノフィーネの意味」

「……。分からない、と言っておく。質問の内容もいまいち理解できていないし」

俺は正直に答えた。

「ノー、フィーネ。つまり終わりが無いということだ。『不老不死』のバィムを押し付けた、俺に対するあてつけだろうか？」

押しつけた・・・か。そういえば、ノフィーネの『不老不死』はこいつによるものだって話だったか。

とりあえず、その発言に対して俺は反論させてもらう。

「そんなやつじゃないだろ。あいつは」

「そうだな、しかし自らの運命を自らの名に刻まなければ、彼女は自分を保てなかった」

遠回しな言い方に、少しイラッときた。

「どういう意味だ」

対する創造神は冷めた声で言う。

「そうすることで、諦めているんだ。自分には、こういう生き方しかない、とな」

「・・・・・・・・」

俺は口ごもる。

次の創造神の言葉は問いかけだった。

「・・・終わりが無いって、どういうことかわかるか？」

「・・・永遠に続く、ってことか？」

パツと浮かんだものを答えてみた。

「それは七十点。・・・答えは、変化がない、ってことだ」

「それには妾も同意するの」

この声は・・・。

まさかと思い、振り返ると、案の定、時神が現れていた。

それに対して驚いたのは、創造神も同じらしい。

「ん、お前は・・・時神か？」

「うむ。久しぶりじゃの、創造神。元気にしておったかの」

「俺はそうだが・・・、お前こそ、随分と姿を見せなかったな。お前が神になった時にあった時以来か？」

「実はの・・・、こいつの先祖に封印されて。使役されておる」

「お前がか？ それはどういう・・・」

「ちょっと待て、お前ら。なんか話が脱線してるんだが。ていうか、なんで時神は出てきたんだ」

盛り上がっているようだが、このままでは話が進まない。悪いが口を挟ませてもらった。

「おお、それなのじゃが、時の神として、妾も創造神と同じ考えじゃ。時にとって変化がないということは、時が進んでいないのと同じじゃからの」

ならの、と言って、再び消える時神。・・・相変わらずマイペースな奴だ。

「なんかもう、話の趣旨が分からなくなってきた」

「そうだな、少し難しい話ばかりをしすぎたかもしれん」
だが、と創造神は続ける。

「お前がこの先、ノフィーネと共にいるなら、知っておくべきことだと思ってな・・・というか俺は、お前にノフィーネを救ってくれることを期待している」

・・・俺に？・・・なぜだ？

「お前がかけているそのペンダント。彼女にもらったんだろう？今まででそんなことは一度もなかった。お前はノフィーネの世界に変化をもたらしたんだ。だからこれは俺からの頼みだ。ノフィーネを救ってやってくれ」

そう言って頭を下げた創造神は、神というよりも一人の父親に見えた。

「お待たせ。・・・あれ、何してるの？」

創造神は入ってくる気配を感じとり、慌てて頭を上げたが、それでも変な体制であった。

「む・・・、食前の運動？」

疑問系で返事をするな。怪しまれる・・・、
「そっか、はい、じゃこれ」

お前も怪しめよ！　というかこれ、そば・・・。

「年越しはまだ先じゃないか？」

「まあ、いいだろ、せっかく作ってくれたんだ」

その後、そばをすすする音が五分ほど続き。

「うむ、うまかった」

こいつ、一回も噛んでなかったような・・・。

「さて、腹も満たされたことだし、そろそろ本題に移るとしよう」

そして、創造神は話し始めた。俺の力について、そして破壊神のこと。

Cの7話「命断」

ふと窓から外を見る。

俺たちの雰囲気を知ってか知らずか、少し吹雪いてきた。

あ、そういや壁が壊れてるんだった……。きつと、今この部屋を出たら間違いなく雪まみれだろうな。

ま、それはさておき。

「俺が話すのは2つ。お前の秘められし力のこと。そしてお前にも頼みたいことだ」

創造神がいやに真剣な表情と声色で言う。

しかし、お前にも？

俺はノフィーネの方を見る。

ノフィーネは何も喋らなかったが、表情は暗めだ。

「話すぞ。いいか？」

俺は視線を創造神に戻す。

「どうぞ」

俺が促すと、創造神は手元にあった湯のみに口を付け、間をおいてから言った。

「……それじゃまず、バイオアムについてはもう知っているのか？」

バイオアム……、復習として思い出してみる。

確か、世界のプログラムだったか？

「知っている。浅、中、深に分かれていることも」

「OK。なら話は簡単だ。……単刀直入に言って、お前の力はそのバイオアムの中でも深層バイムに刻まれたある一つの力を、起動させる力だ」

……ふざけた話にしか思えないが、創造神の表情には真剣さしかない。

「そのバイムに刻まれし力と君が持つ力……それを総じて、この

名で呼ぶ」

「『命断』と」

「……。」

俺はその急な展開に、息をのむしなくなる。

深層バイム？ それは、ノフィーネの『不老不死』が刻まれた所・
・。

「そんな力、俺は知らないぞ」

俺はそれを否定した。だが、

「いや、お前は覚えがあるはずだ。そう……お前が呪いと称した現象だ」

「……なぜそれを知っている」

「神様は何でも知っている」

ここで初めて、創造神は表情を崩し、からかうように言った。

……いや、あざけ笑うとも言えるな。

まあ百歩譲って、神様だから、ということにしてもいい。問題は、

「まさか……いや」

……そう言えば、ノフィーネがそう言っていた気がする。……
忘れてたな。

しかし、『命断』……命を断つ……。

「その力で、俺が皆を殺したのか？」

しかし、創造神はその考えを否定する。

「やはり勘違いをするか。『命断』はそういう意味じゃないんだが、
まあ、無理もない。この『命断』の力がそういった場面ばかりで発
動されたようだからな」

勘違い……。ね。説明不足なだけだろ。

「余計な言葉はいらない、詳しく説明しろ。五人が死んだのは、な

ぜだ？」

今思えば、神に向かってこんな口をきいていいのか、俺？

創造神も俺の態度は気にいってはいないようだ。

ノフィーネもなんだか、態度的にオロオロしている。

「・・・ふむ。てっきり自殺を考えるぐらいだから、五人についての話はタブーだと思っていたんだが」

正確にはタブー、だった。過去形だ。

いくら悩んでも死んだ人は帰ってこない、とはよく聞く言葉。もう、うじうじ悩むのはやめにした。

そもそも俺が自殺を考えたのは、この呪いのような力による被害が止められないものだとして絶望したからであって、この力の制御法が分かるのなら、死ぬ理由はなくなる。

「心の闇を克服か・・・。ますます相応しいか・・・」

創造神がぼそとつぶやく。

「わけのわからない独り言を言っていないで、早く言えよ」

「ふん、わかった、せっかちな奴だ・・・。それならまず、よく思いついてみる、五人の死に際を」

・・・お前、それは嫌がらせか？ 悩むのをやめたからって、あれはトラウマなんだぞ・・・。

「神様、それは久郎君に酷すぎるよ」

ノフィーネも非難するが、創造神は聞き分けのない子供を諭すように言う。

「だからだ。トラウマだからこそ克服すべきであり、秘密も隠されている。取りあえずばやけた感じに思い出してみる」

正論を言われた気もするが、なにか腑に落ちない。

ま、気にくわないがこのままじゃ話が進みそうにない。

「・・・わかった」

そう言って、俺は頭にその時の光景たちを思い浮かべる。・・・ボヤッとだけ。

「あ、それプラス、昨日ノフィーネと会ったことも」

あれもか、あれに関しては、はっきりと覚えているが。

「そんじゃやるぞ。・・・心理フィルター撤去！」

創造神が俺の頭に手をかざした瞬間、ボヤツとした光景が鮮明になった・・・。

「よく、思い出せ・・・！ お前の周りにいたその五人はな・・・、皆お前をかばって死んだ！！！」

！？ 俺の中を記憶が駆けめぐる。

母さんは、車から俺をかばった。

父さんは、強盗から俺をかばった。

同級生は、プールに突き落とされそうになった俺をとっさにかばった。

先輩が部活中に死んだのは、俺だけが取りに行くはずだった備品を、一緒に取りに行行って、俺が外にでている間に、倉庫が倒壊したから。

ハウスメイドが死んだのだって、落ちてきたシャンデリアから俺をかばったから。

ノフィーネだって、俺を突き飛ばし、鉄骨から俺を守った。

そう、今、思い返せば、

皆全て、俺の身代わりになっていた・・・！

「・・・！」

ふと我に返る。

ノフィーネは心配そうに俺の顔を覗き込んでいる。俺はノフィーネに「大丈夫だ」と言って、創造神の方へ向き直る。なんか若干ニヤニヤしていて、むかつく・・・。

「すべてがつながった、って顔をしているな？」

「・・・くっ、そうだな」

しかし、一つ引つかかっていることがある。

「・・・でも、じいさんは別に俺の身代わりになったわけじゃない。死んだわけでもない」

「ああ、あれは本当の事故だ。『命断』には関係ない」

・・・そうなのか？

「そう言える根拠は？」

「それは、今回の本題の一つ、『命断』の力で説明できる」
ビツ、と指を指す創造神。

C

「『命断』は、そもそも俺が試験的にこの世界のバイオアムに刻み込んだものだ。その役目は『運命』を『断つ』こと、ゆえに『命断』」

「『運命』を『断つ』というと？」

「この場合の『運命』ってのは、推測ができる近い未来のことで、『断つ』ってのは、それを変えるために動く、ってこと。具体的な仕組みは・・・」

創造神が何もなかった手のひらを広げると、そこにはペンと紙が。・・・さすがは創造の神。

創造神はそのペンと紙を使って、簡単な図を書いた。

「俺が創ったシステムは、1、物事を『知覚』する。2、その中で危惧すべきものを『判断』。3、それを変化させるために『演算』。4、演算されたものを『実行』。この四行程。」

紙に書いてくれたのはいいが、今思えば、あまり意味のない行動だった。

さらに、創造神は続ける。

「『命断』の優れた点は、他のバイオムに刻まれた力などを使うことにより、ほぼ何でも実行可能な点。その優秀なシステムによって、『命断』の力は、ループしそうなことや、世界にとって不利益な『

運命』を『断つ』。・・・はずだったんだが」

そこで創造神が言いよどむ。

「実は、行程の1、2である『知覚』と『判断』がうまく機能しなかったんだ。まったく発動されなかった」

始まり悪ければ、終わりなし、といったところか。

「だが、そこにお前が現れた。理由は分からないが、おまえの力は『知覚』と『判断』の部分を担う力。事実上は『命断』を支配していると言っても過言では無い」

「・・・そんなすごい事の覚えは無いが・・・」

「今の所は無意識でしか使えてないようだからな。・・・だが慣れば、お前が『知覚』したことを、意識的にお前の『判断』で行えることができるようになるだろう。むしろ、なってもらわなければ困る」

「誰が？」

「全人類が」

・・・規模がでかいな。

「言っておくが、これは冗談じゃない。これが今日、二つ目の本題である頼みたいことに関係する」

・・・そんな真面目以上に真面目な顔をして言うな。悪い予感しかないじゃないか。

創造神はそんな俺の予感を、見事に体现してくれた。

「単刀直入に言う。そのうち、この世界は破壊神によって滅ぼされる」

・・・なんだそのRPGじみた予言は。悪い冗談にしか聞こえない。

再び、外を見てみると、吹雪はますます酷くなっていた。俺の心情を知って吹雪いているとしか思えない。

いろいろな考えが心に渦巻いた結果、ノフィーネに確認を取ってみる。

「なあ、ノフィーネ。これは事実なのか？」

「・・・僕も、嘘や冗談だったらいいな、と思うよ」
つまり、本当に破壊神は来る、と言うことか。

「で、どうしろと？ まさか、戦え、と？」

何となくは分かっていたが、創造神はその問いに、首を縦に振った。

「最強であり異界の存在である破壊神に、この世界程度の魔法は通用しない。破壊神は世界規模の力を持っているからな。・・・だが唯一、太刀打ちができる可能性があるのが『命断』だ。『命断』も世界の力を司る存在だからな」

聞いているだけなら、物語みたいだな、と思うだけなんだろうが・・・、それを自分がやるとなると、本当にシャレにならない。

「でも俺は人間だ。神の相手は神がすべきじゃないのか？ お前と時神、二人で立ち向かえば・・・」

つつい、こう押し付けをしてしまうのは、人間の性か。・・・いや、元々押しつけられたのはこっちだったか？

ま、そんな俺の思いは始めっから叶わないとはわかっていた。

「無理だ。俺には勝てん。そして時神は・・・、自分で聞いてみる」
なぜか頭が痛そうな創造神。なんだか知らないがとりあえず呼ぶ。
「呼んだかの？」

早いな・・・。案外近くにいたんじゃないか？

「おお、そう言えば。台所の戸棚にあった緑茶、非常に美味であったぞ」

いや、人の家の茶を勝手に飲むなよ。

「固いことを思うな」

心を読まれたらしい。てか、思うことすら禁止かよ。

「それで、何で妾は呼ばれたんじゃ？」

「ああ、それなんだが。何でも破壊神が・・・」

と、俺はここまで言った時点で何となく悟った。ああ、頭が痛そうにしていたのは、こういうことか・・・。

「破壊神様じゃと！ なんじゃ、詳しく聞かせよ！ ここに、いら

っしやるのか！？　どうなんじゃ！」

「ちよっ・・・、落ち・・・、息が・・・」

強い力で締められゆく俺の首。それをしている張本人は、目を子供のように輝かせ、まるで「ねえ、私のおもちゃ、いつ届くの？」的な雰囲気でもたさている。

・・・そ、そろそろ、三途の川が見えてきそうだ・・・。

「と、時神様！　そろそろ腕を放さないと、久郎君が死んじやいます！」

「お？　すまん。妾としたことが・・・つい冷静さを」

「ゲホッ、ゲホッ・・・」

やっと解放された俺の首。・・・まだまともに息できないぞ・・・。

横を見ると、創造神が、こういうことだ、とでも言いたげな表情だ。くそっ、言い返してやりたいが、声を出そうとすると咳が出る。こうなったら、俺は手招きでノフィーネを呼ぶ。

「？　なに、久郎君？」

「ゴホ、ゲホ、ゲホッ」

「ふむふむ。神様、久郎君が、どういうことだ、だって」

「・・・いや、なんでただの咳だけで分かるんだ？」

ノリでやってみたが、なんか伝わった。

「ゴホッ、ゲフッ」

「早く答えろ、だそうです」

「・・・いいや、もうツツコまん。というか本人に訊いたらどうだ」
その本人さんは、夢見る少女みたいに目をキラキラさせて、自分の世界に入っているんだが・・・？

「しょうがないな。言ってしまうば、時神は破壊神のファンだ」
ファン？　会員制のクラブでもあるのか？

「人間界はともかく。王界、魔界、天界、これら全てに、破壊神を崇拜する奴らとその集団があるらしいな。強いものに引かれているのか、恐れているのかは知らないが」

「ゲホッ・・・、はあ、はあ。やっと治った・・・。で、だから時神は破壊神を攻撃できないってことか？」

「純粹に勝てない、ってのもあるだろうがな」

・・・結局、俺にやれってか？

「久郎君・・・。別に断つても、いいんだよ。話によれば、破壊神が来るのも、相当後のことらしいし」

それは初耳だった。時間があるのか。

俺は少し考えたが、すぐに回答を出した。

「いや、決めた。俺は受けて立つ。この世界にもまだ未練がある。それに、ノフィーネを一人で戦わせるわけにもいかないしな」

我ながら、カッコつけた言葉だっただろうか？

こんな話を聞いた後なんだ、勇者気取りになるのも許してくれ。

「久郎君・・・」

ノフィーネが少しうれしそうに見えた。それだけでも結構満足だ。

「くさいセリフだな。・・・ま、引き受けてくれたことは感謝する。・・・それと、時神！　もうそろそろ正氣に戻れ！　まだ当分はこない」

「なんじゃと・・・？　期待させおって・・・。妾はもう寝る！」

どうやらすねたようだ。神様とはいえ、案外、ガキなのか？

「ま、あいつはあの歳で神になったからな・・・。とりあえず、お前も寝るといい。起きたら、『命断』の感覚を訓練するでしょう」

俺は言葉に甘えて寝ることにした。というか、創造神もしばらくここに滞在するらしい。

買い物やじいさんの見舞いなど、いろいろしなくてはいけないことを思いつくが、それらは全て『命断』の力を制御できるようになっただけだ。

そんな事を思いながら、俺は深い眠りについた。

Cの7話「命断」(後書き)

ここまでが『起承転結』の『起』らしいです昔の自分によると。

Cの8話「刹那の延長」

ジリリリリ！

・・・俺は目覚まし時計の音で目覚める。
時計を見れば7時2分。予定通りの起床。

この時計、前に落としたせいで壊れたらしく、鳴らない日も多い
のだが、ちゃんと鳴ってくれて良かった。

俺は目覚まし時計の上のスイッチを押して、部屋を出ようと・・・。

ジリリリリ！

「・・・。」

カシャ。

今度は強めに押してみた。

ジリリリリリ！

「・・・・・・・・！！」

・・・そうか。鳴り止まないのか・・・。

・・・鳴り止まぬなら、壊してしまえ、ホトトギス！！

とその時、俺の部屋のドアが開いた。

「おっはよー、久郎く・・・って、何やってるの？」

・・・ノフィーネか。

「・・・この鳴り響く時計を黙らせようと」

「・・・なんかよくわからないけど、平和的解決を望むよ？」

・・・その時気づいたが、電池を抜けばいいんじゃないか？

カチャカチャ・・・。

・・・よし、止まった。今度、修理に出しておくとするか。

「で、何か用か？」

「あ、朝食が出来たから迎えにきたんだけど・・・。久郎君、その
服で寝たの？」

ん？ ああ、そうか。

昨日は結局、着替えずじまいでそのまま寝たんだった。

「と言っても引きこもってたから、これ以外に服はもう二着ぐらいしかないしな」

その二着も、洗濯した後に乾かすのを忘れてそのままになってい
る。

「でもかなりくたびれてるよね。・・・今度、買いに行こっか」

「俺の服をか？ 別に今買わなくても・・・。それより腹が減った」
わざと腹に手を当てて、腹が減ったことをアピール。

ノフィーネは、しょうがないなあ、というように軽く頬を緩ませ
た。

「わかったよ。顔洗ったらすぐに来てね。あと、神様二人は先に食
べてるから」

おお、と俺が返事を返すて、ノフィーネは部屋を出る。

・・・ちょっと待て、今さら、勝手に食ってるのかよ、とかは言
わないが・・・神ってなに食ってるんだ？

興味があるな、さっさと顔を洗って行くことにしよう。

C

先に言っておく、想像以上だった。

「なんじゃ、久郎。妾の茶漬けに何か文句でもあるのかの？ 最近
の若者はあまり食べたがらんが、最初は緑茶をかけて食べていたの
だぞ」

いや、それはいいが・・・茶漬けね・・・。

99%茶なのに茶漬けっていえるのか？

「それと、創造神。なんだその、あふれんばかりの探求心を表現し
たような料理は？」

「・・・あふれんばかりの探求心を表現した料理だが？」

ちなみに、口で表現するにはおぞましすぎるので、そこは省かせ
てもらおう。

ヒントとしては、沸騰したお湯が入った鍋に、台所にある調味料を片っ端から入れ、緑黄色野菜を生のままぶち込み、豚肉を骨がついたまま投入。

それをぐつぐつ煮込み、できたスープをカレーのように大盛りのご飯にかけ、最後にマグロの頭をドカンと上にのせた感じだ。

もはや、料理ではなく芸術の域に達している。

「うまいのか？」

「・・・そう見えたならお前にやろう・・・」

だったら作んなよ。

「たとえそれが無謀なことでも、創らずにはいられない・・・創造神の悲しき定めよ・・・」

知るか。ちゃんと食い切れよ。

「・・・まさか創造神が、自らの創ったものに後悔することになるとは・・・」

さて、馬鹿についてはそれぐらいにしていって・・・俺の目の前には、ノフィーネが作ったものらしき朝食が置いてある。

ふふうのご飯に納豆、後おかずが少々。

いたってシンプルなのに、特別うまそうに見えるのは・・・さつきあんなものを見たからだな。今は意識して視線をそらしているが。それじゃあ、いただくとするか。

むぐむぐ・・・お、うまく炊けてるな。

「・・・そーいや、今日はなににするんだったか？」

「俺の残飯処理」

「神様は黙って食べてください」

「お前は黙って食ってろ」

・・・むぐつ、バリツ、グシャ、キューーン、ドロツ、ベチヨツ。・・・間違っても、飯を食う音じゃないよな・・・。

右に目を背けると、時神が湯のみをノフィーネに差し出していた。

「ノフィーネ、お茶のおかわりをもらえるかの」

「はい、いいですよ」

かいがいしく働いてるな。

「ノフィーネ、水をもらえないか」

「自分で入れてください」

「この待遇の違いはなんだ!？」

食卓にそんなものを持ち込む奴にいい待遇も何もないだろ。

「で、まじめな話に戻すが、今日やるのは『命断』の制御練習だったか？」

三人に全体的にきいたんだが、答えたのはノフィーネ。

「あ、うん。そうなんだけど・・・」

ノフィーネの視線が右に向く。

視線の先には、今にも死にそうな創造神の姿。

「うっ・・・、ダンダン味モナニモ感ジナクナッテ・・・。ウ、ウワア・・・来ルナ、来ルナアア!」

「・・・これじゃあ、とてもじゃないけど・・・」

! !
というか、明らかに幻覚見てるよな! ? 既に一線を越えてるぞ

「ウワアアアア!」

ヒュン!

そう叫んだ後、創造神は手元にあったフォークを掴み、おそらく創造神にとっての幻覚に向かって投擲した。

しかし、現実には幻覚で見ているようなものは無い。

そのフォークは他でもない、俺に向かって飛んでくる・・・!

その時、再びあの感覚が戻ってきた。例えるなら、世界の歩みが遅くなった。

俺は冷静に考える間を得て、思い切り首を左にそらす。

ヒュン! ガッ!

・・・ナイフが通り過ぎ、何かに刺さった音がした後、俺は恐る恐る首筋や顔を触ってみる。

「・・・どこにもかすってないか」

「うわああああ、・・・ガハッ!？」

体の無事を確かめ終わったとき、創造神の狂乱の声が突然止んだ。立ち上がり意識を目の前に戻すと、泡を吹いて創造神が倒れていた。

その傍にはノフィーネの姿が、その手にはあの殺人料理が。

「ショック療法って、ホントに効くんだね」

よい子は真似するなよ・・・。創造神が起きたとき、まともな状態でいたらいんだが・・・。

朝から疲れるな、と思いつつ、俺は椅子に座ろうとしたが、ふと横からの視線に気づく。

「どうした時神。おかわりならノフィーネに頼めよ」

と、楽に言ったのだが、返ってきた言葉は、こいつにしては案外、真面目な声色だった。

「・・・さっき妙な感覚を感じたであろう？」

「・・・唐突に何を言って・・・」

「いいから答えよ」

今まで聞いてきた、こいつの声の中で、一番冷たい声色、そしてにらむような視線だった。

それに押された・・・というか、俺は雰囲気的に答えざるをえなかった。

「・・・まあ、まるで時の流れが急に遅くなったような・・・そんな感覚があったな」

それを聞いた時神に、少し声の温かみは戻ったものの、物騒な雰囲気は変わらずにあった。

「御前はその力の正体を知っておるのかの？」

「正体? 『命断』の力の一部だろ?」

俺は、なにを聞いているんだ、といった感じに言う。

が、俺の考えは違っていたらしい。

「創造神から聞いたがの、その『命断』とやらとは違うものじゃ。ま、きっかけではあったかもしれないがの」

時神がやけに饒舌だ。

さつきから一度も湯のみに口をつけてないんじゃないだろうか。

「それなら、なんなんだこの力？」

「『刹那の延長』」

ん？

「その力の名じゃ。効^{がいせん}煽の奴はそう呼んでおった」
ちよっと待ってくれ。

「効煽ってだれだ？」

「なんじゃ、久郎。御前は己の先祖の名も知らんのか？」

先祖……って言うと。

「藤草効^{ふじくさ}煽^{がいせん}。御前の先祖であり、妾を負かした男じゃ」　　そういや

昨日も言ってたな。

「先祖というと、俺のどのくらいの爺さんだ？」

「そんなこと妾は知らぬ。後で家系図でも見ればよいじゃろ？」

んなものあったかな……？

「しかし、御前がそれを使えるとは……」

なんだか感慨深いものがあるようだ。

野暮かもしれんが、きいてみる。

「『刹那の延長』……だっか？　結局なんなんだ？　説明ぐらい
してくれよ」

話をふってきたのは時神からだ。これをきく権利ぐらいあるだろう。

「お？　おお。そうじゃな……」

時神は意外にすんなり口を開いた。なんとなく雰囲気も戻ったような気がする。

「有り体に言うと、体感時間を遅くする力じゃな。感覚を鋭くすることで時がゆっくり進むような錯覚が起こるのじゃ」

ふーん……。こういったファンタジーな話の中では、まあまあ分かりやすい話だった。

が、疑問点は少なからず出てくる。

「その力は魔術なのか？　というか、何でそんな力を俺が使えたんだ？」

「二つも同時に質問するでない。答えにくいじゃろが」とか言いつつも、ちゃんと答えてくれる時神。

「『刹那の延長』が魔術かと言われたら、正直、微妙じゃのう。呪文とか魔法陣を使うわけでもないが、実際、魔力を糧に感覚を鋭くしておるようじゃしの」

魔力……。何か思い出しそうなんだが……。

そうだ、なぜか減っていた俺の魔力。

俺は隣で静かに話を聞いていたノフィーネにきく。・・・そういや思ってたんだが、こいつ俺が他の奴と話してるときは、とことん黙ってるな。

「なあ、確か昨日やった実験みたいなので、俺の魔力がどうこう・・・」

そこまで言うと、ノフィーネも分かったようだ。

「あ、そっか。それは多分、久郎君が思ってる通りだよ」

つまり、昨日の俺の魔力が減っていたのは、『刹那の延長』を何回も発動させていたから、ということか。

「何かに納得したようじゃが。話を続けてもよいのか？」

あ、すまなかった。どうぞ続けてくれ。

「こほん。で、二つ目の質問についてなのじゃが。その力はおそらく、藤草の血によるものじゃ。現に、他の効焔の子孫の中にも、それらしきものを使う奴がおった」

血というのは曖昧な表現だな。つまり、この力は遺伝性だ、と言いたいんだろう？

「久郎の思った通りじゃ」・・・だから、なんで俺の考えてることにがわかるんだ？

「神としての条件の一つに『簡単な読心術』というものがあるからの。それぐらい朝飯前じゃ」

また読まれた……。そんなに顔に出てるか俺？

「むしろ雰囲気に出てるのう。わかりやすい奴じゃ」カラカラと、変わった笑い方をする時神。そういや、さっきの物騒な雰囲気が自然と薄れてきたな。

「しかし、血は薄れるものじゃ。藤草の者たちも、代が変わるごとに『刹那の延長』の効力を弱めていった。・・・いや、むしろ効煽の力が強すぎたのかもしれないのう」

とても懐かしそうに言う時神。特に最後の方には、何かの感情が含まれているのを感じた。

さらに、時神は続ける。「とにかく、かつての効煽が使うような強力な『刹那の延長』を使える者は皆無じゃった。御前までは」

あやうく、最後のフレーズを聞き逃しそうだった。「ん、・・・俺？」

「そうじゃ。さっき御前がフオークをかわした時の力は、効煽のものと同等じゃった」

なんか誉められたような気がするが、とりあえず謙遜させてもらう。

「いや、でも俺はたったの数秒ほどしか使えてないぞ」

しかも、この数秒というのは俺にとっての体感時間だ。実際の時間にすれば、一秒もないかもしれない。しかし、謙遜というのは、否定されるのがお約束だ。

「当たり前じゃ。人間がそれ以上長くできたら化け物じゃぞ。歴代の者たちができたのは一瞬ぐらいじゃ、効煽や御前みたいな奴がそうしているものか！」

やや興奮気味に時神が言う。なんか怒ってるようにも見える。

しかし、えらい言われようだ。俺とその効煽爺さんは化け物かよ。というか、なんでそこまで熱く語るんだ？・・・もしかしたら、思い切ってきいてみる。「なあ、もしかしてお前が負けた理由って、『刹那の延長』のせいなのか？」

「ふん、そんなものに妾は負けぬわ。そのくらい妾にもできるしの。そもそも、妾は時神じゃぞ。同じような力でも妾の方が強力じゃ！」

今度は本当に怒ったみたいだ。負けたこと気にしてるのか？
そこで時神は湯のみに口をつけた。どうやらこれ以上、話す気がないらしい。ま、俺も食いかけだったしな。

俺も目の前の朝食に集中しようとしたが、

「・・・どことなく、効煽と、似ておるな」

ふいに、ボソッと時神が言葉をもらす。

と、次の瞬間。

バンッ！

時神がテーブルを叩いて立ち上がる。

ノフィーネ共々、何事かと思って見ていたら、時神はこう宣言した。

「そうじゃ！ 久郎、どうせ御前はその力を自由に使えておらんのじゃろ？」

・・・まあ、そうだな。危機が迫ったときだけというが・・・。
ちなみに、何でわかったのか、というのはきかないことにする。どうせ神様だからと返されるに違いない。

「てか、急になんだ？」 という俺の問いは無視されて、

「ならば、妾が御前に『刹那の延長』の使い方を手ほどきをしてやるのではないか」

にやけた顔で時神が言う。つまり、なにか裏があるってことだ。

「そして妾と勝負するのじゃ！」

・・・裏ぶっ飛びすぎ。

「どこをどう通ればそうなるんだ！？」 「効煽から受けた妾の屈辱を、同じ力を持った御前に勝つことによって、はらす！」

「無視か！ しかも、関係ないところのしわ寄せが俺に来た！？」

「そう決まったら・・・」

「いや決まってないから！？」

まずい、ここまで振り回されたら取り返しようが・・・。

「『時間停止』！」

「っっ！」

・・・・・・。

C

えー、ノフィーネです。今、時神様の『時間停止』を受けて固まった久郎君を、時神様が外に運び出しています。

創る方の神様はまだ泡吹いて寝てます。今日中には目を覚まさないかもしれません。

とにかく、僕も外について行こうと思います。

Cの9話「訓練」

「・・・はっ！」

目の前に広がるのは一面の銀風景。昨日の吹雪が嘘のように晴れているので、雪面に光が反射してまぶしい。

ヒュオォー・・・。

「というか寒っ！　いつの間に俺は外に！？」

「気がついたかの、久郎」

後ろを振り向くと、宙に浮きながら湯のみで茶を飲む時神の姿があった。

「・・・あー、そうか。」

なんか手ほどきがどうこう言ってたな。・・・いやでも、そこからここまでの記憶がすっぽり抜けている。というか、そもそもそんなものを記憶した覚えがない。

「・・・何やったんだお前？」

「いやちよいと。御前の時間を止めたんじゃ」

「なぜ？」

ん？　なんかそれ覚えがあるような・・・。いやでも、なんだっ
たかな？

「おーい、久郎君と時神様〜！」

不意にノフィーネの声がした。

俺は思い出せない気持ち悪さを抱えたが、思考を中断する。

ノフィーネは別荘から駆けてきて、俺と時神、両方に向けてきく。

「二人とも、もう訓練は始まっているの？　何か僕が手伝えることがあれば手伝うけど？」

時神が即答する。

「いや、これからじゃ。それと手伝いならよいぞ。人は足りておる」
せっかくの申し出なのに受けな・・・、

・・・人は足りている？

こんな言い方、自分と相手の二人だけのときには使うか？

「さて、久郎よ」

なんというか、時神がRPGという王様や賢者が言う感じで呼びかけてきた。「早速じゃが、お前には・・・こいつらと戦ってもらうぞ」

そう言って時神が手を広げると・・・雪の中から何やら人のようなものが・・・。

ドサツ、ムクツ！

うおわっ！ ゾンビか？ と思ったが、待てよ。あの黒服・・・、まさか・・・。

「あ、そういえばあの人たちのこと忘れてた」

昨日の黒服たちだった。・・・あ、さっきの思い出せなかったのってこれだ。

あー、すつきりした・・・じゃなくて！！

身構える俺たち。

だが、どうも黒服たちの様子が変わだ。目がうつろというか、本当にゾンビみたいだが・・・。

「ノフィーネはそう身構えずともよい。こやつら今、妾が洗脳しておるからの」

へえー、そんな事までできるのか。

・・・と感心している場合ではない。

「で、なんで俺がこいつらと戦わないといけないんだ」

「ああ、あれは嘘。ノリじゃ。や。そもそも、丸腰のお前が、鉄砲を持った人間と魔術師に勝てるわけがなからう」

紛らわしいな・・・。

お前等は真剣なことを冗談のように言うから、度々怖い。

ま、でも。本気だったらやばかったし。

「ホントは逃げ回ってもらっただけじゃ・・・三十分間」

「サーティミニッツ！？」

何で英語になったかは俺にもわからん、というかどうかでもいい。

それよりも、

「いやいや、無理！ 三十分は無理だから！？」

「なんじゃ、逃げるだけじゃぞ。御前ならできるはずじゃ。ま、はいりすくはいりたーん、かもしれないが。ここまできたら荒療治、最終手段じゃ。がんばるのじゃ」

ちよつと待て！ いろいろとツツコませろ！

「拒否じゃ」

ツツコミすら拒否された！？

「なに心配せずとも、弾は入っておらん。代わりに衝撃弾が出るようになっておる」

「用意がいいな・・・」 ほとんど呆れるしかない。

「ただし当たる度にペナルティがあつての」

「ペナルティ？」

いったいどんな罰が・・・？

「うむ。弾が当たる度に、ノフィーネの服が剥けていく」

「え、神様！？ ちよつ、なんですとー！？」

・・・よし、かかってこい。

「久郎君もなに、やる気おこしてるのかな！？ しかも、当たる気満々でしょ！」

「よーい、すたー・・・」

「待ったー！！ 始めないでください！！」

何でノフィーネが止めるんだ。実際にやるのは俺だぞ。

「実際に被害被るのは僕ですよね！？」

お前まで心を読むように・・・。

「久郎も男の子じゃなあ。よーい、すた・・・」

「だから始めないでください！！ 神様とは言え、殴りますよ」

ノフィーネが手を振り上げると、反射的に時神は手で頭を抱えずくまる。

ビクッ！ ブルブル・・・。

・・・だめだぞ、ノフィーネ。小さい子をいじめては。「いじめ

られてるのは僕の方だよね!? 神様もそんなキャラじゃないですよ!」

なんだか、話が進まなくなってきた。話を戻そう。

「で、ノフィーネを剥く話だが・・・」

「話戻ってないよ!?! 二人とも真面目にやってください!!」

小休止。

「ともかく、さっさとやるかの。残念ながら、ペナルティはないがの」

・・・ぶー、ぶー。

「久郎君。君のことを悪い方に見直したよ・・・。この、変態」
グサッ!

「ぐっ・・・、その変態ってワードは心に刺さる・・・」

でも気づいたんだ。いじられたくなかったら、いじる方に回ればいいと。

「最っ低」

グサッ!

「・・・すでに久郎のらいふは0じゃの。気を取り直して始めるかの?」

「・・・いいけど。逃げるだけで訓練になるのか?」

「無論じゃ。御前は逃げる時に『刹那の延長』を使わざるをえんじやろ? 数をこなして、『刹那の延長』を使う感覚を身につけるのじゃ。最終目標は意識的に使えるようになることかの」

文字通り荒療治か。

マンガなんかだったら、実戦で力が覚醒するってのはよくある話だが、実際は怪しいものだよな。

「だがやるしかないか・・・」

俺は割り切り、戦う相手を見る。

サンダラスはいつの間にかはずれた拳銃持ち黒服が五人。・・・

あれ魔術師がない？

「魔術師はどうしたんだ？」

「奴には結界をはらせておる。不可視防音障壁じゃ」

多分、見えない聞こえない通れない、ってやつだろう。

しかし三十分か……。やはり、厳しいな……。

「随分と時間を食ってしもうたが、始めるぞ。よい……」

「すたーとじゃ！」

パパン、パパン、パン！

別にスタートの合図ってわけじゃないんだろうが、始まったと同時に五人が一斉に撃ってきた。

世界の歩みが遅くなる。……どうやら、危険を感じると自動的に発動してしまうみたいだな。

この間に状況整理。

現在、俺と黒服五人は向かい合っている。

銃から放たれたのは、時神が言ったように弾丸ではなく、ピンポン球ぐらいの白い光弾。……よし、かわせる！

『刹那の延長』が終わると同時に俺は右に飛び退く。

ビュ、ビュン！

左から弾が走る音。あれはあれで、当たったら痛そうだ。

続いて二射目、これも『刹那の延長』を使ってかわす。

さらに三射目……。

「時神様。これって本当に訓練になってるんですか？」

僕は思った疑問をそのままぶつける。

「ん？　なぜじゃ？」

その返答にあきれ笑いをしそうになる。

時神様、まだとぼけきれると思ってるんですか？

「久郎君の魔力じゃ『刹那の延長』を使える回数はそう多くないはずですよ。三十分なんてそもそも無理です」

それぐらい時神様だって分かってるはずですよ。

「そう思っておるなら。なぜ止めなかったんじゃ？」

「いや、久郎君に大変な目にあってほしくて」

最低な変態さんには、罰が必要ですよ？

「・・・御前もなかなか黒いのじゃな。・・・ま、妾としては、限界まで使って身につくのを期待しておる。それに・・・、今一度、妾は『命断』の片鱗を見てみたいのじゃ」

「『命断』を？ それはなぜですか？」

「・・・もし久郎が、破壊神様の障害になるようなら、・・・妾がなんとか、せねばならんからな」

・・・。

僕は押し黙ってしまう。

そして思ってしまう。・・・いつか、時神様と戦わなきゃいけない時がくるのではないかと。

「・・・ッ！」

どうやら洗脳されているとはいえ、その動きは馬鹿ではないらしい。

いまやすっかり囲まれて、一度の『刹那の延長』ではすべて見切れない。さらに最初は機械のようにタイミングを合わせて撃ってきていたが、今では何のパターンも見えない。

パン、パン！

「ぐっ・・・」

いったい何分続けてきたのか・・・頭がボウッとしてきた・・・。さっきから光弾が足や手に何発か当たっている。

当たったところは血は出てないもの、あざくらいには、なっているかもしれない……。

パパン！

「うぐっ……っ、……『刹那の延長』！」

だが戦いの中、意識的に『刹那の延長』が使えるようになった。これはきっと、大きな進歩だろう。

しかし、魔力があと少ししか残っていないのか、使うたびに頭がクラツとする。

現に今も倒れそうだ。……だが、まだ時間は残っている。

『刹那の延長』使用中の冷静な思考で考えると、まだ五分程度しか経ってはいないだろう。

……このままでは、俺の体はどうてもたない。

そのうち白い雪の上に沈むだろう。

……とは思うものの、俺にできることは逃げることと、『刹那の延長』で考える時間を稼ぐことぐらいしかできない。……。

いや、考えることができる、か。

使ってて分かったことだが、『刹那の延長』は発動してしまえば、意外に維持は楽だ。

俺の体感時間的に、あと一分ぐらいはもつ。

その間に、何かを思いつけば……。

とまあ、そんな風に簡単に思いつけば苦労はしないのだが。

……そうだな、温故知新ってことで、昔の格言を参考にするか。

（脳内引き出し）

A

「えーと、まずは『弱肉強食』」

B

「おとなしく狩られろと？」

A

「『温故知新』」

B

「それは今やってる」

A

「『焼肉定食』」

B

「うまいよな」

A

「えーと、『汚名挽回』」

B

「よく間違うよな。てか、ことわざでもいいぞ」

A

「『臭いものにはふたをせよ』」

B

「つらい現実から逃避してるだけだな」

A

「『果報は寝て待て』」

A

「よしそうしよう」

B

「こらこらこらこら！ さも俺が言ったようにして勝手に決めるな
！」

A

「『少年よ大志を抱け』」

C

「それだあ！」

B

「どれだよ！？　そして誰だC！？」

管

「Cさんがログアウトしました」

B

「チャットかここは!？」

A

「うるさいBがログアウトしました」

B

「勝手にさせるな!! もっと真面目にやれ!!」

A

「・・・じゃあ『押してもだめなら』？」

B

「『引いてみな』って、言わせるな!。・・・いや、逆転の発想・・・これだ!」

A

「おおっ! なんかやけくそで言った言葉が受け入れられてしまった!? ところで、次の出番っていつですか?」

「脳内引き出し閉じる」

・・・俺の脳内愉快だな。

でもまあ、逆転の発想か・・・。

俺はこの訓練、言い換えれば、このゲームの勝利条件である『逃げ続ける』を忠実に実行しすぎた。

そもそも前述の会話で、さも逃げなきゃいけないように俺は思っていた。

だが、それは違う。『逃げ続ける』は・・・『戦うな』じゃない。つまり、相手を倒していけば、三十分経たずとも決着がつく!

「・・・っ、そら!」

俺は『刹那の延長』を自ら切ると同時に走り出す。
ただし今度は相手に向かってだ。

まず一人目の黒服、距離にしてみれば数メートル。雪に少し足をとられるが、それは相手も同じこと。

黒服は俺に向けて、光弾を放つが、そのたびに俺は『刹那の延長』を発動。最低限の動きで交わしつつ黒服に迫る。

そして俺が格闘の間合いに入ると同時、黒服も銃を捨てて応じようとする。

洗脳されてても動きにぎこちなさはあまりなく、体格は俺より上。俺も護身術程度なら心得はあるが、普通なら戦いのプロにはかなわない。

普通ならな！

「いくぞ、『刹那の駒送』！」

世界がまるでパラパラ漫画のようにゆっくりと進む。

これが俺が思いついた新たな『刹那の延長』の使い方。戦いにおいて、勝つために必要なもの。それは腕力でも技でもない。

先を読む力だ。

普通に使うよりはきついが、まるで駒送りのように力を連続発動させることで、常に相手の動きをは冷静に読み、体を最適に動かしていく。

つかみかかろうとした腕を右手で最小限の力と動きで払いのけ、最大限の力のこもった左腕で相手の頬に一撃！

ボゴッ！

なんかこうきれいに決まると、とてもすがすがしいな。殴った手は痛むが、殴られた相手はその場に沈んだ。

ドサッ。

・・・よし、まず一人目。なんだか楽しくなってきた。

「さて、これからが反撃開始だ！」

「・・・なんと。倒しおったのか。そしてあの使用方法・・・あれが『命断』のもたらしたのか・・・」

時神様は『命断』と言った。だけど、僕はそうは思わない。

「違いますよ。あれはきつと、久郎君自身の力です」

さっきは軽蔑したけど、今は違う。むしろ憧れさえ抱きそうになる。

「ほう・・・なにが根拠かは知らんが、ノフィーネがそう言うならそれを信じよう。・・・じゃが、それでは『命断』が見れそうにないの・・・」

・・・まずい、時神様が暗さをおびてきた。

「カラカラカラ！ おもしろいぞ久郎！ まるで効煽の再臨じゃ！
なら少し、本気でもよいかのお！ カラカラカラ！！」

時神様は今までで一番の狂気を放ちながら、ずっと笑っていた・・・。

Cの10話「決着」

上には蒼い空が広がる、別荘の前の白い雪の上。

目の前では、久郎君が残った四人相手に立ち回り続けていた。

「あ、二人目も・・・。すごい・・・」

僕は思う。あれは『刹那の延長』があるだけでできるものじゃない。

久郎君はこの戦いの中で成長をしている。

元々高かったセンスや潜在能力が、この訓練という戦いで覚醒した。

ホント、マンガじゃあるまいし、って思ってしまうけど、実際に久郎君はものすごいスピードで強くなっている。

少し・・・うらやましいな。

・・・だけど、隣にいる時神様は、この成長を『命断』の力ちよるものだと感じているみたいだ。もしかしたら、そうかもしれない。

『命断』の力・・・下手をすれば、神を超えるほどの力を持つ可能性がある力だと、神様は言った。

だから、時神様も恐れているのかもしれない。

だから、こんなに狂気を発しているのかもしれない。

だけどなんだか・・・、時神様は楽しそうで、・・・寂しそうだった。

「カラカラカラ！ 久郎！ おもしろくなってきたのお！ じゃが妾はそれを邪魔して、御前をあと二十分弱、遊ばせてやらなくてはならぬ！ 悪く思うでないぞ！」

二人目を殴り倒し、次の目標へと向かおうとした時に、時神の声が聞こえたんだが・・・。

その声以来、残りの三人の動きが変わった。

別に力が強くなったとかそんなんじゃない。・・・ただ、俺の『刹那の駒送』を使った攻撃を、あり得ないほどの確に処理してくる。

あっちの攻撃にしてもそう、俺のかわす方を予見したかのように撃ってくる。まあ、なんとか、かわしているが。

でもこの感じ・・・、何と言うか・・・スローモーションで殴り合う遊び、みたいな感覚がある。

・・・というかこれは、まさか・・・！

「時神、お前も『刹那の駒送』を・・・？」

「カラカラカラ！ 妾は時神じゃぞ？ 体感時間の操作なら、御前より断然上！ 御前の技を真似る事など朝飯米じゃ！」

何でいきなりそんな事をしたんだ？

これじゃあ、体格差から武器の差からも、勝ち目はゼロになる・

・・・！

いや・・・、

「・・・あきらめたらそこでなんとやら、だな。・・・っと！」

俺は、今対峙していた黒服との間合いを大きくあけ、一旦呼吸を整え、思考にふけるために『刹那の延長』を発動する。

しかし、考えてみればマイナスの事ばかりが見つかる。

まず、こちらが優位に立てる力が無くなった。単純な腕力や数の力ではあちらが優位だ。

さらに俺自身、体力や精神力がさっきよりギリギリな状態だ。

なぜこうやって動いているかも不思議で、人間の体の凄さをあらためて認識することになったんだが、それはともかく。

理性的に考えて、戦っても俺に勝ち目はない

「なら、最初のように逃げ続けるか？」

と、さっきの俺の脳内メンバーAが言う。・・・いきなり出てきたなA。てか、こんなキャラだったか？

「・・・それはノーだ。なぜかは分からないが、俺・・・いや俺たちは逃げたくない！」

・・・Bもそんな熱いキャラだったか？

ん？ Cはどうした？

「有給とって旅行中です」 有給あるの！？ 俺の脳内って大丈夫か？ というか脳内の人物と会話してるあたり、俺の頭が大丈夫じゃないか・・・。

まあでもなんにせよ、逃げたくない、ってのには同感だ。だが俺には理由もある。

はつきり言っておくが、俺は、勝ちたい！

黒服たちにか、時神にか、自分自身にか・・・誰に勝ちたいのかも、何のために勝ちたいのかも分からないが・・・俺は勝ちたい！

そしてその勝利も、逃げているだけで訪れるものじゃない！
って、俺もこんなことを言う性格だったか？

ノフィーネと会ってからか、押さえ込んでいた性格が徐々に出てき始めた気がするな・・・。良いことなのか悪いことなのか・・・。
おっと、もうそろそろ効果が切れ

た。効果音も何もないからわかりにくいが、確かに切れた。ちなみに『延長』は、切れたら数秒は使えなくなる。

パン！ パン！ パン！

一つの光弾は真っ直ぐ俺に向かって、あとの二つは俺の逃げ道を塞ぐように左右に向けて撃たれたようだった。

ようだった、と言うのも『刹那の』系の力が使えなかったら、俺は勘で避けるしかなく、音と銃口の向きでしか弾道を予測できない、正確に分かるのは、俺に当たったか当たってないかだけ。

で、今回はしゃがんで当たらなかった。

しかし、二発目、三発目と、次々に弾丸が放たれる。

ここで『刹那の延長』を使ってもよかったのだが、あと何回使えるか正直不安だ、

使うなら反撃のチャンスで使いたい・・・。

ってことで、転がりながらさらに何発かを避ける。

チュンッ！

「ぐっ・・・」

右腕に痛みを感じた。おそらく光弾がかすった痛みだろう。

こんな痛み、大したことないはずなのに、俺は動きを止めてしま
う。

。バカだ。これではわざわざ的にしてくれと言っているような・・・。

パパパン！！！！

「うぐっ・・・！」

。三つの銃口が一斉に俺の頭を狙い、三発の光弾が俺の頭に直撃・・・。

光弾から生じた衝撃によって脳が強く揺れる・・・。

意識が、吹き飛びそうになるが・・・、なんとか持ちこたえる。

さらに迫る次弾。

回復しきってない意識の中、俺は無意識に飛び退きかわす。が、

着地の格好は、腰が抜けたような無様きわまりないもの。

「カラカラカラ！ どうした久郎！ まだまだ時間はたっぷり残っ

ておるぞ？ カラカラカラカラカラ！」 時神の勝ち誇ったような、

愉悦たっぷりの笑い声。言い返してやりたいが・・・、正直、満

身創痍だ。

体も思うように動かない。

心はまだ折れていないから、だましだまし体を酷使したが、どうやらここで限界みたいだ。

断言する。あと一つか二つの挙動をただけで、俺の体は動きを停止するだろう。

俺は最後の足掻きとして、『刹那の延長』を発動する……。

……ッ！ 疲労感もピークに達しているため、世界が遅くなるような感覚に引き込まれ、あやうく気絶しそうになった。

むしろ、ここで気絶した方が楽だったかもしれないが、耐えてしまったので仕方がない。

視界の中の黒服三人は、一人が弾倉の入れ替えを、二人が俺に向けて構えて次の弾を放とうとしている。これはチャンスなのか？ 弾倉の入れ替え中の黒服なら、なんとか倒せるんじゃないか？ だが、一人を倒せても後が続かない。

くそっ、頭がぼうつとして、単純なことしか考えられない！ 勝ちたい。けどその方法がない。なに一つとしてない……！ 勝ちたいのに……、勝ちたいのに……、勝ちたいのに……！

そのとき、俺の脳に『刹那の延長』以外の感覚。

まるで頭が締めつけられるような痛み……今まで俺が、他の人に助けてもらいう前に感じた痛みが、俺の頭を襲った……！

この痛みは……まさか……！

『命断の力の発動を確認。命断ナビゲーション、起動します』

C

……ってあれ？ ノフィーネ？

えっと、今の状況を整理すると、

まず、頭痛がして、まさか……？ と思ったら目の前にノフィー

ネが現れた。

…… しかも『刹那の延長』発動中なのに、普通に喋って動いているし……。

・・・。

『どうしました？ ああ、自己紹介が遅れましたね。私は命断の力をナビゲーシヨンするために創られた半霊アンドロイド型命断ナビ。略してメイナです』

と、目の前の栗色の長髪のアンドロイドだかなんだかが言っているが・・・いや、待て。

どうみてもノフィーネなんだが？

『いいえ。この姿は、ご主人様の脳に記録されている人物から、適当に選んだものです。本来の私はただのシステムであって、決まった姿形はありませんから』

と、説明されたが・・・。アンドロイドってそういうものだったか？

『いえ、私は半霊アンドロイドですから』

単刀直入に簡単な説明をしてくれた所悪いが、その半霊アンドロイドってなんだ？ 聞いたことがない用語だ。

『半霊アンドロイドと言うのは、本体が魔力でできていて、生き物のように実体がある存在にも、システムやプログラムのような情報だけの霊的存在にもなれるアンドロイドです。今は情報だけの霊的存在としてご主人様の脳内にいます』

？ 俺は目の前にお前を見ているが？

『それは今、私がご主人様の脳内から、私が目の前で話しているように、情報を送っているからです。実体があれば『刹那の延長』中は私も動くことはできません。』

そういや『刹那の延長』中は喋れないはずなのに、さっきから頭に思っただけで、会話できているな。

ところでこれって、俺がメイナに操られる可能性があるんじゃないかないか？

『その心配はありません。よほどご主人様が弱っていない限りは、脳の防衛機能によって有害なものは消されますから』 それなら安心できるか。

しかし、半アンドロイドと言われても、ノフィーネの姿だからな
んか割り切れない……。

『すみません。ご主人様の脳内にはあまり女性の姿が記録されてい
なかったもので』

それって暗に、俺のことをけなしてないか？

『そ、そんなつもりは……。』

今まで割と冷静だったメイナが初めて慌てている。

いや、てか別にいい。引きこもってた俺が悪いんだし。顔覚えも
悪い方だしな。

そう俺が言うと、メイナは安堵の表情と微笑を浮かべた。

『どうかお気になさらないください。それに、今のご主人様には
ノフィーネ様がいますから問題はありません。……あ、この姿少
し変えますね』

変えるって……？

と、きく前に既に変化が現れていた。

まず、髪がショートカットになって髪色が栗色から薄茶色ほどに、
身長もしだいに小さくなり、その他、顔の部位やらなんやらが少し
ずつ変わり。まるでノフィーネの妹みたいな姿になった。

『どうでしょうか？ ご主人様』

どうと言われてもな……ノフィーネに似て可愛いとしか……。
しかし、さっきから俺はご主人様と呼ばれているが……、それ
を聞いてノフィーネとメイナのメイド服姿を想像してしまった。

『メイド服ですね。分かりました』

あ、ストップ、ストップ！ 別にしないでいいから！

『そうですか……。』

何でそんなに悲しそうにする……。

でもまあ、こんなナビゲーションがあったなんて知らなかったな。
創造神は何も言っていなかったが……。

と思っていたら、その理由がすぐに明らかになった。

『それはそうです。私はご主人様に創られたのですから』

・・・はい？

ちよつと待て。そんな創造神的な行為をした覚えはとんとないが？

『覚えていないのも無理はありません。ご主人様は寝ている間に無意識に命断を使って、私を創ったようですから』

アンドロイドを寝ながら創るとか・・・。なんで、寝てるときに使いこなせているんだ？

ある種の才能か？

『もしかしたら、何か強いイメージを持った夢を見ていたからかもしれない。ですが、それでも確かに、ご主人様は天才だと、私は思います』

・・・人に面と向かって天才と言われると、なんだか恥ずかしいんだが。

それよりも、ナビって具体的に何をする事なんだ？

『私はご主人様が命断のことをよくわかりたい・・・命断を使えるようになりたい・・・その強い意志から生み出されました。私の役割は、ご主人様が命断の力を使うときに、ご主人様の処理作業のお手伝いをする事です』

文字通りナビシステムって事だろうか。

ところで、何で今になって出てきたんだ？

『ご主人様が強く勝ちたいと願ったからです。命断は強い意思が、発動の鍵となります。その意思をもとに、運命を断つのです』

で、俺が勝ちたいと強く思ったから発動されたと。

そういや、創造神が訓練するとか言っていたような気がするが、いらなくないか？

『そうなりますね。意志の持ち方はできたみたいですし、情報処理にしても私がやりますし、訓練はいりませんね』

・・・目が覚めた創造神にこのことやナビについて伝えたらどんな顔をするだろうか？

ってあれ？

思えば、もうすでに一分ぐらいたった気がするんだが？

『「命断」によって刹那の延長の効力が切れる運命を断つために、世界からの強制的な魔力の補充と、維持作業の一部を空きバィムに委託しました。これも、ご主人様の『勝ちたい』という意志によるものですよ』

メイナは、なんだか誇らしげに話しているが。仕事にやりがいを持っているからだろうか？

まあ、そんな事は後で大きくことにして、なあ、メイナ。俺は勝ちたい。どうすればいいんだ？

『はい。最適な方法を検索します……。あ、ご主人様。検索には時間がかかるので、いつかまた使うときも、『刹那の延長』で使った方がいいですよ。……。検索中、しばらくお待ちください……。』
メイナはまるで動かない人形のような目を、機械的な表情をして「検索中……。」と呟いている。

その様子から、俺はメイナがやはりシステムであって人間ではないと感じた。

しばらくして、『検索完了』の言葉と共に、メイナが元の人間らしい表情に戻った。

『ご主人様……。これはいかがでしょう？』

そう言って、メイナは俺の脳に直接情報を送ってきた。

これは……。武器じゃないか？

『問題ありません。ご主人様ならきつとうまく使えます』

そうは言ってもな……。

いや、そう言ってもしょうがない。

まずはやる、だ。で、どうすればいいんだメイナ？

『では、発動準備をします。完了したら、刹那の延長を解除して、そのとき頭に浮かんだ言葉を唱えてください』

わかった。

そう俺が返答すると、メイナは早速準備に入った。

機械的な表情、機械的な声色で、なにか言葉を唱えていく。

『……。中層バィムにアクセス、ポイント7、バィム武器庫、隔壁、

強制認証、残七層、五層、三層、一層、突破、武器No. 667、情報取得準備・・・完了しました、ご主人様！』

了解だ。『刹那の延長』解除！

俺の意識は普通の時間の流れの中に戻る。

相手の動きも元に戻っているため、あまり時間はなく、体は相変わらず今にもぶっ倒れそうだが、

やることはそう多くないから問題ないはずだ。俺は一度、ノフィーネと時神の方を見る。

ノフィーネは心配そうな表情を、時神は勝ち誇った表情をそれぞれ浮かべている。二人とも俺が負けると思っているんだろうな。

だが断言する！

今の俺に敗北の運命は存在しない！

それを今から証明する！

俺は手を前にかざして、頭に浮かんだ言葉を唱える。

「・・・『命断』の名により、バィム武器庫、No. 667を発動する」

かざした手の中で、発動するために世界から得た魔力が収束する。

『武器を具現化します。武器の名を唱えてください』

機械的なメイナの声、その指示に従い、頭に浮かんだ知らないはずの武器の名を唱え、武器を具現化する。

「武器庫の門を開放し、我が手元にきたれ、バィム武器No. 667、

『縛槍エリクソス』！」 手の中に収束しつつあった魔力が、黒き槍の形をとる。

その刃と柄の表面には、赤い魔法紋章が刻まれている。

俺は具現化と同時に大きく振りかぶり、『エリクソス』を黒服たち、に向かって投げた。

「・・・槍？ 久郎君あの槍を今どこから・・・」 僕は目の前で久郎君が虚空から槍を出現させたのに驚いていたけど、隣の時神様は、あの槍自体に驚愕していた。

「あれは・・・『縛槍エリクスス』ではないか・・・」

「なんですか？ それ」 と、反射的にきいてしまった。

僕の悪い癖かもしれない。

「『エリクスス』は、古代悪魔戦争で使われた武器じゃ・・・。今では失われた武器の一つになっていたと思っていたんじゃないが・・・」
古代悪魔戦争・・・というのは、昔にあった人間と悪魔との戦争のことで、神話級の武器が投入されたほどの激戦だったらしい。

「って・・・、つまりあの槍も神話級の武器って事じゃないですか！ そんなものをどうして久郎君が・・・」

ニュッ！

「それは俺が説明しよう」

「うわっ!？」

「んじゃ!？」

後ろからいきなり神様が出てきた。

時神様共々、驚き飛び退く。

「神様、大丈夫なんですか!？」

「ああ・・・さっきまで三途の川でたたずんでたが・・・。でも今日は船頭がスト中ってことで、なんとか帰ってこれたな」

「はあ・・・、幸運というか何というか、船頭さんストライキですか・・・てか、していいんですか・・・」

これは冗談なんだろうか？

「ま、冗談はさておいて、それよりも槍の事だ。まずは見てみろ」
言われて視線を前に戻すと、久郎君は手に持った槍を投擲していた。

でも、その槍の進路は敵の上。

「はずした・・・？」

「いや、それはどうかな？」

神様はニヤアと含み笑い。

そして僕はすぐに、その含み笑いの意味を知ることとなった。

C

槍は黒服たちの大きく上を行き、一見はずれたように見える。

だが、これは俺の狙い通りだ。

そもそも満身創痍のこの体で、そこまで槍を投げられるわけがない。槍自身の力でその高さに飛んでいったわけだ。ねらいがないわけが無く、俺はそのねらいを知っている・・・！

銃を放とうとしている黒服たち、だが遅い！

「『縛槍エリクソス』、開鎖！」

開鎖・・・このキーワードによって、エリクソスの真価が放たれる。

ジャラララララッ

ジャラララララッ

ジャラララララララララララララララッ！

空中で動きを停止したエリクソスの柄、刃に刻まれた魔法紋章より、先に槍の刃がついた鎖が十数本放たれ、意志を持ち、蛇のように黒服たちを捕縛する！

「・・・！！」

意志を持った鎖たちは、

逃れようとした黒服には回り込み、

迎え撃とうと銃を撃った黒服の鉛玉は、鋼の鎖に弾かれ、俺に銃を向けた黒服は引き金を引く前に腕に巻き付かれ、

一瞬の間に黒服三人の身動き封じた・・・！

「これで終わりだ・・・絞首！」

巻き付いた鎖で三人の首を絞め気絶させる。

・・・終わった。

「勝った・・・勝ったぞ！・・・のわっ・・・！？」

歓喜のあまり、叫んだ俺だったが、・・・限界がきたようだ。

体が後ろに反れていきもうバランスのとりようがない角度につ・

・！

ドサッ！

その衝撃がとどめとなって、俺の視界が暗転してき、俺の意識はそこで途切れた・・・。

C

「とまあ、こういう訳だ」

・・・僕は目の前の光景に呆然していた。

あの槍はもう消えていて、残ったのは倒れた三人の黒服たちと久

郎君・・・。

はっ、

「あ、久郎君・・・」

と駆け寄ろうとした僕だったが、神様に手で制止される。

「それなら・・・おい、時神！」

「む・・・」

呼ばれた時神様は、苦虫を潰したような顔をしている。

「自分のまいた種なんだろう？ お前が中に運べ」

「・・・んじゃ、」

意外にも時神様はすんなりいうことを聞く、

と言っても、実際に運んでいるのは、操られている魔術師ですが。時神様も内心では、やりすぎたと思っていたのかもしれない。

「さて、あの槍についてだが・・・」

神様がいきなり話を進めてきたので、慌ててそっちを向く。

「『縛槍エリクソス』、古代悪魔戦争で使われた神話級の武器。その力は敵の捕縛。刃と柄に刻まれた魔法紋章から無数の鎖が放たれ、

意志を持って相手の動きを封じる」

「それなら見てて……いや時神様の解説もあって分かりましたけど……」

「そうなのか？ エリクソスの伝説としては、千匹の悪魔の軍団をたった一本だけで封じ込めたってのがあるが、これは知ってたか？」

それは知らなかった……。ってそれよりも。

「時神様が言っていましたけど、あれって失われた武器なんですよ。なんでそれを久郎君が？」

一番気になっていたことをきいてみた。神様は予想していたのだろうか、すぐに答えてくれた。

「確かに、実物は戦争のときに跡形もなく消されたな。だが、久郎が呟いていただろう？ 『バウム武器庫』って」

そういえば呪文みたいに言っていたのを聞いたような……。

「神話級の武器はそうそう現れるものじゃない、だけど闇に葬られたり、喰われたり、折られたり、持って行かれたりと、しょっちゅう無くなるんだ。それで、貴重な武器が失われるのはもったいないからどうしたようかと考えた結果、神話級武器の構造情報……つまり設計図を保管する『バウム武器庫』を創ったわけだ」

神様は地面に『中層バウム』と中にかかれた円を書いて、その中に大きな門の絵を書いた。

「え、でもそんなものがあるなんて、今まで誰からも聞きませんでしたよ？」

「それは、俺が今まで武器庫について誰にも教えてないからだ。悪用されても困る」

それはそうですね……。って、
「じゃあなんで久郎君が!？」

「『命断』があるからだ」

あ、そっか……。それしかないですよ。

「……だが、ここまでの事をするとは……。後で聞いてみるか？」
よく聞こえなかったけど、ボソッと神様が何かを言った。

「今何か言いました？」

「いや、何も？ さて、久郎の様子を見に行くか」

少し話をはぐらかされた気がするけど・・・、でも久郎君が心配だし、気にしないことにしよう。

というか！

時神様がちゃんと久郎君を寝かせてられているのかが心配だ！

僕は急いで、別荘の中に入った。

C

ノフィーネが別荘内に戻った後も、俺は外に残り続けた。

なぜか？ それは、

「おい、古王。隠れてないで出てこい」

「隠れてるつもりはなかったんだがな・・・よつと」

紅葉途中のもみじのように紅と黄がランダムに混ざった短くも長くもない髪、長身で整った容姿、旅人のような防塵用マント、

そいつの名は古王。俺が創った世界の一つ、『王界』の住人。

木の上にいたらしく、雪とともに降りてきた。

「しかし『エリクソス』か、懐かしいものを見たな、あれが『命断』の力なんだろう？」

古王は割と興味がありげにきいてくる。

こいつは味方だから話してもいいんだが、・・・なんか、話したくない。

「おい、無視か？ せっかく知りたそうなことを教えにきたんだが・

・・・」

知りたそうなこと？

なんだ、それは。

「そう・・・、破壊神について、だ」

「・・・話を聞かざるをえんな、それは」

古王には少し打倒破壊神に協力してもらっている。

偶然の利害の一致というか・・・、できれば無条件で手伝ってもらいたいものだ。俺は創造主だからな。

「まず、本体が来るのにはあと数年時間がかかる、との計算結果がでた。これは予王によるものだからまず正確だ」

「・・・予王がか、それならあっているんだろう」

「次に、『信者』についてだ。まあ王界、魔界、天界、人間界と、結構な数があるみたいだ。これは全部直接見てきた」

「お前、よく無事だったな・・・」

「俺を誰だと思っている？ ま、それはともかく、最後の情報・・・これが一番重要だな。・・・聞くか？」
なぜ訊く？

「聞いたら絶望するかもしれないからな」

「なら聞こう。悪い情報ほど役に立つものはない」

「OK、なら言おう。・・・さっき破壊神の本体が来るにはあと数年かかる、と言ったが・・・言うぜ」

古王が言葉を溜める。そこまで悪い情報なのか？

「破壊神の一部が猛スピードで人間界に向かってる。ワープしつつ移動しているため、正確な到着予想はできないが、最大で二週間・・・最低では今日にでも・・・って話だ」

「んっ・・・」

そんな、滅茶苦茶な・・・。

「だから言っただろ？ ま、正確な予想ができないから、もしかしたら1ヶ月かかるかもしれない」

・・・希望的推測はいい。常に状況は最悪な状況に陥るものだ。

「そうとも限らないぞ。すべての状況に可能性は均等にふられている・・・、そうそう最悪にはならないぜ。・・・だが、到着した場合、『信者』たちが総決起するという話だ。相当まずいだろうな」

「・・・王界からの救援は？」

「無理だ。今、信者がいるかどうか洗っているところで、動けて俺と和王ぐらいだ・・・」

「……そうか。あいつらには酷だな」

「？ 人を気遣うなんてお前らしくもない……何かあったのか？
そんなに俺は冷徹なイメージがあるのか？

……少しショックを受ける俺。

「ああ、気にすんなよ。俺にとってのイメージだ。ま、それをふまえても……お前はノフィーネに対して父性的なものを抱いてないか？」

……否定はできない。

「俺はノフィーネに『不老不死』を与えた事に責任を感じていたからな。……そうなのかもしれない」

しかし、父親か……。

様々なものを生み出してきた俺が……母ではなく、父。

「久郎……だったか？ そいつに『娘はやらん』とか言うようになったりしてな」

古王は本当におかしそうに笑いながら言った。

「俺はどんなキャラなんだ……。でも……アイツにはむしろ期待しているんだがな」

ほう、と今の発言が気になったらしい古王。

「何をだ？ 世界の救世をか？」

「それじゃない方だ」

これだけ言えば十分だろ。古王も納得したらしいし。

「ふーむ……。しかしまだ会って一日も経過していないのに、割と進展しているな。レストランも行ってたようだし、クリスマスマジックってやつか？」

かもな、と答えようとした俺だったが、あることに気づく。

「お前……。いつから見えていた？」

「ギクッ！」

あ、口が滑った……。的表情を浮かべた古王。

「あー……。えーと……。あはははは……」

笑ってごまかすな。・・・お前、ノフィーネをつけてたな。

「いや別に、やましい目的とかじゃなく、ただの興味だから・・・」

「仕事が終わったら真っ直ぐ報告に来る。・・・常識だよな・・・？」

俺は無言でプレッシャーをかける。

「・・・すまんした。・・・詫びとして『信者』の鎮圧を和王と共に誠心誠意やります」

わかればよろしい。

「二度とノフィーネをつけるなよ？」

念には念を入れる。じゃないと不安だからな、こいつの場合。

「・・・やっぱ、父親じゃないか・・・」

ん？ 何か言ったか？

「なんにも・・・。それじゃ早速、仕事に取りかかりますかね」
そう言っただけは、立ち去ろうとしたが、ふと振り返り訊いてくる。

「・・・最後に訊いておくが、お前破壊神の一部について、あいつらに言うつもりはあるか？」

これに対して俺は即答する。

「・・・いいや、所詮は一部だ。片付けられるなら、俺たちだけで片付ける。あいつらには時間があるだろう」

その答えを聞いた古王は、面倒そう、でも楽しそう、そんな表情をとった。

「・・・じゃあな、また会えたら会おうぜ。・・・お父さん、よ」

「ん？ お前最後・・・」

キューン

俺が何かを言う前に、飛んで逃げて行ってしまった。

・・・言い逃げか。

どうも、これからもずっと父親ネタを引っ張られるような気がする・・・。

「ま、別にいいが」

しかし・・・、酷な話だ、本当に。

もし破壊神がいなければ・・・なんて、考えても無駄か。

取りあえずは、普通に過ごすとするか。

そんな事を考えながら俺は別荘に戻った。

Cの間「世界観・キャラクター・用語紹介&解説」（前書き）

▼以下注意書きです ▼世界観及びキャラ紹介（解説）です。時間がある方だけお読みください、的内容になっています。 ▼ただの紹介ではつまらないので、久郎とノフィーネの会話を挟んでいます ▼以上注意書きでした。

Cの間「世界観・キャラクター・用語紹介＆解説」

【教えて！ノフィーネ先生】

「さあ、始めました！『命断のクロウ』の解説コーナー、【教えて！ノフィーネ先生】！ 第一回ゲストは、主人公の久郎君です」

ワー、パチパチ。

「どうも・・・、というか、ここどこ？」

「細かいことは気にしない！ さて、久郎君。第一回目のゲストとして、今の感想は？」

「・・・えーと、随分と痛いタイトルだな」

ゴーン！！

「つつー！？なんでタライが？」

「悪いことを言った罰ですよ。これから遠慮なく落としていきますからね」

「・・・本編より随分、元気な気がするんだが・・・」

「それは気のせいですよ。さて、OPトークはこれぐらいにして、本番に行きますよ！ まずは『世界観』から、」

・世界観解説

▼舞台は現代の人間界（地球）。

▼魔術、悪魔、異世界、神など、ファンタジーと呼ばれる物はほとんどある。

▼人々は上記の存在に気がついてはいない。（魔術師やそれに類す

る者を除く)

▼久郎が住む別荘は山の中にあり、街からは離れている。

「・・・まあ、ありがちな設定だよな」

「そうですね。偉大なる先人たちが残した、素晴らしき黄金律・・・とも言えます」

「それじゃ、次へ・・・」

ゴーン!!

「つつー!! またタライが! てかなんで!？」

「久郎君が勝手に進めるからです! ここは僕が進めるコーナーです。それじゃあ次は『キャラクター』です」

・キャラクター解説

(能力や所持品なども)

▼『藤草久郎』

(ふじくさくろう)

人間。男。約16歳。容姿は割といい。

性格は、強引、ギャグ、控えめ、真面目、とコロコロ変わるが、現在、自分のキャラを模索中のようだ。引きこもり生活で、祖父以外と話すことがなかったからだと思われる。

だが、基本は物怖じしない勇敢な性格。

両親はすでに他界しており、祖父の別荘で一人暮らし。12月24日、祖父が事故にあった事を、自分の力のせいだと思い込み、自殺を考え始める。

そのために、悔いは残さないようにしようとして来た街でノフィーネと出会い、自分の運命を大きく変えることとなった。

『命断』の力で周りの人々死傷させた（実際は久郎をかばった、というのが正しく、殺したとは違う）過去を持っているが、割と吹っ切れている。

【能力など】

・護身術ができる程度。身体能力は運動不足がたたって低め。

▼『命断』

（下記用語解説にて）

▼『刹那の延長』

（せつなのえんちょう）

体感時間を魔術的方法で延ばすことによって、思考時間を稼ぐ力。消費魔力は延ばす時間に比例する。最大使用限度は体感時間で一分程度。使用後は数秒使えなくなるが、短時間の場合は連続使用が可能。

▼『縛槍エリクソス』

（ばくそうえりくそす）

黒一色の伝説の槍。神話級の武器。その力は刃と柄に刻まれた赤い魔法紋章から槍の刃がついた鎖を放ち、相手を捕縛する。

放つことができる鎖に限度はなく、過去には千体の悪魔を一度に捕縛したこともある。

本物は既に失われており、久郎が出したものは、バィム武器庫の情報から作ったレプリカである。しかし、その力は本物と比べて、少し低い程度。

「……どこのwork iだ。」

「ごめんなさい……書いたら止まらなくなっちゃったみたいで……この先も割とこんな感じ」

「……はあ、まあ気を取り直して……じゃなかった！ 危ない危ない……。またタライが降ってくるところだった……」

「あ、もう別に久郎君が進めてもいいよ。なんだか僕1人じゃ厳しそうだし。でも、ここは仕切っておくね。・・・それで、久郎君自分の事だけど、どう？」

「ん？ いや大体あってるんじゃないか？ でも、俺の性格って、そんなにコロコロ変わっているか？」

「僕は変わってると思うよ。久郎君、最初は根暗なのかな、思ってたけど結構強引だったし・・・」

「あー、そうなのか。まあ、ずっと引きこもってたんだから加減がわからないんだ、許してくれ。・・・ところで、俺が使った『縛槍エリクソス』だけど、なんか元ネタがあるのか？」

「完全自己制作武器みたいだよ。名前の由来は、現社のテストでの誤答だとか。ちなみに正解は『エリクソン』」

「・・・なんで、そこで『ス』にしたんだか・・・、まあ次に行こう」

▼『ノファイネ』

人間。女。700～1000歳。（外見上は17歳）

栗色の長髪に透き通るほど白い肌。容姿は整っている。

性格は明朗、社交的である。一人称は『僕』だが、特にボーイッシュというわけではない。

久郎に降りかかってきた鉄骨から久郎をかばう、という出会い方をする。

『十字軍』発言から700～1000年前の欧州出身だと思われる。

死にそうなところを創造神に救われたらしい。

【能力など】

・身体能力が高いわけでもなく、強くも弱くもない。

▼『不老不死』

体に起こった変化を元の状態に戻す力。創造神によって深層バィムに刻まれた。

その力は成長（記憶以外）にまで影響を及ぼすため、トレーニングなどをして筋力が上がることがない。ノフィーネはこの力を少し忌み嫌っている

▼『型破』

（かたやぶり）

『小烏丸』（こがらすまる）という種類の刀で、日本刀でありながら、中程まで両刃。斬撃よりも刺突に向いている。

久郎の祖父によると、この刀は『幻刀』で、ある流派の人が使えば特別な力を発揮するという。

「次は僕だね。これは大体合ってるよ。何か質問ある？」

「えーと、それじゃあ・・・なんで一人称が『僕』なんだ？」
「うーん、それは・・・いつの間にか『僕』になってたんだよ。とりあえず深い意味はないよ」

▼『創造神』

（そうぞうしん）

神。男。年齢不詳。（外見上は二十代後半）

性格は明るく、ふざけていることが多い。だが真面目になったときの一言は重い。

人間界や王界を創った張本人。

久郎とは別荘で出会った。そりが若干あわない。

創造神自身が言うには、人間の強い奴に負けるほど、力が弱いらしい。【能力など】

身体能力は不明だが、洞察力はいい。

「・・・ちょっと待て、こいつこれだけか？」

「明らかになっているのはこれだけだよ。実際に力を使って見せた描写はないし」

「うーん・・・、まあ、仕方ないか」

▼『時神』

(ときがみ)

神。女。年齢不詳（外見上は十歳ほど）

性格はわがままで、気が高ぶると、気性が荒くなる。

久郎と出会ったのは、別荘での黒服たちとの戦闘のときで、久郎に召喚された。藤草家にとって、文字通り守り神的存在。そう言ったのには、千年前の藤草効煽が関わっているらしい。茶が好きで、いつも飲んでいる。

カタカナは苦手な様子。

【能力など】

身体能力は未知数。だが、姿を消したり、人を操ったりと、魔術的面ではかなりのもの。

▼『時止め』など

時神が使う魔術。相手の動きを止める。詳細は不明。お札を張ったりしても効果があった。

「別名、茶神でも良いんじゃないか？」

「駄目ですよ、久郎君。あだ名を増やすと、さらにややこしくなるよ」

「それもそうだな。・・・こいつは、過去に俺の祖先と、何かあったみたいだが・・・それは、本編で語られるのか？」

「あ、実は次で語られるよ」

「・・・それ言っているのか？」

「あ・・・き、気にしない気にしない。次に行ってみよう！」

▼『メイナ』

半霊アンドロイド。女。生後1日以内。

ノフィーネと似た外見だが、髪は薄茶色でショートカット。その他微妙にノフィーネと違う。

久郎が『命断』の力で、無意識に創り出した存在。

『命断』の力を説明し、サポートすることが仕事。

久郎のことを『ご主人様』と呼ぶ。

【半霊アンドロイド】とは

魔力で作られた物で、情報状態と実体状態の二つの状態がある。

情報状態では、実体がなく、人の脳などに存在できる。

実体状態では、実体があり、普通のアンドロイドとほぼ同じになる。

魔力でできているため形を自由自在に変えることができる。

【能力など】

詳細は不明。『命断』の力の補助をする事ができる。

「あれ？ この娘は誰ですか？」

「ああ、こいつは命断ナビ、略してメイナだ」

「ふーん・・・、ところでこれによると・・・無意識に作り出したんだっけ？」

「ん、ああ。そうらしいが・・・」

「つまり、久郎君は僕に『ご主人様』と呼ばせて、ご奉仕されたかったわけか・・・」

「え？ いや、それは違・・・」

「し・か・も！ 文章上じゃわからないけど、僕をベースにしたわりには、ある特定部位が明らかに僕より豊かなんだけど・・・、どういうことかなあ・・・？」

「え、いや・・・そうなのか？ まあ、それは確かにそうなのかもしれないが、それは俺の意志じゃ・・・」

「問答無用！！」

ゴーン

「り、理不尽・・・だ」

▼『藤草重蔵』

（ふじくさじゅうぞう）

久郎の祖父。久郎のことを溺愛している節がある。 現在、意識不明の状態で病院で治療を受けている。

「久郎くん、いつまでも寝てないで、ちゃんと手伝ってねー」

「・・・誰のせいだ、誰の」

「ふーん・・・またタライが欲しいんだ」

ムクツ、シュタツ！

「わかればよろしい」

「・・・S・・・だな」

「何か言った？」

「いや何も。てか、ここは、じいさんについての項だよな」

「うん、そうだけど。久郎君のお爺さんってどんな人？」 「そうだな・・・、とにかくいい人だな。自分が気に入った事や物や人には

金を惜しみなくかけるような人だ。だからあのレストランにも投資したんだろうし。・・・じいさん、大丈夫かな。そろそろ、見舞いに行くか・・・」

▼『藤草効煽』

（ふじくさがいせん） 千年ほど前の人物。久郎の祖先。

『刹那の延長』の初代開発者で、久郎と同じような力を持っていると思われる。

時神とは、昔何かあったようだ。

「時神の話を聞いてるだけじゃ、どんな奴かは、よくわからないな」
「でも、時神様にとっての彼は・・・」

▼『古王』

（こおう）

王。男。年齢不詳。（外見上は20歳前後）

髪は紅と黄がランダムに混ざった長くも短くもない具合。顔立ちは端正。長身で防塵用のマントを着ている。

王界の住人である王の一人。

創造神とは知り合いのようで、打倒破壊神に協力を頼まれている。

能力

▼不明

「だれだ？」

「えーと、神様の知り合いみたいだけど・・・あまり機能しないキ

ヤラみたい・・・この作品では」

「なんか無駄に意味深だな・・・『王』については、下記を参照してくれ」

「それでは、用語解説へと移ります」

・用語解説

▼『バイオアム』

(略して『バイム』)

世界がその存在を維持するためのプログラム。 正式名称は、

Basic Intelligence
Of the World And
Magic (世界と魔術の基礎情報)

浅層、中層、深層に別れており、それぞれが違う用途のために創られている。

イメージとしては、パソコンのプログラムと、それを記録するメモリーといった感じ。

浅層バイムは、簡単な呪文や魔法陣や動作によって、使うことができる。パソコンで言うならマウスでできる簡単な操作。使える力はお役立ち能力程度。

中層バイムは、魔力と魔術知識を使わなければ発動できない。パソコンで言うなら、専門用語を知っていないとできない操作。使える力はやや強力な魔術。

深層バイムは、人間が使うことができない。この世界の仕組み（法則や常識）が刻まれている。パソコンで言うなら、正規の方法ではマウスやキーボードで操作のしようがないプログラム。

【焼き切れるについて】

バイオアムは、使いすぎた回路のように、よく使われると焼き切れる事がある。焼き切れやすいのは浅層バイムで、逆にほとんど焼き切れないのは深層バイム。（ただし浅層、中層バイムは短時間で

自動修復されるため。割と問題がない）しかし、深層バイム内のバイオアム修復機能が焼き切れてしまうと、二度と修復されなくなる。詳しくは『王界』へ。

「長いし複雑だな。全然ライトじゃないぞ」

「まあ、これはあくまで、細かいところまで説明したら、的確なものだから、大体こんな感じかな？　ぐらいの理解で十分だよ」

▼『命断』

深層バイムに刻まれし力。

作品中では色々言われているが、一言で説明すると『この世界でできることを何でも実行できる』力。そのため、運命を断つという名をつけられた。

仕組みは『知覚』『判断』『演算』『実行』の四行程に分かれていて、要約すると、世界を監視して、望ましくない事態が起こった場合に、最適な解決方法を探して、実行するプログラム。

人間界に刻まれたものは試験用で、『知覚』と『判断』が出来ないという動作不良を起こしている。

なぜかは分からないが、久郎が生まれながらにして、この力の『知覚』と『判断』を担える、アクセス能力を持っていたため。現在、久郎専用の力になっている。

「わかりやすいように、努めてみました」

「メイナの存在も付け加えるべきだったかな。まあ、あいつのことはキャラ紹介でふれているから、別にいいか」

「・・・。」

ゴーン！

「こ、これは・・・理不尽だろ・・・」

▼『バイム武器庫』

中層バイムに刻まれていて、神話級武器の情報を管理している。
ここの情報を引き出すことで、魔力で数多の武器が使用可能。

「『縛槍エリクソス』もここから引き出してきたものだな」
「神様によると、他にも色々あるそうだよ。草薙の剣とか、グングニールとか・・・」

▼『バイム魔術』

中層バイムの力を発動させ、使用する魔術の名称。

「僕は魔術とは認めないよ！」
「そういや、なんでこだわってるんだ？」
「え・・・、なんとなく」
「・・・さいですか」

▼『王』

『王界』と呼ばれる異世界に住む異世界人のことを『王』と呼ぶ。
容姿は人間と同じだが、魔術的および身体能力的には、人間より優れている。老いることがなく、寿命がない。
その他不明。

▼『王界』

『王』の住む世界。かつては人間界のように緑と青に包まれていたが、今では灰色のぬかるんだ砂漠が広がっている。そのため、『王』たちはシエルターに覆われた都市の中で暮らしている。

こうなった原因は、かつての大戦争によるもの。

バイム魔術を過度に使用したことによって、中層バイムが焼き切れ、さらに、無理に発動しようと大量の魔力を注ぎ込んだため、深層バイムにも飛び火。結果、深層バイム内の自然環境維持システムや、循環システム、数多の法則が焼き切れ、現在に至る。バイオーム修復機能が、予備やバックアップごと焼き切れたので、既にこの環境を元に戻すことは不可能。

「・・・異世界人『王』と、異世界『王界』についての最後の項だったが、ここまで詳しく書く必要があったのか？ 本編には関係ないような・・・」

「まあ、これも止まらなくなった感じで・・・。世界観を深める目的があった、ということにしておこう。・・・でも、この物語じゃなければ・・・」

「ん、今何か言ったか？」

「え？ 何も言っていないよ。気のせい気のせい」

「・・・そうなのか？」

キーン、コーン、カーン、コーン？ 「・・・今、チャイムが疑問文だったんだが・・・」

「さらっと無視して・・・さて、いよいよお別れの時間となってしまいました。どうでしたか？ 今回の話は、『命断のクロウ』を

読むにあたっの、手助けや内容を深める役割を担えていたらいい
なと思っています」

「あ、最後にちょっといいか？　このタイトルに『CESTGD
F』ってのがあるが・・・、なんなんだこれ？」

「ああ、これはね・・・シリーズタイトルなんだよ。意味は秘密。

『命断のクロウ』が終わった後も、同じ世界観の物語が書かれる予
定でね、生意気にも2つの物語を同時進行する予定。

・・・ま、このペースじゃ、いつになるか怪しいけど」

「ま、頑張ってもらおう。それじゃあ、これまでお付き合いしてく
れた方々、ありがとうございました」

「・・・あ、最後締められた・・・。。。。。」

ゴーン！！！！

「・・・そんなオチだろうと思ったよ・・・ガクッ」

Cの間「世界観・キャラクター・用語紹介&解説」(後書き)

いかがだったでしょうか。なにやら設定資料集みたいになって、全然紹介になっていなかったかもしれませんが、少しでも役に立てば幸いです。(お察しの通り、設定好きです)

Cの11話「残知回想」

これは数分前のこと。

「はぁ・・・」

僕は目の前に広がる惨状を見て、ため息一つ。

「・・・何でこんなことに？」

現状・・・、久郎君の部屋へ見に行ったら、ベッドにミイラ男みたいな久郎が、横たわっていて、

台所へ行ったら、あのおぞましい、料理（笑）がそのままの形で残っていた。

「ん？ 怪我人にはこう、ぐるぐるっ、とやるのではないのか？」

時神様・・・、それは古代の、それもエジプトの、さらに死人に對してするものです。

「とりあえずここは僕がやりますから、時神様は黒服たちをどこかへ持って行ってください」

実は放置したままだったりする。

「了解じゃ」

時神様はプカプカと自身と黒服を浮かせて、どこかへと飛んで行った。

次に僕は神様に視線を向ける。

「えと次は・・・、神様にはその料理（爆笑）を片づけるよう言いましたか？」

「爆笑・・・！？ いやしかし、・・・トラウマを抱えてしまっていて・・・」

「いやしかし、じゃないです。あの料理（笑過泣）は、神様が創った物ですよ。ちゃんときっちり処分してください」

「笑い過ぎて泣く！？ ・・・まるで必殺技みたいだな。ふむ、料理名はそれにしようか」

「バカなこと言ってないで、早くどこかに持って行ってください。」

異世界で妥協します」

「一ミリたりとも妥協されてない！？ 異世界でおま・・・」

「・・・何か文句でも？」

キラーン。

さつき持ってきたあの刀・・・『型破』をちらつかせる。

「なんで持ってるんだ・・・、いやなんでもない・・・行ってくる」

キュイーン。

神様は激しい嘔吐感と戦いながらもあの笑過泣を手にとって、魔法陣に消えていった。

・・・。。。

「静かだなあ・・・。あ、久郎君の様子を見に行かないと・・・」

C

そして今に至ります。

「はあ・・・落ち着くなあ」

今は午前10時。時神様じゃないけれど、優雅なティータイムの時間。

「おいしいなあ・・・この紅茶・・・」

さすがは久郎君の家。緑茶だけではなく、紅茶までもが最高級。自然と頬がゆるるんでしまう。

「いいなあ・・・この時間」

台所にあったものを勝手に入れて、リビングのソファに座って、昼間のテレビを見る。

「最高だなあ・・・」

「ただいま」

チッ!

「・・・今、舌打ちが・・・」

「気のせい気のせいです。それより、ちゃんと持って行きましたか？」

「ああ、とりあえず閻魔界に持って行った」

「閻魔界に？」

閻魔界とは、ここらいつたいの異世界間のトラブルを裁く大きな裁判所『閻魔の間』と、罪人を閉じ込める刑務所『地獄』の二つで構成される世界。

文字通りそこには閻魔様が居て、鬼さんたちも働いています。

案外気さくでいい人たちです。一度しか会ったことないけど。

「ああ、差し入れとして持って行ってみたら、なぜか喜ばれた」

「え？ 本当に？」

「レシピを教えてほしいとまで言われた」

「・・・どんな五感をしているんですか閻魔界の方々」

あの笑過泣が食卓に並んで、それを皆で笑いながら食べている・・・。

だめだ・・・想像するだけで、だめだ・・・。

「ん？ そういえば時神は？」

「え？ そういえばまだ来てませんね」

神様が気を利かせたのか、違う話題を振ってくれましたが・・・確かに。

異世界まで行っていた神様より遅いなんて・・・、あの黒服たちは大丈夫なんだろうか・・・？

襲われたとは言え、さすがに心配になってくる。

「まあ、アイツならそのうち来るだろう。ところで久郎の様子は？」

「どこにも深刻な怪我はないみたいで・・・今は寝てます」

まあ、寝言で『タライが・・・タライが・・・』とか言ってるなされてたけど、なぜか楽しい気分になったのでそのままにしておいた。

「そうか……。さて、俺はこれから少し出かける」
「え、いいですけど……。どこに行くんですか？」
「秘密、だ！」

キューーン！

神様は再び魔法陣を出現させ、消えて行った。

「秘密って……。もう。行き先ぐらい告げるものだよね」

……。まあ、そんなことを言っても、聞いてほしい張本人がもういないんだけど。

……。また静かになったなあ。

……。続きをやりますか。

C

久郎君の毛布をかぶせ直したり、おしぼりを額にかぶせ直したり、その他諸々をしていたら11時になっていた。

「そろそろご飯作らなきゃなあ……」

とか、リビングで煎餅を食べながら思ってたとき。
プカプカ。

む、この擬音語は……。、

「ただいま、じゃ」

やっぱり時神様か。

「あ、お帰りなさい。どこ行ってたんですか？」

「うむ。ちよつと閻魔界までの」

そう言って、浮かんでいた時神様は、どこからか湯のみを取り出してソファーに座った。

というか、あれ？ 時神様も？

「何してたんです？ って、まさか黒服たちを……」

「ん？ そりゃそうじゃろ。あそこは罪人を裁くところじゃからの」
「いやいや、罪人は罪人でも、異世界間級の犯罪者を裁くところですから！」

・・・やっぱりこの神様、ちよつと感覚がズレてる。

「どうかしたかの？」

「・・・いや、何でもないです。それより、どうなったんですか？
黒服たち」

「うむ、それがの、初めは鬼たちがなにやら戸惑っておったんじやが、閻魔が『新しい地獄』の実験台に使おうと言っておったな」

実験台・・・と言えば、『地獄』では、度々New地獄が創られる。

変わらぬ日々に変化がほしいってことで、毎回閻魔様と鬼さんたちがアイデアを出し合って決めているらしい。

ちなみに、見学料五百円のツアーがあります。追加料金を払えば地獄体験も可能だそうです。・・・体験したくないけど。

「へえー、どんな地獄なんですか？」

「それがの、新しい地獄を考える会議が停滞してたところに持ち込まれた、あいであ、らしくての、名前は確か・・・笑過泣地獄じゃったかの」

え・・・？

「出てきた黒服たちは、もはや人とは呼べない有り様になっておった。閻魔や鬼どもも震え上がっておったわ・・・一体、なにがあったのやら・・・」

・・・拝啓、神様、あなたが創った笑過泣が役に立っているようです。

って、あれ？

「・・・ということは、神様が行った後に閻魔界に行っただすよね。何してたんですか？」

「なんじや、創造神も行っておったのか。・・・妾は地獄茶を貰いに行っておった。昔、地獄にうまい茶があると聞いたことがあった

のじゃが、今まで行く機会がなかったのの」
今、飲んでいるのがその地獄茶なのかな、確かに独特・・・というか毒々しいにおいがする。

ズズズズ。

「・・・美味じゃ」

人もお茶も見かけによらないな、と学んだ僕であった。

「・・・おお、そういえば」

と、時神様が唐突に切り出す。

「久郎はどうしておる？」

「え、久郎君ですか？ まだ、寝てますよ」

いやもう、ぐっすりと。今日中に目を覚ますのか疑わしいくらいに。

「ふむ、そうか・・・。少し見に行こうかの」

と言って、プカプカと久郎君の部屋に向かう時神様。

僕もその後を追ってリビングを出た。

C

「・・・ぐっすり寝ておるの。どれ、イタヅラでも・・・」

「ダメです。相手は一応、怪我人ですよ」

と言いつつも。人の寝顔を見ると、ついついイタヅラをしたくなるのは何でだろう？

それに、久郎君の寝顔は意外にあどけなく、まるで子供みたい・・・。

「そして僕は、寝ている久郎の顔に自分の顔を近づけ・・・」

「な、ちょっ！？」 勝手に僕が言ったように言わないでください！
！」

「そして二人は・・・キャー！」

「そんなキャラでしたっけ!？」

「カラカラカラ! ノフィーネはからかいがあるの
ムカツ!

「………。」

「……怒ったかの？」

時神様が顔をのぞき込んでくる。

プイッ。

すかさず反対方向を向く。

「………。」

「……すまんかった、から機嫌を直しておくれ、の?
プイッ。

「……むう、無視というのは存外キツいの……」

そろそろ時神様が本気でしょげてきたので、少しだけしゃべるこ
とにする。

「……大体、久郎君がこうなったのは誰のせいだと思ってるんで
すか……、やりすぎですよ……」

「……むう、それは本当にすまぬ。これほど長くこっちにいたの
は千年ぶりじゃったから……つい、の」

……千年ぶり?

「……それってどういう……、たびたび召喚はされてたんじゃ
ないんですか?」

「召喚はされていたのじゃが、用が済んだらすぐに封印、使われた
らすぐに封印、そんな状態じゃった……。長くて三時間程度かの。
久郎は封印方法を知らんようじゃから、妾はこうしておれるのじが
な。……妾がこのように人と話をするのは、効煽以来じゃ……」

「

……すこし、しんみりとした雰囲気の流れる。

これは、話を誤魔化すために時神様が意図してやったことなのか、
それとも……自然と口から出てきてしまう……悲しい過去なの
か。

「・・・なんじゃ、結局気まずいままではないか。むう・・・、どうしたのか・・・」

時神様は、自分から作り出しておいて、こういう空気が苦手のようだ。

だけど、こんな空気でもなければ、きけないこともある。

思い切ってきいてみた。

「・・・時神様、・・・その効煽さんって、どんな人だったんですか？」

「むっ・・・」

言いよどむ時神様。この空気の責任を感じているものの、このことを話していいのか、迷っている顔だ。少し・・・いや結構ひどいことを聞いただろうか。

やがて、時神様は口を開いた。

「・・・もし妾が話せば・・・許してくれるかの？ 機嫌を直してくれるかの？」

？ 機嫌ならとくに直ってる気がする。

もしかしたら、僕が怒っているからこんな空気が流れているのだと、思っているのかもしれない。

「・・・いいですよ。許しますし機嫌も直します」

そう僕が言ったら、時神様の顔がちょっと晴れた。

そしてほんのちよっと曇った。

「・・・それじゃあ、話そうかの。身の上話を話すのはこれで二度目じゃ。そして二度言う気はないからの、よく聞いておれよ」

そう言って時神様は、重く、固い口を、ゆっくり開いた。

C

昔、夢に捕らわれたことがある。

・・・と言ったら、不思議現象に巻き込まれたように聞こえるが、ただの目覚めにくかった夢なだけだ。

ただその夢の目覚めにくさは異常なレベルで、まぶたを必死に開こうとしても開かないし、頬をつねろうとした右手は動いている気がしない。

ま、そのうち覚めるんだが、とにかく夢に閉じこめられるって感覚があった。・・・そして今も、俺はその状態にあった。

「・・・るかの？」

ん？ 時神の声か？

「・・・いですよ。・・・します。機・・・も・・・」

今度はノフィーネか。何なんだ？

「・・・話・・・身の上話を・・・のはこれ・・・目じゃ。そして・・・二度と言・・・ない・・・よく・・・れよ」

なんだ？ 断片的でよく聞き取れない・・・。

『どうやら、時神様がノフィーネ様に、千年前のことをお話するようです』

メイナ・・・か。

『はい、そうですよご主人様』

ここは俺の夢の中だろう？

『はい。ですけど、私は今、ご主人様の脳内に存在してます。ですから半覚醒状態であるレム睡眠時には会話することが可能です』

・・・なら、さっきから聞こえてくる声は？

『寝ているご主人様の側での会話です。レム睡眠時なので薄々聞こえているのだと思います』

そうか・・・、こんなことを聞くのは変だが・・・、俺は起きられるか？

『・・・無理だと思います。どうかしましたか？』

・・・いや、今から時神がする話が気になってな。

なぜか分からないが・・・この話を聞き流してはいけないような気がした。

『・・・分かりました。命断を使いましょう、ご主人様』

『命断』で俺を無理やり起こすのか？

『いえ、そんな事をしたら、きっとこの会話は止まってしまおう。ですから、ご主人様には夢を見てもらいます』

夢？

『はい。耳から入ってくる情報を元に、命断によって世界から引き出した過去の情報を映像化し、それを夢としてご主人様に見てもらいます』

・・・よく分からないが。とりあえず、知ることができるとだな。『はい。だから強く願ってください。ご主人様の望みを』

・・・と言われても、寝ている最中だから意識がボーっとしてて、強く願うなんて、とても・・・。

『え？ ですがご主人様。たった今、命断が起動しましたよ？ 強い願いも受理しました』

・・・どゆこと？

『あ、もしかしたら・・・。ご主人様が私をお創りになった時も寝ている時でしたし・・・。ご主人様は寝ている時に純粹になって強い願いを自然と発せられるのかもしれませんが。まるで赤ん坊のように』

最後の一文はケンカを売っているのか・・・？

『あ、いえ、そんなつもりでは・・・ただ純粹さを強調したかっただけでして・・・』

ああ、わかったわかった。別に気にしてはいない。

それより、早く頼む。

『了解です。とはいえ、もうすでに準備は終了してますが、では行きますよ。『命断』起動・・・『残知回想』！』

メイナが意味不明な四文字熟語を叫んだ瞬間。

俺の意識は深い闇の中に引き込まれていった・・・。

Cの12話「昔話」

時神様は、その重たい口から言葉を、絞り出すように話し始めました。

「・・・妾が効煽と出会ったのは、妾がある屋敷にばらさいと・・・もとい、守り神として君臨していた時じゃった・・・」

「・・・まじめな話じゃなかったんですか？」

C

春、極めて快晴。

「くっ・・・ふわぁああ・・・」

寝殿造りの平安屋敷の庭の桜の木の下、寝ながら大あくびをする者一人。

明らかにこの屋敷の主ではないとわかる質素な武士の衣服。

頭には烏帽子えぼしをかぶっておらず、その短く切った黒髪はボサボサで品のかけらもない。

「・・・平和だねえ」

・・・本来は、その平和を守る役目を担っているはずの彼なのだが・・・。

ものすごく平和を堪能してたりする。

「おい、効煽！　ちゃんと働かんか！」

屋敷の方からの怒鳴り声。

「・・・おお、榊原さかきばらの旦那」　その声の主は効煽の雇い主の榊原氏。そしてここは榊原氏の屋敷。

「旦那様もどうです？　ここいらで昼寝でも・・・」

「するか！　この大馬鹿者が！　見張り番はどうした！」

「見ての通り、さぼってますが？　・・・こんなに春が暖かいのだから・・・仕方のない事ですよ・・・ふわぁ・・・」

大きなあくびを一発し、桜の木の根に頭を寝かせ、目を閉じる。

「だから寝るな！ さっさと起きるか！」

「……えー、だりい……」

「……お前は俺に仕えてるんだよな……、だんだん分からなくなってきたぞ……」

「あー、ご心配なく。俺はきっちり旦那に仕えてますよ」

「どの口がそれを言う！？ 俺はお前に三食と寝床をあたえ、給金をやっているだろ！？」

「そうですね」

「だったら働かんか！ 解雇するぞ！」

榊原氏は強い口調で本気を見せるが、一方の効煽は全く動じる様子を見せない。

それどころか、口元に、ニヤツと卑しい笑みを浮かべている。

「いいんですか、旦那様。俺を辞めさせたら、妖魔達にこの屋敷占領されますよ？」

「うぐっ……、いつもいつもそうやって言い訳を……」

余裕たっぷりの声に、声を詰まらせる榊原氏。

「まあまあ、俺は強いですから……やるときゃ、やりますよ」

そしてそれが本当のことだから困る。

この世には、妖怪や鬼といった類の物がゴマンと存在し、それらの中には人間を好んで襲うものもある。そんな妖魔たちから身を守るために、名のある貴族などは、対魔武士や陰陽師を雇うわけだが、その武士もそこらの奴らでは駄目である。

対魔武士には霊体状態の妖魔が見え、さらにそれらに対する対抗策を持っていることが求められる。

そして、この藤草効煽は、対魔武士の中でも強い部類に入っていた。

「……しかし、いくら俺がそれを認めた所で、不満がっている奴もいるからな……」

「ん？ 誰です？」

「決まっておろう。お前の同僚だ」

「ああ・・・」

榊原氏の屋敷には他に普通の武士が数人雇われている。

世間では対魔武士も武士も、結局は同じものとして扱われているため、対魔武士が見張りをすることも、武士が具現化した妖魔と戦うこともよくある。

なのに、効煽は武士としての仕事を全くしないのだから、不満がでるのは当然のことだろう。

「そんなもの・・・無視すればいいですよ。気にしてもしょうがない」

「・・・俺は、お前がきっちり働くことが一番の解決方法だと思うんだがな・・・」

要するに榊原氏は効煽に働いて欲しいわけで。

だが対する効煽には全くやる気が見えない。

「うーむ・・・」

しばしの間、考え込む榊原氏・・・。

それを見ていた効煽が、そろそろ起きようかどうか、と考え始めるぐらいの時間をかけて、榊原氏は言った。

「そうだ・・・、こういうのはどうだ効煽。お前が他の武士たちと試合をするというのは」

「む・・・？」

効煽にとっても予想外の展開だったのか、不思議そうに眉をひそめる。

その様子を榊原氏は気にせず話を続ける。

「それでいいだろう？ 勝てば他のやつらにも実力を分からせることができる。負ければ、俺は何の躊躇もなくお前を解雇できる」

「・・・俺に得がないじゃないですか」

不満そうに目を細める効煽。

この男は、面倒なことや得にならないことを嫌う。「まあ、そう言うな。勝ったら、毎日のおかずを一品増やしてやろう」

ガバッ！

「やらせていただきます」　そして、少しでも自分の得になることを好む。

「ハ、ハハハ・・・現金なやつめ。それじゃあ他の奴らに話をつけてくるから、木刀を持って待っておれ」

そう言って榊原氏は、屋敷の門へと向かっていった。

「試合か・・・面倒だが、おかず一品追加のためだ、矢無を得まい・・・」

残された効煽は一人、どんなおかずが増えるのだろうと、期待に胸を膨らませていた。

が、ふと気づく。

「・・・いや、おかしいな。榊原の旦那が、こんなに気前が良いはずはない・・・」

今までさんざんサボってきたが、そんな条件が出ることは皆無だった。

埒があかないから・・・ということも考えられるが、

「何か裏があるな・・・」

効煽はそう怪しんでいた。

ところ変わって、屋敷の中にある一室。

「・・・というわけで、効煽とほかの武士との試合を取り付けて参りました」

部屋の中には榊原氏、そして・・・

「うむ。その効煽とやらが、妾の守り手に相応しいかどうか・・・、見させてもらおうでしょうかの。カラカラカラ！」

榊原氏が頭を下げた先には、着物姿の子供・・・時神の姿があった。

「守り手？ そんな人が欲しかったんですか？」

時神様がお茶を飲み、話の区切りがついた所できいてみる。

「そうじゃの・・・、あの頃の妾は神に成り立てで、人間相手に虚勢を張るので、精一杯じゃったからの。あの頃は妖魔たちの全盛期、妾が神として在るには、それを探すしかなかったんじゃ。・・・それで、いくつかの屋敷を妖魔から身を守る事も兼ねて転々としていたら、あの屋敷に着いた、という訳じゃ」

意外な事実を聞いてしまった。

「そうだったんですか？ ・・・ところで、神様に成り立てって、神様って生まれた時から神様じゃないんですか？」

ずっと僕はそう思いこんできたけど、どうやら違うみたいです。

「いや、神はなにも生まれた時から神なわけではないのじゃ。神と云うのは、ある一定基準を越えると貰える称号のようなものでな、なんだかんだあった末に神になれるんじゃ」

む、途中かなり省かれた気がする。いや、絶対省かれた。

「その、なんだかんだを教えてくださいよ」

僕は、時神様が説明をめんどくさがって言わないものと思っけいたが、時神様は困った顔をして言った。

「いや、それがの。・・・何者かに神の称号を貰ったような気はするのじゃが、どうもその記憶だけはあやふやでの、よく覚えておらんのじゃ。・・・それは、まるでその何者かの正体を隠すかのようじゃ」

時神様は目を閉じて思案をし始めた。その何者かは誰なのか、なぜその存在を隠すかのように記憶から抜けているのか。

だが、それほど事を今になって思い出せるはずが無く。

「・・・話を戻すかの。それで、効煽の試合を妾は影から見ることとなった」

そして、何の脈絡もなしに、話の続きを話し始めた時神様。
それはまるで、正体不明への恐怖を誤魔化すかのようでした。

C

数刻の後、榊原氏の屋敷の庭には簡単な試合場が整えられた。
と言っても、ただ土の上に石を置いて四角を作っただけだが。

その四角の一边には、木刀を持ち、いつも通りの飄々とした様子の効煽。

そして、対辺にはこの屋敷に仕えている四人の武士。いずれも若く、表情には若干緊張の色が見える。

「さて、出揃ったな。では始めよう」

頃合いを見計らって、榊原氏が開始の合図をする。「使用武器は木刀のみ。魔術の類の使用は禁止。試合は一本勝負。勝敗は有効な一撃が入ったところで決する。効煽が負けない限りは四連戦となる。いいな？ では始めろ」

試合場に入る若い一人の武士。

しかし、対する効煽は動く様子がない。

「どうした効煽？ 何かあったのか？」

「うーむ・・・」

少し考え込んだ様子の効煽が言う。

「いや、・・・なあ、一人一人やるのは正直面倒だからさ、四人まとめてつてのはどうだ？」

『何！？』

これには、武士たちも声を荒げずにはいられなかった。

「藤草！ 我らを愚弄しているのか！？」

「対魔武士だかんだか知らないが、調子に乗るな！？」

普段が普段だけに、一斉に効煽に浴びせられる怒りの言葉。
だが対する効煽はまた飄々と、

「まあ待てよ。愚弄なんかしてもいないし、調子に乗ってもいない。

・・・ただ、おまえ等の実力を正当評価して、四人がかりでやっと互角になる、ってだけだ」

「・・・ッ！ 貴様ア！」

わざとなのか、そうではないのか、なんにせよ。効煽の言葉は確実に武士たちの逆鱗に触れていた。

これには、さすがの榊原氏も忠告をせざるを得ない。

「お、おい効煽・・・。お前の妖魔退治の腕が相当なものだということは分かっているが、今は対人戦だぞ。・・・彼らも修練を積んだ強者たち。さすがのお前でも・・・」

「それでも・・・俺には勝てん！！」

不適な笑みを浮かべ、はっきり断言する効煽。

そのとき、武士の内の一人が動いた。

「もう、我慢ならん！ そこまで我らを愚弄するとは、ここで討たれても文句はあるまいなア！ イイイヤアアア！！」

腰に差した木刀を抜くと同時、上段より、叫びながら効煽に切りかかる。

「うおっと！ 刺激しすぎたか？」

たまらず、後ろに飛びすさってかわす効煽。

「まだまだア！」

武士は振り下ろした木刀を返して追撃。

ヒュッ、ヒュッ、ヒュッ。

武士の猛撃を、木刀を抜かずにかわしつつづける効煽だったが・・・。

ドンッ！

「うおっ！？ か、壁！？」

いつの間にやら壁際まで追い詰められていた。

「フンッ、死ネエエ!!」

勢いよく踏み込まれた突きが、効煽の体に迫り来る。

「うわっ、マズイ、やられる・・・!？」

・・・。

・・・クッ、クククッ。

「なんてな」

「・・・!？」

効煽は左手で逆手に木刀を抜き、突き出された木刀に当てる。

カッ！ ドスッ！

そうやって木刀の進路を変えつつ、その勢いを利用して体を一回転させ、勢いの乗った木刀による一撃を、逆手のまま相手の喉に打ち込んだ。

その間、たったの一瞬。「・・・!？ ガハッ！」

「なっ・・・!」

昏倒し、倒れ込む一人の武士、啞然とする他の三人の武士。

「よし、まずは一人だな。・・・これでお前らの勝率は三割程度まで下がったわけだ」

「お、おい、今のは魔術か何か使っているんじゃないか？」

速すぎてよく見えなかった榊原氏の目にはそう映ったかもしれないが、

「魔術なんか使ってませんよ。しいて言うなら戦闘術。師匠はこれを『独楽廻し』と呼んでいて、文字通り回転による威力の増強を最

大限に生かす体の動かし方です」

だから、逆手で打ち込んだ一撃に、相手を気絶させるほどの威力が宿った。

「逆手なんて邪道だが、不意打ちには使えなくもない。・・・さて、次は三人がかりで来たらどうだ？」

木刀を順手に持ち直し、それを三人に向け、挑発する。

だが、三人は各々の木刀は抜くものの、先の事もあり動けずにいた。

「・・・来ないのか？ 大体、三人が固まってそこにいる時点で三対一の意味がないだろ」

効煽に言われて、慌てて囲むように陣形を変える。その光景はまさに滑稽。「・・・。」

「・・・とは言え、かかってこないのは変わり無しか」

うまく連携を取れていないのか、それとも武士の本能から、うかつに動けばやられる、とか思っているのだろうか。

「む・・・」

案外動かない方が相手は攻めにくいものだ。

逃げ腰では無い分、正面からどんな打ち込みをしようとも大抵は防がれる。さらに下手に動けば相手に隙をさらす事に繋がる。

・・・はずだが、

ニヤツ。

「先手必勝オ！」

「なっ・・・」

両手で持った木刀を脇に構えつつ、効煽は一人の武士に向かって突撃。だが、その攻撃はとても単調。

その武士にたやすく見切られ、振り上げられるであろう木刀を受け止め、さらに攻撃に繋げられるように木刀が動く。

そして、案の定な軌道で木刀が振り上げられ、その刹那、武士の顔には勝利を確信した笑みが浮かぶ。

が、しかし、

いつまでたっても、木刀を受け止めるような衝撃はこない。
それというのは、振り上げられた木刀は、あろうことかその勢いのまま宙に放り投げられたからであって、

ズシヤアアアア！

「なっ・・・！？」

さらに効煽本人は、低くスライディングで武士の横を滑り抜ける。
武士がその有り得ない挙動を取った、上下二つの物体に対応できず、

効煽には回り込まれ、丁度、上げた手に吸い寄せられるように木刀が効煽の手の中に収まって、

バコンッ！

武士が振り返ると同時、その顔面に強烈な一撃が入った。

「・・・！」

武士は声もあげられずそのまま地面に伏した。

「・・・っと、これで勝率は残り二割未満ってところか」
手のひらで、パンパン、と袴についた土を払う効煽。

「い、今のは何だ効煽？」

「またもや、なにが起こったのかよく理解できていない榊原氏がきく。」

「え？ ああ。今のに特に技名は無いですよ。ただの邪道技です。・・・さて、まだやる気か？」

残った武士二人に向けて言う効煽。

「・・・。」

「旦那様も、もういいんじゃないですか？ これで・・・」
と、その時、

ヒュゴオオ!!

屋敷の方から速い何かが放たれた・・・!

「!? 『刹那の延長』!」

身の危険を感じ、とっさに『刹那の延長』を発動。

常人では反応できないほどの速さの何か・・・短槍を、木刀で弾こうとしたが、軌道変更の代償に木刀は小枝のように容易く折れ碎けた。

それを見た武士二人はなにが起こったかわからずに完全に呆けていた。

「・・・榊原の旦那、何ですか、あれ」

何かが放たれた方を目を細めてにらみながら、効煽が今まで見えなかった警戒の表情を浮かべる。

「あ、あわわわ。時神様! いかがなされました」

慌てた様子の榊原氏。どうやら、何か知っているらしいが、

「神・・・?」

「その通りじゃ効煽」

「・・・!!」

屋敷から、1人の着物を着た少女が現れる。

身構える効煽。だが、武器であったはずの木刀は既に碎けてない。「カラカラカラ、そう身構えずとも良い。さっきのはほんの挨拶じや」

挨拶? 下手すれば頭蓋が碎けるような一撃がか?

「時に榊原。妾はこの男が気に入ったぞ。最後の妾の攻撃も防いだしの」

「そ、それじゃあ・・・」

榊原氏が期待に満ちた表情を浮かべる。

「うむ。妾の守り人は、こやつに決定じゃ」

「あ、ありがとうございます！」

・・・？

「・・・は？ ええと、・・・どゆこと？」

状況がうまく呑み込めない効煽。

「あー、黙ってて悪かったが、実は・・・かくかくしかじか」
榊原氏は効煽に事のあらましを説明する。

「・・・じゃあ何か。旦那様は俺に内緒でそんな約束を？」

「仕方ないだろ？ 守り人を引き受ける代わりに、この屋敷の守り神になってくれるって言うんだ」

「・・・俺には寄生されるだけにしか思えないんだが・・・」
何かしらを感じ取った効煽がつっこんだ。

「まあ、そういうことじゃよろしく頼むぞ、効煽」

「お前は今まで通り、通常勤務はしなくてもよい。その代わりに、時神様の身の回りの世話をしてもらうぞ」

「うげえ」

本当に嫌そうな声を漏らす効煽。

「それじゃあ、頼んだぞ」

そう言って榊原氏は、ポカンとしていた武士たちを戻しつつ、自分も屋敷の中に入って言った。

「・・・逃げたな。くそつ、榊原の旦那め」

そう毒づくものの仕方がなく、時神の方を向いてきく。

「取り合えず、守り人ってのは、何をすればいいんですかね？」

「む？ そうじゃの・・・」

きかれた時神は、たつぷりと時間をかけて悩んだ後、「手始めに・・・」

こう答えた。

「遊ぼうかの。本気と書いてマジで」

榊原氏が廊下を歩きつつ呟く。

「やれやれ、色々苦勞もしたが、これで効煽は働き我が屋敷には守り神がついた。これで安泰・・・」

チュドーン！

・・・ではないようだ。

榊原氏が慌てて庭に駆け戻ると、そこには・・・

「カラカラカラ！ ほらほら！ もっとちゃんと避けないと、当たってしまうぞ！」

「くそっ、せめて刀があれば・・・うわっ！」

楽しそうに笑いながら、魔術を連発して効煽を狙う時神と、ぼやきながら必死で避ける効煽の姿があった。

「ここまで必死な効煽は珍しいかもしれないな・・・ハア・・・」
やや、現実逃避気味にそんな事を考えていた、榊原氏は、改めてため息をついた。

どうやら、自分は取り返しのつかない過ちを犯してしまったのだと、そう思った榊原氏であった。

Cの12話「昔話」 (後書き)

時神の過去編のようなものに突入しています。時代設定は平安あたりですが、いろいろ間違っていることが有る気がします。そこは多目にみてください。

Cの13話「藤草効煽」

俺はその光景を黙って見ていた。

『あ、ご主人様。一旦、ここで切れます』

メイナがそう言うと同時に、目の前がプツリとブラックアウトした。
・・・どうしたんだ？　メイナ。

『耳から入って来る情報がストップしたので、『残知回想』が一時停止しました。・・・多分ほどなく再開されると思いますが・・・次に見えるときは少し話が飛んでいるかもしれません』

ってことは、あっちが休憩でも入れたって事か。

分かった。そろそろ俺も休憩したかったところだしな。

俺は背中を背もたれに預ける。・・・と言っても夢の中だからただのイメージだし、現実の俺は最初っから寝ているが。

人間は、背中に何かが当たっていると落ち着くらしい。

それは、母の腹の中にいたころ感じていた感覚だからだ、とかテレビでやっていた気がするが、・・・取り合えず言いたいことは、眠いってことだ。

だが、うっかり寝て見過ごすわけにもいかないし、・・・そもそも夢の中で寝れるのか？

『寝れますよ。それに寝て少しでも体力を回復をしたほうが、この先のためになりますよ』

そうなのか？　いやしかし、寝過ぎたらまずいからな・・・。

『私が起こしますから大丈夫です。ご主人様はゆっくりお休みになってください』

そうか？　ならお言葉に甘えよう。

そして、俺がまぶたを閉じると、一気に睡魔が襲ってきて俺を眠りに誘った。　眠気に朦朧とする意識の中、聞こえてくるメイナの静かな声。

『・・・おやすみなさい、ご主人様・・・』

それもいいまって、俺の眠気は、

『・・・永遠に』

一気に覚めたわ!!

『どうしました? ご主人様』

いや、どうしました、じゃない。今、永遠に・・・って。

『気のせいですよ。気にせず、ご主人様は安らかに眠ってください』
気にするわ! その、安らかに、ってワードが悪い意味にしか聞こえねえ!

『えーと、なら、安らかに逝ってよし』
完璧にそっちの意味になってる!

てか、いつの間にそんなギャグを出来るようになったんだ?
『どうやら私は、人間らしくなるよう徐々に成長しているみたいです。です。です。こういうったギャグも分かるように成ってきました』

悪い方向に成長速いのな・・・。

てか、ツツコんでたら、さらに眠たくなったんだが・・・。

『あ、どうぞお休みになっ・・・』

・・・。

zzzz・・・。

『・・・ご主人様、寝るの速いですね』

C

あの試合から一週間後。

「平和だなあ」

「そうっすねえ」

こちら榊原邸門前。

この屋敷に仕えている武士二名が、ゆったりとした雰囲気で門番をしていた。

「暇だな・・・歌でも歌うか？」

「あー・・・、自分あまり教養ないんで無理っす」

のほほんとした雰囲気。　そもそも武士がいる屋敷を襲おうとする馬鹿がいるはずもなく、ましてや妖魔などの出沒する時間帯は日が落ちてから・・・暇で当然だったりする。

「とは言え・・・あっちは、暇じゃなさそうだけどな」
チュドーン！

「そっすね」

バツコーン！

「いや、俺ホント対魔武士じゃなくて良かったと思うわ。あんな化け物相手にしてらんねえよ」

ズガガッ！

「同感っす。やっぱり強けりゃいいってもんじゃないっすよね」

ドーン

ドーン！

「ん？」

ドーン！！

ドーン！！！！

「・・・まさか」

ドドドドド、

ドーーーン!!!!!!!!!!

『うっわ、こっちきたー!!!!!!』

ドガガガ、ドゴーン!!

・・・武士二名は、奇跡的に全治約三日の怪我ですんだという。

C

「・・・そろそろ休憩しようかの」

「はぁ・・・はぁ・・・や、やっとか・・・」

時神からの攻撃を、ひたすらよけ続ける、という遊び(?)が終わったのは、それが始まってから一時間後のことだった。

あの日以来、効煽は毎日神の戯れに付き合わされている。

そのため当然、屋敷内のいたるところにその遊び(?)の跡が残っていたり、修繕中だったり。

「しかし効煽は丈夫じゃの。さすが妾が見込んだだけのことはある。まさか、今まで一発も直撃せんとは・・・」

庭に面した廊下にちよこんと正座し、茶を飲む時神。

一方、効煽は庭で仰向けになって寝っ転がる。

「そりゃどうも・・・、しかし、やんちゃだよなお前。遊び(?)にしても、もうちょっとスマートにやれと言うか・・・ホント神の威厳の欠片もないな」

あきれ口調で言う効煽。

「お前、ではなく時神様と呼べ、効煽」

神として、そこはこだわる時神。

「へいへい、わかったよ時神」

しかしまあ、そこは効煽だ。その言葉はさらに時神の神経を逆なでさせた。

「様をつけよ、様を。大体、口の効き方もなっておらんし、少しは敬えんのか御前は！」

「そう怒んなよ。なんか知らんが、俺はお前を守ってやってるんだ。むしろお前に敬ってほしいぐらいだ」

その言葉に、うぐっ、と詰まる時神。

「そ、それは妾の力が安定するまでのことじゃ」

「安定？ でもそれまでは、俺が守ってやらなきゃいけないんだろ？ 遊び(?)にも付き合ってやってるし・・・」

とまあ、一週間毎日こんな感じの口論ばかりだった。

「おお、やってるな効煽。時神様もお元気そうで」

榊原氏だった。

屋敷のあちこちが破壊されたというのに、その顔には笑顔が浮かんでいる。

壊れたか・・・と効煽は初め思っていたが、そうではなく。

「で、どうでした朝廷の奴ら」

「お前、奴らって・・・。まあ、いい。どうせ言っても直らんし。・・・でもって、朝廷の方々は期待しておられる。そのまま続けろとのことだ」

一週間前、榊原氏が朝廷に時神の事を報告したところ、朝廷側はたいそう驚き、また喜んで榊原氏を昇進させた。

自らの保身のため、朝廷は神の力がどうしても欲しいらしい。

「人の苦勞も知らないでよく言うなあ、あいつらも」

そして、効煽は朝廷や偉い人たちを嫌っている。時神に様を付けないのもそのためだろう。

「そう、言うな。おかずを増やしてやっただろ？ しっかりやってくれ」

はっはっは、とか笑いながら屋敷内に去っていく榊原氏。

「・・・榊原の旦那も人ごとだからって・・・俺がああ過激な攻撃

にどれだけ苦勞してるか・・・ん？」

そこで、気づく。

「なあ、時神」

「様じゃ」

「いいだろ別に。・・・で、お前力が不安定とか言ってたけど、あんな攻撃が出せるなら、別に俺が守る必要無くないか？」

「む、そ、それは・・・」

「郵便ですおに」

シュバツ！

急に聞こえてきた声に怯え、効煽の後ろに隠れる時神。

声の主は、効煽の膝下ぐらいの大きさしかない、小鬼だった。

二本の角、ちょこんとゴマのような小さな目、二頭身の体に背負う風呂敷。

小鬼は巷で可愛いと評判の種類の鬼である。

さらに人間とは共存関係にあるため、色々な仕事を任されていたりもする。

郵便の仕事もその一つ。

「どうしましたおに？」

「いや・・・どうしたんだ？」

二人そろって首を傾げるが、当の本人は警戒している小動物のような様子なので、聞こうにも聞けず。

「ま、いいや・・・それで、どこからだ？」

「北山の陰陽師様からですおに」

小鬼は背負っていた風呂敷から封筒を一枚差し出す。

「それでは渡しましたので、失礼しますおに」

小鬼はシュタツ、と敬礼を一つして、あの体からは想像できない跳躍力で次の配達先へと跳んで行った。

「・・・おい、行ったぞ。いつまでしがみついてるんだ？」

「・・・はっ！」

効煽が時神に声をかけると、我に返ったように飛び離れる時神。

「あー・・・、おっほん。・・・かくれんぼは楽しいの」

「・・・それ、かなり無理がないか？」

「・・・じゃの」

しおしお、と落ち込みうなだれる時神。

まずいところを見られた、といった様子だ。

対する効煽は何かを察し、いいものを見てしまったなー、といった風にこれ以上ないほどのにやけ顔でさく。

「これは・・・どういう事だろうな？ 時神？」

「う、うるさい。詮索するな！」

「俺には大体察しがついてるけどな」

余裕からかいモードの効煽に、イラッとした時神は、つい手のひらを効煽に向け・・・

「黙れと言っておるのじゃ！」

ポフッ！

人より二まわりも大きい巨大な魔弾を発射。その魔弾が効煽を吹き飛ばす・・・かと思われたが、

「はっ！」

ブンッ、スパン！

効煽が腰より抜いた刀にあっさり切られた。まるで、スポンジケーキか何かのように。

「うなっ！」

化けの皮がはがれたように動揺する時神。

「やっぱりな。お前の魔術、見た目は派手だが、力が収束しきれてないから部分部分で威力がピンキリ。こうやって弱い部分を突けば

すぐに砕ける。これじゃあ人間には通用しても、妖魔にはきかないな」

「だ、だから言ったじゃろ？ 安定しておらんと。妾の力はまだ不完全なんじゃ！」

「威張るなよ」

ピコーン！

時神の額にデコピン一発。

「あうっ！ い、痛いのじゃ！」

「黙ってた罰って奴だ。そうならそうと言えば、色々してやれたのに」

「む、色々？」

少し前とは打って変わって、子供っぽく涙目を浮かべる時神。

その上目遣いの目に、クラツときた効煽。

「う、上目遣い萌え」

「・・・ちよっと待つのは。その発言は時代背景と合っておらんぞ！？」

「あゝ、ごほん。もとい・・・上目遣いギザカワユ・・・」

「それもじゃぞ！？」

「あー・・・、かなり無理があるか？」

「そういう問題じゃないと思うのじゃが・・・」

C

（時神様、ここは捏造ですよ？）

（いや・・・そう言えば効煽は、マジでそう言っておったような・・・）

（・・・。）

（なあ、メイナ。今、妙な会話が聞こえてきたんだが・・・）
（聞き流しましょう、ご主人様。・・・でも、あれ？ ご主人様はなんで死んでないんでしょう・・・脳内に狂死の信号を送ったのに・・・）

（ちよっ！　なあ今、俺の耳に聞き流せない言葉が入ってきたんだが！）

（おおむね気のせいでは無いですよ。あはっ♪）

（なあメイナ、お前はどんなキャラを目指しているんだ・・・）

C

「とりあえず、魔術をバカスカ使えば安定するってものじゃない。むしろ質が悪くなつて拡散する」

「そうなのかの？」

素直に感心する時神。

もはや神らしさはどこにも残っていない。

「ああ、だから俺が教えてやるよ。力を安定させる方法」

「むう・・・、上から目線なのが気に食わないが・・・、ここは素直に教わるしかないの。じゃが見てるのじゃぞ。妾が力を安定させた暁には、御前を忠実なる僕に・・・」

ピコーン！

「ああ、なにするんじゃ！」

「変な野心を抱くからだ。取りあえず今は休め、明日回復してからじゃないと始められないからな」

「はい・・・じゃ」

しょぼしょぼと、縁側の様な所で足を投げ出す。もう割と自暴自棄なんだろう。

その横に効煽も座る。

だが何も口を開こうとしない。ので、時神から話しかける。

「・・・しかし効煽。妾がお主より弱いかもしれないと知って、コロツと態度を変えよったよな？」

「ははは、かもしれない、か・・・ま、俺は世渡り上手なんだよ。生きるためなら姑息な真似だってするしな。・・・とは言え、偉い奴に土下座するのはご免だがな」

わっはっは。

「それは本当に世渡り上手なのかの・・・？」

「世渡り上手だろ。いろんなところに喧嘩売ってもまだこうしてピンピンしてるんだから」

・・・。

「・・・それもそうじゃの」

「なんだ？ さっきからツツコミに元気がないが」

「む・・・、さっきから妾は神としての威厳が全くないのじゃ・・・」

ずーん、と一方的に落ち込み目が下を向く時神。

「元々なかったような・・・。じゃなくて、別に気にすることないだろ。誰だって始めは失敗するもんだ。それに元気な方が、力も安定するぞ」

らしくなく、多くの言葉を並べて時神を励ます効煽。

「そうじゃの・・・。よし、妾はいち早く力を安定させ、効煽を僕にするんじゃ！」

「まだ言ってるのか・・・」

まあ、時神の元気が戻ったようで一安心する効煽。 効煽に励まされ、調子が戻った、時神。

そんな時、

（むむむ、そもそもなぜ妾は効煽に励まされておるのじゃ？ 風邪でも引いて気が弱くなっておるのかの？）

（そういや、俺はなに励ましてるんだろ。訓練だって引き受けたし・・・風邪でも引いたか？）

そんな事を思いながら、もうしばらく、縁側でこうしていた二人だった。

Cの13話「藤草効煽」(後書き)

後に言っておきますが、多分、平安屋敷に縁側は無く、座る文化も無い気がします。

Cの14話「鎧神」

「・・・すーっ・・・」

息を大きく吸いながら精神を統一し、

「はっ！」

放っ！

ドン！

魔弾が庭に置いてあった石に直撃し、砕けた。

時神が振り返ってきく。「・・・ふう、どうじゃ？」「まあ、いいんじゃないのか？」

榊原邸の庭にて修練五日目。

最初は散っていた魔力も、徐々にコントロールが出来るようになり、なかなか実力がついてきた時神であった。

木下での転がっていた効煽が、起き上がってダラダラと歩いてきて言った。

「・・・んじゃ、そろそろ休憩するか」

「いや、まだ初めてから十五分しかたっておらんのじゃが・・・」

「えー・・・、だって疲れたし」

「御前はさっきから休憩しかしとらんじゃろ・・・」

「何を言う。しっかり見ていてやっただろう」

「・・・いや、寝てて見てすらいなかったじゃろ」

♪。

自分に都合の悪いことは、軽く鼻歌で流しつつ、屋敷の中から和菓子を持ってくる。

「さあ、食おう」

時神もなんだかんだ言いながらも結局従い、縁側みたいなところに座りつつ、和菓子のパクつく二人。

「この風景・・・もう完全に平安の雰囲気ではないの・・・」

「まあまあ、本当はこうだったかもしれないだろ？ てか、今やってるし」

モグムグ・・・。

「しかし、まさか妾が御前に振り回されるような立場になるとは・・・、普通逆ではないかの？」

「主人公がいつも振り回されるとは限らんだろ。俺は振り回す方が好きだしな」

そんな会話をしつつ、和む二人。

こんな光景が日常と成りつつあった今日この頃。

しかしその光景に、1人の神が邪魔に入ったのだった。

C

「なあ、メイナ。さっきからあの二人の会話がおかしいんだが・・・」

「それは・・・時神様と効煽様の人格データだけをトレースして会話を作り上げている部分もあるので・・・会話が今風にアレンジされているのだと思います。・・・多分」

その多分がもの凄く引かかるんだが・・・、さすがは俺の先祖だな。

「ですがご心配なく。強烈な印象を与える事実は、強く情報が残っているものなので、肝心なところは大丈夫です・・・多分」

C

ここで一句。

「朝は寝て、昼ものんびり、夜も寝る。そんな俺ってホント勝ち組」
「・・・駄目人間、今に太るぞ、効煽よ」

翌日、なんとなく修練後の休憩時間に変な歌を歌ってみた効煽。
帰ってきた俳句にはそこはかとなくリアルに危機感があった。

「そんなもので対魔武士が務まっているのかの？ 対魔武士は毎日の修練を書かさない者だと聞いておるが」

例え、もしも、万が一、効煽が天才や鬼才だったとしても、さすがに毎日の鍛錬無しというのは、あり得ない話だ。初め会った時の様子からして少しは実力はあるようだが、うぬぼれるな。

と、時神は後に付け加えた。

「・・・ボロクソ言われたなあ俺。でもまあいいんだよ。俺は特別だから」

「特別？ 適当なこと言って誤魔化しているだけではないかの？」

「ははは・・・。と苦笑い。」

「・・・それはそうと、前から気になってたんだが」

「話をそらしたの。まあ、いいじゃろ。で、なんじゃ？」

「お前、魔力がうまくコントロールできてないのに、よく神になれたな」

効煽は、『神』というのは称号であるところかで聞いたことがあった。

それによると、圧倒的強さがないと駄目だとか。

「つまり、お前は魔術で他人を圧倒する事はできない。じゃあお前は何に秀でているんだ？」

この世界では魔術こそが最大級の威力を持つ。

その事実はどうそう覆るものではない。

時神は少しの間話すべきか話さないべきか迷い、一度効煽を見た後、話すことを決意した。

「そうじゃの・・・実はおまえの認識には語弊があつての・・・妾は、ある一つの魔術だけは使えるのじゃ。それに秀でていたから神

になれたのじゃ」

時神の言葉に、驚いた様子を見せる効煽。

「ん？ そうなのか？ でも今までにそれっぽいものは使った気はしないが・・・でその魔術ってのは？」

効煽がそう問うと、その力を見せる為なのか、時神は縁側から庭に降りた。

「実は、その魔術を使うとかなり精神力が削られての。妾としてもあまり使いたくはないのじゃが・・・見せてやろう」

と言ったその瞬間、効煽の目の前から時神が消えた。

「おろ？ どこに・・・」

「ここじゃ、ここ」

なぜか後ろからの時神の声、効煽が振り向くと時神が悠然と立っていた。

「・・・今、なにしたんだ？」

「これが妾が唯一使える魔術、『時操り』じゃ」

誇らしげな、でも少し疲れた表情の時神。

続けてその魔術の説明をしようと口を開こうとしたが、効煽の言葉がそれを遮った。

「『時操り』・・・なるほど読めたぞ。体感時間を操作する魔術だな。それで俺の体感時間を早めてすると。だがそれを使うと疲れる上に、まだ未熟だから複数人には使えない。だから群れる妖魔には太刀打ちができない、と。なるほど、その力から時神って名前がきてるんだな」

言おうとしていた事+αをそっくりそのまま言われ、ただひたすら啞然。

「な、なぜ分かるのじゃ？」

「ん？ そりゃまあ、俺も同類だからだな。ま、俺の場合は自分の体感時間しか操れないがな」

効煽、技名などを説明中・・・。

「・・・なるほどの。でも妾は複数人には使えんとはいえ、威力は

まだまだ上げられるからの！ 御前のその力とは比べものにならないくらい強いからの！」

「いや、張り合わなくても・・・」

さすがに得意分野まで負けるわけにはいかないということだろうか、子どもつぽく張り合っている。

「それに、どうせさっきの特別だから、と言うのはこの力を使っ
ての剣術じゃろうが、妾の方がうまく使えるのじゃぞ！ うぬばれ
るなじゃ！」

「ムキになりすぎだ……。んー、半分くらいは当たってんだだけ
ね・・・」

と、そこに、

「おお、やってるな効煽。どうですか時神様、お力の方は」

榊原氏が笑顔で歩いてきた。また朝廷から何かを貰ったのだろう
か。

「うむ。万事OKじゃ。あ、ちょっときてほしいのじゃが・・・」

「なんですか？」

効煽の、？な表情に見つめられながら、榊原氏の耳に口を近づけ
て言う時神。「・・・正直に言って、あやつは大丈夫なのかの？

毎日、鍛錬も何もしておらんが」

「あー、そのことですか。ご心配なく。あいつは運動しなくてもあ
まり筋肉が落ちない体質らしいですし、それに・・・あいつは異端
者ですから」

「異端者？」

すぐに聞き返そうとした時神だったが、それより速く、今度は榊
原氏が効煽の耳元で囁いた。

「・・・朝廷の方から聞いたことなんだが、どうやらこの近くにも
う一人、神様が来ているらしいんだ」

割と、衝撃的ニュースだと思うのだが、効煽の様子に変わりはない。
く。

「・・・へえー、そうなんすか。でも、それがどう・・・」

「その神・・・どうやら時神様を探しているらしい」
これには絶句。

「・・・まじすか」

「俺はこれから出かけなくてはならん、くれぐれも頼んだぞ」

「いやそれって丸投げ・・・って、ちよっ、旦那!？」

「はっはっは、がんばれよ」

榊原氏逃走。脱兎のごとく逃走。

「ちよっ、待てや旦那あ！ 問題を残して逃げるなあ！」

小休止。

「くそ逃げられた・・・」

「運動不足じゃの」

グサツ！

「・・・たまには真面目に働こうかなあ・・・」

「改心する事はいいいことじゃが、さっきは結局、何を話しておったんじゃ？」

「ああその事・・・」

効煽がその事を教えようとしたその時。

ヒュゴオオオ！

突如、庭に竜巻が起こった。

「な、なんじゃ・・・まさか！」

「近年、増加しているという異常気象か！」

「いや、この展開でそれはないと思うのじゃ・・・」
ヒュウウウ・・・。

竜巻が収まり、中から現れたのは・・・、西洋風の鎧を全身につけた男。

「やっと見つけたぞ！ 時神！」

兜からくぐもった声が大音量で響く。声からして男性みたいだ。ついでにいえば、濃いキャラな予感。

「なあ、あのすごいなんだ？ おまえの知り合いか？」

意外にも効煽が目をキラキラと輝かせて、その男・・・正確にはその鎧を見ていた。

忘れがちで崩壊しがちだが、今は平安。

あのようなピカピカの西洋鎧が物珍しく、ついつい視線を向けてしまうわけだ。

「・・・妾も知らぬ者だ。というか妾もあれが何なのか知りたいのじゃが」

二人して好奇心と視線をその鎧に向けていると、無視されたと思っただのか、鎧の男は、声にはつきりと怒気を含ませた。

「おい、しらばっくれても無駄だ！ 貴様が時神だと言うことは調べがついている！」

また大音量で言い放った男。だが、今回は、声に威圧感のような物を乗せていたようで、空気がピリピリと震えた。

「お・・・御前は・・・誰じゃ？」

やや気圧されながら、時神がきく。

とは言え、だいたい予想はついていたが。

その男は威厳たつぷりに言い放つ。

「我か！？ 我は鎧神だ！」

いちいち叫んでうるさく暑苦しいこの男が、さらに強く叫ぶと同時に吹き荒れる竜巻。

その威圧感、オーラに、時神は圧されつつあった。

「あ、え・・・と・・・」

時神が何か言おうとするものの、威圧されて喉から空気を出すことができない。

しかしその時、効煽がふいに声を発した。

「いちいち叫んでうっせえな。我は外人だ。って・・・見れば分か

る！」

「・・・確かに説明不足だったが、この状況的に天然としか言いようのない発言だった。」

「あ、いや、そうではなく鎧の神と書いて、我が名が鎧神だ！・・・
・というかお前は誰なのだ！？」

鎧神が首を傾げようとしたがフルアーマーのために、頭の角度が中途半端な所で止まっている。

効煽は若干吹きそうになったが、こらえた。

「ああ、俺は藤草効煽。こいつの・・・保護者だったか？」
そこで、すぐさま時神の怒った声が飛んでくる。

「守り人じゃ！ も・り・び・と！」

「どのみち保護してるじゃないか」

「そういう問題ではない！ まったく・・・」

鎧神の気配に圧されていた時神だったが、効煽のおかげでいつもの調子に戻った。

（・・・もしかして、わざとだったのかの？ 効煽め、余計な氣を
使いおって）

とか、思いつつも、いつもの調子の効煽に頼もしさを感じていた
時神。

一方、鎧神は不思議がっていた。

（我に威圧されていないだと？ 人間ごときがか？）

「・・・まあ、何でもいい！ 用があるのは時神にだけだ！」

氣を取り直して暑苦しさを取り戻し、またやかましい声で言い放
った。

「貴様を私の配下とする！」

・・・しばらく言葉の意味を解りかねていた二人だったが、鎧神
の兜の隙間から見える目を見て、本気だろうと判断した。

「・・・なぜ妾が御前の配下になど・・・」

「それは！ 新参の神はパシリをするという、神の暗黙のルールが
あるからだ！」

「!？」

パシリて・・・。

「お前も経験したのか」

効煽がきくと、鎧神は熱く答えた。

「その通りだ！ 掃除洗濯、料理に裁縫、マッサージまで、家事全般をいろいろやったぞ！ だから貴様にもやらなくてはいけない！」

ちなみに、本当はそんな暗黙なルールなどない。

ただ、鎧神が永遠に自分のために働く奴隷がほしかっただけ。

だが、

「・・・・・・・・」

時神は、暗黙なルールだと信じていた。

時神はまだ神の世界について多くを知らない。だから『神の』
と言われると不安になってしまう。信じ、行動せざるを得なくなる。

やりたくないから悩んではいたが、心は半分折れていた。

ふざけているような鎧神だが、実は常に威圧を飛ばしている。効煽のおかげで平常心を取り戻していた時神だったが、再び押され始める。

「む・・・しかし、妾は家事などやったことがないぞ・・・」

「安心しろ！ 初めは誰だってそうだ！ やっていくうちに上手くなればいい！」

シチュエーションによってはいいセリフだっただろうに・・・。

「む・・・仕方が・・・ないのかの」

「そうだ！ 仕方がないのだ！ 安心しろ！ 我は寛大だぞ！ フ
ハハハハハ！」

ヒュゴオオオオオオ！！

最後のとどめとばかりに吹き荒れる暴風。
完全に心が折れた。

「仕方が・・・ないの」

一步、また一步。フラフラと近づいていく時神。

兜の下、にやっと笑う鎧神。

しかし、

「ちょっと待てよ」

片手で時神を制す効煽。

「む、なんだ貴様！　なぜ邪魔をする」

「いやあ別にさ、時神どうなろうと俺には関係無いんだけど。今いなくなったら俺の仕事がなくなるんだよ」

「・・・人の分際で！」

ヒュゴオオウ！！

一瞬の激情にかられ、鎧神が最大級の威圧を放った。
だが、効煽は動じない。

「それに、俺は偉そうなやつがこの世で一番嫌いなんだ。そんな奴の思い通りには、させたくないんだよね」

効煽の完全なる挑発に、焦る時神。

「が、効煽。何を挑発しておるのじゃ。相手は神じゃぞ！」

だが、効煽はいつも通りの飄々とした様子で言う。

「お前だって神だろ？　それに、古いしきたり、常識、ルール。そんなもんみんな、くそくらえだ！」

「何を言っておるのじゃ！　あやつは妾より強い！　ルールはルールでも神のルールじゃぞ！」

時神が叫ぶように言う。だが効煽は聞く耳を持たず。

一方の鎧神は、自分より下等の生き物が、生意気なのを気に入らなかった。

「・・・気に食わん・・・気に食わんぞお！！」

「知るかよ。俺もお前が気に入らない」

効煽は刀を抜き、切っ先を鎧神に向けて言い放つ。

「こいよ。時神を連れて行くってんなら、俺が相手をしてやる」
この言葉により戦いの火蓋が切って落とされる事になった。

怒りに身を震わせる鎧神に、効煽を必死に止めようとする時神。
だが彼らはまだ知らない。
効煽の言った、特別、榊原氏が言った、異端者、の意味を。

Cの15話「戦と神の終焉」

「さっ、てと・・・」

そう言って辺りを見回す効煽。

榊原邸、中庭内。目の前には激怒中の鎧神。少し離れた隣にはおびえた様子の時神。

いつもの和んだ雰囲気はどうになく。

やっちまったなー、とか効煽は思っていた。

とりあえず、今は暑苦しい鎧の方に注意を向ける。鎧神は何やらわめいている。

「神に逆らうなど！ 身の程を知らぬ愚者め！ その罪は身を持って償ええ！！」

鎧神が怒りを口にする度に、キンキンと空気が震える。

その度に効煽の隣の時神がビクビク震え、効煽はその様子を見る度に、やる気を感化させた。

（とは言え俺はロリコンでもサドでもないぞ。念のために思っておくが）

別に必要のない弁明で、雰囲気をぶち壊した気がするが、聞かなかったことにしておく。

「が、効煽・・・」

隣から聞こえてくる、今にも消えそうな時神の声。効煽は思う、薄々気づいていたが、神だからといって、中身は年相応なのだと。

「なら、俺が守ってやらなくちゃな。てかやっぱ俺、保護者だろ？」

不安がらせないように、いつもの飄々とした様子を演じてみる効煽。

だがあくまで『演じる』だけ。

本当はあまり余裕がないことは、少なくとも間一緒にいた時神には筒抜けだった。

「無理せずともよい……。妾を見捨てても、妾は効煽を怨まぬ」
「あ、それならお言葉に甘え……。られないんだよな。あっちがやる気満々だから」

効煽は、暴風を体の周囲に発生させ怒りを表現している鎧神を指さす。

「だから、そういうわけで、安全なところで見てろ」

笑顔のまま、平気で言っただけの効煽。

本当は怖いけれど。

「……バカ、じゃ」

もう、どうとでもなれど、時神は言われた通り少し離れた所まで退がった。

それを見届けてから、効煽は今一度正面に向き直り、鎧神を睨み付け言う。

「は、神が聞いてあきれろ。これしきの挑発に、怒りするなんてな」
しかし、この言葉もまた挑発。

「ふん！ 神たる我に対してのその態度！ 我の名誉を傷つける、名誉毀損に値する！ 怒らぬ道理がどこにある！」

怒りでのぼせ上がった頭を少しも冷やす様子がない鎧神。

（多分、兜のせいで、熱がこもるんだろうな）

そんなことをふと頭に浮かばせながら、言葉を返す。

「神ってのは、もっと慈悲深かったりするものじゃないのか？ 偉そうにだけなら猿にもできる」

論してるのか馬鹿にしてるのか、微妙だ。

「貴様……、あろうことか、我と猿が同等なものだ！？ もう許せぬ！」

「そんな事で腹立ててるから猿と……！？」

ビュウン！

危機を察知した効煽は言葉を止め、横に飛ぶ。

それから数瞬して、竜巻が効煽のもといた地面をえぐりとつた。
「・・・ヒュウ。ここまでの威力とは・・・。怒らせすぎたか」

効煽もさすがに少し後悔。

時神は怯えていないだろうか、と思うが、確認している暇は効煽に与えられない。

「もう許さぬ！ 泣いてわめいて土下座して、謝罪し靴をなめ三回まわってワンと言っても許さぬ！」

頭の中が怒の一字一色の鎧神は、容赦なく次の竜巻を発生させ効煽に向けて放つ。

人知れず、戦いのゴングは鳴っていた。

C

「よっ、ほっ、とっ！」

効煽は軽業師のような身のこなしで、次々と襲い来る竜巻をよける。

効煽にとって意外だったのは、鎧神の攻撃方法。

格好からして、近接戦闘向きだと思ふのだが、先程から竜巻・・・つまり遠距離攻撃しか放ってこない。

「なんか期待はず・・・れっと！」

また一筋、竜巻が空間をえぐり、効煽はそれをよける。

「ええい、ちょこまかと！ 潔く、死滅しろ人間！」 さらに竜巻連射、さらによけるのは困難かと思われたが。

（お、これは・・・、『刹那の延長』！）

一旦、『刹那の延長』で思考時間を稼ぐ。

その訳は、竜巻と竜巻の隙間に、鎧神へと続く一筋のルートを発見した気がしたから。

（そして案の定、気のせいじゃなかった、と。・・・えーと、右・・・前・・・左、すぐに右・・・）

イメトレで、進路を確認。

(行けるな。・・・5、4、3、2、1、・・・0っ!)

カウント終了と同時に、『刹那の延長』を解除し、地面を蹴る。

既に竜巻の抜け道は把握している効煽、左右、左右と間をくぐり抜ける。

鎧神まで残り五メートル、腰に差した刀の柄に手をかける。

(・・・拔刀法、『瞬風一陣』)

鎧神は、とっさに腕で前をかばおうとしたが、効煽は残り三メートル位置で、一瞬の加速。その腕は既に遅かった。

スパン!

気づいた時には効煽は刀を抜いた状態で鎧神の後ろに立っていた。拔刀術、瞬間の斬撃に反応できぬ鎧神の表情はうかがい知れないが、きつと驚愕の表情を浮かべているに違いない。

効煽が口を開く。

「この刀の名は『真断』。切りつけたものは、どんなものでも切り裂く妖刀だ。残念だったな、相手が悪かった」

そう言って刀を鞘に納めようとする効煽。

だが・・・、

パキンッ!

「な!? 妖刀が・・・折れた!?!」

効煽がさっきまで自慢げに解説していた妖刀が、刀身の中ほどでパッキリと折れていた。

「フッ、クッククク・・・」 笑いをこらえるような声が響く、言うまでもなく鎧神だ。

「アーツハッハッハ! 馬鹿が阿保が愚者が! 我は鎧神なり! 我が鎧の硬さはもはや凶器ぞ!」

「くっ・・・狂気の間違いだろうが・・・」

また竜巻が迫ってくる前に作戦変更。

効煽は折れた妖刀を見限って捨て、代わりに振り向き、手を鎧神に向けてかざす。

「陰陽道式魔弾、発射！」 効煽の手のひらから、黒と白の二色で彩られた、通常の魔弾よりも大きいものが放たれる。

だがまあ、お約束、

「無駄だ！」

魔弾は鎧に当たった瞬間に、粒子のレベルまで碎け散った。

「我が鎧に魔術は効かぬ！ 耐魔術コーティングは完璧だ！」

「・・・まあ、だろうなー、とは思ってたさ。うん」

耐魔術コーティングがどんなものかは知らないがそれよりも。

問題は、現在の鎧神との距離。

絶対斬れる事を前提とした攻撃だったため、攻撃後の隙は免れない。

ニヤアと、兜の中にある口が裂ける。

「かかったな、人間！ この距離では避けられまい！」

そう言って、片手を前に突き出した鎧神。

その手に魔力が収束していき、一本の鎌の形を作る。

さらにその刃には、黒い旋風がまとうっており、それが表すものは絶対死。

「人間！ さっさと天に召されるがいい！」

鎧神は、その鎌を振りかぶり、畑でも耕すように、効煽に振り下ろす。

「効煽！？」

時神が叫ぶ。

避けられないのは、誰が見ても明らか。だから、

ガキーン！

「む・・・！？」

「な、どうということじゃ？」

効煽がその腰に差した脇差しで、鎌を受け止めたことに、二人の神は驚いていた。

「・・・賭だったんだがな」

受け止めた事により生じた時間を使い、効煽は飛び退き距離をとる。

「人間・・・何をした!？」

「俺はなにも。全てはこいつのおかげだ」

効煽は、右手に握った脇差しを左手で指差す。

「こっちは妖刀じゃなくて、幻刀。名は『双六』。内包されている魔力の安定性をわざと減らし、運が良ければ最強の一撃が出る、っていう刀だ。本来、俺が使えるはずはないんだが、緊急事態だったから強制発動させてもらった」

そして、その脇差しを鞘に戻し。鎧神に告げる。

「確かお前、天に召されよ、とか言ったな」

それはまだ、勝利を諦めてはいない男の、

「でもそれは絶対ないんだよ。なぜなら・・・」

反撃宣告。

「死後の世界なんてものがあつたなら・・・俺は地獄落ちが決定してるから・・・」

ビュン!

話の途中で、鎧神は鎧を着てるとは思えないスピードで、効煽に迫ってきた。「おわっ、『刹那の延長』発動!」

だがそれも、『刹那の延長』の中では止まっているのと同義。

効煽は止まった時の中呟く。

(まったく・・・、決めゼリフぐらい言わせろっての。ですよねえ、ナレーションさん)

いや、物語中でこっちに振らないでください。まあ同感ですが。

（だろ？ ま、それは置いといて・・・。反撃開始といきますか）
とは言え、効煽は『刹那の延長』を解こうとはしない。『刹那の延長』発動中は考えること以外は何もできないはずだが、
（いや・・・そうとも、限らないんだなあこれが）
ん、というと？

（魔術を発動される条件は三つと言われているよな。一つは魔法陣、一つは呪文。そして最後は、脳内思考）

そうですね・・・脳内思考？ まさか・・・、

（つまり、魔術使い放題だろ？）

バカな・・・精神力がもぢませんよ。仮にもっても魔術は鎧神には通じない。

（ところがどっこい。まあ見てろ。元陰陽師の異端者と呼ばれし男の力、とくと見よ）

なんか今、さらっと重要なことを言われたような・・・。

（魔術構築準備完了！ 久々に出番だぞお前ら！ 『刹那の延長』解除！）

時の歩みは元に戻り、鎧神は効煽へと迫り来る。

だが、どんなにはやく行動しようとも、効煽の前では全て遅い。

「とかなんとかナレーションしてくれちゃってますが、実際はもうちよっと時間があるんだよね。そのための剣術なんだが、さっき刀が折れちゃったし。だから・・・前術『死鬼神』召喚」

ブォン。

効煽の後方に円形の召喚陣が出現、その外枠をまたぐようにして、中から一匹の鬼が現れる。効煽はこれの発動準備も『刹那の延長』発動中にやっていた。

「目には目を。神には神を、ってな」

ちなみに、正確には『式神』である。

「貴様ア！ そんなまがい物の神で、我を倒せるとでも思ったかあ！」

ズシャア！ ニギヤア！

出てきて早々に、鎌のひとふりで粒子単位に切り裂かれた効煽命名『死鬼神』。

「・・・痛いとか思ってる？」

まさか（笑）。

「・・・」

なぜか話外の存在と会話したあげく、勝手に落ち込んでいる効煽だったか、何だかんだで『式が・・・』、失礼、『死鬼神』・・・、
「・・・もう『式神』でいいです」

『死鬼神』を身代わりにする事に成功した。

「嫌がらせか？　なんで話外の存在に嫌がらせされてんの俺？」

さあ？　ただ単にギャグ要素が欲しかっただけでは？

「さいですか。・・・だかどうも、この後はギャグにいちいち反応できそうにないな」

効煽の目線の先には、さらに迫り来る鎧神の姿。

「次を用意する。『刹那の延長』発動！」

そしてまた、効煽は召喚魔術を構築。

「解除！　次術『死鬼神三召』！」

ブオン、ブオン、ブオン。

今度は三つ、召喚陣が発生し中から三匹の鬼が・・・

「フンッ！」　ズシャア！　ニニニギヤア！

・・・一瞬で消された。

「ちよっ、一秒も持っていないぞ！」

「くだらん、くだらん、くだらんぞお！」

鎧神はすぐさま効煽に向かってくる。

「ちっ、次を・・・」

だが、ある魔術の発動に意識を使っていたからか、『刹那の延長』の発動がとっさにできない。

（くっ、やばっ・・・）

鎌は今、効煽の首にかかろうとする。その時、

「時止め！」

幼い声が響き、青白い光が、光った。

「むお！　なんだこれは！」

鎌の動き、いや鎧神の動きが鈍る。

効煽はその隙を逃さず、しゃがんでかわす。

「時神か！　助かった！」　ちよつと不格好に飛び退いた効煽が、

予想もしなかった時神の助けに感謝した。

その時効煽が見た時神は、怯えつつ震えつつも、その顔には勇んだ表情が浮かんでいた。

「効煽！　負けることは許さぬぞ！　御前は妾の・・・」

と、そこまで時神が言ったところで、効煽が手で制した。

そして、時神の言葉を引き取る。

「俺は時神の『守り人』・・・だろ？」

「効煽・・・」

二人の間に流れるいい雰囲気。

だが、それをぶち壊しにする神が一名。

「ふぬらあ！！」

気合いの一声で、『時止め』の魔術を解く鎧神。

「時神貴様ア！　我に逆らうのかあ！」

鎧神の吠えた声に、ビクン、と震える時神。

だが、はつきりと言い返す。

「ああ！ 妾は御前などに従わぬ！ 妾は時神じゃ！ 誰にも媚びぬ、誰にも従わぬ、誰にも支配されぬ、神じゃ！！」

言い終わった後にきた、数秒の静寂。

その後、鎧神が反論しようとしたが、その声は効煽の、

「よく言った！！」

の声にかき消された。

「・・・効煽」

「その言葉を待っていた・・・ってわけじゃないが、でもよく言った！ 後は・・・俺に任せろ」

効煽は改めて鎧に向き直り言った。

「ついでに、時間も稼げた、これでチェックメイトだ」

「ほざけ・・・、ほざけ、ほざけ、ほざけ、ほざけえ！！ 速攻召喚ができる程度の力で、おごるなよ人間！！」

もう既に怒りの権化と化した鎧神は、手に持った鎌にて、効煽の

体を薙ごうと振りかぶる。

「最大威力！ 『ストーム・デスサイス』！！」 鎌がまどつてい

た黒い旋風が怒り狂った鎧神の心情を表しかのように渦巻き、効煽の体を砕かんとする。

だが、さっき効煽が言った通り、『遅すぎた』。

なぜなら、効煽は今までの間にも『刹那の延長』を繰り返し、既に魔術を完成させていたからだ。

そして、効煽は唱える。最後のキーである、術の名を。

「禁術『百鬼夜行』！」

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ン！！

その音は、効煽が発動した召喚のための魔法陣が発生した音。

だが先のように、一個分なら、ブオン。三個でも、ブオン、ブオン、ブオン。と区切りがついていた。

だが、今の音には区切りがなく、オの字は無数。

その召喚陣の数は、百！

「な、んだと！」

鎧神もさすがにひるみ、体の動きが止まる。

そのことが、さらに鎧神を敗北に近づけることに、彼はまだ気づかない。

「現れろ・・・百体の妖魔ども！」

鎧神がひるんだ隙に後方へと飛び退いた効煽の、言葉に反応し、召喚陣から妖魔たちが、腕から、足から、頭から、と自由気ままに出てきた。

鬼がいたり、人魂がいたり、百万神がいたり、様々な妖怪が顔を出す。

C

「が、効煽・・・これは・・・？」

妖魔が苦手な時神が、おっかなびっくりきく。

「ん？ ああ、怖がらせて悪いな。この魔術・・・というかこいつらは、俺が封印してきた妖魔たちなんだよ」

封印・・・それは、効煽が元陰陽師だったということ。

それは、時神も察することができた。しかし、

「この百匹すべてかの！？」

あり得ない話だ。封印の魔術は発動するのに手間はかからないが、維持に莫大な魔力を必要とする。それが百匹だ。

そもそも効率優先の陰陽師は、駆除はすれども封印なんて真似はまずやらない。

「だから俺は異端者って言われ、破門されたんだよ。たが、さすがにこれ全部を封印してるわけじゃない。俺が封印している妖魔はたったの一匹だけだよ」

一匹だけ？ 変なことを言う。現に目の前には百匹の妖魔が存在しているというのに。

その百匹だが、一匹の鬼がニギヤアと鎧神を指差した瞬間、一斉にギョロリと鎧神を見る。

その光景はまさにホラー。

「・・・百匹程度を・・・臆する我ではないわぁ!!」

鎧神が叫び、妖魔に向かって突撃する。実際、一瞬ひるんだものの臆してはいないようだ。

一方、時神は『一匹だけ』の真相を効煽にきく。

「で、どういう意味なんじゃ?」

効煽は百匹の妖魔と一人の神の様子を見ながら飄々と言う。

「簡単なことだ。人の心を喰って妖魔を生む『百心鬼』を封印して、生み出した妖魔を転移魔術で敵の前に出してやればいい。ま、つまり正確には召喚魔術じゃないってことだが」

聞けば効率のいい話ではある。

召喚魔術は転移で呼び出した魔物と契約する事で成り立つために時間がかかる。

その分、効煽の『百鬼夜行』はその手間がない分、早出しが可能というわけだ。

「とはいえ、こつちを襲われちゃたまんないから、『百心鬼』自体に魔術で細工して、生み出した妖魔は俺に従うようにしてあるがな」だから心配ない、と言うように笑って告げる効煽。

だが時神は、効煽に問わずにはいられなかった。

「効煽・・・『百心鬼』にわざと人の心を喰わせているのか?」

「・・・。それをきかれる事を、効煽は分かって言ったはず。それはつまり、その事を知って欲しかった、ということ。」

「ああ、喰わせた」

特に躊躇もなく淡泊に効煽は言った。

「陰陽師だったからな。いろんなところに呼ばれて出向いたわけだ。・・・疫病に苦しんでいる街の人々、重病で苦しんでいる貴族の娘、災害が起こった集落の人々。そういった苦しんでいた奴らを、片っ端から『百心鬼』を封印した空間に放り込んでいった」

効煽はあえて感情を殺した声で言う。嫌ってくれとでも言うようだ。

「だから破門されたんだよ。死にかけの奴らだったとはいえ、俺は人を殺したからな。・・・非難したいなら後で聞く。だが今は・・・こいつを仕留める」

C

百匹の妖魔たちに向かって突撃する鎧神。

確かに、最初はひるんだ。西洋でもここまでの数の妖魔が一度に出てくるなんてことはなかったから。

だが、見たところ、百匹の妖魔の一匹一匹はたかが中級程度。例えるなら、ある程度レベルが上がった勇者に中級モンスター連続でぶつけても、1ダメージずつしかくらないのと同じ。

さらに広範囲攻撃などの存在もある。

故に、召喚するのなら弱い悪魔を多く呼ぶより、強いドラゴンを一匹呼ぶ方が上策である。

（この世界において、ある一線を超えた者には、物量など無意味！それを知らぬ愚か者めが！　ワハハハハ！）

内心で笑うなんて器用な奴だ。

そして、確かに愚か者だった。

あの効煽がやったことを深く考えず、真正面に立ち向かう鎧神は。

C

鎧神が黒い旋風をまとった鎌を振るう。

一振りにて十匹の妖魔を塵と化したが、残り九十匹が鎧神の体に取り付く。

鎧神は竜巻を発生させて妖魔を弾こうとするが、弾ききれず、数匹に体にしがみつかれた。

無論、妖魔たちが噛みつかうと引つかこうと、鎧及び体には何の傷も付かないのだが。

(ええい、鬱陶しい！　　どういふつもりだ、まったく！)

内心そう思いながら、また一振り。

そうやって、鎧神は妖魔の数を減らして・・・いくつもりだった。

だが、鎧神は見た。

「な、バカな・・・！」

人を越えた力を持つ神が、思わず声をもらしてしまふ光景、それは・・・。

「禁術『百鬼夜行』改め・・・『秒速百鬼夜行』！」

再び開かれし召喚陣と、そこから現れる妖魔たち。

「貴様・・・！」

「驚けよ・・・西洋の神。日本の妖魔の戦術は、圧倒的なまでの物量戦！　お前は、百万神と呼ばれる程の数の妖魔を・・・相手に出来るか？」

再び妖魔たちの目が鎧神を向く。

ニギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

！！

一斉に、動き出す妖魔たち、

「くっそがああああああああああああああああああ！！！」

斬る、払う、薙ぐ、弾く、飛ばす、穿つ、消す、消す、消す、消す、消す、消す！

だが、どれほど苛烈な攻撃を繰り出そうとも、次々と召喚陣より沸いてくる妖魔たちを消しきれない。

十秒に満たぬ間に生み出される妖魔の波は、尽きることを知らない。

「・・・一体・・・どれほどの人を喰わせたのじゃ・・・」

時神が思わず呟く。

「戦場の兵を喰わせたこともあった。死罪が決定した罪人も確か喰わせたかな」

効煽が遠い過去の事のように答える。

実際、それは遠い過去の事なんだろうが、効煽がそんな事をしたなんて、時神は未だ信じられないでいた。

「さて、そろそろ準備をしておくか・・・」

そう言った効煽は、何かの呪文を詠唱し始めた。

それが何のものか、時神にはさっぱりわからなかったが、それがこの勝負のとどめになるだろうということは、時神にも充分察せられた。

C

「はぁ、はぁ、フンツ！」

一振り。また一振り。だが、妖魔の数が減る様子はない。

無敵と思われた鎧神だったが、今現在確実にダメージを受けていた。

疲労というダメージを。

「くっ、っつ・・・」

確かに神は人より体力があるだろう。

だがそれも無限じゃなく有限。たったの1ダメージもくらいつつければやがて大きなダメージとなる。

さらに、どんな奴を相手にするにしろ、魔術を使う際の消費魔力は変わらない。

既に、鎌がまとう黒い旋風の色は薄くなり、繰り出す竜巻には先の威力がない。

「くそっ・・・この我があ！」

それでも、まだ妖魔たちに屈していないのは、さすが神といったところか。

「大した奴だった、お前は・・・」

屋敷を埋めつくさん勢いで増える妖魔の中、いつの間にか屋根に登っていた効煽。

「だが、これで最後だ」　そして彼の周りが急に暗くなり、その手に握られている一枚の札が光る。

それはまるで夜の闇と満月の光。

陰陽道における、陰と陽を表していた。

「バカな・・・、神たる我が、貴様などに殺されはせん！」

この期に及んで、自らの勝利を疑わず、鎌を振るい吠える鎧神。そんな彼に、無慈悲に効煽が告げる敗北宣告。

「後術『終世封印』」

ブオオオオオオン！

効煽が術名を唱え、手に持った札を宙に放ると同時に、青白く光る四角形の魔法陣が、鎧神の足元を中心に広がった。

その魔法陣は大きく、鎧神の他に、周りの妖魔をも巻き込むほどの大きさ。

「封印・・・だと!？」　少なからず動揺を見せた鎧神。

本来なら、神ほどの力があれば封印など簡単に破れる。

だが、某ゲームにもあるように、弱っていれば弱っているほど、その封印には抗えなくなる。

ふと、あたりが暗くなった。屋根の上を見ると、効煽の周りにあった闇は、いつのまにか屋敷を被うほど広がり、その闇に力をそがれた日光は、まるで儚い月光と化していた。

つまり今は昼の夜。妖魔たちの時間。

効煽は最後の手向けとばかりに説明をする。

「その封印にはコード魔術も織り込んであるから、魔力不足にも困

らない、だからこの世界が崩壊するまでは解けない。故に『終世封印』。永劫の時間を妖魔どもと過ごせよ、愚かな神」

『愚かな神』という言葉に反応したのか。

だがどうしようとも、起動し始めた封印には抗えなかった。

『封印』が、始まった。

魔法陣に描かれた文字の、一つ一つから同じく青白く光る紐とも縄ともとれない、長い綱が現れ、鎧神を拘束する。

足掻き、もがき、なんとか抜け出そうと、体裁をかまわず暴れようとするが、その綱に押さえ込まれ、魔法陣の中に引きずり込まれる。

さらに妖魔たちも連なるように、魔法陣の中に引きずり込まれる。

それが、上半身の半分をうずめた状態で鎧神が言った、最後の言葉だった。

あんなに濃かった闇もすっかり引き、後には静かな屋敷と、効煽と時神の二人が残った。

庭のに面した縁側に、隣合って座ってはいるが、気まずいのか、さっきから一言も喋ってない。効煽は一人、心の中で後悔する。

（あーあ、見せちまったなあ、俺の黒い部分……。明日からクビかな……。）

さて、どこでホームレスしようか、と効煽が思うほどの時間がたった後、時神が口を開いた。

「……。効煽、」

その声はか細い、完全に軽蔑されたな、と効煽は思った。だが、

「……。ありがとう」

続けて出てきた言葉は、効煽の想像外の言葉だった。

「え……。？」

思わず聞き返す。

「ありがとう、と言っておる。……。二度も言わせるな」

顔を背けつつ言う時神。だから表情は伺い知れない。

効煽は思わず聞き返す。

「軽蔑しないのか？ 俺を。……。人殺しだぞ」

「なんじゃ効煽。いつになく、ろーてんしょんではないか」

時神はそう少しからかってから、言葉が続けた。

「御前はさっき……。死にかけの奴らを喰わせてきた、とばかり言いおってたじゃろ。嫌われたくないのがみえみえじゃ」

それについては、効煽意外にも無自覚だったようで、少し驚いていた。さらに、時神は続ける。

「例え、過去にどんな理由で、そんな事をしていたとしても、今は妾を助けてくれた。なら妾にとっての御前は軽蔑する存在ではなく、感謝する存在なんじゃ……。って、助けた側に何を言わせておるのじゃ御前は」

・・・。

その言葉を、呆然と聞いていた効煽。

かつて、この事を知った人間は、皆効煽を責めた。

だからまさか、時神にこんなことを言われるとは、想像もしてなかった。

そして、効煽はその言葉に安堵し、ゆっくりと横に倒れた。

「が、効煽!？」

丁度、時神の膝の上に効煽の頭が来る形になり、時神は驚いたが、

スー、スー・・・。

・・・寝ているだけと知って、心を休める時神。

「まったく・・・、助けられた側はこちらだと言うのに・・・」

ぶつくさ文句を言いながらも、夕日が暮れる時間になるまで、時神はそうしていた。

・・・効煽が起きる途中に、一度寝てしまった事は、効煽には秘密である。

Cの16話「何かの予兆」(前書き)

ここら辺から、シリアスなのかな。

Cの16話「何かの予兆」

「……。」

ズズズズズ……コトツ。

鎧神との戦闘について話し終えた時神様は、手に持った湯のみの中身を飲み干し、置いた湯のみは乾いた音をたてた。

「ノフィーネ……、一つ聞きたいのじゃが」

「なんです？　と僕は答える。」

「この話を聞いて……効煽をどう思ったかの？」

まるで僕の目から読み取ろうとするように、時神様は僕の目を見つめきいてくる。

僕は正直に答えた。

「いい人……だと思いました」

「ほう？　それはなぜじゃ？」

安堵半分疑問半分、といった表情を見せる時神様。　分かりやすい人だ。

あやふやな言い方だけど、僕は感じたままに答える。

「なんとなく……久郎君に似ているからです。雰囲気か何かが」

「なるほど……。確かに妾も、久郎の中に効煽を見る事があるの」

そう言っ、僕と時神様、二人して久郎君を見る。　話をしていく横で寝ている久郎君は、出番がなくて不満な女優のように、ブスツとした表情をしている。「顔はどうなんですか？　似てますか？」
気になってついついきいてしまった。

でも特に地雷を踏むような話ではないはず。

それは正しかったらしく、時神様も普通に返答してくれた。

「そうじゃの……。もう数年すればそっくりになりそうじゃ」

そう言っ、時神様は久郎君の頬をプニプニと突き始めた。

僕もつられて突いてみる。

プニプニプニプニ。

「というか、まだ起きないんですかね、久郎君」

「そうじゃの。こういうところも効煽の遺伝かもしれんの・・・」

そう言っ、昔を懐かしむ様子の時神様。

話の中の時神様は子供っぽかったけれど、今僕の目の前にいる時神様は、まるで老人みたいだ。

やっぱり、長きに渡る封印生活が原因なんだろうか？

しばらく思いついてたような時神様は、しばらくして口を開いた。

「・・・さて、他の話も聞くかの？」

はい、ぜひ。と僕は答えた。そして、また時神様は話し始める。

妖魔との戦いの話や。小鬼と仲良くなった話。

迷子になった話なんかも、照れ笑いをしながら話してくれた。

そして僕の中で、ならどうして効煽さんは時神様を・・・、という疑問が強まっていった。

C

zzz・・・。

「ね〜むれ〜♪　ね〜むれ〜♪　えーいえーんに〜♪」

ガバツ！

『あら？　起きられましたか、ご主人様』

そんな物騒な子守歌を耳元で歌われたら、嫌でも起きる。
というか、今どうなってるんだ？

『今ですか？ 時神様がノフィーネ様にお話を終えたところです。今までの内容を要約してお話ししましょうか？』

その申し出を俺は受けた。

ところで、終えたということは、これ以上話を聞けないということか。

「そうなりますね。時神様は外に出かけるつもりらしいです」

ふむ、重要なことは聞けずじまいって感じだな。時神が封印された事についてとか。

「しかし・・・、聞けば聞くほど、分からないな。なんで効煽の爺さんが時神を封印するまでになったんだ？」

疑問には思う。だがその答えは導き出せない。

『時神様もその事について話す気はなかったようです。その理由はきつと・・・その時起こった事を、未だに信じられないから』

メイナがなぜか理由まで答えてきた。

「なんでそんなことがわかる？」

『表情や声色。話し方から判断しました。あとは女の勘です』

アンドロイドって、確かロボットの様なものだろ。それが勘で・・・。というか、様々なイベントを挟まずにすぐ人間らしくなってるよなメイナは。

つまり、機械が心を持つ的なイベントは今後一切起こらないわけだ。

『お褒めに与り、光栄です。ですが、そうしたのはご主人様ですから』

ニコオ、っと嫌な事実を突きつけるメイナ。

んゝ・・・今からでも、機械っぽく変えられないものか・・・。

不意にメイナが言った。『あ、そろそろご主人様覚醒しますよ』

なんだ唐突に。

普段、覚醒なんて言葉を使うことがないものだから、メイナがつまり、目が覚めそうだ、と言っていることに気づいたのは、目が覚めてからだった。

「うっ・・・ん？」 久し振りに目を開けると、目の前にはこれまた久しぶりに見る顔があった。

まあ、似たような顔の奴ならさっきまで見てたが。

「あ、起きた久郎君？・・・どうしたの？ 僕の顔を見つめて」

ああ、『久郎君』『僕』か・・・、懐かしい響きだ。数時間ほどぶりなはずなのに。

部屋を見回してみると、確かに時神の姿はない。あるのはノフィーネの姿だけ。

そして俺は、なんとなく言いたくなったことを、ノフィーネに向けて言ってみる。

「・・・ノフィーネ、ただいま」

「？ よくわからないけど、おかえり？」

首を傾げながらも普通に返してくれるノフィーネ。ああ、どこぞのサドなアンドロイドとは大違い、

「呼びましたか？」

『うわあっ!?!』

いきなり横から顔を出してきたメイナに、ノフィーネ共々驚いた。
え？ なぜメイナが・・・。

「確か前に言いましたよ。私は脳内に情報として存在することも、実体化することもできるんです、って」

そういえば、そうだったような・・・。

「えと・・・、久郎君こちらの方は・・・」

目の前にいきなりメイド服を着た女の子が現れたからか、ノフィーネは、恐る恐るといった様子で俺にきいてくる。

さて、どう説明したものか・・・。

とか考えていたら不意に、

「私とご主人様は、『メイナ』『ご主人様』と呼ぶ関係です。キ

ヤー！」とかなんとかメイナが頬を手で押さえて言うものだから、ノフィーネは顔を真っ赤にして驚愕の表情……って、ちよつと待て！

「おいコラ、メイナ！ 何だそのキャラ！ しかも何、勘違いされそうな言い方を……」

「ほら今、メイナって言いましたよ！ それにこの服だって、ご主人様を選んだんですよ」

ちよつ、確かに間違いじゃないが、あれは不可抗力で、

「へー……、久郎君って、そーゆー趣味だったんだー。ふーん……、知らなかった」

突如の声に、ゾクリ、と背が凍る。

振り返った先にあったのは、目を黒一色で染めたノフィーネの、恐怖の権化たる視線。

……どこでヤ○デレのスイッチふんだんだろうか？

と考えていた隙に、メイナの追撃。

「しかも、私とご主人様は数時間前からずっと2人つきりだったんですよ」

ああ、なんか実体化してテンションが上がったのか、サドレベルまで上がってやがる。「へー……、久郎君がメイドさんと……ねえ……」

あああああ！ ノフィーネの背後に負のオーラが立ち上って……
「しかも……」

「これ以上何も言わせるか！」

メイナが何かを言うのかは分からない。だが絶対、俺の立場を危うくするに、違いない！

阻止するためにも使わせてもらう！

来たれ、神話級武器！

「『縛槍エリクソ……』」

「それで……縛るの？」

「へー……そんな趣味が……」 うわあああああ、墓穴掘っ

たあああああ！

「久郎君・・・、ちよつと齒あ食いしばろうか」

ちよつ、どこのヤンキ、グフォ！？

ツツコむ隙さえ与えられず、ノフィーネの一撃が、俺の脳天に加えられた。

ちよつ、ノフィーネ・・・。齒あ食いしばらせた上でかかと落としとか・・・。

・・・俺の口内環境がひどいことになったのは、いうまでもない。

C

「以上、私からの小粋な冗談でした」「なんだ・・・冗談だったの。あー、びっくりした。いやー、すっかり騙されたよ」

嘘だ・・・、今思えば途中から絶対悪のりしてただろ。若干、目が笑ってたのを見たぞ俺。

「まあ、一部事実も混じってますがご心配なく、私はご主人様にそういった感情を抱いてませんから」

ああ、俺むくわれない・・・。

確か、メイナが誕生したてのころ・・・数十分はいい子だったはずなのに、どうして、こうなってしまったんだろう？「ご主人様、マゾっ気があるんじゃないですか、変態」

「久郎君ってそうだったの？ 僕をいじって楽しそうだったのに以外だなあ、変態」

今、わかったことがある。・・・言葉って人を殺せる。

「あれ？ 久郎君。いきなり倒れてどうしたの？」

誰のせいだろうな。ホント。

にしても、この二人は仲がいいな。姉と妹みたいだ。

確か、メイナの方はノフィーネの顔がベースになっていて、髪とか身長が変わって、胸が・・・、

ゲシッ！

「ノフィーネ・・・いきなり何で・・・」

「何か、失礼なことを考えていたような気がするからです！」
女の勘って怖い・・・。

と、ノフィーネが何かに気がついた様に。

「あれ？　ところで久郎君。この子の自己紹介まだされてないよ」
そう言えばそうだった。

「それじゃあ、ご主人様。自己紹介をしてもよろしいですか？」

「ああ、是非やってくれ。あと、できれば久郎と呼んでくれ。ノフィーネの視線が怖い・・・」

「かしこまりました。久郎ご主人様」
くっ・・・いつか復讐してやる。

そうして俺がどのように復讐してやろうかということを考えて、
結局無理だと結論づける間に。自分が半霊アンドロイドであるだとか、どうやって生まれたのだとかを、メイナはノフィーネに説明し
終わっていた。

さて、話が終わったのなら、一つききたいことがあった。

「・・・今何時だ？」

「すぐく今更だね・・・午後の4時だよ」

ほう、相当寝ていたな俺。

時間を確認したら急に腹が減ってきた。

「そうだ、お粥作ってあるけど、久郎君食べる？」

そう言ってノフィーネは、キッチンにお粥を取りに行くために部屋を出る。

部屋には俺とメイナが残った。

「なあ、メイナ」

「なんですか？　久郎様」

おお、ちゃんと呼び方が変わってる！

急に、俺の目から汗が出てきたのは何故だろう・・・。　　ってそ

うじゃなくて。

「時神の過去について、もっと『残知回想』で見れないのか？」

「あの力は、情報がないと使えないんです。時神様が話して下さるとも思えないので、・・・そうですね、記録した文献や、他にその事を知っている人がいればあるいは・・・」

文献なんかがあるとは思えないが、知っている人か・・・。

創造神あたりが何か知っていたりしないものか・・・。ん？

「・・・そーいや創造神は？」

「川へ洗濯に・・・」

「昔話の爺さんか」

「お婆さんですよ」

・・・そんな事はどうでもいい。

「朝のうちにどこかへ出かけられましたよ。何の用事だったのかは知りませんが」

コンコンッ！

メイナが話し終わるちょうどいいタイミングで、部屋のドアが叩かれた。

「・・・久郎君」

ドアの向こうからノフィーネの声。

「・・・ここ開けてもらえるかな？」

ああ、なるほど。

手がふさがっていて、ドアを開けられない、と。

俺はドアの向こうのノフィーネに下がるように伝えてから、押しドアを開けた。

「ありがと・・・久郎君。そのテーブルに・・・置いてもいい？」
ノフィーネは、大きな土鍋と三人分の食器が乗ったお盆を重そうに持っていた。

「ああ、別に構わないが・・・、ノフィーネも食べるのか？ それ

にメイナに分まであるが・・・」

「よいっ・・・しょ！　だってこの量を一人で食べられないでしょ？　メイナさんも食べる？」

「あ、ご馳走になります」

そそくさと、いすを持ってきてテーブルの一边に陣取るメイナ。とりあえず俺たちも座ることにする。

配置はノフィーネと俺が向かい合って、俺の左にある辺にメイナがいる形だ。

代表してノフィーネが音頭をとる。

「せーの・・・」

『いただきます』

うん、やはり食前のかけ声は重要だ。少しずれたけれども。

ガツガツ、パクパク。・・・まだ4時だというのに、他の二人はよく食べる。というかメイナって普通に飯を食うのか。

「ところでメイナ、少し聞きたいんだが」

「ふ？　ひょっほ、はっへへくははい（ん？　ちょっと、待っててください）」

ほうばっていたお粥をメイナが飲み込み終わるのを待って、俺はきく。

「お前もこの別荘で過ごすつもりなのか？　一応、部屋なら貸すが」

「いえ、用事がない時は、情報状態で久郎様の脳内にいるつもりなので・・・ほはいはい（おかまいなく）」

食いながら言うな。

「はへ、ふほーふん、ほっほはへはひほ？　（あれ、久郎君、もっと食べないの？）」

ノフィーネ、お前もか・・・。

てか、お前らが食い過ぎなんだ。俺も少しずつは食ってるぞ。

とか思ってたら、いつの間にかお粥がなくなっていた。・・・確か始め、土鍋に目一杯入ってた記憶があるんだが、・・・今、目の

前の空の土鍋を見て言えるのは、いい食いつぷりだったてことだけだ。

「あ、そうだ久郎君」

ノフィーネは食器を片付ける途中に何かを思い出したようだ。

俺は黙って続きを促す。

「実は、もう冷蔵庫の中に食材がほとんど残っていないんだけど・・・どうする？」

あー、そうか。

確か爺さんが・・・だから、無くなるわけだ。頭数も増えたし、あのバカが意味不明な食い物を作ったし。

そうだな・・・。

「それは買い物に行くべきです！」

そう力強く言ったのは意外にもメイナ。

「どうしたんだ？ いきなり・・・」

「シヨップングですよ！ 出不精な久郎様を外に出すためにも、買い物をするべきです！」

それはいいが・・・こいつがそこまで力強く言ってるのは何故だ。

「あ、もしかして・・・」

俺が答えを出す前に、ノフィーネが気がついたようだ。

「メイナさん、買い物をしてみたいの？」

「はい！ ぶっちゃけそうです！」

ぶっちゃけ、って・・・。

「だって、まだ買い物という行為をしたことがないですし、人間らしくなって、そういう欲も出てきたんです」

なるほど・・・。まだ、人間になりたい的イベントが残っていたわけだ。

「それなら久郎君。明日は買い物の日にしようよ？ 神様たちには

僕から言っておくよ」

「まあ、異論はないが・・・。明日は雪が降るらしいし・・・。明後日以降、晴れたら行くことにしよう。それと、ついでに病院に寄

「ってもいいか？ 爺さんの見舞いに行こうと思うんだが」

二日前は行く気が全くなかったが、俺の力について知った今となつては、行きたいという気持ちが強くなっていた。・・・一つだけ心配事はあるが。

「うん、いいよ。じゃあ決まりだね」

嬉しそうな笑顔のノフィーネが土鍋と食器を乗せたお盆を持って部屋を出ようと、

「・・・久郎君」

「あー、了解」

俺はドアを開ける。

ガチャ。

「またまたありがとね久郎君」

今度こそ部屋を出ていったノフィーネ。

「・・・さて、俺は少し調べものでもするか」

俺は部屋にあるパソコンのスイッチを入れる。

「何を調べるんですか？ 久郎様」

メイナがきいてきたが。決まっているだろう。

「平安時代について、だ」

C

「・・・こちらへんかの」

時神は今、京都に来ていた。

なんのためか。それは、榊原邸が昔あった場所に用があったからだ。

「もう少し、あっちだったかもしれぬな」

普通の人間には見えなくなる不可視結界をまとい、体を宙に浮かせて東へ数十メートル。

封印されていたとはいえ、時神には『目』があった。だからあの後、あの屋敷がどうなったのかを見てきた。

だが、数十年くらい目を離れた隙に、辺りはだいぶ変わってしまった。

時神の胸に、初めて屋敷の面影がなくなった頃に感じたものと、同じ冷たさが胸を差した。

「・・・ここじゃ」

時神がたどり着いた場所。そこには一軒の屋敷が建っていた。だがそれはあの頃の屋敷ではない。建て直されたものだ。

「効煽・・・」

どうしてあの時、効煽は自分を裏切ったのか。今でも全くわからない。ただ自分を裏切った事だけは、はっきりとした事実。

「破壊神様・・・」

そして封印されし時に、意志を飛ばして話し相手になってくださった破壊神。

彼が自分に『目』を与えてくれたことも事実。だから永きにわたる封印の中でも心を保っていたのだ。

「・・・」

何かが違っている気がする。

気がするが・・・事実がそれを否定する。

「・・・バカ、じゃ」

やがて時神は、それを気のせいだと決定づける。

そして、ここにきた目的を、果たす。

「・・・神を縛りし封印よ。我は効煽の代行人。その権限を持って命ず。・・・その身を裂いて、神を解放せよ！」

ウゴオオオガアアアアア・・・。

昔、効煽から聞いた解除の呪文を詠唱する。

すると、青白く光る封印が宙より現れ、獣の声のような音を上げ、

粒子となって崩れていく。

効煽の封印は異質で、封印自体が一匹の妖魔化をしている。だから封印された妖魔などは自力で抜け出せないらしい。

実際、時神自身も自分の封印を未だ解けずにいる。なら、今の封印解除は何だったのか。

時神にとっては千年来の再会となるあの男。

ウゴアアアアア・・・。

完全に粒子化した封印の跡に残ったのは、一人の神。

「うおおあああ！　世界は滅びたのかあ！？」

「久しいの鎧神。相変わらず暑苦しい奴じゃ」

「む？　時神！？　どういうことだ！　これは！　ここはどこだ！」

時神とは違って『目』は与えられなかった鎧神には、千年後の日本であるということが分からなかったんだらう。必死に今の状況を確認しようとする。

「言っておくがの。貴様が封印されてから千年の歳月が過ぎ、効煽はおに死んでおる。それと、世界はまだ滅びておらぬよ、まだ」

まだ、に意味と力を込めて言う時神。

「そうなのか！　ということは・・・」

鎧神は、兜の下の表情を歪ませる。

「貴様は一人ということだあ！　復讐してやるぞ時神ィ！！」

手にあの時と同じ鎌を出現させ、時神を切り裂こうとする鎧神。

だが、鎧神は千年のブランクと、時神の力の変化に気づいてなかった。

「『時止め』」

鎧神の動きがピタリと止まる。千年前には動きを鈍らせる程度しか出来なかった時神だが、あの後も効煽と共に鍛錬し、破壊神に力の一片を与えられたことにより、神クラスでも体感時間を操作出来るようになった。

「最大火力・・・『魔弾』」

ドゴォン！！

「な・・・ガハッ・・・」

空中から地面に叩きつけられた鎧神。兜の下は驚愕の表情に歪んでいる。

「これが今の、御前との力の差じゃ」

冷めた顔で言い放つ時神。だから逆らっても無駄だ、と暗に言っているような目。

だが、千年経っても鎧神は鎧神。負けず嫌いのプライドは、変わってはいなかった。

「我が・・・この我が・・・、貴様などに・・・」

改めて鎌を握り直し、黒い旋風を最大級の鎌の刃となし、時神を正面に見据えて叫ぶ。

「我が負けるかああああああ！！」

「だから無駄じゃと言うておろうが、『時止め』」

までもピタリと動きが止まる鎧神。そして、これによって、鎧神にとっての最後に目に焼き付けられる光景は、信頼していた人に裏切られたような冷たい目で鎧神を見る、時を操りし神の姿に決定した。

「獄法魔術『閻魔の猛火』（えんまのたけび）」

強力な魔術の発動には時間がかかる。だが時神にとって、時間は無限にあるに等しい。

地獄の業火が時神の手に呼び込まれ、放たれる――。

ドゴォォォォォォォォォォォォ！！

「・・・我・・・が・・・」

鎧神が最後に眩こうとしたことも、その業火にかき消され、強固

な鎧も溶かされる。すると・・・、最後に意外なものが見えた。

「中身が・・・ないじゃと？」

「我が・・・主に・・・敬意と・・・勝利・・・を・・・」

それが、最後の鎧神の言葉。

時神は物事を確信し、驚愕に口を開く。

「・・・鎧が本体・・・じゃと？」

といっても首から上だけはあったのを見ている、それが誰のものを確認することはできないが。

鎧神は、鎧に精霊がついた意志を持った存在で、主を守ることを生きがいとしていた。

だが、主は死んだ。戦争中、寝ている所を襲われた。

そこに、鎧が守る余地などありはしない。

鎧は主を探し、首から上だけを見つけた。そして誓った。

「もう二度と、主を鎧から出さない。二度と、主に敗北を与えない」と。

時間の経過とともに、鎧は強くなっていき、やがて神の称号を得るまでになったが、その時には、主の事を完全に忘れて主の頭も自らの体とし、ただ負けてはならないことだけを覚えている、鎧神だけが残っていた。

だがその事を、時神や他の者が知ることはない。

少し物思いにふけていた時神だったが、やがて屋敷を離れ、別荘に戻っていった。

C

「だが、鎧神の事を記録している奴もいた。っと」

防塵用マントを羽織り、髪の色は紅と黄が混じっているのがトレードマーク、

古王は、時神と鎧神の一部始終を見ていた。

「・・・哀れな鎧の精霊だ。強すぎた忠誠心故の悲劇ってやつか」

古王は記録した。1人の神の誕生から消滅までを。そして、それは古王の手により歴史となる。

「さて・・・いきますか」

用がなくなった古王もここを立ち去る。

そして屋敷には、静寂が戻った。

L

カタカタ・・・カシヤツ。

「うーん・・・甘かったか」

俺がメイナに平安時代について調べると明言してから三時間、
・
・
・
全く成果はあがってなかった。

「あの、久郎様。結局、なにを調べようとしてたんですか？」

さつきからずっとそばにいたメイナがきく。ま、そばにいたと言
ってもずっと俺の部屋のマンガを読んでたけど。

さて、俺がさっきまで調べてたのは平安時代に起こったことや、それが書かれていた歴史書について。あと願わくば陰陽師や妖魔について知れたらいい、と思っていたが・・・、

「こういったものに、時神や効煖の爺さんや榊原屋敷について、何か書かれていたりしないかと調べてたんだよ」

見事にそんな記述は存在しなかったがな。じいさんから引き継いだハッキング技術も駆使して、やばいところも覗いてみたのに・・・。

「それは犯罪ですよ、久郎様。それに、裏世界の情報が、一個人の力で破れるようなセキュリティのところにあるわけじゃないじゃないですか」

・ ・ ・ まあ、やつぱりそうか。

「なので代わってください」

$$\begin{matrix} \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \wedge \\ ? \\ \bullet \end{matrix}$$

「代わってって……お前なにする気だ？」

「ハッキングです。私はアンドロイドですよ。情報操作は得意中の得意です」

いや、アンドロイドがそういうものなのか俺は知らんのだが……
 というかお前さっきまで犯罪だとか言っただけで否定してなかったか？

「まあまあ、任せてください。こんな楽しそうな・・・じゃなくて、大変そうな作業、久郎様だけに任せるわけにはいきません!」

おい、今ちよろっと本音でたよな。・・・まったく。

仕方がない。言っても聞かなそうだし。

俺はパソコン前の席をメイナに譲る。早速、ツールを開くメイナ。

カタカタカタカタ・・・、

ほー、これはこれは・・・。どうやら情報操作が得意というのは間違いじゃないらしいな。

「けど、ほどほどに・・・」

「あ、久郎様。もし私の邪魔をしたら、『キャー、変態!』と叫んでノフィーネ様呼びますよ」

ほどほどにしないでいいぞ。うん、存分にやりたまえ。・・・ホント、何でさっきまで俺、ご主人様と呼ばれてたんだ? 絶対、主従関係にねえよ。

「・・・。」

カタカタカタカタ・・・。

はあ、メイナはまたパソコンに集中し始めたし・・・さて、俺はする事がなくなったな。

粥を食ったら腹いっぱい夕食もとる気ないし・・・。

ま、とりあえずダイニングにでも行くか。

C

「あれ時神に創造神、帰ってきてたのか」

俺がダイニングに行くと、そこにはテーブルについてノフィーネお手製の夕食を食べている二人の神の姿があった。

「妾は・・・用事が済んだのでな」

と、わずかに表情に影を落とした時神が答えた。こいつがこんな顔をしてるなんて・・・さっきの、過去話のせいだろうか。

「ああ、俺も用事が済んだから帰ってきた。これは土産のタバラガニだ」

タラバガニな。こいつはむかつくほど、いつも通りだな。

てかタラバガニって・・・どこまで行ってたんだ。

取りあえず俺に手渡すな。

「せっかくお前にも見せてやろうと、冷蔵庫に入れないでいたんだが・・・」

「残念だったな。タラバガニならわりと見慣れてる」

時期になると爺さんがよく持ってくるからな。

創造神は残念そうにタラバを冷蔵庫に入れる。

「そういや・・・今ってタラバガニの時期だったか？ うーん・・・」

そうだったような、そうでなかったような。

「あれ、久郎君。ご飯食べるの？」

キッチンから例によってエプロン姿のノフィーネが出てきた。

「いや、顔を出してみただけ・・・って、ノフィーネ。その手にあるのはなんだ」

「え？ 私のお夕飯だけど」

いや、それは見ればわかる。いつぞやの創造神の料理じゃないんだから。

それよりも、さっきあんだだけ粥を食ってまだ食べるのか。

「食べ盛りなんだよ」

不死身のせいで成長しないくせに・・・とはツツコミたかったが、なんか気にしてるっぽいので止めとく。

む？ そういや成長しないって何で俺が知ってるんだ？ ああ、確かさっき俺が寝てる間にノフィーネが言ってたど、後でメイナに聞いたんだったか。

「ま、いいや。取りあえずもう寝るから」

「え？ 久郎君、まだ八時前だけど？」

「いや、自分でも自分の体がよくわからないが、もう疲れがピークに達してるらしい」

さっきたつぷり寝ていたが、実際は『残知回想』で映像を見てたわけだしな。

「ま、明日早く起きるから、問題はない」と、付け加えておく。

「そう？ なら、ゆっくり休んでね。また明日」

そうノフィーネの笑顔に見送られながら俺は自室へ戻る。

っと、そういや、確かメイナが居たんだったか。・・・うーん、まあ寝てるだけなら別に邪魔にはならんだろ。それよりあいつ、はかどっているんだろうか？

と考えている内に自室の前にたどり着いた。俺はなるべく静かにドアを開ける。

キィ・・・。

カタカタカタカタ・・・。

〈メイ〉

・・・ってな感じで、ご主人様が私を束縛しようとしたわけよ。

〈ナシっち〉

ほう、それは興味深い。それで、その後は？

〈メイ〉

でね、・・・なことがあって、最後にご主人の脳天にかかと落としが・・・。

〈クロウ〉

メイさん、ちょっと後ろ向いてください。

メイナが振り向く。

「・・・。」

俺は携帯片手に、メイナにきく。

「何やってるんだメイナ」

「・・・。」

〈メイ〉

お、落ち着いて話し合おう。これには深いわけが・・・。

〈ナシっち〉

お、謎の人乱入。詳細希望。

〈メイ〉

そんな場合じゃ、ああああああ

〈ナシっち〉

どうした！？　これは・・・逝ったかな。

「さて・・・どうしてお前は掲示板なんか開いてるんだ？」

「えーと、それは・・・、昔々あるところに・・・」

「俺は昔話を聞くつもりはないが？」

「・・・いいじゃないですか別に、コミュニケーションは大切です
よ」

「今は他にやる事があったんじゃないのか？　結局どうなった」

「・・・ボウズです。・・・さらば」

サアッ、と粒子状になって消えるメイナ。・・・情報状態か、気
まづくなって脳内に消えたな。

まあ、いいや。俺は数時間前まで寝ていた布団に、この服のまま
着替えずに再び潜り込む。中はあまり暖かくなかったが、睡魔のせ
い・・・というかおかげで俺はすぐに眠りにつくことができた。

どこかわからない、闇に包まれた空間に、二つの人影があった。
「・・・破壊神様のご光臨まで後少し・・・後少しで世界が変わる・・・」

老成した雰囲気を持つ一人が、天を仰ぐ。

「ええ、そうですね。しかし・・・気がかりな事が一つある。・・・
そうですよね、我が主、ベロ・ランザ卿」

と、もう一人がきく。

「うむ、・・・創造神。奴に何ができるか分からんが・・・動いているのは確かな事実なのだよ。油断ならん相手だ」

「なら、こちらも動きますか？」

「・・・いや、今はまだ、刀王も槍王も墮天使も動けん。信者達を動かすには早すぎる」

「・・・なら、我が輩達が動こうか？」

先程までと違う声音、いつの間にか、人影が一つ増えていた。

「・・・吸血鬼の王、ハザードか。音も無く忍び寄るとは、少々無礼だとは思わないか？」

「これは失礼、ベロ・ランザ卿。それは我が輩の癖なもので。ところで・・・破壊神様のために障害を排除するため、餓えた吸血鬼どもを動かそうと思うのですが、いかがで？」

「・・・戦争にはまだ早いぞ」

「心得ています。そう数は出しません。二、三匹程度、優秀なものを・・・場合によっては我が輩自らが出ましよう」

「それが心配なのだが・・・、まあいい。なら行け」
「はっ」

人影が一つ飛び立ち、残った二人もやがてその場を去った。

C

「街ですよ♪」

妙にハイテンションなメイナが叫ぶ。・・・周囲の視線が痛い。

さて、メイナが叫んだ通り俺たちは街に来た。あの後二日ほど雪の日が続き、その間メイナが『暇暇麻痺麻痺』とか言ってるさかったが、今日12月28日。ようやく天気は快晴。見事ショッピングをする運びとなった。ちなみに今は午前九時半。

「メイナちゃんはやぎすぎたよ」

とか言ってるノフィーネも顔が浮かれてるがな。ノフィーネ自身も二日間、別荘にこもりっぱなしで気づかれてたんだろう。その間、暇つぶしで遊んでいた時に、ひと騒動があったりしたが、今話すことでもないので省略する。ま、本当にどうでもいいことだし、もしかしたら言わないまま終わるかもしれない。

ちなみにいつの間にか『ちゃん』付けでメイナのことを呼ぶノフィーネだが、どうやら昨晚の内に仲良くなったらしい。

てことは、俺が寝ている間でも、メイナはモード変更ができるってわけか。

「しかし、今朝になっていきなり『街に行く』ってのにはびっくりしたな。昨日のうちに話しといてくれよ」

とは、創造神の文句。時神も無言ではあるが、きっと同じことを考えてるだろう。

どうやらあの二人は、この神たちに今日について話すのを忘れていたらしい。まあ、そんなに怒っている様子でもないようだが。

そんなこんなで、朝起きたら早速準備をさせられて、創造神がどこからか持ってきた車に乗って、五人全員で街に来たわけだ。

さってと、まずすることは・・・、

「ゲーセンに行きましょう！」

「ショッピング行こうよ」

「ん？ 食料の買い出しではないのか？」

「・・・茶屋かの」

・・・見事にバラバラだな。まあ、今日1日丸々ここで過ごす予定だから、全て行くことも問題はないだろうけど。なるべく効率が

いい方がいい。

取りあえず、二班に別れる事にする。

目的のない創造神と、茶屋へ行きたい時神には、買い出しを頼んで、その後自由行動に。

俺たち三人は、ゲーセンのあるショッピングモールへ向かうことにした。

久郎たちと別れ、最寄りのスーパーへ向かって数分、創造神は唐突に時神に話しかけた。

「・・・おい、時神。変な気配を感じないか？」

「・・・そうかの？」

「ああ、街に入る前・・・屋敷を出て数分ぐらいのところから何となくは感じていたんだが・・・」

創造神は後ろに振り返る。無論、怪しい人影など見えはしない。

だが、気配に微かに動揺のような揺らぎがあった。これは確定だ。

「尾行されているな。襲ってくる気配はないようだが」

「・・・そうじゃな」

しかし時神は気のない返事、上の空とでもいうか。

「・・・どうしたんだ？ 数日前からやけにブルーだが、何かあったか？」

「いや、何もないのじゃ・・・・・・心配かけてすまぬな、創造神よ」

「・・・ダウトだな。こういう事を言うやつは大抵何かを抱えている。」

（こいつの場合・・・破壊神が逃げ道みたいなのだからな。このままはずいか）

そう確信した創造神は、買い出しの後、時神の気分転換になるような所へ行くことに決め、警戒しつつさっさと足早にスーパーへと向かう。

・・・だが創造神は、神としての勘から、それはきつと無駄になるだろうな・・・と、そう感じていた。

C

現在、俺たちはショッピングモールに向かい歩いてる最中なのだが・・・、

うーむ・・・、これはまずい事態だ。

「聞いた話なんだけど、吸血鬼って、ホントは日光に弱くなくて、ニンニクも十字架も大丈夫なんだって」

「そうなんですか？　へえー・・・」

と、俺の両脇にいるノフィーネとメイナは、普通女の子の会話にはならないだろうことを、のんきに話しているわけだが、・・・俺はさっきから気が気でならない。

少し忘れがちだったが、片や不死身の力で驚異の美白肌、その上アイドル並みに整った顔の女性。片やその女性を基に創られたアンドロイド。

つまり両方とも美人であり、俺は両手に花状態なのである。

いや、問題はそこじゃない。問題は・・・やはり、周囲の視線が二人に向くということと、

「ねえ、良かったら。俺たちと・・・」

ドスッ、ガゴッ！

・・・こういう浮ついたやつらが近寄ってくるのだ。

とりあえず、裏拳と回し蹴りをそれぞれに浴びせ、気絶させる。

自分でも忘れがちだが、一応俺は良いとこのお坊ちゃんで護身術は心得ているんでね。持久力はないが力はある。

「おー、久郎君すごいね」

「久郎様、以外に強いですね」

と二人は、一時、感嘆の声を上げるが、すぐに世間話に戻る。まあ、この二人なら自分で相手をのしてしまうこともできるんだろう

が。

・・・とまあこんな感じで、さっきからこの二人、ひっきりなしにナンパされ、今ので6，7人目だ。・・・俺がついているにも関わらずよくも、まあ。

「久郎君が頼りなく見えるからじゃないかな」

「久郎様がボーっとしてるからです」

・・・二人からもこう言われると、少ししよげるぞ俺・・・。

大体、ボーっとしなけりゃいけないのは、おまえ等が二人だけで話し合ってるからで・・・、って聞いてないよなやっぱり。

二人は自分たちでズンズンと先に進むので、俺も仕方がなく並進する。

「へイ、彼女！ 俺とグボファ・・・」

・・・はあ、やれやれだ。これで八人目。

早くショッピングモールに着かないものか・・・。

と、考えていたら着いていた。体感時間は嫌なことをしてる間、遅く感じるものだと思っていたが、そうでもないのか。・・・まさか、時神が・・・なわけはないか。

さて、俺は正面にそびえ立つショッピングモールを見上げる。

たしか創業何十周年とかいうこの老舗デパートは、地上七階ほど。田舎でもなく都会でもないこの辺りにしては、わりと大きめなところだと思う。

無論、中には健全なゲーセンもあり、ブティックなども入っている。

人が多いのが俺としては気になる点だが・・・そんなものを気にしてはいられない。

「で、到着したわけだが、まずは何を？」

「身軽なうちにゲーセンですよ！ 久郎様！」

聴き終わるか終わらないかぐらいにメイナは即答。

「ノフィーネは？」

「僕もそれでいいよ。できればUFOキャッチャーとかプリクラと

か・・・あとコインゲームもやりたいかな」

へえ、ノフィーネはゲーセンに行くことに案外乗り気なようだ。

まあ、誰にでも楽しめるのがデパートなんかに在るゲーセンだし、俺達ぐらいの少年少女ならなおさらそうだろう。・・・ま、実際のところノフィーネの歳は老人というレベルをはるかにすっ飛ばしてるらしいけどな。

そんなノフィーネの意見もあつて、メイナはますますヒートアップ。

「そうと決まればゲーセンですゲーセン！！ オンラインゲームもやるんです！」

ああ、はいはい。分かったから少し落ち着け。子供かお前は。

「生後約三日です！」

・・・まあ、それもそうだが。思えばこの二人、外見じゃ一緒にいるなのに、実際の年齢がものすごくかけ離れてるな。だからと言ってどうというわけでもないが。ノフィーネは年齢が止まってるらしいし、メイナはアンドロイドだから初めっからこの年齢で生み出されたと言える。つまりこの二人に実質的な歳の差はないというわけだ。

まあ、だからと言ってどうというわけではないが。

「久郎君、早く行かないと、メイナちゃんが暴走しちゃうよ」

言われなくてもわかってる。

とりあえず中に入ることにする。開く自動ドア、確か中に入って右に曲がつてまっすぐ行けばエレベーターっと。たしか、ゲーセンがあるのは五階だったはず。俺は上行きのボタンを押す。

「ゲーセン♪ ゲーセン♪」

一体、ゲーセンのどこに、メイナの琴線にふれるものがあつたのか。

チン。

お、エレベーターがついたようだ。

中に人はいない。まあ、こんなに早く来てすぐ帰るやつなんてい

ないか。

俺は五階のボタンを押す。エレベーターは途中の階で止まることなく、すんなりと五階についた。

あとはエレベーターから降りてまっすぐ進んで左に曲がれば・・・さまざまゲームが出す音の不協和音に満たされたゲームセンターに到着つと。

「おおー！　これが夢にまで見たゲーセンですか！」

と、隣でメイナが目をきらきらと輝かせている。・・・いつもこんな感じで無邪気なら可愛げがあっていいんだがな。黒いからなこいつ・・・。

とか思ってたらず速ふらふらつと、メイナが入っていく。って、あいつ金持ってないだろうに。・・・あ、戻ってきた。

「ん」

・・・俺に向かって手のひらを出してきた。・・・可愛げねえ。なんとなく目をそらし、ノフィーネの方を見る。

「あ、久郎君、私にも」

また手のひら。

・・・ま、まあ二人とも金を持ってないってのは知ってる。俺が出すしかないってのも分かってる。

だけど、なんか出し渋ってしまうのは・・・俺の心が狭いからではないはずだ。

「「はやく」」

・・・しくしく。金をたかられている気分だ・・・。

しょうがなく財布を開く・・・あつ。

「・・・・・・・・」

「どうしたの久郎君」

俺の様子に気づいたノフィーネが俺の顔を覗いてくる。

そして財布に視線が移る。

「あ、・・・」

・・・なんで気がつかなかったのだろう。多分あれだ、今朝はバ

タバタしてたから気が回らなかったんだな。だから、これは仕方ないことだ。

「・・・く、ろ、う、さ、ま・・・！」

うわっ、メイナいつのまに！　グ、グエ・・・。

メイナの手によって、一気に俺の首が締めあげられる・・・。

「これはどういうことです！　財布の中にカードしかないじゃないですか！　紙幣は！？　硬貨は！？」

ぐ、首がどんどん締めあげられていて・・・。。。。し、しぬ・・・。

「わぁ！　メイナちゃんストップストップ！　久郎君が死んじゃうよ！？」

その後、ノフィーネの必死の説得によって、俺は三途の川の船頭に料金を渡すか渡さないかぐらいで何とかこの世に戻ってきた・・・。しかし船頭の奴、「カードでもOK」なんて言ってたが。渡さなくて本当に良かった。

「で、どうしてくれるんです久郎様。ゲーセンを楽しみにしていた私の心を踏みにじりましたね！」

「お、落ち着いて、メイナちゃん。久郎君がお金を引き出してくれれば大丈夫」

いやそれはそうなんだが、運の悪いことに下のATMで引き出せそうなカードはない。

俺の財布は、店ならともかく、実際の紙幣や硬貨でないと意味がないゲーセンには相性が悪いようだ。

「うー・・・うがー！」

「ちよっ、まっ、メイナ！　なんとかする、なんとかするから！　ノフィーネちよっと助けてくれ！」

暴れるメイナをノフィーネに抑えてもらいつつ、何か策を考える。

何か、何かないのか！　俺の命がかかってるんだよ！

俺はポケットの中を探る。えー、別荘の鍵・・・って、これは壁が壊れてるからほとんど意味無いんだよな。一応中に入ってきた相

手を自動で捕まえる、的な魔術の魔法陣を創造神が損壊部に描いていたから、防犯の面では大丈夫らしいが・・・、ってそうじゃない！

次に、これは・・・ペンダント？・・・ああ、ノフィーネにもらったやつか。今まで全然ふれなかったが、昨日までは肌身離さず付けていたんだ。が、・・・今日は何度も言うがバタバタしてたから、こうやってポケットにしまっただけ。・・・って、大切な品だけどもこれ違う！

他には・・・携帯。・・・携帯？

俺はコイン貸出機の方を見る。さらにUFOキャッチャーも見ても俺は胸をなでおろす。

「メイナ！ 大丈夫だ！ 携帯でコインも買えるしゲームもできる！」

「うが・・・。うが？」

おっと、言語中枢が破綻寸前だったようだ・・・危ない危ない。そう、解決策はあれだ。ケータイがお財布になるってやつ。このゲームや貸出機にはそれ用の四角いやつが付いている。ふー、対応してて助かった。

まあ、問題点是对应していないのがやれないってことだが・・・いたしかたないだろう。

若干、メイナはしぶるかなとも思っていたが、わりとすんなり了承してくれた。

「で、なにからやるんだ？」

「うーん・・・まずはあれ」

とメイナが指さしたのは、なにやらカプセルみたいなもの。どうやらあの中に入ってやるものらしく、メイナによるとあれは全国大戦ができる多人数参加型オンラインゲームなんだそうだ。多分バトルするやつだろう。

早速、四角い部分に携帯をかざすメイナ。そして中に入る。

・・・しかしこれは、人のやってる映像が見れなくて暇だな。携帯もメイナが中に持って行っちゃったし。

「あ、久郎君。こっちのモニターで見れるみたいだよ」

ノフィーネが指さす。へえ、知らなかった。・・・えと、これがメイナか？・・・なんか獅子奮迅の働きしてるんだが、あいつこれ初めてじゃなかったっけ。

数分して、中からメイナが出てきた。

「ふう、私もまだまだなあ・・・」

とか言いながら額の汗を拭っているが、俺が見た中ではお前が一番敵を多く倒していたと思うんだが？ おかげでお前のチームは圧勝だったぞ。それとも夢中で気付いてなかったのか？

「んじゃ、次は・・・」

「あ、今度は僕のやりたいものやってもいい？」

と、ノフィーネは一つのゲーム台を指さす。あれは・・・リズムゲームの金字塔と呼ばれしもの『タイタツ』だな。

早速携帯をかざして、俺とノフィーネが二人つく。

「あ、久郎君。言っておくけどこれは勝負だからね」

と隣から宣戦布告。

「ああ、わかった」

と俺。ところで難易度はどうしようか。

「やっぱ最高難易度ですよここは！」

と、横からのメイナの言葉で、俺達は最高難易度でプレイするこ
とになった。

そして曲を選ぶ。どうやら三回までやれるらしいので、じゃんけ
んで勝ったノフィーネが二曲、俺が一曲選ぶこととなった。

まずは、ノフィーネの選曲。

「ここは王道で」

とノフィーネが選んだのはシリーズ初期からある最もポピュラー
な曲。張り詰める空気、なにゲームなんかマジになってるんだ
ろう、なんて少し思わないでもないが、これは勝負。負けられない
戦いだ。

ゲームからの始まりの合図。そして流れ出す曲。

最高難易度の中でも割と簡単なこの曲を俺は必死になってたいた。横を見ている余裕はないが隣のノフィーネもきつと必死なはず。なぜならこれは、勝負だから。

ダン、ダダダン！・・・。

ところどころミスはしたが、最後の方に連続して叩けた俺の得点はわずかにノフィーネの得点を上回った。

「よし、まずは俺がリードだな」

「ふっ、まだ一曲目だよ。勝ち誇るのにはまだ早いよ」

二曲目、俺は有名なアニソンを選択。・・・したつもりだったが、隣のノフィーネは何の曲か知らないようだ。・・・メジャーだと思っただけだな、これ。

始まりの合図に再び張り詰める空気。流れ出す曲・・・って、ちよっ、まっ！

「え、ちよっ、叩けな・・・」

ちよっ、叩くやつが多すぎ速すぎ！

隣のノフィーネも同じ様子で、二人そろってテンパっていた。

ダン、ダダダダダ・・・。

・・・最後はもう適当だった。

得点もひどいもので、それでもわずかにノフィーネの方が上だった。

「くそっ、やるな！」

「ふふふ、なめたら痛い目見るよ、久郎君」

そして三曲目・・・、

『また、遊んでね』

・・・？ 突如、ゲームから聞こえた音声に唖然とする俺たち。

あれ、また遊んでねって・・・、俺たちは今遊びたいんだが・・・

。

「ああ、このゲームは『最大』三回やれるんです。成績が悪いと途中で終わりますよ」

という横からのメイナの言葉。

・・・そういやそうだった。最近では家庭ゲーム版しかやってなかったから・・・。

「久しくやってなかったから忘れてたよ・・・」

と、ノフィーネも勝負が途中で終わったやるせなさからテンションがツーランクダウンしている。

俺もそうだ、これじゃあ一勝一敗。引き分けなんかで終わるあつけない幕切れなんてつまらないもほどがある。

だから・・・、

「もう一戦だ!!」

ともに叫び、俺とノフィーネは次なる舞台、モグラたたきの前へと向かっていった。

「・・・あのー、むしろお二人の方が、はしゃいでませんか？」

C

モグラたたき。

近頃は不人気であり、あまり見かけないが、知名度だけは群を抜くゲームである。

「と言うわけで、今度はこの得点で勝負だ!」

「のぞむところ!」

・・・ん? いつのまにこんな変なテンションになったんだろうか。これが勝負という二文字に宿る魔力の力か。

って、今はそんなことどうでもいい。ただ勝負に勝つ、それだけだ。

再びじゃんけんの結果、先攻がノフィーネ、後攻が俺ということになった。

「僕の華麗なるハンマーさばき・・・とくとみるがいい!」

「なんで、モグラたたきにこんなマジになってるんでしょか・・・?」

メイナが何か言っているが、俺たちの耳には届かない。

ピーッ!

始まりの合図、ノフィーネは叩く、叩く、叩く!

序盤の簡単なころを無駄にしないよう、ノフィーネは的確な狙いと反射神経で余すことなく叩いていく。

しかし、中盤、どうみても叩ききれない数のモグラが穴から顔を出す。

(さあ・・・どうする?)

「ふっ、いくよ! 秘技『双鎚舞踏』!」

こ、これは! 普段禁止されている二刀流だと! 店員のいない隙を突いたのか!

通常、二刀流ともなれば、左右二つのハンマーを全く違う動きで使うため、テンパってミスしやすい・・・。

だがノフィーネはそれを見事に使いこなし、モグラを全て叩ききる。

・・・我が敵にして、恐ろしい奴だ・・・。

「だから、なんでモグラたたきがそんなハードな遊びになってるんですか・・・」

またメイナが何か言った気がするが、暑くなってる俺たちには聞こえない。

そして終盤、素早く出たり引っ込んだりするモグラを、ノフィーネは二本の鎚で猛烈に叩き、

ピーッ!

フィニッシュ！

「はぁ・・・はぁ・・・、どう久郎君。僕の見事なハンマーさばきは」

肩で息をしながらも、得意そうな顔のノフィーネ。

確かに素晴らしいハンマーさばきだった。得点も高くランクは『もうこうさん』という最高ランク。・・・だが、

「まだまだだな」

俺は言い放つ。

「・・・負け惜しみ？」

ノフィーネはいぶかしげにきいてくる。だが、決して負け惜しみなんかじゃない。

「そう、最終局面に行くにつれて増えていく『フェイントもぐら』。ノフィーネ、お前は度々それにつられて動きを乱し、出てきたモグラの生還を何度も許した！」

「！！」

「さらに言えばラストあたり、数の多さと速さにあきらめ、狙いを絞っていたためにさらに多くのモグラを見逃した！」

「くっ・・・、でもそこまで言うんだったら、久郎君。君は僕の記録を超えられるんだよね？ 越えられなきゃ、ただの負け惜しみだよ」

ああ、分かってるさ。

俺は無言でモグラたたきの前に立つ。

俺はハンマーを一本のみ手に取る。というのもこの店では本来禁止されているはずの二刀流を、今ちょうど後ろに来た店員に見られるわけにはいかないからである。・・・本当にタイミングが悪い。だがそんなハンデなど、俺には関係ない！

ピーッ！

開始の合図、序盤はイーजीミスをしないう叩く。

「まずは、順調な滑り出しみたいだね・・・メイナちゃんどう思う？」

「私に振られても困るんですが・・・」

俺は、叩く、叩く、叩く。今のところミスはない。

だが、そろそろ中盤。二刀流を使いたいけど・・・くそっ、店員はまだ後ろにいる。

くっ、店員を確認する暇も俺には惜しいというのに・・・きたっ！一本じゃ叩ききるのには難しいモグラ配置・・・こうなったら・・・

「秘儀『一本双刀』！」

「さっきから無駄に技名が中二ですね・・・」

とかなんとかメイナが言ってるが軽く無視。

さてこの技は・・・まず右手で奥のモグラをたたく。

「だけどそれじゃあ、手前のモグラは叩けないね」

ノフィーネの勝ち誇った声。

だがな、

「あらよっ！」

俺は叩いた反動を利用し、瞬時にハンマーを左手に向けて飛ばす。

「なんとっ！」

「うわゝ、無駄にスーパープレイですね・・・」

ハンマーを受け取った左手は、ギリギリのタイミングで手前のモグラを叩く。

これぞ、秘儀『一本双刀』。俺は秘儀を駆使しながら叩きまくる。

「そしていよいよ、終盤戦だね・・・」

そう、ノフィーネもミスが目立った終盤戦だ。

現在、背後に店員はいない。俺は心おきなく二刀流を使う。

そして、最も『フェイントもぐら』が多い時間に差し掛かる。

ここは例えプロでも危うい時間帯・・・。

「さあ・・・どうする、久郎君！」

フツ、決まっているだろう。

「『刹那の延長』！」

「「えっ、ひきょっ!？」」

あー、あー、何も聞こえない、何も聞こえない。

そして、叩く、叩く、叩く叩く!

こうして俺は、終盤戦もミスることなく、無事モグラたたきを終えた。

「フッフッフ・・・どうだこの高得点!　なんか機械がおかしくな
ってランクが枠外光ってるぞ」

たぶん『ここにいると絶滅させられるので、この仕事辞めさせて
もらいますbyモグラ一同』ってな感じだろう。

「うー・・・『刹那の延長』はズルくないですか？」

ノフィーネが頬をふくらませてぶーぶー言ってるが、あえて言わ
せてもらう・・・。

「勝った方が正義だ!　ようは勝てばそれでいい!　要約すると勝
負に卑怯も何もない!」

勝てば官軍負ければ賊軍。何をしようとも勝ってしまえば、それ
までの行動を正当化できる・・・って意味だと思う。たぶん。

「くっ・・・、わかったよ。今回は僕の負けだ」

しおしおとうなだれるノフィーネ。だが、すぐに調子を戻し。

「けどこれは始まりにすぎない!　僕は強くなる・・・強くなっ
て、僕は君を倒す!」

「あの・・・どこの少年漫画ですか、これ」

「ってことで、今度はUFOキャッチャーで勝負だ、久郎君!」

「しかも言ったそばから再戦挑んでますよ!？」

「望むところだ!　ノフィーネ!　何度でもお前の挑戦、受けてや
る!」

「いつのまにかお二人とも、私のテンション超えてますよね!?
私が完全にツッコミ側に回ってますよ!？」　もう、ついていけない
ので、コインゲームしてます私」

そう言って俺から携帯を受け取り、コインを借りてくるメイナ。
しばらくして、手に百枚ほどのコインを持って帰ってきた。

「とりあえず私、適当に回ってますから、勝負が終わったら言ってください」

と言ってまたどこかへと行くメイナ。

さて、それじゃあ・・・、

「勝負だノフィーネ！」

「望むところです、久郎君！」

そうして俺達はUFOキャッチャと向かう。

最初はチョットふざけてただけだが、なんか面白くなってきたので今はホント乗りでこういうことを言ってる状態だ。ホントは白黒つけるよりも、こうやって面白おかしく騒ぎたいだけかもしれない。本当に楽いと、俺は感じていた。多分、今までの俺の人生で最高に楽しい瞬間だ。

そして、その楽しい感情につられるまま、俺はノフィーネと戦う事にした。

Cの18話「感情と出会い（中）」

「・・・ふむ」

まだ昼間にも関わらず真っ暗な空間、吸血鬼の王ハザードは、配下に造らせたカクテルを飲んでいた。

そのカクテルの色は紅、それが何からできているかは容易に想像がつく。

「・・・70年代の欧州の女性の血だな。混ぜた酒もそのころのもの・・・」

ハザードは味とおいでそれを判断する。長年飲んできたゆえ、テイステイングにはいささかの自信を持っていた。

「さすがはハザード様、さようでございます」

そばについていたそのカクテルを造った吸血鬼が、うやうやしく頭を垂れる。その返答に満足したハザードは、また一口。

吸血鬼にとって血は主食であり、それに酒を混ぜて飲むことを通常の吸血鬼は好まない。せいぜい血を成熟させた血酒を飲むくらいだ。

だが昔からハザードはこのカクテルが好きで、他の吸血鬼がどう言おうと気にせず飲み続けた。そして

いつの間にか王になっていた。

「くつくつく・・・我が輩としたことが・・・話の脈絡がちぐはぐだな」

「いえ、他の者がしないことをハザード様がされたからこそ、今の地位にいるのではないかと思われませんが」

「くつくつく・・・ほめ言葉として受け取っておこう」

そしてまた一口。と、そこで新しい影が暗闇に浮かぶ。

「ハザード様」

「なんだ？」

「偵察に行かせたものが帰ってまいりました」

「そうか」

ハザードは、頬杖について話の続きを促す。

「・・・どうやら、二人と三人に別れて行動しているようです。ベロ・ランザ卿によれば、時神も信者になりうる存在、なら狙うは今かと」

「ふむ・・・。ならば、四人ほど動かそう。二つに分かれた両方に向けさせる。人選は任せる」

と、そばに控えるカクテルを造った吸血鬼に命令を下す。

「はっ、ではそのように」

命令を受けた吸血鬼、斥候からの伝令を伝えた吸血鬼はともにこの空間から去り、空間にはハザードだけが残った。

そして一人つぶやく。

「くつくつく・・・、だが恐らくは無駄だろうな。そもそも吸血鬼の本領は日暮れから。・・・日の光で身を焼かれることなどないが、動きづらいことに変わりはない・・・」

そしてまた一口。

「・・・夕暮れになれば我が輩も出るとしよう」

と、ハザードはグラスを一気に傾け、姿を消した。

C

「・・・くっ、これは・・・」

例えるなら、祭りの射的や当たり入りくじのような・・・って、例えになってない気もする。

「・・・もう少し、もう少し、あっ・・・」

ガチャン。

掴みきれずに落ちる景品。

そう、俺たちは今、UFOキャッチャーで勝負をしている。その

中でも中にある景品の価値が高い・・・つまり高難易度のものを。

まあ、勝負だし難しくないかと張り合いがないかな、と思つての選択だった。裏目に出たようで、さっきからまったく取れない。

しかもUFOキャッチャーに『刹那の延長』は無意味なので、これを見越してのノフィーネの選択だったのかもしれない。

「あとちょっと・・・あとちょっと・・・あつ！」

とはいえ、あつちも全くとれる気配がないが・・・。これは長期戦になるな・・・。と思つていたが、ノフィーネが動いて戦局は一変した。

「あのー、すみません」

「はい、なんで・・・」

呼ばれた店員はノフィーネの顔を見て固まっている。あれは見とれてるんだろうな・・・。って、あ、あいつ・・・まさか・・・！

「できればいいんですけど・・・取りやすいように動かしてもらえませんか？」

「は、はい！」

あいつ、景品の位置チェンを頼みやがった！

（き、汚いぞ・・・ノフィーネ！）

（勝てば官軍・・・でしょ？）

と、俺たちはアイコンタクトをかわす。

くっ、俺が言い出したことだが・・・言われる立場になると腹が立つなこれ。

「・・・どうぞ！」

「ありがとうございます」 ノフィーネに微笑みかけられて、でれつと顔がとろける店員。

って、取り安すぎだろ、あれ！

ウイーン・・・ガコン。

「取れたよ久郎君」

誇らしげに、超特大人形を抱えるノフィーネ。

「くっ・・・まだだ、まだ一勝一敗・・・俺たちの戦いはこれからだ！」

自分で言ってるなんか打ち切りの漫画っぽいけど、それはともかく。まだ勝負は、こんなもので終わらない！

「次はレーシングで勝負！」

「望むところ！」

そして、俺たちはレーシングゲームへと向かった。

C

「・・・で、結局どっちが、勝ったんですか？」

「えーと、俺がモグラとレーシングと格ゲーとホッケーとカードゲームとピンボール・・・」

「僕はUFOキャッチャーと別のリズムゲームとパズルゲームとバスケットリングとシューティング・・・」

「つまり、引き分けてことですか？」

「・・・確かにその通りだ。」

「でも、なんか達成感あるしな」

「うん、なんか満足したしね」

勝負の後は友ってやつだな。もう勝敗なんてどうでもいい。

「一時間遊び倒した結果がそれですか・・・」

メイナがあきれ口調で言う。しかし・・・お前も相当やり込んでみたいだが？

メイナの手には、メダルが満杯まで入ったメダルケースが5つ。

「Jackpotを当てましたから。どっさりです」

まあ、見れば分かるが、たった百枚で達成できるものなのか？

「いえ、まずはパチスロで一山当てたあと、メダルゲームを渡り歩いて、最終的にJackpotです」

なんか・・・ゲーセンを渡り慣れてないか？ 初めてだろお前。「それより久郎様、ノフィーネ様。これだけメダルがあるんですか

ら、メダルゲームもやっていきませんか？」

そう言って、満杯のメダルケースの一つをノフィーネに渡す。

そしてそそくさと競馬のメダルゲームのところへ……ってちょっと待て！

「俺の分は？」

「なに言ってるんですか。二人で一箱です。人から多くを恵んでもらえるほど、人生はそんなに甘くありませんよ」

それを、俺の金でメダルを借りたお前が言うのか……。

「さあさ、がんばってきてください。私は競馬ですってするので……すってくる、って明言するやつめずらしいな。

まあ、いっか。これ一杯でも十分元がとれてるし。

「そんじゃノフィーネ。どれやる？」

「えっと……あの大型ディスプレイ付きのコインゲームはどう？
なんかおもしろそうだよ」

とノフィーネが指差す先には、ふむなるほど、確かに面白そうなものがある。　どうやらスロットでゲージを最大まで貯めると、ディスプレイ上でミニゲームができるみたいだな。

「んじゃ、やるか」

ちようと隣り合った席も空いているのでそこに座る。ケースが一つしかないから隣り合って座るしかないからな。もう一つ持っているのも億劫だし。

さて、やるか。とりあえずコイン投入。

投入、投入、何枚か落ちた、投入、投入、ミスった重なった、投入、スロットが回った。

「どうだ、そっち」

「えっと……ミニゲームまで後少しぐらい」

さらに投入、投入っと。……なんかこう、さっきまで盛り上がる派手なことをしてたから、この作業が地味に感じる。

「あっ、ミニゲーム来た！」

と、隣から声が。……くそっ、こっちはまだなのに……。っ

て、また競い合う事になりそうだから、張り合うのはやめておこう。
「えーと・・・このボタンを押して・・・あ・・・おしかったな・・・」

どうやら余りいい結果では無かったようで・・・おっと、俺も手持ちのメダルがなくなった。

俺は視線をそのまま前に固定してコインケースに左手を伸ばす。

「あっ・・・」

とノフィーネの声。

ん？ 今、指にコイン以外の感触が・・・。

視線を俺の指に向ける。すると・・・俺の指はメダルではなく、ノフィーネの白くて細い指をつまんでいた。

一瞬の呆然の後、俺は慌てて指を離れた。

「あっ、すまん！ よそ見してて・・・」

「あ、うん、ごめん！ こっちこそ画面見てたから・・・」

一通りあやまり合って、俺はノフィーネがメダルを取るのを待ってからメダルをつまみ直す。

・・・なんだろうか・・・、俺の手がノフィーネの指に触れているのを見たとき、少しドキリとした気がする・・・。

これは・・・あれだな、俺に女性耐性が無いから、体が少し驚いたんだろう。・・・しかしノフィーネ、あんなに指細いんだな。

・・・。。。

「・・・・・・・・。。。」

「・・・・・・・・。。。」

・・・なんだろう、この気まずいような感じは。なんでこうなった？ ホント、こんな経験なんかしたことないから本当に分からない。
い。

とりあえず・・・とりあえず話しかけて・・・

「「ところで・・・」」

ちよっ、なぜここで声が被る！

「あ、先いいよ」

「ん、いや俺の話はどうでもいいのだったから別に・・・」

だから何故気まづくなる！？

てかこんなシチュエーションをどっかで見たことがあるぞ！
これはあれだ、確か・・・。

チヨロロロロ・・・、

カコンッ！

ししおどしの乾いた音が響く。

「では、後は若いお二人で、オホホホ・・・」
部屋には2人つきり。静寂が部屋を満たす。
意を決して声をかける。

「「あの、」」

被る声。

「あ、そちらから、どうぞ」

「いえいえ、そちらから・・・」

そうして流れる時間。この空気は気まづいと似ていて異なる空気。
そう、これは・・・

「ならば・・・こちらから行かせてもらおうぞお！」

「ええ、来なさい。お、馬・鹿・さ・ん！」

二人は激突する！！

「うおおお、『走乱絶破』！」

「ふふっ、甘いわね・・・『桜花断裂』！」

ガキイイン！！

って、なにこの超展開！ 違う違う、途中まであったけど違うぞ、これ！

ああ、もう。なんか面倒だ！

俺はごまかすためにがむしゃらにメダルを投入。何にも考えずに投入したから何枚も無駄になったが、そんなのお構いなしに投入。
・・・結果、メダルはすぐになくなった。

C

「・・・メイナ、スツてきたんじゃないのか？」

三十分後、再開したメイナの腕には台車のハンドルが、そのまま視線を下に持っていくと十箱ぐらいの山積みになったメダルケース。「いえ、それが・・・、まず大穴にどっさりかけたら的中したんです。それで、連単なら当たらないでしょうと踏んで、一番倍率が高いのにどっさりかけましたら・・・」

いつの間にかこんなに持っていた、と。ゲーセンで台車使ったの初めて見たぞ・・・。

「でも、そちらはボウズみたいですわね」

「ああ、まあ・・・、ちよっとな・・・」

「・・・？」

メイナは俺が言葉を濁したのを少し不審に思ったようだったが、すぐにどうでもいいと判断したらしく。メダルを預けるために台車をカウンターまで持って行った。

カウンターの店員はそのメダルの量に四苦八苦してるようで、しばらく待つ必要があるそうだ。

「・・・ねえ、久郎君」

と、さっきの雰囲気もあってか、ノフィーネは小声で話しかけてきた。

「・・・な、なんだ？」

何故かどる俺。いったい何がどうしたんだろうな俺。

『刹那の延長』を使ってゆっくり自分自身を問い詰めたいくらいだったが、今は話を続ける。

「これから・・・どこに行きたい？」

「ん？ 俺には特に希望はないが、そろそろ昼食にしたほうがいいだろう、と思う」

そろそろ混む頃合いだろうし。

「そうだね。じゃあ・・・なにが食べたい？」

「それも特に希望はないな。任せるよ」

多分、どこの店でもうまいだろう。

「希望なしなあ・・・なら僕とメイナちゃん決めてよ。それで、その後はショッピングでもいい？」

「いい、って初めからそのつもりじゃなかったのか？」

「うん、でも一応確認をとっておこうと思って」

・・・む、普通に会話できてるな。別に気まずくもなんともない。てか、さっきの雰囲気はなんだったんだ？ 少し悩んで損した・・・。

「あ、メイナちゃん終わったみたいだよ」

そのノフィーネの言葉通り、メイナは軽くなった手を振りながら歩いてきた。さて、若干疲れてきたからな・・・。はやくメシ食って休みたい・・・。

C

時は飛んで午後。

適当な麵屋で昼食をとった後、俺たちは四階の服売場へと来ていた。

「あ、これなんか似合うんじゃない？」

「そうですね・・・でも、こっちの方が似合うんじゃないですか？」

現在、二人はワイワイ、キャツキャと服を選んでいる。・・・俺のを。

いや、婦人服売場かブティックかは四階なのに、五階のボタン押してたからまさかとは思ったが、紳士服売り場か・・・。

選ぶなら自分たちのを選べよ、と言いたい気分だが、二人とも自

分のおしゃれに興味がないようだ。

一回こっそり逃げようとしたが、女の勘だかニ〇ータイプの力だけに察知されてしまいあえなく御用。

「……ったく、いくら捕まえるためとはいえ、間接きめなくもいいだろ……」

ジンジン痛む肘を抑えながら俺はぼやく。

しかし、俺の服を選んでいるのに、俺に選ばせてくれないおかげで、たいそう暇だ。というか、試着のために待機させるなら、選んでる間他のところを見てきてもいいじゃないか……。

徒然草を書いたなんとか法師より暇な俺は、徒然なるままに辺りを見回す。……服しかないけどな。

しかし、俺は今まで自分で服を選んだことがなかった。室内着にしる外出着にしる、わりと機能性重視のものを爺さんが持ってきてたから、おしゃれなんかついぞしたことがない。

いや、旅行の時ぐらいいはそれっぽい服を着た気がする。確か現地で爺さんと店員に言われるまま買ったやつを、そのまま着て観光したんだっただか。あの時、爺さんマフィアみたい格好だったな……。

とか、長々と回想しても、女二人の服選びはまだ終わらない。したいことはないが、さすがに待たされるだけは少しイライラするな。

こういう時たいいのやつは、文句を独り言として口に出してしまふ。それは俺も例外ではない。

「長いな……」

「そうだな、女ってのはホントに」
……ん？

俺の独り言に返答する声、横を見ると知らない誰かが腕を組んで立っていた。

そいつの格好は至極奇妙なもので、漫画の中の旅人みたいな灰色のマントに身を包み、髪の色が規則性なく黄色と紅色に塗り分けられている男。

「・・・どなた？」

「ん？ ああ、すまん。似たような境遇の人を見つけたもんで、つい・・・な」

つい、って、そんな理由で人の独り言を拾うか普通。

「まあ暇だし、どうせなら話相手になってくれよ？ 俺は不審者じゃないから」

そんな言い訳をしてる時点で不審者なんだがな。

・・・本来なら、こんな奇妙な格好をしているやつと関わり合にはなりたくないが、何せ今は暇だ。おもしろい話を聞けるかもしれないと思い、俺は話し相手を引き受けることにする。

「そうか、ありがとな。いやー、退屈すぎて死にそうだったんだホント」

と言って、なぜか握手をしてきた。外国人か？

「あ、自己紹介がまだだったな、俺の名前は・・・古王、だ」

古事記の古に王冠の王って書いて古王、と男は付け足した。

古王・・・ね。変わった名前だが、多分偽名なんだろう。こんな格好してるやつだし。

「俺は、クロウ。発音は英語でCrowと同じだ」

と言ったように俺もふざけてみた。まあ、間違ってはいないしな。

「そうか・・・久ろ、いやいやクロウか、よろしくな」

「こちらこそ、古王」

そう言葉を交わした後、なんか急におかしくなった。男もそう、なんか笑いを堪えてるような表情だ。

なんせ、いい歳したやつが二人して偽名を使いあってるんだ。当事者としては、どことなく笑えてくる。

「いや、面白いな、クロウは・・・くっく」

「そっちこそだ、古王・・・くっく」

声を抑えつつ笑いあう俺たち。なんだろうな、こいつとは妙に気が合いそうな気がする。

「いやいや、さて。笑っていても何だな。クロウは誰と来てるんだ

？ 彼女？」

「ぶしつけだな。そんなこときくか普通。・・・友人、二人とだ」
「とすると・・・あの二人か？」

古王は、数メートル先のノフィーネとメイナを指差す。

「あれはお前の服を選んでるんだろ？」

「その通りだ。俺の着る服なのに俺の意見はガン無視だ。しかも、試着のために待たされてるはずなのに、さっきから一回も試着してないし。・・・ところで似たような境遇っていうと、そっちは誰と？」

「んー、あー、こっちは友人一名だな。状況はお前と全く同じ。『その服装で街中を歩かれないので、代わりの服を買いますよ』と言われた。・・・別に人が何を着ようとそれは人の自由だと思うんだけどな」

・・・その意見には賛成だが、連れの人の気分もわからなくはない。確かにこの旅人ルックで隣を歩かれるのは少し・・・いや大いに嫌だ。下手すれば職質ものだぞ、その格好。

「うーん、これ気に入ってんだけどな・・・」

困った表情で腕を強く組む古王。

その後も俺たちは連れに対するグチというかなんとか、たわいもない話を続けた。

ピリリリ・・・。

どのくらい話し込んだかは分からないが、やや話すネタがなくなってきた頃、古王のマントの中から電子音が聞こえてきた。

古王がマントの中から出したのは、携帯電話。

「おっ、と。・・・呼び出しがかかったか。それじゃあな、クロウ。また会えたら会おう」

「ああ、またな」

そう挨拶を交わして、古王は連れのところに戻っていった。

また、暇になってしまった、と思った束の間。退屈そうに見えるだろうあくびをしていた俺の手を誰かが引っ張った。

一瞬、思考が追いつかず誰かと思ったが、見るとやはりノフィーネだった。

「お待たせ久郎君。ささ、着替えて着替えて」

長い時間をかけて選んだ諸々一式がノフィーネから手渡され、そばにいたメイナに背中を押され試着室へ直行。

「早く着替えてね」

ピシャッ！

さっさと閉まるカーテン。

自分たちは長い時間を使ったくせに俺には急がせるのかよ……。なんだか怒るよりあきれてきた。

「早くねー」

はいはい……。

俺はまず今着ている服を急いで脱ぐ。せかされるから急いでみたが、完全逆効果で、ただもたついて時間をロスしただけだった。

ポロッ。

うん？ 今何かズボンのポケットから落ちたような……。

「久郎様、早くしてください」

ああもう、わかったから。てか、せかしすぎだお前ら。

今度は黙々と着る。一式の中にはアクセサリーもあったのでそれもつける。

「久郎君、もうOK？」

「ん、ああ、今開けるから待った」

最後にベルトを閉めて……と。

シャツ。

俺はカーテンを開けた。

「お、似合ってるよ久郎君」

「細身ですからね。久郎様なかなかですよ」

……俺にコーディネートセンスはないから何とも言えないが、今どきな服って感じはするな。ホントに俺に似合っているんだろうか。

「ん？ あ・・・」

と、ノフィーネが突如、俺の胸元を見て声を漏らす。いったい何が・・・って、あれ？

いつの間にか俺は・・・胸元にノフィーネからもらったペンダントをかけていた。

・・・あ、そうか。あの時何かポケットから落ちたと思ったのはこれで、それが置いておいたアクセサリー類の上に落ちたから、あわててた俺はそうとは気づかずに無意識のうちにつけていた・・・と。

なんで気付かなかったんだ俺。間抜けにもほどがある。とりあえず弁明。

「あー、なんか無意識のうちに付けてたみたいだ。ダメだったら外すが・・・」

「ううん。外さなくてもいいよ。むしろ付けてくれて嬉しいくらいだよ」

そして微笑むノフィーネ。・・・なんかまたドキッとした気がするような気がする。

「ところで久郎君。その服気に入った？」

「・・・ん？ ああ、いいと思うぞ。よくわからないけど」

「ふふっ、どっちなの？ まあいいけど。それじゃあそれを買おっか。また着替えて、久郎君」

そう言ってまたカーテンが閉められる。また俺はさっさと着替えを始めた。

着替え中、試着室の鏡の中の俺はなんだか顔が赤くなってる気がしたが、多分気のせいだろう。きつと。

C

ガヤガヤガヤ・・・。

現在午後二時半、病院の面会終了時刻まではまだ猶予があるため、

デパート内でそれぞれ別行動をすることになった。ちなみに俺の服装はさっき買ったものになっている。・・・一日に三回も同じ服を着替えることになるとは思ってなかったな。

そして今、俺は骨董屋があるという二階フロアに来ていた。

なんでデパートに骨董屋が？　と思わないでもないが、まあそこは置いておいて。俺としてはあわよくば時神の過去の手がかりになるような物が手に入れば、と思って来てみたのだが、やはりうまくはいかないようだ。

古びた日本刀、割れた皿。妙に汚れた壺、奇妙な絵柄の古文書。どれもこれも偽物や粗悪品しかないような気がする。

まあ、それでもそんな物を買っていく人もやはりいる。もしかしたら本物なのかもしれないが、実用品として買ったのかもしれない。まあ、偽物だろうが本物だろうが、鑑定されるまではその人にとっては本物だ。それはそれでいいんだろう。しかし俺としては・・・、「うーん・・・、俺としてはガラクタばかりな気がするんだがな・・・、何かいいものはないのか？」

「それだったらあの巻物はどうだ、クロウ」

ん？　この声・・・、そして再び拾われた独り言・・・。

横を見るとそこにはやはり、

「・・・古王？」

「よっ、また会ったな」

と、壺を持った片手を上げて挨拶してきたため、危うく壺絵を落としそうになっていた。

しかし・・・見違えたな。目の前の古王はあの旅人ルックではなく、どこの街を歩いていてもおかしくないような、格好になっていた。

「まあ、これはこれでいいな。金は和王持ちだったし」

「そういえば、その和王さんは？」

「今は、ちょっと違うところに行ってて、俺は少し暇を潰してんだよ」

そうか。しかし、暇つぶしが骨董屋とは・・・まあ、人のことは言えないが。

「ところで、なんであの巻物を勧めるんだ？ 見るからに新しそうで、誰も眼もくれないような物だが・・・」

「まあそうだな。それじゃ俺が買うとするか」

と、古王はそう言っただけで巻物を取りレジへ向かう。変わったやつだ、実用性のない明らかな偽物を買うなんて。

しばらくして・・・

「値切って二万にまけてもらったぜ」

と、喜々とした表情で古王は言った。なるほど値切ってたから時間がかかったのか。

「でも、なんでそれ買ったんだ？ 欲しかったのか？」

と俺は気になっていたことをきいてみる。

「いや、ただ。これからに必要なものだったから・・・」

そう言っただけで古王は巻物を開く。俺ものぞいてみるが・・・何が書いてあるのか全くさっぱりだ。というか平仮名や漢字ですらないぞこれ。やっぱり偽物だったんじゃないか。

と思っただけで、古王がボソリと何かをつぶやいた。

「・・・くっく、効煽のやつ。手の込んだことを・・・」

ん？ 今何か聞こえたような・・・。

「なあ、今何か・・・」

「ん？ やっぱこれ偽物だったみたいだな。いやー、一杯食わされたな」

はっは、と笑う古王。不自然な笑いだったが、気にするのも面倒なので気にしないことにする。どうせこれっきりの付き合いだろうし、深く詮索しても仕方がない。

古王は再び骨董品をあさっているし、また偽物を買わないように今度は注意してやろう。

と思っただけで矢先、

「・・・ん？」

と古王の漏らした声。どうしたんだろうか。急に古王の表情とい
うか何かが変わった。

抽象的にしか分からないが、オーラというか雰囲気というか、妙
に殺気だった気がする。・・・まあそれを感じたのは一瞬だけだっ
たが

「・・・どうした古王？」

「ああ、クロウ。すまないがちょっと呼び出し食らったみたいだ。
また会えたら会おう、じゃな」

ちよっ、と俺が止める前に古王はさっさと走って行った。

なんだったんだろうか、あいつ。・・・妙な感じがする。追って
みるかどうか・・・。

「久郎君」

つと後ろから声、振り向けばそこにはノフィーネとメイ・・・。

「疲れました・・・」

と、俺が振り返った時点で若干粒子化していたメイナが、完全に
情報化して俺のなかへと消えていく。・・・なんだ？

「疲れてみたいだよ。まあけっこうはしゃいでたから仕方がない
よ」

そうか？ むしろ俺達の方がはしゃいでた気がするが・・・。ま
あ体力は人それぞれ、アンドロイドは疲れやすいのかもしれない。
休ませというやろう。

「それより久郎君。もうそろそろ神様たちと合流時間だよ。早くい
こ」

おっと、もうそんな時間か。俺とノフィーネは集合場所に下公園
に行くためデパートを出た。

C

「・・・おい、目標が二人になった。食いに行くぞ」

「分かった。だがお前はどっちをやる？」

「俺が女の方をやる。お前は男の方をやれ」

「いや、逆だ。俺が女の方をやる」

久郎たちが公園へと向かうために外へ出たのを、デパート五階の高さにいた二匹の吸血鬼が見ていた。彼らはハザードの手下であり、優秀な吸血鬼。今までに数多の人の血を吸いつくしてきた妖魔たち。そんな二匹はしばらくどっちがどっちを、と争っていたが議論の結果、男の方を八つ裂きにした後、女の方の血を吸うことに決定した。

「ならいくぞ。行動は迅速にな」

「ああ、だが吸血はじっくりたっぷりとだ」

そして下にいる二人に向かって二匹は滑空を始める。

ちなみに妖魔は、一般人には触れ合う距離にいるときしか見ることはできない。つまり一般人にはほぼ見られない。

そして吸血鬼は、たとえ相手がだれであろうと、気配を消して近づくことができるので血を吸われる直前までたいてい気付かれることはない。

ひさびさの吸血に二匹が唾をのんだその時、

ザシュッ！

「うぐあ・・・」

思い残劇の音の後、一匹の吸血鬼の胴体が真っ二つに切り裂かれていた。

「な、なにが・・・」

ザシュッ！

そしてもう一匹の吸血鬼は頭から下へと縦に切り裂かれ真っ二つにされていた。

「・・・まったく、吸血鬼が背後をとられてどうする」

それは、真っ二つにされても生きている吸血鬼たちに対する手向けの言葉。

手に持った大剣で吸血鬼を切り裂いた古王は、どういう仕組か先

の地上に降り、上に向けててをかざす。

魔術もまた、一般人には見えない。

「『オフエリングファイア』」

古王が唱えた瞬間、二匹の吸血鬼は青い帆のをに包まれ、地上に落ちる前に灰になって燃えつくした。

ザワザワ。

周囲の通行人たちは古王の方を見て、ある人は指をさし、ある人は変な奴だと笑っている。

はたから見れば、何もなかったように見えるこの光景。だが、あの二匹の吸血鬼は確かに強い吸血鬼だった。

おそらく、二人を殺した後、その被害は今も道を歩いている通行人たちにまで広がったであろう。そんな凶暴さも持っている二匹だった。

そもそも吸血鬼の体を斬ることも燃やすことも、並大抵の実力じゃできやしない。

だが、それを楽々とこなし、二匹を殺した古王。

「・・・ふう。まずはひと段落つと。多分、和王もうまくやってるだろ・・・前にノフィーネをストーカーするなと言われてたが、今回はそうも言ってもらえないからな」

そう言っ、そのうち何事もなかったよう自然体に溶け込み、古王も公園へと向かっていった。

Cの19話「過ち去ると書いて過去（後編ノ上）」

「ハザード様、お起きくださいハザード様」

「む・・・」

ハザードは自分を起こす声で目を覚ました。自室の椅子に座っていたら、いつの間にか眠っていたらしい。

「ハザード様、ご報告したいことがあります」

「・・・なんだ」

「奴らを襲わせた吸血鬼たちが全滅しました」

フツ、やはりそうか・・・。

ハザードは、前よりそうなるであろうと確信していたため特に驚いてはいなかったが、報告に來た吸血鬼は表情に驚きを隠せず이었다。

「報告によれば、あの吸血鬼どもはものの一瞬でやられたとの話！

二匹は、体を両断された後、業火によって焼死！ もう二匹は、動きを封じ込められた後に、封印！ 不死であるはずの吸血鬼を殺すなど、ただ者ではありません！」

「フン、そう慌てるな」

ハザードはうろたえる配下に対し言葉を吐き捨てる。

「問題ない。すでにベロ・ランザ卿が手を打っているだろう。それに・・・」

ハザードは椅子から立ち上がり、マントを翻す。

「我が輩ができればよいのだろう」

C

「・・・早いな、お前ら」

俺たちが公園に着くと、すでにベンチには、二人の姿があった。まだ時間には余裕があるはずなんだが・・・。

「うむ、する事がなくてな・・・」

と言いつつ時神を見やる創造神。その時神はどこか上の空の様子で下を向いて座っている。

時神の様子が変なのは俺も察していたが、まさかここまでとは。
・今はそつとしておいた方がいいかもしれないな。

「・・・それじゃ、行くとするか」

と歩き始めたのだが、

「ん？　ちよつと待て久郎、そっちは駐車場と逆方向だ。帰らないのか？」

あれ、言ってなかったのか？

「あー、言い忘れてましたけど神様。実はこれから久郎君のお爺さんが入院してる病院に行くんです」

「！？　・・・そうか、大丈夫なのか？」

ん、なんだ。その奇妙な表情は。急にまじめな顔になりやがって・・・。

大丈夫、って何のことなんだろうか。

「大丈夫ですよ神様。いつかは行かないと何も始まりません」

なんだ・・・二人は何を言っているんだ？

「さ、早く行こ久郎君。早くしないと面会時間終わっちゃうよ」

あ、ああ・・・。

俺はのどに小骨が引っかかったような、何ともいえない感覚を持ちながらも、とりあえず病院へと向かうことにした。

「おい、時神。行くぞ・・・おい時神！」

上の空だった時神は、創造神が強く言ってやっと正気に戻った。

「・・・あ、すまぬ・・・わかったのじゃ」

久郎たちに、とぼとぼついて行こうとする時神。そんな時神に創造神は強く

「なあ、お前・・・今、何を抱えてるんだ」

「な、なんじゃ。いきなり・・・」

「いきなりじゃない。今お前は何を考えている、何を思っている？破壊神のことか、それとも・・・」

「な、何のことじゃ。妾には何のことかさっぱりじゃ。ほっておくのじゃ！」

そう言っ、飛んで久郎たちを追っていく時神。

「・・・ったく、若いやつが抱え込むもんじゃないのに・・・。かなりまずいな、これもあいつの一手か・・・もう、どうしようもないかもしれないな・・・」

やや表情を曇らせた創造神は、歩いて久郎たちの後を追った。

C

午後四時前、病院へ到着したのだが。

「あれ、神様二人がいない・・・」

とノフィーネが言ったので振り向いてみると確かに誰もいない。

どこへ行ったんだ、あの二人。いつからいなかったのかも分からないし・・・、待ってれば来るのか？

「でも面会時間は四時までって話だったよね・・・」

そうなんだよな・・・。だから早く行かないと面会可能時間が徐々に減っていくわけだ。

「・・・まあ、病院に行くとは言ってあるし、俺だけで面会してくる。そもそもこれは俺だけの用事なわけだし・・・。創造神たちには着いたら待合室でも待っててもらってくれ」

さっき受付に聞いた爺さんの病室は306号室。

俺はいまだ目が覚めていない爺さんのいる病室に行こうとエレベーターに乗ろうとしたが、

「久郎君、待って」

とノフィーネに止められた。俺はどうしたのかと振り返る。

「多分神様たちなら言わなくても待合室で待ってるよ、きっと。そ

れより・・・僕も、行ってもいい？」

意外すぎる言葉に真意をつかみきれず俺は聞き返す。

「え、いや、別に俺はいいが、どうしたんだ？」

「だって、久郎君のお爺さんだし。それに・・・」

最後のほう、言葉を濁すノフィーネ。これは俺の用事だ、ノフィーネにとっては見ず知らずの人間に会うだけの事・・・それなのに行きたいと言うノフィーネ・・・。

何か・・・何かが変だ。まだ会って三日のつきあいだが、それでも何となくわかる。

だが俺は拒まなかった。ノフィーネが何を隠していようと、ノフィーネが望むことなら、かなえるべきだと、そう思ったからだ。

「なら・・・行くか」

まあ、ただ爺さんの顔を見てくる程度だ。何かしら問題が発生するわけでもない。

「ありがとね、久郎君」

そう感謝の言葉を述べたノフィーネは、どこか表情が固かった。まるで緊張しているような、そんな感じだ。

俺たちはエレベーターに乗り込み、三階のボタンを押す。

ゆっくり上っていくエレベーター、俺は横目でノフィーネの顔を見やる。

「・・・・・・・・」

扉を見つめるノフィーネの顔が、俺の目には暗い表情に映った。

なんだ、なんだとさっきから思っているが、やはり変だ。

ノフィーネは、何か無理をしているか、あるいは無理をしようとしている気がする。

しかし、病院に来るという行為が何の負担になるのか、ならなぜついてきたのか、何も分からない。

だから、その真意を知るために、あえて俺はそれをノフィーネに言わないでおく。

ピン、ポーン。

エレベーターのドアが開く。確か、爺さんの病室は突き当たりを左……だな。

病室へ向かう。その最中にも時々、気づかれないようにノフィーネの方を見る。表情はうかないままだ。

歩いていると、廊下でストレッチャーに乗せられた患者とすれ違う。これから手術なのか、もしくは術後なのかは分からないが。

ビクッ、

ん？ ……今、ノフィーネはその患者を見てびくついたように見えた。知り合い……なわけではないか。

「306……ここか」

着いたのは個室部屋。外には、黒服の屈強そうなガードマンが二人いた。

さて、自分が久郎だと通じるだろうか。

「すみません。爺さんの病室ってここですか？」

「じい……、これはこれは、久郎様でいらっしゃいますね」
お、通じた。

「中に入っても……」

「ええ、もちろんです。……その方は？」

ノフィーネの方を向いて黒服がきく。

「あ、僕は久郎君の付き添いです」

と、ノフィーネは説明したが、ガードマンは念のため、俺に確認をとるように視線を俺に移した。

「本当ですよ。彼女も中に入りますけど、問題は……？」

「いえ、どうぞお入りください。中には家政婦がおりますので、詳しくは彼女にきいてください」

家政婦……確か中田だったか？ それとも中田だったか……。俺はドアの取っ手を手で握り、横に引いた。

「ああ、久郎様。おひさしゅう御座います」

と、中に入るとこちらに気づいた家政婦らしきおばさんが、挨拶をしてきた。「あ、えーと……家政婦さん。爺さんは？」

「・・・まだ意識が戻ってはおられません。お医者様によれば、命に別状は無いようですが、この状態が続けば、再検査も・・・というお話です」

家政婦さんの視線がベッドの上に移る。俺も寝ている爺さんを見る。

爺さんは、こう言っではなんだが・・・安らかに寝ていた。もしこの場に医者が現れて、爺さんの死を告げれば信じてしまうだろう、そんな表情。

だけど、そうは絶対にならないんだろう。何故なら、

「・・・仰々しいな。病室というよりは、集中治療室じゃないか、これ」

——っ!!——

少し広めの個室、何かよくわからない医療機械やら医療器具が、所狭しと置かれていた。

やってることが無茶苦茶だと思うのは俺だけか？

「藤草家当主ですから。これくらいは当然ですよ。それより久郎様・・・そちらの女性は？」

家政婦の視線は俺の後ろに向いている。多分、ノフィーネのことを言っているんだろう。

「ああ、こいつは・・・」

と、俺は紹介しようとして後ろを向いた。が、

「・・・」

ガタガタと・・・いやそんな生半可な表現で伝わりきっているかもわからない。

ノフィーネが下を向き、自身の体を抱きしめ、震え、・・・まるでおびえているように見えた。

「おい、ノフィーネ。どうしたんだ？　どこか調子でも・・・」
俺は呼びかける。

「・・・ううん、違うの。これは・・・そんなんじゃ・・・なくて・・・大丈夫」

何が・・・何が大丈夫だと言うのか・・・。

よくは分からない。分からないが・・・これはさっきまでのノフィーネの態度と関係していて、その態度に感じていた俺には止められたかも知れなくて、確実にここから離れた方がいいのは分かる・・・！

「あの・・・御気分が悪いようでしたら、お医者様をお呼びし・・・」

「ああ、すまん家政婦さん。ちょっと、時間の都合が悪くなった・・・また今度、見舞いに来る」

俺は本当に心から心配してくれているだろう家政婦の言葉を強引に遮って、ノフィーネを病室の外へ連れ出す。

家政婦さんは気を悪く、もしくは心配させることになるかもしれないが、ノフィーネのこれは・・・そういったものじゃない。こいつは『不老不死』だ、身体に起こった異常を直ちに元に戻す力。であれば、風邪なわけがない。体調が崩れるなんてこともあるわけがない。

おそらく、あの病室に入ってからこうなった。なら、ノフィーネがこうなっている原因はなんだ？

そうやって考えながら歩いていると、エレベーターの前に着いた。焦りからか、俺はついボタンを連打してしまう。

ノフィーネの震えはまだ止まってない。それどころか、悪くなっているようにさえ見える・・・！

（早く、早く来い・・・）

チン。

俺はエレベーターが開くと同時に、ノフィーネを連れて乗り込んだ。

閉まるドア。下る階。

さっきからノフィーネは全くしゃべらない。表情を見ようにもうつむいていて、それを覗きこむほどの度胸は俺にはない。

そして、途中で止まることなくエレベーターは、一階フロアにたどり着く。

とりあえず・・・、外に出よう。そう思って入口へと進もうとすると、・・・カウンターの待ち合い席に見知った顔を見つけた。

「創造神！ ノフィーネが・・・」

我ながら、頼れそうな人を見つけた途端、それにすがろうとするのは情けないと思うが、そんなことはどうでもいい。

俺は内心駆け寄りたいぐらいの気持ちで、でも実際はノフィーネのゆっくりとした歩調に合わせて、創造神の方へ向かう。

一方の、創造神の方は落ち着き払って、まるで予想していたかのような・・・いや、たしかこいつは予想していた。集合場所での奇妙な会話・・・。

少し辻褄が合ってきた気がした。

「・・・あ、う・・・あ・・・」

ノフィーネが苦しそうに、か細い声を漏らす。

「創造神・・・これは、どういう・・・」

「・・・説明はあとだ、さっさと外に出るぞ」

創造神も連れ添って、外へと向かう。チラッと創造神の顔を見たが、自分を責めているような、悲しんでいるような、鎮痛の表情をしていた。

C

そして、病院を出て、数メートル進んだ時、創造神は言った。

「ノフィーネ・・・よく耐えた。・・・だが、もういつそぶちまけた方がいい。・・・心配しなくても、誰にも迷惑のかからない場所を用意した」

その諭すような声を聞いたノフィーネは、口を開いて、
「すみ……すみま……く……うう……うつ、」
そして、叫んだ。

うわあああああああああああああああああああ！

そのノフィーネの悲鳴は、堤防が決壊するように、ただただあふれ出てきていた。

俺には何がかかわからない。いや少し分かっているのかもしれないがそれでも、ノフィーネをそのままにさせておく以外、俺にできることはなかった。

だがやつにはすることできることがあって、創造神は口で呪文を唱え、手で魔法陣を描き、魔術を発動させる。

『移転』、対象は公園内の『心象結界』」

しゃがみ込んだノフィーネの周りに、光る魔法陣が出現したかと思うと、その円の中心にいたノフィーネを光が包んで、一瞬のうちにノフィーネは姿を消した。

「……こんな往来で、魔術なんか使っているのか？」

「非常事態だ……。ああいう姿は人には見られたくないものだからな、公園までは持つと、高をくくっていたんだが……」

創造神の表情には後悔の表情が浮かんでいた。苦虫をつぶしたような表情とは、こういう表情のことを言うのだと思う。

「久郎……とりあえず、ついてきてくれ」

トボトボと歩きだす創造神。……そういえば、さっきの表情にはもう一つ、疲れの表情もかすかに浮かんでいた気がする。

もちろん、ついていく以外に選択肢はない。が、その道中で俺はきく。

「なあ……時神はどこだ？」

「……分かん」

え、分かん……。って。

「行方不明だ。こっちに向かって行っただと思っていたが・・・いなかった。・・・もしかすると・・・」

おいおい、ちょっと待て。・・・俺には全く状況がつかめないが、目の前ではノフィーネに問題が発生していて、聞く話では時神にもトラブルが発生しているという。

だから、創造神は疲れていたのか。二人のことを同時に心配するような事態は、精神的な負担が大きいだろう。

「だが・・・、今はノフィーネの方を解決しよう。あせって二つのことを同時に解決しようとしても仕方がない。二兎を追うもの一兎も得ず、だ」

そう言う創造神の声は、らしくなかった。昨日、一昨日はあんなに、憎たらしいほどふざけた明るいやつだったのに・・・。

俺まで、気分が暗くなりそうになる。だが、今本当につらいのはノフィーネの方だろう。

なら、俺が暗い顔をしている場合ではない。そう思って心に喝を入れる。

歩き始めて三分、目的地は小さな公園だった。

「・・・ここで話そう」

そう言って、門柱に寄り掛かる創造神。

「中には入らないのか？」

「ああ、ノフィーネがいるからな」

ん？ と、俺は中を見る。だが、誰もいないような気がする。

そんな不思議がる俺の様子を見て、創造神が言う。

「『心象結界』を敷いてある。中を見ることはできない。ついでに言えば、入ることもな」

創造神は煙草でも吸いそうな雰囲気と言う。だが、持っていないし吸わないんだろう。

俺はそのまま、きいた。

「『心象結界』？ それってどんな結界なんだ？」

「・・・その結界は。中にいる奴の心象によって状態を変化させる

結界だ。例えば中にいる奴がAには会いたいが、Bには会いたくないとする。その場合この結界は、Aには中が見えて入れるように、Bには中が見えず入れないように状態が変化する」

つまり、中の人が認めた人にしか中の人と関わらせない結界。ということは・・・

「見えないんだろ？ 俺にも見えない。だから今のあいつは、誰とも会いたくないってことだ」

「・・・だがそれじゃあ、どうやって解決するんだ？」

「自己解決を待つしかない。・・・あいつもこの結界については知っている。落ち着けばまたこの結界の状態も変わるだろ」

そうか・・・。今はそっとしておくしかないってことだな。

俺はもう片方の門柱に背中を預ける。

「それで・・・どうしてあんなことになったんだ？」

俺は単刀直入にきく。

創造神は、一呼吸間を開けて、話し始めた。

「なに、よくあるはなしだ。ドラマやマンガ、ドキュメンタリーなんかでも・・・。ただ、あいつは長い間、よく耐えたと思う・・・」

次の言葉は、数秒の間の後に訪れた。

「・・・トラウマだよ。・・・病院や医療器具、またはそれに準ずる何かに対する、恐怖症だ」

そして創造神は話し始めた。ノフィーネの過去を。

C

(メイナ・・・起きてるか)

『はい。なんですか？』(起きながらもできるなら、創造神の話から、『残知回想』を発動してくれ)

『・・・了解です』

(どうした?)

『いえ・・・、ただ。・・・ノフィーネ様は、久郎様に自身の過去

を知られたくは・・・ないと思います』

(・・・)

そうかも・・・しれない。今から創造神が話すことは、ノフィーネの意思じゃない。

ノフィーネが知られたくないことかもしれない。

だが、

(それでも・・・ここで止まってても仕方がない・・・)

『久郎様・・・!』

(軽蔑されるならそれでもいい。だが、そうして隠して、内に抱えているものを、これから一人抱え続けるのは、続けさせるのは・・・俺は嫌なんだ)

『・・・それは一方的な話です。あの心優しいノフィーネ様が、自身の過去を見せて、それで久郎様が苦しむようなことがあれば・・・喜ぶことなんてありませんよ』

あいつの事だ。むしろそれを気にして、今以上に苦しむことになるかもしれない。だが、それでも、

(受け止めてやる。あいつの苦しみ、それが分からなくて、真に理解し合えるわけがない)

俺はノフィーネのことを知りたい。知的好奇心なんかではなく、・・・なんというか、一個人として。

独りよがりな、自分勝手な行動だろうけど、そうしなくては、俺の気が済まない。

(俺には正論を言うことができない。知りたい、知らなくてはいけない、って感情も、ただのフィーリングで理由なんか無いかもしれない。それでも・・・)

『・・・わかりました。・・・何となくですが、ノフィーネ様は許してくれる気がします。・・・それでは『残知回想』起動・・・』

起動、の言葉を聞いて、今更後悔の念がやってきた。やはり、やめた方がいいのではないか、と。

(いや、迷うなよ俺。そんな事を思っただけ責任逃れなんかするな。例

えどんな結果になろうとも、後悔しては意味がない」俺の視界が若干、暗くなる、『残知回想』の影響だろうか。その視界の中で、創造神は口を動かす。

「既に知っているかもしれないが、俺がノフィーネと出会ったのは、約900年前。表と裏、両方の世界とも戦争のまった中だった」

その時、今見えている光景に、何か武器を持った人々が争っている、魔術師が魔術を撃ち合う、そんな光景が重なって見えた。これがか起きている間の『残知回想』か。目を閉じれば、戦争の光景がはつきりと目に映る。

俺は創造神の話を聞くために目を開ける。

「よくわからないが、あの時見た限りでは、少女少女も兵士として使われたみたいだ。ノフィーネもその中の一人だったらしい」
一昨日の夜、十字軍と漏らしていたが・・・まさかその一員だったとは。

十字軍はたしか、宗教の軍・・・だったか。神の名のもとに聖戦を行う、俺にはそんなイメージがあるな。

「そして俺がノフィーネと出会ったのは、彼女の所属していた部隊が、全滅したところだった」

「・・・」

俺の視界が、その時の映像へと切り替わる。・・・死屍累々とした戦場、戦闘はとくに終結したのだろうか、敵の姿はない。ただその場にただ一人、創造神が立っていた。

「俺がそうして、気まぐれでその少女少女の死屍を眺めていたら。一人、まだ生きている人間を見つけてしまった。ノフィーネだけが、ひどい怪我を負いながらもまだ生きていた」

・・・死屍の中、血まみれでうつぶせに倒れているノフィーネの姿が俺の目に映る。息も絶え絶えながら、それでも何とか生きている。

「俺はその頃、人間に対するアプローチをする存在、悪く言えば、手駒を欲していた。だから俺はなんとなく・・・本当になんとなく、

まだ生きている幸運なこの少女を『不老不死』のバイムの対象に設定した」

途端、バイムの力によって再生される体。ノフィーネは、文字通り生き返った。

「少しして、その少女は目を覚ました。周りの死屍を見て、なぜ自分が生きているのかを不思議に思っている様子だった。だから俺は説明してやった。自己紹介とか、いろいろを交えてな」

初めは信じていない様子だった、ノフィーネ。だが、自分が生きていることや魔術を見せられたことで、自分を救った神様なのだと認識したようだった。・・・だが、今みたいな親しげな感じというよりは、崇拜してるって感じの態度だった。その時の創造神も、まんざらでない表情だ。

と、そこで俺は質問を挟む。

「少しいいか？ その・・・トラウマの原因って、仲間の死体とかじゃないのか？」

友や家族、近しい者の死体を見て、その光景が脳裏に焼きついてトラウマになる、ってのはよく聞く話だ。だが、創造神の話にも、『残知回想』で見る光景にも、ノフィーネが怯えてたりする様子はない。

「ああ、あいつはああ見えて、死体を見慣れていたからな。あいつ自身が手を下した奴も、何人かいたはずだ。戦場で仲間が死ぬのは当たり前。その数がどれだけ増えたからって、それで狂ってしまうような人間では、なかったわけだ」

・・・！ 少なからず衝撃を受ける俺。それは、今のノフィーネからは想像できない姿。

「話を続けるぞ。・・・そして少女は故郷へと戻った。神と会ったこと、力を与えられたこと、それらを伝えに。だが・・・」

ノフィーネは驚嘆され、神に選ばれたのだと賞賛されると思っていた。だけど実際に、賞賛の代わりに受けたのは、鞭打ち、火あぶり、処刑・・・

そう・・・『魔女狩り』。

・・・っ。その光景に、俺は目を閉じそうになる。だが今は目を閉じても見える状態、大体受け止めると言っておいて、目をそらすわけにはいかない。

俺は直視した。心を殺すことなく、じっと見ていた。

「彼女の故郷には裏世界に精通した人間がいて、そいつは軍関係者でもあったが、当時の裏世界の人間は、異世界の存在何か知らなかったし、神なんてものが本当に居ると思っただけじゃなかった。だから、自分の軍にいた少女が一人だけ無傷で帰ってきたと聞いて、そいつが神に選ばれたと言っていると聞いて、すぐにこう思った・・・
・そいつは、人に化した悪魔。『化け物』だ。神の名を騙り、我々を陥れようとしているのだ」と

俺は『化け物』というフレーズに反応しそうになったが、今は抑える。

そして、その人の皮を被った『化け物』を、そいつらは必死で殺そうとした。

だが、『不老不死』のノフィーネは全く死ぬことがない。どんな事をしようとも、決して死ぬことがなかった。ひと時、運河に沈めてしまおうとも、山に埋めようとも考えた。だが、自分たちの見ていない間に『化け物』が這い出てきて自分たちを襲うのではないかと、そう思っただけで結局、毎日のように処刑を繰り返した。

「だが、少女の体は『化け物』と化していたが、戦争によってすれた精神もまた、『化け物』と呼べるものだった」

毎日毎日、何をされようとも。自分は神に選ばれたのだと、そう信じて、そう言い続けて、耐えるというよりは、淡々と処刑を受け続けた。

「俺はあまり人間世界に関わろうとは思わなかったが、流石にいたたまれなくなってきた。友人からも、注意されたしな。反省してい

た時期だった。だから、俺は彼女を助けた。その時の彼女の、感謝崇拝の目を、俺は直視できなかった」

自分が与えた『不老不死』によって、あんな常人の精神では耐えきれないようなことを受けたというのに。それでも自分に感謝する少女を、心から哀れんでいた。

「そして俺は、なんとか彼女の心を、『化け物』から『人間』へ戻そうと、共に旅をしながら、いろいろと教えていった。神のありようだとかこの世界のことだとか、魔術のことだとか、後は人間としての正しい精神だとか。・・・教えるのが下手で、人に戻すのに二、三百年もかかったがな」

だが、確かにその頃には今のノフィーネと同じ人格が出来上がっているようだった。・・・崇拝という点では若干難点が残っているものの、心は『人間』に戻っていた。

「そしてそんなある日、俺は彼女を人間の世界に戻すことにした。元々は人間にアプローチするために使うつもりだったからな。そして何より、ノフィーネが前に進みたいと言ったからだ」

『神様、僕、人間の世界に戻ってみます。あのころの仲間たちはいないけど・・・それでも、神様のおかげで、やっと人間らしくなれたんです。僕、人間の中に戻ります』

『心配しなくてもやっていきますから。気にしないでください。何年か経ったらまた会いましょう』

光景の中で、ノフィーネがそう言っていた。

「俺は、そのとき既に、彼女に対して娘みたいな感覚を持っていたのかもしれない。俺はあえて、その言葉通りに娘のひとり立ちを見届けた後、全く気にせず他の事に専念した。下手に心配するのも、悪いと思ったからな・・・だが、それは大きな間違いだった。・・・そもそも、『化け物』の体に『人間』の心を与えること自体・・・間違っていた」

『っー、久郎様！ 『残知回想』の停止の許可を！』
頭の中で、メイナの叫び声が響く。

一体、何が……。と、思っていた時点ですでに、遅かった。

「数年が経ち、俺は様子を見に行くことにした。……そして、俺は見た。……とある施設の手術室……いや、実験室で……彼女が解剖されているのを」——っ……！

俺は……。見てしまった……。様々な機会につながれたノフィーネの体が、口で表現できないような道具で、やり方で、引き裂かれて、それとも体が再生して、再び引き裂かれ——

「ぐっ……。げほげほっ、がはっ！」

裂く、再生、圧す、再生、砕く、再生、焼く、再生……、

目を閉じても消えない破壊と再生のロンドに、俺は吐く衝動を抑えることができなかった。

「……。見てたな。久郎」

俺の様子から察する創造神。

「……。はあ、はあ。黙っていたのは、悪いと思っている……」

目の前で行われる残虐。けれど俺は『残知回想』をやめることはしなかった。受け止めると、誓ったのだから。

「……。見たなら仕方がないが、あとでノフィーネに謝っておけよ。あんなもの見られたくはないだろうから」

ああ、分かっている。落とし前はつける……。

俺のその意志は創造神に伝わったようで、それ以上は言わず、また話し始める。

「その解剖や実験の目的は、『不老不死』の仕組みの解明。おそらく、権力者たちがその力を欲したんだろう。……。だが、まだ魔術が中途半端にしか発達していない時代だ。バイオアムが存在も知られていないのに、『不死不死』の解明なんて無理な話だ。実験は途中から、魔術師たちの憂さ晴らしと化していた……」

俺の中にもう恐怖という感情はなく、ただやり場のない怒りが渦巻いていた。もしその場に俺がいたのなら、魔術師たちを半殺しぐらいにはしてただろう。『命断』を使ってでも、阻止していただろう。

「・・・そう怖い顔をするな。特に、ノフィーネの前では」

創造神が俺の顔を見て言う。いつの間にか顔に出ていたらしい。

俺は怒りを抑えてきく。

「それで・・・お前はすぐ助けたんだよな？」

「まだ声に怒りが残ってるぞ、久郎。そして当たり前だ、俺はすぐ助けた」

実験室に入り、とっさのことに驚いている魔術師たちを、手のひらに宿した光弾を零距离でぶち当てて次々となぎ倒していく。死なないまでも瀕死といった状態だろうか。

「だが、今度は完全に・・・ノフィーネは壊れていた」

虚ろな目をしたノフィーネ。精神は破壊尽くされたのに、傷一つ残っていない身体。一体、彼女は何回、痛くて冷たい思いを味わったんだろうか。

「目が覚めたような彼女が、俺を見た目は、今まで見せていた羨望でも希望でもない・・・深い深い怨恨の目だった」

なぜ自分をこんな体にした・・・なぜあの時死なせてくれなかった！

そんなノフィーネの思いが、言わなくても伝わってくるようだった。

「俺は激しく後悔したよ・・・。そして彼女は、人間を信じられなくなっていた。今ここまで回復したのが信じられないくらいにな」

『神様、僕の新しい名前、ノフィーネ。昔の自分は死んで、新しい門出ってことで今日からこの名前を名乗るよ』

NO fine (ノー フィーネ)

終わりは無い。

これからの自分を皮肉って付けたんだろうな、その名前を。

「ノフィーネが今ぐらいに回復したのは、田舎の隠居生活で徐々に慣らしていったからと、その間、影から知り合いに守ってもらっていたからだ」 知り合い？

『残知回想』の映像にその創造神の知り合いの姿が映った。

正確には後ろ姿だが、身の丈ほどもある大剣で、迫ってくる魔物を次々に切り裂いていた。

というか・・・あの髪にあのマント・・・まさか。

「なあ、創造神。そいつの名前って・・・」

「ん？ 知り合いのか？ そいつは異世界人で、名前は、古王だ」

・・・！ 俺は今日、出会った『古王』と映像の中の古王を照らし合わせる。

紅と黄の髪。冒険者風のマント。なんというかそのまんまだった。

「そいつに、今日の昼頃会ったんだが・・・」

「な・・・、またサボリかあいつ・・・」

どうやら、さっきの出会いとは意図されたものではないらしい。

「・・・いつの間にか話がそれたな。とは言え、話すことは全部話したつもりだ。後は・・・」

創造神は公園の中を見やる。

「あいつと話してこい」 俺が公園の中をのぞくと、・・・ブランコに座ったノフィーネの姿があった。

「もう中に入れるぞ。後はお前次第だからな、任せた」

いや、それは期待されてるのか、投げられたのか・・・。

まあ、とりあえず。

（メイナ、『残知回想』はもう必要ないから、止めてくれ）

『了解です。・・・がんばってくださいね久郎様。女の子を元気づけるのは男の子の役目ですから』

お前もか・・・そんな風に言われるとなんかな。ま、頑張りますか。

まずは、謝らなきゃな・・・。

そう思いながら、俺は公園の中へと足を踏み入れた。

Cの20話「解決と敵襲（後編の下）」

夕暮れの街、その日の朱い空には、黒いコウモリの群が宙を舞っていた。

街の人々は、普段見ないコウモリの姿に気味悪がっていたが、すぐにそれに対する興味を失い、やがてまた、いつも通りの街と化す。「くつくつく、・・・恐怖を知らぬ愚者どもが。だから、貴様らは吸血鬼の獲物だというのだ」

どこからともなく、ステレオに聞こえる声。しかし遙か下にいる街の人々には聞き取ることはいできない。

やがて、空を飛んでいたコウモリたちが次第に一カ所に集まり、人の姿に。

そのコウモリたちの正体はハザード。

いや、正確には移動のためにハザードが何匹ものコウモリに分裂、変身していたと言い換えるべきか。

彼は、夕日に照らされた街を見下ろしていた。

少ししてボソツと言う。

「・・・つまらんな」

今日の獲物の場所は掴めているが、行動を起こすには、まだ早かったので暇つぶしに眺めていたが、どうにもつまらない。

他の吸血鬼、特に元人間だった吸血鬼たちは、この朱に染まった光景を綺麗だと言うが、純血の吸血鬼であるハザードには理解できない。

「・・・やはり、紅の方が美しいな・・・」

・・・根っからの吸血鬼である。

それから、しばらく眺めていると、また一群のコウモリが。

「ハザード様」

そのコウモリ達は、ハザードの側近の姿をとった。

「なんだ。予定変更か？」

「・・・ベロ・ランザ卿からの伝令が来ました。御耳をお貸しください」

そんなことをしなくても誰も聞いてないだろう、と思ったハザードだが、どうやらよっぽど重要らしい。しぶしぶ耳を口元に近づける。

ボソボソ・・・。

その内容を聞いて、自然と笑みがこぼれる。

「フツ、フツ。そうか・・・ベロ・ランザ卿はよくわかってらっしゃる」

そう、今、側近から聞いた話が本当なら・・・この計画、うまくいきすぎている。

さらに、ベロ・ランザ卿がとっさに変更したターゲットと、そいつに対するアクションは、吸血鬼というものを正しく理解していた。「くつくつく・・・、ああ楽しみだ。ひどく楽しみだ・・・」

悦に浸りながらハザードは、コウモリの群に姿を変え、夕闇にへと散っていった。

C

思えば、すっかり日が暮れそうだった。時計を見れば五時ちよつと。日の短い冬では真つ当な日没時刻だ。

そろそろ帰らないとな。俺はノフィーネの元へと、この結界に包まれた静かな公園を歩く。

結界・・・と言っても、割とスツと入れた。抵抗があったとすれば、一歩足を踏み入れた時に少し手応えがあったぐらいか。ってことは、ノフィーネは少し躊躇したけど、結局入れさせてくれたってことか。

ま、それが結界の性質だったのかもしれないが、何にせよ、入れてくれたのはありがたい。

「ノフィーネ」

俺は、うつむいたその姿に呼びかける。

ピクツ、と反応するノフィーネ。だけど、ブランコから離れる様子も顔をあげる様子もない。

つまり、こういう事だろうか？

キィ。

俺は空いてるもう一つのブランコに座る。前に乗ってた奴が立ち乗りしたらしく、土が付いていたがかまわず座る。・・・少しくらい土、払った方がいい方が良かったか。

さて、座った方がいいが、こちらから話をする気にもなれず。しばしの沈黙が流れる。

数分後、結局俺から話を切り出すことにした。

「あのな、ノフィーネ。聞いてもよく分からないかもしれないが・・・、『命断』を使って、・・・お前の過去、見てしまった」俺は真ん前に向かって言った。ノフィーネの方を向いて言う勇氣は無かった。

そういや、これをノフィーネに謝るなら、時神にも謝った方がいい方が良かったな。だけど、それは後だ。

さて、ノフィーネはどう思っているのか。・・・怒ってるのか、悲しんでるのか。

だが、帰ってきた返事は、

「・・・そっか」

それだけだった。待っていても、それ以上ノフィーネの口から言葉は発せられなかった。

んっと、俺はどんな反応をすれば・・・。と思っていたら、いつの間にかノフィーネに訊いていた。

「・・・あの、それに対してどう思ってるんだ？」

訊いたのは、どう思われてるのかっていう恐怖からか。それにしても率直すぎだ俺。

「じゃあ、久郎君はどう思った？ それを見て」
前を向いていて表情は見えなかったが、声色は怒っても悲しんで

もない気がした。

声に含まれた感情は・・・純粹な興味。

その意味するところは、落ち着いて自分のことを客観視できるようになったのか、それとも・・・壊れたのか。

少なくとも、後者では、あつてほしくはない。

さて、どう思ったか、か。俺には器用な事は言えない。だから正直に言う。

「・・・哀れんだな。人が受けなくていい量の苦痛を、お前は受けたんだから。それから怒りも覚えた。非道な奴らに対しての・・・」
後は・・・と、俺は考えていたが、ノフィーネはそれで充分だと言うように、横に伸ばした手のひらを俺に見せ、前を向いたまま言った。

「・・・そっか・・・うん。なら、僕のためにそう思ってくれた久郎君を、僕が怒ってるわけがないよ」

「・・・ノフィーネ」

「僕ね。あの頃から一回も泣けてないんだ」
ノフィーネが上を見上げながら言う。

「あの頃って？」

「僕が酷いことをされてから」・・・。

「集落の人が死んでもね。悲しいんだけど涙は出てこなかったんだよ。もう僕の涙は壊れてしまってた・・・」

壊れた・・・か。

「ねえ、このままじゃ話しくくない？ あっちのテーブルで向き合って話そうよ」

そう言って、ノフィーネはブランコから降りた。

「・・・ああ、わかった」

俺は涙について考えつつ、テーブルに歩いていった。

C

公園の端にあった四人掛けの木製テーブルに、俺とノフィーネが向かい合って座る。さて、俺はノフィーネを励ますために来たんだったな。といっても、見た目だけなら元気そうだし、励ますと言ってもどうすればいいやら……。

『……はあ、分かってないですね。久郎様』

と、いきなり脳内にメイナの言葉が響いてきた。分かってないって、何がだ？

『全部です。……はあ、本当は見守ってるだけのつもりだったんですが、……久郎様があまりにも頼りないので、少し言わせてもらいます。とりあえず『刹那の延長』してください』

なんか、若干ムカツときたが、とりあえず『刹那の延長』を使っておこう。ノフィーネを待たせたら悪いし。

で、何が言いたいんだ、お前。

『はあ、これだから男子は……』

どこのクラスの女子だ。

『そんな事は、どうでもいいんです。問題は……久郎様が鈍感すぎることです！ ノフィーネ様は必死に恐怖を抑えてるんです！ 久郎様たちに心配かけまいと、我慢してるんです！ だけど、あまりに心細いから久郎様を中に入れたんです！ なら男として、手を握るとか、抱きしめるとか、「お前は俺が守る！」とか、言うべきです！』

……まあ、言ってることは至極真つ当だと思っただが、それクサくないか？

「クサクありません！ それが男……いや漢というものです！ あれを読んで、それが、なぜわからないんですか！」

あー、わかった。こいつ俺の部屋の漫画に影響されやがったな。と言うか、あれ本当は爺さんなので、置く場所が。なかったから置いてただけだ。俺は読んだことはない。表紙で大体、中身察せられた

し。

『だとしても！ 男としてしつかりすべきです！ 久郎様はノフィ―ネ様に惚れているのでしょうか？』

いや、いきなり何を・・・。

『目線でまるわかりです。ちなみに、そのシチュエーションの九割ぐらひは一目惚れした人とはくつつかないものですが、それは二次元の世界の話です。ここはリアル、久郎様が頑張れば晴れて両思いですよ』

・・・お前、ネットにも影響されたな。

『というか、これはチャンスなんです！ ここでノフィ―ネ様を勇気づけられれば、『つり橋現象』ですよ！』

『つり橋現象』・・・グラグラ揺れるつり橋の上など、恐怖の中に男女二人がいるとき、恐怖による胸の高鳴りを、恋愛感情と間違ってしまう現象である。

って、その現象で結ばれたカップルは大抵長続きしないぞ。というか、今の状況は似ていて違うぞ『つり橋現象』とは。

『まあ、なんにしてもです。とにかく、ただ迷ってるぐらいなら、ハグでも何でもするべきです。それだけで、元気づけられますから・・・いやちよつと待て。まだ出会って2日か3日だぞ。いくら何でもそんな展開・・・。

『2日、3日しか経ってないからなんですか！（二次元の）世界には、出会ったから1日以内に婚約した人もいるんですよ！ そんなの関係ないです！』 おい、その（ ）内の言葉ちゃんと聞こえたぞ。大体、ここはリアルってお前がさっき言ったばかりだろうが。

『だから、何ですか！ 何の脈絡もないのに、恋に落ちるのは有り得ない話ですか！？ フラグを一個一個消化しなくちゃ恋愛は出来ないんですか！？ そんな常識なんて、ぶち破ればいいんです！！』

あー・・・、わかった。わかったから少し落ち着け。てか、どうしたんだ？ そんなに興奮して。

『・・・すみません、昨日、アニメを見てたもので。しかし、あれ

は誰がなんと言おうと良作です!』

さいですか。・・・なんか論点づれてきたし、そろそろ『刹那の延長』解除してもいいか? そろそろキツイ・・・。

『あ、どうぞ。なんか叫んだらすっきりしましたし』

・・・おい。

『あはは、冗談ですよ。とにかく久郎様にしかノフィーネ様を励ませないんです。頑張って下さいね』

そして『刹那の延長』解除つと・・・。

沈黙の時間が再び流れだす。

・・・さて、どうしたものか。

さっき色々言われたが、どれもこれも実践する気はない。てか、する勇気はない。

しかし、そうなると、さっきのメイナとの会話はまるっきり無駄だったってことになる。だから、せめて会話ぐらいはしたいが・・・何の話を振ればいいんだ?

・・・沈黙がづらい。冗談でも言うか? いやこの場にあつてなさすぎだろ。なら、過去についてか? いや、話を余計に暗くしてどうする。なら、えーっと・・・、

と悩んでいたら、

「ねえ、久郎君」

と話しかけられて、

「ん!? な、なんだ?」

とオーバーリアクション気味に返事してしまった。

ププッ、とノフィーネが少し微笑んだのはうれしい誤算だったが、

・・・今後の課題は不慮の事態に驚かないようにすることだな。

さて、

「気を取り直して・・・なんだ? ノフィーネ」

「うん、久郎君は僕の過去を見たんだったよね」

その話を振ってくるか……。言っておくが気の利いた事を言える自信はないぞ。だから、思ったことを、ありのまま言うからな。

「ああ、見た。……。本当、勝手に見てすまなかった」

「いいよ、それはもう。全然気にしてないし。むしろ、僕は久郎君の過去を教えてもらったのに、久郎君が知ってないのはフェアじゃないしね」

「……。まあ、そう言ってもらえるのはありがた……。って、俺が気を使わせてどうする。むしろ、俺が気を使うべき立場だろ。

「なら、これ以上は謝らないでおくか。ありがとな」

「いえいえ、どういたしまして。とノフィーネは返答し、俺の謝罪で変わった話を元に戻す。「それで、もう僕から補足とかなくていいのかな？」

「……。ん、まあ」

そう言われてもな。説明を求めたりするのは酷だろ。

ノフィーネは、少ししんみりした雰囲気を漂わせながら言った。

「……。僕はね。確かにその時は神様がホント憎らしかった。今でもこの『不老不死』は大嫌い。だけどね、今は、やっぱり神様に感謝してるんだよ」

「……。なぜ？」

「確かに非道いことはいっぱいあったけど……。それを思い出して、今でも辛くなるけど……。それでも、あの時死んでいたら会えなかった人たちに、神様は会わせてくれたから。集落の人たちや田舎の人たち……。あと久郎君たちとも」

「……。ノフィーネにとって人との出会いは、それまでの事を打ち消すほどの価値があったってことか？」

「うん。僕は人の冷たさも知ったけど……。人の暖かさも知った。そして今も、僕のそばに暖かい人たちがいる。なら今はそれでいいんだよ」

まるで、自分に言い聞かせるようにノフィーネは言う。

きっとノフィーネのことだ、創造神のことは、とっくに許してい

たんだろう。

「だけど、許す許さないと恐怖は別問題なんだろうな。あの時受けた苦痛は、今もノフィーネを震えさせている。」

「たとえば、創造神を許しても、トラウマは消えることがない。むしろ、消えないからトラウマって言うんだったか。ノフィーネはそれを、無限の時間背負っていかなきゃならない。」

「それを考えると、なんだかやるせないな。」

「だけど・・・」

ノフィーネが言葉を続けた。

「そんな人たちも、僕を置いて、みんな消えてしまう。みんな死んで、僕は生き残る。そんなのは・・・僕はもう、味わいたくない」

・・・これが、ノフィーネの真に抱えていた気持ちだろうか。

昔の記憶がよみがえったついでに、露わになった気持ち。

「破壊神を倒すのは、神様に対する恩返し。だけど、その恩返しが終わったら・・・久郎君」

「なんだ・・・いやな予感がする。」

「待ってくれ。その先は言わないでくれ・・・。」

「できるなら・・・『命断』の力で、僕を・・・殺してほしい」
・・・っ!?

「お、お前・・・」

「身勝手だよ、いきなりこんな事、頼んで。でも、ね。やっぱり疲れたんだよ、僕も。そして、これから無限に生きること、絶望も感じている」

「痛々しい心からの叫びだった。しかし、なぜ俺がノフィーネを殺すんだ？」

「・・・バウム武器庫にね、多分あると思うんだよ『ある槍』が。その槍は、生きとして生けるものに完全な死をもたらす。それは例え僕に対してでも、永遠に殺す程の力があるはず・・・。それが、僕が『不老不死』から逃れるための、唯一の手段・・・」

「マンガなんにもある『不老不死』。持ってないやつらは求める

けど、それを持っているやつらは、その力を忌む。なぜなら、その力は、悲しみしか引きつけないから。友に先立たれ、後人には忌まれ、力無き者には狙われる。そんな未来に、希望なんか、あまりない。そしてそのわずかな希望を見つけたとしても、それはすぐに消えてしまう。

「死ぬのは怖いよ・・・だけど、これからずっと生きていくのも・・・本当に怖い」

・・・ノフィーネは今にも泣きそうな顔をしている。だけど泣けない。泣いて全てを吐き出したいだろうに、涙は一雫も流れない。

「僕は、結局、化け物には成りきれなかった。僕は人間のまま生きすぎた。だから・・・殺しっ！」

グッ。

言葉の途中で、俺は立ち上がり、机の向こうのノフィーネの左右の肩を掴む。

「っ・・・どうしたの？ えっと・・・」

・・・今やっと分かった。・・・ノフィーネは今、壊れる寸前の状態だ。いや、寸前って確証すらない。そうだ、優しいはずのノフィーネが、弱音を漏らすはずも、ましてや俺が一生、罪悪感を背負う事になる殺人行為をさせるなど、普通ならありえない。

そこまで気が回らないほどに、心が弱っている。俺は肩から手を離し、ノフィーネの目を見る。

「ノフィーネ、立ってくれ」

俺はノフィーネの隣まで動く。

「・・・な、なに？ 怒った・・・の？」

そして俺は、言いつつ立とうとしたノフィーネの体を引き寄せて、強く抱きしめていた。

「えっ、その・・・なに、が・・・」

戸惑うノフィーネ。

ああ、くそ。結局、メイナの言ったとおりになっちまったな。

『・・・まさか、本当にやるとは。久郎様、完全に惚れてますね』

とか、ニヤニヤしながら脳内で言われたような気がしたが。惚れたとかはともかく、これは好きとかそういうのではなく、親しくなった友人に対しての抱擁だ。アメリカなんかでは普通のことだろう？だから、そんな感じだ。

『苦しい言い訳ですね。まあ、さすがに3日でそれはあり得ないですか。さっきの言い過ぎました』

また、クククツ、と笑い声が聞こえた気がするが、このムードで笑うなど言いたい。・・・いや、まさか俺が緊張しないようにわざとやってるのか？

『さあ？とにかく頑張ってください』

ああ、分かったよ。

俺は澄み切った気分で、今一番伝えたいことを告げる。

「ノフィーネ、死なないでくれ」

「・・・っ！」

顔の隣からノフィーネの動揺が聞こえる。顔は見えないが、その目は驚きに見開かれているかもしれない。

音の無い時間が少し続いた後、さらに弱った声が耳に届いてきた。
「そんなの・・・勝手だよ・・・。なら・・・久郎君は僕に。ずっとこの苦しみを背負い続けろって・・・。みんなが死んでいくのを、僕が見取れて、そう言うの！？」腕の中のノフィーネが、弱々しい力を振り絞って俺の体を押しのけようとする、だが俺は離さない。

しかし、次に何を言っているかが分からない・・・いや実際、さつきから言おうか言うまいか、ずっと悩んでいた言葉はあるが・・・。

それは身勝手で、無責任で、何の保証もない言葉だけれど・・・こうなったら、言うしかない。

「ノフィーネ・・・俺がお前を人間として生きさせてやる！」

「えっ・・・、それってどういう・・・」

あー、言ってしまった・・・。出来るかどうかすら分からないの

に・・・。

ああ、こうなれば、ヤケだ。後から嫌われるなら嫌われたっていい。ただ今をノフィーネが生きてさえいてくれれば、それでいい。俺のわがままを貫かせてもらおう。

「・・・俺が『命断』・・・もしくは他の力で、『不老不死』を壊す！そしてその後は、一人の人間として生きる。・・・それで、勘弁してくれないか？」

なんか、だんだん自信がなくなってきて、竜頭蛇尾になってしまった。というか冷静に考えれば、何一つ言ってることを実行する力がない。：しかし、行ってしまったものは仕方がないので・・・えーと・・・。

「何か・・・方法はあるの・・・？」

うわっ、やっぱりそう来たか・・・えーと・・・うーんと・・・。「あ、ある！だから信じて！」

バカだ俺。「どんな？」って聞かれたらおしまいだぞ・・・。それでも、何とか言い逃れるために必死に（それっぽい）方法を考えていたが・・・次の質問は永遠にやってこない。

「そっか・・・なら、」

「もうちょっと待ってみよっかな・・・」

「・・・本当か！？　って、ノフィーネ・・・なに泣いて・・・」

ノフィーネの頬には、一滴の雫が流れていた。それを発端として、次々に溢れてくる涙。

「うーん・・・なんでだろ。なんか出てきた。さっきまでは全然出る気配もなかったのに・・・なんでなんだろ・・・？」

俺もノフィーネが泣いている理由がわからず、動揺。とりあえず、離れようとするが・・・

ギュッ。

「・・・ノフィーネ？」

「・・・もうちょっと、こうしていたい気がする・・・」

そんなこと言われても、耐性がない俺はもうそろそろ羞恥レベルが限界なんだが・・・。

とはいえ、ここは結界内。誰も見ていない・・・、『2828・・・もとい、ニヤニヤ・・・あ、気にせず続けてください』

訂正、一人に見られていた。少しイラッとくるから俺の脳内で笑うな。

と言っても、聞かないだろうが。

「久郎君・・・」

「は、はい」

こんな状況下で、思わず丁寧口調になる。

「もう少し、お願い・・・いい？」

「お、おお・・・」

・・・冗談抜きで惚れそうだ。

・・・と、ともかく、俺はぎこちない動作で、加減を変えて腕で包み込む。・・・不謹慎かもしれないが、ずっとこうしていたい・・・、そう思って・・・

「くつくつく、いやあ、素晴らしい。いいものを見させて貰ったぞ人間」
！？

C

突如、響く男の声。

俺たちは即座に離れ、互いに背中を預け合う。

「・・・メイナ、じゃないよな」

『イエスです・・・。創造神様でもありません・・・』

それは分かる。それよりもだ。

「・・・どこにいる？」

声は全周囲から響いてきた。結界によって反響しているのかとも

思ったが、俺たちの声は響かないから、それはない。

「・・・こっちには見当たらないよ」

こっちも見ただけ、動く物陰はない。・・・そもそも、ここは結界内なんだろう？　なんで他人の声が聞こえる？

そうやって身構えていると、再びあの声が響いてきた。

「くっくく・・・止めなくてもよかったのに・・・。久方ぶりの面白い見物だったのだぞ」

「どこだ！？　・・・なんつって、居場所を明かす訳ないか」

この事態、外の創造神は気づいているのか？

「ふっ、別に明かしてもよいぞ。・・・ただ、」

ん？　ふざけたような答えに、恐怖を若干感じながらも、どんな意図があるのかと、考えてみる。

だが、声の主は、思考時間すら与えずに、

「その代価として、貰っていくぞっ！」

「っ！？　うわぁ！」

背後から悲鳴。ノフィーネ！？

俺はすぐに振り向き、今まで忘れていた『エリクソス』を手に出現させる。

だが、ノフィーネ姿がない・・・。

「ノフィーネ？　どこだ？」

「くっくく・・・ここだ、人間」

今度は前方の一方から声が聞こえてきた。

そいつは、木の上の丁度でっぺんに、ノフィーネを抱くように抱えて立っていた。その腕の中のノフィーネは、目を閉じ抵抗しようとしないう。気絶しているようだ。

「お前は・・・誰だ！」

言いながら、手にした『エリクソス』を投擲。槍の全部分より、刃付き鎖が放たれる。

しかし、神話級武器と称された槍とその刃を、男は空いた片腕を振り下ろし、その爪から発した紅い衝撃波で切り裂いた。

「なっ!？」

さらに衝撃波の波動によって、俺は吹き飛ばされそうになる。

「くっくくく・・・人間よ。名前を訊くときに武器を投げるのが、お前らの流儀なのか？」

そして、あれだけの力を放ちながら、男は平気な顔で笑っていた。

「・・・な訳はないだろ」

外面上だけでも、平静を取り繕っているが、心に冷たく差す死の予感に、背中に冷や汗が流れる。

「フン、そんな事は分かっている。戯れだよ」

男は三日月の形に口を歪ませながら、木の上から飛び降りる。

結構な高さから落ちたのにも関わらず、男は少しの段差を降りたかのように着陸。

(・・・メイナ、何か手はないか?)

『・・・検索中です。ですけど、相手の詳細が分からないと・・・

対抗手段が発見できません』

(・・・創造神は気づいていないのか? 外と連絡は?)

『分かりません。・・・結界から出る以外に連絡方法はありません・

・・・』

脳内から困ったような声が響く。・・・目の前の男は、外に出してはくれないだろうな。

実際、対抗手段なんてないのかもしれない。『バィム武器庫』から出せる武器だって、所詮はレプリカ。本物より数段劣るって話だ。

「くっくくく、まあ名乗ってやらないこともない。だが、人に名を訊くときは自分から、というのが人間の流儀なんだろう?」

未知の相手を目の前にして、ここまで頭が回るのは自分でも驚きだ。まあ、初日に関係ない所で襲われたし、心構えもややできていたからか。

ってか、もしかしたら、あまりに実感がなさすぎて、現実として認識できてないのかもしれない。・・・それはさすがにまずいか。

「お前は人間じゃ、ないんだろ？」

あくまで、平静を装う。とにかく、手段が見つかるまで時間稼ぎだ、近づいてくるまでは、こうして少しでも、こちらに手があるように思わせればいい。近づいてきたら『刹那の延長』を発動すればいい。

「くつくつく・・・まったくだっ！」

男が笑う。そして一瞬後、姿が、かき消える。

「なっ、どこ・・・にっ」

キーンッ！！

次の瞬間、かん高い音が目の前で鳴る。

「むっ・・・」

そこには、右手で気絶しているノフィーネを抱えながら、左腕を突き出している男と、

「おいおい・・・名前ぐらい名乗ったらどうだ？ 吸血鬼」

そのすばめた手の五爪を、大剣の腹で受け止めている、古王がいた。

勢いを削がれた男に追撃の手はない。古王が斬り返すのと同時に後ろへ大きく交代する。

「ノフィーネ！ 久郎！」

これは創造神の声。

「創造神・・・遅いぞ」

「助かったのだから文句を言うな。結界がすり替わってるのに、古王が指摘するまで気づかなかったんだ」

・・・すり替わって？

「結界を壊すと同時に張り替えたんだろ。そうしないと気づかれるからな。まあ、同じものを用意するまでには至らなかったようだが・・・」

そう言って、創造神は男を見る。

「お前は信者か。ノフィーネを返してもらおう」

「フン。我が輩は信者などではない。ただ協力しているだけだ」

不機嫌、不愉快そうに答えた男。返す気は毛頭ないらしい。

「で、名乗ったらどうなんだ？　ちなみに俺は古王だ」

古王は大剣を肩に担いで愉快そうな表情を浮かべる。……こいつにも訊きたい事はあるが、今はとりあえず、その大剣……両刃なのに担いで大丈夫なのか？

「おわっ、痛っ！　……くそっ、両刃しか使っていないのに、なんで肩に担ぐ癖がついてるんだ、俺？」

こんな時にバカだろ。てか、大丈夫なのか？

「くつくつく、何ともないくせに大袈裟な。まあいい、我が輩の名はハザード。吸血鬼の王だ」

ハザードは右手でマントを払う。すると、その背中から悪魔のような黒く紅い翼が現れる。

「で、目的は何だ？」

古王は続けて訊く。

「フン、これを見て理解していないのか？　この少女を誘拐する。それが目的だ」

「そうかい……」

キーン！

今度は、古王から仕掛けていた。

古王は持っている大剣を右へ左へ、軽々しく振って斬撃を加える。そしてハザードも、その斬撃を片腕ではじく。あの腕は鋼鉄並みの堅さなのか？

「へえ。片腕でよく受け止められるな。せめて、抱えている少女ぐらいは落とすだろ？」

「ふん、我が輩は吸血鬼だ。あいつと違って、抱くのには慣れている」

しかし、片腕のハザードは自然と劣勢をしいられ。数合交えては退くを繰り返す。

「はっ、勝ち目は無いみたいだが、まだやるのか？」

楽しそうに古王が言う。実際、楽なんだろう。おそろく強いだろ

うから。

「くっくっく、このままでは勝ち目はないな……。だが、我が輩は吸血鬼の『王』だぞ！」

ふと……。空が、暗くなった気がした。

俺は空を見上げる、と。

「……。黒い塊？」

いや、微妙にバラバラに動いている。それにキィキィと鳴き声……。。

「あれは……。コウモリ？」

「……。なるほど、端っから一人じゃなかったってわけか」

古王は初めて声を曇らせる。

その時、コウモリたちは約二十の塊に分裂したかと思うと、人の形をとり、やがて人の姿になった。

「……。あれも、吸血鬼か」

俺は見上げながら創造神に訊く。

「ああ、そうだ。ハザードほどではないが、そこそこ強いようだ」
創造神は腕を上空に構える。応戦しようとしているのか。

「くっくっく……。さあ、我が輩が逃げるまでに、我が従僕を倒し
きれるか？」

「……。いや、その前にお前を斬ればいいだけだ」

古王は瞬的にハザードの背後に移動し、斬りつけようとする。だが、

「……。ちっ」

「くっくっく、我ながら卑怯だとは思うが……。強すぎて斬れ
まいな？」

ハザードは右腕に抱いたノフィーネを、振り下ろされようとする
古王の大剣の前に盾として突き出す。

当然、斬れるわけがない。不老不死だからといって、さっきあんなことがあったばかりだ。ってことは、あいつでもどうしようもない
って事か……？

「久郎、来るぞ！」

創造神の言葉に、俺は視線を上空に戻す。吸血鬼たちは、臨戦態勢どころか既にこっちに向かって突っ込んできていた。

「はっ！」

創造神は手のひらから、魔弾を放ち、直撃した吸血鬼を火達磨にしていく。

「くそっ、こんな奴ら相手にしてる場合じゃ・・・」

俺も毒づきながら、『エリクソス』を投げる。ハザードとは違って、鎖を壊すことはできないようだ。

「ちつくしょ・・・、さっきまでは盾にしてなかっただろうが！」

「くつくつく、さっきまでは本気を出してなかっただろう？　だから我が輩も本気を出さなかった。今はその逆をしてるだけだ」

ノフィーネを盾にされつづけ、攻めあぐねる古王。やがて、古王の周りにも吸血鬼がまとわりつく。

「くそっ、くそっ！」

これは誰の毒づきか。俺は相手の動きを止めることに精一杯。創造神は敵数を徐々に減らしていったが、やがて威力の弱い魔弾を無数発して防戦一方状態に。

古王は、次々と吸血鬼を切り裂いていくが、数が数だ。一体一休しか相手ができない近接戦闘では、敵の数を効率よく減らせない。

俺たち三人は吸血鬼の群れに足止められて、ハザードに手を出すことができない。

「くつくつく・・・タイムリミットだ。もう少し我が輩の従僕と遊んでいるがいい」

フハハハハッ、と笑い声を残し、ハザードはノフィーネを連れたまま、夜の闇にへと消え去っていく。

「くっ、待て！」

俺の叫びは虚しく夜に響くだけ。

・・・失ってから気づくものがある。今になって、ようやく怖くなくなった。

だが今は、目の前の吸血鬼たちを倒さなければいけない。
俺は負の感情を晴らすように、槍を投げ続けた。

Cの21話「後悔」

「くっ、何が・・・どうして・・・」

ようやく吸血鬼たちを全滅させたのは、ノフィーネがさらわれてから十分近くたってからだった。

その戦いの際、俺は左腕に爪の一撃をくらい、今は傷口に包帯が巻いてある。

少し痛むが、今はそんな痛みなど大して気にならなかった。

ノフィーネがさらわれた。何の脈絡もなく突然おきた事に、俺は混乱していた。一体、何のためにノフィーネを・・・。

見れば、創造神もいい顔をしてはいなかった。俺ほど取り乱してはいないとはいえ、内心では動揺しているんだろう。

「もう少し・・・危機感を持っておくべきだったな・・・」

そう言って、目を伏せ唇をかむ。

そんな中で、古王がぼやく。

「ちつきしよ・・・せめてまだ、和王が残っていればなあ・・・」

「ん？ 和王も着ていたのか？」

創造神が問い返す。和王・・・確か、古王との会話の中にそんな名前があった気がする。

「ああ、さつきまではな。だが、急に上の方から連絡が入ってきて。緊急事態がおきたからって、俺たち二人に王界への帰還指令が出されたんだと」

「・・・でも、お前は残ってるよな」

呆れ口調の創造神。

「そんな指令、俺は今までに一度たりとも従った事ないぜ・・・ま、和王は真面目だからおとなしく帰ってったが・・・なんか、陰謀の臭いがするな」

「陰謀・・・？」

「ああ、なんか不自然だ。和王が呼ばれるのはともかく、帰還指令に一度も応じたことがない俺に対して今更指令が来るなんておかしいだろ？」

「それは・・・そうかもしれないな」

「なあ、お前ら・・・。ノフィーネがさらわれたってのに、随分と話がづれてないか!？」

「つつい語尾が荒くなる。だが、俺は怒って当然だろ。こんな反応しかないんじゃない。」

「まあ、落ち着け。別に心配してないわけじゃない。ただ・・・俺は、そういう性分なんだ。どうも真面目に成りきれないというか・・・」

古王は頭を掻きながら困ったように言う。悪気はないようだが・・・とりあえず、落ち着くとしよう。

不意に、古王が今思いついたように訊く。

「・・・そういえば本題を話す前に訊いておきたいんだけど、時神はどうした？」

「・・・そうだった・・・。実はな・・・」

創造神が話し始めた。俺も詳しくは聞いてなかったので、また話がずれることになるが聞くことにする。

・・・数分後、時神がどこかへ行っただまま行方不明といったことについての、詳細な話が終わる。

「・・・それはやっぱり・・・最悪の事態なんじゃないか？」

古王が多少、沈んだような声で言う。

最悪の・・・事態？

「最悪の事態って・・・なんだ？」

「簡単にいうと、あっち側・・・破壊神側についてたことだ」

・・・その言葉を聞いたとき、初めよく意味が分からなかった。

つまり・・・敵になったってことか？ 時神が？

「元々、なぜか破壊神を尊敬していた節があったし、ハザードとかいう奴も動き出した。なら、今そうなった事に、なんら不思議はな

い」

「そうだな。・・・そうとしか考えられない・・・か」

その古王の話に、創造神もやや同意を見せる。

本当にそうなのか？　そもそも、なんで時神は破壊神を尊敬しているのか。ならなんでもっと早く、あっちにつかなかったのか。・・・分からないことだらけだ。

「・・・しかし、あっちにつくのが前回よりも早いな・・・なにか原因が・・・？」

ボソツと古王が小声で何かを言った。

「何、一人でぶつぶつ言ってるんだ？」

俺が指摘すると、古王はふと我に返る。

「ん？　ああ、いやこっちの話だ。気にしてもらわなくても大丈夫」
こっちの話・・・か。怪しむべきだろうか？

「それよか、本題に入ろうぜ。時神があっちについてなかったとしても、あいつも神だ。きっと無事だろ」

ごまかすように・・・には見えないが、古王がせかしてくる。急にどうした？

「ん？　だってこの問題については、これ以上悩んでいてもしょうがないし、元々ノフィーネ救出について話すつもりだったんだろ？」

なんともまあ、切り替えの早い奴だ。というか、自分勝手な話の切り替えな気がするが。

あまり優先順位はつけないが、まだあっちについたのか分からない時神よりも、誘拐されたノフィーネの方が優先か。

「とりあえず・・・ノフィーネが今どこにいるかが問題だ。この世界上にいるのか、他の世界まで連れて行かれたのかがまずわからないと・・・」

創造神もノフィーネ救出についての話に戻る。

・・・居場所か。俺はメイナに呼びかける。

(メイナ・・・)

『・・・はい、なんですか？』

呼びかけてから少し間があった。おそらくメイナもショックを受けているんだろう。

（この世界にノフィーネがいるかどうかって、分かるか？）

『おそらく・・・可能です。バイムの中に検索エンジンがありました』

（なら頼む）

『・・・了解』

そう言ってメイナは作業に入った。何か力が使われている感覚を感じる。

とりあえず、二人に伝えておこう。

「今、メイナにノフィーネがいるかどうか、探すように頼んだぞ」

「へえ、いつの間に。というか、そんな事もできるのか」

「そういえば、そんなバイムも創ったような気がするな。・・・忘れてたが」

古王は感心し、創造神は顎に手をあて思いだそうとする。

「・・・やっぱりお前ら危機感とかなさそうだな、ノフィーネが誘拐されたっていうのに」

なんでそんなに平然としてられるんだよ！　とか言う気にもなれん程にあきれる。

「ははは・・・、まあ絶望してるよりは、ましだろ？　それに目的はよくわからないが、今日中に助ければ問題はないだろう」

今日中？

「そんなに早くいけるのか？」

「迅きこと風のごとく、ってな。あんまり引っ張り過ぎると状況は悪くなるばかりだし、居場所さえ分かれば何とかなるだろ」

その言い方だと、何とかなる根拠はなさそうだが・・・。

『その居場所なんですが』

いつの間にか横に、メイナが実体化していた。

『どうやら、この世界の中には居ないようで・・・反応しません』
・・・つまり、ノフィーネとあの吸血鬼は他の世界に居るってこ

とか。だが、他の世界のことを俺はよく知らない……。

「そうか、なら居場所の特定は簡単だな」

古王がニヤッと笑いながら言う。

「そうなのか？」

「ああ、そんなに時間も経ってないし、他の世界に移れるポイントや移った後の世界や宇宙は限られる、その中から絞っていけば……」

……言ってることは若干分からないでもないが。知らない単語が出てきた。

「……他の世界って、どんなのがあるんだ？」

少し興味がわいた。

「ん？ 創造神から説明されてなかったのか？」

ああ、と俺は同意。

「なら、創造神。説明してやれ。俺は奴らの場所の特定作業してるから」

と言いながら、手帳に何か書いている古王。それが特定作業なのか？

何を書いているのか回り込んで見てみようとも思ったが、

「……命令される覚えはないが、確かに説明しておいて損はないか」

創造神が話しそうなので、説明を受けることにする。

C

「分かりやすく説明するなら、世界は惑星、宇宙は宇宙のようなものだ」

「というと？」

「宇宙の中に惑星が浮かんでいるように、広い宇宙の中に、何個かの世界が浮かんでいるんだ。そういうイメージを持って」

……ふむ。なるほど宇宙のイメージか……、

「だが他の世界ってどこにあるんだ？　そして、どうやって行くのか」

その質問に対して、創造神は少し悩む仕草を見せた。しばらくして、口を開く。

「どこに・・・か。そうだな・・・ある学者は言っていた、『宇宙が真横に広がる存在ならば、界宙は真縦に広がる存在である』と」
「・・・いや、分からん。」

「宇宙って全方位に向かって広がっているんじゃないかったか？」

「だから、あくまで例え話、イメージの話だ。・・・つまり、地球から宇宙に出る方向とは違う方から出れば・・・あー、説明が難しい。だから、あまり説明したくなかったんだ・・・。多次元の話は三次元で表そうってのが、そもそも無理な話だ」

何かよくわからないが、難しいらしい。とりあえず理解できないであろうことを理解した。

「・・・難しいんなら、それは置いといて。どうやって、その他の世界に行くんだ？」

「それもさっきの話と関係してくるんだが・・・、まあいいか・・・。他の世界に行く方法には二つある。一つ目はワープ・・・と言えば分かりやすいか？　それを行って界宙を通らずに行く方法だ」

ワープ・・・あの・・・魔法陣とかに乗って一瞬でどこかに行く、あれか？

「まあ、そうだ。さらに細かく言えば、ワープには二種類あり、次元をゆがませ空間を直接つなげる方法と、情報として分解し再構築する方法がある」

・・・むずいぞ。

「前者は『どこでも〇ア』みたいなものだ。後者はまあ、大きな機械を解体して運ぶみたいなものだ」

ああ、なるほど。それなら少しは分かりやすい。

「ただ・・・今回、吸血鬼がとった方法は恐らく、ワープではないだろう」

「それまた、何でだ？」

「前者の方法は長距離をつなごうとすると、相当な魔力を使う。吸血鬼の魔力なら東京〜静岡間ぐらいが限界だ。魔力を使い果たしてまで、その程度の距離をわざわざ移動したりはしない」

「・・・こっちからすれば、その距離を一瞬で行けるのは凄いだ
が・・・」

「後者の方法は、そもそも大きな魔力を持つ者を正確に分解、再構築するが無理だから不可能だ」

「なんか、難しいんだな・・・。それじゃあ、あの吸血鬼はどうやって他の世界やら宇宙へ？」

「それは、もう一つの方法・・・ただ単純に宇宙を飛んで行く、だ
・・・宇宙遊泳？」

「似たようなものだ。宇宙にも空気はないが、魔力で代用したり、空気の膜を作ったり、船に乗っていったりと、色々方法はあるからな。・・・ただ、問題としては、世界から脱出するポイントが限られているってこと。そしてそれを今、古王が調べてるんだが・・・」

「特定終了！ 分かったぞ、あいつらの居場所」

古王が嬉しそうな声を上げたのは、創造神が古王の方に目をやった直後だった。

C

「無駄にタイミングがいいな・・・」

創造神が呆れた口調で言う。確かに、まるで謀ったかのようなタイミング。

「たまたまだよ、たまたま。それよか、あいつらの居場所だが・・・
どうやら、人間界付近の小世界に居るらしい」

そう言って、手に持った紙を見せてきた。丸が何個か書かれていて、真ん中の丸の近くに矢印が書いてある。

「小世界・・・ってなんだ？」

「小惑星とか衛星の界宙版みたいなもんだ。小部屋サイズから国サイズまで色々あるぜ」

何から何まで宇宙で例えられるんだな……。

「ちなみに、複数の世界と界宙のまとまりのことを大宇宙と言う。・・・んで、その小世界は割と近くにあるから、行こうと思えばすぐにでも行けるが・・・どうする？」

古王はまるで近くに遊びに行くかのように、軽く訊いてくる。

「ええと、どうする・・・とは？」

俺は古王に訊き返す。だが、答えは創造神の口から出た。

「今すぐ行くか、準備をしてから行くか、って事だろ古王」

「え・・・そんなの、今すぐじゃないのか？」

「いや、それが」

今度は古王。

「こんな時にありがちな、時間に猶予が無い、なんて事がないからな。どうせなら準備をしっかりとした方がいいんじゃないかと思ってるさ」

なるほど・・・って、待てよ。よくよく考えてみれば。

「焦らなくていい根拠って何だ？ こんな間にもノフィーネが酷い思いをしてるなんて事があるかもしれないだろ」

若干、語尾を強めて俺は言う。これ以上心の傷が深くなるような事にはしたくない。

「確かに、その可能性も0じゃない。だがな・・・焦っても仕方がないし、あっちの目的も分からない今、用心することに越したことはない。俺らが失敗するわけには、いかないだろ？」

そう創造神が諭す。

・・・確かに言ってることは分かる。焦っても仕方がないのは正論だ。

そういえば、なんであの吸血鬼、ノフィーネを誘拐したんだ？

あの時、俺を殺そうともしていたが、一回失敗したら後は執着していなかった。だが、ノフィーネの誘拐に関しては決して手放さな

い執着さを見せていた。

盾にする目的もあったとは思うが・・・、ノフィーネを第一に狙っていたのは間違いない。

一体、何の目的で・・・。

『あのー、久郎様』

なんか、すっかり空気と化していたメイナが、脳内より声をかけてきた。

『・・・どうせ役に立たない空気ですよーだ・・・』

ん、聞こえたのか。

とりあえず謝るから、何の用か言ってくれ。

『全然、謝罪に誠意がこもってませんね・・・。ま、いいです。それでですね久郎様』

なんだ？

『さつきから、創造神様が呼んでますよ？』

「おい、久郎。聞いているのか？」

突然、創造神の声が耳に入ってきた。どうやら、考えるのに没頭して周りの音が耳に入らなかったらしい。

「あ、すまん。聞いてなかった」

とりあえず謝罪しておく。・・・どうも少し考えにふけりすぎたみたいだな。

「で、何だって？」

俺が訊くと、創造神はため息混じりに答えた。

「はぁ・・・。だから、お前は行くのか、行かないのか、どっちにするのか、って」

？ 行くってのは、救出に行く、って事だよな。なに、今更な事を訊いてるんだ創造神は。俺を試してるのか？

「行くに決まってるだろ。そんなの。俺だけ待ってるわけには・・・」

しかし、創造神は冷たく言い放つ。

「簡単に言うがな。今のお前じゃ、必ず足手まといになるぞ。それ

ならまだまし、最悪死ぬ可能性だってある。今『命断』の力を失うわけには行かないんだよ」

足手まとい・・・、その言葉は俺の勢いを止めるのに十分な言葉だった。

そうだ、さっきだって『エリクソス』を使っても敵の動きを止めるぐらいしかできなかった。あのハザードって吸血鬼に対しては、全くの無意味だった。

今までは、初めて体験するの戦いの雰囲気飲み込まれて忘れ、気づくことをしようてはしていなかったが・・・俺は所詮ただの素人。危機感も持たずにやってきたが創造神の言う事は、なにより自分がよく知っていた。

『そうですよね・・・』

メイナも俺と同じような声を上げる。

『あの時・・・私はどうやっても、あの吸血鬼を倒す手段を見つけられなかった・・・』

メイナは、俺と同じように、自分の無力さに悩んでいる・・・。

俺は返答に困っていた。ノフィーネは助けたい気持ちはある。だが足手まといになるのは事実だ。俺にはどうしようもない。

そうして俺は黙り続け、やがて創造神は見限ったように俺に言う。
「・・・即断できないなら、やめておけ。どうせ今のお前じゃ何もできない」俺は何も言い返すことが出来ず、ただ黙っている。そんな時、

「なら、鍛錬でもするか？」

今まで黙っていた古王が口を開いた。って、え？　今なんて・・・。

「おい、古王・・・鍛錬って・・・」

創造神も意外な言葉に、それがどういう意味なのか計りかねているようだった。

しかし当の古王はケロッと、

「鍛錬は鍛錬だ。どうせ時間あるし。俺に任せてくれれば、今日中

に普通に戦うレベルまで引き上げてやってもいいぜ」

ニヤニヤしながら言うその言葉に、創造神は呆れつつも訊く。

「一応、聞いておくが・・・お前、そんな短期間でどうやったら普通に戦うレベルになるんだ？ まんま、怪しい商売のうたい文句だぞ」

「ところがどっこい。俺ならそれが可能なだよ。それと、拒否権及び決定権があるのは創造神、お前じゃない。こいつだ」

古王の視線は俺へと移される。

「どうだ？ 今より強くなりたいんなら、騙されたと思って、やってみないか、久郎」

古王は笑っている。俺は試されてるのだろうか？

いや、今はそんなこと、どうでもいい。

「やる」

たった一言、即答する。

「ハハッ、そうこなくっちゃな。やっぱ俺が見込んだ通りの奴だよ、お前は！」

愉快そうな古王。決意を固めた俺。そして、

『即答・・・男ですね、久郎様！ 私、応援します！』

メイナもなぜか感動している。唯一、心配そうな創造神が訊く。

「いつお前が見込んだんだよ。というか古王・・・信じていいんだよな」

「当たり前だ。前から俺は久郎のことを気に入っていたしな」 その表情に、曇りはない。

創造神は、もう少し何か言おうと口を空けていたが、結局ため息一つ。

「・・・はあ、なら俺はそれまで準備するから、勝手にやってろよ」
そう言って、どこかに歩いていった。

「さってと、なら俺らも移動するか」

「移動って、どこにだ？」

「お前、訊いてばかりだな。まあ、どっか広いところだ。とりあえ

ず付いてこい」

そして、さっさと歩き始める古王。

そうして、俺の鍛錬が始まった。今は午後七時。今日が終わって
ノフィーネ救出まで、あと五時間。

Cの22話「体験」

「う、ん・・・」

そこは、ノフィーネが目を覚ました時に、自分はまだ、まぶたを閉じてるんじゃないかと錯覚するぐらい暗かった。

一応、光はあるようで、ノフィーネが目凝らすうちに徐々に見えるようになってきた。

「・・・ここは？」

「くつくつく、・・・目が覚めたか」

ノフィーネは後ろを向く。そこには、吸血鬼ハザードの姿があった。

「・・・そうか、僕は・・・」

「そうだ。我が輩がさらった。くつくつく・・・、美女をさらう・・・これが吸血鬼の醍醐味よ」

四角い部屋、派手な装飾も何もない赤い椅子にハザードは座り、愉快そうに笑う。

「あなた、笑ってばかりだね。傲慢で亜酒笑うような笑い」

「くつくつく、笑いのない人生などつまらんだけだぞ？ それにしても傲慢か・・・『七つの大罪』の内の一つが我が輩に当てはまるとは。なんと光栄なことか」

そしてまた、くつくくくと笑い声をこぼす。

ノフィーネは周囲を見回す。どうやら九畳ぐらいの小部屋にいらしい。窓一つ、扉一つ、椅子一つ、他には何もない。

「それにしても・・・特に怯えた様子が無いのはつまらんな。逃げる様子もない。低俗な人間が声を荒げて助けを請う姿ほど、滑稽なものはないのだが」

「別に。逃げても捕まるだろうし。今更、何回殺されたところで、僕は平気だし」

ノフィーネは飄々と言う。その目にもう恐怖はない。むしろ、強

さの光がそのまなざしにはあった。

「・・・何回殺されても？　どういう意味かは知らんが、我が輩にはお前を殺す許可が出ていない。・・・なんにせよ、恐怖がないのはつまらん・・・」

言葉通り、凄く退屈そうに椅子にどっぷり座るハザード。

それにしても、

（まさか、『不老不死』を知らないで僕をさらった？）

それなら、なぜノフィーネはさらわれたのか。

「それより、ここどこ？　何で僕をさらったの？」

「ふん、ロハでそんなもの、教える訳ないだろ」

（吸血鬼でも『ロハ』とか言うんだ・・・）

と、何か感心しつつ。

「なら、僕の血でも飲む？」

「・・・なんだと？」

少し興味を見せたハザード。もう一押しか。

「教えてくれば、いくらでも飲ませてあげるけど？」

「・・・我が輩、今まで千年近く生きてきたが、人間から血を飲むように言われたのは初めてだぞ・・・」

ハザードは若干、呆れ顔。

「で、どうするの？」

「うむ・・・まあ、うまければ考えてやらないこともないが・・・」

妙な事態に戸惑いつつも、一応承諾する。

「だが、うまければ我が輩は相当血を飲むことになるぞ。さすがに意識障害が出るレベルまでは飲まんが・・・」

「問題ないよ。それで、首筋を空ければいい？　体勢は座ったまま？」

ノフィーネは左側の髪をたくしあげて、後ろを向く。

「あ、ああ・・・それでいい。・・・なにやら調子が狂うな・・・」
千年近くも生きてきた吸血鬼の王が、戸惑いつつ恐る恐る、ノフ

イーネのうなじに口を近づける光景は、それこそ滑稽だろう。

やがてハザードは、その首筋に牙を突き立てる。
カプツ、

「っつ！」

ノフィーネは一瞬、首筋に激痛を感じた。しかし、痛みはそれっきりで、噛まれてる感覚はあるものの、痛くもなんともない。本当に吸われてるのかも分からない。そう、まるで、

「・・・蚊？」

ノフィーネがそう言った瞬間、首筋に有った感覚が急になくなり、
「あんなものと一緒にするな」

ハザードの反論が聞こえた。ノフィーネが振り向くと、ハザードはナフキンで口元の血を拭いているところだった。

さらに、話は続く。

「我が輩は誇り高き純血の吸血鬼。血を吸うのも優雅に行うのだ。したがって、相手に苦痛を与えて血を吸うなどということはせん。だいたいだな・・・」

（結構、気にしてるのか・・・）

ハザードは自分と蚊が同列にされたことが気に入らないらしく。
くどくど、と自分がいかに上位の存在であるかを説く。しかも小さい音量で。

（うー・・・耳がタコになる・・・）

ノフィーネは少し耳が痛くなってきた。このままではたまらないので謝る。

「わかりました！ あなたが、どれだけ偉い存在なのかは、よくわかりましたんで、もうそれ以上は言わなくてもOKです！」

「ふん、分かればいいのだよ」

やっと、話を止めたハザード。

はぁ・・・、と思わずため息が出るノフィーネ。これまた癖のある敵のようだ。

そういった感じで、げんなりした表情を浮かべていたノフィーネ

だが、ハザードの方も不思議な表情を浮かべていた。

「しかし・・・、これは妙な味の血だな。出来立ての年代物の味と
いうか・・・新鮮かつ懐かしい味だ。これはどういうことか？」

「あー・・・、もしかしたら『不老不死』のバイムの力が、血の質
が変化しないようにしてるのかも・・・よくわからないけど」

「『不老不死』？　・・・む、傷が治っていく？」

言われて、ノフィーネは首に手を当てる。やっと『不老不死』が
発動したらしい。それにしても、時間がかかっていた。

（あ、そういえば・・・）

昔、ノフィーネは創造神に聞いたことがある。人間界から離れた
場合でも『不老不死』は起動するが、離れている分は治りが遅くな
るというのを。

（なんだろ。つまりここって、人間界じゃないってこと？）

「おい、お前。『不老不死』とはどういうことだ？　説明しろ」

興味ありげに訊いてくる。

「いいけど、僕はまださっきの質問の答えを貰ってないよ」

「む・・・、『不老不死』について話せば話そう、だからいいだろ
う？」

どうやら、話さないと話してはくれないようだ。

渋々、ノフィーネは『不老不死』について、知ってることをあら
まし話す。

「ほう？　それは興味深いな・・・。つまり、我が輩がどれだけ血
を吸おうと、お前は死ぬことがないのか」

「・・・いやな例えだけど、その通り」

「ふむ・・・、このままベロ・ランザ卿に渡すのはいささか勿体な
い気がしてきたな。我が輩の元に置いておけば、いつでもあの懐か
しい味が楽しめるというのに・・・」

（たえ話じゃなかったのか・・・）

と、それはともかく。

「ベロ・ランザ卿？　その人って誰？　吸血鬼？」

「ん？ 誰がロハでそんなこと・・・って、既に代金は受け取っていたな・・・」

そう言々とハザードは、椅子に座って足を組んだ。話す気にならなかったらしい。

「ベロ・ランザ卿は、お前の誘拐の依頼主であり、我が輩が協力してやっている悪魔だ。魔界のな」

悪魔・・・と聞くと、羽が生えていて触覚があって、体の色が紫っぽいのを想像してしまう。

だが、訊いてみると。

「・・・それは人間界の悪魔・・・というか魔物だな。ベロ・ランザ卿ら魔界の悪魔は、我が輩らや『王』たちと同じく外見上では人間とほぼ同じだ。ついでに言えば、ベロ・ランザ卿は老紳士の格好をしている」

「そんなに言っているの？」

「ふん・・・代金に見合うだけ話してるだけだ。あとは、場所と目的だったか？」

ノフィーネは、こくと頷く。

「ここは人間界近くの小世界。我が輩らの拠点のようなものだ。ここでお前をベロ・ランザ卿に渡すことになっている。・・・目的については我が輩は知らんが、やはり破壊神関係だろう。ベロ・ランザ卿の目的は、破壊神を利用して世界を征服する事だからな」

「・・・そこまで、言っているの？」

確か敵同士だったと思うが、その事実を忘れてしまうぐらい情報をもらってしまったている。

「ああ、暇だからな。だが、我が輩が言えるのはここまでだ」

「そっか、ありがと」

ノフィーネはハザードに礼を言った。言われたハザードはさも可笑しそうに笑った。

「くっくく・・・、まさか血を吸って感謝されるとはな・・・長生きはするものだ」

あまり長生きすぎるのも辛いけどね、とノフィーネは内心つぶやく。

「でも・・・世界征服なんて、本気なの？ 例え破壊神が強かったとしても、利用するなんて・・・無理じゃない？」

「我が輩もそう思うが、ペロ・ランザ卿には何か策があるようだ。我が輩は魔術に詳しくないから、よく分からんがな」

なんか、協力していることなのに、あまり興味は無いようだ。ならなんで協力してるのか。

「・・・少し眠いな。我が輩は寝るぞ。誰かが来たら言ってくれ」

・・・敵にそれを頼むのもどうかと思うけどなあ・・・。

ノフィーネは最後に訊いてみた。

「ねえ、寝る前に一つだけ教えて。あなたは何で協力してるの？ 成功するとは思ってないんでしょ？」

そして眠たげな声が帰ってきた。

「ふん・・・。何かは知らんが面白そう。・・・それだけだ」

C

「なあ、古王」

「んー、なんだ？」

今は古王に付いて行っている道中。俺は一つ訊いてみた。

「あの時、なんでデパートに居たんだ？」

「あー、・・・一つはお前らの護衛だな。実際、吸血鬼を二匹ほど片付けたし。・・・もう一つは本当に面白い物だ。和王がああの服のま

まじゃ目立って駄目だ、と言ってきたから渋々・・・」

「んじゃあ、あの骨董屋にいたのは？」

・・・。

「・・・サボタージュ」

おい。

「・・・ってのは冗談だ。ホントはあの巻物が目的」

・・・ホントか？

「ホント、本当だって。あれはいいものだぞ。中身を訳した後、お前にも見せるつもりだ」

いや、別にそこまでしてなくても・・・。

「いや、あれはお前に見せなきゃいけない物なんだ。理由は後で言うけど」

・・・何だかなあ。そんな事を言われても気になるだけだぞ。

そんな事を雑談しつつ歩いていると、

「さて・・・ここでいいかな？」

どうやら着いたらしい。俺が古王に連れられて来た先は、街から外れた所にある市営体育館のグラウンド。今は年末で休みらしい。

「これだけ広いところ・・・ってことは、戦闘でもやるのか？」

「まあ、ほぼ正解。ただ単に目立たないところを選んだのもあるが・・・暗いな」

まあ、休みだしな。明かりと言えば自販機ぐらいしかない。

「・・・ま、それも丁度いいか」

そう言って古王は、屈伸なんかし始めた。

「ん？ 早速始めるのか？」

「あー、そうだな・・・」

古王の言葉の語尾がしぼんでいき・・・。

「じゃ、始めるか。・・・『古の追憶』発動」

その声と共に、空間に異変が起きた。

「な、なんだ・・・これ・・・」

まるで、砂嵐のように黒い何かが周囲を飛び回る。小さくてよくみえないが、一つ一つ何かを形どっている。

「ああ、それは歴史の断片、ようは情報だ。そして、ようこそ、俺の世界へ。お前にはこれから、百の体験をしてもらう」

・・・百の体験？

「・・・なんだ、それは」

「やってみれば、分かる。が、ヒントを言うとしたら・・・」

地面がグワンと揺らぐ。初めはそれも古王の力かと思ったが、それは違い、ただ俺の意識が遠のいているだけだと知った。

「死の体験だな」

そして、夢の中に落ちていくように、目の前が真っ暗になっていく。

『く、久郎・・・様』

メイナの苦しそうな声が聞こえ・・・そこで俺の意識は途切れた。

C

「・・・どこだ、ここ」

目を覚ますと、そこは知らない村だった。

なにか古臭い村で、時代劇に出てきそうな感じの。

「気がついたか」

後ろから声が聞こえた。・・・この声は古王か。

「お前・・・何をした」

俺は振り向く、しかし・・・姿がない。

「・・・なんか、最近こんなのはかりだな。どこにいる、古王」

「ここには居ないぞ、久郎」

いや、声聞こえてるし。いるんだろ？

「いや、いない。理由はすぐにわかる」

？ 何を言ってるのやら。

・・・しかし、なんでいきなりこんな所に？

「で、何をすればいいんだ、古王」

「ん？ ああ、そうだな・・・まずは・・・」

「一回、死んでこい」

は？、と俺は口に出そうとしたが、

「に、逃げろおおお！！」

向こうから聞こえてきた叫び声に遮られた。

俺はそっちを向く。すると、さっきの声の主だろう粗末な服を着た逃げてくる男性や、その声を聞いて逃げ出す粗末な服を着た人々、そして、

ドダダダダ・・・

「はっはっは！ 野郎共！ 略奪だあ！」
オォー！

まるで時代劇に出てくるような、五匹の馬に跨った山賊、その後ろから徒歩でついている十数人の山賊が、こちらに向かって来ていた。

なんだ、これ？ ぱっと見、時代劇の撮影にしか見えない。だが、

「ぐぎゃあ！？」

「ごふっ！？」

山賊のような奴らは、手にした槍で人々を刺していき、その体からは真っ赤な鮮血が吹き出る。

その血はどう見ても本物で、どう考えてもその槍は体を貫通している。

俺は状況を理解できないまま立ち尽くす。

やがて、馬に乗った山賊の一人がこっちに向かってくる。

槍を引く、それで俺を刺そうとしているのか。

「『エリクス』！」

とりあえず迎撃しようと、俺は叫び槍を出そうとする。だが、槍が出現しない。

「な・・・に？」 俺の眼前に槍が迫る。『刹那の延長』・・・発動しない!？」

グサッ!

そして、俺の体に槍が突き立てられた。声がでない。口からは真っ赤な液体が吐き出た。

なんなんだ・・・これ・・・。一体、何が・・・。刺された胸が痛い・・・痛みで呼吸が出来ず苦しい・・・。

俺の目の前が黒く暗転していく・・・。

と、

「はい、これで一回死んだ」

？ 唐突に古王の声が聞こえたと同時に急に痛みも苦しみも消えた。

俺は一度、暗転した世界を見回してみる。どこにも古王の姿はない。また隠れているのか。

「・・・古王か。なんだったんだ、あれは」

「死の体験・・・と言っただろ？」

それは前にも聞いた、全然答えになってないぞ。

「そうだな・・・まず、この目的についてから言おうか」

そう言った瞬間、暗闇の中に古王が現れる。俺の不信感を少しでも解こうとしたのだろうか。

「・・・この目的はな、お前に死の恐怖を覚えさせること。・・・それとついでに、戦闘に慣らすことも考えてる」

死の恐怖・・・。

「お前は今まで平和な世界で生きてきたからな。死についてあまり恐怖を感じていないだろう？ だが、殺し合いの場で死の恐怖を知らないのは、それだけで命取りになる。だからこうやって、死の直前を体験させてみたわけだ」

・・・どこかで聞いたような話だな。死の恐怖・・・、確かに今まで感じたことはない気がする。一昨日の晩の時もただ夢中で恐

怖という恐怖も感じていない。だが、死を怖がっていて、戦えるものなのか。

「否。怖がっているからこそ戦えるんだ。適度の恐怖は全身を奮立たせ、常にベストパフォーマンスを維持させる」

古王の話はさらに続く。

「だが、恐怖に慣れすぎるのも困りものだ。戦いで感じる恐怖がいつしか快樂へと変わり、麻薬のように止められなくなる。俗に言う『狂戦士』というやつになってしまう」

そういえば、爺さんからこんな話を聞いたことがある。かつての大戦中、数多の戦場に自ら進んでその身を投じ、例えば負傷して帰投しようとも、すぐにまた戦場に出ようとした軍人がいたと。

そういう人の事を古王は言ってるんだろう。

しかし、

「なあ、古王。ならお前はどうかんだ。あの吸血鬼との戦いでもそれを楽しんでたようなお前は、死の恐怖を感じているのか？」

その間に古王は始め気楽に答える。

「ああ、あの戦闘ぐらいはまだ可愛いもの、殺し合いなんかじゃない。それに・・・俺も言わゆる『狂戦士』なのかもしれないな。歴史というものには、常に戦いは付き物だったからな・・・」

古王は初めて寂しそうな声色を聞かせる。こいつも色々訳ありってことなんだろう。

・・・話がずれてしまった。訊き直すでしょう。

「・・・目的は分かった。それで、あれは何なんだ？」

「ん、ああ。あれは俺の力の一つ、『古の追憶』でお前に体験させている現象だ。仕組みとしてはお前の脳に直接情報を送っていて、簡単に言えば『残知回想』の体験できるバージョン。無論、かつて存在した出来事であるという点も同じだ」

それはバージョンどころか、まんまな気がするが。

「そしてあれは、昔の日本で実際に行われた略奪・・・いや、殺戮を再現したもの。その犠牲となった民の一人の体験をお前にしても

らった」

つまり・・・、俺が体験した人物は、実際に昔死んだ人間だと言うことか。

「そのとおり。俺は古を記録する役割を持つ王。人間界の歴史もすべて記録しているからな。・・・ああ、そういえば、大量に情報を送った際にメイナをびっくりさせたみたいで、今あいつは気を失っているみたいだ」

あの時の苦しそうな声の原因はそれか。

「それ、後でメイナに謝っとけよ。いきなりやりやがって、俺も謝罪を受けたいぐらいだ」

「つい面白そうやってしまった、今は反省してる」

・・・ふざけてるだろ。

「本当にすまないとは思ってるんだがな。さて、長話が過ぎたな。そろそろ次行ってみよう」「次、か・・・」

そういえば百の体験とか聞いた気がするな。

俺はさっきの苦しみ・・・そして痛みを思い出す。あれだけでも死の恐怖というものを俺は知れた気がするが・・・、まだやる必要があるということは、まだ知り切れていないということか。

ところで、古王は何か悩んでいる様子を見せている。

「どうした？」

「うーん・・・、さっきお前、対してテンパったりしてなかっただろ？ それじゃあなんか少し効果が薄そうだから・・・・・・お、そうだ！ こういうのはどうだろう！」

何か良いことを思いついたのか、その声は嬉しそうだ。

「まず、お前の記憶を一時全部消して、お前の役割が『兵士A』なら『兵士A』、『獵師A』なら『獵師A』としての記憶だけを持って体験を、五回してもらう。その後、お前の記憶を全て戻して一回やる。それを6セット繰り返し九十九回の体験をする・・・ってのは、どうだ？」

・・・どうだ、って言われても・・・それに何の意味が？

「それがただの体験、だって分かってやってたら、真の恐怖を感じられないだろ？　だが、そんな状態の体験で得たことを実践して貰いたい事もあるから、たまに記憶を戻してやってもらおう。そんな感じだ。・・・やるか？」

・・・そうだな。覚悟を決めよう。

「ああ、やってやる」

ノフィーネを救う・・・そのためなら、何だっていい。やってやろうじゃないか。0

「いい目をしてるな。なら早速初めてやる。・・・おっと、言い忘れてたが、十分間生き残ることができれば、その回は死なないで済む。だから頑張って生きろよ」

古王は口を歪ませ、楽しそうな表情を浮かべ、言う。

「逝ってこい！」

ドンッ！

・・・俺は頭の中に強い衝撃を受け、意識がまた、遠のいていく・・・。

C

「・・・はぁ・・・はぁ」

さて・・・、今回回目だろうか・・・。

今回は記憶がある回を回みたいだから6の倍数回目のはずなんだが・・・、記憶がある回を何回やったのかもあやふやだ。

それほど、いろんな死を見てきた。

最初の方は、内戦、紛争、戦争・・・そういった悲劇に巻き込まれた民衆、兵士、の体験をした気がする。もちろん、どれも生き残った気がしない。

さらに最近は、ゴーストハンターや霊媒師・・・もしくは魔法が飛び交う戦争の中にいた魔術師・・・そういった体験をしている。これも生き残った記憶はない。

そして今は確か・・・ヴァンパイアハンター・・・つまり皮肉にも、吸血鬼を相手にしている。

どこか外国の夜の街、街灯と月明かりだけが照らす道を、俺はひたすら走っている。

「はぁ・・・、はぁ・・・」

相手は吸血鬼一匹・・・だったが、仲間もやられ吸血鬼化し、今では3匹の吸血鬼と戦っている。

武器は、何かよくわからない弾が出る銀色の銃1丁。だが、今までに1発も当てていない。

さてどうしたものか・・・つつ！

ザシュツ！

横の通路から伸びてきた腕が右腕にかする。とっさの判断で左前方に飛んだが、傷は浅くないようだ。

「・・・グルル」

襲ってきた手の主がうめく。

今襲ってきた吸血鬼は仲間の一人だったやつだ。今では背中には黒くて赤い膜の翼が生えている。

確か噛まれて数分も経ってなかったような気がするが、すっかり心は吸血鬼に染まっているらしい。

俺は銃を左手に持ち替え、走りつつ、吸血鬼に向けて何発か撃つ。

・・・が、まったく当たらないので牽制しつつ逃げ・・・うおっ！

ザシュツ！

今度は上から鋭い牙が襲って来る。こいつも仲間だったやつだ。

今度は横に向かって転がる。・・・そのまま吸血鬼勢い余って地面にぶつかり、地面が碎ける。・・・あれ、当たったら噛まれる前に死ぬだろ・・・。

とにかく、元仲間だった二人は吸血鬼の体に慣れてないのか、常にオーバーな動きで襲ってくる。ゆえにかわしようもあるんだが・・・、問題は・・・純血の吸血鬼。

仲間二人がやられた時も、音もなく一瞬で忍び寄ってきた。まる

であのハザードとかいう吸血鬼と同じように・・・。

・・・どこから、どこから襲ってくる・・・。

もしかしたら今が一番、死の恐怖を味わっているかもしれない。

と、今何か変な感覚が頭をよぎった。それは知らない感覚。恐怖とかそういうのではなくて、なんかこう・・・第6感？

「・・・？・・・そこか？」

・・・なんとなく、ただなんとなく銃口を右斜め上に向けて引き金を引いてみる。

バンッ！

「ウグッ・・・何故私の場所が・・・」

ちなみに、都合のいいことに日本語翻訳機能付きだ。・・・ではなくて、

吸血鬼の苦痛の声が聞こえる。・・・当たった・・・のか？

なんでもかは分からないが、他の2匹もいることだ、とにかく逃げる走る。

ザシュ、ザッ、ドスッ！

2匹の猛攻をかわしつつ銃で迎撃しつつ、俺は何故当たったのかをぼやっと考えていた。

確か、体験する人物の記憶が貰えるって話で、実際俺の頭の中にはヴァンパイアハンターの男の記憶がもやもやした感じで在る。

もやもや、というのも、その男の家族との思い出とか戦友との悲しい決別とか、そういった印象的な出来事の記憶はあるが、それ以外については何となくしかない。言うなれば、そいつの性格とか人格とか、そういったことが分かる程度の記憶しか俺は与えられていない。

まあ、銃の使い方、整備方法、弾の効果、そういったものは分かるし、実際使ったことも無い銃を使いこなせてるわけだが・・・。

もしかして、それと同じことか？
推測にすぎないが、ヴァンパイアハンターとしての勘や実力も俺に引き継がれてるのかもしれないな。・・・そういやさっきから走

つっても疲れないし、外見は俺のものが中身は全く別ってわけか？
まあ、でないとういうった風に考えながら戦うなんてとてもとても・・・。

「ヴァアア！」

！ 咄嗟に左に転がる。そして俺がいたところに青い魔弾が直撃
ドゴン！ ガラガラガラッ・・・。

・・・さらにその魔弾は止まることなく連なる民家へとつっこんで行く。・・・タイルやら、その先にあった民家やらが倒壊していく。・・・バカげた威力だ。さっきまでいろんな魔物との戦闘を体験したが、こんなのは今までになかった。逃げる足が止まる。

魔弾の発射先を見ると、そこにはやはりあの吸血鬼。

「・・・フッ、ハハハ！ 人間！ 我に銃弾を当てるとはいいい度胸だ！ おかげで私の体力が削がれてしまった」

のわりに元気に叫んでる気がするが。

「この償い・・・受けてもらうぞ」

そんなこと言われてもな・・・。というか、こんだけ派手に戦闘してるのに何で誰か助けに来るとかないんだろうか。そのところの疑問を解消する記憶は持ち合わせていない。

吸血鬼は、低い体勢をとり肘を引く・・・まるで、突撃し、その爪で獲物を裂かんとするかのような構え・・・。

「さあ・・・、我が至高の攻撃にて死ぬがよい」

あれは間違いなく、突撃してくるだろうな。次の瞬間にでもしてきそうだ。

・・・どうしたものか、どうやらあれに対抗するための知識や勘を俺は持ち合わせていない。・・・つまり、あれをくらってこいつは死んだってことだろうか？

体は勝手に銃口を相手に向けたがる。だが・・・多分これじゃ、死なないんだろう。

ならどうしようか、まっすぐ逃げてでも追いつかれてアウト、撃ってもアウト。ならどうすれば・・・。

と、考えていた時だった。俺の頭にある一つの記憶が蘇る。

バタタタン。銃の音が聞こえる。

『いよいよか・・・無事生き残りたいものだな・・・』

『ん、それならいいこと教えてやろうか。一番いい回避方法について』

ん？ これは・・・。

この記憶は、このヴァンパイアハンターのものではない。

ジャックは変なことを言い出した

『一番いい回避方法？　なんだそれ』

『ふっふっふ・・・それはだな、ズバリ、しゃがむことだ。相手は頭を狙ってくるんだから、そこから一番遠い位置へ頭を動かせば、弾は絶対当たらない』

『・・・アホらし・・・さあ行くぞ』

ケ빈はそう言って、塹壕から一気に飛び出し・・・。

この記憶は確か・・・少し前に体験した戦場での体験の記憶だ・・・。

・・・試してみるか。

「さあ、くらえ人間！ 『血の疾走』！」

技名らしき名前が叫ばれたその瞬間、俺は体を後ろへと完全にのけぞらせる。

ゴツ！

っ！・・・タイルに後頭部をぶつけた。あの某映画みたいに華麗によけようと思ったんだが、脚が持たなかった。だが、ドヒュウウウウウ！

俺の顔の上をものすごい風とともに吸血鬼が通り過ぎた、風圧がすごい・・・が、直撃はしなかった。・・・ラッキー。

「む？ どこにいる」

吸血鬼は手ごたえのなさに急停止しようとする。だが、すぐには止まらず、ましてや振り向くなど論外。

まさか、こうもうまくいくとはな……。ジャックサンキュ。まあ、相手の頭に血が上ったのもあるとは思うが。なんにせよ。

俺は倒れたまま頭を後ろに、左腕も後ろに動かす。そして狙う・・。

バンッ！

「な、ガハッ！ うっぐ・・。」

狙いが外れることなく。弾は吸血鬼の心臓を貫いた。・・。こいつの経験上、こうなった吸血鬼はもう・・。

「我が・・。人間ごときにいいいい！ ガハッ！」

体から赤い液体が溢れ出し・・。吸血鬼の体は地に落ちる。その体が動くことは・・。2度とない。

「・・。やった・・。やったぞ！」

俺が思わず喜びを口に出し、ホッとしたからか右腕の激痛にようやく気付いた瞬間、

「ガアッ！」

ッ！ 目の前に元仲間だった吸血鬼が顔を近づけてきた。しまった・・。こいつのことを忘れ・・。

そして吸血鬼の牙が、俺の喉に触れ・・。と、その時、プッン。

？ まるでテレビが切れるような音が響き、痛みを感じる前に目の前がブラックアウトした。

はて、こんなのは初めてだ。たいてい最後の最後は痛みの中だんだん意識が遠のいていく形で終わるはずなんだが、まだ意識もはっきりしている。

いったい、何が・・。

と、考えてた時、まるで長い間目をつむっていた後目を開けたかのように、急に目の前が開けた。

C

「10分間の生き残り成功おめでとう！」

パンっ、パパン！

・・・クラッカーが鳴らされ、耳がキーンとなる。これはいったい・・・。

「いやー、結構ギリギリだったとはいえ、最後の最後に生き残れるとはなく。予想外だったぜ。とりあえず生存おめ。それと100回お疲れ」

100回お疲れ？ てことは・・・、

「100の体験・・・やり終えたのか？」

「ん？ 自覚はないか？ まあ、あんだけやってればな。っで、早速だがどうだ？ 100・・・いや、99回死んだ感想」

・・・そんな感想求められても。もう何が何やら。

あ、でも・・・。

「・・・怖かったな。失うのが」

「ほう？ それは自分の命がか？」

「いやそれもあるが・・・、むしろ仲間や家族を失う方が怖かった・・・気がする。もう会えなくなるのは絶対嫌だと。そうあいつらは心の中で思ってた」

その人物の記憶しかもっていなかったとき、もろに感じた家族の温かみ。そしてそれを失う冷たさ。

あれが本当の恐怖なのだと。思い知った気がする・・・。

「ククク・・・おっと、この笑い方じゃあの吸血鬼っぽいな。まあ、なんにせよ上出来だ。そしてその失う怖さは、人を救う力ともなる、と。他にも色々な戦いを経験して、戦いの感覚を学べたんだろ？」

上出来すぎるよ、ホント」

・・・目の前の古王は愉快そうに笑う。・・・そういえば、どれくらいの時間が経ったのか。一回5分でも、8時間以上は経ってる

計算になる。

「って・・・よく考えてみたら、もう次の日になってるよな、おい」
今日中に出発的な話だったはずだ。俺は古王に文句を言うが、

「ところがどっこい。まだ、1時間程度しか経ってないぜ。なんせ
お前が体験した体感時間はこっちの十倍以上だからな。まあ、『残
知回想』で何日分も見たのに、数時間しか経ってなかったのと一緒に
そういうことらしい。つまりまだ今日が終わるまで3時間ほどあ
るということ。」

「・・・そうか。なら、今すぐ救出に行くのか？」

「いんや。創造神の準備がまだ終わってないから、まだ行けない」
うーん。まあ、焦っても仕方ないな。すぐに行けないのは若干も
どかしいが、準備が出来てないのに焦っても仕方がない。
んと、そう言えば。

「メイナは？」

「お前が呼びかけても返事がないなら、まだ気絶したままなんじゃ
ないか？ いずれにせよ、そろそろ起きると思うが」

その根拠は。

「勘だ」

・・・。

「・・・そんな怖い顔をするな。勘も大切だぞ」

とかあほらしいことを言ってる古王を俺はにらみつつ、脳内に呼
びかけてみる。

・・・返事はない。

「・・・まだ起きてないみたいだ。ホント、メイナが起きたら謝っ
とけよ」

「ああ、そんなしつこく言わなくてもわかってるよ」

ならいいんだが、それにしても・・・寒い。

現実の体が一時間の間ずっと動かずにいたせいだろう。厚木を着
てたはずなのに思いのほか寒い。

「・・・寒いぞ」

つつい声に出してしまうほど寒い。そのうち口の周りとかがガタ言いだしそうだ。

「なあ、古王。カイロとか持ってないか？」

「なんだ久郎。お前寒いのか？」

俺と同じくらいの服装のくせに全然寒そうな様子を見せない古王。そうだから、カイロ持つてるなら早くよこせ。

「・・・あいにくだが持ってないぞ」

そうか・・・寒いんだけどな・・・。

どうしたものかと考えながら、体をこする俺。そんな俺に古王は言う。

「・・・だが、代わりと言っちゃなんだが。ここで、かねてから考えてた第二のトレーニングを行いたいと思う。どうだ？」

第二のトレーニング？　　そういや戦闘するのか、って訊いたっけ俺。てことは・・・。

「さあ、俺と戦おう」

「無理」

俺は、きっぱり言う。

「無理っておま・・・、あきらめんなよ！」

いや、そんな熱く言われても無理。・・・まあ、ちよつとは体があつたまったが。

「てか、あの吸血鬼と互角に張り渡るお前と勝負になるわけがないだろ」

「いや、勝負じゃなくて訓練だ。でもまあ、やりあうのが嫌だって言うなら・・・、バイム武器庫から武器を取り出して使いこなす訓練をするでもいいが・・・そっちはどうだ」

バイム武器から武器を取り出す訓練・・・ね。

「まあ、それなら・・・」

「おっし、じゃあ、決まりだな」

古王は極めて楽しそうに言う。

こうして、俺は『バィム武器庫』内の武器を使う訓練をすることになった。

訓練内容は、『エリクス』以外の使えそうな武器を探すこと。とりあえず、創造神の準備が終わるまで、武器の模索をすることになった。

Cの23話「出発」

寒空の下、数十分か数時間かは分からないが、とにかく結構長い時間バウム武器庫内の武器について試行錯誤していたところに、創造神が帰ってきた。

それに、気づいた古王が一言。

「あ、お帰り。どうだ、準備の方は」

「準備が完了したから俺が此処にいるんだろ」

分かり切ったことをいちいち訊くな、みたいなニュアンスを込めつつ創造神は言う。

「それよりも古王、そっちはどうなった？」

「ん？ ああ、『久郎改造計画』の事か」

・・・なんだその、手術台に直行されそうなネーミングは。てか、そんな名前が付いてたのか。

「・・・なんだその『久郎改造計画』というのは」

創造神も同じことが気になったらしく訊いていた。

「ん？ ああ今、俺が考えた」

・・・。

ふと、脳内に声が響く。

『改造・・・あの、久郎様は改造されるなら、どの生物との融合がお望みですか？』

そう言えばメイナはあの後少ししたら復活した。古王が確かめたら異常は無かったらしいし、謝ってたから大丈夫だろう。

と、それはともかく。・・・なんで俺が生物と融合しなきゃいけないんだ。

『悪と戦うためです！』

なんじゃそりゃ。それは仮面をかぶった人たちに任せるべきだろう。

『否！ 今のこのご時世。自分の身を自分で守らなくてどうするん

です！ 一人一回は改造を受けるべき時代です！』

・・・いや、それってむしろ怪人を増やして悪の協力をしてないか？

『・・・それもそうですね。なら、仮面を・・・』

はい、話が進まないの、メイナの言ってることは無視しよう。古王の話は続いている。

「とりあえず、まともに戦えるレベルまで引きあがったと思うぜ。新しい武器も色々試してみたし」

「新しい・・・武器？ ああ、武器庫のか」

納得した様子の創造神。その視線は古王から俺に移る。

「例えば、何が使えるんだ？ 何か出してみてくれ」

声は冷静だが、創造神がこっちを見る目には期待の輝きがある。こいつも古王と同じ口か。

「えーと、なら・・・」

俺は手に意識を集中させる。出し方はエリクソスの時と同じだが、少し違う。例えるなら、違う引き出しを引くような感覚だ。

「よっ・・・と」

そして宙に出てきた槍を左手でキャッチする。・・・えーと、これは確か・・・。

「グング・・・ニル？ グングニールだったか？」

「「おぉー！」」

槍が出現した瞬間、神と王から新鮮な感嘆の声が聞こえた。

「・・・てか、古王はさっきも見ただろうが・・・」

「いやー、イイモノは何回見てもイイモノなのだよ。特に伝説の名器のレプリカだから、歴史的価値もそれなりにあるぜ」

いや、レプリカなのに、なんで歴史的価値が？

「ん？ いや、美術館に本物として展示されてる幾つかの美術品は本当は精巧な、にs・・・」

はい、それ以上言うな。そんな事はないから。よくわからないけどヤバめな発言だから。

さて、一方の創造神はまだ感動しているようだ。

「これは・・・、初めて見るが、随分と凄い槍だな」

ん、初めてって・・・、

「お前が武器庫を作ったんだろ？」

「いや、作ったには作ったが。そもそもバィム武器庫は自動登録制で、ある一線を超えた武器の情報を自動的に登録するシステムになっているから、俺も中に何があるかいまいち分からない」

「・・・ずさんな管理だな。にしても確か古王から、この槍はとある神様の槍だと聞いているが

、会ったことはないのか？ 同じ神だろうに」

と、俺が訊くと、創造神は変な表情を浮かべ言った。

「それは・・・神話の神様だからな。・・・というか、人間にとって神話は物語じゃないのか？」

・・・どういう意味だ？ 今度は俺が変な表情を浮かべることになる。

「・・・まさか、実際に神話に登場した槍が・・・いや正確にはレプリカだが、とにかく。その槍がここにあるっていうのに、神話は物語でしかないなんて言うのか？ それに『エリクソス』だって神話級武器って呼ばれてただろ」

・・・いや、よくよく考えると。普通、神話は物語でしかないって考えるよな。たまたま俺が神様とか魔術とかの存在を知っていたから、神話もあるものだと思っていたが。・・・ないのか？

「いや、お前が神話を現実にしたこととして捉えている事に少し驚いただけだ。確かに、神話は実在したのかもしれない。・・・だがな、お前は一つ勘違いをしている」

勘違い？

「お前らの世界で言う『神』と、俺の持つ『神』の名は、意味合い的に全然違うものだ」

「意味合いが違うって・・・お前は神様なんだろ？」

「いや、お前らの世界・・・広く言えば宇宙にとっての神っていう

のは、何か超人的な力を持っていたり、信仰の対象になっていたりする者の『総称』だ。・・・だが、亜宙にとっての『神』の名は、『称号』のことだ」

・・・亜宙。確か人間界や魔界や王界がある、異世界版宇宙のようなもの・・・だったな。

てか、その二つの何が違うんだ？

「根本的に同一視してはいけないということだ。・・・前、宇宙が横に広がるものなら、亜宙は縦に広がるもの、って例えただろ。だから宇宙の存在である神話の神々と、亜宙の存在である俺たちとは、基本的に交わらないんだ。ただし人間界でなら間接的にはいえ、こうやって神話の武器を見たり触れたりすることができ」

分かりにくいな。もっと簡潔に。

「それぐらい理解できるようになれ。まあ、別に理解しなくてもいいが。・・・とにかく神話の神々とは実際会ったことも見たこともない。実は本当に居たのかさえ分からないが、ここにその槍のレプリカがあるってことは、実際に起こったことなんだろうと、推測したまでだ」

ふーん。じゃあ、本当は居ないかもしれないってことか。

「その槍だって、本物自体が神話に登場したグングニルを模倣して作った可能性だってあるしな。事實は闇の中ってやつさ。ま、だからこそロマンがあっというんだぜ。他にも宇宙人とかもロマンあるし」

と、古王が付け足す。・・・宇宙人とかの発言は無視するとして、なるほど、その可能性も捨てきれなのか。

「だけれど、この『グングニル』が強い武器であることは確かなんだろ？」

「ああ、それは確かだ。バィム武器庫に入ってる時点で間違いはない」

創造神はそう言って太鼓判を押す。

なら問題はない。この武器が対吸血鬼の役に立つのなら、神話が

事実でも虚実でもどうでもいいことだ。

ん、そういえば……。前々から疑問に思っていたことがあったが、それ系の話題が出たし、ついでに訊いてみよう。

「なあ、創造神。そう言えば、お前が人間界を創ったんだよね？」

「ああ、そうだが……。それがどうした」

「いや、だけど科学的見解で言えば。地球は惑星の衝突によって出来たって話なんだが。これってどういうことだ？ 科学的な方が間違ってるってことか？」

「いや、そうじゃない。理解しにくいかもしれないが……。地球が出来た地点と俺が人間界を作った地点とが全く同じで、よって宇宙と亜宙が間接的につながるような世界になってしまったんだと思われる。……。つまり、地球はその衝突で生まれ、その生まれた地球に対し俺の組んだバイオアムが組み込まれて人間が生まれて、人間界が出来たんだろう。おそろくだが」

……。すまん。訊いたの俺だけど全くわからん。

「つまりは、容器は科学が作って、中身は俺が作ったところか。つまり地球は俺の組んだバイオアムのおかげで、こういった知的生命体が住む世界にまで成長してってことなんだよ。……。現に、他の星々には知的生命体って住んでないみたいだろ？」

「まあ、それは……。そうかもな」

確か、深層バイムには、その世界が潤滑に動くためのプログラムが組まれているって話だ。そのプログラムののおかげでこうして生活できているのなら、ありがたい話で……。ん？ ちょっと待て。

「地球にここまで大型の生命体が多いのって、確か太陽との位置取りが、偶然良かったからじゃなかったっけ」

「ふむ、それは科学的な見方だな。……。まあ、いろいろ複雑なことになってるわけだ。それを説明しきるのなんて無理な話だからな」
それもそうだな。そもそも俺はそんなことを研究したいわけでもない。

さて、そろそろ話を本題に戻そう。……。えーと、確か準備が終

わったんだったか？

「・・・長いことはなしがずれていたが、準備が出来たということ
は、もう行くんだろ？ 創造神」

「ああ、行ける。行けるが・・・」
「行けるが・・・何だ？」

「・・・いや、何でもない。ただの思い過ごしだ。さて、すぐにで
も行こう、付いて来てくれ」

そう言って創造神は歩きだす。

さて、何を思いすごしたんだか・・・。なんかのフラグだよな、
それ。

とは思うものの。結局、俺にはついて行くことしかできない。ま、
何かが起こったとしても、起こってから考えればいいだろ。

俺も歩きだそうとしたが、ふと気付く。

「古王？」

あたりを見回すが、古王の姿が見当たらない。どこ行ったんだ・
・？ 話が難しかったから、いやになってどっか行ったのか？

メイナ、知らないか？

『あ、知ってます。確か、体育センターの方に向かって歩いてきま
したよ。トイレですかね？』

いや、閉まってるからトイレはないだろ。あるとすれば・・・自
販機ぐらいだ。

「何にせよ、呼んできた方がいいか・・・。おい、創造神」

「ん？ 何だ」

「ちょっと、古王があっちの方に行ったらしいから、ちょっと呼び
に言ってくる。少し待っていてくれ」

そうことわつといて、おれは体育センターに向けて走る。

C

体育センター裏。うっそうと木が生い茂る中、古王は携帯電話の

ような通信機で話していた。

「・・・和王。それは本当か？」

『ええ。さっき観測したようよ。それに、誰かが信者の中の幹部級の口を割らせて確証も得たらしいし』

「・・・確証ね。信者って呼ばれるような狂ったやつが、そう簡単に口を割るとは思えないが・・・ガセなんじゃないか、それ」

『いえ、どうやらその尋問を行ったのは、あの苦王らしいのよ。だからおそらくは・・・』

「あのサディストがか？ そりゃ仕方ないな。・・・ところで、お前に対する急な帰還命令、どうだった？」

『予想通り陰謀だったわよ。その命令を出したの、その捕まった信者だったから』

「やつぱりか・・・にしても、まずいことになってるな・・・タイミングが良すぎだ。何かの演出か？」

『古王・・・いまさらだけど。・・・誰も争わないで解決する方法は、ないの？』

「・・・本当にいまさらだぜ、和王。そんな方法があったら、誰も戦争なんてしない。・・・ま、争いのない世界をお前が求めているのは知ってるけどさ・・・」

『・・・難しい道だったのは分かってるわよ。でもね・・・0%じゃない・・・少しでも、その可能性はあるはずよ』

「・・・フツ、それもそうだな。0%じゃない限り、その可能性は50%に等しい・・・って誰が言ったんだっけか？」

『知らないわよ。・・・ねえ、古王』

「なんだ、和王」

『・・・気をつけてね』

「・・・変なフラグ立てんなよ・・・ま、でも気をつけるぜ。心配ありがとな和王。そんじゃ切るぞ」

『ええ。それじゃ、また・・・』

ピッ。

古王は通信機をポケットにしまい、控え目にため息。

「・・・はあ。すっかり困ったな」

と言っているが、言うほど困ってなさそうに見えるのは、古王の口調のせいかな。どう見ても苦笑しているようにしか見えない。

通信も終わったので、さてグラウンドに戻ろうとする古王。

角を曲がって・・・、

「古王！」

「うわっ!？」

古王は走ってきた久郎とぶつかりそうになった。

「お、脅かすなよ久郎・・・。寿命が二秒ほど伸びたぜ・・・」

「なぜ伸びたし・・・じゃなくて、創造神がもう行くってよ。てか、そんなところで何してたんだ？」

久郎に訊かれ、古王はなるべく自然体に戻す。

「ん？ ああ、電話だよ。ちよつと連絡を、な」

ふーん。と、久郎は怪しげな眼で古王を見る。一応、嘘は言っていないのだが。

数秒後、古王の表情からは何も掴みようがないと判断した久郎は、

「はあ。まあいいや、早く来いよ」

そう言い残して、さっさと走って行ってしまった。

「うーん・・・。いま聞いたことを伝えるべきだったかな？・・・

まっ、いいか。そっちの方が面白いし」

そう言って古王は少しニヤけつつ、久郎の後を追っていった。

C

創造神に連れられ十分程度。着いた先は雪が降りつもった山の中。そして、そこにあったものは。

「・・・ロケット？」

・・・まるで、子供の絵のようなデザインのロケットが横たわっていた。

「そうだ。これで、ノフィーネのいる小世界にへと発つ」

・・・さて、どこからツツコンでいいものやら。

「よっしゃ、早速乗ろう！」

「ちょ、ちょっと待った」

あわてて、古王を止める俺。

「? どうした久郎。一番乗りは力づくにでも譲らないつもりだが?」

子供かお前は。

じゃなくて、

「その、なんというか・・・。何このフォルム、だとか、何でロケット? だとか、何で横向いてんの。だとか、そもそも異世界にロケットで旅立つって、とか・・・色々ツツコむべきがあるだろう?」
それを聞いた古王は、船体を一通り見まわす。

「・・・特にない気がするが?」

「お前になくとも、俺にはあるんだ!」

わざとか、わざとやってんのか!?

「うむ、久郎の言いたいことは分かるぞ」

そう言ったのは、創造神。よかった、やっぱりまじめな時のこいつは良識人だ・・・。

「俺も初めはスペースシャトル型がいいかと思ったんだがな。やはりここはロマン重視で・・・」

・・・前思考撤回。こいつもふざけてやがる。・・・とりあえず訊き直そう。

「いや、だから。亜宙が異世界版の宇宙ってのは聞いたが、ロケットで異世界へ移動できるのか? ってことだ。しかもこんなふざけたフォルムので」

「いや、正直言うと、フォルムは気密性があって少々頑丈なら全く問題ない。そもそもバリアだとかフィールドが張れる奴なら、こんなのがなくても簡単に行ける。現にあの吸血鬼はそうやって移動したみたいだ」

・・・ふーん。じゃあ、俺たちもそのバリアとかフィールドとかを張っていけばよかったんじゃないか？　まさか、色々と魔術が使えて、バリアは使えませんか言うつもりじゃないよな？

「いや、使えるには使えるが。これに乗って言った方が魔力の節約になる。それに楽だ」

さいですか・・・」

「しかし何だ、久郎。やけにお前嫌がってないか？」

そりゃあ、この年にもなって、こんなデザインのロケットなんかに乗るってのは少々抵抗がありますよ。ええ。しかも、これから真面目にノフィーネを救出しようって時に、こんなロケットじゃカッコつかねえだろ。

・・・ま、言っても無駄だろうけど。どうせ、イメージの問題だし。

「ま、しょうがないか・・・」

しぶしぶ俺はそのロケットに乗り込む。中には座席が三つ縦三列に並んでいる。その内、前にある一つには操縦かんなどがついたテーブルが前方に設置されている。そして、その操縦席に既に古王がシートベルトをして着席していた。なんとなくだが・・・その目は輝いているような気がする。

「・・・もう何も言うまい」

「どうした久郎。なんかワクワクしないかこういうの！」

・・・別に。

とりあえず、俺も座る。シートベルトを締める。そして瞼を閉じる。

・・・なんか疲れた。

「なあ、創造神。久郎どうしたんだ？」

「さあ？」

・・・俺が変なわけじゃないよな。ただあの二人の美的センスとか、あの二人のすべてがおかしいだけだ。うん、きっと、そうだ。そんなことを思いながら、いままでの疲れもあってか、俺はすっ

と、眠りに落ちた。

C

・・・夢を、見ていた。

夢って言っても、ファンタジックなものでもなければ、昔の思い出を追憶してるわけでもない。

それは、昨日の朝食のような光景。食卓には七人分の食事が並んでいる。

・・・あの物騒な料理はないが。ノフィーネがいて、創造神がいて、メイナがいて、古王がいて、爺さんがいて、俺がいる。そして、時神も・・・。

時神・・・どこへ行ったんだろうか？

本当に、破壊神の信者側についたのか？

・・・分かるはずもない。やがて、夢は別の光景を移す。

それは昨日、『残知回想』で見た、時神と効煽の過ごしてきた日々の光景。

・・・二人とも、本当に楽しそうだ。・・・そして今一度、思う。なんで、時神は効煽を憎んでいるんだ？　そして、効煽はなんで時神を封印しなきゃならなかったんだ？

・・・時神の破壊神好き。効煽の封印。時神の力・・・。

ひたすら色々と考えてみるが、浮かんでは消え浮かんでは消え、あやふやなまま、俺は目を覚ました。

「おい、久郎」

・・・古王の声が聞こえる。

「・・・ん」

「ついたぞー」

「うえっ!？」

俺は飛び起き・・・ようとして、シートベルトに体が食い込み、少々痛い・・・。

「・・・大丈夫か？」

・・・とりあえず、俺はシートベルトをはずして、ゆっくり立ち上がる。椅子が堅かったせいか、体が痛い・・・。

「いつつ・・・って、それよりも、着いたって・・・」

「ん？　だから目的の小世界の到着したぞ。たった今」
・・・。
・・・？
・・・。
・・・は？

「着いたって・・・あの吸血鬼とノフィーネがいる小世界に？」

「ああ。その通りだ」

・・・ちよつと待て、いまいち状況がつかめなくて、思考時間が長くなってしまったがいや待て。

「着いたん・・・だよな」

「ああ、着いた」

「なら、なんで、あんまり焦っていんだ？」

「うーん・・・。性分？」

性分？　じゃねえよ！

「ちよつ、着いたんならもうちよつと焦って突撃だとか、せめて到着五分前には俺を起こすだとか、何かしろよ！」

「いやー、だって俺もさっきまで寝てたし。俺が起きた時にお前が寝てたから起こしたんだぜ」

・・・そーですか。ん？　いや待て。

「お前、確か操縦席に座ってたはずじゃ・・・」

「そうだけど・・・」

・・・それって、

「居眠り運転？」

「いや、これオートパイロットらしくて、操縦しなくて良かった。
・・・全く、つまらないこった」

それを本心からつまらなそうに言う古王に、俺は呆れざるを得ない。
・・・子供かつてのホント。

「つと、そう言えば創造神は？」

俺は後ろの座席を見る。そこは創造神が座っていたはずだが、今は誰もいない。

「・・・まさか、一人で!？」

とか思ったが、

ジャー。ガチャ。

「ふう、すっきりした・・・」

・・・船体の後部にあったドアから、創造神が出てきた。

「あー、創造神さん？」

「ん？ 何だ、あらたまって」

いや・・・。

「・・・そのドアの向こうで、何をしていらしたんで？」

「ん？ 普通に、トイレだが。水洗式の」

・・・なんで宇宙船にトイレなんかがあるんだろうな。てか、そこにトイレがあるってことは、外見上のブースターの部分ってトイレだったのか。

・・・ああ、くそツツコミが追いつかん! ・・・じゃなくて!!

「何でお前ら、二人揃ってそんなに緊張感ないんだー!!」
ズドン!

「「おお、キレた」」

そりゃ切れるわ、普通! ・・・いや実際、普通な状況じゃないけども。とにかく、呑気すぎるわ!

・・・はあ。

「あー・・・起きてしよっぱなから疲れた・・・。もうさっさと行くぞ・・・」

自然と肩を落としながら俺は外に出るためのハッチに向かうが

「あー、そのことだけどな、久郎」

何やら古王の気まずそうな声で止められる。・・・なんか、やな予感。

「・・・何だ。古王」

「いやー、ちよつともたもたしてからだと思うんだけどさ・・・」
そう言つて、古王は船体についている窓を指差す。

俺の目線もその指に従つて窓の向こうへと・・・って、これは・・・

窓の向こうに見えるのは、たくさん羽根。たくさん牙。たくさん吸血鬼。

・・・。

「いやー、吸血鬼たちに囲まれてしまいました・・・。てへっ☆」
てへっ☆、じゃねえよ!? 可愛くないし、本日何回目の激しいツツコミをさせる気だ、こらあ!?

ドゴツンッ!!

「く、久郎・・・。何で壁面に対して頭突きを・・・?」

はあ・・・はあ・・・、誰のせいだ・・・誰の・・・痛い。

・・・でもなんか少しすつきりした。さて冷静に状況を整理しよう。

まず俺は船体の周りにある四か所の窓を見る。どれをみても絶対に吸血鬼が数匹は見える。

状況整理終了。ついでに思考停止。

「・・・どーすんの、これ」

「うむ。こうなつてしまつては仕方がないな・・・」

今の小経を割りきつたような創造神は、てきぱきとハッチを開ける準備をする。

「仕方がない・・・ね。いい言葉だぜ、ホント」

その言葉に、古王はその手にいつか見た大剣を出現させる。

「・・・」

そして、俺は立ち尽くす。

俺の様子を不思議に思つたんだろう、古王が話しかけてくるが、

「っと、どうした久郎? まさか緊張してるのか?」

いや、

「・・・どれ出そうか、迷つてる・・・」

「・・・贅沢な迷いだよなー。でも、迷ってる暇はなさそうだけ」
見れば、創造神は今にもハッチを開けようとしている。

てか、外の吸血鬼たちが中の雰囲気を感じたのか、急に船体を爪でガリガリ削り始めた。・・・しょうがないな。

結局俺は手ぶらなまま構える。

「あれ？ まだ迷ってんの？」

「いや。こうなったらその場で臨機応変に色々出してみる。『刹那の延長』だってあることだし」

それがベストな戦闘スタイルだろう。いろんな武器に使い慣れる必要があるだろうし。

「っと、二人とも。しゃべってるところ悪いが、・・・そろそろ開けるぞ」

創造神がそう言って、ハッチの取っ手に手をかける。

「・・・そう言えば、ハッチから一度に出られるのは一人までだよな。どうする？」

「そうだな・・・なら、まずは俺が出てある程度片づける。それからお前らは出てきてくれ」

古王の言葉に俺は黙ってうなづく。創造神も黙ってうなづく。そしてハッチが開かれる・・・。

C

ところ変わって、とある部屋内。

ズドン！

その衝撃に、部屋の屋根からパラパラと屑が落ちてくる。

「・・・連中め。派手にやっってるようだ」

ハザードは椅子に座りながら、丸テーブルに紅茶を置き言う。

「みたいだね。多分、古王さんかな？」

そのテーブルの向い側、何故かノフィーネまで座ってお茶している。

「くっくくっ……、これでは防衛隊は全滅だろうか？」

「いや、きっと配下全員が全滅するんじゃないですか？」

「……それはないな。我が輩の配下はこの小世界にいる吸血鬼だけではない。我が輩の号令一つで我が輩の元へと集う吸血鬼たちが、人間界のいたるところに潜伏しているからな」

ノフィーネは、この小世界にいる配下全員、というニュアンスで言っただけだったのだが、微妙に話がかみ合わなかったようだ。

「……と、そう言えば。なぜお前まで紅茶を飲んでいるのだ？」

「……さあ？　そこに紅茶があったから？」

本当になんでなのかよく分からないノフィーネ。実際は初め、執事風の吸血鬼がテーブルと椅子と紅茶を持ってきて、ハザードだけが紅茶を飲んでいたのだが。自然な流れでノフィーネが執事風の吸血鬼にカップと椅子を頼んで、現在に至っていた。……こっちはこっちで雰囲気が緩やかだった。

「まあ、いいだろう。お前は味の分かる人間らしいからな」

「ん？　今僕ほめられた？　まあ、でもこの紅茶は本当においしいですよ」

あまり物事にこだわらない二人であった。

ズドーン！　パラパラ……。

再び衝撃が部屋を襲い、ハザードはしかめっ面をする。

「……あまり派手にやってもらうと。カップの中に塵が入ってしまったのだから……」

「ホント、空気読め、って感じですよね」

「……いや、あいつらはお前を助けに来たのだろう……？」

……本当に緩すぎる雰囲気だ。

ズズズ……コトツ。

ハザードは紅茶を飲み干すと、椅子から立ち上がった。

「さて……ベロ・ランザ卿もそろそろ来るころだろう。少し、客人の相手をしてくるとするか」

「ん？　行くの？　だったら私も……」

「・・・何、ナチュラルに付いてこようとしているのだ。お前は人質だろうが。・・・くっくっくっ、まあいいだろう。どうせ今さら取り返されたところで、この小世界をすぐに脱出できるわけでもないだろうからな」

そう言っつてハザードはマントを翻し、ゆっくり外へと向かう。

ノフィーネもその後に従いつつ、ふと思った。

（・・・もしかしたら、そのベロ・ランザ卿って悪魔とも戦うことになるんじゃない・・・）

いや、ハザードも、そろそろ来る、と言っていた。なら絶対に戦闘になるだろう。なら、

（久郎君たちにこのこと・・・伝えないと）

そう思っつて、早足気味にハザードの後を追った。

Cの24話「動植物」

数分後、俺たち三人の前に吸血鬼の姿はなくなっていた。・・・いや、まあそんな風に遠まわしに言う必要もないか。正確には俺たちが倒した。

ただ・・・主に敵を倒したのは古王だったが。

「はー・・・、なかなか手強かったなー」

とか、地面に刺した大剣に体を預け、いかにも『激戦の末に倒しました』的な雰囲気をもし出しながら古王は言ってるが、そんな事実がなかったことを俺は知っている。

なにせ、戦いの開幕一番に古王が振り下ろした剣から、斬撃の形をしたやけに太い衝撃波・・・というかビームが出て、大半の吸血鬼を灰にしやがったからな・・・。残った数匹を倒すのにそう手間はかからなかった。

訊かざるをえず俺は訊く。

「・・・あれのどこに苦戦の要素があったんだ？」

「ははっ、言ってみただけだよ。あー、でも久々にあんな威力出したな。地面えぐれちゃってんじゃない」

ちなみにその言い方だと他の人がやった風に聞こえるが、やった張本人は目の前にいる古王である。・・・ま、言わなくても分かるか。

そう言えば、そのえぐれた地面についてだが、試しに槍でつついてみるとコツコツ、音がした。けっこう固いらしい。ちなみに色は月面みたいな色だが、月の地面って固いんだろうか？

「ん？ 多分柔らかいと思うぞ。アポロ何号だったかに乗ってた人の足跡がついたらしいし。・・・ただ一説によると、あの月の映像は本当は、にs・・・」

はい、言わんでよろしい。そんな事はないから。・・・てか話がずれた。

「なあ、古王。なんであの攻撃を、公園で吸血鬼と戦っている時に使わなかったんだ？ あれがあれば・・・」

「いやー、あの時は、さ。ほら・・・」

と、言われて思い出した・・・。そういえばあの時は、ノフィーネが捕まってたんだったな。なら使えなかったか・・・。

「思い出したみたいだな。まあ例え人質がなくても、あんな威力のもん撃ったら、周辺の家々が吹き飛ばぜ」

・・・だろうな。愉快そうにそれを言うお前が本当に怖いよ・・・。

俺が心中ゾツとしていると、俺と同じくあまりすることがなかった創造神が歩み寄ってきて言った。

「だが、久郎。お前もけっこう、戦ってたじゃないか」

「・・・そうか？ ・・・もな」

俺は疑問符で返そうと思ったが、確かに戦ってた気もする。四匹ぐらいを同時に相手をして無傷だったし。あの時の体験と比べたら吸血鬼相手に十分に戦ってたな。『命断』による神話武器だとか『刹那の延長』のおかげもあるだろうが、あの百の体験の経験も充分に生きていた気がする。

「フフフっ、どうやら古王の『改造計画』とやらは本当に役立ってみたいだな。・・・というか、すでに俺より強いのではないか？」

創造神は口元をゆるめて言う。しかし・・・今の発言に俺が引かなかった。

創造神より俺の方が強い？ そんな世辞をいう奴だったか、こいつ。

「・・・。。。」

「・・・なんだ久郎。そんなにジト目で睨んで・・・」

「いや・・・何を企んでるのかなー、と」

しかし、その言葉の意味がよくわからなかったらしい創造神は首を傾げている。・・・ま、いいか。

そんなことよりも、早くノフィーネを救出せねば。

「創造神、古王、早く助けに行くぞ」

俺は言うが早いか体を動かす、が、

「ああ、分かってる。・・・しかし、だな」

創造神の言葉で動きを止める。しかし・・・なんだ？

「肝心のそいつらがどこにいるかが、まだ分かってないぞ」

・・・あ。それもそうだった。

困った俺は、とりあえず右の方を見まわし、続いて左の方も見まわす。

・・・左の方はひたすら開けた黒っぽい草が生えた草原。古王がその草原の砂漠化にやや貢献をした。

・・・一方の右側はうっそうとした森。この植物もまた黒っぽい針葉樹で、先が見通せない。これもまた古王がやや森林伐採の協力をした。

うーむ、しかしこうなると、

「・・・多分、森の中なんじゃないか？ 大体、吸血鬼が住んでいるような洋館ってあんな感じの森にありそうだし・・・」

俺は憶測でものを言ってみる。まあ、その憶測はあながち外れてないらしいのだが・・・。

「こんな森。入って迷わない確証はないぞ」

と、創造神に言われ、・・・本当に困った。
ま、でも。

「・・・入るしか方法はないだろ」

RPGだって、いくら迷う迷宮が前にあろうとその中に入って進まなければ、ストーリーは進まない。それと同じで、今もこの森に入らなければ、どうしようもない状況だと思う。

俺は躊躇なく森に入ろうとする・・・が、

「・・・あ、久郎、危ないぜ」

と、古王にボソリと言われ思わず森の草木まであと一步のところ
で、足を止める。・・・普通、危険があるなら「危ないっ！」ぐら
い叫ぶと思うが、こいつがこいつなので、振り返って訊く。

「・・・なんだ古王。一体、何が危ないんだ？」

「いやー、ほら。前、前・・・」

前？

俺は振り向かせていた首を元に戻し、自然と視線も針葉樹の森に戻し・・・、たのかと思ったら俺の前には別の景色があった。・・・いや、まるで間違い探しのように、光景が変わっていたと言った方がいいか。

そこには一つの巨大な植物生えていた。確か・・・ハエトリグサってのに良く似ている気がする。ハエトリグサが分からない場合、食虫植物と言えば分かりやすいだろうか？

・・・しかし、俺の記憶ではハエトリグサの口の周りの細長いのは、こんなに野獣の歯みたいないな形をしていなかったし、そもそもハエトリグサってこんなに大きくない。

てか第一、さっき見たときにこんなのは居なかったはず。

・・・なーんか、やな予感。

「・・・古王。こういう場合はどうすれば？」

「ん？ やっぱここは目を合わせたまま後ずさるのがいいんじゃないか」

・・・気のせいかな、さっき居た位置よりも遠くから古王の声が聞こえた気がする。・・・気のせいだよな。・・・てか、目どこよ。

『※ピンポーン。植物に目はありません』

いや、分かってるから。そんな解説入れる必要ないし。

『※ピンポーン。そんなツツコミを入れるぐらいならさっさと後ずさった方がいいと思います』

ピンポーン。言われなくても分かっています。

・・・さてと、アホらしい会話は抜きにしてだ。俺はジリジリと後ずさる。

ジリジリ・・・。ズルズル・・・。

・・・あれ、おかしいな。足音が一つ多く聞こえる気がする。・・・てか、植物との差があんまり縮まってないような気がする。まさ

か、植物が歩いた？

「・・・古王」

「なーに・・・」

・・・気のせいかな、さっきよりもますます遠くから聞こえる気が・・・
って、あの野郎確実に逃げてるだろ！

「おい、創造神！」

「えー、おかけになった電話は、減税・・・もとい現在・・・」

「そんなことを言い間違える留守番電話サービスがどこにある！
ってか、助けてくれよ、マジで！　なんか、一気に襲ってくるより
地味に怖いんだが！」

「・・・それが、死の恐怖というものだ！　しっかり味わっておけ
よ、久郎」

「それは少し前に十分味わったから！　創造神が知らないところで
味わったから！！」　・・・と、ツツコミを入れるために少し顔を
傾けた瞬間、

ビクッ。

「!？」

・・・なんか、植物が動いた気がしたので顔をあわてて前に戻す。
・・・なんでだろう、ハエトリグサの口がさっきより開いてる気がする・・・。

こうなったら・・・メイナ。何か、役立ちそうなものが出せない
か検索してくれ。

『このままの方が面白そうなんで嫌です』

・・・てめえ。

ウネウネ。クネクネ。ダラーッ。

・・・あのー、なんかさっきまで自分は動かない事をアピールし
ようとしていた植物が、急ぬウネウネし始めたんですけど・・・。
てか、よだれとか思いつきり垂らしてるんですけど・・・。

うん、これはあれだ。この植物—————殺る気だ。

シュルルルルルルル—————。

「うおっ!？」

植物から急に伸びてきたツタを、勘と『刹那』でかわしきる。

——・・・チッ——

ちよっ、今こいつ舌打ちしたぞ!

『※ピンポン。植物に舌はありません』

だから知ってるよ! 何で舌も無いのに舌打ちできたのか不思議に思ってるよ!

シュルルルル——バタン——バタン——!

「うわっ、と・・・うおっ!」

ツタが鞭のようにしなり、俺を叩きつけようとする。・・・何だこの植物、吸血鬼より手ごわい。

「「頑張れよ」」

・・・あの二人の声が、ものっそ後ろから響く。・・・事故を装ってグングニルでも投げてみようかな・・・。

『いや久郎様。グングニルがあのお二方を狙った時点で事故と装えないんじゃない?』

・・・それもそうだな。おいしい・・・。

『・・・本当にやる気でしたね久郎様。せめてその怒りを目の前の植物にぶつけてはどうです』

・・・植物に八つ当たりって、それ人としてどうなの?

『・・・自分が襲われてるのにその相手を攻撃しないって、生物としてどうなんですか・・・。それよりも、ほら早く反撃しないと』

メイナに言われ、しぶしぶ植物に気を向ける。

目の前の植物は主にツルによる攻撃しかしてこない。ツルは二本、かわそうと思えば由にかわせる。

しかし・・・接近してはおそらくあの強靱な顎(?) によって噛み碎かれる恐れがある。ならば・・・。

「『エリクソス』!」

まず俺は『エリクソス』を手元に召喚し投げつける。

シュルルルル——。エリクソスから放たれた鎖が植物を束

縛・・・

ウネウネ。クネクネ。

・・・できなかった。どうやら軟体動物・・・てか植物・・・てかあんだけ動いたらもう動物のカテゴリでいいじゃん！・・・にはエリクソスは効かないようだ。ま、もともと捕縛用だし、別にいいか。

シュルルルル———ボタン———！

「つと！」

植物・・・いや動物・・・には普通見えないし・・・って、何で俺がこんなことに悩まなければならんだ？　もう、植物（動）とかでいいよな、あれ。

で、目の前の植物（動）は再びツルで攻撃してくる。しかしそれが効果ないと察したのか、今度は本体自身が動き始めた・・・ってなんじゃそりゃ！？

ガキン。

植物（動）は少し意気込んだ後、自身の茎の下、つまり普通の植物なら根があるであろう部分を、あの固い地面から引っ張り出した。そして出てきたのは、二本脚のような根・・・いや根のような脚？　まあ、どっちでもいいか。

ガキン。ガキнгаキнгаキン！

そして植物（動）は、えらく硬かった地面を一步一步、凹ませながら突進してくる。多分、全力で走ってるんだろうけど、地面をへこますほどの脚力って・・・。

ところで、さっきもこの植物（動）はあの脚を使って、ジリジリ近づいていたんだろうか？　だとしたら全然気付かなかったな・・・と、それはともかく。

そのスピードは結構速く。瞬く間に俺の目の前まで近づいてくる。ガチン———！

おれはかわし、その口が元俺の居た場所で閉じられ妙に硬い音を出す。・・・あれってやっぱ歯だったんだなー。とか思う暇もな

く、

ガチンガチンガチン！

次ぎ次ぎに噛みつく攻撃が俺に襲いかかる。

「いやー中々にアクティブな植物だぜ。ありゃあ」

「ふむ。食人植物が生息しているとは聞いていたが、中々に進化していたものらしいな」

・・・外野二人。冷静に解説なんかしやがって。

俺は手に意識を集中して、宙でつかんで、投げる……。目標はもちろん……。

ビュウン——！ ガキイン！

「ちょ、久郎！ 今、お前こっちに向かってグングニル投げたろ！ グングニルってたらあれだぞ。かわせないんだぞ！」

・・・だから投げたんじゃないか。てか、それを即座に大剣で真っ向から受け止めた古王も古王だと俺は思うが。

・・・さてと、そう言えばあまりもたまたしてる時間はないんだった。

ウネウネクネクネ、ガキンガキンガキン！

植物は次の攻撃を与えるために、俺に向かって迫ってきている。・・・もう逃げるのはおしまいだ。

「いくぞ……。『命断』によって使えるバイムはなにも、武器庫だけじゃない！」

ちなみに。『命断』によって使えるのは人間界のバイムだけで、本来他の世界では『命断』は使えないらしいのだが、この小世界は人間界に近いので時間差はあれど人間界のバイムを使えるらしい。

てことで、俺は手のひらに集中。それは中層バイム内にある、・・・火炎系、雷撃系、その他もろもろの魔術には興味はない。

あるのはそう……。調合術と召喚術！

召喚術で呼び出したものを、魔術で調合！

くらえ、動植（物）これが必殺……

「『THE SOUL EACH COOL』！（雑草イチコロ）」

ベチャ！

ちなみに、除草剤である。

「『除草剤かよ！？』」

と、三人ともから即座にツッコまれた。だが、やはり草を処分するときは除草剤が一番じゃないだろうか？ まあ名前は適当に付けだし、無理やり直訳すると『その魂 それぞれ かつこいい』って意味不明な訳になるが。・・・だが現に・・・

ウ・・・ネ、ク・・・ネ・・・ボタン……。

除草剤をかけて数秒後、動物（植）は苦しそうにうめいた後、抵抗むなく化学薬品の前に敗れ去った。・・・なんか、あつけないが。

「科学の勝利だ！」

俺はなんとなくガッツポーズ。

『その過程までは魔術でしたけどね』

「いやしかし、まさか魔術的な世界の生物が科学に負かされるとは・・・」

「てか、何で久郎。除草剤の成分知ってたんだ？」

ん？ いやなに、ちよつと昔グ○つたことがあつてそれをたまたま覚えてて・・・。って、それよりも・・・。

「・・・お前ら、よくも 自分たちだけちゃっかり逃げやがったな・・・」

ビクツと震える二人。・・・いや脳内でも同じく震えたやつが一人。そして俺は左手にグングニル。右手に草薙の剣。

「「ちよつ！ まっ・・・、すみませんでした・・・」」

・・・分かれればいいんだ、分かれれば。多分、口先だけの反省だろうけど。ここでグズグズしても仕方ないし。

「とにかく・・・あの森にこんなのが居ることだし、古王を先頭にしてさっさと行くぞ」

「なーんか、俺に全部押し付ける気満々・・・いやなんでもないです」

「この森の名は『食人植物の森』といって、名前の通り人を食う植物が生息している」

移動のつれづれに、ハザードは辺りを囲む森について説明する。つまり、ハザードとノフィーネもまた、森の中を歩いていた。

「まあ、それはわかるよ。……さっきから植物たちがよだれを垂らしてこっち見てるし……」

久郎の前に現れたハエトリソウ以外にも、モウセンゴケやウツボカズラの大型種みたいなもの見える。……ただ全員共通してよだれ……というか溶解液を垂らしているが。

そんなノフィーネにハザードは言う。

「くっくくく、心配しなくてもよい。こいつら女性の場合は、食っても服しか溶かさん」

「……いや、そっちのほうが危ないような気もしないでもないです」

ノフィーネはなんか違う恐怖を感じた。

「くっくくく……、さしずめ食人ならぬ色人植物と言ったところか。……くっくくく、今の我が輩、少しうまかったのではないか？」

「……人事だと思って」

「まあ、心配するな。我が輩にそんな趣味はない。襲われたとしても返り討ちにしてくれよう」

ハザードが手ごたえを確かめるかのように手に魔力を集中させると、周りの植物は急におとなしくなりだした。……どうやら、信用してもよさそうだ。

そうして歩くこと、十分近く。……森の出口がなかなか見えてこない。

「……くっくくく」

「？ いきなり笑いだしてどうしたの」

「・・・我が輩としたことが、道に迷ってしまったようだ。くつくつく・・・」

！？

「え、ちょ、えーっ！っ！」

それ笑い事じゃないですってー！ とノフィーネ内心絶叫。

「くつくつく・・・困ったぞ。・・・おい、その植物」

——ウネクネ？——

植物は、おっかなびっくりしながらもハザードの方を向く。

「出口がどっちか・・・いや、外の世界から来た三人組をどこかで見かけなかったか？」

——ウネウネ——

植物は自身のツタで右の方を指差す。

「そうか。助かった」

そしてハザードは右の方へと歩いていく・・・。

(・・・意思の疎通取れるんだ・・・)

と、ノフィーネは感心しながらついて行った。

C

草をかきわけ、植物(動)どもを切り倒し、

「つっても、倒してるのは俺だけだな・・・」

・・・細かいことはともかく、そんなこんなで進み続けること約二十分。

適当に進んでいると、なんか開けたところに出た。何でここら辺だけ草がないのか疑問が残るところだが・・・、そんなことはどうでもよくて・・・

「あ・・・」

植物の示した方向に向かってひたすら歩くハザード。

しばらくして、不意に木々がない場所へ出た。ハザードは初め、出口かと思ったがそうではなく、ただの開けた空間だった。

だが、

「あ・・・」

「「いた」」

二人分の声が、その開けた空間で重なった。俺の目線の先にはあの吸血鬼が。あの吸血鬼の目線の先には俺が。

仲間も引き連れず、まさか一人で向かってくるなんて、ふてぶてしい奴だ。

「くつくつく・・・、なんともまあ、戦うのに都合のいい場所出会えたものだな。日ごろの行いが良いからか？」とか何とか、あの薄気味悪い笑みを浮かべながら言っているが、そんなことはどうでもいい。今、俺が知りたいのは一つ。

「お前・・・ノフィーネをどこへやった！」

「ん？ あの女なら我が輩の後ろに・・・」

後ろ？ 俺はあのハザードとかいう吸血鬼が振り返った先を見通してみろ。

・・・誰もいないじゃないか。

「・・・はぐれたか」

「はぐれただあ!？」

なんというか・・・その一言で、今まで俺の中に少しずつまっていた何かが弾けた。

俺はツカツカと近づいていき、振り返った頭を戻したハザードに對して、その勢いのままヘッドバット。

ガッン!

「うご・・・な、何をする人間!」

「何をする・・・じゃねえよ! なに人質とはぐれてんだ! それ

って誘拐した身としてどうなんだ！」

「う……、しかしあの女が勝手にはぐれただけで、我が輩は……」

言い訳するな。

俺はハザードに指を突きつけて、はっきり宣言する。

「誘拐犯には誘拐された人間に対して保護責任があるってのが法律なんだよ！」

「『どんな法律だよ……』」

と、後ろの二人に同時に突っ込まれたが、深くは気にしない。

「しかし、我が輩は……」

「問答無用！ いいから探してこいっ！」

「ちよっと待て！ 何で我が輩が命令されているのだ！？ 敵同士だろうが！ それに我が輩にまた探させたら、またあの女が人質になるぞ！」

……あー、

「……それもそうだな。俺なんでこんな事、お前に言ってたんだ？」

「……我が輩が知るか……」

ノリっていうか、勢いって怖いな……。こんな事になるなんて、誰が予想出来ただろうか。

とりあえず、落ち着こう。そして話をまじめに戻そう。

俺はハザードから少し離れ、後ろの古王に話しかける。

「……古王、それと創造神。ノフィーネを探しに行ってくれるか」

「ん？ いや、こんな雰囲気だから忘れてるかもしれないが、目の前に敵の吸血鬼がいるんだぞ？」

古王は苦笑しているが、俺はその事実を忘れたつもりはない。むしろ、よくわかってるぐらいだ。……まあ、さっきのはノリが過ぎたがな……。多分、創造神らの雰囲気に関わったせいだろう。なんかファンタジーに対する対応を間違えて覚えてしまった気がする。

まあ、とにかくだ。

「森の中にはまだあんな植物（動）がいるだろうし、お前らならサクサク倒して、さっさとノフィーネを探せるだろ」

「いや、だから。そしたら目の前のあいつはどうするんだ？ 誰が戦うって・・・」

「俺が戦う」

・・・開けた空間に沈黙が広がる。古王は少し驚いたように目を見開いている。

その沈黙の中、初めに口を開いたのは、ハザードだった。

「くっくくく、・・・はっはっはっは！ 面白い冗談だぞ人間！

ただの人間ごと気が我と戦うだ・・・！？」

ビュウンッ！

ハザードは跳躍し、あいつが元いた場所には神槍が駆ける。

それを投げたのは、無論俺だ。

宙に浮いたハザードはどんな仕組みなのか、重力を無視した緩やかな下降で地面に降り立つ。

「・・・挑発にしては安い・・・いや高いじゃないか人間。それがお前らの挨拶なのか？」

さっきまでのハザードの声とは違って、声にやや真剣みが帯びているのが分かった。

だから俺は返した。不敵な笑みを返しながら。

「その質問、二度目だな。芸がないぞ吸血鬼」

「くっくくく・・・、口のきき方だけは心得ているな。・・・いいだろう、戦ってやるぞ人間」

面白そう・・・さも面白そうに吸血鬼は言う。それが強者の余裕ってやつか。まあ、どうでもいい。

「なら、吸血鬼。少し待っててくれないか。後ろの二人に何の相談もなしに喧嘩を吹っかけてしまったからな」

「喧嘩・・・か、いいだろう。待とうではないか」

そう言って腕を組み、木に寄りかかるハザード。

さて、許しも得たことだし、戦いの前に一応言っておかんな。
「なら・・・古王、それと創造神。そういうわけだ、ここは俺に戦わせてくれ」

単刀直入に言う。それ以外に言いようもない。

「・・・まあ、その目を見れば本気なのは分かるぜ。だが何でお前が戦う必要がある？ お前はノフィーネを救出に来たんじゃないのか？」

それまで沈黙していた古王が、こいつには珍しい無表情で訊いてくる。・・・確かに、ここで俺が戦うより古王が戦った方が勝率が高いんだろう。俺はノフィーネを助けに来たはずで、ハザードと戦う意味はないんだろう。だけれど・・・。

「だがむしろ、古王と創造神が助けに行った方がノフィーネを早く助けられる。目的には合致してるだろ？ そしてそのためには、目の前の吸血鬼を俺が足止めしなくちゃならない。それにだ・・・」
「それに？」

「・・・ノフィーネに危害を加える奴を、俺は許しておけない・・・だから俺がやる」

特にカッコつけたつもりはない。これは本心からの言葉だ。

今、俺の胸中にあるのは、ノフィーネを救いたい気持ちと、ノフィーネをさらったハザードを倒したい気持ちだけだ。

「・・・そうかい。別に自分の力を過信してる、ってわけじゃないんだよな。・・・もしそうなら、死ぬぞ」

発言の割に、軽く淡泊に言った古王。・・・いや、死なんてこいつにとっては、軽い物でしかないんだったか？ だがなんにせよ、そんな心配は無用だ。

「ああ、大丈夫だ。お前の体験のおかげでな。・・・それに、ありきたりな台詞だけど、俺は今死ぬわけにはいかないんだ。なにせ、ノフィーネと約束してしまったからな」

『「ノフィーネ・・・俺がお前を人間として生きさせてやる！」でしたっけ？ ・・・今思い出しただけでもニヤニヤが止まりません。

いやー、クサかったですね〜』

・・・メイナ黙れ。

「・・・そうか、なら俺から言うことは何もない。・・・んで、創造神から何かあるか？」

話はさっきからずっと黙っている創造神に振られる。黙っているというよりは考えている、と言った方が正しいのかもしれない。

話を振られた創造神は、一言言葉を発する。

「・・・勝てるのか」

「ん、それは分らない。けど、俺は負けるわけにはいかない。だから負けるつもりはない」

「・・・そうか。・・・ならいい」

創造神はさっさと、歩いて森に入っていく。さらに慌てて古王がそれを追う、がその前に、

「じゃあ、頑張れよ久郎。どうせなら戦闘長引かせて、ノフィーネの前でかっこいい姿見せてやれよ」

とか、言い残していきやがった。・・・ったく、余計なお世話と
言うかなんというか

・・・さて、そうしてこの場には俺とハザードの二人しかいなかった。

C

「待たせたな、吸血鬼。もういいぞ。・・・というかお前、追わなくてもいいのか？」

戦いの前に、純粹に疑問に思った事を聞いてみる。俺のことを敵に成りえない相手だと思っているなら、そのまま追って行っても問題は無いだろうに。

「フン、どの道取り返されようが取り返されまいが、この小世界内に居るのならそれでいい。・・・それにだ」

ハザードはゆっくり翼を広げ、腕を構え、

「お前を倒してから行っても、さして時間のロスにはなるまい！」
シュツ！

そう言ったハザードの姿が一瞬でかき消え、次の瞬間、俺の右真横から鋭い爪が襲ってきていた。

・・・だが、俺は数時間前の俺ではない。『刹那』そして数多の経験を元に、理性的かつ反射的によける。

「・・・ほう、よけたか、なら！」

シュツ、シュツ、シャツ、ズシャア！

左から右からと襲い来る連撃。だがこれならかわせる。かわせるどころか・・・。

右から来ると見せかけた背後からの一撃、百の戦場の中で得た経験が、それを俺に感ずかせる・・・！

「！　そこだっ！」

手に召喚したグングニルを、振り返った勢いも合わせて投げる！

「なっ・・・！」

ザクッ！

直撃した。ハザードは急いで距離をとる。その左肩にはグングニルの貫通した跡、中からは真っ赤な血が流れ出る。

「・・・お前、数時間前とは違う・・・。双子か何かか？」

痛がるそぶりも、手で肩を押さえることもせずに、・・・だが闘志を芽生えさせた目で訊いてくる。

「おあいにく。俺は一人っ子で、分身も分裂もしない」

「くっくっく・・・そうなのか？　それはたいしたものだ。それとも・・・あの時は力を隠していたのか・・・まあ、いい」

見れば、ハザードの左肩の傷口が見る見るうちに塞がっていく。再生能力が高いんだろう。

そしてハザードは左肩の調子を見るように肩を鳴らしながら動かし、今度は肘を引き、体を前かがみにした、戦闘態勢をとる。

「くっくっく・・・、とんだ茶番かと思えば。言い暇つぶしを通り越して、言い退屈しのぎになりそうじゃないか！　くっくっく・・・」

はっはっは！」

ハザードは猛々しく笑う。楽しいらしい、愉快らしい。こいつもいわゆる、死に慣れた『狂戦士』というヤツなんだろう。

「さあ、始めようか！　楽しい楽しい殺し合いを！」

「・・・どんなに腐っても、あぁは成りたくないな、まったく」

俺もぼやきつつ手に適当な槍を召喚し、構える。

「さあ、来いよ吸血鬼・・・」

「くっくっく、ならば行くぞ！」

ガキイイイン！

槍と爪の衝突によって、戦いの火蓋が落とされた。

Cの25話「喧嘩決闘」

ここは食人植物の森の中、ノフィーネはハザードとはぐれ、出口を探そうと一人、トボトボ歩いていた。

暗い暗い森の中、木々の根っこや落ち葉を踏みつけ歩きながら独り言。

「・・・あれー、ハザードさんどこ行ったんだろ？　・・・もしかして、僕って今迷子？」

もしかしなくても迷子です。

「うー・・・しかし、この状況って、かなーりまずいんじゃ・・・」
この場には丸腰のノフィーネ一人。武器も無ければ仲間もない。
そしてこの森の名は『食人植物の森』。

——ウネウネ——・・・という擬音とともに襲いかかってくる植物たちの魔窟である。むしろなんで今まで襲われていなかったのやら。

と、その時前の方から物音が・・・。

ガサッ。——ウネッ——

「うわぁ！」

噂をすればなんとやら、というのは本当にあるもので。突如、前方の草むらより例の植物が現れた。おそらく待ち伏せしていたのだろう、植物は既に臨戦態勢を整えていた。

もちろん、武器も何もないノフィーネの前に『戦う』という選択肢は、一文字も無いため、即まわれ右で逃げようとする。が、

ガサッ。——ウネッ——

振り返った先の草むらからも食人植物が。

「え、こっちも？　・・・なら」

右。

ガサッ。——ウネッ——

・・・左。

ガサッ。――ウネッ――

・・・もう一回右。

ガサガサガサッ。――ウネウネウネッ！――

「ふ、増えてるし！」

そしてお察しの通りノフィーネは、四方を食人植物たちに囲まれていた。もしかしたら、さっきまで植物たちが襲ってこなかったのは、ここで待ち伏せして囲むためだったのかもしれない。確かにこの植物たちには、それを実行するだけの知力があるのだ。・・・どこに脳があるのかは知らないけれど。

――ウネウネウネ・・・――ウネウネウネ・・・――

そしてノフィーネの四方を囲った植物たちは、各々のツタをゆっくりゆっくりノフィーネの足元へと近づけていく。なんかいやらしい。

「うわぁ・・・、色々な意味でまずいなこれ・・・」

ノフィーネは後ずさりするがその先にもツタが近づいてきている。四方を囲まれ四面楚歌。まるで項羽のような気分をノフィーネは味わった。

「・・・万事休す、か」

ノフィーネは諦めて目を閉じてる。・・・だが、

「いやいや、あきらめるのにはまだ早いぜ、っとおー！」
ズバッ！

その声、その音を訊き、ノフィーネは驚き目を開く。その視線の先には、縦に真つ二つ裂かれた一匹の食人植物と、それを二つに裂いた大剣の持ち主であろう人物。

「古王さん！」

植物を切り裂き、華麗に登場した古王は、軽く片手を挙げ気さくに言う。

「よっ、ノフィーネおひさっ！ あと創造神も居るぞ」

そう言った古王の後ろから、ゆっくりと創造神が歩いてくる。

「神様！ 助けに来てくれたんですか？」

ピンチに来てくれた嬉しさから、感謝の表情を見せるノフィーネ。その表情を見た創造神は、照れ隠しなのか顔をそむけつつ言う。

「……それ以外の理由で、どうして俺たちがここにいるんだ、つと！」

とその時、話に水を差すように創造神を狙って飛んでくる十数本のツタ。創造神は跳躍して軽々と回避、木の上へと飛び移る。

「……鬱陶しいな、話も出来ん……。古王、さっさと頼むぞ」

「了解！ ……さあて、楽しい楽しい草刈りの時間だ！」

ニンマリと笑った古王。その様子に感ずいた植物たちは、一斉に古王に向けてツタを飛ばし溶解液を放つ。だが、古王は瞬時にその場より動き、それら何一つとして古王をとらえることが出来ない。残像を残しつつ、縦横無尽に駆ける古王。しばらくそうしていたが、ふと止まって一言。

「うーん……。ツタが絡まったりしないかなーとか思ってたんだけど、そうもうまくいかないか……。」

……。どうやら、ツタ同士が絡まって身動きが取れなくなるのを狙っていたらしい。

だが、そのところは植物も気をつけて動いているらしい。溶解液にしても植物の体は解けないようになっていられるらしいし、集団戦を想定して進化してきたのだろうという事がうかがえる。

「まっ、なら違う手段をとるだけだ！」

タンっ、と跳躍。ツタの間をくぐりつつ、古王はノフィーネの脇に立つ。

「おい、創造神、そっから動くなよ！」

と言って古王は右手で頭の斜め前上に大剣を掲げる。

「？ 何をする気ですか？」

ノフィーネは、自分より身長の高い古王の顔を見上げながら訊く。古王の顔は相変わらぬニヤケ顔で言う。

「いや、正直さ。あの植物たちのどこを切ったら死ぬのかがよく分

からんないからさ。・・・面倒なんで・・・」

古王は掲げた大剣をくるっと回し、柄を上、刃を下に。そのまま下ろして地面にぶっ刺す。

「砕けろ！ 『歴史の砂』 ああ！」

古王は地面に刺した大剣の柄尻を手のひらで押す。と、大剣は真っ先に押された柄尻から柄、刃元から剣先まで砂となって、古王の手のひらが地面にまで降り下ろされた時には、剣は完全に砂と化した。

そしてその砂は嵐となって、四方の植物たちに打ちつけられる。植物たちは、剣が砂になった所でどうなる、と思っているのか。砂を無視して古王に対してツタを伸ばす。

だが、その伸ばした手に横から吹きつけられた砂が付着した瞬間。ベチャッ。ゴキッ！

ツタは砂に叩きつけられ、そして砂と砂の間に挟まれ圧壊した。

——ギ、ギアアアア！？——

植物は悲鳴のようなものをあげる。しかし今度はその悲鳴を上げた口に砂が付着する。

そして吹き飛ぶ口、吹き飛んだ先には静止した砂。
ドゴォ！

そして一瞬にして植物の口は潰された。

——ウネ！？ ウネウネウネウネ——

植物たちは、やっと危機を察したかのようにぞろぞろ逃げる、だが、すぐに植物たちは砂嵐の中に飲み込まれる。

ゴゴゴゴッゴゴゴオゴゴゴゴゴゴゴゴッ！

その砂嵐から難を逃れた植物は振り返る事も無く逃げる。
そして数十秒後。砂嵐はおさまった。

「こ、これは・・・」

ノフィーネは啞然とするしかなかった。砂嵐が収まった先、あんなに居たはずの植物たちが、一匹足りとも残ってはいなかった。

手のひらを地面に付け、必然としゃがむ体制になっていた古王は、

立ち上がって言う。

「・・・ちよいと、刺激の強い映像だったか？ まあ、これが一番楽な方法だったから仕方がなかったんだが・・・」

古王はぎこちない苦笑いをしながら、言い訳をするが、ノフィーネはそんなことでもよかった。

「あの、古王さん。今のって・・・」

「うん？ ああ、なあに。この剣の本来の重さでブチ当てただけだぜ」

「・・・どうということ？」

「難しかったか？ まー・・・あの砂の一つ一つが中くらいのハンマーの質量をもって植物にぶち当たったって感じかな。・・・それ以上は教える気ないぜ」

そう言って古王はノフィーネから目をそらしてあたりを見回しだす。これ以上は答ええないという意味表示だろう。

ノフィーネはよくわからずに首をかしげる。そもそも剣の本来の重さって何だろうか。そうやって考えていると、木の上にいた創造神が下りてきて近づいてきた。

「あ、神様。あのー、訊きたいことが」

「・・・いきなりなんだ、ノフィーネ」

ノフィーネは創造神の耳元でひそひそと言う。

「・・・あの今、古王さんが『剣の本来の重さ』で叩きつけたって言うてましたけど。あれってどういう意味なんですか？ 前にあの剣を触らせてもらったことありますけど、そんなに重くなかったですし・・・」

「ああ、そのことか。・・・まあ自分で考えろ」

そう言ってノフィーネから離れようとするが、ノフィーネは食いさがり、再び顔を近づけ、

「そこを何とか！ ヒントだけでも！」

手を合わせて懇願するノフィーネ。よほど気になるらしい。

「・・・別にどうだっていいだろうに。何で手から魔法で火が出る

のかって説明するのと同じぐらい意味のないことだぞ」

「で、でも気になるし・・・」

どこまでも食い下がるノフィーネに、創造神はハアとため息一つ付いて、一言。

「じゃあ、ヒントだけだぞ。・・・あの剣の名前は『超太古剣』。名前とは関係ない気もするが歴史を刻む剣だ」

歴史を刻む剣？　そして創造神はそれだけ言って顔を離した。結局、なんだかよくわからずじまいだった。

「つと、いかん。当初の目的を見失うところだった」

創造神は急に、はっとしたようにノフィーネを見る。

「さあ、ノフィーネ。一緒に帰るぞ。・・・お前、あの吸血鬼に何もされてないよな？」

そう訊かれて、ノフィーネは一瞬、ハザードに血を吸われたことを思い出したが、あれは自分が言いだしたこと出したし、特に問題ないだろうと結論付けて返事をした。

「あ、はい。大丈夫です。あ、それと助けに来てくれてありがとうございます。ありがとうございました。古王さんありがとうございます！」

「どういたしまして、つと。じゃあ、さっさと久郎のところまで行きますか」

と、言って歩き出す古王。しかし一方のノフィーネは、え？　と思わず声を漏らして驚いた。

どこかへ向いて歩きだそうとした古王にノフィーネは訊いた。

「久郎君、来てるの？」

「ああ、来てるぞ。来てるどころか戦ってる」

！？　古王のその返答を聞いて、ノフィーネは頭の上にさっきよりも大きな？マークを浮かべて驚いた。

「戦ってる・・・！？　誰と？」

「あのハザードとか言う吸血鬼と、だ」

・・・。

「うえ！？　ちょ、ちょっと待って！　え、ど、どうしてそんなこ

とになってるの!？」

「ふっふっふ・・・あいつはお前を助けるために俺に鍛えられ、そしてこの小世界に来てお前のためにハザードと戦っているんだ」

相も変らぬニヤケ顔でふざけたように言う古王に、ノフィーネなかば動揺しきったま詰め寄る。

「戦ってるんだ・・・って、久郎君を殺す気!？」

「ひどい言い草だな。・・・まあ、心配すんなよ、その戦いはあいつが望んだことだ。それに・・・あいつは強くなったぞ、たったの数時間で、お前を助けるためにな」

「・・・」

ノフィーネは半信半疑といったように、古王をジト目で見る。それをフォローするかのうちに今度は創造神が言う。

「・・・まあ信じてみる、あいつのことを。あのときのあいつ、イ目をしていた・・・。・・・まあ、心配なら何にせよ、早く行くぞ」

そう言って創造神は走りだし、ノフィーネと古王はそれを追って走って行った。

C

——ガキイン!

鋼鉄以上の硬さを持つハザードの爪と、怪獣の皮膚をも容易くつら抜く槍とが衝突する。

「・・・っ!」

その瞬間、久郎の腕に、まるで猛牛の突進を受け止めたかのような衝撃が来る。だがそんなことで腕を休めてはいられない。

衝撃に一瞬体を膠着させる両者。だがそれは一瞬のこと、次の瞬間には、二人同時に大きく間合いを取り二撃目の準備。

「くっくっく、威力はあるようだな。・・・だが、二撃目も受け止められるか?」

「ふん。馬鹿正直に正面からやりあう義理はねえよ」

交わされる一会話。その次の瞬間、二人は動く。

ハザードは爪を構え、真っ直ぐに突撃する。そのスピードは到底人に合わせるスピードではない。

そして襲い来る、爪による斬撃。

——ズシャア！ サシュッ、サシュッ！

しかし久郎は初めから避けるつもりで動いていた。準備が整っていた体は手から槍を離し、その攻撃を『刹那』で見切り、紙一重で感覚的によける。

「ほう、だがこれはどうだっ！」

ハザードは、二、三撃爪で薙いだ後、右左と単調な斬撃から決り込むようなアッパーをいきなり繰り出した。それは久郎にとっても想定外のこと、たとえ『刹那』で見切っても体で避けることは不可能だった。

だから受け止めた。『バィム武器庫』より呼び出した短剣を左手に逆手で持ち、下から決り込むように襲い来る腕に思い切り振り下ろす

——ガキィン！

「っっ！」

「ほう・・・、そんなこともできるのか」

左手に強い痺れが襲ってくるが、剣の性能もあってか弾かれることはなかった。ハザードはその剣に弾かれた右腕を横目で見ながら感心しつつ、左手も繰り出す。が、その爪の一撃が久郎に触れる前に、久郎は大きくバックステップ、距離を開かせた。

「『エリクスス』！」

久郎の手には縛槍が握られ、ハザードに向かって投擲される。

「ふん、そんなもの我が輩に効くか！」

ハザードは爪の人なぎでそれを一蹴。だが、それはあくまで四。

「『グングニル！』」

続いて久郎は、もう片方の腕に神槍を召喚。本命の槍をハザード

めがけて放つ。

「あの神槍か！　だが、二度も同じものにはやられん！」

ハザードは、五百キロ近くのスピードで寸前まで迫っていた槍の刃を両手で受け止め、臂力りよりよくによって砕く。

バキーン！

その光景に、久郎は啞然。

「・・・冗談臭いな、まったく」

「くつくつく、所詮はレプリカ・・・なのだろう？　吸血鬼を殺したいのなら、白樺の木で出来た杭でも持ってくるといい。まあ、そんなもので我が輩は死ななうがな」

ハッハッハ！　とハザードは笑う。余裕の表情と言うのだろう。しかしそれに少しムカがついた久郎は卑怯とは思いながらも、手に適当な槍を召喚し投げつける。

「そらっ！」

——ビュウ！

「ハッ、つと・・・ふん！」

——ガキーン！　いとも容易く弾かれる。が、久郎の攻撃はそれだけで終わらない。

「そらそらそらっ！」

——ビィウン。　——ビィウン。　——ビィウン。

——シュッ。　——シュッ。　——シュッ！

久郎は手当たり次第手元に槍を、剣を、鉈を、鉾を、戟を召喚し投げつける。両腕だけでは足りないので、時に足を使っても蹴り投げる。

ガキン、ガキン、ガキン。　そしてハザードは片っ端から弾く。弾くこと自体はたやすいが、弾くにも手間がかかって攻めには移れない。

しかし、久郎は人間、いずれ疲弊するのは目に見えてる。やがて、湯水のように放たれる、武器の矢は止まった。

「・・・何だ今のは。お前、適当に投げていただろ・・・武器の性

能というものを分かっているのか？」

ハザードの呆れた声に対し、久郎は肩で息をしながら答える。

「ハア、ハア、・・・まあな。古王の特訓の後、使いやすい武器を探してた時に出してたやつを投げて見たんだけど・・・古王の説明があんまり頭に入ってたしな・・・」

おかげで、ほとんどの武器の使い道を知らずに投げていた久郎。

まあ、中にはまだ使い方を覚えていた武器もあったが・・・勢いで投げてしまっていた。

「フン。そもそもその武器の特徴も分からずに使っている時点で、武器の性能を殺してしまっているだろう。・・・くつくく、それでは駄目だ」

「何でお前、俺に説教たれてんだよ」

「くつくく・・・それもそうだな！」

「なっ！」

次の瞬間、ハザードは一瞬の加速にて久郎の目の前に現れる。疲労が体に来ていた久郎には瞬時にかわすことは出来ず、『刹那』を発動。

体感時間を数万倍にも伸ばす『刹那の延長』の発動下。久郎は内心冷や汗をかく。

「つと・・・、危なかった・・・」

『危ないのは・・・今も・・・変わらないと、思いますが・・・』

『刹那』の中、メイナはなにやら疲れている様子だった。まあ、無理もない、久郎が無造作に武器を『バウム武器庫』よりメイナに引っ張り出させていたのだから。

そして今も危ないというのは事実だ。今『刹那』を解こうものなら、一瞬で久郎は殺されるだろう。

とりあえず、久郎は落ち着いて考える。

「そうだな・・・『刹那』もそう長くは持たないし・・・どうした

ものか」

『・・・おそらく武器の召喚は間に合うと思います。ただ・・・適当に引っ張り出した武器じゃ、駄目ですね。何かその特徴が、分かる武器ではないと・・・』

メイナの言葉に、ふと久郎は目の前を見る。そこには攻撃のために手を伸ばすハザードが映っている。この光景から・・・ハザードは真っ直ぐに攻撃してくるのは分かるが・・・。

「しかし、俺は神話の武器に詳しくないからな・・・」

『・・・検索をかけてる時間はありませんよ。あと一分程度で『刹那』は限界です』

・・・その言葉に久郎は困る。とりあえず何かないと『バイム武器庫』に意識を集中。

「今まで、生きてきた中で・・・何か知っている武器とかあったっけ・・・」

『あ』

「ん？ どうしたメイナ」　メイナがいきなり声をあげたので、集中を解く久郎。

『いえ、あの・・・武器じゃないんですが。中層バイム刻まれている魔術で『身体強化』ってのがあるんですが・・・』

とのメイナの提案。そんなものがあるなんて、というかそこら辺のものを全く理解してなかった久郎。しかし、

「いや、それじゃ駄目だな。身体能力が上がっても、あの爪にやられたらひとたまりもない・・・。いやだが、待てよ。攻撃を防いだ後の戦闘になら・・・」

そもそも場当たりの対応では、いずれよくない結果になるのは目に見えているのだ。ならここをしのいだ後の攻めの手も必要となる。・・・しかし、そのことをゆっくり考えている暇はなさそうだった。

『あ、久郎様！　もう時間がないです！』

そうメイナが叫び、久郎は慌てて集中し直す。そんな中で、

「お・・・もしかして、これは・・・」

『刹那』の維持のため薄れる意識の中、制限時間が迫っていたその時、久郎は三つの武器を見つけた。

一つは、古王と使いやすい武器を探していた時に説明されていた使い方を覚えていた武器。これは後の手に必要なもの。

そして他の二つは、神話の武器でもなければ英雄が使っていた武器でもない。ただの商人が売っていたと言い伝えられる武器。

しかし、その話を聞いた変わり者の鍛冶屋が、自らの一生を捧げて作り上げた逸品。・・・という事を久郎は知らなかったが。

そして久郎の頭の中に、一つの光の道が差す。それは勝利への方程式。

そして久郎は、三つの中の一つを、一縷の望みをかけて掴み取る！

『刹那』解除！

「終わりだな！」

ハザードは大きくスイングした手を久郎の顔にブチ当てる。だが、そえれは久郎が召喚した『盾』によって遮られる。

——ガキイン！

良い音が響き、ハザードの腕は弾かれた。ほう・・・と意外かつ面白そうにハザードは笑う。

「盾・・・か。だが、そんなもの！」

ハザードは全精力を込め、盾を突き破らんとする、だが。

——ガガガガガキイン！！

「くっ！」

盾を持つ久郎の腕にも、いくらか軽減されているとはいえ衝撃が襲ってくる。

しかし、ハザードがいくら攻撃を加えようとも、いくら貫こうとしようとも、その盾は突き破られることがない。

やがて、疲労した様子のハザードが、大きく後退して言う。

「・・・何だその盾は。妙に硬いではないか・・・」

その疲れた様子を見て良しとしたのか、久郎は疲れた笑顔をみせながら言う。

「いや、俺もまさかとは思ったんだがな・・・これ『矛盾の盾』だ」
矛盾の盾？ とハザードは久郎の言葉を反復する。

「ああ、そうだ。『楚人に盾と矛とを鬻ぐ者有り』『吾が盾の堅きこと、能く陥すもの莫し』ってな。話の中でだけだが、この盾は何であろうと通さないらしい・・・そして」

久郎は左手にその盾を持ち。空いた右手に別の武器を召喚する。

それは矛。『矛盾の矛』。

「これが『わが矛の利なること、物において陥さざることなきなり』
と言われた矛だ。・・・いやほんと、何であるんだろうな」

「我が輩が知るか・・・。しかし、」

ハザードはさっきまで聞いていたその中で、疑問に思っていたことを訊く。

「その盾と矛って・・・同時に存在してはおかしいのではないか？ 元になった話では、『その矛でその盾を突くとうなるのか』
と言われていたはずだろう」

「・・・よく知ってるな。まあ、そうだろうな。だからほら現に・・・」

ハザードは久郎の手元を見る。するとそこにあったはずの矛と盾が、次第に薄くなって消えていた。

何が起こったのかよく理解できていないハザードに、久郎は憶測で言う。

「多分、同時には片方しか存在できないんだろうな。だけどこの二つは何故かセットになってるんだよ。おそらく同じ話から出てきた物だからだろうが・・・。一つだけ出そうと思っても、しばらくしたらもう一つの方も勝手に出現してしまうってのは、使い勝手が悪いな本当に・・・やはりこいつじゃ駄目だ」

とか、ボヤク久郎。一方のハザードはとても楽しそうに、
「くつくつく・・・しかしこれで、お前には無敵の盾が在るという

ことが分かったわけだ。面白くなってきたぞ……」

しかし、それを聞いた久郎はそれを否定する。

「いや、これ一個出すのに割と精神力使うし、メイナに負担をかけすぎるのも悪いからな……だからもう一つの方で決着をつける、まずは『身体強化』！」

そして、さっきメイナに提案された『身体強化』を発動。

『身体強化』の魔術とは、魔力を体の可動部にまとい、サポートのようにして人体の動きを強化する魔術。

「ほう……全身に魔力をまとったか……『身体強化』の魔術だな。しかし人間の体に『身体強化』の長時間使用は、こたえるのではないか？」

確かにその通り。無理に動かそうとしたおもちゃが壊れるように、負荷をかければその分だけ体は傷んでいく……。だが、久郎はそんなこと知ったことではなかった。……というかマジで知らなかった。

だが知っていたとしても、躊躇なく使っていただろう。なぜなら久郎は、次の攻めで勝負を決めるつもりだから。

「大丈夫だ……、サクツとおまえを倒して、ゆっくり休むからな！ 来い『パラギオン』！！！」

そして久郎は、新たな武器の名を呼ぶ。それは、使い方があるものに例えていたために覚えていた、武器。

久郎の手元に具現化するそれは、一見すると槍の形をとって現れたが、それにしては至極奇妙な槍だった。

その槍の刃は二つ、柄の両端に付いており、そしてその槍は上から順に、朱、黒、蒼に塗り分けられていた。その比率は4…2…4。まるで槍を二本くつつけたような外見のその槍は、短槍二本分よりも長く、長槍二本分よりも短い。

その槍の名は、双槍『パラギオン』。

その槍の姿を見て、不思議なものを見たかのようにハザードは言う。

「なんだ、その槍は。我が輩もそんな奇妙な槍、見たことないぞ」
「そうか、だったらこの威力、自分の肌で感じてみろっ！」

強化した脚力を使って、一気に間合いを詰める久郎。さっきよりも実質数倍近くなった間合いに飛び込む。

「くっくく、なら見せて見ろ。その槍の力と言うヤツを！」

ハザードは正面から迎え撃つ。地に足を付け踏ん張り、より強力な一撃を持って、その槍の刃を迎え撃つ。

その時、久郎は一言叫んだ。

「『不動』！」

ガキン！

触れ合う刃と掌。しかし、激しく打ち鳴らされるかと思われた双方の武器は、衝突した位置から動かない。

「なん、だど・・・！」

それに驚いたのは強力な一撃を加えたハザード。いくら『身体強化』したとはいえ、そもその力が弱い人間では吸血鬼の臂力になうはずもなく、ましてや全力を込めたハザードの一撃を、人間の力だけで受け止めるなど不可能な話。

「『解除』！」

久郎はそう叫び、槍を振り上げもう一つの刃で斬る。ハザードはそれを右腕でガード。少しかする。

（・・・なんなのだ、あの槍は。さっきから奴は何か叫んでいるが・・・。まあ、いい・・・）

ハザードはその場を退くことよりも、攻撃することを選び、両腕による連撃を行う。

さっきの一撃よりは劣るものの、槍のような長ものでは受けきれない手数によって責めるハザード。

キン！ ガン！ ガキン！

久郎は襲い来る右腕を下の刃で払い、左腕を上刃で突き、受け止める。

それを何手か行った後、ハザードは右上から攻撃すると見せかけ

て、瞬間移動しフェイント。左下より決るようなアッパーを放つ。
一度、右上に反応した槍の動きは止まらず、防ぐことは無理のように見えた。

しかし、

ガキン！

槍に攻撃を受け止められ、ハザードは再び驚きに目を見開くことになった。

その攻撃は久郎の左手に逆手に持たれた、朱と黒の柄から分裂した『パラギオン』の蒼い柄の部分によって防がれた。

いや正確には、分裂ではない。見れば、蒼い柄の端と黒い柄の端は鎖によってつながっている。

「・・・なるほど、双槍とはそう言うことか・・・」

槍の刃が二つあるのではなく、槍そのものが二つになる。ゆえに双槍。

「・・・フェイントとはやってくれたな」

久郎は瞬時に左手に持った蒼槍を準手に持ち替え、ハザードへと突きだす。

この近距離とはいえ、ハザードにとっては充分かわすなり受け止めるなり出来る距離だった。はずだが、

「『迅駆』！」

ヒュオッ！　グサッ！！

その槍はハザードが反応不可能なスピードでせまり、ハザードの胸を貫通した。

「ガハッ！？　・・・っく！」

口から血を吐くハザード。瞬時、全身をコウモリの群れへと変え、空に舞う。

そして久郎から充分に距離をとった位置にて、再び姿を戻す。

「・・・くっくくく・・・今のは効いた・・・効いたぞ！　くっくくくっく・・・はっはっはっはっはっは！！」

口から血を垂れ流しつつ、愉快そうに猛々しく、空に向かって笑

う。

「・・・壊れたか？」

久郎は、手ごたえがあったのに苦しむ様子も見せないハザードに、疑問を抱く。

「壊れた？ くっくくくく・・・違うな。既に壊れているのだよ、我が輩ら強者は！ くっくくく、おもしろい・・・おもしろいぞ！人間相手にこんな勝負ができるなんて！ 我が輩はなんて幸運なのだろうか！ ハーハッハッハッハ！！」

狂ったように笑い続けるハザード。その姿はまるで、余裕、傲慢、侮り、驕り、それらすべてを捨て去らんとするような、本能に従い戦う狂戦士にならんとするかのようだった。

「くっくくく！ その槍がどんな仕組みかは知らん、ああ、知ったことではない！ だが我が輩は全力を持って、その槍ごとお前を葬り去ってくれよう！ さあ、行くぞ・・・これが本当の決闘・・・、否、殺し合いぞ！」

目をギラギラと紅く光らせたハザードは、全身より上り立つ狂気のオーラ辺りに放出させつつ、全速力を持って久郎に呐喊する・・・！

C

ズドオオオン・・・！

「うおっ！？ なんだ、今の音？」

古王は突如響いてきた、爆碎音にドキツとなる。

「・・・まったく、寿命が延びるじゃねえか・・・」

「良かったじゃないですか。延びて」

そんな古王にノフィーネは冷静にツツコミ。久郎と違う反応を見せた。ちなみに、びっくりすると寿命が縮むというのは一応正しいらしく、心拍数が上がるために心臓の残り心拍数が減る、という話だ。

と、それはともかく。ノフィーネたち三人が、道中を急いでいたところに、大きな爆碎音が聞こえた。それは、まるでダイナマイトでも使ったかのような音で、かなり近かった。

「もしかして・・・久郎君！」

「！ 待て、ノフィーネ！」

駆けだすノフィーネ。創造神はそれを止めようとするがノフィーネは止まらない。

「・・・まあ、大丈夫なんじゃねえの？」

「古王！」

古王が何に対して「大丈夫」と言ったのかは分からないが、その呑気そうな態度に創造神は怒りを見せる。だが、対する古王は飄々と言いのけた。

「大丈夫だ。あの二人なら問題ねえよ。久郎は負けないぜ」

「・・・なぜ、そう言いきる」

「さてな、なんとなくだ・・・」

そう言って、古王もまたノフィーネの後を追ひ、創造神もそれに続く。

ノフィーネは開けた空間にへとたどり着いた。そこには奇妙な槍を持った久郎と、深く抉れた地面から体を起こすハザードの姿があった。

まさか・・・さっきの音はハザードの攻撃の音なのか？

「久郎君！」

ノフィーネは叫ぶが、久郎の耳には届いていないようだった。思い至ったノフィーネは駆けて中に割って入ろうとする。が、シュタツ！

「おっと、そこまでだ」

古王に瞬間的に移動してきた古王に行く手を遮られる。

「どいてよ古王さん！ 久郎君が！」

ノフィーネは古王を押し分けて行こうとするが、古王はガンとし

てその場を動かない。そして諭すように言った。

「久郎な・・・今、お前のために戦ってんだ」

「でも、そのために死んじゃったら！」

「なーに、久郎は死なんよ。死んだらお前がひどく悲しむことを分かっているからな。・・・それに、あいつには守らなくてはいけない約束があるんだそうだ」

その言葉を聞いて、ノフィーネはもがくのを止める。・・・そして、その戦いが見れる離れた位置に立ち、心の中でひたすら祈った。久郎の無事を。

C

ズドオオオン・・・！

「・・・！」

久郎は目を見張った。ハザードは飛び上がったかと思うと、そのまま久郎に向かって急降下。

咄嗟に避けたが、おかげで地面に大きなクレーターが出来ている。

「・・・さあ、行くぞ」

ハザードは久郎の方を向く。そして次の瞬間、

「！『不動』！」

ガキン！

瞬間的に移動してきたハザードの一撃を、分裂した朱槍が完全に受け止める。が、ハザードは朱槍を腕で押し、反動でさきよりも高い高度へと跳び、再び突っ込む。

「ちっ！！『迅駆』！」

久郎は蒼槍で迎え撃つ。瞬速の槍と瞬早の腕とが接触し、激しくぶつかり合う。

ガガキン！

しかし軍配が上がったのは、上よりくる重力も足した威力のハザ

ードの腕。

「つつ！ 『解除』」

久郎は、完全に押し切られる前に蒼槍を手から離しつつ後退するが、その体は地面に激突して生まれた衝撃波に吹き飛ばされる。

「ぐっ！」

ズシャアッ！

久郎の体は地面に擦れつつ滑り、やがて摩擦によって止まる。しかし、痛がっている暇などない。ハザードは着地の反動をそのまま前へ進む力にへと変換し、再びせまりくる。

「これまでか、人間！」

ハザードが叫ぶ。一瞬の判断で、久郎はその体制のまま朱槍を上空へと投げる。『身体強化』のおかげもあってか、そこそこの高さまで飛んだ。

そして、ハザードの腕が久郎をとらえる前に、久郎は黒い柄を掴み叫ぶ。

「『不動』！ および『復元』！」

その声に反応し、朱槍は空中にて、はたと止まる。さらに、黒い柄と朱蒼それぞれの槍とを結んでいた鎖が黒い柄に吸い込まれるように、勢いよく巻き戻され。ハザードの爪が久郎の体に触れる直前で久郎の体は黒い柄、蒼槍とともに上空に運ばれた。

「むっ・・・！？」

双槍『パラギオン』。それは朱の『不動』、黒の『復元』、蒼の『迅駆』の三つの力を備えた槍。

朱の『不動』は、その空間に縛り付けられたかのようにその場にとどまり続ける力。たとえ外から力が加えられても、動くことはない。

黒の『復元』は槍を元の一本つながりに戻す力。朱の『不動』が発動中ならば必然的に槍は朱槍のある空間にて復元される。

蒼の『迅駆』は、進行方向に対しての力を乗倍に膨れ上げさせる力。元の力が強ければ強いほどその上昇値は上がる。

久郎はそれを「信号みたいだな・・・」の一言で覚えていたために、その使い方を覚えていた。・・・これも神話級武器であるのに、その覚え方は流石にどうかと思うが。

「・・・つつ、危なかった・・・」

さて、かわしたものの・・・どうしたものか。

ズシャアアアアアアア！

ハザードは己の過ぎた速度を、地面を踏みしめ減速。次の瞬間にでもまた飛んできそうだ。

そこで久郎は『刹那の延長』を発動、しばしの思考時間を得る。

（まず、俺が使える武器は・・・）

双槍『パラギオン』の性能はさきのとおりだ。

他に久郎が使える武器は必中の神槍『グングニル』とハザードには効き目が薄い縛槍『エリクスス』。それ以外の武器は使うだけ無駄。

（そして、俺の今の状況）

『身体強化』によって久郎の体は相当傷んでおり、長期戦は不利になるだけ。

だが、短期決戦をするには威力が足りない。唯一『パラギオン』の蒼槍が効果ありそうだが、本気を出したハザードに対して投擲してもかわされる、もしくはそれ以上の威力で打ち返されるかもしれない。

（くっ、どうすれば勝てるんだ。焦って勝負を急がない方がいいのか？　だが、体が動かなくなっから勝機を見出したんじゃ意味がない！　どうする・・・どうすれば・・・）

考えれば考えるほど、焦りは募り、意味もないことを考えては、消え、時が過ぎていく。

そもそも、『パラギオン』ですら、さきのハザードの攻撃に打ち負けたのだ。どう考えても勝機は・・・。

（ん、待てよ・・・。さっきのハザードの攻撃・・・）

——しかし軍配が上がったのは、上よりくる重力も足した威力のハザードの腕——

(! !)

——重力を足した威力——

(これか!)

その時久郎は、ハザードを倒す方法を思いついた。始まり、そして終わりまでの道筋が、パズルのように脳内で組み立てられ、完成する。

(・・・『刹那の延長』・・・解除!)

「そんな状態で・・・空の的でしかない!」

ハザードは膝の屈伸を使い跳躍、その腕と爪が、久郎に迫る。その時、久郎は空いた右手に『エリクソス』を召喚し、瞬時にハザードに投げつける。

「ちいっ!」

想定外の攻撃に、空中のにいる久郎のために振るうはずだった爪を、ハザードは縛槍の鎖を断つために使う。

そして時間を稼いだ久郎は、小刻みに『解除』と『不動』使用、朱槍を水平にしその上に乗る。

「よっと!」

そして蒼槍を持ったまま跳躍した後に『解除』し、朱槍の『不動』を解く。

「・・・なんのつもりだ?」

翼をはばたかせ宙に浮き、縛槍の鎖の半分ほどを切り裂いたハザードが、久郎の様子を見て疑問に思いつつ、鎖を切り裂く。槍本体にも一撃を与えたが、気のせいか、数分前の『エリクソス』よりもハザードの攻撃に対して耐久している気がする。

一方、飛び上がった久郎は、右手を上に向けて全力で振る。すると黒い柄と朱槍の間の鎖が伸び、遠心力によって朱槍はさらに高い

位置にへと運ばれる。

「『さらに『不動』と『復元』!」

ジャラララララ!

鎖が黒い柄に吸い込まれ、久郎の体は高い位置へ。その手順を何回も繰り返す。

「・・・何を考えているのかは知らんが」

やっと『エクリソス』を片づけ終わったハザードは、より一層、翼をはばたかせ、

「やる前に、終わらせてやろう!」

時速何百キロかという超速で、久郎の元に襲い来る!

そして、空の上に浮かせた朱槍の上に乗った久郎はそれを見て、ニヤリと笑む。

そういえば、いつのまにかこの世界にも月が出ていた。

否、宇宙ではないのだからそれが本物の月であるわけがない。しかし、月のようなものは丸く形をとって久郎の後ろに黄色く光り輝き空に浮かんでいた。

「・・・行くぞ、ハザード・・・」

久郎は、槍の柄を滑るように、グルリと落ち、槍を蹴ってスピードを付ける。

「『解除』!」

そして向かってくるハザードに対して、真正面から迎え撃つ形の久郎。久郎と『パラギオン』は、その身に重力を受けて加速する。

それを見たハザードは、久郎の狙いを讀んだ。

「そうか、読めたぞ! 人間! 重力を利用して、我が輩を貫くつもりか! 考えたな!」

だが、その考えは浅いか。何も、真正面から攻撃を受ける力比べをしているわけではないのだ。

つまり、至極簡単、よければいい!

足が地に付いてないような状態で、あの速度で加速してくる槍の軌道を一ミリでも変更させることなど不可能。ハザードも超速で動

いてはいるが、吸血鬼の翼ならば、体一つ文緊急回避するなど容易！
そう、ハザードは考えていた。

しかし・・・そのハザードの考え自体が浅はかであった。

落ちていく中、久郎は吹き飛ばされそうになりつつも片手を離し掲げる！

「グングニル！」

久郎は『グングニル』を召喚。そしてそのグングニルを、朱槍と鎖を用いて『パラギオン』に結び付ける!!

「なんつだど!？」

『グングニル』は狙ったものに必中する神の槍。その力は、重力を乗倍した力の中でも適応される！

ハザードの顔にはじめて同様の表情が浮かぶ。そして、その翼は、進行方向を変えようとははばたくが、かいなく。

[illegible]

ガスッ！
GGGGGガアアアアアアア！！

——ヒュウウウウ、ドゴアアアアアアア
アアアン!!!

空中で交わった後、そのまま地面に直撃し大きな砂埃をあげた両者。その場には特段と大きなクレーターが開いた。

C

「久郎君っ！」

そのクレーターに、すぐさま駆け寄るノフィーネ。しかし、砂埃が邪魔でよく見えない。

「久郎君っ！
久郎君っ！！」

必死に呼びかけるノフィーネ。しかし返事は返ってこない。

・・・あの速度で、地面に直撃したのだ。普通の人間は生きてい
るはずはない。

「久ろう・君」

ノフィーネはヘタリ、と腰が砕けたようにその場に崩れ落ちる。
しかし、

「ノ、ノフィーネ・・・か？」

「久郎君!？」

その声はクレーターからではなく、上の方から聞こえた。

「おっ、ありゃあ・・・」

寄ってきた古王と創造神も見上げる。そこには・・・苦しうに腹を押さえつつ、中に浮かせた朱槍にもたれかかっている久郎の姿があった。

「・・・はは、流石に心中する気はないからな・・・刺した後、朱槍の鎖を伸ばして、逃げさせてもらった・・・。ま、それでもこのザマだが。・・・でも、よかった、ノフィーネが無事で・・・」

力なく笑う久郎。そんな久郎に、

「バカっ!　なにが無事なの!　こんな無理して・・・、一瞬でも、久郎君が死んじゃったと思っちゃったよ!」

地面にへたれこんだままのノフィーネが、叫ぶよう言う。その目にはうっすら涙が・・・。

「あ、えっと・・・すまんかった!　でも俺、自分の力を試したくて・・・。俺はノフィーネとの約束も守りたいし、ノフィーネも守り・・・」

「そんな約束どうでもいいよ!　そんな、・・・もう僕に、久郎君が死んじゃったなんて・・・思わせないでよ・・・」

「・・・ごめん」

・・・二人の間に流れる沈黙。気まずそうにしているのは他の二人。

何か言ってやるべきか・・・と創造神が考えていた時、ノフィーネが一言、

「・・・ありがとう」

「えっ・・・」

ノフィーネの伏せた顔から発せられた小さな声に、久郎はきよと

んとなる。

それを、聞き取れなかったのかと思った、ノフィーネは、顔をあげて、涙を光らせながらもとびっきりの笑顔で、言った。

「ありがとうって言ったんだよ！ 命知らずのバカ久郎君！」

Cの26話「最強の戦い方」

「いつつ・・・、体動かすだけで痛てえ・・・」

吸血鬼戦後、『身体強化』を解いた俺の全身に激しい痛みが襲ってきた。なんだ？ 筋肉痛か？ なんにせよ、ひきこもり生活には無縁だった痛みが体に襲ってくる。

「いや、筋肉痛ってもんじゃないだろ・・・。無理矢理あんな風に体動かしたから、全身の骨やら筋肉がボロボロなんだよ」

座り込んだ俺の調子を診るためにかがんでいる創造神が、呆れ口調で言う。

「ま、これぐらいなら帰って処置をすれば問題はないだろうがな。さて、帰るかっ！」

パシンッ！

「つつっ！！」

わざとらしく俺の足を強く叩いて立ち上がる創造神。・・・くっそ、こんな体でなければ・・・。

「無理しちゃだめだよ、久郎君」

創造神と入れ替わってしゃがんできたのはノフィーネ。・・・叩かれた後だからか、その気遣いが心にしみる・・・。

「立つなら肩貸そうか？」

「ん、頼む」

俺は遠慮なく、差しのべられたノフィーネの腕を掴んで、その腕をノフィーネの肩に回させてもらう。

「どう？」

「ん、まあ少し痛むけど・・・大丈夫だ」

ほんと、全身に力が入らない。まさかこんな風になるとはな。・・・

・さすがに、無茶しすぎたのか。

『久郎様、まるで要介護のおじいちゃんみたいですね』

・・・メイナ、喧嘩売ってるのか？

『いえいえ、いい意味ですよ』

どこをどうしたら、それをいい意味で捉えられるのか。是非とも説明してしいものだ。

「さ、行くよ久郎君」

ノファイネに支えられ、やっとやっとで前に進む。そういえば、あの森には食人植物がいたが・・・まあ、古王と一緒にいれば何とかなるだろう。

さて、帰るか。・・・も思ったがその前に、

「ノファイネ。少しいいか？」

「え、あ、うん分かった」

察してくれたらしいノファイネは歩く向きを変更。クレーターの方へと歩む。

そこには、ふちでクレーターの中を見ている古王と、そのクレーターの中で血を吐き、倒れているハザードの姿が。

ノファイネに支えてもらいつつ、俺はクレーターの中をのぞく。

「く、くっく・・・、見事だぞ人間。まさか、我が輩を倒すとはな・・・」

ハザードは笑いながら言っているが、かなり苦しそうだ。だが、それにしても・・・、

「・・・そんな状態になっても死なないとか。どんな化け物だ・・・」

「くっく・・・く、吸血鬼の・・・王だが？　ところで・・・」

ん？

「我が輩に・・・、とどめは・・・刺さんのか？」

・・・愚問だった。

「今の俺に、それが出来そうに見えるのか？」

「くっくく・・・それもそうだが、古王。貴様ならば、今の我が輩にとどめを・・・さすことなど、容易だろうに・・・」

「ああ、俺？」

自分に問いが向けられるとは思っていなかっただろう古王は、問

いを向けられたことに少し驚きつつ、返答を返した。

「しねえよ、そんなめんどくさいこと。それに、どうせまだ元気な
んだらう？ お前」

「・・・！？ その古王の言葉に、俺も俺を支えているノフィーネ
も絶句した。」

「くっくく・・・バレていたか。・・・ま、深い傷を負ったのは
変わらんがな」

そう言って、ハザードは全身をコウモリの群れに変え空へと舞い、
再び吸血鬼の姿に戻った時、胸に空いていた槍の刺し傷の穴はどこ
にもなく、苦しそうな雰囲気は全くなかった。

俺は少しムツとしつつ訊く。

「・・・手加減してたのか？」

「いやいや。我が輩はただ生命力が高いだけだ。さきの勝負は確か
に我が輩の負けだ。それにやられた分の血肉はごっそり減っている。
少なくとも元気などと言える状態ではない」

とかいいながらも、今の俺よりは元気そうなハザード。・・・俺
がこれであいつがあれとは・・・割にあわねえな。

「くっくく・・・それにしても人間・・・いや、我が輩に勝った
のだ、名前を聞いておこう。貴様の名は？」

訊かれ、渋々答える。

「・・・藤草、久郎」

「くっくくく、クロウか。英語でカラスと言う意味だが、なるほど。
カラスは確かに月に映える・・・」

そう言って、夜月を眺めるハザード。さっきの戦いのことでも思
い出しているのだろうか。

「・・・てか、別に俺の名前は英語のクロウをもじったわけじゃ・・・
」

と、弁明しようとしたその時だった。

ヒュウーーーー、ズドン！！

地面が揺れるほどの衝撃に、古王、創造神、俺を支えているノフ

イーネは、バランスを崩しそうになる。無事なのは自前で羽根を持つているハザードだけ。なんだ、隕石でも落ちたのか？

「い、今のは？」

「なに、心配するな。これはただ・・・」

ノフィーネが驚きながら訊く。ハザードが答えようとするが、横から聞こえていたしわがれた声に遮られた。

「ハザード様。お客人がお見えになりました」

のわっ！ とハザードを除く一同は、急に出てきた執事らしき吸血鬼に驚く。

「・・・ふう、寿命が二秒ほど伸びた――」

「古王、そのネタはもういい。・・・それより、客人？ 今の衝撃が？」

「まさか・・・」

俺が疑問に思っている中、創造神は何かに感ずいたようだ。その顔はこわばっている。

コツコツコツ。フワフワフワ。

ふと、森の方から物音がした。俺たちの視線は森の方へと移る。そこから聞こえてくるのは一つの足音。そして、まるで浮遊音のよくな奇妙な音。

「フフフッフ。・・・これまた随分と手ひどくやられたようだな、ハザードよ。流石に一人では荷が重かったか？」

歩いてきたのは老紳士、そして隣には。

「・・・むっ、・・・あまり会いたくはなかったのじゃがな・・・」

・・・スカした表情。半日以上前に見た着物。そして浮いている小柄な体格。・・・時神！？

「・・・おい、時神だよな！ おい！ つつ！ つつつ・・・」

「久郎君、無理しちゃだめだよ。・・・でも、時神様・・・だよね」
ノフィーネも我が眼を疑うかのように茫然としている。たしか、創造神の話だと、昨日の夕方前に突然いなくなっ、きつとあちら側に付いたんだろうって話していたが・・・。あちら側・・・か。

俺は時神の隣に立っている老紳士を見る。白髪に片眼鏡。タキシードといったいかにも老紳士といった格好。一見すると執事にも見えるが、その男が放つオーラは、むしろ『主』。

「悪魔の主、ベロ・ランザ卿・・・か」

隣に立つ創造神は、苦々しい顔をする。そしてノフィーネは何か納得したように言う。

「・・・もしかして、この人が依頼者？」

その質問はハザードに対するものらしい。ハザードは「ああ、そうだ」と返事し、そのベロ・ランザとか言うやつに向き直り、嫌味なほどの笑顔で言う。

「ベロ・ランザ卿、そういうわけです。女は捕まえ損ねましたが、今あなたの目の前にいます。ということで任務完了です」

「フッフッフ、よく言う。まあ、いいだろう。色々と手間が省けたのは事実だ」

これまた特徴的な笑い声を響かせ、愉快そうに渋い声で言う。・・・どうも、強いやつらっていうのは、あんな気に食わない笑い方をするらしい。

と、それはともかく、ベロ・ランザがカツ、カツ、と足音を鳴らしながら近づいてきた。

創造神は警戒し、押し殺した声を発す。

「・・・何をする気だ、ベロ・ランザ卿」

「何もせんよ。女を置いて行くのならな。・・・ただ、女を連れて逃げようとするなら、相手になってやるがな・・・」

・・・そう言ったその瞬間、一瞬だけベロ・ランザの背後に、何か禍々しくて混沌としたものたちが映った。あれは・・・悪魔だろうか。魑魅魍魎とした、悪魔の群れ。

しかし、それは一瞬にして消えた。疑問に思った俺の気持ちを悟ったのか、古王が横で補足。

「ベロ・ランザ卿。幾千もの悪魔を配下に持つ悪魔の主だ。その力は最強クラスといわれ、基本戦法は悪魔の大量召喚に高威力の魔法

の連射。・・・ま、俺でも近づくことが叶わないってほどの相手だ」
とか、言いながらその手には大剣が握られているが・・・、やる
気か？

「うーん・・・どうしようかって迷ってたんだが・・・、やらなき
や帰れそうにないしな・・・」

古王はその手の大剣を構え、ベロ・ランザに向く。

「そういうわけだ、力づくでもどいてもらう」

「そうか・・・なるべく魔力は温存しておきたかったが・・・」
ドウ！

その時、対峙する二人から、威圧感のようなものが発せられた。

古王は両手でその大剣を構え、ベロ・ランザはただ棒立ちしている。
俺、ノフィーネ、創造神は少し離れたところまで移動。ハザード
と時神も反対側にへと移動した。・・・んー、ところだ。

「不謹慎な話だが・・・、古王が戦っている間に逃げられないのか
？」

創造神は答える。

「・・・ベロ・ランザ卿ならば、古王と戦いながらこちらを攻撃す
ることなど容易い。そして、その攻撃で死ぬのはお前だ」

「・・・俺が、足を引っ張ってるってことか・・・」

ここまで来て何もできないどころか、足枷にすらなっている自分
の無力さに腹が立った。本当なら、ノフィーネを救ってそのまま逃
げればよかったはずだ。

あの時、俺が意地を張ってハザードと戦わず、古王に任せていれ
ば・・・。そんなことも思ってしまう。

「なあ、創造神。また『身体強化』を使えば・・・」

「バカか？ その時には、本当にお前の体はぶっ壊れるぞ。これか
らもノフィーネを守っていくんだろ？」

・・・なんか、他人にそればかりを言われている気がする。確か
に俺がした約束だが・・・それを出すのは、いささか卑怯じゃな
い・・・。

「まあ、落ちつけ。確かにベロ・ランザ卿は最強クラスだが。古王もまた、最強クラスの一人だ。あいつは死なんよ。ただ・・・」

創造神はそこで言い淀む。

「ただ？」

「・・・勝ち負けに関しては相性の問題だ。どうなるかは分からない。それに・・・ベロ・ランザ卿がしようとしているのは戦いじゃない。・・・ただの時間稼ぎだ」

「え？ それってどういうことですか？」

俺に肩を貸しているノフィーネが訊いた。だが、創造神は何か言葉を発そうとしない。ただ押し黙っている。

・・・いやな予感がした。ベロ・ランザの思惑。時神の思い。そして創造神のためらい。・・・これらが意味するもの・・・なんだ？俺は考えつつも、今はただ古王とベロランザの戦いを、見ていることしかできなかった。

C

「ほう・・・ベロ・ランザ卿の戦いが見れるのか。・・・これはカクテルを持って観戦する以外あるまい」

ハザードは、執事のような吸血鬼に血のカクテルを持ってくることを命じ、自分は手ごろな場所に浮く。

と、ふとハザードの視界に小柄な姿が映った。

（あれは確か、ベロ・ランザ卿に付いてきた奴だな）

と言う事は信者の一人なのか？ しかし、ハザードは時神のことを知らない。ベロ・ランザ卿が自分の知らないやつを連れてくるなんて・・・少し興味がわいた。

ハザードは、ツツツと平行移動、時神の側に寄る。

「貴様は何者だ？ 見ない顔だが・・・信者か？」

「・・・なんじゃ、お前は」

時神は半目の仏頂面で言葉を返す。とりあえず、返事を返してく

れたことをハザードは確認。

「失礼した。我が輩の名はハザード、吸血鬼の王だ・・・今は少々弱っているがな」

「そうか・・・妾は時神じゃ。信者では・・・ないとは言いきれんなにやら、弱りきったような声で言う時神に、ハザードはさらに興味を持った。

「くつくつく・・・そのような返答は初めてだ。信者であるものは、それが当然であると憤慨し、違う者はもまた、その誤解に対して憤慨するのだがな・・・貴様には迷いがある。くつくつく・・・しかし貴様、『神』なのか」

「そうじゃが・・・なんじゃ？」

「くつくつく・・・いや失敬。特に意味はないのだがな」

そう言うハザードは、さらに興味ありげに時神を見る。

「・・・なんじゃ、何か言いたいことがあるように見えるが？」

その問いに、ハザードは素直に答えた。

「くつくつく・・・いや出来ればいいのだが・・・、貴様の血、飲ませてくれないか？」

時神は、ハザードを思いっきり無視することにした。

C

ズドゴオオオオ！

その音に、その場にいた一同が音の発生源を見る。

その発生源では、古王と、大斧を持った牛の頭の悪魔が鏢迫り合っていた。

さらに横より古王に向けて、小悪魔から数多の矢が放たれる。古王は間合いを切ってそれを避ける。

「フッフッフ・・・流石は噂に聞く古王。なかなかやるではないかね」

牛の頭の悪魔の後ろで、余裕綽々の様子でベロ・ランザ卿は言う。

一方、

「・・・むー、タイマン勝負なら負けないんだけどな」

古王は、どうもやりにくそうにしていた。実際今の状況は、ハザードや時神は手を出していないのに、タイマン勝負と言われれば疑問を持たざるを得ない状況だ。

今度は古王に向けて、豚の頭の悪魔から鉄球が投げられる。それをよけると次は山羊の頭の悪魔から剣を向けられる。それ弾いても次は、鬼に金棒を向けられ、反応しきれず吹っ飛ばされる。

ズドオオオン！

・・・それはいつかの、効煽の戦いを見ているかのよう。圧倒的な数において、個なる強を打ち破る。しかし、あの時とは違い、召喚される悪魔たちは強く、召喚される数も二、三倍。

1対300。それが今の古王の状況だった。

ベロ・ランザ卿は、悪魔を召喚し、攻撃しては別の悪魔に入れ替え、時には複数体による同時攻撃をかける。幾千もの悪魔を従える、ベロ・ランザ卿ならではの戦い方。

「やって、らんねー！ー！」

ただただ受ける一方の古王は、ややキレ気味。というより、これだけ圧倒的にやられていてそれだけっていうのも、すごいことだとは思うが。

「フッフッフ・・・、これは私の尖兵でしかないのだが、こんなていたらくで大丈夫なのかね？ 古王」

「あー、もう、ウザいぜ！」

ガキンガキン、ズドゴン、ズドゴオオオ！

次々に召喚される悪魔の大群に、古王は飲み込まれるように押されていく。・・・そして、

「うごっ、これは・・・」

一人の悪魔に掴まれたことを皮切りに、次々に悪魔に体を掴まれ身動きが取れなくなり、そして悪魔の群れの中に飲み込まれた。

「フッフッフ・・・こんなものなのかね。なんともつまらぬ・・・」

我が悪魔ども、そやつを喰ってしまえ」

ベロ・ランザ卿からその命令が飛び、久郎たちは息をのんだ。しかし

「『歴史の砂』 ああ！」

ゴツヒユウウウウウウ！！

ガガッガがガガッガ！ 色々なものが削れる音が響き、悪魔の群れはその中心からバラバラに裂かれていった。その中から姿を現したのは、もちろん古王。

「古王さん！」

「おう、俺は無事だぜ、ノフィーネ」

思わず叫んだノフィーネにニカッと笑いかける古王。その体は全くの無傷。

それを見たベロ・ランザ卿は、やはり面白そうに笑う。

「フッフッフ・・・ならば、本気を出そうかね・・・古王」

「お、話が早くて助かるね。なら俺も、本気を出すとするか」
楽しそうに微笑み合う二人。先に動いたのはベロ・ランザだった。周囲に数々の召喚陣を出現させ、悪魔を呼び出と同時に、その中でも特に巨大な召喚陣から、何やら巨大なものを召喚する。

「・・・なんだ、それ？」

古王は、砂と化した自らの大剣をその手に集めて、元の形にへと戻しながら訊いた。

「フッフッフ・・・巨兵・・・とでもいうべきかな？」

ゴゴゴゴゴ・・・。

巨大な腕、巨大な足、巨大な胴体。それらは徐々に召喚陣を這い出るかのように姿を現し、やがて、全身をこの小世界に召喚した。その体の高さはビル並み。その容姿はまるで遺跡の前に立っている石像のような兵士。

そして・・・それは残された召喚陣から次々と出てくる。

「・・・滅茶苦茶だな。『歴史の砂』っ！」

苦笑しながら、再び砂嵐を巻き起こす古王だが。

ガガガガッガ……。

悪魔は倒れている。そして何か削れているような音はする。

だが……、巨兵には傷一つついてはいなかった。

「……マジか」

「フッフッフ……巨兵は堅いぞ？　はたして、巨兵を見事倒せるかね？」

巨兵は腰に備えた剣を手に持ち、古王に向けて振り下ろす。その動き、愚鈍かと思えばその巨体に似合わないほど素早く、古王は砂から剣に戻した大剣で、ギリギリそれを受け止め……、

ガシャンッ！

そのまま押しつぶされた。……かに見えたが、巨兵が剣をどけて見ればそこには折れた大剣だけしかない。

「……ほう？　咄嗟に受け止めきれないと判断して避けたか……」

瞬間、巨兵の頭よりも高い上空に古王が現れ、手に持った大剣を巨兵の頭に刺す。

「うおおおお！」

ガスン！　鈍い音を立てつつも、大剣は巨兵の頭頂部に突き立った。しかし、その程度では巨兵の動きは止まらない。

しかし、古王は新たに、全く同じ大剣を手に出現させ、巨兵の表面を走り回りつつ、各所に突き立てていく。

そして、十数本突き立て終わった時、巨兵の表面を蹴り巨兵から距離を取る。

「こんなもんか……、同時爆砕『歴史の砂塵』！」

ドガガガガガガガガガガガガガ！

巨兵に突きたった十数本の大剣が同時に碎け、巨兵を削る。

一本の『砂』程度では傷つかなかった巨兵だが、複数本の、それもし内部に入った大剣の『砂塵』を受け、徐々に、徐々に巨兵の体を削り取り、その衝撃で脆くなった各部位にひびを入れ、叩き折る。

ゴゴゴゴゴゴ・・・・。

巨兵は崩れ去った。後に残ったのは『砂塵』と元巨兵の砂。

「フッフフ・・・やるではないかね。しかし、まだ残っておるよ？」

「だから・・・まだだあ！」

『砂塵』は巨兵だった砂おも巻き込み、新たに出てきた巨兵たちを襲う。

ガガガガガガガガ！

「さらに、追加だあ！」

古王はまた大剣を手に出して投げつけ、爆砕させる。

ドガガガガガガガガガガガガガガガガ！！

さらに巨大化した『砂塵』は巨兵たちを容赦なく蝕み、その召喚陣も跡形もなく破壊する。

そして、『砂塵』はそのままベロ・ランザ卿のもとへ。

「ふむ・・・これは危ない、かね？　・・・現れよ『風魔』。砂塵を押し返せ」

ベロ・ランザ卿の求めに応じて現れたのは、王冠をかぶった大きな緑の鳥。その鳥が巻き起こす風に、巨大な砂塵がいとたやすく追いつ返される。

「ちっ、そううまくはいかないか・・・。剣に戻れ」

そう古王が言うと、砂塵の砂の大部分は大剣を形作り、複数本の大剣が地面に突き刺さった。そして巨兵の分の砂は古王が軽く手を振って払いのける。

「フッフッフ・・・これはひさし振りに、楽しいという感覚が湧いてきそうではないかね」

「・・・けっ、本気まだ出さないのかよ・・・ま、嫌でも出させてやるけどな！」

そして、古王は再び剣を構え、ベロ・ランザ卿は再び召喚陣を宙に作り出す。

「・・・なんか、じれったいよな、この戦いを見てると」

外野から見てる身分で言えた義理ではないが、どうも「本気出す」とか言って出してない気がする。

そのつぶやきを、横で苦い顔をしている創造神がひろった。

「・・・分からんでもないが。最強クラスの戦いとはそういうものだ。相手の手の内を探りあい、疲弊させ、先に相手の本気を引き出させる。それが定石であり、一番早く済む方法だ」

と言われ、納得する部分がないでもないが、まだよく納得できない。

「俺からすれば、いっきに全力で潰した方が早いような気がするが・・・」

「急がば回れと言うだろう？ 無理に焦って自分が負けていたら元も子もない。それに、たとえばその相手が幻影だったり、仮の姿だったり、中ボスだったり、第一形態だったりした場合に、一回しか使えない強力な技を使ったらどうなる？ 次に相手の攻撃をくらって負けだ。そういったことがよくある世界なんだ、ファンタジーは」

・・・確かに、少年漫画なんかによくあるよな。頑張って倒したのに、それが中ボスだったり第一形態だったりすること。そういう場合は大抵、主人公は一時撤退を余儀なくされ新たな力を備えるために時間を使う。・・・まあ、それと今の状況は少し違うだろうが、大体そんなとこなんだろう。

見れば、古王は複数本の大剣を駆使した衝撃波を放っているし、複数本利用した盾も作っている。さっきの巨兵の攻撃のときに、あの盾を使用していれば完全に防げただろうし、あの衝撃波を放っていれば巨兵ぐらい一撃で崩れただろう。

やはり、力その場をギリギリしのげる程度の力しか出さず、相手の出方をうかがっているんだろう。相手のベロ・ランザだってそう。・・・しかし、

「・・・これでは間に合わない。・・・が、古王に無理をさせるわ

けにもいかない・・・」

隣で創造神がつぶやく。確か創造神は、ベロ・ランザが『時間稼ぎ』をしていると言った。時間稼ぎ・・・なんのための時間稼ぎだ？

「あの・・・神様？」

「ん・・・なんだ？」

ここで、ノフィーネが創造神に話しかける。いったい、何を訊くのだろうかと思っていたが、ノフィーネは、全く関係ないことを訊いていた。

「古王さんの大剣って、一本だけじゃなかったんですね。あれは古王さんの『王器』だって聞いたんですが、『王器』って何本もあるものでしたっけ？」

「・・・む、いや・・・よくは知らんが、そうなんじゃないのか？」

創造神はそう言っただけで曖昧に返す。知らないってよりも、今そのことを話している余裕はない、って感じの返し方だったが・・・、『王器』ってなんだ？

創造神に訊くのはまずそうなので、ノフィーネに訊いてみる。

「なあ、ノフィーネ。その『王器』（おうぎ）って、なんだ？ はじめて聞く単語だが・・・」

「あ、『王器』はね。『王』たちが必ず持つ、その『王』の専用武器のこと。久郎君はまだ古王さんしか『王』を見てないと思うけど、他の『王』の人たちもそれを持ってるの。あ、古王さんの『王器』はあの大剣ね。確か・・・『超大古剣』だったかな？」

・・・それはなんともなネーミングで。まあ、『王器』についてはよくわかった。今するべき話ではなかったってことが。

俺は目の前で繰り広げら得ている戦いに視線を戻した。

この戦いはいつまで続くんだろうか・・・そんなこと思っていた俺だったが。

その戦いは間もなく終わりを迎えることとなった。突然の来訪者によって。

ガキン、ガキン、ズサツ！

「はあ・・・いい加減本気出してくれねえか？　ベロ、ランザさんよ。こっちもこんなやつらを相手にするの疲れてきたぜ・・・」

「フッフッフ……貴様が本気を出せば、いくらでも出してやるとも」

古王とベロ・ランザ卿の戦いは、徐々に激しさを増していくものの、互いにまだ本気までの道のりは遠いようだった。それでも、さつき久郎とハザードがやった戦いよりも派手だった。

「さて……次はドイツを召喚しようか……っ？」

ふざけるように、顎に手を当て考え込んでいたベロ・ランザ卿だったが、不意に何かに気がつき上空を見やる。

「……？」
「どうした？」

古王が不審に思い、話しかけたその時、

「・・・地獄よりの脱獄者『ティザーダ』！」

「?!？」

ドゴオオオオオオオオオオ！！！！

ベロ・ランザ卿が召喚したそれは、今までの奴とは比べ物にならない覇気を放つ、黒槍をもった黒騎士。明らかにこの段階で出すものではない魔物から攻撃に、古王は大剣を複数枚、黒騎士の黒槍と自らの間に配置。だが次々と大剣は破られ、古王の体に達し、古王は吹き飛ばされる。

「うおっ！ つつつつ」

古王は地面を踏みしめつつ激しく後退。顔をいぶかしめながら訊く。

「・・・なんだ？いきなり本気に近いやつをい召喚しやがって・・・なんのつもりだ」

古王は攻撃に備え、その場で大剣を構えるが、ベロ・ランザ卿は言う。

「フッフッフ・・・もう戦う必要はない。あの方がいらっしゃる・・・」

「あの方？」

古王は首をかしげる。そんな古王に対し、ベロ・ランザ卿は信じられない者を見るかのように言う。

「フッフッフ、本当に分からないのかね？ 私がその『不老不死』の女をハザードに誘拐させ、この世界に連れてこさせた真意が？・・・いや、言い直そう。私がハザードに、その『壊れない生贄』を、この世界に連れれ子させた真意が、本当に分からないのか？ あの方に『破壊』を、思う存分させることができる『生贄』を、私は用意させたんだぞ？」

ハッ、とした古王。そしてその目は、ベロ・ランザ卿ではなく、創造神にへと向く。

「創造神！ ノフィーネを逃がせ！」

しかし、その古王の言葉は無駄に終わる。

ゴゴゴゴゴゴゴ・・・。

突如空より響く音、まるで隕石でも落ちてきたかのような音に、その場にいる全員が空を見つめる。実際、空から落下物が、久郎立ちの方へと向かってくるように落ちようとしていた。かなりのスピードで。

そして、古王とベロ・ランザ卿との間の丁度真ん中あたりに、そいつは落ちてきた。

Cの27話「DESTROYER」

ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!

今日、何度聞いたかわからない破壊音。その中でも、今の音は強烈の部類に入る音だった。少なくとも、ハザードの攻撃よりもすごい音がした。

そして、それが地上に落下してきたことから来る衝撃波に、俺はノフィーネ共々倒れそうになり、結局倒れた。

「うっくっ、」

「大丈夫? 久郎君」

・・・衝撃波が収まり、俺はノフィーネに起こしてもらおう。・・・本当に情けないな、俺。しかし今はそんなことを嘆いている場合ではない。

苦笑している古王と、笑みを浮かべるベロ・ランザ。そして、その間にはひととき大きなクレーターが。

「ついに・・・来てしまったか」

隣にいる創造神が嘆く。あの落下物は・・・もしかして・・・。

『・・・久郎様。認めたくないかもしれませんが・・・』

メイナが心配そうに話しかけてくる。ああ・・・分かってるとも。そして、いつか来るといふ話を聞いていて、ベロ・ランザとかいうやつが求めているもので、創造神が嘆いている・・・この三つを総合した堪えは一つだ。

「破壊神・・・か」

シュウシュウと煙を立てている、落下物が何者なのかは煙のせいでまだよくわからないが、ここにいる各人の反応を見る限り、間違いなさそうだ。まだ動きはないが・・・。

・・・破壊神、いつか『命断』を用いて戦わなくてはいけないと言われていた存在だ。しかし、今この場に、現れることも無いだろうに・・・。急なことにいまいち反応しきれない。いくらなんでも

唐突すぎないか？　ここは驚くべきなのか、悲観すべきところなのか・・・。

『・・・両方すべきですよ、久郎様。・・・こんな状況なのに、何でそんな悠長なんですか？』

そんなつもりはないんだがな・・・。大体、破壊神について俺が知っていることと言えば、いろんな世界を滅亡させていった、ぐらしか知らないんだよ。だから、危機感がいまいち持てないとか・・・そもそも、割と小さくないか破壊神。

『それも・・・そうですね』

モクモクと煙が上がっていて、よく見えないが、煙に隠れてるってことは煙より小さいサイズってことだ。・・・そんなに危機感を持って言われても。

そんな時、クレーターを熱心に眺めているベロ・ランザが口を開いた。

「フッフッフ・・・『破壊神』様の一部が、ここに来るということ、こちらでも把握していたのでね。私じきじきにお迎えに来させてもらったというわけだよ」

愉快そうに、ベロ・ランザが笑う。しかしそれにしても・・・一部？

一部って何だ？　メイナ、

『・・・分かりません。一部って、何なんでしょうか、一体・・・』

そうか・・・なら。

「一部、ってなんのことだ？　創造神」

「・・・」

しかし、創造神は黙して語らない。・・・どうしたっていうんだ創造神。急に黙りこくって・・・。

そうして結局、俺の問いには創造神の代わりに、いつの間にか側に来ていた古王が答えた。

「一部ってのは、破壊神の体の一部・・・ってことらしい。破壊神が自らの体を使って生み出した分身・・・って言えば大体理解でき

るか？」

「・・・まあ、分かった。だが、破壊神ってもっともっと巨大なものなんだろう？　それが生み出した一部っていても小さすぎないか？　あれ」

「なに、超巨大生物が、自らの分身をミニマムサイズに作るなんてことはよくあることだ。それに、小さいってことは、大量に作れるってことでもあるしな」

・・・なら。

「・・・そもそも、あれが破壊神の一部であるって証拠は？」

「亜宇宙上に居る破壊神の体から来たのが確認されている。なら、それ以外考えられない」

古王の言う事だ、その事実間違いはないんだろう。なら・・・、
「・・・倒すのか？」

「いや、それはあちらさんの出方を見てだな・・・」

そう言って、古王はクレーターの中央を見やる。見れば、煙は徐々に晴れつつあった。

さらに古王は言う。

「大抵、こういった『一部』が生み出される場合の多くは、他人とコンタクトをとるためだ・・・、だから破壊神の場合も、こうやって一つだけよこしたってことは、何かしらの意思表示があるはずだ・・・」

古王は握った大剣の柄を、より一層握り絞る。

そして・・・煙は晴れた。・・・クレーターの中から声が響く。

「・・・はい、はるばるやってきました、人間界・・・から少し離れた所の小世界。フフ・・・ヒヒ・・・アッハハハハハハハ！」

姿を見せた、破壊神の一部は、まるで人間のような姿をしていた。それは外見が人間の様だけで中身はまるっきり違うものなのだろうとは思うが、着ているものがどこかの民族衣装っぽいだけで、他は全く人間の若い男性と同じように見える。

そして、そんな破壊神の一部は、クレーターの中心で爆笑してい

た。・・・壊れたやつなのか？

「ハハハハッ、アツハハハハッ、ツクヒ、ハハハハ・・・それにしてモ、あー、おかしイ・・・俺が『一部』だッテ？ フッフ、アーツハッハ！」

そして、ひとしきり笑った破壊神の『一部』は、はっきりと言った。

「・・・お前らの話を聞いていたガ、お前らは間違ってるぜ。俺は『一部』なんかじゃない。真正正銘、破壊神『本体』だヨ」

その発言に、その場にた一同は凍りついた。ただ二人、破壊神の『本体』と、創造神をのぞいて。

C

「は、破壊神様『本体』なのですか？」

一番信じられない、といった顔をしたベロ・ランザが、その破壊神の『本体』と名乗るものに訊く。

『本体』は愉快そうに答える。

「あア、そうだヨ。何を勘違いしたかは知らねえガ、俺が破壊神の『本体』ダ！ 『一部』を生み出すなんテ、俺はしたことも無いネ！ ヒヤハハハハッ！」

クレーターの中心で、ベロ・ランザを見やりながら『本体』は笑う。それを聞いたベロ・ランザは終始呆然。続いて、時神が声を発す。

「違うのじゃ・・・あの方とは、何か違うのじゃ・・・」

多分、眩やいたつもりが、思わず普通に言葉を口にしてしまったんだろう。それを聞いて心外そうに、自称『本体』は言う。

「おいおい・・・何が違うっていうンダ？ 俺以外の『本体』でも、見たことがあるっていうのか？」

「・・・見たことはないがの、昔、声を聞いたことはある・・・。その声の雰囲気とは・・・違うのじゃ」

時神は戸惑っているようだった。自分が信じてきたものは、自分が思っていたものと違う・・・そんな感じだ。

「違う、・・・ねエ。・・・着物を着てるってことハ、人間界のやつだろお前。・・・千年前に人間界に来たときモ、雰囲気は今と変わってなかったと思うがなア・・・。そいッ、俺の名を騙る偽物だったんじゃないのか？」

「・・・分からねぬ。よく・・・分からないのじゃ・・・」

時神は混乱し、とても弱っているように見える。まるで、吹けば飛んでしまいそうなほどに。・・・あいつがあんな顔をしているってのに、俺は近づく事も叶わない。

しかし・・・違う、って一体どういう事なのか。時神は今何を思っ
て・・・、

『久郎様・・・、今は・・・』

ん、ああそうだな・・・。今はそれを考えている余裕はない。・・・にしても、本当にあれが『本体』なのか・・・？ 時神は何か違うと言っていた。なら、あれは破壊神ではないのか？

そう内心思う俺の横で、古王もまた首をかしげていた。

「むー・・・あれが本体なんて冗談にもほどが過ぎるぜ。見た感じ、大した魔力も持ってなさそうだし」

「ん、そうなのか？」

俺が思わず訊き返すと、古王は詳しく語ってくれた。

「ああ。『一部』ってんなら納得のいく魔力だけれど、『本体』にしては少なすぎる。大体、本体は今も亜宙に浮かびながらこっちへ徐々に向かってきているんだ。あれが『本体』なはずはない。・・・しかしとなると、あれは『一部』の精神が自立して『本体』を偽っているのか？ 破壊神表面から放たれたのは間違いないんだしな・・・」

うむむ、と顎に手を当て考える古王。しかしそれが聞こえていたのか破壊神の『本体』は古王の方を向き、言う。

「ほんト、毎回毎回俺って信じられねえナ。大体何か勘違いしてる

ようだしヨ。フフフツ、まッ、それが面白いのだシ、こっちはこっちで勝手に・・・ッテ、ン？　ありゃア・・・」

しゃべっている途中で、笑っていた『本体』がこっちの方を見て表情を変えた。あれは何かを見つけた、って顔だ。

視線の先は・・・ノフィーネ、かとも思ったが、少し違う。・・・その視線の先に居たのは・・・。

「久しぶりだな。創造神！　こんなところに居たのかヨ。別に探してなかったけど」

「・・・破壊神。もう・・・来てしまったのか」

創造神は、これ以上ないくらい苦々しい顔をしている。・・・創造神？

「なア、創造神。お前からも言ってやってくれヨ、俺が本体だってサ」

自称『本体』から、創造神にへと声が飛ぶ。そして、創造神にはさらに問いが投げかけられる。

「創造神・・・どうなんだ？」

古王。

「神様・・・どうしたんです？」

ノフィーネ。

「創造神・・・、破壊神様の『本体』がおっしゃっていることは、事実なのかね？」

そして、ベロ・ランザまでもが訊く。・・・にしても自分で『本体』って言いながらも訊いてるってことは、結局信じてないんだな、あいつも。

「ほラ、どうしたんだ、創造神。何を考えているか知らないが、早く事実を教えてやれヨ」

『本体』がせかす。その場にいる誰もが創造神の口が開くのを待っていたその時。

創造神は、口を開いた。

「・・・今から言う事に、一切の嘘も偽りも無い。・・・そいつの

言っていることは、事実だ」

・・・それを皆が訊いた瞬間、沈黙がこの空間を漂った。だが、その沈黙を破ったやつがいた、

「アッハッハッハ！　ほう、創造主のお墨付きが出たゾ。俺は破壊神、その事実は何ら偽りはない！　ヒヤハハハ！」

自称『本体』・・・いや、創造神が事実だと認めたから真正正銘『本体』か、未だ信じられないが

。

とりあえず、そいつは笑いながらクレーターを飛び出し、ベロ・ランザの前にへと降り立った。

「デ？　俺のことを様付きで呼んでたってことハ、お前、俺の『信者』ってやつなのカ？　直々迎えに来たって言うシ、力も強そうダ」破壊神はまんざらでもなさそうに笑って言う。しかし、一方のベロ・ランザの顔は・・・笑っていないように見えた。

「そうか・・・これが『本体』・・・か。期待外れではないかね」
「ア？」

ベロ・ランザのとげのある言い方に、破壊神はそのにニヤケた顔を真顔に戻す。

「お前、今なんて言ったんだ？」

「・・・せっかく、気を引くための供物たる『不老不死』を用意し、この日のために念に念を入れて準備してきたというのに、これが『本体』とは・・・期待外れだと言ったのだよ」

ベロ・ランザの声には、怒りと失望が混じっていた。それはもう崇拜する者や尊敬する者に対しての口のきき方じゃない。

「・・・『信者』ってやつじゃねえのカ。何ダ、少しがっかりしたぜ・・・ッ!？」

「私に近寄るな、下衆が」

ベロ・ランザが呼んだんであろう黒騎士の槍が、破壊神を貫こうとし、破壊神は大きく後ろに飛び上がってかわした。

「ッ!　あぶねえナ・・・。危うく死ぬところだったぜ」

「・・・その程度の力で破壊神とは・・・冗談もたいがいにしてほしいものだね。だが、創造神が嘘偽りを言っている様子はなさそうだ。・・・これが世界を滅ぼしてきたなんて到底信じられないが、どうせ魔力も持たないような生物の住まう世界だったのだろう。現に、魔力を持つ私たちと私たちの世界はこうして存在している・

・これは何よりの証拠ともいえる」

くどくどとベロ・ランザは苛立ちを押さえるように喋り続ける。あれは多分・・・ムカついてるんだろう、破壊神に。信じていたものが自分より弱いやつだったなんて、と。

「・・・それハ、ここら辺の世界にたまたま俺がきてなかっただけデ、本気を出せばここら辺の世界ぐらい・・・」

「まだ言うか下衆が！」

チュドウン！

中に描かれた魔法陣からメテオが放たれ、破壊神はその衝撃でクレーターの真ん中まで吹っ飛ばされた。

「ガハツ・・・ククク。強イ・・・強いねえ、ククク」

破壊神は苦しそうに笑う。なあ、メイナ。あれが、あんなものが破壊神だったのか？ 俺には、創造神が嘘を付いているようにしか思えないんだが・・・。

『そうですね・・・でも、創造神様は遠まわしにですけど、確かに、あれが破壊神『本体』だと認めました。その言葉に、嘘偽りはなかったように思います』

だが、その嘘偽りがないってのはどうやって判断したんだ、お前。

『・・・雰囲気、でしょうか』

曖昧だな。もしかしたら創造神、適当に返事したんじゃないのか？ 『そうでしょうか・・・』

ま、何にせよ本人に訊くのが一番手っ取り早い。

「おい、創造神」

俺が呼びかけると、創造神はゆっくりとこっちを向いた。

「・・・なんだ？」

「あれって、本当に破壊神なんだよね、俺たちが打倒しなければならぬはずの」

「・・・ああ、そうだ」

「・・・お前、何でそんなに元気がないんだ？」

「・・・」

黙して語らず。ここに来て、創造神は多くを語ろうとはしてくれない。

「神様・・・何か心配ごとや、隠し事でもあるんですか？ 一人貯め込んでいないで、話してください」

ノフィーネもこう言っている。と、この言葉に何か胸の内に来るものがあつたのか、創造神は曇っていた表情をハッとさせ、苦笑した。

「貯め込むな・・・か。それは誰が時神に言った言葉だったか・・・いや、すまない。少し悲観的になっていたようだ」

悲観的？ それはいったいどういう・・・。

「ま、それもこれも全部、もう少し待っていてくれ。・・・それと古王。何かあつたらすぐに動けるようにしていてくれ」

「・・・？ 分かった」

急に力を取り戻したような様子の創造神はそう指示し、視線をクレーターの中の破壊神へと移した。

・・・俺も、それにならって破壊神を見る。

クレーターの中の破壊神は立ち上がって、ベロ・ランザに何か言っているようだ。

「ククク・・・しょうがねエ、そっちがやる気なラ、こっちも・・・」

「近づくなと言っているだろうが」

チュドゥン！

「グハッ・・・」

破壊神にまたメテオが浴びせられ、破壊神は、ぼろきれのようにクレーターの中を転げる。

さらに、魔法陣よりメテオが連射される。・・・あれをくらって、破壊神は死ぬんじゃないか？

チュドウン、チュドウン、チュドウン、チュドウン！

「・・・容赦なしだな・・・」

「だけど、まだ生きてるみたいだぜ、ほら・・・」

古王が指をさした先は、クレーターの淵・・・多分、そこまで吹っ飛ばされたんだろうが、煙の中に確かに人影は残っていた。ただ・

「ハア・・・ハア・・・くっソ・・・」

息も絶え絶え、今にもくたばってしまいそうだ。

破壊神は息を整えつつ立とうとする。だが、

ゲシっ！

「うッ・・・」

立とうと力を入れた右手を、いつの間にか移動してきたベロ・ランザに踏みにじられる。

破壊神は、憎々しげにその姿を見上げる。そのベロ・ランザの顔には怒りはなく、嘲りといったぶつての優越…みたいな笑みが浮かんでいた。

破壊神の手を踏みにじりつつ、ベロ・ランザは言う。

「フッフフ、私としたことが少し取り乱してしまったようだね。だが、これが破壊神ではな可能性も残っている、あるいは『本体』というのは『第一形態としての本体』という意である可能性もある以上・・・一応、やっておく価値はあるだろうね」

「・・・なにヲ、する気ダ？ うッ！」

それを訊いた破壊神の顔に、口をきくな、とでも言わんばかりのベロ・ランザの蹴りがヒット、破壊神はまたクレーターの中へと転がっていく・・・。

そして、俺たちがじっと見守る中・・・、ベロ・ランザは呪文を唱え始めた。・・・なあ、あれ止めなくていいのか？

「・・・問題はない。むしろ、その何かで破壊神が倒されてくれれ

ば万々歳だろ？」

創造神がそう言うので、止めなくても大丈夫らしい。一応、古王に訊いておこうかとも思ったが、手間なのでやめる。

そしてじっとして待っていると。数秒後、破壊神を中心として、何やら巨大な魔法陣が出現した。

「これハ・・・封印カ？」

破壊神は自分の下に描かれている魔法陣を見て言う。

確かに、残知回想の時に見た封印陣に似ているような気がしないでもないが、俺から見れば正直、魔法陣なんてどれもこれも同じようにしか見えないしな・・・。

とまあ、それはさておいて。その答えはベロ・ランザがすぐに答えた。

「否、これは使役陣。これはその改良型だよ。これによって、バイムによる契約の印を焼き付けられたものは、死ぬまで私の僕となる。そして、その印を焼き付けられたものが、たとえ『一部』であっても『第一形態』であっても『分身』であっても、実態を持った『幻影』であっても、もともと一つの存在であった『本体』を服従させることが出来る優れものだよ」

そう言ったそばから、その使役陣とやらから何かが出てきた。あれは・・・ハンコ？ 巨大な四角い形をしたハンコのようなものが、ジュウジュウと音を立てて破壊神の体にへと近づいて行く。

「つまり、これは・・・破壊神の体に焼印を入れるってことか」

「それだけじゃないぜ。バイムの中にある『契約の掟』を利用して、破壊神を完全服従させようとしているようだ」

これは古王からの補足。どうやらあのハンコで焼印を入れられると、絶対服従を誓わされるらしい。

「まあ、これ自体は何度でも出現させられる陣だから、出し惜しみする必要も無かったのだね。・・・本当は最強の存在である『破壊神』に使う予定だったのだが、はたして・・・」

「てめェ、始めっからそのつもりデ・・・ちッ・・・！」

それを聞いてハンコ及び、使役陣より逃れようとする破壊神。しかし、使役陣より伸びてきた十本ほどの人の腕のようなもので、四肢をがちりと拘束される。

「うオ・・・！ くそッ、離セ・・・離セ！」

もがく破壊神。しかしその弱った体には、もうその腕を振りほどく力は残っていないようだ。

破壊神が必死にもがく中、その首元に、焼印が押しつけられる・・・。

ジュッ！

「ガッ！ アアアアアアッ！」

うめく破壊神。しかし、それを見るベロ・ランザの目は冷ややかだ。

「・・・印の反応から見ても、これ以上形態がある様子はないか・・・」

よくわからないが、どうやら改めて失望したらしい。

「もういい・・・我が僕となれ、期待外れの『破壊神』もどきよ」

不愉快な声で、そう告げるベロ・ランザ。その背後には、自らの道連れの来訪を歓迎するかのようにうごめく、ベロ・ランザに服従をしいられているのだらう悪魔たちが、色濃く見えた。

そしかしその時、ウゴオオオオとうめき続けていた破壊神の声が、ピタリと止んだ。

「ん？」

何があったのかと、ベロ・ランザおよび、俺たち全員、クレータの真ん中に居る破壊神の姿を見る。

すると・・・破壊神は、笑っていた。

「クククク・・・そろそろ、猿芝居はいいころかな？」

「・・・なに？」

ベロ・ランザはいぶかしみ、目を細める。一方、破壊神は、焼印を押された体制のまま、猛々しく笑った。

「アーハッハッハ・・・期待外レ？ こっちは期待通りだぜ！」

一体、あいつは何を言ってるんだ？ 多分、他の奴らもみんなそう思ったに違いない。すべてを知っている創造神以外は。

そして、破壊神は叫びだした。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

・・・何をやる気だ？ そう思ったその時、

「っ！ 古王！ 久郎とノフィーネと自分の周りに最高密度のバリアをはれ！ 今すぐに！」

創造神は突然叫んだ。突然のことに、俺、そしてノフィーネもわけもわからないといった様子で立っていたが、古王は即座に反応し、周囲にあの大剣を積み上げバリエードを作り、その内側に光る窮状おバリアのようなものを張った。

そして、破壊神の内側から、何やら光が漏れだして・・・

キュイイイイイイイイイイイイイイイイ・・・、チュドオオオ

オオオオオオオオオオオオオオオオ！！

ブオオオオオオオオオオ！！

衝撃と暴風が襲ってくる。しかし古王のバリアのおかげか、その衝撃はバリエードとバリアの分で防がれているようだ。俺たちには全く届いてはいない。

・・・しかし、一体何が起こったんだ？ 今度の爆発は煙がはっせいしていないおうだけれど・・・ん？

そこで俺は気づいた。クレーターの中を見下ろせば、さっきまで使役陣の真ん中に居たはずの破壊神がいない。使役陣も消えている。一体何が起こったんだ・・・？ そう思った俺の疑問は、またしてもベロ・ランザが独り言で勝手に答えていた。

「体内の魔力を自ら活性化させ、自爆したか・・・。そこそこは魔力を隠し持っていたようか。・・・しかし、防御をしたとはいえかなり傷程度しかおってはおらぬ。・・・やはり、弱いな・・・」

ベロ・ランザは服をはたきつつそう呟く。その後ろでは、時神が、こほんっ、と咳をしつつ着物についた汚れをはたいていた。その横のハザードは、特に何もしないまま突っ立っている。・・・あいつ

だけバリアを張ったのだろうか？

「てか、なんであいつら俺たちみたいにバリア張らなかったんだ？」

「正確には張ったの俺だけだな……。あんな程度の爆発に、こんな高密度なバリアを使うやつは普通いない。魔量が無駄に消費するからな……。強者なら普通は、着衣で防ぐか簡易シールドを張るかぐらいしかない。……。まあ今回は予想以上に爆発の威力が高くて、あっちも完全には防げてなかったみたいだが……。それでもかすり傷しか負ってはいないようだぜ」

バリアをとき、バリケードの大剣を宙に上げて消した古王はそう説明した。

なるほどな……。しかし、ならなんだって創造神はこんなバリアを張るように言ったんだ？

と、本人に訊いてみた。

「……。すぐに分かる。せめてそれまでは……。考えをまとめる時間をくれ」

そう創造神は言った。……。考えをまとめるっていったい何の？しかし、そこまで訊く気は俺にはない。

そんな中、ベロ・ランザは呟く。……。ってか、独り言の多いやつだな。まあ、実際口に出して言った方が考えをまとめ安いつてのもあると思うが。

と、それはともかく……。ベロ・ランザは呟いた。

「……。さて、世界征服の野望もこれでまた振り出しに戻ったということかね……。まあ、いい次はどうしたものか……。」

……。なんか、独り言にしては他人に聞かれちゃいけないことほざいてるぞ、あいつ。

「むっ、と。そう言えば、古王との勝負の途中だったな……。まあ、いい。こうなれば古王。貴様を我が僕にするまでよ」

「えっ、俺かよ！」

急に話をとんでもない展開で振られ、動揺する古王。

「貴様程の奴を我が配下に加えれば、我が野望に一步近づけるだろ

う。今までは、強い力を持ちすぎて周りに集中して討伐されるのを恐れ、最強クラスを配下にするのは控えていたが・・・もう手段は選ばん！ 貴様を我が僕にする！」

「やなこったい！ 誰がお前なんぞの僕に・・・」

そう答えようとした古王の目の前に、黒い腕が十数本集まってできたウニのような悪魔がいきなり召喚され、古王を拘束した。

「なっ・・・ちよっ・・・いきなりすぎねえか!？」

「手段は選ばんと言った！ 『使役陣』！」

古王の真下に、再びあの陣が描かれる。・・・って、古王！

「古王さん！」

ノフィーネが叫ぶ。・・・どうやら古王は、あの悪魔を振りほどけないでいるらしい。・・・なんでだ？

「古王！ そんな悪魔、早く振りほどいて・・・」

「・・・いや、腕が抑えられてるから、剣が振れなくて・・・こいつは・・・まずいな・・・」

額に冷や汗を浮かばせながら、口元だけを笑わせる古王。って、笑ってる場合じゃねえっての！

見れば、ハンコが古王の首筋に徐々に近づいていつている。

「くそっ・・・『人体強化』を・・・」

「ダメ！ 久郎君・・・神様！」

そんな俺を止めつつ、ノフィーネは創造神に目を向ける。だが、創造神は動かない・・・。

「フッフッフ？ こんな簡単に決まってしまうか？ ほら古王、本気を出さねば私に服従せねばならないがね？ フッフッフ・・・」

くそっ、ベロ・ランザは愉快そうに笑う。・・・なんだ？ あの最強クラスの戦い方とやらに乗っ取って、あの悪魔を振りほどけるであろう本気の力を古王は出さないようにしている、ってことか？
なら・・・、

「なにしてる、古王！ 本気出さないと無理なら、本気を出せ！」

「そうは言うがな・・・、俺の本気をこんなところで出したら・・・」

「先に本気を出したら負けるってか？　・・・だが、今負けたら本末転倒だろうが！」

「フッフフ・・・アツハハハ・・・」

くそっ、余裕綽々に笑うベロ・ランザが鬱陶しいな、ホント！

古王はまだ、本気を出すかどうか迷っているようだ、しかし古王は決断をしようとはしない。創造神も助けようとしなない。なぜだ？

ああ、もう、分からん！　こうなたら、やはり『身体強化』を使
って・・・。

そう、俺が思った時だった。・・・この場に異変が起きた。・・・
ハンコの動きがピタリと止まる。

そして・・・、

「ッ！　うごお・・・なんだ！？　頭が、割れるように・・・痛い
！？」

！　ベロ・ランザが頭を押さえて苦しみ始めた。・・・なんだ？
何をした？　古王。

「・・・いや、俺は何もしちゃいないが・・・っと」

あの悪魔も消え、古王は解放された。と、俺の耳にはまたうめき
声が

「うう・・・頭が・・・痛い！　・・・なんじゃ、これは・・・？」

見れば、時神も頭を押さえて苦しんでいる。・・・何が起きてる
んだ？　いたい・・・。

たまらず、俺は訊く。

「創造神！　これは、何が起きて・・・」

しかし、その俺の言葉は、あるヤツの声に遮られた。

《クククク・・・アッハッハッハ、俺が死んだ、とでも思ってい
たか？　クッフッフフ、分かっちゃいない、あア、誰も分かっちゃ
いないゾ！　破壊神がいたいどんなものなのか！　この場に居る
誰一人として分かっちゃいない！》

これは・・・破壊神の声か！　でもどこから・・・。

俺は声のした方を向く。その方向には・・・ベロ・ランザの姿が。

ベロ・ランザ自身も驚きを隠せないようだ。

「破壊神！？ いったいどこに・・・」

《お前の中だヨ。支配者気取りの悪魔ァ！》

とたん、ベロ・ランザは自らの口を押さえる。・・・なんだ、今のは。俺は確かに見たし聞いたぞ・・・、

ベロ・ランザの口から破壊神の声が発せられたのを！

ベロ・ランザは手で口を押さえるが、口は動くことを止めない。

《いや・・・、そういや俺のことを一人だけ分かってるやつがいたカ。なァ、創造神・・・》

「・・・もう、いいころ合いか」

そう言って、創造神は一步一步、ベロ・ランザに近づいていく。

ベロ・ランザは何かを召喚しようとしたのか、左手を振り上げようとしたが、その腕は不利上がる途中でピタリと動きを止めた。

「これは・・・体が・・・動かんっ！ なんだ！？」

動揺しまくり、目を見張り、顔には恐怖の表情を浮かべるベロ・ランザ。

そんな、ベロ・ランザに・・・いや、そして俺たちにも、創造神は真実を告げていく。

「・・・破壊神とは、あの異世界の男性のことではない」

「な、何を言って・・・貴様が、あれは破壊神だと・・・」

ベロ・ランザは苦しそうに、創造神に言うが、創造神はその問いには答えず、話を続ける。

「無論、超巨大な兵器や魔物などではない。むしろ逆だ」

そして今度は、時神に異変が出る。

「・・・なんじゃ・・・体が・・・勝手に、動く・・・意識・・・が・・・」

目を朦朧とさせ、その目に光が失われていく。・・・俺は駆け寄ろうとしたが、体に痛みが襲ってきて、おまけに古王の腕にも遮られた。・・・横にあるノフィーネの顔を見れば、悲しそうな顔をしている。

・・・何もできないのか、俺は。・・・その気持ちに体から一層、力が抜ける。

脱力したまま創造神の話を俺は聞き続けた。そして・・・創造神は、驚くべき事実を口にした。

「破壊神とは。普通その身に宿すことのない量の魔力を宿した・・・『ウイルス』の『種族名』だ」

最早、俺は何を言われても、そんなものなのだろうと驚かないが、創造神に対したベロ・ランザは驚きの表情を浮かべている。

「そんな・・・馬鹿な。・・・ウイルス・・・だと・・・!？」

《正解、正解、大正解！》　　つってモ、創造神は最初から知ってたけどナ。何せ俺を作ったのも創造神だし》

「ベロ・ランザ卿。今、破壊神は、あなたの傷口から貴方の体内へと侵入し、あなたの神経および脳を掌握する。そして・・・あなたの体は、破壊神に乗っ取られる」

創造神はそれだけ言って、またこっちへ歩いて戻ってくる。その後ろでは、ベロ・ランザが最後の叫びをあげていた。

「な・・・ああ・・・私が・・・私があああああ！」

ベロ・ランザは、頭を押さえうずくまったかと思うと、その場に倒れた。そして・・・その奥に居る時神もまた、地面に倒れていた。無事なのは・・・ハザードだけ。

「・・・これは笑えん状況だな」

ハザードが思わずつぶやいた。と、その時。

「それはこっちの台詞だナ。・・・なんでお前ハ、俺に感染していないんだ？」

ムクっ、と起き上ったベロ・ランザ。・・・ハザードや俺たちは少し身構えるが、何か様子がおかしい。・・・というか、声が、破壊神だ・・・。

「創造神。あれは・・・どういう事だ？」

「簡単に説明するなら、ベロ・ランザの体が破壊神というウイルス体に乗っ取られたってことだ」

「乗っ取る？ ウイルスが、人の体を？」

「ああ、そうだ。・・・、そして、見ろ」

創造神が指差した先では、時神もまた顔をあげていた。・・・しかし、その顔に生氣はなく。ただぼーっと突っ立っていた。

俺がその時神の姿を見つめ、呆然とする中、破壊神とハザードの会話は進行していた。ベロ・ランザの体の破壊神は、ハザードに訊く

「お前、さっきの爆発で傷を負わなかったの力？」

「・・・生憎、我が輩は吸血鬼だ。爆発の瞬間、体をコウモリ化させ難を逃れた・・・」

「ヘエー、マジでカ。そんな裏技テクニクがあるとはナー」

破壊神は感心している様子で言う。・・・あの外見であの話方だとすごく違和感があるんだが、そんなことを今突っ込むわけにもいかない。・・・それよりもだ。

「創造神。いい加減話してもらうぞ。あの『破壊神』について、洗いざらい全部」

「・・・ああ、いいだろう」

創造神は、以外にも迷いなくすんなり話す様子を見せた。そして話される、破壊神の真実・・・。

C

創造神は、一気に破壊神について語り始めた。

「『破壊神』は、俺が作った生命体破壊用ウイルスだ。・・・創造の前の破壊のためのシステムとも言え換えてもいい」

「・・・破壊神は、俺が作った世界で何らかのミス・・・例えば、自己再生できないレベルの戦争がおこったり、他の世界を侵略したり・・・、そう言ったことが起こってしまった世界をリセットさせるために創ったものだ・・・少し、昔話になる」

「俺は世界を創ることが出来る。だがしかし・・・1から作るよりも、失敗したものを創りなおす方が簡単に早く済む。産まれてから

どれだけか経った俺は、そう考えて、失敗した世界のリサイクルに乗り出した」

「しかし、ある時。・・・失敗した世界の住人が思いのほか強い世界があった・・・。その世界はある強大な戦争があった世界で、その結果、今までにも見たことのない程の力を持っていた。・・・世界を創りかえるには、その世界の住人の抵抗があってはできない・・・。だから、俺はあの手この手で試行錯誤した。他の世界ト戦わせてみたりとかな・・・。しかし、その世界の住人は強かった。俺は止む無く、超巨大な悪魔を創り上げ、その世界に送りこんだ。結果、その世界の住人は、その悪魔の手によって滅亡した」

「この悪魔さえいれば、他の世界でも創りなおしがうまく進むと思っていた。しかし・・・。また強く失敗した世界が出来てしまった。・・・その世界の勇者とか言う者によって、悪魔は倒された。仕方がないので俺は、今度は超巨大な戦闘機械を創った。そしてその世界の住人は滅亡した」

「それから、そんな感じでいちごっこだった。機械が破壊されれば合成獣、それが殺されれば今度は天使、狂蟲、偽神・・・。キリがなかった。そんな時だった・・・。『破壊神』を創ることを思いついたのは」

「コンセプトは『その世界の住人の手によって、その世界の住人を滅亡させる』。・・・悲しくも、これが一番効率のいい手段だった。人間界が世界を焼くほどの威力を持つ核兵器を持っているのと同じで、どの世界も、自らの世界を滅ぼす力を持っていたしまったからな。『破壊神』計画は成功した」

「『破壊神』は傷口から感染する。『破壊神』を宿したヤツの血液や体の一部が傷口に直接接触すれば観戦するようになっていく。そして『破壊神』の注目すべき点は、一体のマザー体と超多数のその他で成り立っているってことだ」

「マザー体は意識を持ち、意識を持たぬ他の破壊神への細かな指揮をする役割を持っている。また、マザー体には他の破壊神よりも増

殖しやすい・・・つまり相手を感染能させるが高い特徴がある。そして、そのマザー体が今ベロ・ランザの体に乗っ取っているアイツだ」

そこで、創造神はベロランザの体を持った破壊神を指差した。創造神の話がひと段落ついたのを感じ、俺は訊いた。

「・・・つまり、あいつを倒せばいいのか？」

「そう言うわけにもいかない・・・。破壊神のマザー体が破壊された場合、その意識と役割はその他の破壊神に引き継がれる。破壊神たちはそれぞれがつながっているため、マザー体が存在しなくなったのを感じて、新たなマザー体を生み出すわけだ。つまり、マザー体をどれだけ倒そうとも、すべて破壊神を滅ぼさない限りは、マザー体はどこかで生まれ、同時に破壊神も増殖し続けるというわけだ」
「・・・俺はそれを聞いて押し黙る。・・・待てよ、それってどうすればいいんだ？」

俺に続いて、古王も訊く。

「ちょっと待てよ。確か、亜宙の向こうには破壊神の『本体』って言われ続けたものがあるだろう？ あれはいいたい・・・」

「あれは破壊神が滅ぼしてきた世界の残骸の集まりだ。破壊神はそこを、奪い取った体の保管庫にしている」

納得が言ったように、古王は黙ってうなずく。・・・そして、創造神は悲痛な叫びをあげる。

「・・・破壊神は、失敗した世界をやり直すために作られた存在で、俺もそのように作ったはずだ・・・なのに、なのに！ なぜか暴走した！ 原因不明で、片っ端から世界を滅ぼすように動くようになった！」

「おいおい・・・、創造神。お前が俺を創ったのは世界を壊させるためなんだろう？ それで俺は世界を壊しているだけだヨ」

「黙れ！・・・そもそもおまえに自我は与えたが、そんな邪悪な心を与えたつもりはない！ それに、正常だったところのお前たちには『神』なんて称号は付いてなかったはずだ！・・・やはり、お

前をいじったのは、『神の称号を与える者』か！」

・・・『神の称号を与える者』？ 疑問に思ったが、今の状況では、誰もその疑問に答えはくれなさそうだ。

「ククク・・・さあネ。だが今の俺ハ、ただ気ままに世界を破壊し続ける『破壊神』ダ。お前の道具なんかじゃない。・・・さテ、長話が過ぎたナ。どうせお前は俺を止めようとするんだロ？ 創造神」

「止める程度じゃない・・・お前を倒す」

「アーハッハッハッハ、寝言は寝て言えヨ、創造神！ お前の力じやもう俺を倒すことなんて不可能なんだヨ！ ま、俺も創造主であるお前にウィルスを感染させることは不可能なんだがナ。代わりに・・・お前のお仲間に感染させてやるヨ」

そう言った破壊神は。跳躍の後、ものすごい勢いで、俺たちの元へとつつこんできた。

「チッ」

古王の舌うちの後、ふわっ、と俺の体が浮いた。見れば、俺とノフィーネは、古王の別々の腕に抱えられていた。古王は、破壊神の攻撃を避けるために大きくバックステップし創造神に訊く。

「で、どうすんだ創造神！ 俺はどうすればいい！」

「そのまま、二人を連れて人間界へ戻れ！ 後のことは頼んだ！」
言われた古王は、いぶかしげにさらに訊く。

「・・・ちょっと待て、その返答だとお前は？」

「俺は・・・ここで破壊神をくいとめる」

「神様!？」

ノフィーネが叫ぶ。創造神はベロ・ランザの体の破壊神に掴みかかり、動きを封じていた。・・・創造神、お前・・・。

「・・・さっきまで迷ってたんだ・・・だが決めた、俺はお前らに賭ける。・・・だから今は逃げてくれ！」

「・・・分かった。また会おう創造神」

「分かったじゃねえよ！ 古王！ 創造神が・・・」

俺は古王に対して必死に叫ぶが、

「・・・どの道、この場じゃ誰か犠牲にならないと助からない。だが、後のことに對し、お前らに希望を見たからこそ、あいつは自らを犠牲にすることを選んだんだ・・・察しろ」

そう告げ、走り出す古王。俺は古王にそう言われ、何か言い返そうとしたが、何も言い返せなかった。

一方、その腕にしっかりつかまれたノフィーネは、必死にもがくが、その腕から抜けることはかなわない。

「神様！ 神様っ！」

ただただ、創造神に呼びかかるノフィーネ。それを聞いた創造神は、ニコリ、と小さく笑った。

「チッ、離セ、創造神・・・。クソッ、だったらそっちの奴！」

破壊神が呼びかけた先、その先には時神が。

時神は、急に命を与えられたかのように動き出し、すごい勢いでこちらに迫ってくる。

「・・・すまん、時神」

古王はそう呟き、迫ってきた時神をかわし、蹴り飛ばす。そして、古王はまた走る。

「・・・時神」

俺もまた、そう呟いてしまった。・・・あいつと過ごした時間はそう長くなかったが、それでも・・・な。やっぱ、悲しいんだよね・・・これ。・・・時神。

『久郎様・・・。っ・・・』

メイナはあえて何も言わず、脳の奥に引っこんでいった。

古王に抱えられ、だんだん小さくなっていく、創造神や時神の姿。

「神様ア！ 神様っ！」

ノフィーネはまた必死に叫び続けている。そして、俺はただ・・・黙って、現実から目をそむけりように・・・目を閉じた。

Cの28話「動き出す世界」

久郎たち小世界から逃走し、それから二日が経った今日。12月31日、大晦日。

破壊神が来訪した、という情報は、既に裏世界のありとあらゆる結社、団体、組織に広まっていた。

そして、裏世界の住人それぞれがその事実には翻弄される中、とある国の地下施設にてあらかじめ設置されていた破壊神対策委員会にて、緊急会議が行われていた。

その地下施設にある会議場の中心に置かれた丸いテーブルを囲み、各国の要人が席についていた。

それぞれの国の要人たちは皆、重い顔をしている。

「ついに来たか・・・」

いくつもの深いしわのある強面の男が、机の上に腕を組み、心底困ったような声で呟く。なにせ、対策委員会といっても、まともな対策が立てられていないのが現状なのだから、困った声を上げるのももつともだ。

さらに、細い体の眼鏡をかけた男が言う。

「しかし・・・、この報告書にある事は事実なんでしょうか？ 要約すると、『破壊神はウイルスである。そのウイルスに感染したものは、破壊神の意志によって操られる』・・・とても真に受けられる話ではありませんが・・・」

「間違いありませんよ」

そう発言したのは、この会議において場違いだと思えるほど若い青年。だが、青年に見えるのは外見だけ、その正体は老化を知らない『王』の一人、防王。王界の人間界に対する外交員である。

防王は、さらに続ける。

「その報告は、古王からの報告だったと、和王から聞いています。聞くところによると、実際にその目で見他のに加え、万物の創造主

たる創造神に話を聞いたのだとか」

「創造神だと！？ そんなやつ信じられるものか！」

声を荒げたのはこの会議の中で最高齢、老骨に鞭打つような体であるにも関わらず、目力は人一倍強い老人だ。

「我々が創造神にコンタクトをとろうとしても、奴は完全無視だ！ 奴が今までに我々に何かをもたらしただけがあつたか！？」

「たしかに・・・我々『王界』としても、創造神とのコンタクトはほとんど失敗していますが・・・。しかし、古王は例外で・・・」

防王はにこやかに、取り繕うが、老人はさら荒い声を荒げる。

「そして、儂に言わせれば、貴様ら『王』も信用ならん！！」

「ご老体！？」

「な、なにを・・・！？」

会議に出席している人たちの間に動揺が走る。

「・・・ほう、我々が信用ならないと。我々は人間界の防衛に、一役買ってるつもりでしたが・・・」

「ふん、それにしても、我々人間に対しては都合のいい時にしか情報を与えんではないか！ そもそも、破壊神が居るという情報でさえ、信用なるかどうか・・・、結局『王』は、人間界を王界の代わりに乗っ取りたいために、ここまで人間に干渉しているのではないのかね」

「ろ、老体！」

「いい加減にしてくださいだきたい・・・！」

会議に出席している、他の要人たちから、焦ったような怒声が飛ぶ。

実際、老人と同じことを思っている人間がいないわけではない。むしろ、この会議に出席しているほぼ全員が老人と同じことを思っている、と言っても過言ではない。

だが相手は『王』。人間よりもはるかに上位種の『王』なのだ。もし防王が怒り、この場に居る全員を殺そうとすれば、それは一瞬で済んでしまう事。

・・・まあ、外交員たる防王がそんなことはするはずないのだが。要人たちはそんなことが起こるはずはないと理性で理解していながらも、本能の恐怖から防王に対して慎重になっているのだ。

だが当然防王は怒るかとなくにこやかに言う。

「いえ、いいんですよ。あなたたちは人間界の利益を考えて行動すべき人間・・・異世界の存在である『王』に対して不信感を抱くことは、最早義務と言ってもいい。・・・ですが、『そもそも破壊神がいない』のでは、この会議の存在する意味がないのではないですか？」

防王の揚足を取ったような物言いに、議会に緊張が走るが、

「・・・ふん、物のたとえだ。・・・いいだろう、ひとまずはお前らの言うことを信じて話を進めてやる」

特に反論もなく、老人は洩々防王の話を信じることにしたらしい。対する防王はやはりにこやかに、

「ありがとうございます。それでは、話を進めましょう」

それを聞いて、二人の間に何も起こらなかったことにホッと胸をなでおろす要人たち。

そして議題は文字通り・・・『破壊神』への対策についてに移される。

「・・・まだ人間界に訪れてはいないと言え・・・、どこに訪れるかによっても対抗手段が変わるな・・・」

「破壊神が感染症のようなものと仮説するなら、孤島などが望ましいですが・・・そうも都合よくはいかないでしょう」

「そもそも、今破壊神は、あのベロ・ランザ卿の体を得ていると言うではないか！ それではどこに訪れようともすぐに都市部に移動されてしまうのではないか！？」

「ふむ・・・情報が少なすぎるのも問題だが・・・、地球上のウイルスに対する対抗手段で問題ないのか？」

会議が紛糾する中、防王が発言する。

「いえ、破壊神はウイルス自体が魔力を有しています。消毒および

免疫といったものは全く意味をなさないと考えていただきたい・・・ただ、魔力を有しようとウイルスであることに変わりはない。おそらく、生物の中以外では、短時間しか生きられないでしょう」

「それは・・・我々人類全員に死ねと言っているのか？」

・・・再び老人が口をはさみ、要人たちの間に戦慄が走るが、

「いえ、ただ。感染者を隔離しておき、感染源を完全にシャットアウトするのが有効かと、提案したまです」

「そうか・・・ならば、各国にて防壁やシェルターの起動準備をせねばなるまい」

温和なムードに、再び胸をなでおろす要人たち。そして議題は、最悪のケースについて移る。

「さて・・・最悪のケースと言うのは、ある程度感染者が出てしまったときだ、一都市・・・一地区・・・一国。最悪でも、そこまででなければ対処しきれまい」

「核を使うのも視野に入れねばならないか？　しかし・・・その汚れ仕事を引き受けたがる国があるかどうか・・・」

「さすがに、一国が消えればメディア統制ではどうにもならん。たとえ、どんな手段を用いたとしても、どこかの国に罪を被ってもらわねばならんだろう。流石に、一組織のせい、と言うには苦しすぎる」

「一都市程度なら、架空組織のせいにや天災のせいにできますけどね・・・」

と、話は事後処理についてばかり話され、起きた時どうするかについて、中々話が進まない。

また防王がそれについて話を振ろうかと口を開けたが、
ダンッ！

「・・・・・・・・」

防王の口が言葉を発する前に、机を思いつき叩く音が会議場に響き、静まる要人たち。皆の視線がその音を出した者の方を向く。その音を出した張本人、スーツを着込んでいるにもかかわらず、

この場に不似合いなウエスタンハットをかぶっている男の渋い声が会議場に響いた。

「今の議題は、どう破壊神に対処するかってんだろう。誰に責任を押し付けるかじゃねえぜ」

「・・・ふん、どこの国の者でもない貴様に何が分かる」

「ああ、分かるぜ。もし今の瞬間にでも破壊神が降ってきたら、俺たちみんな国なんて関係なしに、まともに抵抗できぬまま滅びるってことはな」

・・・会議場は一層静まる。それは何も、その男が正論を言ったからではない。他に有無を言わせない鋭い眼光が、皆を黙らせたからだ。

この会議の場で、一人ぶっきらぼうな口調で話すその男は、人間でありながら唯一、どこの国の要人ではなかった。

その男の正体は、世界規模に活動する対魔機関『バスター』の創設者であり総帥。その名は秘匿されており、誰も名前を知らない。

「さって・・・、この問題は俺の領分だろう。俺が発言させてもらってもいいか？」

バスター総帥が話を振ったのは防王。防王はただ黙って手で話の続きを促す。

「どうも・・・さて、まずは敵の戦力についてだ。単純に考えて、破壊神の信者たち約千人ほどと、ベロランザの保有する悪魔数千匹ってところだろう。さらにウイルスってのが本当の話なら、それらすべてにウイルスを感染させているのは間違いないだろう。そうなれば、こちらの戦力がそがれるたびにあっちの戦力が増えていくからくりだ。下手すれば万単位の軍団と戦う羽目になる」

「・・・そんなもの、本当に倒せるのか」

要人の一人が、青ざめた顔で言うが、バスター総帥はもう一度、机をぶったたき力強く言う。

「無論だ。破壊神がすべてを連れて攻めてくるとしても、感染のためにか所に信者を集めたはずだ。ならば、開けたルートで攻めて

くるとして入口は一つ。その入り口付近を隔離してしまえば、他へ感染することはない。それはさっき防王が言ったことだったかな？」

バスター総帥は防王に話を振る。防王は笑みを浮かべて答える。

「ええ、その通りです。障壁や防壁に転移魔法を防げる結界を張れば、まず完全に破壊神は封じ込めます」

「だが、封じ込めた後どうするのだ？ いずれ防壁を破られるのは時間の問題だろう」

要人の一人が指摘する。その指摘に対しバスター総帥は、まさにそこよ、とその要人を指をさし、具体的なプランを話す。

「ならば防壁を破られる前に、破壊神どもを死滅させてしまえばいい。それこそ、先ほど言っていた核兵器でも使えば、一瞬で肩が付く」

「バカな！ 君は先の話聞いていたのかね？ 核兵器など、どこかの国が使いたがると言うのかね」

「そんなこと、俺の知ったことではないし、何も核兵器でなくてもいい。どこぞの国が開発している衛星兵器のレーザービームでも同程度の効果が得られるだろうし、どこぞの国の魔術結社で開発している新兵器を使ってもいい。なんだったら単純に、多人数による合成魔術で焼き払っても問題はない」

そのバスター総帥の言葉に、いくつかの国の要人は冷や汗を流しながら聞いていたが、防王はその提案に指摘する。

「しかし、バスターの総帥殿。今あなたが上げられた手段のどれを試行するにも、準備に小一時間は消費します。それまでに、果たして防壁が持つでしょうか？」

「ふっ、それならば問題はない。バスターからも何百といった魔術師を派遣し防壁の強化をする。さらに防壁の内側から敵の動きを喰いとめることも考えている」

悠然と語った総帥に、要人の一人が言う。

「・・・しかしそれは、中に入った戦闘要員の見捨てると言うことですか？」

・・・議会在しんと静まる。そもそも、隔離するという発想自体、その場に居る人間を見捨てる非人道的な考えだったが、総帥の言っていることはそれに輪をかけて非人道的な話だった。

世界平和のために戦う者たちが、味方の兵器によってその命を散らすのだから。

だが、総帥は言い放つ。

「それくらいの犠牲を惜しんでいて、破壊神に勝てると思うのか？
・・・まあ、完全に見捨てはしない。地面に設置されているシェルトーに隠れさせることも考えているし、直前に脱出させることも検討している。だがな・・・たとえば味方であろうと、被害を抑えるためにはその命を散らせるのも、やむをえないことだ・・・。後のことや詳しくは資料にまとめてある、後はそれを見て判断すればいい」

・・・総帥が話すのを止め。再び会議場は静まる。そんな中、防王だけはほほえみを絶やさず言う。

「では、バスター総帥の計画に、意義のない人は挙手してください」
その防王の呼びかけに、動かない者は一人もいなかった。・・・いや、一人、総帥だけは挙手しなかったが。

そして、この提案は全会一致と言う事で可決され、計画は実行に移された。

C

・・・あれから、二日が経った。俺は今、別荘の中の居間のソファーに寝て、ノフィーネにマッサージを受けている。

『身体強化』によってボロボロになった体だが、俺が二日前に目を閉じた後、古王が魔術的な何かで治療してくれたらしい。だが、治療したばかりの体は少し麻痺しており、その麻痺を解くために、今こうやってマッサージを受けているというわけだ。

「・・・んっしょ・・・んっしょ・・・」

ノフィーネは今、俺の足をマッサージしてくれている。・・・二日前、創造神と別れたこと。俺は半日後、メイナとも話したりして何とか立ち直ることが出来たが、ノフィーネは精神不安をおこし、公園に居た時の様子に戻っていた。

俺やメイナと話し、なんとか昨日、立ち直ってくれたようなそぶりは見せてくれたが、実際は、またいつ精神不安をおこしてもおかしくはない。今も、こうやって俺のマッサージをして気を紛らわしているのかもしれない。

そんな時、急に足の方から冷たい風が入ってきた。おそらく、ドアが空いたんだろう、ということとは・・・。

「ただいま・・・お、マッサージ中か」

やはり古王だった。どこに出かける用事があったのかは知らないが、今朝からどこかへ出かけていた。ちなみに今は午前十時。

「どうだ？ 体の動きは良くなったか？」

古王は俺のそばに近づいてきて言った。

「ああ、多分大体元通りに動くと思うが・・・とりあえず、動かしてみるか」

ノフィーネに少しどいてもらい。俺はソファーに普通に座り、地に足を付ける。その後たって、歩き、それができたので今度は走ってみる。

・・・大丈夫そうだ。

「問題はないみたいだ。ありがとうなノフィーネ、マッサージしてくれて」

「ううん、そんな大したことじゃないよ。あの時助けてくれたお礼も兼ねてるし」

「ん：まあでも、もう一回言わせてくれ。ありがとな、ノフィーネ」
何となくもう一度ノフィーネに礼を言う、ノフィーネは照れ隠しのように、クスツと笑った。

よかった、ノフィーネが笑ってくれて・・・。

「おい、久郎くん、君を治療したのは俺なんだけど、俺対す

る感謝はー？」

「・・・生理的に無理」

「ひどっ!?! 感謝って生理的な問題だったか!?!」

確かに古王にも感謝は言わなきゃならないんだろうが、何となく気に食わないので言わないことにする。

と、古王は急に真面目な顔（ただし、やはり顔は半笑い顔だが）になって言う。

「・・・久郎の傷も癒えたことだし。とりあえず、今の状況でも整理しておくか」

そう言って、古王は向かい側のソファーに座る。それを合図に、メイナも実体化し、各々四方に置いてある椅子やソファーに座った。さて、と古王が切りだす。

「まず朗報から。創造神は生きてたぞ」

『「「本当!?!」」』

俺を含め、三人の声がかぶる。まあ、俺は「本当か」って言ったつもりだったが、誰かの声に「か」を打ち消されてしまったらしい。・・・と、それはともかく。

「ああ、本当だ。この目で見えてきたからな」

・・・この目で見えてきた?

「・・・ちよつと待て、それってどういう事だ?」

「ん? ああ、つまり、『潜入』してきたってことさ。とある小世界で行われていた信者たちの集会に」

・・・よくはわからないが、

「・・・そんなところに気づかれずに潜入できるものなのか?」

「なあに、・・・ウッドチップから作られた軽量の箱さえあれば、やってのけられないことはないのさ・・・」

「・・・いや、マジでそれで潜入したのか? そんなネタな方法で?」

「む? 何か勘違いしているようだが、別にウッドチップ（中略）な箱に隠れながら行ったわけじゃないぞ。ウッド（中略）箱を持っ

て『こんちゃー、宅急・・・じゃなくて宅配便でーす』って言うってきただけだ」

「いや、それも充分ネタだから・・・。しかも一応、登録商標は気にしてんのな・・・」

「それでな、」

「いや続けるのか!？ 冗談でしたー、とか、本当は・・・とかは無しか!？」

「・・・いやだって、マジでその方法で潜入したし・・・」

マジか!？ どんだけ警戒甘いんだよ集会! てか、冷静に考えれば集会場に宅配便が届くなんておかしいと思うだろう普通!

「きっと、熱気でフィーバーしてて、気に成らなかったんだと思うぜ。俺も実際、そのまま入り込めるとは思ってもみなかったし・・・おかげで、その隙に和王が裏から潜入する必要がなくなっちゃった・・・」

あ、2way作戦だったのか、一応。・・・しかしまあなんにせよ、無事だったからよかったと言うべきなのかここは。

「さて、話を戻して、・・・それでな、創造神は殺されずに縛られて、ベロ・ランザ卿・・・の体の破壊神の横に座らせられていた。どうやら破壊神に創造神を殺すつもりはないらしい」

「良かった・・・神様、無事で・・・」

ノフィーネは、ほんと胸をなでおろした。その目には若干涙がにじんでいる。・・・俺としても、その報告を始めに入れてくれたことには、古王に感謝をしなければならぬ。これで、ノフィーネの心も少しは軽くなるだろう。

さて、古王によると、

「おそらくだが・・・破壊神が強い破壊衝動を持っているとして、創造神を殺してしまうといずれ破壊が出来なくなると、破壊神が理解しているからではないかと思うぜ。もしくは、破壊神の本能に創造神を殺してはいけないうたがあるとかいう可能性もある。暴走しているとはいえ、製作者は創造神だからな」

・・・と、言う事らしい。まあ、何にせよ無事でよかったよかった、と言う事なんだが。喜んでばかりもいられない。

「・・・でだ、破壊神はその集会の中で早速ウイルスを感染させ始めてたぜ。儀式かなんかにこじつけて信者たちに軽い傷をつけさせて、そこからウイルスを感染させていたみたいだ。あの分だともう全員感染しているだろうな。次の人間界へのルートが開ける頃にも攻めてきそうだ」

「攻めてくる、ね・・・。なんというか・・・やっぱりあんなロケットに乗って来たりはしないんだよな」

「そりゃそうだろう。ベロ・ランザ卿の肉体だって持ってるんだし、何かしら魔術的手段でバリアでも張りながら来るだろうな」

ま、そうだろうな・・・、ホント、何で俺たちはあんなこっ恥ずかしいロケットに乗って行っただろう・・・。

「？ ロケットって・・・なんのこと？」

「え、いや・・・別に、特に関係のあることじゃないから・・・」
ノフィーネが不思議そうに聞いてきたが、やんわりごまかしておく。・・・そう言えばノフィーネはあのロケットを見てないんだったな。確か古王に訊いたら、帰りはバリアを張りながら飛んで帰ってきたって言ってたし。

そんな時、古王がコホン、と咳払い。

「あー・・・話がずれたから元に戻すが、次にルートが開くころってのが、明日・・・一月一日なんだよ、都合の悪いことに」

正月か・・・でも、何でそれが都合悪いんだ？

その問いにはメイナが答えた。

『久郎様、新年を迎えるときに、街中でカウントダウンをする光景をテレビで見たことはありませんか？ もしもあんなところに破壊神が来てしまったら・・・』

・・・なるほど、犠牲者が多くなるってことか。加えて、敵の戦力が増える・・・と。

・・・そういや、破壊神と戦うってことは、時神や罪のない人た

ちとも戦うってことなんだよな……。『戦う』とは簡単に言っても、実際にやるのは『殺し合い』……。

俺が人を殺す、なんてことに……。なってしまうのだろうか。

そんな風に俺が暗い気分を下を向いていると、

「ん？　なははっ！　心配すんなよ、俺がついてるからには、戦いは俺に任せてくれた方がいい。それに……。破壊神に対抗できる手段だって見つかっているしな」

元気づけるように古王が言う。……。本当に陽気な奴だと思ったが、俺はその言葉の中にあつたワードが気になって顔を上げる。

「……。破壊神に対抗できる手段？」

「ああ、これだよこれ……。えーっと……」

そう言いながら、古王は後ろの方に置いてあつた白くて大きな袋の中身をあさる。俺とノフィーネは、そんな古王のに注目するが、……。ところでそんな袋、いつの間に持ち込んだんだ？

「んー？　昨日ぐらいだが？　つっても、この袋は何日か前に道に落ちてたのを拾ったもので、俺のじゃないんだけどな。手ごろだったから使わせてもらってる」

……。おいおい、拾得物は交番に届けろよ……。というか、その袋、名札付いてるぞ。

ノフィーネもその名札の存在に気づいたらしく、忙しくて名札にかまってられなさそうな古王の代わりに近づいて読む。……。というか、古王、その袋の中には某ネコ型ロボットのポケット並に色々詰め込まれてんのか？　目的のものを探し出すのに外に出すモノの量が半端なさすぎるぞ……。

「そう言われても……。こんなに詰め込んだの俺じゃないし……。とか、古王が中をあさりながら言い訳をしている間にノフィーネハ名札に書かれた名前を読む。」

「えーと……。サンタ……。クロス？」

……。その瞬間、場が凍りついた。……。まさか……。さっきから外に出されていた大量な何かって……。

ノフィーネがその中のいくつかを拾って見る。

「あ、これ最新のゲームだよ。これはサッカーボールだし、これは冷えて固まったピザみたい」

・・・おい、古王。これって・・・、

「あー・・・そういやこの袋の近くに鹿がうろついてたけど・・・あれってトナカイだったのか・・・納得」

「納得・・・じゃねえよ！　なに、子供に希望を与えるサンタ・クロースの袋盗んできてんだ！」

「いや、盗んではない！　ただあそこに置いてあったから拾っただけだ！　それに、トナカイはいたけどソリはなかったし、多分サンタさんは事故ったんだろう、うん。電線か何かに引っ掛かって」

・・・だからって、袋を持ってきていい理由にはならんだろう。・・・というか、いまさらだけど、サンタっていたんだ・・・。てか、きつと今頃サンタクロース、無くした袋探してるんじゃないか？

「・・・後で落ちてたところに戻してくるか・・・」

と、俺と古王が話している間にも、ノフィーネは袋の中身を次々に出していた。

「えーっと、これはお金かな？　夢がないな。最近の子供は。でもこれドル紙幣だから使えないよね・・・。で、これは・・・赤ちゃん？」

「おぎゃあ！」

ブッ！　思わず吹いた。何も口に含んでなかったのは幸いだったと思う。

「あー・・・多分、どこかの子供が『妹が出来ますように』・・・とか頼んだんだろうな、きつと・・・」

いや・・・、だからって本当に赤ちゃん持ってくんなよ・・・。それが原因で家族関係がこじれたらどうすんだ、『これ誰の子よ！』みたいな感じに。

「・・・えっと、土地の権利書に・・・お年玉に・・・」

まだ、漁るのか・・・。というか、お年玉ぐらいあと一週間もす

れば貰えるんだからクリスマスプレゼントに望むなよ・・・。

「・・・あ、これテレビでやってたゲームだ。たしか、ラ〇プラス」

「多分『彼女が欲しい』とか願ったんじゃないかね？」

「・・・赤ちゃんは実物なのに彼女はそれなんだ、サンタ・・・。

「えっとこれは・・・写真集？　・・・あ！　久郎君は見ちゃダメ！」

「しかもパッケージが既に破られている・・・」

クロス・・・読んだのか。

「それでこれは・・・手紙？　なにに『君が願った世界平和というのは、私にも叶えられない本当に難しいことだ。だが、あきらめてはいけない。君のような世界平和を願う若者がいれば、きっとつかは世界は平和になる。人類は、皆手を取り合って生きていけるようになる。だから君にはその願いを、ずっと持っていてほしいと思う。君が大人になっても、その願いを忘れず持つていてくれると思うなら、私も世界平和のために頑張って行こうと思う。先日、私は他のサンタクロスとともに、世界を平和にするために行動する組織を創ったんだ。それで、もしよかったらだが、この手紙に同封してあるバッジを君に受け取ってほしい。これは私たちが仲間であることの証だ。君がこのバッジを受け取ってくれると言うなら、私たちは今日から同士だ！　これから、世界平和のために頑張っていこう！』」

「・・・世界平和ってのは、一人ひとりが願わないと、叶わないものなんだよな・・・せつないぜ！」

「・・・あの、ツッコもうにツッコめない空気・・・。とりあえず、ガンバ！　俺も応援してるから。」

「えっと・・・エビだ。しかも生きてる」

「ブラックタイガーだな。食ったらうまい」

なぜにエビ。そしてなぜに生。朝起きて靴下の中に生きたままのエビが入ってるとか、完全に嫌がらせだろ。

「あ、七面鳥だ。しかも生きてる」

「・・・ローストチキン用か？」

だからなぜに生！？ その七面鳥を料理するのに子供の心が傷つくぞ！

「・・・？ バカには見えない服？」

「値札が付いてるな・・・」

・・・値札しか無いの間違いでは？ それは俗に詐欺と言います。

そんなこんなで小時間経過。

「それでこれは・・・巻物？ 何で巻物？」

「あ、それだ、俺の探してたの」

どうやら、ようやく古王の探し物は見つかったらしい。・・・どうも遊びすぎた感があるが、とりあえず出したものは全部袋に入れ、写真集は古王が懐に隠そうとしたのをノフィーネが没収し、赤ちゃんが泣きやまないのので、一緒に袋に入ってたコウノトリに預けておいた。・・・誰なんだろうな、クリスマスに『コウノトリが欲しい』って願った奴。・・・まあそれはともかく。

その巻物・・・どっかで見たことあるんだよな・・・えーっと、あれは確か・・・骨董商の・・・あ。

「それってもしかして、あの時に買ったやつか？」

「正解！ いやー、まさかあんなところにあるとは思わなかったぜ」指をビツと立て、嬉しそうに笑う古王。・・・やっぱり、あのシヨップینگモールの骨董商で買った巻物だったのか。

「で、その巻物に、何が書いてあるんだ？」

「おう、よくぞ聞いてくれました！ 早速見てくれ」

と、テーブルの上に巻物を広げた古王。だが・・・全く読めない。そもそも、昔の人の字ってクネクネっとしていて全然読めないんだが・・・。

それは、欧米出身者のノフィーネも同じらしく、早速古王に訊いていた。

「・・・これ、何が書いてあるんですか？」

「よくぞ聞いてくれました！・・・って、この反応二回目だな・・・ま、いっか。それでこの巻物だが、とある人物が書き残した物で、封印術について書かれている」

とある人物・・・阿部晴明とかか？

「いや、藤草効煽が書き残したものだ」

「・・・って、それってうちの先祖の・・・」

『残知回想』で見た・・・。

「そう！ お前のご先祖さんが書き残したものだ。内容は効煽が独自に開発した『生きた封印陣』について。ところどころ暗号化されていたり、マジで読めない字なんかがあったが、何とか解読に成功しましたとも。ええ、俺頑張った」

はいはい、分かったから。で、これが何で破壊神の対抗手段なんだ？

「・・・もう少しほめてもらってもいいと思うんだけどなあ：ブツブツ、ブツブツ・・・」

なんかすねやがった。面倒くさいな・・・ノフィーネ頼む。

俺はアイコンタクトでノフィーネに頼む。

ノフィーネハ俺の意図を理解したようで、古王に近づき頭をなでながら言う。

「古王さん。凄いですねー、えらかったですねー、さすが古王さんですねー」

・・・えらく適当だな。

「あっはっは、そうだろうそうだろう。俺ってすごい！ あっはっは！」

しかもそんなんでいいのか・・・。

『いえ、多分、誰に言われたかが重要なんだと思います。久郎様が今風に言っても、ミンチが出来上がるだけで、古王さんはまだいじけてたと思いますよ』

それもそうだな。・・・ミンチとかは置いといて、あいつも所詮は男の子と言ったところか。

さて話を戻そう。で、対抗手段ってのは？

「おお、それだが。効煽の封印陣は、妖魔を核にして発動されるもので、核に成った妖魔ごと封印することによって、封印の耐久力をあげているらしいんだ。封印対象と核に成る妖魔の力にもよるが・・大體、数千年単位で持つらしい」

「数千年・・それはすごいですね。あ、まさか時神様の封印も・・」

ノフィーネは自分で言っ、語尾を小さくする。・・・思い出してしまっただろうな、大丈夫か？

俺がそんな氣遣いをしている間にも、古王は話を続ける。

「ああ、おそらくは。といっても、あの封印陣・・核となるものの肉体は既に朽ちて、精神体がつなぎとめてる感じだったが・・ま、それはそれだ。とりあえず、それから分かるように、効煽の封印は今の時代の封印と比べても協力だっ、ことだ」

・・・少しは、ノフィーネのことを氣遣ってほしかったが・・、まあノフィーネも見たとこ大したことがなかつた用だか今は良しとして。

まさか、その封印で破壊神を封印する氣か？

「ザッツライト！ その通りだ！」

古王は手をピストル型にして俺を指差す。いちいちオーバーリアクションなのはどうかならんものか、と思いつつ。しかしだよ、「破壊神はあんな多数に感染してるんだぞ。それ全部を封印するなんて」

「おっと、全部封印するなんて俺は言っ、ないぞ。封印するのは・・破壊神のマザー体だ」

破壊神のマザー体・・・。ノフィーネが氣付いたように声を上げる。

「あ、マザー体は他の破壊神を指揮する唯一無二の存在だから・・・」

「そう！ マザー体を封印してしまえば、他の破壊神たちの動きは

鈍くなる・・・かもだ！」

いや推測なのに力入れて言われても・・・。

「それに、何かとうざいやつがいなくなる！」

それは同意だ。なるほど、それは充分封印をする価値があるな。

「そんなもってだ。この封印術を、今日中に久郎に覚えてもらいたいんだが・・・」

「え！ 俺？ なんで？」

いきなりの話に戸惑う俺。え、何がどうなってそう言う事に？

「古王。お前がやればいいんじゃないか？」

「うーん、そうしたいのは山々なんだが・・・封印術はあまり専門ではないし、それに封印術をしている間、他の誰かに守ってもらう必要性があるからな・・・久郎、お前守れるか？ 数千の軍隊から俺を」

間違はなく、見捨てて降伏するな。むしろ敵に古王を喜んで差しだそう。

「血も涙も無い奴め・・・。まあ、そんなわけだ。俺だったら封印陣をしく間、お前を守ってやれるし、お前は藤草効煽の子孫だからな。色々やりやすいかもしれんぜ」

・・・そう言われてもな。やったこともないものをどうしろと・・・。

「そこは『命断』の出番だろう。『命断』の力を使って、基本的な封印術を突かてみたり、あーだこーだしたり・・・とにかく頑張れ！」

んな、むちゃくちゃな・・・。

「巻物の翻訳は俺に任せろー」
バリバリ。

・・・何だこの効果音？ まあ、それはともかく、ひどい無茶ぶりだな・・・。俺にやれってか・・・。

「久郎君」

気がつけば、ノフィーネがこちらを見ていた。ノフィーネは言葉

を続ける。

「僕も何か手伝えることがあれば手伝うし・・・一緒にやってみようよ、駄目もとでさ。それに失敗してもまだ何か方法はあると思うし」

そうノフィーネは励ましてくれた。さらに古王も、

「そうだ。たとえ失敗しても、人間界だって世界規模で破壊神の対策を練っているって話だ。むしろそっちに任せる気持ちでやっても大丈夫だぜ」

なら今やろうとしている努力は何なのかという話になるが・・・ま、いっか。

「・・・ちゃんと、手伝えよ。二人とも」

『三人とも、です』

即座にメイナからふてくされたような声が聞こえる。俺は苦笑しながら訂正。

「あ、すまん。三人とも、だったな・・・じゃ、早速やるか・・・つつても、何をすればいいのやら」

意気込んで立ってみたものの、本気で何をすればいいかわからない。・・・こんなんで大丈夫だろうか、と不安にならなくもない。だが、まあ、気楽にやろうと決めたばかりだ。明日来るかもしれないからと言って、焦っても仕方ない。

とりあえず、ゆっくり、仲間たちと共に、努力していこうと決めた。

Cの28話「動き出す世界」(後書き)

サントさんをバカにする気など毛頭ないんですが、今回ネタにして
しまつてスミマセン。悪気はないです。

Cの29話「決戦は明日」

「・・・ふム、こいつはこんな性能カ・・・でもって、次ハ・・・」
そこは、かつての信者たちの集会場だったとある小世界。

今では破壊神の戦力置き場となっている大聖堂のような場所で、
ベロ・ランザ卿の体を得た破壊神が、既に感染させた信者の力を試
していた。

「ほうほう・・・、なかなか面白いナ・・・しかし、こうずっと
見てるだけだと肩が凝ってきたナ・・・。この体、ジジイすぎる
ぜ」

「おい、破壊神」
「ン？」

大聖堂の奥にある壇上の上に一人一人を呼んで力を見ていた破壊
神に、声がかけられた。無論、それは自らの意思を失った感染者た
ちには不可能な行為であり、それが可能なのはこの場でただ一人。
壇上の上にあった十字架に、縄で縛りつけられた創造神が破壊神
に声をかけていた。破壊神はそちらを向くのが億劫だと言うように、
感染者の力を見つつ返事をした。

「ここにいるお前の感染者は何人だ？」

「んなもン、いちいち数えてねえヨ。てか磔にされてて暇なら自分
で数えやがレ、こちとら大忙しなんだヨ」

確かに破壊神は大忙しだった。なにせ信者たちの数は千を超え、
それに加えてベロ・ランザ卿の配下であった魔物の数も数千体・・・
その全員の力を破壊神は見ているのだ。そいつらを有効的に使うた
めに。

まあ、もつとも、破壊神が主に力を見ているのは使えそうな奴だ
けで、見るからに弱そうな奴とか魔力が少なそうな奴は省かれてい
るのだが。

「そういえば、お前とまともに話すのは、初めてな気だな・・・」

なあ、破壊神。何でお前、変わってしまったんだ？　やはり『神の称号を与える者』か？」

創造神はしんみりとした様子で話しかける。その様子は、不良になってしまった息子を見る母の目にも似ているし、ただ単純に興味があつて聞くようにも見える。そんな創造神の問いに破壊神は変わらぬ調子で答える。

「そうダ。『神の称号を与える者』ガ、俺に意思と神の称号を与えタ。・・・でもナ、変わったんじゃない。俺は元からこうだったんだヨ」

「なわけあるか・・・。というか、お前の望みは何だ？　何でこんなことを続けている？」

その問いに、破壊神はにやりと笑い、愚問だとばかりに言い放つ。

「何デ？　決まっているだロ？　物を壊すのが俺の役割であり、壊すのが、大大大ッッ好きだからだヨ！　ひやはははははっハ！！

・・・おっと、笑っている場合じゃない。こんなんじゃない間に合ワ・・・ハッ！　お前まさカ、それを狙っていたの力！？」

驚き、破壊神は上を向く。対する創造神は困惑した顔で言う。

「いや、真面目な話だったガ・・・。成るほど、お前の気をそらせば時間が稼げるのか。捕まってもう出来ることはないと思っていたガ、まさかこんなことが出来るとは・・・」

「おい、もう話しかけるなヨ。俺を笑わせるようなこと言うなヨ。じゃねえと新年になった瞬間出てきて『ハッピーニューイヤー！』そして、ハッピー、エンドオブザワールド！！』って言う計画がだいなしニ・・・」

と、破壊神は言ったガ・・・。その後、破壊神が感染者たちの力を見終わるまでに、何度となく大聖堂に笑い声が響くことになるのは、言うまでも無い。

時は、午後四時くらい。ずっと部屋の中で結界だのバイオアムだのを、あーだこーだとやっていたが、

「ふーっ・・・、こんなもんでいいかな？」

「うん！ 凄いよ久郎君！ まさか本当にできるなんて」

ノフィーネも笑顔で称賛してくれている。

そうだ、五時間半の試行錯誤の結果、俺はなんとか効煽の残した結界術を使えるようになった・・・！ うん、頑張った・・・、頑張ったぞ俺。あんな短時間で・・・、

『といっても、『刹那の延長』をたびたび使って考えていましたから、実質あとプラス数時間かかってますけどね』

・・・いいじゃん、それぐらい。それ足しても短時間って言えるぞ、きつと。

ちなみに力を使いすぎてか、メイナはちょっと前から情報状態に戻って、俺の脳内に居る。・・・、ま、こいつも頑張ったよな。全てが終わった後で、褒めてやってもいいだろう。

とその時、部屋のドアが外側から開かれた。

ガチャ！

「ふー、さぶさぶ・・・。袋戻してきたぞ・・・」

「あ、古王さん、おかえりなさい」

案の定、古王だった。古王には効煽の巻物を一通り訳したものをメモ帳に移してもらった後、サンタの袋を元の所に戻させてたからな。・・・ちゃんと、戻してきたんだろうな。

「もちのろんだぜ。きっかり同じ位置に同じ方向で置いた。帰る途中の電柱に『トナカイ探してます、○○動物園』って張り紙があったが、あれってサンタさんなりのカモフラージュなのか？」

サンタ・・・ガンバ。

「・・・って、お？ その封印陣は・・・」

そう言って、古王は俺の手元の紙に描かれた封印陣に気づき、それを見ようと近づいてくる。・・・そう、それこそが俺の努力の結晶。核になる魔物がいないからまだ動かないが、それでも魔力を通

してみてちゃんと動くことを確認した完成品だ。古王は手に持ってそれを見回すと、にやりと笑い、

「おお、できたのか！ いやゝまさかホントにやってのけるとは・・・ 凄いや久郎！」

感嘆の言葉を俺に述べた。いやー、こいつに言われても全然っ、嬉しくねえ。ノフィーネに言われた時は凄く嬉しかったが、もうこれは俺の中の古王に対するお決まりな反応になっているな。

・・・とまあ、そんなことよりも、

「でも、問題はこれの中核にする魔物なんだよな・・・」

俺はそう呟き、顎に手を当てる。

まあ、この封印陣を光る線で空間中に描きだすことはマスターしたし、正確さにも問題はない。だが、中核になる魔物だけは・・・俺には用意できなさそうだった。

中核の魔物の条件は、強く生命力があること、敵ではないこと、そして召喚した魔物ではないことだ。

一つ目の理由は言うまでも無く、封印陣の強度に関わってくるからだ。スライムなんかを中核にしても、すぐに壊れてしまう。そして二つ目の理由は、やはり敵対行動を取ろうとする魔物っは暴れるため、必然的に生命力が弱まっていつてしまうから。

そして三つ目の理由。俺は何回か聞いて納得したんだが、召喚魔術というのは、魔物を召喚する場合、魔物との契約をしなければならぬのだそう。そしてその契約の中には、必ずと言っていいほど『依頼主から自らへ危害を加えることを禁ず』という一文が含まれるのだそう。・・・まあ、召喚される側だって生きてるんだし、当然な権利なんだろうと思う。

ちなみに『残知回想』で見た効煽の召喚は、正確に言えば転移魔術によって妖魔を呼び出しているだけなので、召喚魔術ではないらしい。だから味方の妖魔を巻き込んで封印しても問題はなかったらしい。

それと、効煽が中核にしていた魔物も同じような妖魔らしく、効

煽に従う妖魔だったため、暴れないまま封印の核化を済ませられたというわけだ。

「うーむ、今からじゃあドラゴンなんかも用意できそうにないし・・・現地調達するしかないかもな。多少弱っても、使わざるを得ないかもしれないぜ・・・あ、ノフィーネお茶ある？ あったかいの」
向かい側のソファーに座って考えていた古王だったが、急にノフィーネにお茶を所望した。

「え？ あ、はい。すぐに持っていきます」
すぐに台所へ向かおうとするノフィーネの背中に、さらに古王は言う。

「あ、それと、そろそろ夕飯の用意したほうがいいじゃないか？
・・・決戦前最後の晚餐だからな、豪勢な感じで頼みたいぜ」
最後の晚餐・・・、そういやノフィーネとあんな出会いをする前に、そんなことを考えてたな・・・。

「あ、そうですね。それじゃあ仕度します。とりあえず、お茶持ってきますね」

そう言って、パタパタと急いで行くノフィーネ。
そして残った俺と古王。だが、また古王が言う。

「そうだ。メイナもノフィーネを手伝ったらどうだ？ 豪勢にするんだったら手が必要だろうし」

『え？ あ、それもそうですね。なら・・・』
少しして実体化したメイナ。・・・ふむ。

「あ、お茶持ってきましたよー」

と、その時。ノフィーネがお茶を持って現れた。その手のお盆の上には茶碗が三つ。どうやら俺たちの分も入れてくれたらしい。ホント、気がきくなノフィーネは。俺は礼を言って、ノフィーネからお茶を受け取る。古王もノフィーネからお茶を受け取り、言う。

「おう、ありがとノフィーネ。あ、それと、メイナも手伝うてさ。手は多い方がいいだろ？」

「え、本当？ メイナちゃんいいの？」

ノフィーネは驚いてメイナの方を見る。その顔は少し嬉しそうな表情に見える。

「はい、是非手伝いたいです」

メイナは結構乗り気らしい。・・・あいつ、料理なんて初体験だろうに・・・ま、ノフィーネが隣に居れば大丈夫か。創造神作、ノフィーネ命名の『笑過泣』よりひどいことにはなるまい。

「それじゃ、早速はじめよっか。あ、二人ともおなかをすかして待っててくださいね」

そう言つてノフィーネはメイナを連れて、台所まで向かっていった。

二人の姿が扉の向こうに消えたのを見て、俺は茶を飲み、古王に言う。

「・・・さつてと、古王よ。なーんかわざとらしく人払いをした訳を聞こうか」

「あら、ばれてた?」

ばれてたも何も、普段あんまりそういったことを言わないやつが、急に言い出したんだ。頭のどっかには必ず引っ掛かるだろ。

俺は呆れた顔で返したが、目の前の古王は、シュツと急に表情を変えた。・・・その顔は相も変わらず二ヤケているよだが、・・・真っ直ぐこっちを見る目は真面目な話をするときの目だった。

ちよつとした緊張を空間に漂わせながら、古王は口を開く。

「・・・いやなに、封印の中核にする魔物について、話しておこうと思つてな」

・・・ほう、それについての話か。

「てことは、さっき言つてた現地調達つてのは冗談だったのか?」

「ん、まあ、あれも手段の一つとしては提案しておこうと思うがな。・・・実は、それよりも確実な方法がある、それを一応、話しておきたかった」

・・・うむ、普段なら俺は「そんなのがあるなら、早く言えよ!」とか思うところなんだろうが、一つ気になった。・・・なんで、古

王はその話をするために人払いをさせたのか。

「その方法、というか核にする者のことだ。それで・・・なるべく落ちついて聞いてくれ」

・・・なんというか、毎度のことながら嫌な予感しかしない。大体、いい事ならこんな言い詰まったりするはずはない。

「・・・どうした、早く言えよ」

古王がまだ戸惑っていた様子なので、俺は促す。・・・だが、俺には古王が言おうとしていることが何となくわかっていた。

だが、あえて古王の口から言わせる。こいつお口から言わせなきゃ、気が済まない。

「ああ、なら言うぜ。・・・破壊神を封印するのに最も確実な封印方法・・・それは」

ゴクリ、と俺は唾を飲む。

「・・・ノフィーネを、封印の核にすることだ・・・！」

C

ドゴッ！

俺は、古王の頬を思いっきり殴っていた。と言っても歯を折ったとか、そう言った感触は腕にはない。こいつは人間とは違う『王』だから、そこらへんも丈夫にできているんだろう。

古王はしばらくして、殴られた左ほおをさすりながら、殴られて右に向いた顔を俺に向けた。

「・・・痛いぜ」

だろうな殴られたんだから。むしろ殴られて痛くなかったら神経が死んでいるとしか思えない。

「ま、こうなるだろうと思っただけだな。やっぱ、怒るよなそりゃ」

「ああ、当然だ・・・。ノフィーネを封印の核に？　気が狂ってる
としか思えねえよ」

殴った右腕だけじゃなく、体中が熱くなる。・・・理性で怒りを鎮めようと、感情がそれを許さない。もう一発・・・いやもう何発か殴らないと怒りは収まりそうになかった。

だが、そこはなんとか抑えなくてはいけない、あまりうるさくして、ノフィーネたちに聞こえてはいけない。

俺は元のソファ―に座り、感情を押し殺した声で訊く。

「・・・だが、俺も・・・理にかなっていているとは理解できた。賛成はしないがな・・・、封印の核の三つの条件を、確かに全部当てはまっている・・・。『不老不死』なら死ぬことがない、つまり封印がいつになっても解けることはない、ということだろ・・・？」

「ああ、その通りだ」

「くそっ、・・・そんなことを一瞬でも考えてしまったこの頭を、どうにかしたいぜ・・・全く・・・！」

俺の怒りは古王にだけじゃない・・・。ノフィーネを封印の核に、そのことを考えてしまった自分自身にもまた怒りが向いていた。

とりあえず、そのいら立ちを抑えるために、茶碗のお茶を一気飲みする。

ングッ・・・ゴクッ、ふーっ。

・・・少し落ち着いた気がする。今なら、冷静に話しかけられるかな。

「・・・でだ、古王。正直、そんなことを考えなければいけないけど、封印の核は見つかりそうにないのか？」

「ああ、本当に現地調達が冗談じゃないレベルになってきた。だから言いたくはなかったが・・・ノフィーネを封印の核にすることをも、最後の最後の最後の手段として考えるを得ないんだよ・・・」

古王は沈んだ声で言う。その顔は沈痛の面持ちだった。古王は古王で、それを言い出したことを後悔しているんだろうか。

「だが、古王。確か俺たちが封印するのはオマケ程度で、世界の対応もあるから心配するな、的な事を言ってなかったか？」

「ん、まあそれもそうなんだが・・・。てか、それもそうだな。あ

まり深く考える意味も無かったかもしれんぜ」

とたん、古王の顔がぱっと明るくなった。……っておいおい、自分で言っというてそれを忘れてたのかよ……。

俺は呆れた。しかし古王はまた幾分か曇らせた顔で言う。

「だがな、世界が正しい対応をできるか、と言われれば正直分からないぜ。だから、もしものもしものもくらの手段であつたとしても、考えないわけにはいかないんだ……。それだけは分かっているよ」

古王のこちらを見る真剣な目に、俺は黙ってうなづく。……もしもの場合、か。

「ま、そのもしもの事態に成るまでは樂觀的に考えようぜ。後、よく考えたらノフィーネを核に。なんてひどい話だった、すまんな」

「いや、いいって。俺もお前のこと殴ったし、お互い様だろ」

そうして、俺たちの間にまた平穏な空気が戻ったので、他のことを話すことにした。

それは王界についてだとか、世界の魔術組織についてだとか、まあ、色々だ。

中でも歴史的な出来事については、古王が最も熱く語り、俺は若干引いた。

そして、話題がそろそろ切れてきたな、ってところに……。ふと思つたことを、古王に訊いてみた。

「なあ、古王。あの時……。破壊神が前の体を自爆させたとき……。破壊神の周りにバリアを張っていれば、時神を救うことができたんじゃないか？ あ、お前を責める気はないが」

最後にそう付け足しておく。ま、こいつはそんなこと気にしないだろうが。

「いや……。それじゃあ近すぎて、どんなバリアでも圧力とかいろいろに負けて破れてしまうだろうな……。実際、あの自爆は割と威力が高かった。あのベロ・ランザに傷をつけるほどにな」

古王は淡々と話す。・・・そうか、ならどの道無理だったってことなんだな・・・。

「なんにせよ、済んでしまったことを考えていても仕方がない。俺だってあの場でとれただろうあらゆる手段を考えてはみたが、例えばあの場で創造神が破壊神について説明していても・・・それらの結果は全て、今より状況が悪くなるものだった。あれが一番の方法だったんだよ。・・・むしろ、そう信じないと、やってけねえぜ。・・・でもまあ、せめてこれ以上犠牲者が増えないようにするのが、あいつらを守ってやれなかった罪への贖罪なんだろうとは思うぜ」
・・・なかなか古王も色々と考えているらしい。今まで少しお気楽な奴だと思っていたが、ちゃんと人間らしいところもあるのか。
いや、人間じゃないけれど。

「ん、そういえば・・・」

小世界についての話ついでに、ふと思い出した。

「なあ、ハザードってあの後、どうしたんだ？ あいつだけ感染してなかったみたいだったが」

「ん？ 知らんな・・・。多分うまく逃げ来たんじゃないか？ 少なくとも、俺が偵察に行ってきたときには姿は見なかったぜ。・・・あ、でもあの執事みたいな吸血鬼は感染者の中にいたけど」

ああ、そういえばいたなそんな吸血鬼。でもそうか・・・なら、ハザードも感染者になった可能性があるわけだよな。

「ま、敵が一人二人増えたところで、そんなにも変わらんさ。人界のやつらも中々強いやつらいるし、王界からも少し増援が来る手はずになっているから、案外楽勝かもしれんぜ？」

「ま、その増援が感染者にでもなろうものなら、笑い事じゃない事態に成るだろうけどな」

「あはは！ それは言えてるぜ」

「いや・・・だから笑い事じゃないし、縁起でもないぞ・・・」

本当に縁起でもないし、そんなことを話してわざわざフラグを立てる気は俺には無い。

と、そんなことを話していると、時間はいつの間にか六時を過ぎていた。・・・そろそろかな、と俺の頭と胃袋が思い始めた時に丁度、ノフィーネとメイナが料理を持って現れた。

「二人とも、できましたよ。ホームパーティ風にメニューを組んで見ました」

多分、キッチンに置いてあったんだろう手押しのワゴンをノフィーネは押している。そのワゴンの上には、テレビなんかではよく見るけどご家庭ではあまり見ない、蓋がかぶせられた皿が数枚乗っていた。・・・てかさんなのうちにあったか？　まあ、凝り性の爺さんのことだから、うちにあってもおかしくはないが。

まあ、それはそうとして。ワゴンによって運ばれた皿がノフィーネとメイナの手によって、目の前の机に置かれていく。・・・てか、ここで食べるんだな。パーティ風ってそういうことなのか？

と、不意に、

「あ、久郎様。この皿そっちにお願いします」

そう言ってメイナが差し出してきたのは、ひときわ大きな蓋と皿。受け取ってみると、ずっしりとした重みが腕に來た。・・・これはいったいなんなんだ？　俺は机の上に置いた後、中身を見ようと蓋の取っ手に手を伸ばし、

「あ！　久郎君見ちゃだめです！　それは配膳が終わってからのお楽しみです」

と、ノフィーネに注意され腕を引っ込める。・・・いいじゃん、少しくらい。

「ダメです！　こういうのは雰囲気とかその他もろもろも楽しまなくちゃいけないんです！」

今度は心を読んだメイナに注意された。仕方がないので配ぜんが終わるまでおとなしくしている。

カチャカチャ。

皿が全て机の上に乗る、各々の手元にナイフとフォークと箸とコップが配られたところで、ノフィーネが一人立ち上がり、

「それじゃ、オープン！」

まるでグルメ番組で見るように、ゆっくりゆっくり……そして一気に蓋をあけた。その瞬間、溢れ出す湯気、広がるにおい、こんがりと焼きあがった色……こ、これは、

「ローストチキンです！ クリスマスは過ぎてしまいましたが、立派なオーブンがあつたので作ってみました。ちなみにチキンじゃなくて七面鳥ですが」

おー……。これは素直に感嘆せざるをえない。さすが古王が豪華と注文しただけはある……。その古王もよだれをすすりながらローストチキンを見つめてるし……。しかし、七面鳥なんて買ったか？ ……七面鳥、七面鳥……。はっ！

「まさかサンタのプレゼ……」

「久郎君、何か言いましたか？」

ノフィーネは怖いぐらいのスマイル……。いえ、何でもないです。ただの気のせいです……。ごめんな、七面鳥をお願いした奴……。でも、ある意味これで良かったような気がする。

そしてノフィーネとメイナはそれぞれ違う皿の蓋を持ち、開ける。

「そして……。その他もろもろオープン！」

……。一気に雑になったな。飽きたのか？ いやだが、紹介の雑さとは裏腹に、俺たちの視界に入ってきたオードブルは、まるで店で売っているほど豪華なものだった。えーと、ナゲットにポテトにメロンに……。まあ、とにかくその他もろもろ。さらに店で売っているオードブルと違って、これは出来立てほやほやだ……。俺の口から知らず知らずのうちによだれが垂れることを誰が責められようか。

ぐーぎゅるるる……。。

向かい側の古王からは、盛大な腹の音が……。もう我慢できないと言った様子で、ローストチキンを凝視している。子供っぽいなホント。

「それと、シャンパン代わりの炭酸ジュースだよ。一応、グレープ

味だから気分出ると思う」

そう言って、ジュースが注がれたグラスが全員にいきわたり、一通り仕事を終えたノフィーネとメイナが席に着いたところでノフィーネが言う。

「じゃ、久郎君、乾杯の音頭をどうぞ！」

「え、俺？」

お客さん気分だったから、完全に不意を突かれた形だ。

「え、ちよっ、聞いてないぞ、そんなこと」

「いや、こういうのはノリで誰かがやるものだと思うけど」

ノフィーネは笑いながら言う。さらにメイナも、

「そうですよ。大体、ここは久郎様の家なんだから、久郎様以外に誰がやるっていうんですか？」

こんなことを言ってくる。前を向けば古王が、親指を出してGOサイン。・・・すっかりそういう空気らしい。・・・いやしかした、

「俺、そう言うのやったことないんだが・・・」

「大丈夫だよ。ただ一言何か言ってその後、乾杯！　って言えばいいだけだから」

そんな難しく考えなくとも、とノフィーネは言う。だが、こういうのは景気づけにも重要な場面だと俺は思うし、大体、変なことを言って後々のネタになるようなことはしたくない。

そのための一言が難しいんだよな・・・。

そんな感じで悩んだため、無駄に『刹那の延長』を使って考えることにする。

うーむ・・・なんにするか。

そう悩んでいた時、メイナが話しかけてきた。

『「好きだ、結婚しよう。乾杯！」でOKですよ』

ネタ的にはな。てかそれ乾杯と告白どっちが目的なんだ。

『・・・告白？』

おい。

『あはは、冗談ですって。とりあえず「来年こそ彼女作るぞ、乾杯！」で』

なんでそうなる。てかそう言う事を言うやつには大抵春は来ない。『・・・文句ばっかじゃないですか。せっかく手伝ってあげているのに』

真面目に手伝ってはいないがな。

『なんですか、もう・・・なら勝手にすればいいです』

プツン、とノフィーネとの回線のようなものが切れた音がした。

いや、そんなものがあるかは知らんが。

さて・・・、まあ、考えるのにも疲れてきたし、適当に言うか。

「えー、なら・・・コホン。無事、新年を迎え、またこうやって騒げますように、乾杯！」

「「乾杯！！」「」」

チンっ！

グラスとグラスがぶつかる音が響き。そうして今年最後の晚餐が始まった。

皆思い思いの料理を手元の皿に移し食べる。見れば古王とメイナが何やら話をしている。・・・どうも、古王が歴史家なんかのウンチクを教えるみたいだな。・・・ご愁傷様、とも思ったがメイナは古王の話を聞くのが苦ではないらしく、むしろ目をキラキラさせて聞いていた。・・・ま、生まれてきて数日だし、新しいことをきくのが好きなのかもしれない。

さてそれはともかく、俺は早速ローストチキンを切り分け、皿に移してフォークで口の中に頬張ることにする。そのお味はというと・・・うまい。肉汁が口のないっぱいに溢れ出し、ほどよい柔らかさの肉が咀嚼され、あっという間に喉に吸い込まれていった。

「うーん・・・こんなにうまいもの、初めて食べたことかもしれないな・・・」

「そ、そう？　でも、久郎君ならもっといういもの今までに食べてき

たでしょ？」

ノフィーネは自分の料理がほめられた嬉しさを照れ隠ししながら、訊いてくる。

うん、そのはずだ。爺さんと一緒に行った高級料理屋の料理はどれもこれも、これ以上ないくらいおいしかったはず。

「だけれど・・・、今俺が食べている料理は、『おいしい』と言うよりも『うまい』んだ。なんだ、これ？　よくわからないな・・・」
わりと真剣に悩む俺に、ノフィーネは笑いながら言う。

「あはは。それってもしかして『みんなと一緒に食べるご飯はうまい』って事なんじゃないかな？　空腹と会話は最高のスパイスとも言うし」

・・・そうなのか？　まあ、確かにひきこもってたし、爺さんと食べることもあったが、最近は一人飯ばかりだった。・・・そうなのかな。

「ま、なんにせよ。こんなうまいもんを食わせてくれたノフィーネには、感謝しなくちゃな」

「え、い、いいよそんなの。これも恩返しの一つだからさ。さ、どんどん食べてよ久郎君」

そう言って、俺の皿にいくつかの料理を持ってくるノフィーネ。照れ隠しをしているのがばればれな、素直なノフィーネの笑顔。

・・・それがあれば、ご飯は何杯あってもいけそうだ・・・。
・・・。

「なにやら、危ないこと考えてませんか？」

のわっ！　俺が我に返ると、目の前にはメイナの顔が。そのままメイナは俺の隣に座る。

「・・・って、なんだいきなり！　大体、危ないことなんか考えてないぞ！」

「我に返ってる時点で、危ないことを考えてたって証明ですよ。まったく・・・大体、久郎様はいつもいつも・・・」

メイナは、やれやれ、といった調子で次々と文句なのか愚痴なの

かをぶちまけてくる。全部聞いていると耳がタコになるので聞いているふりだけ、手は次々に口の中に料理を運ぶ。・・・ふと見れば、今度はノフィーネが古王の話を聞かされてるみたいだ。一応古王の話にノフィーネは微笑しているが、あのノフィーネの笑いは・・・作り笑いだな。

「聞いてますか!? 久郎様!」

「あー、はいはい。聞いているよ、メイナ。・・・まったく、お前は小姑かよ」

「・・・それって、小姑に対する偏見じゃないですか?」

まあ、小姑がみんな口うるさいとは言わないが。大体、そんなイメージがあるんでな。しかしそれが偏見と言うのなら・・・、

「なら言いかえる。お前はおせっかいな隣の家の幼馴染か」

「あ、それは止めてください。何かしらのフラグが立ったら嫌なので」

・・・それ、言われたら軽く傷つくぞ。まあ、俺もメイナとそういう関係になるうなんてこれポッチも思わないが。

「ま、そんなことは置いといてですね。・・・私は久郎様に言わなければならぬことがあります」

? さっきからさんざん、くどくどと言われたような気がするが? ま、聞いてなかったが。

そう俺が言うと、メイナはふくれっ面を浮かべつつ言う。

「それとは違う事です。まったく・・・、いいですか? 一度しか言わないのでよく聞いていてくださいよ」

そして、メイナは深呼吸をして、一度チラッと古王たちの方を向いた後、口を開き、

「・・・私を生み出してくれて、自我を与えてくださってありがとうございました」

とだけ言って、席を立ちドアの外へと歩いて行った。・・・って、ん? はて? あのメイナから感謝の言葉が聞けた気がするんだが・・・っていうか感謝された!? ちょっと、カメラさんカメラさん、

今のところ巻き戻し！ スロー再生でゆっくり検証・・・って、スロー再生じゃよく聞こえねえ！ って、落ちつけ俺！！ なにテンパって意味の分からんことを考えてるんだ。テレビの見過ぎが原因かは分からんがとにかく落ちつけ、落ち着いてメイナに訊け。

「おい、どこに行くんだ？ メイナ」

いや、そっちじゃねえよ俺！

「・・・女性にそんなことをきくんですか？ 最低ですね、久郎様」

いや、ちよつ、違っ！ えっ、俺、間違えっ・・・、

ボタン！

・・・そんなこんなでテンパったあげく、よく分からないままメイナは部屋の外に出て行った。

えーっと・・・、落ちついて考えよう。そもそも俺なんでテンパってたんだっけ。確か・・・、メイナが俺に感謝の言葉を言ったから、だったよな。

ふーむ・・・珍しいこともあるものだな。まさか俺に対する反抗期まっ盛りのメイナが俺に感謝をな・・・。もしかしたら、こんな席でせっかくだから言って見た、メイナの本心なんだろうか。

てことは今外に出て行ったのも、照れ隠しのために外に出てったのかもな。・・・以外に可愛げのある奴かもしれない、今さらだが・・・うんうん、と俺は一人むなしくうなずきながら、話し相手がいなくなったという事で料理に手を付けることにする。・・・もぐもぐ、むぐむぐ。

そうして、何十秒か経過した後、視界の端でノフィーネが立つのが見えた。

「あ、古王さん。私もちよつといいですか？」

「ん？ あー、どうぞどうぞ。すまんな、長話しすぎて」
ガチャ。

どうやらノフィーネも何かしらの用事で部屋の外に出たようだ。・・・まあ、おそらくは古王の話が終わりそうになかったんで、逃げたんだと思うが。まあ、部屋の外でメイナと話をしているのかも

しれない。ま、それはそれでいいだろ。

・・・こっちは全然よくないが。

「さて・・・残るは久郎だけか、つっても久郎とは待っている時間
さんざん話をしたしな・・・」

なら、話をせずにただ食欲に従って料理を食らうという選択肢を
取ろう。それがお互いにとってベストだと俺は思うんだが？

「だが、ことわる」

ことわんな！

「ははは、いいじゃん。これからもっと親密になるためにさ。もつ
と話さね？ 例えば・・・この世界は一回過去に戻ってやり直され
た世界だった！・・・とかさ」

あー、てかそういう話ってゴマンとあるよな。ファンタジー系で。
でも現実にはありえんだろ。

「ははは、まあな。ありえないよなー、うんうん。でもさ・・・そ
れが事実だったらどうする？」

・・・。

「そういう作品は結構あるからつまらない、と呟く」

「・・・地味にひでえな。そうじゃなくて、何で巻き戻されたんだ
？ とか、何か起こったのか？ とか考えね？」

ふむ、古王はなにかこの話題にこだわっている気がする。ここは
真面目に返しておいた方がいいか？

「まあ、そうだな。そんなことを考えなくてもない。だけど・・・そ
う言うのって巻き戻した本人が解決するだろうし、考えても無駄じ
ゃないか？」

「なるほど、そう考えますか・・・」

古王はニヤケた顔で、得心したようにうなづく。なんというか、
・・・むかつく。

「お前、何だってそんなことを訊くんだ？ 何か関係があるのか？
大体、お前の言ってる『巻き戻された世界』ってのは事実なのか
？」

「いや？ それは昔、時王^{じおう}って王が論文として出したことがある説の一つだが？ ちなみに信ぴょう性は微妙」

「・・・それだけか」

「うん、それだけ」

「・・・少しでも気にして損した。」

「まあ、でも。あってるかもしれないし。一応、いろんな意見を訊いてみたいじゃん」

「そういうものなのか？ 俺にはわからないがな、その気持ちは。」

「・・・そもそも、『王』の考え方って人間と同じなのか？」

「うーん・・・、『王』ってのはな、その名が示すものを極めることに執着する種族なんだ。たとえば俺なら『古』、つまりは歴史だな。あと、和王なら平和を追い求めているし、時王なら時の仕組みを研究している」

「へー・・・変わってるな。・・・てか、名前で決められんのか？」

「そいつの生き方が」

「いや、名前は自分が自分自身で付けるからな。自分で極めたいものを見つけて、死ぬまで極め続けるんだ。ちなみに、名前のない王のことは身体的特徴で呼ばれたりする」

「ほう・・・その極めるとかいうのに、挫折する奴とか出てこないのか？」

「ああ、いるいる。そもそも極めるなんてことはほぼ不可能だからな、大体のものは。歴史は人が生き続ける限り増えていくし、平和なんてほぼ叶わない。時の仕組みも・・・結構難しそうだよな」

「確かにな。芸術なんかも『極める』なんて行為は無理だし。ギネスの記録なんかも、人が生き続けるかぎりには延々と更新されていくだろう。しかし・・・」

「・・・なら、なんでそんな終わりのない道をずっとやってられるんだ？ というか、やっているんだ？」

「おお、いい質問だ。その答えはな・・・」

と、古王は一呼吸入れてから言う。

「王は『極める』ことを止めたら死んでしまうからなんだよ。さつき死ぬまで極め続けるって言ったが、それはむしろ逆ってことだな」
・・・？　ちよつと、よく理解できなかった。

「え？　極め続けられなかったら死ぬのか？　なんでだ？」

「もともと、『王』だって人間と似たような種族だったんだがな。だが、戦争なりなんなりがあった結果、自然破壊、食糧不足、資源不足などなど・・・とにかく、ひどい有様になって、あまり多くの王が生活できる状況じゃなくなってるんだよ『王界』は。だから、物事を極め続けられる奴だけを生かして、最低限の人数で最大の技術や文化の向上ができるよう、王全てが『極める』ことを止めたら死ぬ」という十字架を背負う事にした。まあ、いわゆる『働かざる者死ねっ！』って奴だな。産まれたばかりの奴にはある程度猶予期間はあるんだが」

・・・またそんな凄いことをさらつと・・・。

「いや、死ぬって・・・その、極めることを止めた王の判別とか、どうやってるんだ」

「ん、ああ。それについては問題ない。『極める』ことを止めたら自決せよ』という命令を全ての王の脳にすり込んであるからな。自分が極めることを止めたな、って無意識にでも自覚すると、その瞬間自分で自分の命を・・・って寸法だ。ま、お前から見たら非道かもしれないが、『王界』の状況はよっぽどひどいでね。他の世界の生態系を壊すわけにもいかにから移住もできん俺らが生きるには、こうするしかなかったのさ」

・・・大変なんだな。

「ああ、だから人間も気をつけろよ。まだ手の着けようがある段階でさ」

そう言う古王の顔は、特別悲観したような顔でもなかったが、その言葉にはせつな願いが込められていた気がする。・・・取り返しのつかなくなつた世界『王界』の住人としての助言・・・か。

「・・・なあ、古王。これが終わったらさ、俺が『王界』に行けた

りはできないのか？」

「む？」

俺はなんとなく、そう古王に申し出ていた。それは古王の話で王界に興味が出たからかもしれないし、人間界が行き着く可能性がある光景の一つとして、この目に焼き付けておきたいというのもあるかもしれない。

「むー……いや、そう簡単にはいかないんだがな、大体他の世界に行く時には色々手続きもいるし、『王界』は特に、食糧問題とかもろもろがあるからな……」

「……そうか、まあ無理なら仕方がないな」

若干、落胆をしてないと言えば嘘になるが、そういう事情が関係するのならしょうがない。そう諦めようと思ったが、

「いや？ 誰も無理とは言っていないぜ？ 要はあれだ。ばれなきゃいいんだよ。なっ！」

そう古王が言い、俺が古王の顔を見ると。古王はいつそうニカッと笑い、俺の肩に手をまわした。……ホント、こいつのノリは自分勝手だったりもするが、でも嫌いじゃない。

「行こうぜ久郎。男二人旅か？ それともみんなもつれてか？ あ、でもあいつに頼めば、色々な所に手をまわして、正式な使節団、みたいな形で行けるかもな。つっても都市部以外は本当に生物が生きするような場所じゃないからつまらないかも知れないが……ま、それも一興って奴だぜ。はっはっは！」

一人で一気にしゃべる古王。……耳元で騒ぐもんだから、めっさうるさいんだが……でもまあ、いいか。

そんな感じで、古王とはまたいろんなことを話し、歴史のウンチクの話になったら聞いているふりをし、少し経つとノフィーネとメイナが二人一緒に帰ってきた。

ガチャ。

「あ、お帰り二人とも。けっこう料理食べちゃったぜ」

古王はちっとも悪気がなさそうに言う。見れば、ホントだ……

いつのまにかあんなにあった料理が残り少なくなってる。・・・ノ
フィーネの言うとおり、みんなで食べる料理はうまい、ってことな
のかな。

だが、ノフィーネは特に気にした様子はなく、むしろ嬉しそうに
言う。

「ああ、いいですよ。そもそも食べてもらうために作ったんですか
ら」

そう言ってノフィーネは元のソファに座る。・・・てか、何か話
してきたのかメイナと。

「フッフ、女同士の話だよ。だから、秘密」

「そうです。久郎様には教えないんです」

二人してこう返してくるもんだから、どうしようもない。とりあ
えず残ったナゲットでも頬張ろうとすると、突然ノフィーネが立ち
上がり、

「じゃ、来年の抱負！　いってみようかー」

「「おーっ」」

ノフィーネが叫んだ後、残りの二人がノリよく腕を突き上げたが・

・・なに、打ち合わせでもしてたのか？

「いえ？　ノリです。空気を読んで」

「いや？　ノリだが。空気を読んで」

ということらしい。・・・俺の来年の抱負は『空気を読む』か『
ノリが分かる』だな。

まあ、それはそうと。どうやらノフィーネが司会の『来年の抱負
を言いあおう会』が突然行われたらしい。

「ということで、じゃあ僕から。えー、コホン……。僕は来年、
『不老不死』を無くす方法を模索したいと思います！」

おーっ、ひゅーひゅー。

・・・と、二人だけのファンフレが鳴るが。・・・ノフィーネ、
お前。

「僕はある人に、『不老不死』を消させてもらう、と約束してもら

いました。だけど、その人だけに任せておくと危なっかしいので、僕も色々模索することにします！」

おーっ、ひゅーひゅー。

「・・・ノフィーネ」

俺が呟くと、ノフィーネはニコツと笑い

「じゃ、次は久郎君！　ちなみに、僕の抱負に関連したことはアウトで！」

特技を差されつつ、バトンをタッチされた。・・・むー、抱負か。「そうだな、打倒破壊神・・・っていうと、どうせ明日で終わるし、なら・・・。来年、俺は色々なことに挑戦しようと思う！」

おーっ、ひゅーひゅー。

「今までは引き籠って、必要最低限のことしかやってこなかった。でも今は、俺には仲間がいる！　クサイことを言っているのは自覚しているが、なぜか止まらない！　俺はとにかく、来年は挑戦の年にする！」

おーっ、ひゅーひゅー。

・・・はあはあ、俺は言いきった達成感と、言ってしまった羞恥心があいまった微妙な気分になり、そのまま座った。

「じゃ、次はメイナちゃん」

「来年は、いろんなところに行って、いろんなことを経験したいです！」

おーっ。・・・ちなみにひゅーひゅーはメイナが言っていたのでなし。

「最後に、古王さん」

「来年こそは、彼女作ります」

ひゅーひゅー。・・・ちなみにおーっは以下略。・・・しかし、ひゅーひゅーだけだと冷やかされてるみたいだな。てか、こいつ絶対冗談言ってるやがる。

「はい、みんなそれぞれの抱負を語ってもらったところで、明日の備えて早めに寝ることも考え、そろそろこの会をお開きにしたいと

思います！」

そう、ノフィーネに言われて時計を見て気付いた、・・・もういつのまにか、八時になってたんだな。時が経つのは早い。・・・なんか、今さらになって緊張してきた。

「それじゃ、久郎君！ 最後のしめに一言」

・・・多分、しめの一言を要求されるだろうな、とは思っていた。ここはやはり・・・あれしかあるまい。

「それじゃ・・・明日！ 絶対勝つぞ！！」

「「「おーっ！！」」」

全員そろって、天井に向かって高く腕を突き上げた。いよいよ明日が決戦の日になるはず。気を引き締めて行こう。

そう決意し、今年最後の晩餐を終えた。

Cの30話「元旦開戦」

カチッ、カチッ、カチッ、カチッ、カチッ。

ゴーン・・・ゴーン・・・。

『ア、ハッピーニューイヤー!!』

時計の二つの針がてっぺんで重なり、除夜の鐘が鳴り響く中、街は湧き立った。

街中には浮かれた歓声が響き、人々は新年を迎えたことを喜び、若者は友達に向けてメールする。

それは毎年同じ光景で、今年も同じの・・・はずだった。

ドドドドド・・・。

「ん？」

一人、物音に気付いた男性はその音がする方向を見る。しかし、そこに見えるのは人の波のみ。やがて男性は気のせいか、と思い首を戻す。しかし、

ドドドドドドドドド・・・!

音は次第に大きくなり、地響きまで聞こえるようになってくる。

「え? なに? 地震!？」

「なんだ、おい、だんだん大きくなってきてるぞ!」

ドドドドドドドドドドドド!

「早く! 建物の中に入れ! 地震だ!」

「・・・こんなに揺れるなんて、でも地震警報なんかどこにも・・・!」

またたくまに人々の間に動揺が広がり、悲鳴とともに人の波が建物の中に動いて行く。地震の恐怖から、押せやどけやの大騒ぎ。災害の時は落ち着いて行動しなければならないが、そんなこともお構いなしに人は逃げる。

・・・しかし、その地響きは、決して地震のものなどではなかった。

「・・・お、おい・・・！　ありや、なんだ！？」

人の波の最後列に居た若者が、振り返った光景に驚愕する。その声につられ、他の人も次々と振りむく。

「え・・・、なに、あれ・・・」

「は・・・！？　な、なんだあれ・・・」

彼ら彼女らが見た者、それは彼ら普通の人間が生きている間に一度も見たことのない異形の者の集団。その集団は・・・不気味な角を生やしているような、翼を羽ばたかされているような、肌の色が紫のような、そんな異形の者たちの集団だった。

その異形の集団は、道路にある車を蹴散らし、アーケードをブチ壊し、人の波に突っ込んでくる・・・！

「な、お、俺・・・夢でも見てんのか？」

「に、逃げろおおおおおおお！！」

その誰かが発した声で、建物の中に駆け込むことに集中していた人の波全てが、異形の集団の存在に気づき、誰からと言わず悲鳴をあげ、より一層、人を押しのけ助かろうとする。それはまるで地獄絵図のようで、ここまでくればこうなるのも仕方がないと言える。

だが、助かりはしない。

異形の集団の先頭に居る老紳士のような・・・しかし放たれる覇気はどこまでも威圧的な男が、その集団と言わず、まるで世界にでも宣言するかのように叫んだ。

「くっくくく、あーはっはっはっハ！　ぞくぞくすル・・・、今からこの世界を滅ぼすのかと思うト、ぞくぞくするぞ人間ども！　そして俺からお前らに対して告げるのは、二言だケ・・・。ア、ハッピーニューイヤー！　そして、ア、ハッピーラストイヤー！！　ひゃっはははははハ！」

C

「破壊神、出現しました！」

会議場のモニターからもたらされたその報告に、破壊神対策委員会は騒然となった。

「本当か!？」

「どこだ! どこに出現した!」

それを訊いて各国の要人たちは焦り、誰もがその報告をしてきたモニターの向こうの兵士に問い詰める。ただし、御老体、防王、それにバスター総帥はその誰にも含まれず、御老体は黙ってその場に座り、防王は悠然にほほえみを絶やさず、総帥はウエスタンハットの下に不敵な笑みを浮かべる。

そうして問い詰められた兵士は、口をわたわたさせながらも告げる。

「え、え・・・に、に、日本国です!!」

「何だと!？」

そう言っただけなのは、おそらく日本かそれに近いところの要人。その顔は驚きと恐怖にゆがみ、そのほかの要人たちは、それぞれ日本との距離関係があれども、とりあえず我が国に破壊神が訪れなかったことを安堵する。

「・・・」

要人は懷から携帯を取り出し、本国に連絡。

「もし、私だ! 防壁、隔壁、シェルターは起動させたか!？」

・そうか、なら作戦案に目を通してあるな? なら、そこに書かれている通りに行動しろ。細かい指示はこちらからする! 対策委員会への回線をつないでおけ!」

ピッ!

要人は苦い顔をしながら通話を切る。

やがて、本国の対策部隊の通信施設と会議場モニターとの回線がつながった。画面には軍人の格好をしたベテラン軍人が映る。そのベテラン軍人は口頭で説明。

「報告します! 破壊神は日本国本州、8エリア中央のゲートから出現されたと思われ、周辺の町を襲ったのち、勢力を拡散させよう

と配下を移動させています。こちらの隔壁は第二十七番隔壁より三十三番隔壁を起動。情報統制は完了。表向きには、地震が起き、また原子力発電所からの放射能が一体に漏れているということに。また忍者、陰陽師、魔術師など、日本にある表だった組織は全て対破壊神に動き、バスター日本支部も先遣部隊を出したとのこと。本体は数分後に出撃予定。・・・以上で報告を終了します。詳しいデータはすぐに送られます。なお、それ以上の隔壁の起動などがありましたら指示を」

モニターの向こうの軍人は報告を終了し、指示を待つ。そして会議場を代表し、バスター総帥が軍人に言う。

「ああ、対応はそれで十分だ。隔壁の中の様子は見れないのか？」

「はっ、内部にあるカメラの映像をそちらに回します」

そう軍人が言うってから数秒後、軍人の映像がモニターの隅に移り、代わりにモニターの大部分には隔壁内部の映像が映る小窓がいくつも映し出された。

そしてその映像を見ながら、会議場より指揮がとられることになった。

C

「おい、久郎、ノフィーネ、さっさと起きろ。破壊神が出たぞ」
・・・と、古王の声が聞こえたのは、晚餐の後に寝てから数時間後、元旦の午前0時過ぎのことだった。

「あいつはまたそう言う事を呑気な口調で言いやがって・・・」
俺はベッドの上に寝ていた体を急いで起こし、あらかじめ用意してあったウエストポーチを付け部屋の外に、廊下をどたどたと走った後、古王の声がしたリビングのドアを開ける。

ボタン！

「うおっ、どした久郎！ そんな勢いよくドア開けやがって！」
リビング中に居た古王は、ソファーに腰掛けつつビクツと体を震

わせていた。・・・

「いや、どしたもこしたも・・・、破壊神が出たってお前が言ったんだろ？」

「ああ、俺が言ったよ」

「だったら急ぐだろうよ普通。てかなんでお前そんな呑気にソファーに腰掛けてるんだよ」

そう俺が指摘すると、古王は、あー・・・、と考えるように指をまわし、何か思いついたのか、回していた指をピンっと立てた。

「・・・ほら、よく言うだろ？ 『急がば回れ』 って」

「お前の場合は回る前に急ぐ姿勢を見せろ！ てか、回るどころか完全にその場に止まってるよな、ソファーに腰掛けるって行動は！」
・・・ったく。新年早々、こいつにツッコむことになろうとは・・・。

ガチャ。

「古王さん、破壊神が出たって聞こえたんですが・・・本当ですか？ あ、久郎君あけおめ、ことよろ」

ノフィーネが部屋に入ってきた。その手には、数日前に使った刀が手にされている。

あけおめ、ノフィーネ。でも今はそんな挨拶を律義にやってる場合じゃない気がする。

「あ、ノフィーネ。俺にも、俺にも挨拶を！」

ゲシッ！ とりあえず、ムカついたので顔を殴っておいた。・・・これで眠気も少しさめただろう。

「うう・・・、俺はただ、ノフィーネからの新年のあいさつをもらおうとしただけなのに・・・」

おいおい、泣き始める古王の言葉は軽く無視して、

「で、破壊神が出たって話はどうなった？」

「・・・ああ、その事だった。さっき破壊神が人間界に出現した、って情報が入った。しかも場所は日本。さらに確認をとったら、隣の市の方に現れて、この近くまで進行してきているそうだ」

急に真面目な顔になった古王が告げたのは驚かざるをえない事実だった。この近く・・・だと。

「それって、ここから下った所にある街もか!？」

「あ、そこは進行範囲からギリギリ外れてる・・・けど目と鼻の先だな」

・・・そのことに一旦安堵しつつも、目と鼻の先という言葉に危機感をつのらせる。

「・・・古王さん。それで・・・現場はどうなってるんですか？」
ノフィーネが訊いた。が、古王は首を横に振る。

「・・・それについては、現場に向かってみるしか知りようがないな・・・。とりあえず日本の対魔機関はもう動いているみたいだし、俺たちもそろそろ行くか」

古王はその重い腰を上げ、端にかけておいた防塵用のマントを纏う。・・・いよいよ始まるという感覚に、俺は身を震わせる。

「いよいよだね・・・久郎君」

「ああ・・・、思えばノフィーネと会ってから一週間ほどか。この一週間、色々なことが・・・」

と、俺の言葉はそこでノフィーネの手によって遮られた。

「おっと! それ以上は帰ってきてからいいなよ久郎君。それ以上ここで言ったら死亡フラグだよ」

・・・それは縁起でもないな。

「・・・じゃ、それは帰ってきてから言うか。つつても、帰ってきたら多分すぐに寝てしまうだろうが」

「あはは、そうかもね。じゃあ、僕はそんな久郎君に毛布をかけてあげるとしよっかな? って、よく考えたらこれも死亡フラグかな?」

「ま、お前の場合はいくら立てても死なないだろうけどな、『不老不死』だし」

「あ、それもそうだったね。ふふふ・・・まさかあんなに嫌ってた『不老不死』で笑えるなんて、思いもよらなかったなー・・・。こ

れも久郎君のおかげかな？」

ノフィーネはとびきりの笑顔で、意地悪を言うように訊いてくる。俺はそれに苦笑で返し、ノフィーネは先に外に出て行った。

ガチャ。

・・・不思議と、身震いしてたはずの俺の体は、いつのまにか震えが収まっていた。

「ん、いい感じにリラックスできたって感じだな。これは俺がおどける必要も無かったか」

と、いつの間にか隣に並んできていた古王が言う。

「・・・やっぱり、お前。ふざけてやってたんだな」

「まあそう怒るなって、最強な奴らってのは戦いの前にはおどけた事をするもんだぜ。そうやって気を落ち着けてるんだ」

そんなこと言っても、俺は最強じゃないんでね。

「だとしても、気を落ち着かせることは重要だろう。戦場で家族写真を見たら死亡フラグ・・・なんて言うが、実際はそう言うやつほど心を落ち着かせて動けるから生き残れるんだぜ」

「・・・それは適当なこと言ってないか？」

「ん？ まあ、半分ほど・・・いや九割型は適当だな」

・・・それって、ほぼ適当じゃねえか。むしろ残り一割どこよ。

「あっはっは、まあなんにせよ、あまり気張らずに行こうぜってことだ。いざとなったら俺に頼ってくれていいけど、あんま無茶すんなよ」

そう言って、古王は俺の背中をポンと叩き、部屋を出て行った。
・・・くやしいが、あいつの余裕な言葉のおかげで俺の緊張がほぐれて言ってるのも事実だ。・・・終わったら、礼ぐらい言うべきかな。

さってと・・・メイナ、起きてるよな。

『はい、もちろんです。準備万端、いつでもOKです！』

ま、今古王に言われたことを返すだけだが、無茶しなくていいぞ。疲れたら素直に疲れたって言え。

『了解です。ま、私よりも久郎様がへばってしまうのが心配ですけど』

・・・それを言われれば少し反論しがたいのだが。

『ああ、でもホントにへばってしまう前にしっかり逃げてくださいね。久郎様に何かあったら・・・私が危ない』

結局自分の心配なのか。

『いいじゃないですか、間接的に久郎様の心配もしているようなものですし』

・・・ま、なんでもいいけど。さって、

「そんじゃ行くか。あんま気張らずにな」

『はい、行きましょう』

メイナの返答を聞き、体を少し伸ばした後、俺も外に出る。

C

現場までの移動はタクシーを使う事になった。ま、少し遠いし車なんて持ってないからな。

別荘から少し降りたところの道路で、古王が呼んだというタクシーを待っていると、思いの他物の数分でタクシーが到着した。

「あ、・・・町の商店街までお願いします」

「あいよ」

乗り込むとすぐに、古王は街の名前を口にした。さすがに隣の市まではタクシーで行けないってことだろうか。

そんなことを考えながら、タクシーの窓の外に移る光景をじっと見つめる。・・・と言っても暗くてほとんど見えないのだが。

と、不意に俺の肩に何か重さが感じられた。・・・ノフィーネ？

「・・・すー、くー・・・」

・・・寝てしまったらしい。まあ別に今寝ても現地に着いてから起こせばいいのだしそれについては問題ないのだけれど・・・問題はノフィーネが俺の肩に頭を乗せているという事。これは・・・う

かつに動けない。さらにノフィーネの髪が微妙に顔に当たっていて妙にむずがゆい。・・・さてどうしたものか・・・。

『とか何とか言ってますけど、ものすごい美味しいイベントですよ、それ。・・・リア充氏ね』

いやいや、何でお前が荒れてんだよ。てか何気にこの体勢、意識して維持しようとするときついんだが、少し痺れてきそうなんだが・・・。

『・・・現地に到達する前にへばってません？』

地味にきついダメーじだよ・・・。

「しかし、お客さん、こんな時間にどうしたんで？」

「んー、ちよっと寝過してしまってますね。楽しみにしてたイベントだったんで」

前の助手席に座った古王はそう言いつつ微笑する。どうも古王は運転手との会話を楽しんでいるらしい。

「しかし元旦まで働かなければいけないとは、タクシーの運転手って大変ですねえ」

「いやいや、元旦だからこそ、ですよ。稼ぎ時なんです」

運転手も快く会話に応じている。見たところ五十代後半ぐらいみたいだが・・・。

「じゃあ、一日中タクシーに？」

「あ、いえいえ。私も人間ですから、昼には交代します。ちよっと用事があるので」

「用事、ってなんです？」

「明日、数年ぶりに娘が帰ってくるんですよ、孫を連れて。なんで一日遅い歓迎のおせちの用意をね。そして孫に少しでも多くお年玉をやるために、今もこうして働いてるってわけです」

そう言って、運転手は朗らかに笑った。・・・よほど嬉しいんだろいうな、見ず知らずの乗客にそんなプライベートな話を話すなんてよ。

『いい運ちゃんですね。こんなにいい人の明日を守るためにも、頑

張らなくては、ですよ』

う……、そんなことを言われると、また気張ってしまいそうなんだが……。俺らはあくまで世界のすることのおまけをするだけで、あんまり気張る気はないからな、ホント。

『ま、分かってますよ、それは。でも……久郎様にはそれだけの力があるんですから、もしもの時はよろしくお願いしますよ』

だーかーらー、余計なプレッシャーかけんな！

そう内心叫んでみるが、メイナの嫌がらせ的激励は止むことがなく、『あんたの両肩にかかてる』だとか『久郎様がやらなきゃ誰がやる』まで言ってきた。もうそれプレッシャーかけるとかより、ただおだててるだけになってきてるぞ。

……そして『英雄』だとか『熱血』だとか、そういうワードがメイナの口から発せられることになる、反応するのがだんだん面倒になってきた。

面倒ついでに眠気も襲ってくるし……、まだ寝足りないからな……。

『……ちょ、聞いて……まさか……寝る気……』

もうメイナの声はほとんど耳に入らない。入っても意味が分からない。……こうなったらもう、寝るしかない。

俺はうとうとと、横にあった微妙に堅く柔らかい枕(?)に頭を寄せ、そのまま眠りに入る。

『……ーい、それ枕じゃ……イーネ様の頭……るでバカップ……たい』

メイナが最後のあがきか何か知らないが、色々言ってるが、眠気の前にはそれも無力。本能に従うまま、俺は意識を闇の中に落とした。

C

「……お客さん、着きましたよ」

その運転手の言葉で、俺ははっと目を覚ました。・・・そうか、寝てしまってたのか。

「・・・すう・・・くう・・・」

隣ではノフィーネが心地よさそうにまだ眠っている。・・・うーん、起こすことにためらいがあるんだが、起こさざるを得ないので肩を叩いて起こす。

「むにゃ？」

・・・こいつ、なんて声を出しながら起きやがる・・・、俺が萌えたらどうするんだ。

とまあ、冗談はさておき、

『・・・冗談？』

・・・さておき、ノフィーネは案外すんなり起きた。まだあくびをかいたりしているが、時期に完全に覚醒するだろ。

「おーい、久郎。起きたんなら、キャッシュくれキャッシュ」

「あー、はいはい。いくらです？」

俺がそう訊くと、運転手は俺が払うのという事に驚いたような表情を見せた。が、疑うのはよくないと思ったのか、すぐに笑顔を取り戻し告げた。

「七千五百円です」

「あー、なら一万円札で」

俺は紙幣を一枚取り出し、運転手に渡す。ここで「つりはとつとけ」みたいなことを言おうかと一瞬考えたが、どう考えても嫌味にしか映らない気がするので止めておく。

「毎度。皆さん、よいお年を」

俺たち全員がタクシーを降りた後に運転手はそう言って、駅の方へタクシーを走らせて言った。・・・お疲れ様です、ぐらい言っておいた方が良かっただろうか。

「っと、そんなことよりも・・・」

俺はあたりを見回す。ここは多分、何日前にノフィーネに手を掴まれて走った所だな。あの時少し積もっていた雪は今ではほんの

少ししか残っていない。

しかし、にしても・・・、

「存外、平和そうだが・・・」

元旦ということもあり、店の中には結構多くの客が入っているみたいだが、何かに脅えるように・・・とか、あわただしくしている・・・などのようには見えない。避難しているわけでもないようだ。

「ここはな。さ、行くぞ」

古王はさっさと歩きだす。こいつらしい無駄話などをする気はないようだ。むしろする余裕がないのか。

分らないが、とりあえずついて行く。

てくてくと、歩いて歩いて歩いて、気がつけば街中から出たところまで歩いていた。

そして、そこまで歩いて、やっと異質なものを見つけた。

「・・・なんだ？ 警察？」

見れば、隣の市へとつながる国道を数台の警察車両が封鎖している。そして何台もの車がその前で停車し、その車に乗っていた人と警官とが何やらもめている。

「・・・ちょっと、何があったって言うの？」

「すみません・・・、ここは封鎖するように県警本部から言われておりまして、なんでも事故が起こったとか・・・」

「は、事故ですって！？ だってあっちの道もそっちの道も警察に封鎖されてたのよ！ これじゃあ、隣の市に行けないじゃない！ こっちは急いでるのよ！」

「そう言われましても・・・、ちょっと、本部に確認取ってみますんで・・・」

・・・どうやら色々ともめているようだ。古王もその場でその様子を見ているようだったので、俺も遠巻きに見ていると、警官が警察車両から戻ってきて、拡声器で告げた。

「・・・えー、隣の市で原発事故が起こったそうです！ 現場には大量の放射能が漏れている可能性があり非常に危険なので、隣の市

には一切立ち寄れません！ 隣の市以外に行く方はその死を通らないように、遠回りしてもらう必要があります！」

「げ、原発事故？」

「・・・あんなところに、原子力発電所なんかあったか？」

「さ、さあ、よく知んねーけど・・・、とにかくもどろーぜ」

その警官の説明を聞いたドライバーたちは、次々に車を隣の道や隣の車線に動かし、その場を離れて行く。

「・・・なあ、古王。原発事故って・・・」

「おそらく、対策委員会が考えた、封鎖するための表向きの理由だろうな。作戦の中には核を使うって案も出ているらしいし、原発事故なら丁度いいってわけだ」

「核って・・・おま・・・！」

毎度毎度、さらっとそんなことを・・・

「ま、あくまで最終手段だろ。そんなのどの国も使いたがらないしな。原発事故に見せかけても、調べられたら色々と面倒だから」

「・・・そうか、それでどうするんだ？」

「んー、とりあえず不可視結界でも張っておけば見つからず入れるだろ」

そう言っ古王は、手をかざし、俺たち三人の周りに光るバリアみたいのを張った。古王の説明によると、光を屈折させて見えなくしているとか言っていた。ま、よくある方法だと思う。

そうして警官の横を素通りし、そのまま歩いて行く。

「核か・・・。そういえば日本って、世界の中で唯一、核爆弾を落とされた国だっけ・・・？」

ノフィーネがそんなことを訊いてくる。

「そうみたいだな・・・テレビでもそんな特番が組まれてるよ、その時期になると」

しかし、何でそんなことを訊くのか。

「そっか・・・なら、そんなものを使わせるわけにはいかないよね」
そう言っ、ノフィーネは手に持った刀をぎゅっと握りしめる。・

・・今回、案が出ている核ってのが原爆なのか水爆なのかは知らないが、どれを使っても甚大な被害が出てしまうだろう。

破壊神を残しておいても被害が甚大だろうが、その被害を防ぐために被害を出すって言うのはどうにも許すことのできない話だ。江戸時代、火事が燃え広がらないようにその家を壊したのとはわけが違う。

「・・・だな。俺たちに何が出来るかは分からないけど、そうなる前には終わらせなくちゃな」

そう俺が言うと、ノフィーネはニコツと笑った。・・・こいつは本当に優しいやつだな。本来ならこうして、刀を握っているべき奴ではないはず。

終わらせないと、ちゃんと。俺には少ししかできる事がなかったとしても、その少しを精一杯やらないと。

『カッコよく意気込んでますね。まるで主人公みたいに』

・・・茶化すな、メイナ。

『いやでも、これは本心ですから。ま、頑張りましょできることを』
そんなの今さら確認するほどでもない、しつこいぐらいに今まで俺は確認してきたからな。

できることを、気張らずに、無理をしないで、精一杯やる。・・・これが俺のやる事だ。

「・・・ん、そろそろだな」

古王はそう言って、急に立ち止まる。

そろそろって・・・まだ何にもそれっぽいものは見えないし、目の前に見えているのは道路と、さっきの街中ほどではないにしろちらほら明るい建物たちだが・・・。

「古王さん、・・・やけに静かな気がしますけど」

ノフィーネもその事について古王に訊く。

「ん？ ああ、表向きはな。しかしだ、そもそもファンタジー世界の住人たちは、ファンタジーが現実にあるものだと現実の人間たちに気づかれたいはないからな。あの手この手で、気づかれないよう

にしているんだ。だから・・・」

そう言って古王は、右手の平をノフィーネの目の前に、左手の平を俺の目の前に出した。

「今回も、そうやって隠しているわけだ。そして魔術的に隠されているものを見たり聞いたるするには、目と耳に魔術でフィルターをかける必要がある。・・・そしてフィルターをかけると・・・」

そう言って、項は手の平をひょいとどけた。・・・その瞬間、俺の目の前に異質なものが映った。

「な、なにこれ・・・」

隣からも絶句した声が聞こえる、それは・・・。

高さは高層ビル並みの金属質な障壁だった。・・・まるで近代的な城壁に見えるそれは、右にも左にもずっと伸びている。そしてその障壁の所々には、まるで軍人のようなやつらが外を見張るように立っている。

「これは・・・？」

「いざという時のために作られた対魔用障壁だ。普段は地下に埋められているんだが、有事の際にこうやってそびえ立つようになってな。ここからじゃ分からないだろうが、破壊神の侵攻したエリアごと市をぐるっと囲むようにこれは立ってる。また、魔術師たちによって空と地中に向けて球状に結界も張られているからこの障壁に隙はない」

と、古王は自分もまたその障壁を見上げながら説明した。・・・にしても、こんなものが埋まってただなんて、・・・この目で見なければ信じられなかったほどのあり得ない話だ。

「しかもこれが日本中の都市部に埋まっている他に、地方なんかには空中から落として作る緊急障壁なんかも用意されている。いきなり魔法戦争が始まったり、偶発的に空間がどこかつながって、モ魔物があふれ出てきたりしたら危ないからな。・・・そして、こういった障壁の役割は二つ。中のやつらを守ることと、中のやつらを閉じ込める事だ」

・・・そして今はその後者が行われてるってことか。・・・ん？
障壁の前に立っている軍人の前に、一台の車が止まった・・・
かと思うと、障壁の表面の一角所が自動ドアのように開かれ、そ
のゲートの中に車が入って行った。

「あれは？」

「んーと、あれは『バスター』の車両だろうな。あ、『バスター』
ってのは魔物とかを退治する組織のことだ。・・・で、多分、内部
での作戦に参加しに行ったんだろ」

「作戦・・・ね。どんな作戦になってるんだ、破壊神に対して」

「さあ？　そこまでは・・・さて、俺らも行くか」

そう言う古王に連れられてバリアを張りながらゲートに近づいて
行く。

しかし、どうやってこのまま入るんだ？　そんな疑問を抱いてい
たが、すぐにその疑問は解消された。また一台、車がやってきたか
らだ。

つまりは、開くゲート、進む車、それに便乗して入り込む俺たち、
と言った感じにトントんと簡単に侵入できてしまったということ。
・・・このバリア結構すごいんだな。にしても、啞然とした俺に対し
て古王がへへん、といった風に鼻を鳴らしていたのがムカついたが、
それはさておいて、

車の後ろに追隨して自動ドアを抜けしばらく歩くと、それまで微
速で走っていた車がピタリと停車した。気になり前を見てみると、
車の前には壁が。

「行き止まりか？」

「いや、あれも自動ドアだ」

と、古王は言うものの、一向に開く気配がない。

「多分、外でドンパチやってるのか、安全確認をしてるんだろ。こ
この自動ドアが空いた瞬間に敵になだれ込まれたら、ここのゲート
は使い物にならなくなるからな」

・・・なるほどな。俺は納得し、扉が開かれるまで、この障壁は

大体何メートルぐらいあるのだろうかを考えることにした。今まで進んできた通路のことを考慮すると、相当厚いはずだが、後十メートルぐらいか？

『いえいえ、八十メートルぐらいはありましたよ』

と、何故かメイナまで考え事に混ざってきたが、そうして待つこと数分。やっと扉が開かれた。

「状況は！」

「は、敵戦力が想定以上に協力で、本部にもさらなる増援を要請しているところであります！」

車に乗っていた一人の男が、ゲートの外で待っていた男に聞く。二人とも軍人らしい格好ではなく、むしろラフな格好をしているのだが、古王に聞いたところ、どうやら『バスター』の隊員は軍服なんかは着ないで、自分が着たい服を着るのだとか。しかも見かけ以上に服は強化されているらしい。

「服によるモチベーションの維持ってやつだな」

と、古王は言うが、それって逆に気分が萎えないか？

「いやいや。気楽にやろうぜってのが、ファンタジー世界の鉄則だから。それにお気に入りの自分のお気に入りの服だったら気合も入るし」

そんなものか。ま、そもそも普通に私服で来ている俺たちが言えた事でもないのだが。

と、そんな話を話しているうちに、車からは次々と人が降り、車の荷台から各々の武器を展出し、開始始めた。・・・しかしすげえな。剣とか銃とか杖とか、ファンタジーな漫画でしか見たこと無いようなものばかりだ。

「俺たちの担当はB区か・・・」

「久々のでかい戦だからな。気合入れねえと」

・・・まさに歴戦の勇士、って感じの会話だな。しかし、隊員たちはB地区に行くと言っていたが、

「古王、俺たちはこれからどうする？」

「ん？ んー・・・どうしよっかな・・・。戦うとなるとバリアを解かなければいかんのだけれど、バリアを解いたら見つかるしな・・・。よし、こうなったらこのお兄さんたちについて行こう」

「え？ この『バスター』の人たちにですか？」

ノフィーネが訊き返したのを、古王が答える。

「ほら、よく言うだろ。『長いものには巻かれろ』って・・・いやこの場合は『人を隠すなら人の中か』？ まあなんにせよ、ついてった方が安全に破壊神に近づけるはずだ」

つまり有り体に言うと、この隊員たちに俺たちの風除けになってもらうってことか。・・・しかし、B地区ってところに言って、破壊神に近づけるのか？

「ま、そもそもどこに本体がいるのかも分かんないんだし、まずは流れに乗ろうぜ」

と、古王は笑いながら言うが、つまるところ考えなしなわけだ、こいつは。・・・ま、俺にも考えがあるわけじゃないし、それに従う事にするが。

っと、そんなこんな話している内に、隊員たちの準備が終わったようだ。さすがに早いなプロは。

「おっしや、第七隊行くぞ！」

「「「おおー！！」」」

そう意気込み、総勢九人で構成されている第七隊が、二車線の車道を足並みをそろえて走り始めた。俺たちもその後ろに金魚のフン・・・と言ったらなんかかっこがつかないから、アヒルの子供のように追隨する。・・・あんまり変わらない？ ほっとけ。

隊員たちの足取りは速く、軽装の俺たちも小走りを強いられている。・・・ホント、大剣持っていたり通信機器背負っていたりすんのに、よくあれだけのスピードで走れるもんだ。鍛えてるんだろうな。

そう感心しつつ後ろを走っていたが、・・・ふと、俺は街中の異様さが気になった。

今は両側をビルに挟まれた道路を進んでいるわけだが、それらの

建造物は、特に破壊されているわけでもなく、人がいないと言うだけでそれ以外は至って普通の状態だ。・・・破壊神って言うぐらいだから、ビルとかも廃墟になるくらい壊してると思ったんだがな。道路も特に壊れていないし、街灯も点いたままだ。・・・ただ、途中で道の側や、交差点に溜まっている車は、ドア、フロントガラス、サイドガラス全てが、ボロボロに破壊されていたが・・・、襲われたのか。

「おそらく元旦だし、ビルなんかには人が残ってなかったから壊れてなかったんだろ。逆に・・・あそこに見えるカラオケボックスなんかは無残な状態だぜ・・・」

そう言って古王が指差した先には、・・・入りのドアは完全に失われ、ガラスはことごとく破壊され、屋根なんてものは見当たらない・・・あの特徴的な看板が無ければカラオケハウスだと分からないぐらいな有様になっていた。・・・なんなんだ、この差は。

「さあな・・・、ただ、見る限りでは、外から壊されたと言うよりも・・・むしろ内側から壊されてるなように見えるな」

内側から？・・・どういう事だ？

疑問に思いながらも先にへと走る。他に破壊されてるのは・・・焼き肉屋、飲み屋、ファミレス・・・、人が集まるところばかりのようだ。まあ、破壊神は人を襲おうとしているのだし、それらの建物が無残なまでに破壊されてるのは分かるが・・・どうしても分からないのが、古王いわく、「全て主に内側から破壊されてる」ってことだ。・・・うーむ、破壊神に感染したやつが外に出ようとした、とも考えられるが、屋根を壊すなんて空を飛べない人ができるはずがない。

ツと、考えていた時だった。

キシヤアア！

「つつ！」

建物の影から、二匹の・・・あれは吸血鬼、が襲ってきた。その標的は、姿を見せていない俺たちではなく第七隊隊員たち。

ダン、ダン！

そして、吸血鬼はそのまま隊員の二人が撃った銃弾に心臓を打ち抜かれて、沈黙する。流石はプロだな。これぐらいなら声をかけ合わなくても朝飯前か。・・・しかし、

「ん？　・・・どうやら誘い込まれたらしいな。統制がとれているのか？」

第七隊のリーダーらしき人物が言葉を呟く。・・・状況がうまくつかめていない俺に、

「どうやら破壊神は、あえて建物の中に感染者を隠していたみたいだな。この先にも部隊はいるのだろうし、囲んで各個撃破するつもりなんだろう」

と、古王が補足した。・・・見れば、わらわらっとビルの影や、空中や、建物の中から次々と吸血鬼が・・・ん？　吸血鬼？

「・・・なあ、古王。なんでここ吸血鬼ばかりなんだ？」

「む？　・・・確かに、これは・・・、まさか」

古王はそう言うとおもむろに携帯のようなものを懷から出し、どこかに連絡した。

そして、第七隊を囲んだ吸血鬼たちは、一匹ン吸血鬼が突撃したのに従って、次々とつつこんでいく。その数は・・・約五十。

「あー、もしもし。防王か？　あー、今俺現地に居るんだけど、破壊神、ホント頭いいな。そっちはこの状況、掴めてんのか？」

ところ変わって、対策本部。

各国の要人たちがピリピリしてる中、いきなり防王の懷から鳴った電子音が、要人たちの視線を集めたが、そんなものおかまいなしに防王は電話に出る

「もしもし・・・、その声は、古王ですか？　・・・つかめてるって、ああ、あのことですか。ええ・・・それによって、こちら大きく方針転換しなくてはならないようです・・・。というか現地？」

・・・ま、あなたが加わってくればむしろありがたいのですが。
はい、それでは」

ピッ。

防王は電話を切り、携帯を懷に戻す。ふー、と息をつく防王に、
バスター総帥が話しかける。

「なあ、大将。今の電話何だったんだ？」

「え？ ああ。現地に行ってる王からですよ。なんでも、さっき判
明した事実について確認を盗ってきたようです」

「確認？ それについては今さっき通信したばかりだから、結界で
囲まれていて電波の通りにくい現地にはまだ伝わって無いはずだが
？ てか、それを言うなら、その携帯でなんで通話できんだ？」

「ああ、これは特別製だからですよ。そもそも携帯というより通信
機です。それと、現地の王は自力でそれに気付いたようです」

「ほー、それはそれは。しかし・・・ならどうするのか、その王
は」

そう言って、総帥は腕を頭の後ろで組み、椅子に大きくもたれか
かる。

「さあ・・・ですけど、うまくやるでしょう」

「うまくやる・・・か。うまくやれるのか？」

総帥は微笑しながら言う。

「破壊神に感染している人間はすべて、吸血鬼になったって言うの
に」

C

「くつくつく・・・どうヨ、コレ。弱いけど数が多い人間を有効活
用する画期的な方法だロ？」

「・・・」

破壊神はそばで座らせている塑像神に話かけるが、創造神は聞く
耳を持たない。

「・・・だんまりかヨ。ま、しかし、吸血鬼という存在をあそこで手に入れられてよかったぜ。なんせ、ネズミ算に増えるからな」

と言って、破壊神は一人の吸血鬼を見る。その吸血鬼は、かつてハザードのそばで執事をやっていた吸血鬼。あの小世界にて破壊神に感染してしまった唯一の吸血鬼である。

そう、破壊神は、人間たちに吸血鬼を使って感染させることによって、非力な人間を強力な吸血鬼に変えて配下とした。人が集まる建物が内側から破壊されていたのはこのためだ。

久郎が古王に体験させられた最後の経験と同じように、吸血鬼になったばかりで力の制御がうまくいかなかったやつらがなんとか外に出ようとした結果、建物がボロボロに破壊されというわけだ。

「くっくっく、吸血鬼は役に立つナ。研究機関に金を入れて強化人間を作るよりモ、はるかに低コストでかんたんにできるじゃないカ」
「・・・だが、吸血鬼の弱点を突かれたら一網打尽だろうが」

「ノープロブレム！ 吸血鬼にはこれといった弱点などありはしないことは分かっている。太陽の光に弱いと思われているのハ、昼間に姿を現してファンタジー世界をばらさないたメ。にんにく、十字架、白樺の木、それらすべてでも迷信でいしかない！・・・まア、しいていうなら感染症には弱いガ、それは俺だからナ！ ハッハッハッハッハ！」

破壊神は嬉しそうに豪快に笑う。実際にその作戦は効果があり、強力な敵を多数相手にしなければならぬ人間側は、かなり苦戦していた。ベロ・ランザ卿の持っていた悪魔たちを、温存しておいても問題ないほどに。

「あア、楽しいぜこの戦。さあさあさア！ 俺を楽しませてくれよ人間ども！！ ヒヤハッハッハ！」

その愉快そうに笑う破壊神の声があたりに響き、創造神は腕を縛られているので耳がふさげず、苦い顔をする。

そして戦は、最悪な状態にへと苛烈化していく。

Cの31話「多勢に超多勢」

「・・・おう、そんなじゃな」

ピッ。

古王は手に持った携帯電話を切ると、神妙な面持ちで言った。

「なーんか、吸血鬼の数が多くなったらさ・・・あれ全員、もともところで人間してたやつらなんだと」

「・・・なんだって？」

驚き、俺は周りで繰り広げられている光景を見回す。そこでは、第七隊の九人が五十を超える吸血鬼たちとの死闘を演じていた。

一見、9対50という、約五倍の戦力差ではまともに勝負が出来ないように思えるが、意外にも第七隊の面々は、他の隊員との連携をしつつうまく立ち回り、吸血鬼を寄せすぎず一匹一匹を確実に潰すような戦いを見せていた。吸血鬼を狙っている銃使いや魔術師を剣士が守っていたかと思うと、すぐに今度は剣士が吸血鬼を狙い、銃使いや魔術師がそれを援護すると言ったトリッキーな戦い方だ。

古王が言うには。吸血鬼たちと第七隊の大きな違いは、指揮する者がいるかいないかという事。指揮する者がおらず、てんでバラバラに攻撃する吸血鬼たちを惑わすには、トリッキーな戦い方はベストな戦法だということらしい。

と、そんなことより。吸血鬼たちがここにいた人たち？ マジかそれ。

「それだったら、個の吸血鬼の数の多さも合点がいきますね・・・。てことは、ハザードさんが破壊神に感染したってことでしょうか？」

ノフィーネがしょぼんとした声で訊く。・・・そーいや何でハザードがさん付けになっているんだろうか。誘拐された時に何かあったのか？ ま、今はそれを気にしても仕方ないのだが、気になる。

『邪念は振り払ってください。そんなこと今気にしてどうするんです』

・・・メイナに言われてしまった。俺が心の中で「すまん」と告げると、ふん、とか言って頭の奥に引っ込んでいた。何と言うか、今回ばかりはメイナの注意は正しかったし、破壊神との戦いの前でピリピリしてるんだろう。後できちんと謝った方がいいかな、・・・ってよくよく考えたらこれも邪念か。

「さあな、それは知らん。吸血鬼つつても他にもいただろうし。なににせよ、吸血鬼になったやつがまた他のやつらを吸血鬼にして、その吸血鬼・・・のようにネズミ算方式が増えてったんだろ。この分だと無事な一般人はいないだろうな。・・・つまり敵の吸血鬼の戦力はこの市の住人だった約六万人ほどか・・・これ以上ないくらい大規模な軍団だぜ」

古王は冷静に状況を分析する。実際、六万と言うと日本の戦国時代では破格の大軍だ。桶狭間で大軍と呼ばれた今川の軍が二万五千だから、その二倍以上がどれだけの大軍かは想像できるだろう。まあ、今川は織田の小勢にやられたのだが。

・・・と、その時、不可視バリアの外で動きがあった。見れば通信機器のようなものを背負った一人の男が第七隊のリーダーらしき男の横に移動し、何かを伝えようとして、声を発する。

「リーダー！ 通信です！ どうやら、この吸血鬼たちは、こちらの市にいた民間人が吸血鬼化しているとの情報！」

「くっ、道理で数が多いわけだな・・・。増援は！」

「はっ、あと五、六分でこちらに到着する予定・・・いえ、増援部隊が吸血鬼たちと交戦中！ 増援部隊の到着は遅れる模様」

「ええい！ 各員、もう増援はアテにするな！ 気を抜かず一匹一匹仕留めていけ！」

と、第七隊の隊長が隊員に檄を飛ばす。隊員たちは一瞬、増援の遅れの知らせに顔を曇らせるが、すぐに考えを切り替えて、変わらず吸血鬼にあたっているようだった。さすがはプロといったところなんだろう。

トントン、

つと、その戦いに見とれていた俺の方を誰かが叩いた。振り返ってみると、俺の方に手を乗せているのは古王。

「・・・どうした？ 行くのか？」

「いや、それは今考え中なんだが・・・で、これからの方針どうする？ 吸血鬼たちは倒していく？」

方針？ ・・・というと、

「・・・それは、どういう意味で言っているんだ？」

俺が訊き返し、古王は何のためらいも無く言う。

「端的に言うと、あの吸血鬼たちが俺たちの前に立ちはだかった時、あいつらを殺すか？」

・・・。非情な質問だな。そんなもの、

「殺すしか、ないんだろ。どうせそれ以外の方法なんてあるはずもない」

古王は今更、俺に覚悟があるかを確かめようとしているのだろうか。そんなものは必要ない。俺の気持ちは決まっている。

そう思ったが、それは違った。

「いや、あるんだよそれが。ちゃんとした医療器具がそろっている所なら、比較的簡単に吸血鬼化したやつを人間に戻す治療法ってのが」

「・・・本当なのか？」

「ああ。それは人間界の医療魔術が開発した方法で、変化した体の構造やDNAの情報を元に戻す治療法だ。医療器具さえあれば成功率は100%に近いと聞いているぜ。ま、現実で言う盲腸を切る手術ぐらいの難度だろ」

どうやら古王は、そのままの意味で訊いていたらしい。吸血鬼化したやつは人間に戻すことが出来る。だから殺さず捉えておくか？ とも古王は訊いているんだろう。

・・・いや、しかしだ。冷静に考えて見ると・・・それは無理な話でしかない。

「だが、ちゃんとした医療器具がある場所・・・ね。確かに、そい

つらを一匹一匹捕まえて、もしそこまで運ぶ余裕があるのなら、第七隊のやつらだって吸血鬼をあやつて殺してたりはしないんだろうけどな。・・・効率と安全性を考えたら無理だろ、それ」

「あらら・・・、ばれてたか」

ばれてたもなにも、そうやってぬか喜びさせるだけならいちいち言うな。冗談にしても度が過ぎてるだろ。実際、ノフィーネもそうやってぬか喜びしてしまったらしく、今は悲しい顔でうつむいてるし。

「ああ、悪かったよ。だけどまあ、もしお前がいつらを助けることを選んだなら、全員は助けられないだろうけれど、『打倒、破壊神』を後回しにして、先に吸血鬼たちを助けてもいい、って思ったんだがな」

そう古王は言う。けれどそれは、俺たちが出来ること、とは違う気がする。

「例え俺たちがオマケ的に動いていると言っても、大本の根源である破壊神を倒す事を後回しにして解決に近づくとは思えない。それに第七隊にも助ける動きが無いってことは、世界としても吸血鬼たちは見捨てる方針になったってことだろ。つまり吸血鬼を助けようと俺たちが動いたところで、その間に破壊神の犠牲になる数と比べたら微々たるものでしかない。・・・悲しいけどな」

吸血鬼になった人たちは見捨てる。あえて俺は悪く言ったが、これが俺の答えだ。

その俺の答えを聞いた古王は感心したようにうなずき。

「よく分かってるじゃねえか、久郎。・・・俺の提案にすがりつくような意志の弱さだったら・・・とも思ったが、それだけ決意が硬いなら心配することも無いな。だけど・・・」

そして古王はノフィーネの方を向く。

「ノフィーネ、お前は『本当に覚悟が出来ているのか？ 何の罪も無い人の命を奪う事に、ためらいができていないか？』

「そ、それは・・・」

ノフィーネがたじろぎ言葉を詰まらせる。

「・・・おい、ちょっと待てよ古王。もともとはお前が出来る風に言ったからノフィーネが期待したんだろうが」

俺は反論するが、古王は至って冷静に返す。

「それでもだ。ノフィーネの覚悟が固まって無いことぐらいすぐに分かる。ノフィーネは・・・ノフィーネになってから一度も誰かを殺したことがない、だからためらいが生まれてるんだ」

「・・・」

ノフィーネはついに黙ってしまった。

しかしそれを言うなら俺も・・・と思ったが、そう言えば古王の百の体験の中で俺は何人も人を殺していた。それに小世界でも吸血鬼たちを何匹か殺している・・・だからだろうか、俺に殺すことへのためらいが無いのは。

そして古王は、ノフィーネに優しい口調で語りかける。

「ノフィーネ。お前が左手に持っているそれは、人の命を奪う武器だ。決して、人の命を守るものなんかじゃない。それだけは分かってるよ。・・・ま、ノフィーネが無理して誰かを殺すことはないがな」

「・・・はい」

ノフィーネが沈んだ声で返事を返す。そんな場合ではないのだろうが、俺はそんな様子のノフィーネがまた心配になっていた。・・・大丈夫だろうか。そう思った瞬間、俺の口が動いていた。

「ノフィーネ・・・、大丈夫か？」

「あ、うん。大丈夫だよ・・・古王さんの言う事もっともだし・・・僕も、甘かったんだと思う」

そしてノフィーネは空いた右手で握りこぶしを握り締め、なにやら決意を固めているようだった。・・・ひとまずは安心だろ。そんなじゃ、

「古王、これからどうする？」

「うーん、このまま第七隊の健闘を見てもしょうがないしな・・・」

・、先へ行くとすつか。ちょっと早足気味に行くから、遅れるんじゃないやねえぜ？」

と、言うが早いか、古王はすぐさま駆けだす。・・・いや、せめてうなずくぐらいの時間はくれよ、と内心想いつつ。俺たちは遅れないよう古王のすぐ後ろを走った。

C

「ふム・・・、圧倒的すぎるのもつまらんナ・・・。吸血鬼だけで事が足りているとカ、人間たち手を抜いてんじゃねえのカ？」

破壊神は、偵察に行かせた配下の悪魔一人からもたらされた情報を聞き、やや失望していた。もっと激しい戦いになるのかと思ったが、割と地味に小規模な戦闘しか起こらないのだ。

最強クラスVS最強クラス、なんてのがめったに起こらない事だとしても、それに準ずる程度の戦いはできるかなと期待していた破壊神にとっては、退屈極まらないことだった。まあ、その理由の一つに、破壊神の信者や元ベロ・ランザ卿の配下たちを自分の周りに並べて、前線に出さないと言うのもあるのだが。

「・・・」

そして創造神はさっきから黙っている。たまに破壊神が話しかけて見るのだが、何の反応も無い。始めは寝ているのかとも思ったが、そうでもなさそうで、何やら考え事をしているようだった。

「はアー、退屈ダ。人の心を読む魔法なんかがあれば、創造神が何を考えているのか分かるんだがナ」

と、呟いてみるものの、そんな魔法や魔術があるわけもない。・・・と、そんなとき、

バツサ、バツサ。

はばたく羽音の方向を見て見ると、破壊神が見張りとして置いておいた悪魔が、こっちにへと向かってきていた。破壊神はその悪魔に対して、何か異変があればすぐに知らせに来るように、と命令を

出しておいたのだが、

「まさか・・・!?」

破壊神は期待に胸ふくらませ、プレゼントをもらう前の子供のように笑顔になる。

ワクワクが抑えられないようだが、その体はベロ・ランザ卿のものである、爺が笑っている様子は少々キモかった。・・・いや、それはおいといて、

悪魔は破壊神の前に降り立ち、言葉を発して破壊神にそれを伝える。

「破壊神様。接近してくる者を確認しました。不可視バリアによって姿を隠しています」

「お、まじカ！ やっと人間にも骨のある奴が現れたカ！ よシ、そいつのところに悪魔をよコス。ナ適当に・・・お前ら行ケ！」

と、破壊神は適当に選んだ悪魔五匹を、その報告のあった場所へと向かわせる。

そして少し時間が経ち。

「全滅しました」

「ほう、早いナ・・・。てかそいつってどんな奴だった？ 不可視バリアぐらい剥がれたんだロ」

破壊神は少々驚きつつも、興味しんしんに偵察の悪魔に訊く。

「三人いましたが。二人は人間。一人は王でした。その一人の王に全員やられました」

「王だト？ ・・・あア、もしかしてあの時の・・・古王ってやつカ！ 確かにあいつは強そうだったナ」

「強そうなんてもんじゃない」

と、不意に創造神が声を出した。そのことにも破壊神は驚きつつも、創造神に訊き返す。

「というト？」

「・・・あれは、俺が知ってるやつの中で単体では一番強い。そう簡単に勝てる相手じゃない」

「ヘエー。てカ、お前なんできなりんなことを話すんだ？」

「別に、ちよっとした忠告だ」

それだけ言って、創造神はまただんまり。

「むむむむム・・・、お前がそこまで言うほどとはナ。マ、何かしらの罠にはめようと思っ言った可能性もあるが、ちよっと興味がわいた。・・・よしこうしよう、」

そう言って、破壊神は自分の周り一面にのさばらせている悪魔の中で弱い方から大雑把に四千匹、悪魔の総戦力の半分までに対して、こう言った。

「じゃ、お前ら・・・今すぐ古王を倒してこイ！」

・・・破壊神がそう言った瞬間、悪魔と信者の半数がいつせいに翼をはばたかせるなり、翼の無いものは走りだしたりと、古王の方にへと一斉に動き出した。

「くっくっく、死んでもいいからとにかく戦エ！そして俺を楽しませロ！ ヒヤハハハ！！」

その号令と主に、四千もの悪魔が同時に動く轟音が街の中に響き、まるでイナゴの大群のように建物を飲み込み壊しつつ、悪魔の集団は指示された敵を倒すため、その地区に向かって行った。

C

「ふー・・・、今のあいつら何だったんだ？」

古王は、やれやれという風に額の汗を袖で拭いながら言う。今のあいつらと言うのは、俺たちが先に進んでいた途中にいきなり襲ってきた悪魔たちの事だ。ま、誰もがその存在にいち早く気づいたおかげで皆すぐさま回避。誰も怪我することなく、古王が全てを片づけて終わったが。

ちなみに、不可視バリアを張ってはいたが、悪魔の中にはそのバリアを見破る事が出来るやつがいるらしく、今回の悪魔たちの中にはそんな悪魔の一匹が混ざっていたらしい。とりあえず戦いにくい

からバリアは今もはがしている。

さて、俺はあたりを見回してみるが、相も変わらず壊されたビルやら建物やらが左右両側に広がってる道路の上に俺たちはいる。・
・ほんと、破壊神どこよ。

「んー、破壊神本体の発見報告はまだないしな。だけど・・なんとなく大きな魔力に近づいて行ってる気がする」

「・・それってホントだろうな」

「ホント、俺信用ないよな。でも今回は大マジ。確実に大きな魔力に近づいて・・というよりも、あれ？　大きな魔力が近づいてきてる？」

なんだそりゃ。

「いや、俺にもよくわかんなくなってきたんだけど・・んー・・」

古王は目を細め、道の向こうを見る。・・俺には何も見えないが・・何か見えるのか？

「いや、道の方はまだみたいだが。・・ありやいや、こいつは馬鹿げてら。ちよいつと向こうの空見てみ」

と、古王は道の向こうから上に視線を移動し、向こうの空を指差す。・・えーっと、俺も目を細めてみるが、空には暗闇しか見えない。道を見通す分には街灯と建物の灯りで十分なんだが・・。

「あの、真っ暗でよく見えないんですが・・」

「む？　ノフィーネは夜目がきかない方なのか？」

ノフィーネの言葉に古王が意外そうな声をあげたが、

「いや、夜目がきくとかそういう問題じゃないと思うが・・」

「そうか？　赤外線で見えない？」
見えねえよ。

「んー・・、じゃあ、ちよつと目貸して」

そう言って、古王は障壁内に入る前のように、俺とノフィーネの目の前に手を置いた。また何かをするのだろうか？　そしてどうでもいい話だが、目貸して、なんて言葉初めて聴いた。

そして数秒後、

「・・・よし、おっけ。十秒ほどしか持たないから早めに見てくれよ」

そう行つて古王が手をどける。すると、俺の目線の先にあった空の景色が急に鮮明に映った。

・・・変な感じだ。暗いのに、雲や星が見える。こんな感覚どこかで・・・、

「これはなんですか？」

そうノフィーネが訊くと、古王は得意そうに答えた。

「ん、それはな、ちよつと魔力をいじつて赤外線で見えるようにしてみた。つまりは軍用の暗視ゴーグルみたいなもんだな」

なるほど。そう言えば体験の中でもそんなものをつけていた記憶がある。さっきの既視感はそのそれか。

さて、古王は十秒程度しか持たないと急かしていたし、向こうの空に目を凝らすとしよう・・・と思つたが、既に目をこらさなくても見えるところにそれらがいた。

向こうの空に見えるのは、死骸に群がるハエのいうな黒い点がうごめいている様子。だが、ハエのように見えるのは遠近感でそう見えているだけで、この距離で点なら至近距離だと・・・人ぐらいの大きさはあるだろうか。それがわらわらわらわら・・・と、数えきれない数がある。

「なんだあれ？ 吸血鬼？」

と疑問に思い、目を凝らそうとした時に不意に視界が暗くなった。時間切れか。

だがその俺の疑問に対して、まだ赤外線で見えている古王が答える。

「いや、あれは悪魔・・・元ベロ・ランザ卿の配下の中で飛べる悪魔たちだろ・・・なんかこっちに向かってきてるな」

・・・ん？ こっち・・・？

「え、それって、僕たちの方に向かって来ている・・・ってことで

すか？」

「んー、分かんが・・・、とりあえず逃げるぞ」

そう言って古王は俺たちを連れて、目の前の交差点を右に曲がり走り逃げる。そのままずっと走る。が、

「悪魔たちの進路が変わって・・・チツ、やっぱり俺たちの方に向かってきてるな。狙いは俺たちか」

古王は舌打ちをして苦言をもらす。そして次の交差点に差し掛かった時、俺たちからみて左の道路から地響きが聞こえてきた。気になり足を止めて左を向いてみると・・・！

ドドドドドドド・・・！

その先に居たのは悪魔とか、巨人とかオーガとかオークとか、その三つの違いがよく分からなかったりもするのだが、とにかく数えきれない数の魍魎魍魎たちが地響きや砂埃をたてながらこっちに向かってきていた・・・！俺たちとの距離は約百メートルほど。

「うおお！？　まだあんなにいたのかよ！」

つい、俺もそのインパクトすぎる光景に叫んでしまう。てか、いやいやいやいや！道路や歩道を埋め尽くしているどころか、建物を突き破ってまで迫ってきているやつがいるぞ！　いったい何匹いるんだ！？

「ちよっ、古王さん！？　こ、こっちに向かってきて！！」

「んあー・・・、どうしたもんかねー・・・」

古王はボリボリ頭をかきつつ、泊まっていた足を再び動かす。進路は真っ直ぐ。

「お、おい古王。このまままっすぐでいいのか？　いったん戻らなくても・・・」

「はっはっは、流石に百の体験をした久郎もこれにはビビるか？　・・・走りながら笑う古王に、ムカつとしなかったと言えば嘘になるが・・・そんなことは今どうでもいい。

「いやだが、あの数・・・というかあの量は無理だろ！　それに俺たちの走るスピードじゃ追いつかれる！」

「だけでも、あれらが俺たちを追ってゲートの近くまで来たら、入り口近くは大混乱になるぜ。ゲートはいくつかあるが、そのうちの一つでも破られたらそこで終わりだしな」

それは・・・確かにそれもそうだな。しかし、

「ならどうするん・・・」

と俺が言いかけた時、古王は走る足を急に止め振り返り、慌てて立ち止まりそうになる俺とノフィーネに言った。

「おっと、お前らはそのまま走り続けろ。・・・あいつらは俺がくい止める」

そして古王は道路の真ん中で片足を立ててしゃがみ、何かを唱え始める。

「って、おい！ 一人で、って・・・一撃かすっただけでも感染するんだぞ！」

そうベロ・ランザ卿や時神のように、ダメージが少なくとも傷は傷。体内に侵入されればそれまで。だが古王は、

「なあに、心配するな。ちょっと本気出すから・・・さ。さっ、早く行け！ 危ないのはお前らも一緒だ！」

古王が叫び、俺とノフィーネはそれでも一瞬迷ったが、古王の真剣な目に諭され、言われた通り道の向こうへと走りった。

「久郎！ おそらく破壊神はあの悪魔が来た方向にいるはずだ。すぐに追いつくから先に行ってる！」

後ろから古王の声が聞こえた。・・・少し振り返って見れば悪魔たちは空のも含め、あいつから数十メートルの所まで迫ってきていた。数は・・・目測ではよく分からないが百や二百なんてものではなく・・・、『刹那の延長』を使って大雑把に数えてみると千を超えているように思える。

「・・・加勢しなくても、いいのかな？」

ノフィーネも心配そうに訊く。も、というのはつまり、俺も少なからず心配はしているということだ。だが、

「俺たちが行っても足枷になるだけだろうな。それに、なんとなく

だが・・・」

そう、本当に何となくなのだが・・・、

「横目でちらっと見えたあいつの目は、今までに見たことが無い・・・
・本気の目だった気がする」

ま、ただそれだけなのだが。それに今は己の身を案じるべきでもある。いつ吸血鬼が襲ってくるかも分からない状況、感染の危険性があるのは俺たちも同じだ。

俺は『命断』を使い、手にエリクススを召喚。吸血鬼が突然襲ってこないか用心しながら前に進むことを続ける。

C

「ふむふむ、どうやらあの悪魔たちの狙いは、俺たちじゃなくて、俺だけだったみたいだな。あいつらの方には関心を向けてないように見えるぜ」

と、古王は呑気に言うが、道路を行く悪魔たちとの距離は二十メートルほど、もう目と鼻の先にまで近づいている。それでも、古王はつぶやきを止めない。

「あいつらの目なんか血走ってんなー。感染者ってのはみんなあんな感じなのかねえ。・・・俺はいやだな、あんな目するの」

そう言いつつ、あと十メートルの距離。そこで古王は言葉を唱える。

レジエンドイコールパワー

「歴史Ⅱ力。歴史とは微々たる重みを持ち、それらは積み重なることで何にも勝る重さを持つ・・・以下略」

めんどくさくなったのかは知らないが、自分で以下略と言うのはどうなのだろうか。まあ、時間的な問題もあるのだが。

そして魔物たちはもう目の前にまで迫り、獣のような口を持つ低級悪魔はその大きな口を開け古王の首筋を噛み砕こうと目論む。だが、

「凝縮『超大古剣』！」

古王は手に召喚した剣を後ろに大きく振りかぶり、横に大きく振りはらう。されば、

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!

その大剣からは今までの『超太古剣』とは比べ物にならないぐらい強力な衝撃波が発せられ、古王に群がろうとした獣のような悪魔たちが、まるで塵や埃のように剣に払われる。

ニギヤ、ギヤツギヤツギヤツギヤ!

低級悪魔たちの悲鳴が響く。破壊神に感染し、『古王を倒せ』という命をうけてはいるが、本能的に力の小さい悪魔たちは我が身かわいさに古王より距離を取る。

「ほらほら、どした! 囲むなり好きにして、一斉に襲ってくれば俺を倒せるかもしれないぜ?」

古王は片手を大剣から離し、手をクイツとさせて挑発。しかし感情も無い感染者にはそれに応じる者はおらず、しかし命令は命令なので好き勝手に突撃する。その悪魔たちの中には以前古王が苦勞して倒していたあの巨兵の姿も見える。

だが、古王は技名も何もない一振りで、巨兵も含めまとめて両断していく。その一振りにて数十匹は一気に消滅しただろうか。と、その時、

「ほオ・・・、案外、考えているんだナ。確かにビルとビルの間のようなせまいところでハ、大多数が相手でもまともに立ち向かえル」
不意に、声を発する事の無いはずの感染者の中から声が聞こえた。その瞬間悪魔たちの動きもピタリと止まり、何事かと古王は声のした方を凝視する。そこには一匹の悪魔が、そしてその悪魔の手には丸く蒼い水晶玉があった。その水晶玉に、一人の老紳士の姿が映っている。

「・・・なんだ? その声はベロ・ランザ・・・じゃなくて破壊神か?」

「おう、正解ダ、古王」

その声は水晶玉から聞こえてくる。おそらく通信機やカメラの役

割をしているんだろう、それに向かって古王は呼びかける。

「で、何の用だ？」

「いや、何の用と言う事も無いんだが、確かお前、こいつとの勝負がまだ決着ついてなかったよナ」

そう言っって水晶玉に映る破壊神は親指で自分自身を指す。・・・いや、正確には今破壊神が乗っ取っている体、ペロ・ランザ卿と古王との戦いの事を言っているのだ。

「こいつの記憶を見てたんだが、いやなんか結構面白そうじゃないノ。デ、その戦いの続きが俺は見たくなかったわけダ」

「ああ、つまり。あの時の続きを今やろうと？」

「その通りダ。まア、お前に回している戦力は半分程度の四千匹ぐらいだガ、それでも楽しめるだロ」

破壊神は愉悦そうに言うが、古王は苦笑い。

「ははは・・・、俺は全然楽しくないんだがな。なんせあの時と違って、今の俺は感染しないために、ノーダメクリアしなきゃいけないんだぜ？」

「くくくく、だから頑張れヨ、そのノーダメクリアって奴をサ。マ、この場は俺が指揮するからそれはかなり難易度が高いガナ。ヒヤッハッハッハ！」

そう言っって、破壊神はまず初めの指示をする。すると、悪魔たちは一斉に古王ではなく、その両端にそびえ立つビルを攻撃する・・・！

ドドドドドド・・・！

崩れ落ちるビル。たったの数秒後で、古王の周りは空き地だらけの四方が、ガラーンとした空間になった。

「ありゃりゃ・・・せっかくの俺のアドバンテージが・・・」

「さてこれデ、お前を四方から囲む事が出来ル・・・！ さア、どうするよ古王オ！」

そう言っって破壊神は悪魔たちに突撃を命ずる。一斉に動き出す悪魔たち。古王も応戦して剣を振るがただの一振りじゃ数は払えない。

「なら・・・『歴史の砂嵐』！」

古王は大剣を砕き、あたりに砂嵐を起こす。それを見た破壊神はすぐさま突撃しようとしていた悪魔たちを下げさせる。

「ん、慎重だな・・・、決死の覚悟で来れば、この大剣一本分の砂嵐程度、潜り抜けられたんじゃないか？」

古王は笑って言うが、

「ふん。何が一本分ダ。あきらかに『砂』ではなく『砂嵐』な時点デ、あの時とは威力が断然違うことぐらいすぐ読み取れル。むしろ、なんで一本なのにその威力が出ているんだ？」

破壊神が訊く。その問いは何となく出したものだったが、意外にも古王はすんなり答える。

「ああ、それはな。『超太古剣』ってのは言わば歴史の砂の塊だ。普通の大剣並みの威力を持つ『超太古剣』は五百年分で一本だが、こいつは五千年分の歴史を凝縮して作ったもの。つまり威力も普通の10倍」

その説明に破壊神は少なからず興味を抱く。

「ほー、五世紀分で一本か。つまり人間界の歴史を全て記録したなら人間界だけで計八本程度はある、と言うわけだな」

「・・・お、理解が早いな」

古王は感心し、そして砂嵐を一本の大剣に戻す。その砂嵐を解いた行為が何を意味するのかは破壊神には察せられなかったが、何かをする気だと言うのは察せられた。

「ふム・・・、なら、こちらも手を打つカ」

そう言っって、破壊神は悪魔たちの中に一人いた元信者の魔術師に、ある程度以上は強力な悪魔たちにある魔術の呪文を唱えさせる。・・・そしてその呪文を、古王は知っていた。

「む・・・、『誘爆』か」

「ザツツライト！俺はつまり、お前に傷さえ与えれば勝ちなのだからナ！」

『誘爆』の魔術とは、つまりそれをかけられた者が絶命した時に、

自爆する特性ように体の性質を帰る魔術である。絶命した瞬間に残った自分の体をトリガーに自分の魔力のすべてを爆発させ、何も残らなくなるので非人道的と非難させられている魔術だが。・・・破壊神の目論みはこうだ。

古王は大剣を使つての攻撃がメインだ。遠距離にしる近距離にしる大剣を使わなければ始まらない。だが、大剣というのは本来近距離武器。そのもっとも有効な距離は、誘爆によって被害を受けるために使えない。

そして、遠距離として使うには砂嵐にするか投擲ぐらいしか方法はない。

さらに破壊神は古王について少なからず情報を持っていた。『歴史』と言う名の情報を力に変えるたらなんとら・・・まあ、仕組みは分からないがそういう変わった力を持つ王。

そして、古王は人間界はおろか、王界や魔界の歴史も網羅している。王界は地球換算で約百万年以上栄えた文明だと聞いているし、魔界も三十万年ほどの文明の記録があるという。他にも天界やらなんやらで・・・単純に計算すればその大剣の数は・・・最大で四千本程度は軽く超えると思われる。

だが・・・、五百年で一本と言うのはあくまで、普通の威力の大剣のめやす。普通の威力の大剣程度の一撃ではいくら下級の悪魔でも一撃ではやられない。さらに投擲にいたっては自らの力を投げる瞬間にしか加えることが出来ないのだから、なおさら普通の大剣の威力の一撃でやられるはずもない。単純計算でここにいる悪魔の数が古王の剣の数を上回る。

問題は砂嵐だが・・・、これも長時間の維持は出来ないように思える。さっき古王が砂嵐を解いたのがその証拠。

つまり、近距離で切っても爆発でアウト。遠距離では弾切れならぬ剣切れでアウト。砂嵐から剣に戻す時間の都合上、一旦砂嵐にすれば件には戻せない。砂嵐だって、上級悪魔にはきかない者もいる・・・！

(完璧ダ・・・これハ・・・勝つタ)！

破壊神は内心愉悦を浮かべる。さらに詰めを見誤らないために、一万の吸血鬼もここに集まるように命令を出した。あと数分でこの場に吸血鬼たちは終結するだろう。その吸血鬼たちに『誘爆』の魔術を使えばさらに完璧。

だが・・・古王は、笑っていた。これ以上ない問うぐらいに、悪者のように、ニヤリとした目で。

「・・・なんだ、その目ハ」

「いや？ 勘違いってのはよくある事だよな、って思ってたさ」

勘違い？ その言葉の意味を破壊神は察することが出来ない。同時に、苦し紛れの言い訳にも聞こえる。そして、その内心を読んだかのように古王は言う。

「そう思うなら、かかって来いよ。どうせ強いやつらは手元に残してるんだろ？ ここにいる奴らを失ったぐらいで、痛くもかゆくもあるまい」

・・・古王は挑発する。その言葉に胸の内を見透かされたことに対する怒りが、破壊神の中に沸々と湧き。

「・・・いいだろう、全員、突撃ッ！」

その破壊神の号令とともに、古王の四方を囲んだ悪魔たちは一斉に古王を襲う。

それに対し、古王は両手に大剣を召喚しすぐさま手当たり次第に投げる戦法で迎え撃った。召喚し投げる、召喚し投げる、その行動を繰り返す。その動きはまるでナイフでも投げるよう。決して遅くはないスピードの魔物に対し、軽々と素早く放つ。

古王の狙いは的確で、確実に一匹一匹に大剣を投げてはブツ刺し、大剣が刺さったままの勢いそのまま悪魔は遠くまで吹っ飛ばされる。そうやって古王は自爆を自分から離しているのだ。さらに古王は時たまに瞬間的移动で悪魔たちの間を縫っては距離も取る。

だが、悪魔たちも移動した古王にすぐさま襲いかかるし、その戦法ではこちらを全滅させるのに剣が足りない。破壊神には勝算があ

るからこそ、その時をぐっと待つ。

三百、四百、五百。古王は次々に大剣を出現させては投げる。

六百、七百、八百、そしてその数は千に近づいて行く。その中で、偶然連れてきていた強い悪魔に対し、何本分かを凝縮させた大剣を使っているのも見えた。

九百、千、千百、大台に乗ってきた・・・悪魔たちは確実に減ってきていて、誘爆に味方が巻き込まれていたりもするが気にしない。吸血鬼たちも徐々に集まって来て、減る数よりも増える数の方が多くなる。さらに古王は次第に一本で二、三匹をまとめて倒そうと狙ってくるようになった。

二千・・・二千五百、二千七百、二千八百・・・次第に減られる悪魔の数が減っていく。・・・思えばこれだけの悪魔が散っていたが、そろそろ時間。

「今ダ！ 全員突撃ッ！」

そう言って破壊神は、温存しておいた吸血鬼たちも含め、四方より一世に突撃させる。悪魔たちは吸血鬼たちも加わって限りなく密集するが、そのおかげで間を抜けるなんて芸当も出来やしない。

あれだけ大剣を投げた古王に、もう大剣は残っていない。古王も外面は平静を装っているが、少し息が切れている。

包囲も崩れていない、こちらには一万程度の吸血鬼と悪魔、こちらの敗北要素は何一つとして無い！！

「これで終わりダ！ 古王！ ヒヤハハハハ！！」

「ありやうや・・・これは、もう・・・駄目かな」

狂ったように笑叫ぶ破壊神。そして古王は、負けを認めるかのように、その頭地面に垂れ、片膝立ちでしゃがみこむ。

「なんだ？ 今更わびようとしても無駄だゾ！ ヒヤハハハハハ！！」

破壊神の声は大気を震わせるほどの叫び声で古王の耳に届けられた。

そして、古王は、垂れた頭の下で、一言、二言呟いた。

テンションを変え興味しんしんに古王に訊いた。そして、古王は答える。

「ああ、その通りだぜ。だけどな・・・歴史ってのは、人の数だけあるんだぜ?」

その答えに、破壊神は釈然とせず、水晶の向こうで首をかしげる。そしてそんな破壊神に古王は親切にも丁寧な答えてやるのだ。

「歴史ってのは、観測者の分だけ存在する。お前が今までに感じてきたものと、俺が今までに感じてきたものは違うように、それはまた違う歴史。・・・つまりはこういう事だ・・・!」

そして古王は見せつけるように、自分の周りに地面に突き立った大剣を召喚させる。その数は・・・数千、数万、数億に収まらない。古王が空間を自分の力で辺りの空間を歪ませていなければ、障壁内を埋め尽くすんじゃないかと思われる量の大剣の森がその場に広がる。

それを見て、破壊神は啞然と・・・そして何かを納得したような顔になる。

「・・・なるほど、創造神が言ったことと全く相違ないナ。こいつは俺の総戦力を持ってしてじゃないと勝てそうもないぜ。どういう強さしてんだお前?」

古王が見せた大剣の森。それは、今まで自分が大きく手加減していた事を現すもの。今はもう消えているがさっきまで姿を見せていたそれは、最強クラスと言っても異常。下手をすれば世界レベルの力も持っていないかね・・・。

だが、古王はあっけらかんと。

「しいて言うなら、こういう強さだな。でもまあ、お前が思ってるほど強くはないさ」

「謙遜力? 謙遜もそこまで行くとバカにしているようにしか思えないゾ。まッ、別に人の自己評価にとやかく言うつもりはないガ。・・・たダ、一つ理解できないことがあるナ」

「理解できない事? なんだそれ」

「それだけの強さがあれば。こんな事態になる前に終わらせること
も、ましてや今すぐここに居る感染者を片づけて解決させることも
できるだろう二」

「・・・・・・」

古王は黙る。そして一本の大剣を右手に出し、瞬時に水晶を持た
悪魔の前に移動する。

そして大剣を振りかぶった時、最後にこう言う。

「それじゃあ、つまらないだろ？」

そして、それを聞いて笑っている破壊神の顔が映る水晶を、悪魔
ごと真っ二つに切り裂いた。

C

「流石に、多勢に無勢か」

対策室にてバスター総帥が呟く。その会議場のモニターに移され
る戦局は、不利とは言わないまでも、ここ最近では一番のひどい戦
だった。

モニターには被害報告も届く。

「報告、現在、約十二部隊の全滅が確認されています。部隊の増援
も継続的に送りこんでいますが、ただいま三番ゲートと七番ゲート
が封鎖されています」

モニター越しの軍人がそう報告を述べる。その報告、訊けばあま
り被害が出ていないような気もするが、今回はわけが違う。なにせ、
やられた味方は全て敵になるのだから。一つ部隊が減るだけで、そ
の戦力差は二部隊分に広がる。

なお、既に各国要人たちが口を出せる雰囲気にはあらず、各員落
ちつかぬ様子で指を動かしたり、貧乏ゆすりをしたり。落ち着いて
いるには例の三人、御老体と防王と総帥。

その中でも、今一番働いているのは、戦闘が専門分野である総帥。
「ふむ、ならば補給部隊も全て戦闘部隊として扱え。特別強化部隊

の出撃も許可する」

「え、補給部隊と特別強化部隊・・・もですか!？」

モニターの向こうの軍人は驚く。補給部隊は文字通り補給をする部隊。戦闘訓練は積んでいるとはいえ、実戦経験は少ない。そして、特別強化部隊とは人体強化を施された改造人間の部隊。その実その部隊には二人しか存在せず、まだ実戦で運用するレベルには達してはいない。だが、

「いいから出せ。時間稼ぎをさせろ」

「は、はっ!」

総帥は冷酷にモニターの向こうの軍人に告げた。・・・その総帥の態度に、周りの要人たちは異常なものを感じた。

時間稼ぎをさせろ・・・その言葉に、事態を察した数人は、ハツとする。

そして、それらの要人を代表し防王が口を開く。

「総帥。時間稼ぎをしろ、というのは御自分の部下にあまりにひどいんじゃないませんか？ それではまるで勝ち目のな戦に送るみたいですよ?」

「勝ち目のない戦ではないのなら、どんな戦だ？ これは」

総帥は口をイヤな笑みで歪ませ、防王の問いに答える。

「さて、勝ち目のない草と総帥は言いますが。ならば、どうします?」

「ふっ、決まっている・・・」

総帥は座っていた椅子を立ち、会議室全体をにらみ直し、宣言する。

「我々はこれより、魔力型核兵器を使う!」

Cの32話「後答」

「魔力型核兵器を使う！」

総帥が立ちあがり悠然と言い放った言葉に、会議場はどよめいた。それは「核を使用する」と言う事に対しての動揺でもあったがそれよりも、「魔力型核兵器」という聞き慣れぬ名前に対する、不審感からくるどよめきでもあった。

とはいえ、てんでバラバラに話しても総帥は答えようとはしないので、代表として防王が訊く。

「総帥、一つ訊きたい事があります」

「なんだ？」

「・・・その魔力型核兵器とは一体何です？ 我々はそんなもの、訊いた事も無いのですが」

防王はこの会議場の席についてから初めて笑顔以外の険しい顔を見せる。

『王さえも知らない新兵器』・・・これが問題だったからだ。

王界には核兵器と言うものが無い。もしくは昔あったのかもしれないが、バイオアムが崩壊寸前の王界では核反応のような化学反応は起こらない者が多く、王界では核兵器は無用の長物。王が核兵器のことを知らないのは、うなずける話だ。・・・だが、人間を監視する立場でもある外交官の防王が、核なんていう人間界最強の威力の、それも新兵器について今の今まで何の情報も掴んでなかったということはつまり。

『表の世界にも、ファンタジー世界にもその存在が隠された新兵器』ということ。

そんなにたいそうに、王にさえ気取られないように隠した兵器が、まさか対魔物専用・・・なんてわけがない。

防王と会議場に緊張が走るが、総帥は悠然と言い放つ。

「ま、知らなくて当然だろうな。それはバスター本部にて秘密裏に

開発されたもんだから」

「か、核を一組織が保有し、あまつさえ新兵器の開発だと・・・！？」

「・・・いや、『バスター』ならあり得ない話ではないだろう」

『バスター』というのは、言わばファンタジー世界における警察であり、警備員であり、護衛であり、軍隊である存在。どこの国も協力を求め全世界各地に支部が立ち続けた結果、今では大国並みの戦力を持っていると言われている。それならば核兵器を開発するなどと簡単だろう。

そしてさらに、『バスター』の中心部たるバスター本部は、誰にも所在地が分からず謎に包まれている。そこは王ですら実態がつかめない場所であり、そこならば秘密裏な開発も可能だろう。

「それで、その新兵器とは一体どんなものなのです」

防王が表情に笑みを戻し訊く。疑うべき点はいくつもあったが、今ここでそれを追求しても仕方がない。それに、ここで説明を受けてもらえるのなら、不審感情は流してもいい、そう考えたからである。

そして総帥は、脇に置かれていた一つのトランクから何枚かの紙を取り出し、目の前の机の上に叩き出した。

バンッ！

「これがその、設計図だ！・・・ま、ここにいる大抵のやつらには理解できないだろうがな」

なら、何故出した。

と会議場の誰もが思ったが、特につまらないことにした。

「これは・・・爆弾ではなさそうですが」

防王がその設計図を見て呟く、確かにその設計図を見れば、・・・あらかたの内容は理解できないものの、全体の構造図を見る限りでは、その球状の外郭に包まれた内部は、爆弾の構造に比べて精緻に描かれていた。

それを訊かれた総帥は、ニヤリと不気味に笑った。いや、本人に

はそんな自覚は無いのかもしれないが、総帥ほどの凄みを持った人間が笑うと誰でも不気味に感じるもの。・・・そうして周りを不気味な笑みで震わせながら、自慢げに言う。

「そう、その通りだ。これは爆弾じゃあない。だが、何も核反応によって起こる熱、爆風、放射能を使うものだけが核兵器とは言うまい？　・・・この設計図に書かれた兵器は、核を動力にした光学兵器だ！」

例えば、原子力潜水艦などは推進動力に核を使っている。これも核反応を利用しているのだから核兵器と言えるだろう。そして、総帥はそれと同じように、光学兵器・・・つまりレーザー砲やビーム砲のエネルギーを核反応から得る兵器だと説明する。

「とはいえ見ての通りこの兵器は球形。仕組みも核反応によって生じたエネルギーの一切を魔力性の光に変換し、それを全周囲に対して放射して障壁内全てを光で焼き尽くす代物だ。つまり、爆弾ってのはあながち間違いじゃない。運用方法も上空に落とすって、爆弾的使い方そのものだしな」

核反応のエネルギーを全て光に変換、その光によって障壁内を焼き尽くす。・・・破壊神はウイルスだから焼く事がベストだ、と先ほどの話に出ていた。だから総帥が使用を提案するこの光学兵器は現状況では大変有用だった。

さらに魔力性の光は、現実の太陽や蛍光灯などが発する光とは全く異なる存在で、差した光は生物を鋭い刃物のように刺し、その辺りから徐々に全身を焼き尽くす魔法的性質がある。

熱を使わずに『光』で焼き尽くすその性質から『冷たい光』と呼ばれることもある。

「なるほど・・・それであれば、障壁や建物に被害を与えずに生物だけを死滅させることが出来ると言うわけですか・・・。エネルギーを魔力の光に変換する装置などと言うものができているのか、などはおろかな質問でしょうね・・・」

「ああ、その通りだ。よく分かってるじゃないか」

総帥はニヤリと笑い。防王は爪を噛む。それは彼が考え事をするときの癖なのか分からないが、それを今無意識にでもやっているということは、少なからず総帥に対して驚きを隠せずにいるという事だろう。焼き尽くされることが弱点の破壊神の登場に対し、『冷たい光』を大量に発生させる新兵器を、まるで破壊神がウィルスであると言う事をあらかじめ知っていたかのように投入するとは……。

いや、もしかしたら、『バスター』はいかなる状況にも応戦できるように、この新兵器以外にも新兵器の開発をしている、もしくは終わらせているのかもしれない……！ そう考えると、防王はこの総帥という男が、とんでもなく恐ろしくなった。

（たった一人で『バスター』という組織をここまで大きくし、なおかつ誰にも弱みを握らせない。……人間側の要注目人物であることを再認識せざるをえないようだ）

そう思い、防王はこれ以上の発言を止めた。これ以上何も訊く必要はないと思ったからだ。しかし、要人たちにはまだ訊きたい事があるようだった。

「だが総帥……少しいいかね」

「なんだ？」

「この兵器を使うと言う事は、味方をも巻き込むと言う事ではないのかね？」

要人の一人が訊く。しかしそれはあまりに愚問。

「もとよりその覚悟だとも」

と、総帥が言うだろうから、防王はあえて訊かなかった。否、訊く必要も無かった。

「し、しかし……君の部下たちもいるのだぞ」

「……先ほど俺は言ったぞ。シエルターは用意されているだろう、と。ならば、生き残りたいやつはそこに入ればいい。無論、新兵器が使用される直前に、だがな」

総帥の目が鋭く光る。その目ははたして、人の命を何とも思っ

ない者の目か、それとも自分の部下に逃げ遅れる奴などいない、という自信なのか。それは誰にも分からない。

一人の要人はその言葉を聞いて口をつぐみ。代わって他の要人が発言する。

「それで、何発使用するつもりなのか、その新兵器を。さすがに一発だけでは、建物の影に隠れた悪魔などは淘汰できませんが・・・」

そう、光の弱点は遮蔽物。熱を発しないので遮蔽物を伝って熱を与えるとか、そもそも遮蔽物を破壊することが出来ない。そう考えると、とても二発や三発では物足りないのだが。

しかし、総帥は鼻で笑う。その程度、予見できていないはずがないと。

「無論、威力や討ち損じ、失敗することなども考慮し。五発撃つ予定だ」

「五発・・・しかしそれでは全ての遮蔽物の影に光を刺すことなど不可能なのでは？ これでは必ず撃ち損じが生じます」

ま、それを言ってしまうえば何十発と新兵器が必要となってくるのだが。要人の一人はほんのいじわるのつもりで訊いたのだった。が、「ふっ、魔物は何を狙って動いている？ 人だろう。ならば最終的に人が集まる場所・・・シェルターの近くにある遮蔽物を、あらかじめ工作部隊を使って破壊しておけばいい」

その言葉に要人は息をのんだ。つまりは、陽動作戦ということ。この男は、どれだけ自分の部下を酷使すれば気が済むのだろうか。

要人たちが総帥の非情さに恐れている時、防王はある疑問を抱えていた。・・・現場には忍者や魔術師と言った、日本の他の組織から来たものや。海外から来た他国の魔術軍隊なんかもいる。しかし、その中でも最も数が多いのは、なによりも総帥の組織『バスター』の隊員たちだ。そもそも、バスターの構成人数が減って一番損をするのは総帥のはず。ならば、なぜここまでバスターの隊員を犠牲にするような策を取るのか。

それによってメリットがあるわけでもなし、それとも、この総帥は部下を信じ切っているからこそ、この策を取っているのか。・・・防王には分からない。分からないからこそ恐ろしかった。

そして静まる会議場の中、総帥は全員に向かって言い放つ。

「反対意見が無いなら。これを会議での決定として、実行させてもらう。誰か異論のあるものは」

と訊かれ、誰が手を上げるといのか。おそらく他にも疑問視すべき場所はあるのだろう。しかし、それらすべてに対する答えを、この総帥と言う男は用意している・・・誰もがそんな気がしていた。

「責任はお前が取るのじゃぞ」

その御老体の言葉が、皆の総意をまとめた言葉。総帥はその満足いく答えに笑みを浮かべ。すぐさま、モニターの向こうに伝えた。

「こちら対策本部。『Nレイ』作戦の執行が決定された。物はすでに搬入してある。すぐに取りかかれ！」

「はっ！」

C

俺たちは走る。ひたすら走る。

バサッ、バサッ！ キイイイイ！

「またかつ！」

そして吸血鬼がまとめて襲ってきては、縛槍エリクソスを投げ、そのすべてを捕縛、鎖で首を締め付け適当に気絶させ先へ進む。・・・さっきからこれの繰り返しばかりをやっていた。これ実はループしてるんじゃないかと疑いたくはなるが、町並みは少しずつ変わって言っているのですんなことは決してないのだが・・・いい加減面倒くさくなってっきた。

RPGで言う魔物の出現エンカウントの感覚が狭く、出現確立が多いって感覚。早く進みたいのに、いちいち魔物に引っ掛かる上、

にげる行動がなかなか成功しない、と言えば共感してくれる人は多いはず。その場合、ゲームだったらこまめにセーブしてだの聖水を使うだのすればいいんだろうが、現実ではそうもいかない。

「久郎君！　また来た！」

『久郎様、あちらからも』

うがー、ちっとも進めん。とりあえずエリクソスを投擲、捕縛、絞殺の一手手前で止める。・・・しかし、何だかんだ言って俺も甘いな。ノフィーネの手前、殺すことはなるべく避けよう、と言い訳をしているが。本当のところは殺人行為にまだ恐怖があるのかもしれない。あの時の体験は、まだ自分が必死で生き残ろうとする状況だから躊躇なく人も殺したが、今はほぼ圧倒的。一方的な加害者の立場だ。

吸血鬼だからと割り切ってもいいが、そう簡単に割り切っては、何か大切なものを失ってしまう気がする・・・。それが何かは分からないし、それを戦闘中に考えようとも思わないが。

『戦場では、一秒考えただけで死ぬ。しかし、考えなくても死ぬのだから難しいbyジョン』

・・・それ、どこのジョンさんの言葉だ。絶対今お前が考えただろ。

『・・・ばれましたか。しかしこれは生きた故人と言われる私が考えた言葉です。深い言葉だと思いませんか？』

自画自賛だな。てか、生きた化石みたいに言うな。それに、前者は隙を突かれて死ぬ、後者はただ殺す兵士として精神が死ぬ、な意味だろ。

『・・・驚きです。頭良くなりましたね、久郎様』

うっせい。ただ自分で物事を考えるようになったただけだ。そんなことより、周りに敵は？

『吸血鬼は集団でしか襲いかかってはこないようですから・・・周りにちらほらと集まってきてはいますが、襲撃まではまだ数十秒ほど』

それでも数十秒なのか……。ま、しゃーないのだが。

諦めて、エリクソスを構え直しながら走る俺。

「ねえ、久郎君」

ふと、並走するノフィーネが話しかけてきた。

「なんだ？」

「古王さんと合流するって言ってたけど、僕らが先に着いてしまいそうだったらどうする？　僕ら三人じゃ太刀打ちできないよ、きつと」

「あ……。」

三人と言うのは、しっかりメイナも人として数えているわけで、少しメイナがうれしそうだったがそれはさておいて……。んー、合流についてはよく考えてなかったな……。しかし、こっちが先についてしまったらどこかに隠れているべきだろう。どうせあいつのことだ、どこに居たってすぐに見つけてくるに違いない。

「どうせあいつが先に着くだろ。何だかんだ言って強いし」

そうやって先回りして「よ、遅かったな」とか言ってるところが容易に頭に浮かぶ。

「とりあえず今は、今を戦うことに集中……。するっ！」

ビュウン、と飛んでいくエリクソス。ハザードには効かなかったこいつも、成り立て吸血鬼たちには凄く有効で助かる。そして絞殺ギリギリでとめて、と。

バリン！

「っ！？」

空中で異音が響いた。俺はそっちを見やることよりも、その場を動く事を先決にする。

ドゴッ！

そして、俺たちがさっきまで居たところに一匹の吸血鬼が降り立つ……。動かなければ、俺たちもあいつらの仲間になっていただろう。

「くっくくくく……。こんなところで会えるとはな。我が輩にも

まだまだ面白い役は回ってくるようだ」

この笑い声、そして自分の事を『我が輩』とか言う一人称で呼ぶ奴……。

「ハザード!？」

「ハザードさん!？」

俺とノフィーネは同時にその名を呼ぶ。しかし俺が苦い表情で呼んだのに対し、ノフィーネは笑顔で呼んだとはどういう事だろうか。確かこいつは敵だろうが。

ってこれは邪念だな。とりあえず、さっきの異音は、こいつが自分に絡まってきた鎖を断ち切った音らしい。他の吸血鬼に関してはまだ捕まっているが。……ハザードが口を開く。

「くっくく、女よ。あの後変わりないようだな。そして我が輩が宿敵クロウも、相変わらぬいい反応を見せてくれる……」

ハザードは口元に笑みを浮かべ話しかけてきたが、こいつと関わっている暇はない。

「で、お前何しに来了。今忙しいんだ、やるってんなら一瞬でやられるか、後にするか選べ」

「くっくく、つれん奴だ。今回は争いに来たのではない。むしろ、助けに来たと言ってもいいか」

ハザードは両手の平を前に出しながら言う。……なんだ、今、助けに来たって、そう言ったのか? ……うさんくさいな。

「……なんのためにだ」

「くっくく、決まっている。それが面白そうだから、そして破壊神は我が輩の執事を奪い、我が輩の吸血鬼王が怪我されるような事をしでかしてきたからだ! これには、さすがの我が輩も黙ってはられないのだよ」

……とか何とか言ってるが、俺は信用しない。ジト目でハザードを見続ける。納得できなかった事は無いのだが、とにかく気に入らない。

「……」

「いや、久郎君。そこまで疑ってかからなくても」

と言うが、そう言うノフィーネがむしろ甘い。ノフィーネだってこいつに誘拐されたのに、何でこいつの肩を持つのか。

「でも、味方は多い方が心強いし、なによりハザードさんはいい人だよ」

と、満面の笑顔で言われる。・・・うん、ノフィーネがそう言うなら信じようか。

『・・・久郎様』

なんだその目は。イイじゃん別に。ノフィーネだって初めて会った時より表情も柔らかくなって笑顔を見せてくれるようになったし。

『それと今の決定に、何の関係が？』

・・・あーもー、細かいことはいいんだよ！ どうせ俺は笑顔に弱いですよ、ええ！

内心自暴自棄になりつつも、俺はハザードの前に歩み出て、右腕を差し出す。

「ん？ これは？」

「握手だ。一応、ノフィーネに免じてお前を信じてやる。だから協力することをこの握手で誓え」

「くっくっく・・・、貴様はつくづく女に甘い男だ。ま、我が輩も人の事は言えんが。いいだろう」

そして、俺とハザードは握手を交わす。ハザードの手は想像に反して暖かく、潤っていたがそんなことはどうでもいい。こうやって余計な時間を食ってしまったおかげで、

「また、吸血鬼に囲まれちゃったな。・・・ハザード、お前吸血鬼の王なんだろ？ なんとかしろ」 「くっくっく、吸血鬼の王というのはあくまで称号なのでね。我が輩に吸血鬼を従える力があると言うわけではないのだよ。・・・しかし、協力はしよう」

そう言って、ハザードは跳躍。辺りの吸血鬼に鋭い爪で一閃。そうやって半数ほどの吸血鬼を撃ち落としていくが、撃ち落とされた吸血鬼からは出血が見られない。これはどういうことか、

『おそらく、返り血からの感染を恐れてじゃないですか？』

メイナの見立てだとそういうことらしいが、俺は・・・ノフィーネを氣遣っているんじゃないかと疑ってしまってる。

『邪念です』

はいはい・・・、ため息一つ、俺はエリクソスを投げ、絞殺ギリ以下略。

あっという間に片付いたところで、俺は走るのを再開する。ハザードは地上から少し浮いたところで、俺たちに合わせて飛んでくれているようだ。

しかし、破壊神は一体どこに居るんだ？ 一向にたどりつかんのだが。

「む、破壊神ならあと三キロ先にいるぞ。さっき確認した」

あ、そうなのか割と近いんだな・・・って、確認した？

「確認したって・・・どうやってだ？」

「直接見てきたに決まっている。だからこそ貴様にこうやって正確な位置情報が伝えられるのだ」

とか言って、次の道を左折したハザード。俺たちもそれを追うが見てきたって・・・。

「よく見つからなかったな」

「あいにく、ここには吸血鬼ばかりいるのでな。都合よくまぎれるのだよ」

それはなんとも便利な話だな。吸血鬼化のせいで人間は逆に多いに目立ってるの・・・にっ！

ビューン！ 捕獲して、絞め殺す一歩手前でとめる・・・。はあ、話す暇もろくに無いな。

と次に、並走するノフィーネがハザードに訊く。

「ところで、ハザードさん」

「ん、なんだ？」

「ここにはどうやって入ったんですか？」

「コウモリ状態で隠れながら入った。こそこそするのは我が輩ら純

血の吸血鬼にとっては朝飯前なのでな」

自慢げに言うハザード。やたらこいつ純血ってところをアピールしてるよな。純血とそうじゃないの手何か違いがあるのか？

「コウモリ化は純血にしかできん芸当だ。それに、人間ベースの吸血鬼に比べて、基礎能力や生命力も高い・・・ま、その中でも我が輩はトップクラスだがな、くっくくく、はっはっは！」

はいはい、それはようござんしたね。と、内心うんざりしつつ。ひたすら走って、しばらくしたところで右折。

「こっちで合ってたんだよな」

「ああ、我が輩の記憶力をなめるな。・・・それより、そろそろ気をつけろ」

急にハザードが声のトーンを落とす。・・・なんのことだ。

「道の先から、吸血鬼とは違う反応がある。だが破壊神までは距離があるから、おそらく破壊神が我が輩らに送ってきた尖兵だろう」

・・・つまり、俺たちが近づいてきているのに気づいて、迎撃をしてきた、と。

「言っておくが、我が輩はまだコウモリ化があるからいい。だがお前ら人間は傷一つぐらい簡単につけられ、それだけで感染する。・・・訊いておくが、今体に治りかけの傷はあるか？」

「・・・その傷をつけた張本人が何を言うか」

「くっくくく・・・、それもそうだな。しかしあの時はあるときだ。で、あるのかないのか」

ったく、調子のいい奴め。さて、あるのかと聞かれれば、あの時の擦り傷切り傷程度はもう治っているが・・・、そういや左腕の大きな傷。これだけがまだ完治していなかった。今はかさぶたになっているが、その下は薄い皮膚だ。とはいえ、ウイルスが入れる状態ではないことに変わりないから別に問題はないだろう。

さて、こっちは傷一つ無いとは思いますが、違う事が気にかかる。戦いの前だ、一応確認しておく。

「ノフィーネ。・・・なるべく、気を引き締めて、割り切れよ」

「うん、わかってる」

ノフィーネはこくりとうなずく。ならいい。俺も何が起きても大丈夫なように、意識を集中させる。

その時、ハザードがふつりと呟いた。

「・・・む、しかしこの感じ、どこかであつた事があるような・・・」

それが、どういう意味か。頭の端で気には止めつつも、特に気にしないまま前に進む。

・・・そして、次の道を左に曲がった時、前方に吸血鬼以外の人影が見えた。

最初、そいつは悪魔なのかと思ったが、違った。

そいつは道の真ん中に居て、着物を着て、宙に浮いて、黒髪で、人間そっくりで・・・、

ノフィーネも驚きに目を見開いている。ハザードはそのままの体勢だが。俺は足を止め、その人影に向かって言う。

「・・・ここでお前と鉢合わせするとはな、思いもよらなかった、時神！」

あえて強く言う。だが返事は返ってこない。感染者に意識は無いからそれは当り前の事だが。時神は神だから、もし強く呼びかけて正気に戻ってくれるなら・・・と淡い願いもかけてみたが。所詮は勝手な考えだったな。

「・・・」

時神は黙してこちらを見る。その目は何を見ているのか。俺たちの事を見てうつすらでも頭に引っ掛かっているのか。・・・無表情な時神の顔からは何もうかがい知れない。ただ、時神は何もしかけてこない。

「・・・時神様」

確かに、今の時神の姿を見て、俺も苦しいさ。だが・・・油断できない。うかつに近づくことはできない。こいつは他人の時を止める力を持っている。

なら、今の内に倒した方がいいのか？ 無慈悲に槍を投げ、時神を一撃で・・・倒す。

「・・・それは、やりたくないな」

・・・考えたくもない。それに、ここで一步間違えば、大変なことになる気がしてならない。

なによりも『命断』の力が、警告を発しているような、そんなわけのわからない感覚が俺の中にある。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

動けない。それは俺が時神を殺すことに恐怖を感じているからなのか。それとも、今ここで俺から手を出してはいけないという、よく分からない勘からの行動なのか。その俺の空気を読んでか、ハザードも動こうとはしない。

そして、しばらくにらみ合って、俺が動けずにいたその時。時神が動いた。

「・・・・・・・・！」

これは・・・時止め・・・か？ 世界の歩みが遅くなっていくような感覚・・・、

『久郎様！』

・・・ああ、分かっている。俺はその感覚に酔いつつも、対抗手段を起動させる・・・！

「『刹那の延長！』」

時神が体感時間を遅くするなら、こっちは速くすればいい。そうすれば相殺されるはず。・・・そう思い、俺は時神の方を見やる。

そして・・・時神は、手を天に向けて掲げ魔力を集中させる。形作るのは火炎の球。・・・俺たち三人を一斉に狙っているらしい。

この状況、動けるのは俺一人。・・・気が重いがやるしかない。そう思い、俺はその場から駆ける。

「エリクソス！パラギオン！」

二つの槍を召喚し時神に向けて投擲しようと振りかぶる。・・・その時、時神がちらりとこちらを見た。・・・その目には驚愕の表情も何も浮かんではいない。それどころか、身を守る行動も取ろうとはしない。・・・攻撃をそのまま受ける気か？

俺は槍を投げる事に一瞬躊躇したが、やらなければやられるのだ。この場は、時神の動きを止めるだけで、それだけでいい。

そう思い、槍を投擲した時、突然、俺の目の前から、時神が掻き消えた。

「っ、なんだ！？」

そして、その疑問が解決しないまま。俺は後ろからの衝撃に吹っ飛ばされた。

ドゴウン！

「がふっ！」

地面叩きつけられ、地面を滑る俺の体。しかし、古王からもらった防護服（長袖のシャツにしか見えなかったが）を中に仕込んでおいたおかげで、服は破けた部分もあるが、体は無傷だった。俺はすぐに立ち上がり振り返る。

「ケホッ、ケホッ！」

見れば、ノフィーネ俺よりも少し手前の所で、その場から起き上がろうとしていた。その向こうには、コウモリ化から人型に戻ろうとしているハザードが。・・・そして、そのさらに向こうには、さっきまでとは全く違う位置に居る時神が。・・・今のは一体何が起こったんだ？ 瞬間移動？ いや、それを気付かないなんてわけはない。それに、時神は本当に唐突に、目の前からパッと居なくなっていた。

・・・だが、俺も『刹那の延長』を発動して、あいつの時止めを相殺してたはず・・・、

『・・・相殺しきれてなかったのでは』

不意に、メイナが言う。・・・まさかそんな、

『久郎様は人間ですが、時神様は神です。それも時の神。体感時間を操る力は、人間の久郎様よりも格段に強いはずです・・・だからさっき相殺できていたように思えたのは、あの時、時神様が本気を出していなかったから、なのでは』

・・・その言葉は、全く否定できない。そう言われればそうだ。ほんの数日前にできるようになった俺が、何年も前からその力で神と呼ばれてきている時神と同じ力のはずがない。

・・・だが、ならどうすれば！ そう内心思った瞬間、今度は前から火球が俺に直撃した。後ろに吹っ飛ぶ俺。

「ゴフッ！」

再び地面を滑る俺の体。火球が腹に当たったおかげでまだ傷はできていないが・・・顔に当たっていたらどうなった事か。

すぐさま立ち上がり、今度はなるべく時神から距離を取るように後ろにへと退く。ノフィーネはさっきと同じように立ち上がった所に、ハザードは火球はさすがに堪えたのか、いつのまにかビルの上に移動していた。全員まだ感染はしていない。そもそも、相手の血液がなんかに含まれる破壊神のウイルスが傷口に侵入したら感染する仕組みだ。火球だけでは感染はまだしない。

しかし・・・、考える時間もそう与えられずに、また火球が飛んでくる。火球をくらい、地面を滑り、起き上がってはまた火球をくらい。

古王の用意した防護服ですらすすけてくるほどに何発も火球を受けた。・・・正直、きついな。

『久郎様、体勢を立て直さなくては！』

メイナもそう叫ぶが、『刹那の延長』で時間も稼げないこの状況だ。・・・だが、いつ吸血鬼が襲ってくるかもしれない。だから、早く何とかしなくちゃいけないのに・・・。

俺は槍も投げる、だが銃弾をも止めて見せた時神に、当たるはずがない。

どうすればいい。・・・俺たちはこのまま、時神によって、ここ

で終わるのか？

そんなわけにいくか・・・！ 何か、何か方法が・・・。

そんな時、ふと思った。

・・・確か時神は言っていた。「効煽は卑怯な手段を使って、妾を倒した、と」。

卑怯な手段って何だ？ それがあれば、俺も時神を倒せるのか？
考えている時間は無い。メイナ、『残知回想』を・・・

やっている時間などありはしない。

「ぐふっ！」

また火球をくらい吹っ飛ぶ。・・・こんな状況で『残地回想』をしようとするなんて・・・よほど俺は満身創痍なんだと気づく。

・・・体中に打ちつけた痛みがある。だが、そんなことは気にならない、本当に怖いのは、ここで終わってしまうと言う事だ・・・！
・・・だが、どうしようもない。どうせなら、もう起き上がらずにこうしていた方が、死んだふりにでもなっていいたかもしれない。
そんな考えがふと頭をよぎり。俺は立ちあがるのを止めた。

「・・・・・・・・」

「久郎君！」

ノフィーネの叫ぶ声。俺が気絶、もしくは死んだのかとと思っているのかもしれない。すぐに駆け寄ろうとしてくれるが、時神によって時間を止められる・・・。

ふよふよ。

そして、時神は、ゆっくりと、こちらに近づいてくるような音がある。

・・・まずいか、流石に死んだふりなんてバレるよな・・・。もう諦めて、俺は目を開ける。・・・どうせ、今更動いても逃げられない。時神に対し、これ以上刃を向ける気も起きない。

そして、時神は俺の倒れているすぐ横で止まり、俺に向かって手

飛ぶ呪文覚えるなー、とか感覚的に察する感じ!？」

いや、もっとうこう・・・なんか光が見えるよな・・・ってんなことはいい。

俺はすぐに立ち上がり、状況確認。時神が吹っ飛んだ事によりノフィーネの時止めは解除されようで、こっちに向かって来ていた。ハザードは・・・どこだ？

「ここだ」

「うおっ!？」

古王がその声にびっくりして振り返る。・・・いきなり人の背後に立つなよ。

「そうそう、おかげで寿命が三年ほど伸び」

という古王のネタは無視して。

「しくしく・・・えっぐ・・・」

「あ、ハザードさんは僕たちに協力することになったんです」

と、ノフィーネが嘘泣きべそをかいている古王に向かって説明。古王は泣き真似を止めて、ちらっとハザードの顔を見たが、すぐに納得したような顔になって何も言わず・・・時神の方に向き直る。

「・・・・・・・・」

時神は、叩きつけられたダメージを全く感じていないかのように、ゆっくり動きだしそして、・・・また、世界の歩みを・・・遅くする。

だが、それよりも早く、古王が動いていた。

「・・・・・・・・!」

「なあ、時神よお。俺はお前に一言言いたかった」

古王には時止めが効かないのか、一瞬で時神の目の前まで詰め寄っていた。無表情の中にも少し驚きの表情を浮かべた時神は、すぐさま時止めを中止、身を守るバリアを展開する。

だが、古王は言う。

「お前は神なんだろ。なのに、自分と同じ称号である神に操られるなんてよ・・・」

そして腕を大きく後ろに振りかぶり、

「あの時効煽が、お前を救ってやった意味がねえだろっ！」

そのバリアごと、時神の顔を、思いっきり殴り飛ばした！

パリーン！ ドゴォ！

バリアが破られ、再び吹っ飛ばされる時神。その体はさっき体を打ちつけた壁に再びめり込まれる。・・・しかし、おそらく古王は俺が『残地回想』で見たあの時の事を言っているのだろうが、なんであいつが知っているのだろうか？・・・ま、古をつかさどるとか何とか言ってるし、知ってても不思議じゃないのかもしれないが。

「・・・」

殴られた時神は苦痛を顔には出していない。しかし、体には相当ダメージは来ているらしく。壁から体を出すときにフラツとしていた。・・・そして、状況が不利だと感じたのか、時神はその場から一気に上空にへと飛んで逃げて行った。

すぐにその姿は見えなくなった。正確には飛んだ後、どこかに瞬間移動でもしたのだろうか。

「・・・時神」

古王の言葉にも、時神は眉一つ動かさなかった。・・・ということ、もうあの体の中に時神の意志のようなものは乗っていないと言う事か。いや、分かっていたさ、そんなこと。だけれど・・・なんか、悲しいからな。

だが、今は感傷に浸っている場合じゃない。

「しかし、手ひどくやられたな・・・ま、怪我はしてないみたいだからいいけど」

古王は俺たちの姿をざっと眺めまわして言う。ホント、怪我をしなかったのは不幸中の幸いだったと言うか、なんというか。

「てか、古王。お前の方はどうなったんだ？ あれら全員倒したのか？」

「おう。ちょっと裏技を使っただけ。ま、俺にかかれば楽生だぜ」

ニカカ、と笑う古王。ま、今さらそんなことでは驚かん。こいつが強いのは周知の事実だ。

・・・さて、そうして皆が一息つけたところで、古王は言いだす。「んじゃ、行くか。破壊神まであと少しなんだろう？」

一人元気な古王が進もうとするが、ちよつと待て。そう言えば、ハザードには作戦を話して無かった気がする。

「む、作戦？」

「ああ、破壊神に対する作戦だ。えーと、・・・」

かくかくしかじかと説明すること数分。

「なるほど。つまり我が輩は派手に暴れていればいいってことだな。くっくく、実に簡単だ」

愉快そうに笑うハザード。ま、適任だろうな、とは思う。てかこいつの場合、吸血鬼にまぎれて不意打ちとかも可能だろうし、何だかんだ言って仲間にしておいてよかったと言う事だろう。

「他のやつ役割は言っている通り、要は久郎の封印だからな。ノフィーネはしっかり久郎を援護してやれよ」

言われ、ノフィーネは黙ってこくりとうなづく。

「今度は僕が守る番・・・とかかつつけてみるけど、大した力も無いからね。だけど身を呈してかばう事ならできるから」

そう言うが、つまりそれは破壊神に体に乗っ取られるってことだろ。それだけは避けてほしいが、ノフィーネはいざとなったら身を呈すこともいとわない気がする。

「・・・そうなる前に作業を進めないといけなくなるな。ノフィーネもそこまでの事は最後の最後の手段だからな」

「ははは、分かってるって。うん、僕の持っているものは人を殺す武器だもんね。・・・何とか割切れそうだよ」

・・・目を見ると、その目には確かに先ほどよりも力強い覚悟が見えた気がする。

「さーて、そんな確認はこんくらいにしといて、早速行きま・・・」

ピリリリ、ピリリリ。

その時、古王のポケットから電子音が響いた。

「っと、なんだよ、こんな時に空気読めねえな」

古王がポケットからとりだしたのは少し前にも誰かと話していた通信機。

「はいはい、今出ますよ・・・っと、ん？ 防王から・・・？」
ピッ。

「あー、どした？ まさかそっちから連絡がくるとは思ってたが・・・ん、おう、おう・・・」

・・・それから古王の無言や相槌だけの時間が続く。・・・意外と長い通話時間が終わったのはそれから一分後。

「・・・。。。。。。ああ、分かった。連絡してくれてありがとう
ピッ。」

通話を切るころには、いつもニヤけた古王の顔が・・・これ以上ないくらいの神妙な面持ちになっていた。クソッ、こいつがこんな真面目な顔をするときにはろくな事が無い、ってのは決まってる。

古王は一つ深呼吸をした後、俺たちに告げた。

「・・・対策室本部が、『核』の使用を決定したそうだ」

C

核の使用・・・その言葉に誰もが言葉を詰まらせる。

核・・・というと、原子爆弾の事か。

「いや、正確には魔力性核兵器、だとかで・・・」

その後の古王の説明によると、魔力性の光で焼くだのそのエネルギー源が核だの、ということらしい。まあ、あらかたは理解した。

「・・・じゃあ、ここに居る奴らは全員逃げるのか？」

「いや、ギリギリまで戦線の維持をするらしい。放たれる三十秒前に撤退。各員シェルターに回避だそうだ」

「・・・その核兵器が使われるのはいつだ？」

「今から約三十分後、五機の新兵器が放たれるらしい。おそらくシエルターに逃げていないやつらは悪魔だろうが人間だろうが全て焼き尽くされるだろうな。俺たちも、逃げとかないとまずい事になる」

「そんな・・・それじゃ、神様が・・・」

ノフィーネが苦しそうな表情でうめく。・・・そうだ、破壊神に創造神が捕らわれているんだ。今俺たちが引けば、創造神もまたその新兵器とやらの犠牲になる。・・・ノフィーネにとって、創造神は父親みたいな存在だ・・・だから。

「逃げることは・・・できない」

古王が少し驚いたように目を開く。俺が言った言葉がそんなに驚きだったのか。

「・・・いや、ちょっと思い出してな。まあ、気にすんな」

ははは、と古王は軽く笑い、

「確かにな、創造神を放っておくことはできないな。しかし・・・そこまで深く入り込んで、ただ逃げられるはずは無いぞ」

「なら、予定通り、破壊神を封印する」

俺は今度こそ、迷いなく言いきる。それは勝算があるとか自信があるとかそういったことじゃない、・・・だけだな、

「確かに俺たちはおまけみたいなものだ。創造神の事がなければ、本命である世界の行動があるなら別にそこまでする必要はないのかもしれない。だが・・・」

古王やノフィーネたちは俺の話を黙って聞いている。だがどうせ、俺の言いたいことは分かっているはずだ。

「・・・あの吸血鬼たちを見捨てた事の罪悪感からこういう気分になっているのかもしれないが。・・・今も戦っているやつらが、その時になって逃げ遅れた場合、その新兵器によって殺されるかもしれない。・・・だが、もし俺たちが今すぐにでも破壊神のマザー体を封印すれば、核を使わないで事が進む道もあるかもしれない。そもそも、その新兵器を使って破壊神を倒しきれない保証もない。それに」

今までは建前。話を重くするために言っただったでもいいところで。本当のところは、

「・・・なければ、と言う話をしてしまったが。創造神のことは、やっぱ見捨ててはおけないからな」

そう言って、俺はくるっと反転、破壊神がいるだろう方向を向く。

『照れ隠しですか？』

・・・違う。ただ俺は決意とか諸々を固めようと・・・

「久郎君！　そう言うと思ってたよ」

「はっはっは、やっぱ何だかんだ言って、先祖までたどってけば俺たちを創ってくれたはあいつだしな、恩は返さねえといけねえぜ」

「ふむ・・・我が輩は創造神と話をした事は無かったが、ま、乗リかかった船だ。それに、そちらの方が断然面白そうだ、くっくっく・・・」

みな、てんでバラバラに喜々とした声をあげている。あいにく表情は見えないが、多分・・・いや確実に全員笑顔だろう。

俺たちが選んだ道は茨の道なのかもしれないが、だとしても何かを失って進む平坦な道よりはずっといい。・・・助けられなかった事を後悔するよりは、絶対いいはずだ。

『ハイリスクハイリターンですがね。もし失敗すれば全て失うかもしれないんですよ？』

そうかもしれないな。だが、メイナ。そうだとしてもお前は絶対、誰かを犠牲にする道なんて選ばないだろう？

『・・・確かにですね。ま、私は久郎様が死ななきゃそれでいいですけど。なにせ一心同体ですし』

それなら心配ない。俺は死ぬつもりなんか全くないからな。あの時の俺とは違う、精一杯生きて生きて生き抜くつもりでいるから。・・・それでも死んだ時はごめんだけだな。

『縁起でもないこと言わないでください・・・ま、信じてますよ』
そう言って、脳内に引っ込んだ。あいつも命断の準備で色々忙しいらしい。ホントは少しでも休憩させてやりたいところだけど、

今みたいに合間合間に会話をする時間ぐらいしかとれない。

・・・ま、それもこの戦いが終わるまでだ。

「さって、行きますか。ここでうだうだやってても仕方がないし。そもそも時間も無い」

俺は振り返ることなく走り出す。急なことだったが、誰ひとり遅れてきたりはしないだろ。

あと三キロ近く、その場所に破壊神がいるってのに、なんでこうも気が楽なんだろうな。やば、仲間って存在は大きいのか。・・・少しくさいか。

『さて、いよいよ破壊神と対峙するわけですが、最後に一言、言いたいことは？』

うおっ、とびっくりした。ひょこっと出てきたメイナが訊いてくる。ってか最後って・・・、

『あ、破壊神と戦う前の最後、って意味ですよ。縁起でもない』

お前の言葉が足りなかったんだろ言うが、ったく・・・一瞬考え、俺は答えを出す。

「それなら後で答えさせてもらう、無事みんな帰ってからな！」

Cの33話「数分の攻防」

「・・・妙に静かだナ。人間ども、やる気あるのか？」

破壊神は腕を組みながら、ぶすつとした顔で言った。先ほどの古王との一件は楽しめたが、全体を見通すとつまらない小競り合いばかりしか起こって無い。

派手な魔法がぶっ放されることもなければ、撃破王なんかが現れることも無い。

ならば、こちらから派手にするか？ 破壊神はそう考え、残りの四千ほどの悪魔たちを全員派遣する事を考える。だが、これらを使うかと思う事は出来ない。面白いからといってこいつらを派遣すると、今度はこちらの守りが危うくなる。初めは圧倒的になりすぎるかと思っ使用を控えていた悪魔たちだったが・・・今は、対古王用として周囲の防衛に使われているのであった。

しかし・・・ふと破壊神は思う。古王は言った「つまらないからそんなことはしない」と。つまりあいつもまた自分と同じ、愉悦を求めことに貪欲な者だ。ならば、この場面で手加減する事によってあいつが得ようとしている愉悦はなんだ？

自分は破壊神だ。文字通り破壊する事に愉悦を感じる。ならばその名に極めんとする事の文字を刻む『王』と言う種族の古王は・・・歴史を求める事に愉悦を感じるのか。ならばあいつがやろうとしていることは・・・人間が破壊神を破るという英雄譚を創る事。

そう仮定してみると、そういうえば古王の近くには二人ほど人間がいた。破壊神は主に古王の事しか眼中になかったが、確かあの二人についても報告が入っていた。そこで破壊神は少し思い返してみる・・・

少女と少年の二人。まず少女は太刀を持っはいるが一度も使っていない。力を隠している可能性もあるが、膨大な魔力なんて物も感じられない。そして、戦闘を怖がっている節もある。

そして少年の方。何種類かの槍を手に召喚・・・いや製造し、それを用いて吸血鬼を倒して回っている。その槍は魔力によって形成されている。少年の中にも魔力はほとんど感じられない・・・？
待て、この報告・・・少しおかしくはないか。魔力がほとんど無い？　なのに槍を召喚していると言うのか。

可能性としては、古王から魔力をもらっていることも考えられるが・・・ならば、古王と別行動中には槍が使えない事になる。あの時は古王に集中していたからそちらには見向きもしなかったが・・・。

破壊神の中に色々な考えがよぎる。ウイルスではあるが、魔力を持ち自我を与えられたウイルス。感染者たちの脳も使ってあらゆる可能性を検討し、演算し、まとめる。大雑把な性格の破壊神だが、効率的に大量の破壊を行うために計画的に行動する一面があった。むしろ、そうやった戦略性をも楽しんでいる節もある。

破壊神が本気を出し、今までに破壊してきた世界の感染者を使えば、人間界程度を滅ぼすことなんて造作も無い事。だが、それじゃあつまらない。最初はその世界に単騎で突撃し、それから感染者を増やしていく・・・という非効率かつ危険な行動をとっているのは、そういう戦略性を楽しむための趣向。

「・・・なア、創造神ヨ」

破壊神は創造神に話しかける。創造神の答えはなかったが、破壊神はそのまま続ける。

「あの古王の近くに居る少年・・・あいつは何ダ？」

「・・・」

「お前ハ、俺を本気で潰そうとしているんだロ？　あの小世界デ、助けるために自分がかばった相手ダ、何か秘密があるんじゃないカ？」

「・・・」

「ケッ、だんまりカヨ。・・・マ、いいヤ」

破壊神は創造神にそっぽを向き、再び考えにふける。と、その時、

偵察用悪魔から報告があった。報告によると、

「・・・あと、一キロ地点まで近づいてきてイル、カ。そろそろ、あちら方向に配置した悪魔たちとぶつかる頃だろうナ」

その報告を聞いた破壊神は悪魔たちの方に向き直り、高らかに宣言、命令する。

「・・・ここに残した悪魔ども！ お前ら全員で古王のいる方向へ向かエ！」

さて、これから起こるであろう本日最大の楽しみへの投資はこれで十分だろう。いったい、何を見せてくれるのか・・・。破壊神は愉悦に顔を歪ませながら、悪魔たちとともに自らも決戦にへと足を運ぶ。そして・・・、決戦の火ぶたは落とされる。

C

「さすがに自爆なんてせこい戦法は使ってこないが・・・ちょっとキツいな、これ」

とかボヤキながら、古王は一人、悪魔たちに向かっていった。周りには久郎もノフィーネもハザードも姿は無い。それぞれ、作戦のために別行動をとっているのだ。・・・というか、流石に久郎とノフィーネを守りつつ、二千近くの悪魔をノーダメージで倒すなんて神業は古王には無理だった。

「俺は『神』じゃなくて『王』だしな、よっと！」

ガキンっ！

黒騎士のような鎧をまとった悪魔が振り下ろした剣に対し、自らの大剣で応じる。・・・流石に、破壊神が隠していたと言うだけはある、通常の十倍の重さにした『超太古剣』の一振りにもビクともしない。そのまま古王は後ろに下がり、一気に空中に出現させた大剣を敵に向かって飛ばす。

現在、古王の目の前に広がる光景に存在する悪魔は五百体ほど。空中に居るものとか諸々含めてもかなり密集しているから適当に投

げても大剣は当たるのだが・・・、

ガンッ、ガンッ、ガンッ！

そのほとんどは弾かれる。古王はやれやれと苦笑いしながら、次は守りの準備。正面に大剣を数百本と呼び出し、悪魔たちが反つ斬撃、衝撃、ブレス、雷、その他もろもろを防ぐ。

「・・・しかし、今回は囲んでこないんだな」

古王はふと呟く。前回は囲む事によって逃げられないように戦法を取ってきた破壊神だったが、今回は全ての悪魔を正面に配置している。さらに周りのビルも破壊していない、古王にとっては非常に戦いやすい空間になっている。

まあ、今回はどちらかと言うと防衛戦なのだし、こんな配置をするのも不思議ではない。が、これでは、古王でも時間がかかるとはいえ、完全防御に各個撃破でいずれは突破される防衛線。

・・・不思議に思いながらも、古王は剣の壁を消して、次に剣の雨を振らせる。

・・・あと妙なのは、何かターン制的戦い方になっているということ。RPGではよくあるシステムで、まあ、現実にもそういう戦い方をする場合もある。だが、そのメリットは攻撃と防御、それぞれに徹する事が出来るために戦闘が長引くというもの。

「・・・本気で、時間稼ぎしてるのか？　こちとら時間が無いってのに」

破壊神は新兵器の存在を知らないのだろう。だから、今こうやって自分が不利になるだけと言う事には気づかずにターン制なんて戦法を取っている。

「・・・ったく、面倒だな、おい！」

さっきの剣の雨で何体かは倒れ、悪魔はひるんだ。古王はその手に『超太古剣』を一本召喚し、その一本を手に悪魔たちの方へ突っ込んでいく。

悪魔たちも迎撃をするが、古王は瞬間移動で華麗にかわし、悪魔たちの目前へ。

けだヨ」

そう言って、破壊神は、まるでエンターテイナーがやるように手を広げ、ここら一体に響くように声を張る。

「レディース&ジェントルメン！ さあサ、寄ってらっしゃい、見てらっしゃい！ 今から皆様方にお見せするのハ、私どもの最終兵器と言ってもいいものデ、皆さま方は驚キ、そして絶望すること受け売りでござーい！」

そして破壊神の後方にあるビルの奥から、何か青白い光が漏れる。・・・その光は電光もまとい、怪しく強烈な光を発する。

「さあサ、目をそむけず、しっかりその目にお焼き付けください。決しておびえたり逃げたりせず、ただ淡々とその事実を受け止めるがいい。・・・どうせ、みんな一緒になるのだから」

ニタァ、と破壊神は口を歪ませ、より一層手を天に向かって掲げた。・・・そしてその後ろ寄り、それは姿を現す。

「・・・！」

古王は咄嗟に声が出せなくなっていた。その出現に大気が押し出され、風になって古王に向かってくる。

それはむくりと立ちあがり、ビルの上から顔を出し、胴までを見せた。・・・その正体は、全長

八十メートルほどもあるかと言う巨人・・・顔には黄色く光る二つの目と一つの口。頭の両脇からは角が生え、ただ全身が濃い紫のただただ大きい巨人。

「くっくくくくク、ひやははハ！ 驚いたカ？ 驚いただろう。」

この巨人は、俺の配下の悪魔千五百体を、融合させて俺が作りだした邪神！ その名も・・・募集中ダ」

この緊迫した状況で、それをツツコめと言うのだろうか。

「ヒュー、・・・合体はよく負けフラグだって言うぜ・・・にしてもでけえな・・・」

怪獣映画などではよく戦闘機視点だとかになるため案外その大きさを感じないが、古王が今いる地面から見る八十メートルの高さは、

見た目以上にさらに大きく見えた。

古王だけではなく、障壁内の各地で戦っている者たちの視線もその巨人に向かう。それはたまらなく悦楽なのか、破壊神は笑いながら言う。

「ひやははッ！ そうダ、いい名前を思いついたゾ。『デイスペア』なんてのはどうダ？」

そのネーミングに、ピクっ、と耳を震わせるもの一人。・・・言わずもがな、古王である。

「・・・へっ、単純すぎるぜ。俺ならもっとう・・・『究極悪魔統合神』みたいな名前をつけるが？」

えっへん、と胸を張る古王だが、破壊神の方はと言うと顔をげんなりとさせ。

「・・・お前の名前は漢字使いすぎなんだヨ。長い時間生きてる癖ニ、厨二病ってやつなのカ？ 恥ずかしくないのカ？」

「なにおう！ かつこよければそれでいいじゃねえか！ 羞恥心？ そんなもん遠い昔に置いてきた！」

「※羞恥心のお忘れ物にご注意ください。・・・大切なモノ、忘れてませんカ？」

「なにそのどっかの駅の中にでも張ってありそうなポスターのキャッチフレーズは、なんか急に悲しくなってきた・・・」

よよよよよ、と倒れ込む古王。・・・てか、そんな事をしている場合ではないのだが。

「つと、気を取り直して・・・で、なに？ そのデカブツで俺を倒そうってか？」

古王は巨人を見上げて言う。確かに図体はどでかいが。その分、動きは限りなく鈍重のはず。それなら戦う戦わないの時点で、逃げる事が容易となる。が、

「くっくく・・・はっはっはっハ！ 馬鹿馬鹿しいナ！ 俺がこの大局も見ずニ、お前ひとりだけを相手にすると思っているのカ？」

「・・・なに？」

古王はいぶかしみ、顔を険しくさせる。と、その時、巨人に動きが。古王の方に背を向け真っ直ぐ北の方向に向かい始めたのだ。

「まだ、分からないのか？ こんな密閉された空間まで作って、お前らが一番恐れてる事・・・分かるよナ？」

・・・古王は一瞬、何を言われてるのか分からなくなった。いや、分かってはいたけれど、それが本当に堪えなのだとは思いたくなかった。・・・だが、事実は事実。現にあの巨人はここから一番近い北に向かっている・・・。

「・・・っ！ まさか！」

「そう！ 巨人の目的ハ、この障壁からの脱出だヨ！」

C

「なんだ、あれは!？」

「きよ、巨人!？」

対策室は騒然となる。モニターに急に映った紫色い影。蒼の大きさに一同、驚いていた。

「・・・ほう、これはまずいな」

そして、総帥までもが声をうならせていた。

「まずい、とは？」

防王がすかさず訊く。・・・いや、訊かなくても大体は察していたが。

「ああ、このままじゃ、新兵器を投入する前に、障壁が破られる」

「「!？」」

あまりの巨人の大きさにだけ驚いていた要人たちは、その総帥の言葉にさらに目を点にした。

「ちょ、総帥。今の発言についてk w s k」

「・・・お前、地の言葉かは知らんが。地上言語を話せ・・・」

動揺して若干おかしくなる要人たち。このままじゃ埒が明かなくなるので、要人たち全ての発言を防王が取りまとめて言う事になった。

そして、それに対する総帥の返事。

「いやだって、でかすぎるだろ、あれ」

あんな大きさの魔物なんて、この人間界では見た事も無い。下手をすればドラゴンよりも大きいんじゃないだろうか。

「障壁の高さは約百五十メートル。結界を突き破って、なんてことはなさそうだが。あの大きさの攻撃を何発も一か所に食らい続ければ、障壁だって壊れる」

総帥は冷静に判断をする。それに何か言いたそうに要人たちは口をパクパクさせているが、ここは防王に任せる場。

「・・・それで、何か対抗策は？」

あえて、にこやかに言う防王。だが、

「ない」

と、総帥はきっぱり言う。・・・ここまできっぱり言い切られてしまえば、もうどうしようもない。だが、総帥はふと話を続けた

「・・・そうだな。しいて言うなら、新兵器の投入を早めるか・・・」
ニタリ、と笑う総帥。・・・本当にこの男は・・・。

「・・・新兵器の投入は予定通り行いましょう。その代わりと言っ
ては何ですが」

と言って、防王は立ち上がり。部屋のドアの方を向いて行く。

「ちょっと、防王さん！？ いったいどこへ・・・」

要人の一人が、訊く。それに対して防王は笑顔でこう答えた。

「ちよつと、現地で防^{まも}つてきます」

ボタン。・・・そうして、会議場には、その防王の言葉について、要人たちの間で、どよどよと話し合われる。そんな中、総帥は、子供がやるようにキャスター付きの椅子を、しゃーっと走らせ、御老体の横に。

「・・・なんじゃ、若造」

御老体は目をつむりながら訊く。

「いや、防王もいなくなったことだし。ここでの一番の権力者である爺さんに、話しておこうと思ってな」

「なにをじゃ」

御老体は目を見開き、総帥はニヤリと笑う。

「今後の人間界のプランについて、だ」

C

「・・・・・・・・」

「どうしタ？ 古王。あれを止めなくていいの力？ あれが障壁を破壊したが最後、世界は破滅するんだゾ？」

破壊神はそうはやし立てる。巨人はのッそのッそと地響きを立てながら北に向かって道なりに進んでいる。破壊神はそうやって止めに行こうとする古王の邪魔をし、あわよくば感染させようとたくらんでいた。

おそらく、創造神を取り戻すために二手に分かれ、救出足止めをするんだらうと破壊神は考え、創造神については捨てることにした。破壊神にとってはもう必要のない存在だ。

（さア、どうすル？ ・・・答えを聞かせておくれよオ・・・ヒヤハハハ！）

・・・しかし、古王は迷っていた。あいつの足止めもしなければまずい事になるのは分かっているが、こちらの作戦も大切だ。

・・・破壊神は仲間を連れていない。それは暗に、俺が殺されれば今度マザー体になるのはあの巨人だ、と言っているかのよう。・・・

・だが、それはこちらにとっても好都合・・・、

「・・・おっと、解説は負けフラグだったな」

「何の話ダ？」

「ん、こっちの話」

でだ、そろそろ時間的にもいいころだと思っただけど・・・と、古王が破壊神の方に向き直った時、それが見えた。

「・・・おーそれみーよ」

「ハ？」

「いや、こっちの話。・・・そう、」

その時、破壊神の後ろを飛んでいた吸血鬼が急に向きを変え、破壊神へと向かってくる・・・！

ズシャア！

「なッ！？」

破壊神は寸前になって避ける、がその吸血鬼の爪が胴にかすり、破壊神は後退する。

「そう・・・、こっちの作戦を開始する合言葉なんよ、『おーそれみーよ』」

ちなみに、『オーソレミーヨ』とは直訳すれば、私の太陽、という意味で、私の愛しい人という意味合いでよくつかわれる。・・・なんでこの状況に似つかわしくない合言葉になったのやら。

「くつくつく、なるほど。さすがはベロ・ランザ卿の体、血が真黒だ。・・・にしても古王、『俺が意味不明な事を言ったら突撃』と言う指示はさすがにどうかと思うぞ」

・・・気を取り直して。後退した破壊神は苦痛を毛ほども感じさせない表情で、笑いながら言う。

「ヒヤハハハ！ 気が狂ったか？ 俺を倒してモ、あの巨人がいる限り、お前らの負けは確定なんだゾ！」

「ああ、倒しすんならそうだろうさ。けど・・・」

古王はそう言ってニヤリと笑う。その瞬間、破壊神の浮かぶ地面の下に、奇妙な魔法陣が描かれた。それはかつて効煽が描いていたものと同じ、魔物を使った封印陣。

「・・・これハ、封印陣カ！？」

「その通りだ、破壊神」

こつこつ、と歩く音とともに、建物の中から出てきたのは久郎、手の平を破壊神に向けながら言った。

「お前が千五百体の魔物を融合させてくれたのはむしろありがたかった。そうなればお前の周りは手薄になるからな」

さらに封印に使う魔物に関しては、さっき古王が倒した中で生き

残ったやつをチョイス。うまくできるかは不安だったが、なんとかうまくいったわけだ。

「・・・くききき、なるほど、初めから俺を倒すんじゃない、封印するつもりで動いてたってわけか。・・・あと一人の姿が見えないが、創造神の所にでも向かっているのか・・・」

破壊神は、その魔法陣の光によってその場を動く事が叶わず。額に汗を流し、この世界に来て初めての苦笑いを見せた。しかし・・・破壊神にもう手立てが無くなったわけではないのだ。封印は術者がいないと執り行えない。つまり、自分が封印される前に術者を殺せばいい。

「・・・おもしろイ、どうせ封印が完了するまで時間があるのだろうし・・・この場に全ての悪魔を呼び寄せ。人間、お前を殺してやるヨ！ ひやはははは！」

まさに封印する側とされる側のサドンデス。

さらに、破壊神自身も手を振りかざし、空中にメテオを何個か出現させる。

「くらえヨ！」

「やらせるかっ！」

ヒュウン、ゴゴゴゴゴゴゴ・・・っ！

破壊神が放ったメテオを、すかさず古王が大剣で受け止め、弾く。

「ならば・・・使役陣！」

かつて、あの体がベロ・ランザだった時に使ってきた使役陣が久郎の足元に出現する。これによって、たとえ封印されなくても。術者の集中が乱れれば、封印の続行は難しくなる、が。

「無駄だぜ。『情報流入』^{ハッキング}」

そう言って古王が地面に手を当てた瞬間、使役陣の紅い輝きが失われていく。

「・・・ム？ なにをやったんだ？」

「封印陣の構成情報に余分な情報を流して崩させてもらった。言わばプログラムの中に故意にバグを作るってところかな。これでこの使

役陣はまともに動かさないぜ」

これは歴史と言う名の情報を扱っている古王だからできたこと。普通の人間にも理論上は可能だが、魔法陣にもそれを崩させないためのプロテクトはかかっている、余程の魔術師出なければできない芸当だろう。

「・・・やはり、こいつ一人では無理か・・・」

破壊神が呟いたその時、障壁内各地にいた悪魔たちの姿がちらほら遠くに見えるようになった。ぞろぞろとその数二千匹。

「・・・おっそろしーねえ。久郎、あとどれくらいかかる？」

「ん・・・あと五分はもたせてほしい」

「五分あれば二千匹は余裕で集まっちゃうがなあ。ま、やってやるか」

「くつくつく、やらなければならぬか、の間違いではないのか？」

古王はその手に大剣を持ち直し、ハザードはその両腕をかまえた。新兵器の使用まで、あと十五分。

C

・・・嵐が過ぎたような静寂の中、ぽつんと一人。腕を縛られながらもそこに胡坐をかき、目を伏して創造神は座っていた。腕しか縛られてはいないが、こんな体たらくで破壊神に立ち向かうとする意志も無く。あとはただ時が経つのを待っていた。そんな時だった。

「神様っ！」

「・・・!？ ノフィーネか？」

視線を上げる創造神、その先には、一匹の吸血鬼に襲われつつも持っている刀でその攻撃を受け流し、そしてこちらに向かって走ってくるノフィーネの姿が。本来、救出と封印は同時に行うつもりだったが。破壊神が創造神を置いて行ったことから作戦を変更。ノフィーネが一人救出する事になった（久郎は最後まで反対したが）。

「神様、大丈夫で・・・うわっと！」

吸血鬼の猛攻がノフィーネを襲う。人から吸血鬼になったばかりでは動きの制御はつかないが、この戦場の中、吸血鬼たちは既に己に芽生えた力の制御の仕方が分かってきたようだ。

そしてノフィーネは相手の攻撃をさばききれず、刀でその攻撃を受けてしまう。刀は意外と丈夫なように折れはしなかったが、その衝撃で刀がノフィーネの手元から吹き飛ばされる。

「しまっ・・・！」

「ノフィーネ！」

そして、吸血鬼の右腕がノフィーネの顔に向かって伸ばされる。その動きは人外の者、ノフィーネに避けることはできず、ついノフィーネは目をつぶってしまう。

ザシュッ！

刃物が肉を裂く音、浴びる温かい血、襲ってこない衝撃。

・・・襲ってこない？

ノフィーネが驚き、目を開けると・・・そこには。

「・・・・・・・・」

無言でその場に立ち、その身の丈に合わない大剣を手に持った小柄な少年と、その足元に倒れ伏した吸血鬼が。

「えっ・・・と、助かったの・・・かな？」

ノフィーネはその光景に理解が追いつかず、目をパチクリ。と、その時、

「お前ら！　そこで何やってる！」

道路の向こうから響いてきた怒号にノフィーネは肩をビクッと震わせた。その怒号がした方を見ると、そこには二人の人間が。一人は大柄な男で、サバイバル用の服のようなものを着ている。もう一人は柔らかそうな雰囲気的女性で、こっちもまたサバイバル用の服のようなものを着ている。・・・そういえば、と無言で立ちつくす少年の方を見ると、少年もまた同じサバイバル用の服を着ている。えっと・・・これはどういことだろうか。

「お前ら！　なんでこんなところに居る！　まさか破壊神の信者か！」
大柄な男がノフィーネのそばまで近づいてきて詰め寄る。

「え、いえいえいえいえ、違いますよ！」

ノフィーネはブンブンと手を振るが、大柄でいかつい顔をした男はそんなことで疑いを晴らした様子はなく、きつい目つきでノフィーネの事を睨む。が、

「やめてください、仲本さん。その方が怖がってますよ」

不意に聞こえてきた声は、雰囲気の柔らかそうな女性。くせっ毛を後ろで束ねたポニーテールは強そうなイメージをかもし出しているが、なによりそのほほ笑んでいる表情が、女性の優しさをにじみだしていた。

「ですが、隊長！」

「ですがじゃないですよ、仲本さん。たった今その方は、吸血鬼に襲われてたじゃないですか。それに向こうの男の方だって縄で縛られてます。信者だったらなんでそんなことをされているんです？」
叫ぶように言う男を、その隊長と呼ばれた女性がいさめる。

「そ、それは……。しかし、こんな奥深くまで人間側の者が来ているはずありません」

「あら？　ならここに居る私たちはどうなのかしら？」

「それは、隊長がたまたま襲われているこいつらを発見したからでしょう！　そして、勝手にイーゼスに向かわせて、しかたなく私も付いてきたんです！」

荒れる男性、しかし女性は柔らかく、やんわりとその言葉を受け流していく。その光景に、ノフィーネただポカンとするしかなく、ただポカンとしていても暇なので、自分を助けてくれた少年の方を見る。

少年は無表情、無口で、特に何事にも興味のなさそうな顔をしているが、その背丈を見る限りでは、まだ小学校中学年ぐらいにしか見えない。・・・むしろ、なんでこんな少年がこんなところに居るのかと、

「あのー、なんでこんな小さい子がここにいるんですか？」

・・・気になったノフィーネが空気も読まず訊いていた。

その質問のタイミングが意表を突きすぎていたのか、大柄な男と柔らかな女性との話し合いが啞然として止まる。そしてその答えもしくは不満を男が言おうとしていたが、それをさっと手で制して女性と言う。

「あー、自己紹介がまだでした。私たちはバスター所属の第五補給部隊の一員です。今はちょっと仲間たちとは離れてますけど。私が隊長の桜井で、こちらの仲本さんとそちのイーゼス君も仲間なんです。イーゼス君はあぁ見えて、結構強いんですよ」

ニコリと笑って言う桜井。イーゼスと呼ばれた少年の方をノフィーネが再び見ると、何の興味もなさそうな無表情に変わりはなかった。

その隊長さんの様子に、もうちょっと話を聞いてもいかなとノフィーネは思って、ためらいも無く訊く。

「補給部隊って・・・ここすごく奥地ですけど？」

「ええ、そうなんですけど、補給部隊にも出撃命令が出ちゃって。でもうちの部隊でまともに戦えるのは仲本さんとイーゼス君と、あと微力ながら私ぐらいなものなんです。ですから他の仲間たちには私たちの少し離れたところに居るように言っています。いざとなったら閃光弾も投げてくれますし、頼れる仲間ですよ」

そう言って、仲本とイーゼスと言う名前の二人を笑顔で紹介する桜井。桜井にほえまされた仲本は、少し顔を赤くしながら言う。

「た、隊長、何呑気にそんな怪しいやつらと会話してんですか！

さっさとそいつら連れて、戻りますよ！」

「あら？ あなたにもようやくこの人たちを守ろうという気が起きたのかしら？」

「違います！ 連行するんですよ！」

顔を怒りと恥ずかしさで真っ赤にした仲本はそれだけ言って、来た道を戻っていく。

「ごめんなさいね。仲本さんはいいい人なんだけど、根がまじめだから。そして私としても、任務上あなたたちを連れて帰って色々と言わなければならないの。別にいいかしら？」

桜井にそう訊かれ、うーん、とノフィーネは考えた。一応、創造神を助けたら後はそのまま何とかして脱出してくれと言われていたので、ここでこの人たちと戻れるのはむしろ好都合かもしれない。別に自分たちにやましいことなど無いのだし。

「はい、ならお願いします」

そう言って、ノフィーネは桜井たちとともに戻ることにした。・・
・これで自分の役目は終了。後は、久郎君たちが無事帰ってきてくれるのを祈ることしかできない。

（久郎君、絶対帰ってきてね。信じてるからね！）

C

『久郎様、バグの修正が70%完了しました』

フル稼働中のメイナの報告。バグと言うのは封印陣におけるミスみたいなもので、適宜魔力を流しながらバグがないかを確かめ、修正をしていかなければならない。

くそっ・・・焦れば焦るほどミスが多くなっていくな・・・。

ガキイン、ガキイン！ シュツ、ザシュツ！

目の前では、古王とハザードが俺の封印を守るために善戦してくれている、だから急がねば・・・。

「・・・ハザード、ちよつとのいてろ。『去りし歴史の重み（グラヴィティ・オブ・レジェンド）』！」

ドゴオオオオオオオオ！

「くくく、ならこちらも行かせてもらおうか・・・構えろ！」
ドドドドドドドドド！

俺の目の前で繰り広げられるのは、今までの戦いとは比べ物にならない最強の戦い。計り知れない強さの古王と悪魔二千匹との攻防。

・・・しかし、

「ぐっ・・・」

古王の顔には苦痛の表情が浮かんでいた。・・・それもそうだ、大剣を召喚するにしても魔力を使うはず、今日一日でこいつがどれだけ戦ってきたか分からない。おそらくそろそろ限界のはずだ。だからなおさら、急がなくちゃならないのに・・・！

『焦りは禁物です、久郎様！』

メイナに諭される。・・・だが、慣れない封印陣。『刹那』も使ってはいるが間に合わない・・・！

と、その時、『刹那の延長』使用中に目に入ってきたもの。それは、大剣を振り切って無防備な古王と、その古王を守るはずの宙に浮かぶ大剣を破壊して近づく一つの魔弾。この状況で・・・体勢を崩したら・・・！

そう考えた時、既に体は行動に移っていた。

「ちっ、『矛盾の盾』！」

ドゴウン！

古王に直撃するはずだったその魔弾を、間に割って入り、『矛盾の盾』によって弾く。

「久郎！？」

「そして・・・『グングニル』！」

さらに神槍を投げて近づいてきた何匹かの悪魔を貫く。・・・封印陣の形成中だが、これぐらい止むをえない。

「久郎、お前封印中だろうが・・・でもま、助かった」

古王から感謝の言葉を受けたが、そんなもん貰ってもうれしくない。・・・そして俺は封印陣の形成作業にもど・・・、

『待ってください、久郎様』

・・・ろうとしたところをメイナに脳内から制された。・・・なんだ？　どうかしたか？

『いえ・・・久郎様はそのまま戦っていてください』

・・・ん？　いやいやいや待てよ。俺は封印陣の形成をやらなき

やいけないんだぞ、なのに戦っているって・・・、と俺は反論したが。その反論に対して、メイナは驚きの事実を言った。

『いえ、なんですけど・・・なんか、久郎様の場合。戦闘中の方が精密度が上がるみたいです』

・・・どういことだ？

『久郎様、さっき武器を召喚しながらも封印陣の形成を脳内で続けてましたよね。その時の精密度、ぶっちゃけさっきまでよりも全然高かったです』

なんだそりゃ。戦っていた方がうまく作れるなんて・・・おかしくないか？

『いえ、おそらく戦闘中に一時的に焦りが消える事によって、むしろ無意識に集中できてるみたいです。てなわけで戦ってください。むしろ戦え。レッツファイティング！』

・・・はなはだおかしな話だと思うが。までも、別にいいか。

破壊神のマザー体との決着はここでつくんだ。そこで、俺だけが戦わないなんて格好もつかないしなっ！

そう思った瞬間、俺は飛び出す。

「『パラギオン』！ 『疾駆』！」

疾駆によって威力をあげて、狙うはもちろん、

「喰らえ！ 破壊神！」

ギュウウウン！ グサツツツ！

「ッ！？ グフッ・・・！」

封印陣のせいで動けない破壊神の腹に、パラギオンの蒼槍が突き刺さる。おそらく俺が攻撃してくるとは思っていなかったんだろう、何の構えも無かった破壊神は驚愕の表情で、俺の顔を見る。

「クッ、くくク・・・なんだ？ 封印はしないのか？」

「・・・いや封印はするさ。だけど、お前にやられた分は、きっちりお前にダメージを負わせてやらねえと気が済まない」

「・・・そうかい！」

破壊神が周囲にメテオを出現させ、その気配を感じ取っていた俺

は後退。即座にメテオが襲ってくるが、今度は使っていない方を使うでしょう……。

「『矛盾の……矛』!」

その矛に突き通せない者はない。莫大の威力のメテオでさえ、その槍は軽々と貫き、そしてその向こうに居る破壊神に突き刺さる。

「ゴフッ! ……ひやはハ……いいのかヨ。俺が死んでモ。封印する意味はなくなるぜ?」

「けっ、そんなこと言って、まだまだ死なないんだろ? どうせ封印まで三分ほどある……っと!?」

ズシン、と俺の目の前に振り下ろされた鉞。それを持つのはずんぐりむっくりとした中世の鎧……悪魔か……。……そういや忘れてた。ここ割と敵の正面だ。

後ろを振り返れば、古王が早く戻ってこーい、と手で合図。俺は『身体強化』を発動し、それによって得た脚力で一気に古王の横まで後退する。

「……何やってんの久郎、封印は?」

「いや、なんか、俺の場合。体を動かした方が能率がいいらしい……だから、ちょっと戦わせてくれ」

と言うか、どうせマザー体を封印した後でもこの悪魔たちは感染したまま残るのだ。だったら、今のうちに倒しておいた方が吉だ。後からあの巨人も倒しに行かなければならないし、おそらくあの巨人がラスボス!

なら、ここでそんなに時間を喰ってる暇はない!

「『パラギオン』!」

俺は近づいてくる騎士風の悪魔の一撃を受け止め、足を払い、首の隙間に槍を突き刺す。

グサッ!

さらに襲いかかってくる仮面をかぶった斧使いの一撃を、突き刺した騎士悪魔を槍ごと振り上げ身代りに、斧を振り切ったところを『疾駆』で突き刺す。

ザスッ！

魔導師風悪魔が放った魔弾を、矛盾の盾で受け止め跳躍、『不動』で作った槍の足場を蹴り、『疾駆』で悪魔を貫く。

ドスッ！

そして着地したところを手に持った剣で襲ってきた三匹ほどの強そうな悪魔には、

ガキンッ！

「つたく・・・ちゃっかり弱い方から狙いやがって」

横から出てきた古王が大剣で全て受け止め、弾き、切り返す。

ザシュッ！

「そりゃ、強いやつらには強いやつらで戦ってもらわないと・・・こっちも」

ズサッ！

古王とは反対側から槍で突進してきた悪魔を、ハザードが後ろから切り裂く。

「くっくく・・・我が輩を使うか・・・まあ、いい、あと一分程度だろう？」

そう笑って、近づいてくる敵をバツバツと薙ぎ倒していく。度々、破壊神のメテオも降ってくるが、それは俺が矛盾の盾で防ぐ。『・・・完成率九割！あと・・・少しです。頑張って・・・ください！』

さすがに、作業中に武器も召喚しているのだから、メイナへの負担も大きい。だが、あと少しだ。

残り一分の攻防。これさえ耐えきればこちらの勝ち！

まだ俺たちには余力がある。あの木偶の坊も倒さなくてはならないし、逃げるまでが作戦。

・・・だが、破壊神は最後の最後に、起死回生の手段を残していた。

Cの33話「数分の攻防」(後書き)

いまさら新キャラが出てきましたが、都合合わせのためのキャラなので、

そこまで重要なキャラではないです。多分・・・。

Cの34話「DESTROYER's Falling」

あと一分。60秒。長いようで短い時間だが、あとそれだけ……
あとそれだけ持ちこたえればこちらの勝ち。

「でいっ！」

ズバッ！

斬りかかってきた悪魔の腕を紅槍で突き、肉が裂ける音が耳に残響する。そのまま槍を抜かず、鎖を伸ばした蒼槍で悪魔の心臓を貫く。

ニギヤッ！？

絶命する悪魔、辺りに響く断末魔……それが何度繰り返されただろうか。

五百匹ほどいたはずの悪魔は、おもに古王の働きで約半数までになっていた。

「クッ、やるねェ……。つか、リアルにヤバイ状況力？」

と言いつつも、破壊神の声色は未だ余裕の色を残している。……
何だ、残り一分ほどに、何を隠している？

古王は近づいてくる数匹の悪魔を、一振りで退け、笑みを浮かべて破壊神に訊く。

「へっ、ヤバイ状況とか言って、何か隠してそうじゃねえか？」

訊かれ、身動きの取れない破壊神は、

「ク、……ククク！ 隠してル？ そんなの当たり前だろ？ この体は単体でも一応最強クラスに近い力は持っているんだぜ。……なう、メテオをたまに撃つ程度しか魔力を消費してないんだ、何も仕掛けてない方が嘘っていうもんだロツ！」

カッ、と破壊神が目を見開く。……そして、

「うおっ！？」

古王の驚愕する声。振り返ってみれば……古王の足が、道路にめり込んでいた。

いや、よく見れば、めり込んでいるわけじゃない・・・古王の足元に真っ黒い沼のようなものが出現して、古王がそれに飲み込まれている!?

「古王!？」

「クハハハハッ! 引っ掛かったナ! そいつは俺がこの体に残っている全魔力を使って開いた暗黒空間へのゲート。それに飲み込まれたら最後、どんな強者でモ、最低5分は幽閉されル!」

破壊神は笑う。暗黒空間のゲート!？ なんだそれ、説明求む! 「・・・つまり、底なし沼にゆっくり五分は浸かってなさいってこった・・・まずったな、これ」

とか言いつつ、ズブズブと既に胸の位置まで引き込まれている古王。俺は古王の横まで向かう。俺が背を向けた悪魔たちが後ろから襲いかかろうとしてくるが、古王が空中に出現させた大剣の雨で、近づくことを許さない。

古王のおかげで無事古王の横にたどりついた俺は、叫ぶように訊いていた。

「・・・って。おい! 大丈夫なのか?」

「んー・・・。ま、俺の体としては大丈夫なんだが・・・むしろお前が心配だな」

と、古王は苦笑い。・・・古王の体はどうとう首から上しか出ていない。最後に言い残すように古王は言う。

「ハザード、久郎のサポート任せたぞ。破壊神を封印した後は全速力で逃げろ」

「くっくく・・・分かった」

ハザードもまた古王の隣まで来ていた。ハザードが戦っていた分の悪魔たちも、古王がここぞとばかりに多めに降らしている大剣の弾幕によって俺たちから距離を取らされる。

そして古王は、首をこっちに向けて言う。

「久郎、俺が完全に飲み込まれたら、この弾幕も止む。だから、あと一分・・・いや、もしかしたら作業が遅れて一分以上になるかも

しれないが、それだけの時間をお前ら二人で耐えてもらう事になる。
・・・だから、これをお前に残してやる！」

そう言って、ズブリ、と右腕を空間から引きずり出し天に向ける。
そうして右腕を引きずり出した代償に古王の頭は完全に空間に飲み込まれたが、その時。

ヒュウウウウウ・・・、ズガンッ！

古王が飲み込まれたゲートの横に、古王の使っている大剣『超太古剣』が、空から降ってきて突き立った。そして古王は右腕を握り、親指を突き立てて、ズブズブと沈んでいった。・・・これを使えってことなのか？

・・・そして、古王が降らせていた弾幕が止む。

「クハハハッ、感動のお別れはすんだか？ 済んだんなら、俺ともお別れしようぜ！」

破壊神の怒号が飛び、それを合図にしたように悪魔たちが一斉に襲ってくる。

・・・さて、戦う前に『刹那』を発動。メイナに訊いておく。

メイナ、実際。あとどれくらいかかりそうだ？

『・・・すみません。まだ・・・三分は、欲しいところです。・・・予想以上に、手間取っています』

・・・つまり、破壊神を封印した後、新兵器が放たれるまで五分も無いってわけか。・・・なるほどな。と、俺は内心で状況を整理するが、

『・・・いえ、むしろ。三分・・・持ちこたえ、られるんですか？』

メイナが苦しそうに指摘する。さて、どうだろう。古王抜きで持ちこたえられるのかと訊かれれば素直に一言、無理、と答えたいが・・・。持ちこたえられるのか、というよりも、持ちこたえなきゃいけないんだよな。

ま、ノープランだが、古王が何かを思っに残してくれた大剣もある。やっつのけるしかないだろ。

『……そうですよね。……なら私は、余計な心配は……しません。なるべく時間を締められるよう、努力します』

メイナは相変わらず苦しそうな声を上げるが、それでも少し声に明るみが出た気がする。それだけ訊ければ十分だ……が、そろそろ限界だ。『刹那』解除。

ニギヤシャシャシャシャ！

向かってくる悪魔たち。いやはやその光景は魑魅魍魎が跳梁跋扈してるっていう何が何だかよく分からない。ただ、悪魔たちも古王と言う脅威が無くなったのを感じ取っているのか、先より目つきが狂暴かつ獰猛になっている気がする。

そんな中、どうしようかと思っていた俺の前にハザードが立ち、唱えた。

「『ブラッド・シェイブ』！」

その瞬間、ハザードの体の下半身が全て小さな紅いコウモリと化し、近づいてきた悪魔たちに噛みついて行く。そして何故かは知らないが、噛まれた悪魔たちは苦しげにうめき失速していく。ハザードが放ったコウモリの数は敵の半数ぐらいにも満たないものだが、その失速した悪魔ともつれるようにして失速していく周りの悪魔たち。それでも迫ってくる悪魔には、神槍で一撃をくらわせた後、後退して回避しながら訊く。

「何だ？ 何をした？」

「くっくく……、牙で毒を体内に打ったのだ。死にはしないが、しばらくは動けまい」

「毒って……、吸血鬼ってそんな生き物だったか？」

「くっくく、我が輩が開発した技だ。しかし、なかなか効き目があるようだ……文字通り身は削ったが……」

と、下半身が消え、上半身だけで浮いているハザードが言う。……つまり、この技は、

「ハチの毒針のようなものか？」

「・・・その例えは心外だが。くつくく・・・ま、生命力を削るという意味ではそうだな。・・・で、これからどうする？」

ハザードが訊く。そうだな、とりあえず・・・。

「あと三分を耐えるカギは、あれにあると思うんだが・・・」

と言って俺は古王が残した大剣を指差す。古王が最後に残した剣、と言うとなんかフラグくさいし。古王が残した唯一のものだ。何かの役に立つはず。・・・というか、あれを振って衝撃波のようなものを出せばいいな、と。

「・・・そんな、打ち出の小槌みたいにくまくくとは思えんのだ
が・・・ま、試してみる価値はあるだろうか・・・『ブラッド・
シェイプ』！」

今度は両腕をコウモリに変え、残った悪魔たちを足止めするハザード。そのうちに大剣の方へと向かうが、・・・大丈夫なのか？
「大丈夫・・・ではないな。しかし、どの道やらなければやられるのは目に見えている。それにせっかく開発した技なのだ。使わねば損だろう？」

「いや、損とかそういう問題じゃないと思うが・・・」

「くつくく、まあよいのだ。どうせ、大量に吸血すればまた元通りになる。吸血鬼は人間と違って、体液の半分を失ったぐらいで死にはせんのだからな」

ふっはっはっ、とか笑ってるし、ハザードは多分大丈夫なんだろう。

そして俺は大剣に手を伸ばして柄を掴む。・・・が、深刻な問題が発生した。

「・・・これ、重いぞ」

やっぱりなー、と言う空気がハザードと脳内のメイナから漂ってきてる気がする。・・・当たり前だが、強い威力の武器と言うのはどんなものでも重い。それはファンタジー世界であってもそうなんだろう。魔術なんかもあるにしろ、重いもののは思いのだ。

とりあえず俺は引っ張ってみるが、身体強化を発動した身を駆使

しても持ちあがるどころか、抜くこともできない。

「わー、やべ、どうしょこれ・・・」

素でそんな声をあげてしまう。そんな俺に横に、腕のない上半身状態で近づいてきたハザード。

「はぁ、しかたあるまい・・・」

と言って、ガブリっ、と俺の首筋にその牙を突き立てた!?

って、おい!?! なにやって・・・と、思ったが、特に痛くない。と言うか・・・なんかこう、体がポカポカしてきたというか・・・なんだこれ?

「なにを・・・やったんだ?」

「くっくく・・・吸血鬼と言うのは、なにも血を吸った相手を全て吸血鬼に変えてしまうわけではない。吸血鬼化と吸血は別物なのだ。そして今回はお前に、吸血鬼化の身体能力強化要素だけを与えた」

・・・えーと、つまり?

「お前が発動した『身体強化』に加え、時間は限られているが俺がお前に与えた『吸血鬼の身体能力』を上乗せしたってわけだ。別に吸血鬼化したわけではないから安心しろ」

器用だなそんな事が出来るのか。

「無論だ・・・っと、こんな話を話している暇はない。我が輩が『ブラディ・シェイプ』で敵を止められるのも30秒程度が限度。そろそろ30秒が経つぞ」

「・・・なら、いそがなくなっちゃな!」

俺は剣を引き抜こうと、全身に力を込める。ハザードによってもたらされた、この身に余る力。さっきまで微動だにしなかった剣が、ゆっくり・・・ゆっくりと持ちあがる・・・!

だが・・・持ち上げるまでに至らない。まだ・・・まだ力が足りない! 古王はここまで重い物を背負って戦っていたのか!?

「ククク、馬鹿か? 古王ほどの最強クラスでさエ、その剣を軽々しく振ってはいないよナ、それほどの威力の剣、それが人間一人

に扱えてたまるかヨ」

と、破壊神は笑う。・・・だが使えないと言われても。・・・使わざるを得ないんだ。

古王はこの大剣をわざわざ残した。ハザードはそのため力に貸してくれた。メイナは俺が持たせている時間にもバグの修正を行ってくれている。ノフィーネも創造神を助けだしてくれてる！だから・・・俺はこの大剣を振り上げなくちゃいけない。振り上げなくちゃ、前に進めない！

だからっ、振り上げろおおおおお！

そして、その久郎の強い思いに呼応するように、
ピキイン。そんな乾いた音が、久郎の脳内に響き。
命断にかけられた、籐たがが、今外れた。

C

「・・・ん、これは・・・」

バスターの隊員たちに牽引されるまま黙って歩いていた創造神が、何かに気がついたようにハッと口を開いた。

「どうしました？ 神様」

「・・・いや、とうとう来たぞ」

その様子に気がついたノフィーネが訊くが、帰ってきたのは意味不明の答え。しかし、創造神はどこか嬉しそうに笑っている。ノフィーネは訊き直してみる。

「来た、って何がですか？」

「ん？ ああ・・・いよいよ、命断の本領発揮・・・深層バイムがいじられるぞ」

創造神はそう言って、本当に嬉しそう・・・いや、楽しそうに笑っていた。

「おい、そいつ。何を笑っているんだ？」

「あ、いえ。えーっと・・・こういう人なんです・・・」

いぶかしむ仲本に、ノフィーネは創造神を軽く危ない人扱いすることでごまかす。・・・微妙にひどい事を言ったわけだが、そんなのおかまいなしで創造神は笑みを浮かべ続けていた。

ノフィーネは、創造神が壊れたのではないかと心配になったが、そうではない。

創造神は、ただ嬉しくて、面白いのだ。

自分と同じ土俵に立てるものが現れた事が。

C

『ッ！　これは！？』

メイナは、久郎の脳内に起こったすさまじい情報処理の波に、一瞬、吹っ飛びそうだった。

バグ処理に夢中で何が起こったのか理解できていないメイナは外の様子に意識を傾ける。一体、何が起こったのか、これほどの情報処理が何のために行われたのか。

まず視覚の確認。悪魔たちはゆっくりと動き出そうと体を震わせている。だが、何かが起こっているような気配はない。ついでに言えば、体に大した負荷がかかっているわけでもない。なら久郎は一体何をしたのか。

・・・その答えをメイナが知る前に、久郎は、その手の剣を振り下ろす。

グラヴィティ・オブ・レジェンド
「『去りし歴史の重み』！」

ゴッオオオオオオオオオオオオオ！

大剣から巻き起こされる衝撃波に、驚愕の悲鳴を上げながら吹き飛ばされ、切り刻まれていく悪魔たち。その威力は先ほど古王が放った威力に勝るにも劣らないが、・・・久郎にいったい何があったのか。

「・・・？　ど、どういことダ？　大剣を・・・振った？　・・・」

人間、何をしタ？」

破壊神は目を見開いて驚き、久郎に問う。・・・そして、久郎は何と言う事も無い、と言うように告げる。

「重力操作・・・地球で物の重みを感じるのは地球に重力があるからだ。だからその重力をいじって、少し重さを軽減させてもらった・・・『命断』でな」

「重さヲ・・・？」

重力は宇宙の法則でもあるが亜宙にも重力はある。そして、地球での重力の調整は深層バイムで行われるようになっていた。・・・だから『命断』で深層バイムにアクセスし、少しの間『超太古剣』に対する引力を打ち消した、というわけだ。

・・・と、簡単に解説はできるが。こんなことを今まででやったのは、世界の創造主たる創造神ただ一人だけ。それを久郎がやってのけたという事実には破壊神は目を丸くしていた。

今までの『命断』では絶対になしえることができなかった事だ。久郎自身もこの力がなんなのか分からないでいたが、感覚的な導きで重力操作を行っていた。

「重さを操作するとカ・・・、チートにもほどがあるゼ!？」

オオオオオオオオオオ!

戸惑いつつも猛々しく突っ込んでくる悪魔たち。しかし、先ほどの一撃によって半数が削られていた悪魔たちに、次の一撃を避けきることはできない。だが、悪魔たちの狙いはそれではない。

「自爆しろ! 悪魔どもオ!!」

——キュイイイイン——

破壊神が叫ぶと同時に、悪魔たちすべての体の内から光が漏れだす。・・・これは自爆の予兆、あと数秒で爆発し、至近距離に居る久郎は粉々になる。ついでに破壊神の体も巻き込まれるが、封印によって体も動かせなければ自爆もできないこの体を失ったところで痛くもかゆくもない。・・・そういう算段だったが。

今の久郎にそんなものは通じない。

「これか・・・『力学操作』！」

久郎は何かを見つけ出しアクセス。そして悪魔たちが爆発する。
ドゴオオオオオオオオン！

すさまじい爆音。自らの命を散らし、熱と衝撃と爆風に変えた悪魔たち。だが・・・その爆発は久郎に届かず、まるでアニメの火山が噴火するかのように、ただただ上空に撃ちだされていた。

それもまた至極簡単な仕組み。爆発によって生じる力という力が、上に向かって逃げるように、この空間だけ力学を変えた。ただそれだけのこと。

「なッ、でたらめナ・・・バカなッ！！　こんなことが、ありえてたまるのかああああア！！」

しかし、その怒号に反応する悪魔はもういない。近くに居る吸血鬼たちが久郎に迫ってくるが、瞬時に久郎によって放たれたエリクソスに捕縛されていく。

そして、三分が経過した。

『OKです！　久郎様っ！』

メイナが疲れきった声で、それでも叫んで久郎に作業の完了を告げる。それは同時に、破壊神の最後も告げる。

「オッケーだ、よくやってくれたメイナ。あとは・・・任せろ」

久郎は手に持っていたエリクソスを手放し、手で印を組む。さらにその手には札が握られ、・・・久郎は、あの時の効煽のように唱える。

「後術『終世封印』！」

そして封印陣は輝き、そこからは何本もの腕が破壊神をからめ取ろうと近づいて行く。

「くッ、こいッ！　離れロ！　離れろおおおおおおオ！！」

もがこうとするが破壊神にはもがくことすら許されていない。ただ唯一動く口だけが、むなしく叫び声を上げるだけ。

「・・・終わりだな破壊神。とはいっても、こっちはお前の残したあのデカブツも倒さなきゃならないから、最後じゃないんだがな」

「クッ、くくくク……、あア。この勝負は俺の負けだナ。久々にイイものが見れタ。……しかシ、まだ終わって無いゾ」

封印から逃れることを諦めた様子の破壊神が、それでも目に力を宿し手告げる。

「……俺はこれカラ、お前らが破壊神の本体だと思っていたところに置いてアル、肉体たちヲ、この人間界に向けことにシタ！　くくくク……、そしてその指示はもう送ってアル。……言っておくガ、あそこにある肉体はここに居た悪魔どもとは比べ物にならないぐらい強イ！　さあテ、お前らはそいつらも倒せるかなア！　……といつてモ、そいつらが来るのは何年後になるか分からないがナ。ヒヤハハハハハハ！　！」

破壊神は狂ったように笑いながら、徐々に足先から封印陣の中に飲み込まれていく。

ヒヤハハハハ！　ハハハハハハハハハハ！！

そうやって笑う破壊神に、久郎はただ一言、落ちついて言う。

「……そうかい。だけど、そんなときにはまた迎撃するだけさ」

「ククククク、そんな簡単なものではないと、今のうちに忠告しておくがナ！　ククククク、ヒヤハハハハハハハハハハ！」

そして、最後まで大声で笑いながら、破壊神は、封印陣の中に吸い込まれ、……封印陣は割れた。

封印完了。久郎たちの、完全勝利だった。

C

ところ変わり、北ゲート近く。

「隊長、……あんなデカイの、どうやって倒せと？」

「……なあ、隊員。お前実は、巨大ヒーローとかに変身できたりしない？」

「そんな人間いませんよ。というか、変身ヒーローなんか見たことないですけど。やっぱり宇宙人なんていないんですかね？」

・・・この隊員たちは、破壊神の呼びだした巨人が、のっそのつと近づいてきているのを見て、混乱の境地に達しているらしい。いやでもだからと言って、そんな呑気な会話をしている状況ではないのだが。

「で、どうします？ 落とし穴でも掘りますか？」

「ドーバー海峡ぐらいいは掘らなきゃいけないぞ」

「えーじゃあ、そこら辺に剣でも突き立てますか？」

「地味な嫌がらせだな。それ画鋏でやるやつだろ？ そんなので止まるかよ・・・」

「うーん、ならそこら辺にオイルをぶちまけて、転んでもらいますか？」

「そうやってこっちに転んできたらどうする。死因、巨人がこけて下敷きになり圧死、とか俺いやだぞ・・・」

・・・だから、そうやってふざけている場合ではないのだが。しかし隊員たちは一応大真面目。

さっきまで大量の吸血鬼と戦って次がこれなのだ。・・・身も心もボロボロで冷静に考える力も無いのだろう。

「やっぱり、結界によって防ぐしかないですね」

「・・・それしかないだろうな」

隊長は一番無難な策を選択し、それを実行させる。一応、魔術師たちも他のエリアから移動してきていたし、新兵器が使用されればこの巨人だって倒されるはず。だからここ一番をしのぐだけでいいのだ。

さらに、他の隊員たちには兵器などを用意させ、巨人たちに一斉掃射させる。

「うてーっ！」

パン、パパン、ドンドン、ドゴン！ ズドン！！

勢い良く放たれる、76ミリ砲やら108ミリ砲やら魔導弾やら・・・しかし、

ポツ！

当たった所でそんな音しかたたず、焼け石に水どころか、焼け石にスズメの涙ぐらいの効果しかない。

そして巨人はやがて障壁までたどり着き、

『オッ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！』

右腕を振りかぶって、障壁にその拳をぶつけた。

グオオオオオオオオオオオオ！！

まるで、超巨大なドラを慣らしたかのような音。これは結界に強い衝撃が加えられた事によって起こった音だが、それにしても……これはやばすぎる。巨人のたった一撃で、結界にひびが入るまでになっていた。

修復は間に合わず……このままでは、二撃目をくらったと同時に結界は崩壊し、三撃目は障壁がやばい……！

「つつ！ 止めろ！ なんとんでもやつの左腕を止めろおオオオオオオ！」

パン、パパン、ドンドン、ドゴン！ ズドン！！

しかし、振り上げられた左腕はそんなものをともせず振り上がり、ただ重力に従って、決壊に向かって振り下ろされる。

万事休すか、……と思われたがしかし、丁度その時、あいつが到着していた。

ガキン！

今度はドラの鳴る音でも、ガラスが割れる音でもない。金属が金属にぶつかった時のような音、骨が骨にぶつかった時のような音。つまり……ほぼ同じ程度の力を持った二つがぶつかったような音が辺りに響いた。

その音の違和感に、隊長が閉じた目を開くとそこには……、
「……ッ！ 流石に、威力がありますね」

対策本部から来た防王が、その手にバリアを張って巨人の拳を受け止めていた。

『オオオオオオオ……』

巨人は、その拳を受け止められた事をなんとも思わずに、再び右

腕を振り上げ、防王を殴る。

ガキイン！

「ぐっ……」

ピキッ！ と、バリアにひびが入ったような音が聞こえる。巨人が今度は本気で殴ったのだ。……だが、防王はすぐさまバリアを修復。そして、言う。

「なにをやってるんです！ 早く障壁の結界を直させなさい！ 私でも、これを何度も受け止めるのは……」

「は、はいっ！ 修復急げ！」

隊長の号令に、防王の登場にボケっとしていた魔術師が、慌てて結界の修復を開始する。さらに厚く、さらに堅くなるように手も加える。

ガキイイン！

「ぐっ……はっ……」

そして修復が完了するとともに、防王が巨人の拳を耐えきれず地面にたたきつけられる。

そして、巨人はまた結界を殴るが……先ほどより強く張られた結界は、少し耐久力が上がっている。

だが、それもやはり持たない。地面にたたきつけられた防王は、再び巨人の攻撃を防ぎに飛ぶ。

『防』王であっても、防ぎきれない巨人の攻撃。だが、それでも隊員たちはあきらめていない。新兵器の投入まで、あと少し。

……あと少し、耐えればいいはずなのだから。

C

『久郎様、なんだったんですか、あの力』

一息ついたメイナが訊いてくる。……んー、何だったのかと訊かれても。

「……なんだったんだろうな。とりあえず、箍が外れた……系

？」

『そんな系統聞いた事も無いですが。・・・まあ、よく分からないんじゃないです』

うん、そうしてもらえないと困る。なんせ俺にもよく分からないんだから。

何と言うか・・・自然にできた感じなんだよな。一気に世界の仕組みを全て理解できたというかなんというか・・・。

「くっくく・・・しかしまあ、でたらめな戦い方と力だったな。やはりこちら側について正解だったようだ」

と、笑むハザードは今だ上半身のままで浮かんでいる。・・・俺が全ての悪魔を潰したから血が吸えないんだろうと思ったが、本人は「くっくくく、我が輩はグルメなのだ。悪魔の血など吸いたくも無い」とか言っていた。こんな姿をしているが、わりと切羽詰まっていたらしい。

そして俺たちは何をしているのかというと、身体強化で受けた体の負担を休める意味も込めて、古王が暗黒空間から復活するのを待っていた。

・・・早くこいつが復活しないと、新兵器を止めてくれ、って連絡が取れないからな。・・・古王が復活するまであと二分以上・・・そろそろホントにヤバイのかもしれない。古王がきっちり五分で復活してきても、残された時間はあと三分程度しかないわけで。

「ノフィーネたち、無事に逃げれたかな・・・」

『・・・距離的に難しい場合はシエルターに入る予定ですが、うまく入れてもらえるかどうか・・・ですね』

ま、うまくやっていると信じるしかないがな。・・・ふー、とりあえず一段落ついたな。あの巨人は北の方に向かったまんまだが、古王が復活しないと倒しに行けなさそうだし。

『・・・ですけど、もしかしたら今の『命断』なら案外いけるんじゃないですか？』

ん、ああ、そうかもな。・・・なんかよく分からないまま重力と

か操れたし・・・この力は、これからも成長していくのかもしれない。そう考えると、少し嬉しくなるのはいたしかたない事。

だけど、あの巨人のに立ち向かえるほどでは無いだろう。使い慣れていない力だからか、ひどく疲れたし。・・・あーも、考えるのもめんどくさくなってきた・・・。とりあえず今は休むぞ。ゆつくりと。

『・・・そうですね、ゆつくりと・・・』

そうして道のど真ん中で足を広げて、ゆつくり休む俺。ハザードは宙に浮いたまま目を閉じている・・・。

と、その時、誰かが近づいてきた。

「誰だ？　そこにいるのは！」

俺は急いで立ち上がり、声が聞こえた方を向く。そこにいたのは・・・三人のサバイバル服を着た男たち。バスターの隊員だろうか。

「吸血鬼！？　お前、まさか信者か・・・？」

「だが吸血鬼は手負いのようだ・・・おい、お前ら、ちょっと付いて来てもらおうか」

と、言われたが、・・・今動くわけにはいかないし・・・だからといってエリクソスで解決という事も出来ないし・・・。

「あー・・・ちょっと、話を聞いてもらえませんか」

「そんなもの、シェルターの中で訊く！　付いて来い！」

「ちょ、ちょっ！　まっ！」

俺は、バスター隊員の一人に腕を掴んで引っ張られ、ハザードも銃を突きつけられて連行されそうになっている。・・・どうしたもんかなー、と考え始めた時。

グサツ！

「えっ・・・」

ふと響いた刺傷音。それは誰のものか。バスター隊員？ ハザード？
・・・いや違う。

・・・血で・・・赤く・・・染まっているのは・・・俺が咄嗟に・・・
体をかばった・・・左腕？

左腕に・・・俺の手を引く隊員が・・・腕に持つナイフが・・・
刺さっていた。そして・・・その隊員の腕にも・・・血が・・・。
な、え、これは・・・いたい・・・なにか。

『くっくくくくク・・・ハッハハハハハハ。バカがバカがバー
ーカ！！ あれぐらいデ、俺が完全に封印されるものかヨ！』

な・・・これは・・・破壊神の・・・声。なんだ・・・どこから・・・
どこから！？

『く・・・久郎・・・様・・・』

メイナのうめき声が脳内に響く・・・そうだここから・・・破壊
神の声は・・・俺の脳内から響いていた！？

「ど・・・どういう・・・ぐっ、があああああああ！」

痛い、痛い、痛い、痛い！ なんだこれ。頭が・・・割れるよう
に痛い！？ いったい何が、何が起きている！？

「久郎！？ くっ！」

・・・ハザードの叫ぶような声が聞こえる。・・・痛い、痛い、
痛い！

ハザードは俺の腕に手を突き刺している隊員の首筋を強く噛み殺していた……だけど、頭を締め付けるような痛みは続く……！……どういふ事だよ、これ！？

『ヒヤハハハハ！ お前の詰めが甘かったってことだよ！ 封印で自爆を封じタ？ 甘い甘い！ 本当に死なせたくないなう、猿ぐつわでも噛ませておくべきだったよなア！』

こいつ……まさか、……封印される直前に、舌をかんだのか……！？ それで、この感染者の隊員に乗り移って……ぐっ！？ ああああああああ！！

痛い、痛い、痛い！！ まさか……これが……感染なのか！？

『久郎様……いや……私は……まだ……消えたく……ない……』

メイナ！？ おい、メイナ！ しっかりし……ぐあっ！

『ヒヤハハハ！ 脳内人格は俺だけで充分なんだヨ！ 消えろ消えろ消えろオオ！ ヒヤハハハハハ！』

破壊神の声が……脳内にこだまする。……つつ、メイナ……まさか……おい……メイナ！

『いやです……いやですよ……、私はまだ……久郎様と……一緒に……消えたくない……消えたくない！』

メイナの強い思い。その時『命断』が起動するような感覚が起こる強い思いに『命断』は呼応する。だから……今回も……！

『はッ、何度も同じ手はくわねえよオ！』

グワン！

ぐあっ、……脳内により一層強い衝撃と痛みが……俺の意識が吹っ飛びそうになる……。

『なるほどナ、それがお前の持つ不思議な力ってわけカ・・・クッククク、気にいっタ、気にいっタゾ！ この体、俺が存分に暴れさせてやるヨ！！』

くっ・・・誰が、・・・負けるかよ・・・、この体を・・・渡してたまるか！

『おやおヤ・・・、あくまで抵抗はするんだナ。・・・でも、お仲間はまだギブアップみたいだぜ？ ヒヤハハハ！』

なにっ・・・おい、メイナ！ メイナ！

『・・・く、ろう・・・さま・・・わたし・・・消えたく・・・ない・・・死にたく・・・ないです・・・よお・・・』

っ、メイナ！？ おい、メイナ！ 返事しろよ！ 嘘だろ・・・なあ、嘘だろ！・・・っつ、・・・嘘だよな・・・気絶してるだけだよなあ、おい！　ぐはっ・・・がああああ！

『ギャハハハハハハハ！！ 大逆転、大逆転、超大逆転！！ さあテ、大逆転された気分はどうよ人間！ 悔しいカ、むかつくカ？・・・いや、やっぱりなにより、痛いよなア！』

ぐっ・・・このくらい・・・っつ！？ 腕が・・・動かない・・・？ 足も、口も、指も目も鼻も舌も眉も何もかも・・・動かないっ・・・！

くそっ、くそっ！ こんな終わり方が、あつてたまるかよ・・・認めない・・・『命断』の力で・・・お前を消し去る・・・！

『クッククク・・・ギャハハハハハ！ それは無理ダ！ なぜナラ・・・『命断』とかいう力はもう、・・・俺が掌握したからなんだよオ！！』

んなっ・・・バカな・・・そんな・・・わけが・・・。

『だったラ、なんでもしてみればいいイ。槍を出すのでモ、力学を操作するのでモ、なんだったら俺を消し去ってくれても構わないぜ？

マ、無理だがナ！ ヒヤハハハハハ！！』

・・・エラー、エラー、エラー、エラー！ できない・・・槍も力学も・・・あいつを消し去ることも・・・できない！ ・・・『命断』が俺の元に・・・ない・・・。

っ！ 痛い・・・痛いのはなんでだよ・・・、あれ・・・なんで俺、こんなこと考えて・・・や、ばい・・・のか・・・、俺は・・・俺の意識が・・・墮ちていく・・・どこに・・・？

俺が・・・死ぬ？ ・・・死んでたまるか・・・死んで・・・っ！

『無駄な抵抗だナ・・・なら最後にこの一言をやろう・・・』
ぐっ・・・があああああああ！

『死ネ』

がつ、あああああああああああああ！ ああああああああああ
ああああ・・・。

・・・ぐっ・・・意識が遠のいて・・・いく・・・なんだ・・・聞？ ・・・だんだん・・・痛みが無くなって・・・いく・・・。
・・・死・・・の・・・俺・・・？ ・・・な・・・で・・・こ・・・に・・・ごめ・・・ん、ノフィー・・・
ネ・・・。俺・・・約束・・・守れ・・・な・・・な・・・っ
た・・・。

・・・。
・・・。
・・・。

C

「ッ！」

ガバツ！　つと、突然にノフィーネが後ろを振り向いた。それはなんてことない、ただの不吉な予感。・・・だが、それは苦しくも当たっていた。

「えっ・・・あれって・・・」

そこに、空からこちらに向かってくる影があった。その姿は上半身だけ、しかも両腕も無い状態で向かってくるその姿は・・・ハザードだった。

「ハザードさん！？　え、どうしてそんな？」

ノフィーネはつい叫んでしまう。だがその事で他に居るバスター隊員三人にも、ハザードの存在がばれてしまう。

「ッ！　吸血鬼！」

真っ先に反応したのは仲本。銃を構えて、ハザードに向けて掃射する。

「チッ・・・血も足りないというのに・・・ノフィーネ！　首を出せ！」

空中で息も絶え絶えにに叫ぶハザード。何が何だか理解できないが、ノフィーネは言われるまま髪を分け、首筋をさらす。そこに、

ガプッ！

「つつ！」

銃弾を避けて近づいてきたハザードが噛みつく。だが今回のハザードの吸血は少々荒く、ノフィーネの首筋にジンジンと痛みが襲う。おそらく相当の量の血を吸っているのだろう。・・・だが、吸血を長くすることはかなわない。

パタタンッ！

銃弾がノフィーネとハザードをかすめる。ハザードは一旦、体をコウモリ化し、元に戻った時には五体満足の状態で宙に浮いていた。・・・しかし、その顔に笑みは戻っていない。

「つつ・・・、ハザードさん？」

全く状況が飲み込めないノフィーネ。しかし自体は進行していく。「吸血鬼に血を与えるとは・・・やはり、信者だったか！」

ダダダダダン！

今度は二本分の銃声が響く。ハザードはよけ、ノフィーネは創造神がバリアを張って無傷。

銃を撃ったのは仲本と。・・・さっきまで温厚だった桜井。桜井が悲しそうに・・・しかしはつきりと言う。

「・・・残念ですが、そうみたいです。・・・これは連行するわけにはいきません」

「桜井さん・・・？」

「あなたが信者であると確定した以上・・・ここであなたたちを行動不能にします！」

行動不能・・・と少し柔らかい言い方はしたが、それはつまり殺すという意味。

気づけば、部隊の他の隊員たちも、桜井たちの後ろから近づいてきている。

そして桜井たち三人はノフィーネたちと距離を取り、イーゼスを除く隊員たちそろってが銃を掃射。

ノフィーネたちも距離をとろうと退く。

（何が・・・なんでだ？ 作戦と違うし・・・何があったの？）

戸惑うノフィーネに、ハザードは切羽詰まった声で言う。

「ノフィーネ落ち着いて聞いてくれ・・・」

いつもより数倍も真面目なその声に、この緊迫した状況でもノフィーネハ心を落ち着かせようと努める。ハザードは、銃弾を避けながら告げる。

「久郎が・・・感染した・・・！」

そして、ノフィーネの心は一気に乱れた。

「え・・・？ なんで？ どうして・・・？」

「・・・罠にはめられた！ 古王とも隔離され・・・隊員だと思っていたやつらが感染者だった！ うかつだった・・・俺はその事を伝えようと、命からがら逃げてきた・・・！」

ハザードもまた、落ちつけと言ったわりに自身が落ちついていな

い。・・・しかし、それもしかたないことか。

「ちょ・・・よく分からないよ！　ハザードさん、もっと落ち着いて！」

銃弾を防ぐバリアの後ろ、ノフィーネは訊き返す。・・・だが、敵はゆっくり話をする時間も与えてはくれそうにない。・・・銃弾を放ちつつ、じりじりと近づいてくる。

「・・・つく、魔導弾か・・・　バリアはそんなにもたないな・・・

」

もともと、戦闘派じゃない創造神が苦言を口にする。ならどうするか・・・創造神もハザードの話が気にはなったが、それよりも・・・いたしかたない。

「ハザード！　ノフィーネを連れて行け！　少しなら俺が一人でこいつらを抑える！」

「え、神様！？」

「大丈夫だノフィーネ。死にはしない・・・それよりも、早く！」

「・・・了解した」

バサッ！　とハザードは翼を広げ、ノフィーネを抱えて飛ぶ。ノフィーネはめまぐるしく動く現在の状況に混乱しながらも、訊く事だけはしっかり頭を中心に据え、落ちついて訊く。

「・・・それで、ハザードさん。一体何が・・・」

「ああ・・・実は、だ・・・」

そして、ノフィーネはハザードから、事のあらましを聞く。

「えっ・・・そんな、久郎君が・・・」

「ああ、だが妙な力を持っているアイツの事だ。まだ手の打ちようはあるかもしれない、と思ってお前を呼びに来て見たのだが・・・」

そんな事を言われても、ノフィーネには、自分に何が出来なのか分からなかった。

「そ・・・そうだ、古王さんは・・・」

「残念ながらまだ復活していない。最低五分とは言っていたが、もっとかかるのやれんな」

「そんな・・・」

ハザードに両脇を抱えられ飛んでいるノフィーネは顔を蒼白にさせる。混乱はしない、落ち着いていようとする気持ちと、激しい感情とが頭の中で争う。

・・・とりあえず落ち着いて冷静に考えたい。けど、どうすればいいかなんて方法、分かるはずもない・・・。

C

「ふう・・・こちら辺の吸血鬼はあらかた片付いたか・・・」

隊員の一人が他の隊員に向けて言う。第六小隊はかなり奥地に居たにもかかわらず、構成人数九人、全員が無事である中々強い小隊だった。

「隊長、そろそろ発射予定時刻です。シエルターに入りましょう」

「うん、そうだな、新兵器に巻き込まれるのだけは簡便だ」

そう苦笑いし、隊長は部下たちとともにシエルターのハッチを開けようと地面を探る。が、その時、

「新兵器？　なんだ、それ。詳しく訊かせてもらえないか？」

突如、前方から声が聞こえてきた。隊員たちは全員銃を構える。が、そこに居たのは16歳ほどの少年。サバイバル服も身につけず私服で、道の真ん中を歩いてきている。

その距離40メートル。隊員たちはこんなところに少年が一人である事を当然怪しみ。隊長が問う。

「貴様・・・何故ここに居る？　信者か？」

しかし、その答えを少年は返す気がないらしい。ゆったりゆったりと一歩一歩近づいてくる。

「それ以上動くな！　それ以上動くとは敵対行動とみなし、ころ・・・」

ヒュン、ザシュッ！

「ガハッ！　・・・ッ！」

そしてその隊長の言葉はそれ以上続く事はなかった。隊長の心臓を貫いたのは、神槍グングニル。

「な、隊長!？」

「う、撃て」

ダダダン、ダダダダ。

飛ぶ銃弾。しかその銃弾は少年の手前で、いきなり力を失ったかのように失速し落下する。撃てども撃てども、その銃弾は少年に届く事はない。バリアで弾くことが難しい魔導弾を撃っているというのに、全く当たらない、そもそもバリアを出している気配すらない。「クククク、だんだんと使い方が分かってきたぜ。・・・さて、さっさと教えろヨ。その新兵器とやらについて」

「わっ、わぁああああ!!」

ダダダダダ! と、半狂乱状態に陥っていた隊員の一人が銃を乱射する。が、それもかいなく、神槍の二人目の犠牲者となるだけだった。

「くっ! 報告を・・・」

一人が仲間に報告しようと通信機を起動し、他の隊員たちがその仲間を守ろうと動くが、通信兵含め六人の隊員は、複数召喚されたグングニルに一気に貫かれた。

「ひ、ひい・・・」

そして残ったのは、一番若そうな男の隊員。少年はつかつかと詰め寄り、問い詰める。

「なァ、教えろヨ。新兵器って何ダ? 教えてくれたら殺しはしねえヨ」

少年は笑顔で語りかけてくるが、隊員は首を振り、答えようとしていない。・・・少年は少し不機嫌そうに顔をゆがめ、少し声を強くし言う。

「・・・別ニ、お前じゃなくてもいいんだぜ。これについて訊くノ。だか俺にとってお前に訊くかどうかってのハ、数秒程度のラグでしかないわけダ。俺は少しの時間を消費するだけ、だがお前は命って

いう一番重いものを捨て、お前という存在を消すわけだ。・・・あア、そっちの方が案外いいかもしれないナァ・・・」

「は、話す！　話す、俺は詳しくは知らない！　ただ、新兵器が撃たれるから、時間になったらシエルター近くに移動して、シエルター内に逃げろって・・・ホント、それだけしか知らない！」

「ホー・・・、それデ、その新兵器ってのはいつ撃たれるんだ？」

「あ・・・あと一分！　いや、それ以下かも知れない！　ホント、それ以外は何も・・・」

「ふーん、分かった。ありがとヨ、親切に教えてくれテ。これはその・・・ほんのお礼だ」

ガスっ！

そして少年に呼び出された神槍が隊員の腹を貫く。急所は外れてるが、傷口から大量の血が流れ出てくる。

「ぐあっ！　・・・な、お前、殺さないって・・・」

「あア、殺さねえヨ。だから、俺に感染させて生きさせてやろうとしてるんじゃないか」

少年はニタリと笑い。薄く指を切って、そこから出た血を隊員の傷口に垂らす。

そして、痛みによる絶叫とともに、隊員は感染者となった。しかしそんな事には目もくれず、少年は呟く。

「あト、一分もないのカ・・・。シエルター内に隠れるという手もあるガ、それジャ、あの融合体が死ぬ可能性もあるしナ・・・」

そう思っただけで少年は北の空を見る。・・・障壁はまだ破れていないらしく、融合体はそこで腕を振り回したり振りおろしていたりした。おそらく、残り数十秒で障壁は破れないだろう。

「なう、することは決まってるナ。・・・クツクツ、この体、充分に使わせてもらうとしよう！」

そう呟き少年は背中に黒い羽根を召喚し、その場から上空へと羽ばたいた。

Cの35話「結路」

「・・・いやな、予感がするな」

会議室で総帥が呟く。新兵器の発射準備は整い、あとはゲートから新兵器の射出装置を運び込み撃ちだすだけ。それには残り一分もない。

だが、他の要人たちが表情をいくらかほころばしている中で、総帥だけが苦い顔をしていた。一応、新兵器は五発用意してある。ついでに言えば、予備を本部から持ってこようと思えば時間はかかれど持っては来れる。

だが・・・総帥の長年の勘から、今の戦場の雰囲気からは不吉な気配しか感じられなかった。嵐の前の静けさとはよく言うものだ。カメラがほとんど破壊され、内部の状況が詳しくつかめないのもあるが、報告される情報も、生存、生存、生存、と生き残っている部隊の方が多い。

話によると、悪魔たちはあの古王によって全て倒されたため、隊員たちは吸血鬼としか戦ってないとのことだが。

「・・・それにしても、おかしいか」

そう呟けど、さすがの総帥も今からどうするつもりはない。ただ新兵器の発射準備が整うのを待つばかり。そして、

カウント入ります！ ———10———9———8———7———

ついに発射態勢は整い。五発の新兵器が放たれる。

———6———5———4———3———

既に現場の隊員や魔術師らはシェルター内に退避し、この事にかかった全ての人間の間に緊張が走る。

――2――

新兵器が発射される時間になり、桜井らはいったん退避。

――1――

だがそれでも、ノフィーネとハザードはクロウの元に向かい続けた。

――0っ！――

ゴウン！

大型長距離法によって、障壁の中心に向かって放たれる五発の新兵器。その軌道に狂いはなく、新兵器の不備も全く見つからず。これが起動すれば、この戦いは終わるはずだった。

だが、ただ一つ誤算があるとすれば――

「俺の存在。そして・・・こいつの存在だろうナ。・・・『排外』」

その中心部にて宙に浮かぶ少年が、飛来してくる球体たちに向かって手をかざし、小さくつぶやいた。

その少年の姿は、かつて藤草久郎と呼ばれていた、破壊神本体のものだった。

C

「起動・・・っ、しないっ!？」

どよどよっと、会議室内にどよめきが広がる。それは現場も同じで、障壁の外からカメラで中の様子を確認していた隊員たちは、新兵器が起動しない事に少なからず慌てていた。

「っ！ これはどういうことだっ！」

対策本部の要人の一人が、総帥とモニターに映る隊員両方に向かって声を荒げる。だが総帥にも何が起こったのか見当がつかない。そもそもカメラの映像が荒くて、新兵器が奥まで飛んで行っただろうのか確認のしようがないのだ。

「・・・状況を確かみたい、隊員たちに奥まで進ませろ」

総帥はモニターの向こうの隊員にそう指示する。モニターの向こうの隊員は慌てて指示を出しに行ったが、総帥はそれを確認しないまま今度は会議室の人間の方に向く。

「・・・説明は、できるのかね？」

御老体が代表して訊く。その問いに総帥は想定外の事が起こったのに動揺する様子一つ見せずに冷静に答える。

「いや。だが五発撃ったのだから整備不良という事はない。あの新兵器も試射はすでに完了してあったものなのだから、設計ミスという事も無い。・・・ならば、外的要因しか考えられない」

外的要因・・・と言うと真っ先に思い浮かぶのは撃ち落とされること。しかし、だとしても核爆発すらしないというのはおかしい話。そもそもそんな事が想定されていないはずはなく、新兵器はそう簡単に撃ち落とされないように装甲には対魔コーティングまでしてあった。

ならば・・・いったい何が。その答えが出るにはまだまだ情報が足りない。

「とりあえず・・・バスター本部にある予備の五発を今から用意する」

と言って総帥が一旦会議室を退室。対策本部ではそれ以上の問答が起こることはなく。ただただ隊員の報告待ちとなった。

C

「・・・今のって、何？」

ハザードに抱えられて空を飛んでいる最中のノフィーネが言葉を漏らす。

少し前、一心不乱に久郎の元へと向かう二人の耳に、どこから砲弾が飛来するような音が聞こえてきた。それが新兵器の近づく音だという事に流石に二人とも気づき、ダメかと内心想っていた二人だったが、そのあと唐突にその音が消えた。

そして消えたのは音だけではなく、その五つの新兵器そのものが消えたということを二人は見ていた。ノフィーネの視力ではギリギリだったが、吸血鬼であるハザードの目にはその消える様子がはっきり見えていて、どうも何かに吸い込まれたような感じだった。

「転移魔術にも見えたが・・・我が輩にもよく分からんな。なんにせよ助かったのは確かだが」

「でもきつと・・・あそこに居るよね、久郎君」

ハザードが言うには、新兵器が消えたあたりに人型の影も見えたという。・・・もしかしたら、それが・・・。

「・・・ねえ、ハザードさん」

「ん？　なんだ？」

「・・・僕、どうすればいいのかな？」

その問いに、ハザードは押し黙る。ノフィーネの声は本当に弱弱しく、不安や絶望も感じ取れる。

さあな・・・そうハザードは言いそうになるが、それは少し冷たすぎる言い方かと思いとどまる。今のノフィーネに、冷たい言葉は酷すぎる。

「我が輩にも分からんが、行ってみねば何も始まるまい。今は気を強く持て」

そうハザードは言うが、この状況で気を強く持てと言うのも残酷かもしれない。

「・・・うん、そうだね。まだ・・・まだ何かできるかもしれない」
創造神も古王も久郎もいないけれど。それでも自分には何かできる事があるのだと。そう思わなければこんな力を持っている意味も

無い。と、ノフィーネは自分を叱咤激励し、しっかり前を見据える。
と、その時。・・・こちらに向かって、飛んでくる二つの影をハザードは見た。

一つは小さな人影。もう一つは、大きな魔力を持った大きな魔弾！
「くっ！」

それをハザードは体を急降下させて避ける。その真上を通りすぎた魔弾はどこかのビルに激突。ビルを全壊させるに至った。

空中でノフィーネを抱えながら戦うのは不可能と感じたハザードは、そのまま降下しノフィーネを道路の真ん中に降ろす。

「今のは・・・もしかして」

「ああ、思ってる通りだ」

ハザードが空を睨む。その視線の先に居る人影は黒い翼をはためかせ、ノフィーネらの前に降り立った。

顔、髪型、体型、服装・・・どれをとっても、その姿は・・・

「久郎・・・君」

ノフィーネは戸惑いつつもその名を呼ぶ。だが、

「じゃねえヨ。くっくくク、残念だったナ」

それが裏切られることなんて、とつくに分かった。分かったつもりなのに、いざ面すると涙が流れそうになる。だが、今は泣き言を言っていられる場合ではない。

愉快そうに久郎の顔で笑う破壊神にハザードは限りなく冷たい声色で問う。

「・・・何の用だ、破壊神。見せびらかしにでも来たのか」

「まさか、そこまで趣味は悪くないサ。たダ、この体にお別れでも言わせてやろうと思ってナ」

ビュンっ！

その返事を聞き、ハザードはノフィーネを抱え数十メートルほど大きく後退。だが、破壊神から何かがかかけられる様子はない。

「おいおい、そこまで露骨に避けることはないだ口。まだ俺なんもしてないぜ？」

余裕の笑みたっぷりに笑う破壊神。その顔を見ているだけで、ハザードは不愉快だった。

「ノフィーネ、そこでじっとしている」

「え、ハザードさん？」

ドンッ！

戸惑うノフィーネの隣、ハザードが強く地面を蹴り、高速で破壊神に迫る。そしてその腕を振りかざす……！

ガキンッ！

そして、その腕を受け止めたのは双槍『パラギオン』。

「ちっ……」

「くっくく、記憶を見てみたが……お前はこの槍でやられたみたいだな。なう、またこの槍で葬ってやるヨ！」

ブンブンッ、振り回される槍に、ハザードはバックステップ。その後、跳躍。

「我が輩は……その槍に敗れたのではない。久郎に敗れたのだ！」
ハザードは爪先に魔力を集中させ、払う。そのまるで今のハザードの感情を表したような荒々しい切り口の斬撃は、鋭い衝撃波となって破壊神に向かう。

「ふんッ、ならば……『排外』」

そう破壊神が呟いた時、破壊神の手前でまるでチャックが開くようにパツクリと空間が裂け、その暗闇に衝撃波は吸い込まれていた。

「なっ……転移魔術……ではない。これはなんだ……」

戸惑うハザードに、破壊神は答える。

「『排外』。人体が異物を体外から排外するよう二、世界にもそういうシステムがあるのサ」

自信満々、まるで自分の事のように誇る破壊神。その様子にハザードはさらにいらつきつつも、一旦体勢を立て直す。

『排外』、それは人間界に危機をもたらす存在が侵入した時に人間界の外に出す、深層バイムに刻まれたプログラム。だが、正常な

ものを異物と誤認する事が多かったため停止されているプログラムであった。おそらく先ほど新兵器の起動が確認されなかったのも『排外』で新兵器が人間界外に出されたため。今頃、人間界の外で起動している事だろう。

・・・それがなぜ今、ここで起動しているのか。答えは至極簡単。「くつくく、便利だよこの力。『命断』・・・と言うんだった力？ この体は今後の人間界の破壊活動に使えるそうダ。・・・ふム、破壊神の本体としての名前をこの体につけるとしたラ・・・さしずメ、命断のクロウ、といったところカ？」

ヒヤハハハハハハ！ と破壊神は笑う。そして・・・手をすつとかざす。

「さあテ、お前は避けられるカナ？」

その破壊神が手をかざした先に出現したのは神槍『グングニル』。しかしレプリカ体であるその数は、十本。そしてそれらの槍は破壊神が手を振り下ろすのと同時に、全本がハザードに向かって飛ばされる。

ビュウンッ！ ビュビュウン！ ビュビュビュビュウン！

「くっ・・・」

ハザードはその翼を開いて急上昇。追ってくるグングニルを空中でかわしつつ、一本一本を斬撃で斬り落としていく。

ザシュ、ザシュ、ザシュッ！

そして最後の一本を斬り落としたハザードの後ろに、黒い翼をはためかせた破壊神が迫ってきたのを、頭をカッカさせていたハザードはギリギリまで気づかなかった。

その気配に気づき、ハザードが驚愕の表情で振り返ると、そこにはパラギオンを振りかぶった破壊神の姿が。この距離では避けることもままならず、

「ヒヤッハハハハ！ 『疾駆』！」
ガスッ！

パラギオンの蒼い刃はハザードの腹を貫通した。

「ごふっ!？・・・な、我が輩と・・・した事が・・・」

腹に槍を突き刺され、そのまま落下していくハザード。そのまま体勢を立て直すことなく、地面に激突し、土ぼこりを舞い上げた。

ドゴオン!

「ハザードさん!？」

その様子を見たノフィーネは、少し距離が離れてはいるもののハザードの無事を確認しようと駆け寄ろうとするが、その行く手を遮るように、ノフィーネの目の前に空中から急降下してきた破壊神が降り立った。

「ひゃっ!」

「くっくく、次ハ、オマエダ」

久郎の顔でニタリと笑い、手を振り上げる破壊神。

ノフィーネは咄嗟に腰に差した刀に手を伸ばすが・・・鞘から抜くことはおろか、柄を握る事もためらってしまふ。・・・ノフィーネには、久郎の顔をした存在が、例えば中身が破壊神だと分かっている、斬ることが・・・できなかった。

そして破壊神の手には二本目のパラギオンが握られていて、その蒼い刃先がノフィーネに向けて振り下ろされる。

「――っ!」

ノフィーネは咄嗟に目を閉じる。破壊神は心臓を狙ってきていた。だから、胸のあたりに、あの時、遠い昔に感じたような、ドス、って感覚が、来るんだろうと、思っていた。

けれど・・・、

「えっ・・・?」

ノフィーネが目を開けると、

「ぐぐぐグ・・・、なんでダ? 何で振り下ろせない?」

パラギオンを振りかぶった体勢で硬直する、破壊神の姿があった。それはまるで振り下ろそうとしているのに、違う意思によってそれを止められているように見えた。

「えっ・・・久郎・・・君?」

ズキン！

「うぐあッ！・・・クソッ！」

頭を片手で押さえた破壊神は地面を蹴り、ノフィーネから距離を取る。そしてその場で片手にあるものを呼び出し、顔にかぶせる。

それは仮面。真黒の中に目と口だけが白く書かれた仮面。

「仮面とは・・・くっくっく、まるで何かを抑え込むようじゃないか？」

突如聞こえてきたその声に破壊神は振り返る。土ぼこりの中、むくくと起き上がった人影が破壊神に向けて突っ込む。

「ちッ、グングニル！」

破壊神は手と近くの空間にグングニルを召喚し、向かってくる人影に向かって飛ばす。その槍は狂いなくハザードの心臓を狙うが、それらは全て爪の一薙ぎによって払われる。

「くっくっく・・・ノフィーネへの攻撃は止めるのに。我が輩には容赦ないのだな、久郎」

「チッ、そいつはもういねェ！　はずなのにヨォ！」
ドスッ！

叫び、破壊神は勢いのついたハザードの腕に腹をもろに殴られ、吹っ飛ぶ。

「ガフッ・・・そっちこそ、元々仲間だった体を容赦なく攻撃するナ・・・」

「フッ、我が輩と久郎は、仲間などではない」

ザササッ、と道路を踏みしめ何とか体勢を維持した破壊神に、既に腹の傷を完治させていたハザードは愚問とばかりに笑い。はつきりと言う。

「我が輩と久郎は宿敵だ！　くっくっくくく、はっはっはっは！」
「チッ、要するに強敵と書いて、友と呼ぶ関係なんじゃねえかヨ・・・」

腹を殴られた痛みからか、苦しそうに言う破壊神は、顔を苦痛で歪ませながらも、

バサッ！　つと、破壊神は背中に黒い翼を呼び出し、はばたかせて宙に飛んだ。そして、ハザードらに背を向ける。

「つと、逃げるのか？」

ハザードが以外そうに問う。・・・だが、それはどうも事実らしい。周囲を見れば、この辺りの吸血鬼がこの場に吸血鬼たちが集結しようところらに向かって飛んでくるのが見える

「・・・癪だがナ。マ、これ以上お前らにかまっている暇はないってことダ！」

そして破壊神は再び手をかざし、グングニルにエリクススそれぞれ五本ずつを召喚し、ハザードに向けて飛ばす。

ガガン！

ハザードは再び爪で薙ぐが、一撃では全て破壊できない。その隙に破壊神は、あの巨人がいる北に向けて飛ぶ行く。

「逃がすかつ・・・と言いたいが、そうも言ってられんか！」

ハザードは破壊神を追おうとしつつも空中を縦横無尽に動いて鎖と刃をかわしつつ、一本一本斬り落していく。そんなハザード、そしてノフィーネに向けて破壊神が叫ぶ。

「この体、もう少し慣らす必要性がありそうだが・・・、それでもすぐに俺の物にしてみせル！　それが嫌なら力づくで止めに来イ！　もっとモ、その前にあの巨人を止めるべきかもしれないがナ！

ヒヤハハハハハ！　ぐッ・・・」

破壊神は頭痛で頭を抱えつつも、ヒヤハハハ！　と、不愉快な笑い声を響かせ、その声は次第に聞こえなくなっていく。ハザードが全ての槍を斬り落としたところにはもう破壊神の姿は見えない。

ハザードはとりあえず地上まで下り、ノフィーネの前に降り立つ。すると、ノフィーネが細い声で、けれどかすかに希望を含ませながら言った。

「久郎君・・・もしかして、まだ生きてる？」

それは束の間に見た幻想かもしれない。もしかしたら、単なる気のせいなのかもしれない。けれど、そう信じたい。

「生きてる・・・生きてるんだよ、久郎君は！　まだ、助ける方法があるかもしれない！」

性にも合わず、大声を出すノフィーネ。それは自分で自分自身を元気づけているようにも見える。そのノフィーネの言葉にハザードも即座に同意する。

「ああ、その通りだとも。くつくつく・・・我が輩の宿敵が、あんな奴に負けるはずがない！」

ニヤリを口を歪ませ笑うハザード。そして翼をはばたかせ宙に舞い。集まってきた吸血鬼たちを圧倒する。

そして道路の真ん中に残ってハザードの戦いの様子を眺めているノフィーネは、目を閉じ、胸の前で手を組んで言う。

「久郎君・・・まだ生きてるんだね。・・・なら、今度は僕が助ける番だ！」

C

古王が暗黒空間に飲み込まれてから五分が経過。

・・・古王はまだ暗黒空間から出てこない。

C

「・・・つつ、やはり俺に戦闘は無理だな・・・」

とあるシェルターの中。その中で創造神は一人呟く。あの後、結局桜井らにバリアを破られそのまま捕獲。新兵器が射出される時間になったと言うのでシェルター内に一緒に入れられたわけだが、桜井らはまたあわただしくシェルター内から出て行き、シェルター内には縄で縛られた　創造神が一人だけ転がっていた。

「ま、あとはノフィーネたちに任せるか・・・と言うか、それしかできないのだから・・・」

はあ、とため息もらし、創造神はすることも無いので眠りにつ

く。起きた時、事態がいい形で終結している事を願って。

C

オオオオオオオオオオ！ グワンっ！

「うわぁ！・・・っつ、結界の補修急げ！」

北ゲート近く。新兵器の発射と同時に防王以外は全員シエルター内に戻ったが、何故か新兵器が不発に終わったと言う事で、再び巨人に相対していた。

「っち！・・・防御は最大の攻撃っ！」

振り上げられたこぶし、それを受け止めんとバリアを張って構える防王。既に満身創痍ではあったが、気力と使命・・・そして意地で動いていた。彼の名前は防王。自分がどれだけこの巨人に対して障壁を守る事が出来るのか。否、守りきれなくては、防王の名がすたると言うもの！

ガキーン！

そして一撃を受け止め、吹き飛び、また立ちあがる。その無限にまで続くような繰り返しにも、きつと終わりが来ると信じ、巨人の攻撃を防ぐ。

C

そして、事態はまるで栓を抜いた水槽の中の水のように、急速に収束されていく。

C

ザシュ、ズシャツ！

ハザードが最後の吸血鬼をその爪で切り裂く。所詮、人血の吸血鬼が純血の吸血鬼にかなうはずもない、とハザードは笑うが、そう

している時間も勿体無い。

「・・・行くぞ」

「うん、お願いします」

ハザードはノフィーネの返答を聞き、翼を開く。向かう先は破壊神が向かって行った北ゲート近く。

ノフィーネを抱えたハザードは、一気に上空にへと跳躍する。・・・だが、

ダダダダン！

「っ！」

ハザードは急に右にへと飛んでいる体をずらし、その横を銃弾がかすめる。

その銃弾が放たれた方を見れば、そこには創造神が足止めしていた桜井ら六名ほどがいつの間にか追いついてきていたようで、こちらに向けて銃を構えていた。

「・・・新兵器が撃たれるのに外に出ていたとは・・・やっぱり、貴様らは信者のようだな！」

銃を構えた仲本が吠えるように言う。ノフィーネはそれを咄嗟に否定しそうになるが、どうせ頭を熱くして、そうだと決めつけている人間には言葉は通じない。何よりそんな時間も無い。

「ハザードさん。行けるよね」

「くっくく・・・人間ごときに我が輩が遅れるものか」

巧みに銃弾を避け、ハザードは北に向いて猛進しようと踵を返した・・・その時。

ビーン。

そんな奇妙な音が響き、ハザードの目の前に円状の光る輪が出現した。

それはまるで『排外』の時に開いたゲートのような外見。・・・だが違う、これは、ハザードがあの時口にした魔術、『転移魔術』に

よって開かれたゲート。空間と空間とを直接つなぎ、穴をくぐる事でワープ的移動が可能となる魔術。

「・・・」

そして、ゲートの向こうから突然飛び出してきた姿は、桜井の隣に居た少年、イーゼス。その手には大剣が握られていて、無言でハザードに向けて振り下ろされる。

「くっ!？」

踵を返した体勢では、かわすことはかなわない。ノフィーネを抱えたこの腕では、受け止める事もできない。

そうしてハザードは、ノフィーネをかばって自らの右腕にもろに斬撃をくらい、地上に落とされた。

バシュッ! ドゴォン!

「ゴフッ! ・・・つく、まさか、あんな小さいガキが・・・転移魔術を使うなど・・・」

そしてまたノフィーネをかばい、自らの背中から落ちたハザードは、口から血を吐いた。いくらハザードと言えど、もろに攻撃をくらってはあやうい・・・。

「ハザードさん!」

「くっくくく、我が輩の事は・・・気にするな。それよりも、我が輩はこいつらを止めなければならんだ・・・」

叫ぶノフィーネを手で制し、よろよろと立ちあがるハザード。本当はまた吸血したい程のダメージを負っているのかもしれないが、そんな事をしている暇などない。

「ノフィーネ・・・すまないが、走って行ってくれ・・・くっくく、さすがに今の状況からでは・・・な」

「・・・分かりました。御無事で!」

ハザードの言葉にノフィーネは頷き、北に向かって道路を走る。

それを見た桜井たちは、ノフィーネに向け銃を構えトリガーを引く。

ダダダダン! カカカカカン!

だが、それらの銃弾全ては、ハザードの爪によって弾かれる。再

び『転移魔術』を使用しようとするイーゼスには、急接近し攻撃を加え、集中を乱す。

「くっくくく・・・我が輩は純血の吸血鬼。そこらの吸血鬼とはわけが違うのだよ。・・・それより、我が輩に吸血されれば貴様らも吸血鬼となるのだぞ？　つまり同士討ちになるわけだが、それでもいいのか？」

ハザードは言うが、そんなことは桜井たちも承知の上。再び銃を構え、銃弾を放つ。

「あなたたちは・・・いったい何が目的で、行動しているんです！」
桜井がふと、銃声が響く中で問う。その銃声に掻き消えたかと思われたその問いだが、ハザードはしっかりと聞いていて、そして返答を呟く。

「破壊神を倒すために決まっているだろう。・・・くっくくく、目的は同じだと言うのに、人間とはつくづく愚かな生き物だ・・・」

そのハザードの言葉は、銃声にかき消されていた。

C

そしてノフィーネは走る。破壊神が向かった先までは遠いけれど、それでも一心不乱に走る。

もう失うのは嫌だから。そして、その人は、一番失いたくない。そう思える人だったから。

ノフィーネはまるで、光の中へ去りゆく誰かの背中を追うよう走っていた。

「はぁ・・・はぁ・・・まだっ、まだ向こう！」

不老不死とはいえ、息も上がるし一時的に疲労もたまる。それでも、どれだけ足が悲鳴を上げようと、ノフィーネは走る事を止めない。

途中吸血鬼に襲われても、ためらいなくその腰に差した刀を抜き、突き払う。・・・元人間だとか、罪も無い人だとか、そんなことは

もうどうでもいい。今はただ時間がないから、誰であろうと邪魔をする奴は、叩っ斬る！

「はあああああ！」

スパン！ バシユッ！

ふとノフィーの脳裏に、遠い昔、戦場に居たころの記憶が蘇る。
・あの時とは使う武器も対する相手も違うけれど、あの頃感覚を思い出しながら吸血鬼を斬りはらって行く。

そしてノフィーネの気持ちに呼応するかのように、刀もまた刃を光らせ敵を切り裂く。どんなに荒く切ろうと欠ける事も無く、折れることも無い。

「あ・・・そういえば、この刀が『幻刀』だとかどうか、言ってたっけ」

最後の吸血鬼を斬り倒したノフィーネは自分の持つ刀を見てふと呟く。そう言えば変わった形状で、刃の上半分が両刃、下半分が片刃という奇妙な形をしていた。ゆえにノフィーネも基本突いて使っていたのだが・・・まあ、とりあえずはそんなことどうでもよくて。ノフィーネは返り血をササッと布で拭いて鞘にしまい、また走り出す。

こんな調子ではたして追いつくのかも分からない。けれど、追いつけると信じて走り続けるしかない。

吸血鬼の集団とぶつかれば斬り払い、そして走るを繰り返すノフィーネ。そして、もしこの世に違う意味での神様がいるなら、きっと彼女の頑張りを見ていてくれたに違いない。

「あっ・・・」

そんな彼女の目に映ってきたのは、おそらく北ゲートまで向かっていたのだらうと思っていた・・・久郎の姿をした破壊神だった。道の真ん中で顔を押さえて、うぐぐ、と呻いている。

「久郎君！」

「なッ・・・がッがァ！」

その破壊神のあり様は、まるで先の久郎のよう。その痛みは、ノ

フィーネが近づくほどに強くなっていく。

「クッ・・・さすがは『命断』を家に宿していた者カ・・・だが、ここで体を奪われるわけにはいかなイ・・・！」

バサッ！ 破壊神は羽根を広げ、またどこかへ飛んで行こうとする。・・・だが、ここで逃がすわけにはいかない。

「待ってよ！ 久郎君！」

ズキン！

「うがッ！」

再び頭を押さえる破壊神。翼をはばたかせるが、頭痛がひどくてうまく飛べていない。なら、今がチャンス。

・・・しかし、ノフィーネはふと思った。

（今がチャンスって・・・一体何をすればいいんだろ？ こうやって呼びかけ続けていれば・・・そうすれば、いいのかな？）

そしてその迷いが、ノフィーネの動きを少し鈍らせた。

キシヤア！

「うわっ！」

慌てて刀で防ぐノフィーネ。空中から一匹の吸血鬼が、急降下して襲ってきたのだ。咄嗟の防御で体勢を崩し、突き飛ばされるノフィーネ。・・・その隙を破壊神は逃さなかった。

「ッ！ はッ！」

バサッ！

頭痛が少し治まった隙に空中へ急上昇。そのまま今度は南の方へと向かって行く。

「あっ・・・待って！」

スパッ！

ノフィーネは、目の前の吸血鬼を少し恨みつつ、他の吸血鬼のときより力を加えて斬る。そして刀を鞘にしまうのも億劫。刀を手にしたまま、駆けるノフィーネ。

だが、もし違う意味での神様ってのが存在したのならば。どうして彼女にこんな酷い仕打ちをするのだろうか。

「・・・・・・・・」

ノフィーネの行く手、道路の真ん中に、一つの小さな人影が立ちふさがっていた。

その影は無言で大剣を構え、その刃をこちらに向ける。

「イーゼス君・・・・だっけ・・・・そこ、どいてくれないかな？」

「・・・・通さない」

イーゼスと言う少年から初めて聞いた声は無機質で、まるで機械か人形が声を出しているかのよう。だけど、その感情のこもっていない声になぜ邪魔されなければいけないのかと、ノフィーネは声を尖らせる。

「通して！」

「・・・・通さない」

「なんで！？」

「・・・・命令・・・・だから」

（・・・・そんな、理由で・・・・っ！）

人に言われたから、だからやる・・・・そんな理由で立ちふさが
るなんて・・・・。普段、温厚なノフィーネだが頭に血が上って、気
がつけばイーゼスに向かって斬りかかっていた。

「ていやっ！」

「・・・・・・」

ガキン！

イーゼスは手にした大剣で受け止めるが、所詮は小柄な体格。ノ
フィーネは刀に無理がかかることを承知で無理矢理切り払うと、イ
ーゼスの軽い体は後退を余儀なくされる。

地に右手をついて踏ん張ったイーゼスだったが、そこにノフィー
ネの追撃が迫る。たとえ怒っていようと冷静に、刀の切っ先はイー
ゼスが大剣を持つ左肩を狙い澄ます。

「僕は急いでいるんだ、だからっ！」

手加減はしない。だが肩なら大剣を振れなくなれども死にはしな
い。運が悪ければ吸血鬼に襲われて悲劇的な結末を迎える可能性も

あるが、そんなことは今のノフィーネには関係ない！

ヒュオ！

そしてイーゼスの左肩にへとまっすぐ伸びる刃筋。あんな小柄の体にはそれを避ける術はない・・・はずだった。ノフィーネの中では。だが・・・イーゼスはポツリと、刀が近づいてきていると言うのにこれまた興味のなさそうな無機質な声で、言う。

「・・・戦闘の意志有り・・・気絶させる」

ヒュッ。

「えっ・・・？」

そして刀は何もない空を突く。咄嗟の事に大量の疑問が脳を埋め尽くす。・・・だが、今起こった現象はさっきと同じ。ただ、イーゼスが転移魔術によって自らの立つ地面にゲートを開き、その穴に自然落下する事によって移動しただけ。

(・・・っ！)

ノフィーネは殺気というには味気ない気配を感じ、前に突きだされた刀でそのまま後ろを斬りはらう。

ガキンっ！

そしてぶつかり合う金属の音。ゲートで移動してきたイーゼスが大剣を振り下ろしている姿がそこにあった。その表情はゲートを作るという高難度の魔術をやった後だと言うのに、息を切らしているどころか表情が変化している様子も見せない。

(もしや、あらかじめ仕掛けていたってこと？・・・いや、そうじゃなければ余程の天才だよ、この子はっ！)

ギギギッ・・・。

ノフィーネは刀で大剣を弾こうとする格好だが、腕に大剣の重さによる強い衝撃が襲いかかり、腕がしびれたため弾く事を断念して後ろに下がる。そして、イーゼスは振り下ろした勢いそのままに地面に着地し、すぐに大剣で横に薙ぐ。

「わっ・・・！」

ノフィーネはそれを受け止めずに退く。大剣をこれ以上受け止め

るのは不利と判断しての行動だった。大剣はその重さゆえに威力は高いが、斬るスピードはどうしても遅くなってしまう。・・・だから、受け止めなくても振り下ろされた後の隙を狙えばいいはず。・・・だが、今度こそ、肩を狙ったノフィーネの前に繰り出されたのはブンッ！ ガキン！

まるで大剣の重さを感じてないかのように即座に斬り上げられた大剣だった。攻撃に転じようとしていたノフィーネは慌てて刀を構え、それを受けてしまう。

ブン、ガキン！ ブン、ガキン！ ブン、ガキン！

斬り下ろし、突きだし、斬り上げる。まるで金属バットを振っているかのように軽々と繰り出される斬撃は、小柄な体にあわぬラッシュとなって、ノフィーネを襲う。

「え？ うそ・・・っ！」

このラッシュ、一度受け止めてしまっってはラッシュから逃れる術などない。大剣の一撃一撃をノフィーネは刀で受け止めるしかなく。そして、

キンッ！ ザスッ！

ノフィーネの手の力が緩んだすきに刀はノフィーネの手より弾き飛ばされ、数メートル離れた地面に突き刺さった。

「あっ・・・」

急に手から消えた感覚。振りかぶられる大剣。刹那の延長でもないので、眼の前の物事がゆっくりと流れて行って、ノフィーネはそれを直視する。

（あ・・・僕はもう・・・ここまでなんだ。・・・結局、僕は・・・なんにもできずに・・・終わるんだ）

急に心が冷めていく感覚がノフィーネの体をスツと走る。だが、まだ諦めちゃいけない、諦めたくない事がある。・・・最後の悪あがきかもしれない、だけれど・・・まだそう遠くへ入っていないはず。

そして、一縷の望みをかけてノフィーネは叫んだ。

「久郎君・・・帰ってきてよ、久郎君・・・！ 久郎君！」

C

「うがッ！ 痛ってエ！」

少し離れた場所の上空。確かにノフィーネの声は届いていた。空中で頭を抱え動きを止める破壊神。

「クッ・・・てめえハ、俺から体を奪い返そうってのか・・・いいぜ！ 勝負してやるヨ！ はああああア！」

そうやって、数分の間呻き続ける破壊神・・・だったが。

————ナンテナ————

「くっくくくくク・・・っト、あア・・・あの女もう伸びてるの力・・・さっきの様子に希望を持たせといた後二、こうやって絶望させよう思ってたのになア・・・マ、若干リアルにヤバかったと言えバヤバかったけどナ」

とは言え、ノフィーネのいた場所からここまででは声は届けども姿はよく見えなかっただろうが。そう言って破壊神は空中で一回転。頭痛も治まり『命断』の使用にも慣れてきたようだった。

やはり頭痛の正体はまだ残っていた久郎の意志のかけらのせいなのだろう。破壊神にとっては信じられない話だが、久郎はウイルスに侵されても意識だけは保ち続けていたと言う事だ。

「怖い話だねエ・・・つつてモ、もう俺を止められるヤツはこれはいなくなっただけだ。くっくくくク、ひゃーっはっはっはっはっハ！ そもそもダ！ 帰ってきてって言われただけデ、ほいほい帰ってくるかよ馬鹿ガ！ あいつは二度と帰ってなんてこないんだヨ！ ヒヤハハハハアハハハハ！」

大声で笑い、そしてスーッとその場に降り立つ破壊神。さて、これから何をするか・・・そう思って顎に手を当てた時、

ビーン。と音が響き、高笑いする破壊神の隣にゲートが現れ、そこからイーゼスが現れる。・・・ノフィーネの次は破壊神がターゲットと言う事だろう。

「おお、元気がいいナ。その歳でその強さとは、生きててりや化けたのかもしれないのになア！」

イーゼスは言葉を解さない人形のようにただ無表情で破壊神に立ち向かう。

だが・・・大剣はエリクソスによって片手で受け止められている。さらに破壊神の周りにはグングニルがナイフが矢がそれぞれ十数本召喚され、その切っ先は全てイーゼスに向けられている。

「あア、お前は転移魔術を使えるかう、これかわせるかとも思ってたんだがナ。・・・お前も結局は幼イ。まだゲートを短時間に連続して出すことはできないんだロ？」

その時初めて、イーゼスに表情の変化が生まれた。だが、その口から何か言葉が発せられることは・・・なかった。

「ばいばイ、若すぎる戦士。・・・マ、でもお前には感謝してるぜ。
なんせお前がいなかったう、俺は久郎のやつに体を取り返されたか
もしれなかつたんだからナ！　・・・つつてモ、可能性は0．00
000000000000000000001％くらいだけどナ！」

609

ピア色の鎧のような服。そしてグレーの外套。・・・破壊神によって暗黒空間に引きずり込まれた古王だった。

あの時、破壊神は最低五分は閉じ込められると言っていたが、古王はその六倍。軽く30分は閉じ込められていた。

「って・・・あり？　ここは・・・」

そして、古王は目の前に広がる空間が、三十分前に見た光景と比べて、異質な事に気がつく。

眼の前に広がる光景・・・それは、あらゆる建物が破壊しつくされ、砂嵐が吹き荒れる砂漠と化している、とても人間界のようには思えない光景。

古王は二度三度目をパチクリさせた後。まだ暗黒空間に浸っている足を引っこ抜き、適当ながれき一つを手を取った。

「うーん？　これは・・・」

しかし何も察せられなかったらしく、古王は首を傾げた後そのがれきを手放し、代わりに両手で天を仰いだ。そうすると、しばらくして、古王の真上には、この辺りにある瓦礫や欠片が球状の砂嵐となって書き集められていた。そして一言呟く。

「『遺物読取』^{スキャン}」

それはここにある全ての物を解析し、情報を集める限りに集め、そこから過去に起こった事を情報として得る力。記録者として、見逃した事実を知るための力。

しばらく目を閉じてそうしていた古王だったが、五分ぐらいが経った後、パツと目を開き、頭上の瓦礫や欠片の集合体をそこらに放った。・・・どうやら解析が終了したらしい。

「なるほどな・・・そんなことが」

それは今から十分ほど前に起こったことでしかないのだが。

久郎の体を得た破壊神は。その体に宿る力『命断』を使用し、この人間界の深層バイムに刻まれた最終プログラムを起動させた。それはこの世界を終わらせるためのプログラム・・・『破壊』。人間界にどうしようもないほどの強敵が現れた時に、その強敵ごと人間

界を破滅させるプログラム。

本来、創造神しか使用権限のないそのプログラムが使用された結果、この有様。と言っても、プログラム通りの変化が起こったわけではないらしい。

その理由はおそらく、人間界が宇宙の存在でもあり、宇宙の存在でもあったから。『破壊』のプログラムによって人間界の各地で破壊は起こったが、なにも人類が滅亡したわけではないらしい。

世界各地は砂漠化したが、あるところには草原が残るところもあり、あるところには街そのものが残った場所もあるとか。

だが・・・とりあえずはつきりしているのは、この障壁内部だった場所に生存者を期待するのは不可能だろうという事。

「だが・・・いや待てよ」

何かを思い立った古王は、瓦礫の中を歩いて行く。ジャリジャリ、と砂を踏む音が、人間界の悲惨な状況を物語っている。

「だけれど、まあ。バウムが焼き切れたわけじゃねえからな。王界よりはまだ再興しやすいさ・・・多分」

そんな事を苦笑しつつ、古王はさらに進み、ある一点にて止まる。そこはとあるシェルターがあった場所。そのがれきの中を、古王

は手に召喚した大剣で掘る。

グラヴィティ・オブ・レジェンド

『去りし歴史の重み』

穴掘りに使ってる時点で重みもへったくれも無いのだが。とりあえず穴を掘ることに成功。古王のその掘った穴の中に潜り込み。周りを見渡すと・・・何かを見つけ、それを引っ張る。

古王が引っ張っているそれは、どうやら人の腕のようだった。だがすぐには抜けないらしく、古王は足で瓦礫を踏みつつ力を入れておもいつきり引く。

そして、そいつが姿を現した。

ドサッ！

「・・・ん？ ああ、古王か」

地上に引っ張り上げられ、ボリボリと首筋をかいて言うその人物

は、桜井を止めた後にシエルターに放り込まれた創造神。人間に負けるほど弱かったという事実がまた露見したわけだが、そんなことよりも。

「やっぱり生きてたか・・・ま、自分が作ったプログラムに殺されるなんてへまはしないと思っていたがな」

古王は笑う。だが、辺りの様子に創造神は笑える状況になかった。

「そうか・・・『破壊』が使われたのか」

「そうみたいだな」

「みんな、死んだのか」

「そうみたいだな」

「久郎も・・・死んだのか」

「そう・・・みたいだな」

破壊神に体に乗っ取られた久郎の体もまた、『破壊』に破壊されたのが確認されている。破壊神もそのことは予想外だったんだろうが、今頃どこかでこの様子を見て、笑っているような気もする。基本あいつは、破壊する事が好きなのだから。

「・・・ノフィーネは、知っているか？」

「さあ・・・多分、死ねてはいないと思うが」

古王はいくつか声のトーンを落として言う。・・・死んではいない、ではなく。死ねてはいない。

「・・・俺はどうすればいいと思う？」

「もう、そつとしといてやれよ。もう戻すのは・・・不可能だろうぜ」

古王はすつと煙草のような筒状の物を懐からだし、口にくわえてライターで火をつける。

ボツ。

「・・・煙草、止めたんじゃないのか？」

「それはノフィーネの手前だけでだ。至近距離で煙を見ると、いけない事を思い出すかと思ってな。・・・ま、そんなのは杞憂だったわけだが、それでも流れで吸えなかったんだよな」

そもそも、煙草を吸ったところで古王には害も無い。まあ、人間のように快楽などを得ることもできないのだが、古王は気分的に吸っているだけ。ただそれだけ。

「・・・うまいか？」

「吸うか？」

「・・・いらん」

二人とも瓦礫に腰掛け、空を見る。だが、空は砂嵐やスモッグで見る事がかなわない。

しばらく二人して無言だったが、ふと古王から話かける。

「結局、破壊神は倒せなかったわけだ」

「・・・みたいだな」

「あいつらにも、悪い事をしたわけだ」

「・・・そうだな」

創造神はうつむき、再び沈黙が漂う。

ふーっ、と古王は煙を吐き、その吐いた煙で偶然輪が出来たのを見て、あっ、と声を漏らす。

そして沈黙は数時間と続く。が、一向に二人とも動く気配はない。動くつもりも無い。

古王は数箱のケースを空にし最後の煙草を吸い終わったころ、創造神がふと古王に向けて言った。

「・・・そうだ、こういうのはどうだろう」

古王は黙ってそれを訊く。

「過去を巻き戻して、また同じ日々をやり直すと言うのは。多分、理論上は可能はずだ。だが、それだけでは同じ道をたどるから、少し変化が出るように細工を・・・」

と創造神はそこに希望を見出したようで、明るく話すが、そこに古王が告げる。

「あー、それもうお前がやった」

「・・・はっ？ えっ、今なんて？」

創造神はすぐにはその言葉の意味を理解できなかった。だから古

王は出来かけの超太古剣・・・超太古剣の破片とでも言うべきものを創造神に手渡した。そして、その中にはこう記されていた。

『創造神。時を巻き戻すことを発案。実行』

無論、こんな記憶は創造神にはない。だが、古王は確かに記録している。・・・ということは、

「古王、お前・・・」

「そうだ・・・時をやり直した後でも、俺はその細工とやらで記憶を持ち越していた。だから色々予想して動けたわけだったんだが」
そう言えば、古王はたびたび、そんなことを口にもらしていた気がする。

「・・・だが、この事態は止められなかったと」

「ああ。だけど今回の方が前回よかったです。前回は破壊神にこの世界は完全に滅ばされてたからな。今回は、人間界的に言えばイーブンだったってところか」

そして、その事実を聞いた創造神は再び顔に闇を宿し。また瓦礫に座る。そんな創造神に古王は、背を向けたまま言う。

「・・・もうこれ以上、ここに固執する意味はないんじゃないか？
確かに、人間界は今まで創ってきた世界とは異質の存在。そこに期待するのも分かるが、・・・そもそも時を戻すなんて事でうまくいくわけなかったんだ。過去を振りかえっても、しょうがなかったんだよ」

諭すような古王の言葉。

「・・・だがお前だって、この世界に未練はあるだろう？」
試すような創造神の言葉。

「・・・つく、訊くなよ、それを。・・・あるに、決まってるだろ」
目尻に光るもの一つを宿した古王。

「だけど、世界に対して非情になれ、それが記録者だ。そんな生き方を示したのはお前だろう創造神。それを今さら、俺を生物らし

く扱いやがって・・・」

低く唸るように訴える古王。

「・・・その生き方はもうやめてもいい。もうお前も、俺に付き合わなくてもいいぞ、古王」

安らかに言う創造神。

「もう俺は・・・疲れた。『称号を与える者』に抗うのも。世界を創っていくのにも・・・」

心底疲れ切った創造神の声。

「だから・・・最後に一つ、やっておかなくちゃならない事がある」
そして・・・その唐突に希望に満ち溢れた声に変わった創造神の声色に、古王は振り返る。

「やっておかなくちゃならない・・・こと？」

一体何をやると言うのか。弔いか、再興か。そんなものをやると言うのなら、気が狂ったとは思えない。・・・だが、創造神の目は爛々と輝いている。

そして創造神はとんでも発言を言い放つ、

「簡単だ・・・過去が変えられないなら、未来を創ればいい！」

ぽかーーーーん。

古王は開いた口がふさがらなかった。え、こいつ今なんて言った？ 未来を創る？ なにその学校のパンフにでも書かれていそうなうたい文句。・・・しかし、創造神の目つきはいたって真剣そのものだ。

「・・・壊れた？」

「人を指差して何言いやがる。俺はいたって健常だとも」

「いやー、壊れてるやつほどそう言うじゃん？」

「・・・お前、けっこう失礼だよな」

創造神は呆れるが、古王が失礼なのは今に始まった事でもない。そもそも、創造神って名前なのにその存在に敬意を表すやつはノブ

イーネぐらいなもので、失礼と言えば久郎とかも失礼なのだが。・
・ま、今はそんなことどうでもいい。

創造神はそこら辺にむき出しになってるビルの残骸の鉄筋を一本折ると、それで地面に何か書き始めた。まず左から右へと一本の太い線を描き、

「これが、俺たちが今の今まで歩んできた過去だ・・・いや正確には時を戻す前に歩んできた過去と言うべきかもしれん」

と言って棒を取って返してジグザグと、さっき描いた線に重ならないように線を右に戻し、また左に描く。

「で、これが巻き戻したあとの過去。お前の記憶だけは残っていたんだから、そっくりそのまんま巻き戻ってたわけじゃないからな」
そこで古王が口をはさむ。

「んー、なんかこれ見た事あるな・・・。あ、これって時王が発表していた時間論か？　つまりなんだ。その線は時の流れを表しているのか？」

時間論と言うのは。王の一人、時王が時の流れに研究する上でたどり着いた一つの仮説。それは今までの時空論を覆すような画期的な説で、発表された時には王たちの間で激震が走ったものだが、それはさておき。

「ああ、そう言う事になるな。でもって、今がこの辺りか」

創造神は線をさっきの線の曲がった所より少し右側まで線を引っ張り、棒を地面から離す。

しかし、古王には創造神の意図がつかめてこない。大体、さっきの発言の答えがまだ出されていないわけで。

「・・・で、これがさっきの発言と何の関係が？」

「あー、つまりだ。俺がしたいのは・・・こう言う事だ」

と言って、創造神はまた棒を地面に付けて線を描く。・・・ただし、さっき描いた線とつなげて書いているわけではなく。さっきの線よりも左に、他の線とつながっていない新たな線を描いた。

・・・これはつまり？

「俺がしたい事、それは・・・今この時間と連続していない、独立した未来を創造することだ！」

・・・

「独立した未来？　・・・って、わけが分からんのだが、それで説明した気か？」

「ん、分らないのか。お前は頭が固いな。過去ばっか追い求めてるからそんなに頭が固くなるんだ」

「・・・そーゆー生き方を示したのは、どこのどちらさんでしたっけねー」

古王はさっきとは違う気分で同じ事を言う。

「はいはい、悪かった。・・・で、簡単に説明すると、こう言う事をお俺は狙っている」

と言うと、創造神は現在地点とした線の先から線をなぞるように左に棒を動かし、あるてんでぴたっと止める。・・・何をするのかと古王が見ていたら。創造神はその止めた点から、さっき描いた独立した線に向けて一直線に線を引いた。

「つまり破壊神が『破壊』する前の時点から独立した未来にへとつながる。そうすれば、世界はそこに向かって進むしか無くなるだろ？」

と、創造神は笑顔で説明するが。

「え、ちょ・・・ちょっと待ってくれよ。うーん・・・そもそも未来を創るなんてこと事態、突拍子もない事だけど・・・なんつーか、これってつまり時を戻すってことか？　それだったら今までやってる事となんら変わらない気がするが・・・」

「いや、違うぞ古王。今回は時を一切戻さない。ただ俺はこの時点で未来を創って、そこに世界がつながるようにするだけだ」

と創造神は言うが。

「いや、そもそもそれともう無理なんじゃね？　だって・・・」
と言って古王もまた棒を手取る。そして古王が描いた線は、現在地点を表す線から右にへと伸びる線。

「何と言うか、もうこの地点にいるわけで、まだ訪れてはいないが、

今の時点からつながる未来もあるだろう？ 今回、時を戻しても、戻す前と同じような結果になったし、そう考えると俺はこっちの線の未来に世界が引きつけられているように思えるんだが。そっちの未来はどうなるんだ？」

「それは・・・世界がどちらの未来を選ぶか、ってことじゃないか？」

・・・なんつーいいかげんな。

「ま、確かに選ばなければそこまで。そもそも未来を創ることは時間論的に問題はないが、結局未来は過去とつながらなくては存在できない・・・とも言われていたしな」

選択肢って言うのは数多く存在する、そしてその選択肢を選んでいるときには、確かにその選択肢の中の全ての未来は存在している。しかし、その選択肢を選ぶ事によって、選ばれなかった未来は必然的に消える。・・・時間論によるとそういうことらしい。

「だが、とりあえず未来があれば、できることが一つだけ存在する」できること？・・・古王はいろいろ考えてみるが、結局分からず。そして創造神から聞いたことは。

「それは、未来からのタイムトラベラーを用意することだ！」

ぽかーーーーーん。

古王は開いた口がふさがらず、手で何とか口を動かして聞く。

「ひょれって、ひょーゆーこひょひゃ？」

「えと・・・それってどういうことだ？ 簡単な事だろう。つまりタイムスリップをして過去を変えてしまえばいい。・・・いや、過去を正しく導くって言った方がいいか？ ま、なんにせよそういう事だ」

と、創造神は簡単に行つてのけるが。

「いやー、ウェイトウェイト。ちよっと待った。そもそもタイムトリップなんかできる技術がこの世界にあったか？」

「ない」

「だろ？　ならそもそもそれは机上の空論じゃねえか」

「いや、だから未来でタイムトリップの技術を完成させればいい。お前が」

「俺が！？　しかも未来でタイムトリップの技術・・・あれ？　でもなんか・・・ってあー！　頭痛てー！　なんにがなんだか、よくわからんっ！」

バタツ、と両手を上げて後ろに倒れる古王。いわゆる処理落ちと言うやつか。

「まあ、例のごとくお前のここでの記憶だけは残しておけるようにする。それに時王が技術開発をしてるって噂も訊いたし、時の中の過去を求めるお前と時王が組めば、案外開発できんじゃないか？」

と言って、親指をあげて励ます形の創造神。うー・・・、と古王はしばらく唸っていたが、やがて起き上がり、疲れたような声で言う。

「・・・まあ、タイムトリップの問題も何とかするとしてだよ。そんな未来がはたしてチャンと存続していられるのかとか言う問題も抜きにしてだよ。・・・その未来、どうやって創るの？」

「ああ・・・それなら簡単だろう。時だって戻せたのだから、同じ四次元の感覚で行けばいい。・・・と言っても、過去とつながりのない不安定な場所に創るわけだから、安定させるのに・・・俺の全魔力と全身を変化させた魔力が居るかなあ・・・」

と、古王は腕をくねくねと動かしながら呟くが・・・、今なんかまたとんでも発言が出たような・・・。

「って、全魔力と全身だとおい！？　それってお前死ぬってことじゃねえか！」

「ああ、んなことはどうでもいいんだよ」

「いや、どうでもよくねえよ！　ちょ、おまつ、跡形も無く消えるんだぞ？　存在そのものが！　・・・ん、いやでもここで消えてもこの時点の未来もなくなるわけだから別にいいのか？　なーんだ・

・」

と、古王は胸をなでおろすが。

「いんや、例え未来を変えれても俺はいなくなるよ」

・・・・・・？

「え、なんで・・・どうしてだっ!？」

「だって、ほら。このままだとこの時点が存在しなくなって、タイムパラドックスが起きてしまうだろう？ この時点が無くなるのなら、誰が未来を創るのか」

・・・確かに、タイムパラドックスについてはよく知らないが、おかしいことになるのは間違いないだろう。・・・いや、既におかしな話ではあったのだが、どうも守らなくてはいけないところはきっちり守らなくてはいけないらしい。

「え、じゃあ・・・」

「ああ、俺と言う存在は、この独立した未来とつながる地点にて消える。時が逆行してその時点の俺が未来を創った事にするから、タイムパラドックスが起きないように細工もするしな」

・・・もーわけわからない。わけわからないが。・・・創造神が、どうあがいてもきえてしまうってことだけは、分かった。

「え・・・でもお前。それじゃあ、これからは誰が世界を創っているんだよ？ お前の代わりなんてどこにも」

「いるさ。きつと。いなくても・・・そのうち現れる。・・・それに俺はもう疲れた。だからいいんだ」

落ちついた声で、安らかに言う創造神。その表情を見れば、少し満ち足りたような表情だ。

「俺の最後の作品・・・それは『未来』！俺は創造神だ！だから、最後に俺は創る！何もない時の空間から、『未来』を！」

そして、古王に有無を言わせないまま、創造神は未来の創造を始めた。創造神に何か話しかけようとした古王だったが、手を少し伸ばしたところで声が止まる。・・・何だかんだ言って、創造神も覚悟を創っていたんだろう、今の今まで。

これ以上話していたら、その覚悟が鈍ってしまいそうで・・・だからもう、最後に言葉を言い残す事も無く、創造しているんだろう・・・これからどうなるのか、古王には分からない。この未来が続いて行くのか。それともこの未来は選ばれずに、やがて消えていくのか・・・分からないが、古王には、最後まで創造神を見届ける責任があった・・・古王は、記録者なのだから。

ゴッオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！
創造神の周りで何かが渦巻き、形成されていく。四次元なんて空間は古王には見えず、創造神にしか分からない感覚だろうが、それでも何かが創り上げられていくことは感じ取る事が出来る。

そんな中で、創造神はポツリ呟く。

「・・・つく、どうやら・・・破壊神が去った後から七年後まで形成できそうだ・・・おそらく、一旦時はそちらへ向いて動くだろう・・・」

だが、と創造神は付け足す。

「もし・・・七年を過ぎてもタイムトリップが完成しなければ、そこでその未来は破壊され、もう一方の未来が選ばれるだろう・・・」

「・・・つまり、七年後の正月がタイムリミットなのか？」

「そういうことになる・・・だから、頼んだぞ」

「あア、分かった。つつても、その俺は俺であって俺じゃない気がするがな」

あえて、笑顔で言う古王。創造神はその顔を見て、フツと笑みをこぼし。そして、古王に背中を向け最後に言い残す。

「・・・まずは、ノフィーネと久郎の事、頼むな・・・俺の事は、全てが終わった後に伝えてやってくれ」

「ああ」

「・・・そしてタイムトラベルについても、絶対に技術を完成させてくれ」

「ああ」

「そして、最後に頼みだ・・・俺について、しっかり記録してくれ。」

・・・記憶としとえ、ずっと残しておいてくれ」

「・・・ああ、分かってる。・・・分かってるさ・・・」

「フッ・・・ありがとう。そして、ありがとな今まで付き添ってくれて」

それは創造神が古王に言う本心からの言葉。それをここで言うなんて反則だと古王も思ったわけだが。・・・ふと古王は思った事を口にしてみる。

「・・・なあ」

「ん？」

「・・・全てが終わったら、あとを追っていいか？」

「止めとけ。和王が悲しむ」

「・・・そうか、誰かが悲しむのは、いやだな・・・」

ま、半分本気で、半分冗談だった。

そして、少しの時間が経ち。・・・創造神はかすれかすれの声で、それでもはつきりと言いつ残す。

「・・・じゃ、そろそろいく。最後に言いたい事はあるか？」

言いつつ古王の体は、次第に光に分解され、粉となって宙に舞い上がっていく。・・・普通、こう言う時に最後に居残す言葉は創造神が言うものだろうに・・・ま、いいか。

古王もまた創造神に背を向けて、最後に言った。

「んじゃ、一言だけ。・・・俺を創ってくれて・・・ありがとな」

その時、創造神の顔が、驚きとともにほころんだ気がした。

だけど創造神はその顔を見せることなく、光となって消えていった。

C

そして時は逆行し、未来は創られる。

Cの35話「結路」(後書き)

ここで『転』が終わり、いよいよラストスパート！

Cの36話「去りし過ちの真相」

・・・俺は、まだ生きてるのか？ 分からない。意識はある、が何も見えない。いや、何も見えない事はない。俺が見ているわけではない映像を俺も一応、見ている。

・・・だが、俺の心の中は空虚だ。特に関心も無い。だから見ようとしていない。

・・・あいつは、死んだのか。呼びかけてみる。だが応答はない。・・・いや、もうすでに何度も呼びかけてきた。そして応答はなかったのだから死んだのだろう。

ところで、あいつって誰だ・・・？ そもそも俺は誰だ・・・？俺の外に居る奴は言う。俺の名前はクロウ・・・命断のクロウだと。・・・そもそも外に居る奴って誰だっけ。

あれ？ わけがわからない。なにがどうなっているのか・・・考えれば考えるほど、雪の結晶のように溶けて消えていく・・・俺を形成していたものが・・・消えてなくなって・・・。

『・・・ろう・・・さま』

ん、今のは・・・なんだ？ 俺は耳を澄ます。

『く・・・さま・・・これを・・・最後・・・に』

確かに聞こえた。だがあまりに弱弱しすぎて聞き取れない。・・・だが、その声がか何かを差し出している事は分かった。・・・その声はやがて聞こえなくなっただが、その声差し出したものは消えずに残った。

『残知回想』・・・何の事か分からない。だがあの声が残したものだ。・・・なにか、いい物のような気がする。・・・空虚な俺の心を、何故か満たしてくれてる様な気がする。・・・だから、俺は声が残したものをこの意識の最後に見ることにした。そして、最後にその声が言った。

『あの時・・・見たがって・・・いたものです。・・・これは・・・』

時神様の・・・過去・・・どうか、これを見て・・・思い出して・・・
くださ・・・』

C

ぴぴぴい、ちっちちつ。

「あー・・・」

青い空、白い雲。庭で鳴く小鳥は風流、空を飛ぶ鳥は優雅。そんな光景に包まれていれば、眠たくなるのも当然というもの。

「平和だねえ・・・」

効煽は後ろに組んだ腕を枕に、縁側で寝っ転がっていた。・・・いや、普通、平安時代でこんなことしていたら相当ヤバイ事になるのだが、そこは効煽。フリーダムである。

で、そうやって仕事という仕事をやらず寝ている効煽だったが、
ゲシッ！

「うおっ！ つつつ・・・」

何の前触れもなくいきなり背中をクリーンヒットで蹴られた。ジンジンとうづく背中を手で押さえながら、よっこらせ、と起き上がる効煽。

「気配とか足音とかを消しながら来んなよ。おもしろいリアクションができねえじゃねえか、時神」

効煽の視線の先、そこには宙に浮いて地に足を付けていない時神が効煽を見ていた。ただしその目はいつもより三倍ほどジト目で、効煽は俺なんかしたっけなー、と思い返してみる。・・・うーん、饅頭を一個多く食べた事か？ それともこの前、歩いていた時神の足元に足を出して転ばせた事か？ そのせいで、こいつはこうやっていつも浮いて移動するようになったんだが・・・。

とりあえず、思い当たる節が多かったのだ。

「すまん」

「・・・まだ妾は何も言っではおらぬぞ」

とか言っているが、否定しないところを見るとやはり怒っているらしい。効煽が時神とこの庭で出会ってから早三年。効煽も大体、時神が怒っているとどんな行動に出るかはよく知っていた。大体、急に背中を蹴られた時点で不機嫌なのは丸分かりだ。

「で、何に怒ってるんだ？ 思い当たる節はないでもないぞ」

「・・・思い当たる節があるのなら妾が怒る前に謝ってほしいものじゃがな」

と、言いつつ、時神は縁側に腰をかける。宙に浮き続けているのに疲れたらしい。効煽もその場で胡坐をかき再び問う。

「で、何について怒ってるんだ？ 正当な理由であれば謝罪の言葉を述べない事も無いぞ。俺は」

と、効煽は茶化しつつ言うが、対する時神はそれにツツコムことも無く、まるで言葉を漏らすように、しかしはっきりと伝える意志の元、言った。

「効煽お前・・・妻子がおったのか」

「ん？ ああ・・・いるよ。それがどうかしたのか？」

効煽は意外な質問にキョトンとし、とりあえず返答する。

たった今、時神が問い効煽が答えたように、効煽には三年以上前の時点で妻子が存在していた。数年前に榊原氏の紹介で知り合い、それから手紙のやり取りをして、そして結婚した。やはり効煽もい歳になっっているわけで、榊原氏が勧めるから結婚したが。実のところ、妻とは子供を身ごもった時以来、もう何年も会っていない。子供が生まれたと言うのも手紙を通して知った事だし、しょっちゅう手紙のやり取りはしているのだが、どうも帰る気にはなれず、ずっと会っていない。

その理由は効煽の妻が名家の生まれで、相手方の父親に効煽がめっさ嫌われていると言う事。妻とは一応、愛し合ったうえで結婚したのだが、妻の父親は頑固者で最後まで娘の結婚を認めなかった。おそらく、身寄りのない陰陽師出身というところが気に食わなかったのだろう。面倒なことを嫌う効煽としては妻の父親に顔を合わせ

て何か言われるのも嫌なので、父親が急な病でくたばるまでは、と効煽は心に誓っているのである。

君のこと、想うたびまた、親父見る。父くたばりし、時に会おうぞ。

効煽はこんな感じの詠を妻に送ったとか。ちなみに妻も父親が嫌いらしく、洗濯物は絶対に父親の物と一緒に洗わせないそうだ。

「・・・いわゆる、出来ちゃった結婚というやつかの？」

「ぶっ！」

効煽の回想後に時神が言った意外すぎる言葉は、効煽に盛大に吹かせた。実は凶星だったりもする。

「ちょ、おま、そんな言葉どこで・・・」

「別に。妾も妾で流行語などはきちんと勉強しておるのじゃ。それぐらい知っておる。ABCなんかもバッチリじゃ」

それはなんか古くないか・・・と思う効煽だったが、古いも何も効煽らにとっては未来の言葉であり、もう何がなんだかよく分からない。とりあえず『残知回想』による誤差として受け取っておこう。

「で、なんでそれでお前そんなに不機嫌なんだ？」

「む、そ・・・それはじゃな」

急に言葉を詰まらせる時神。？マークを頭の上に浮かべる効煽が問う。

「それは？」

「それは・・・効煽が妾に隠し事してたのが許せないと言うか・・・妾というものがあらうか・・・」

ぼそぼそ、と竜頭蛇尾になっていく時神の言葉。それを効煽は聞き直そうか、それともこのまま流そうかと考えていた時。

「おや？ どうしました、時神様？ 何を言っておられるのです？」

丁度、廊下の向こうから榊原氏が現れた。時神はそこで、ハッと我に返ると、急に顔を赤らめ榊原氏に告げる。

「効煽が妾にいぢわるをするのじゃ！」

「うえっ！？ 俺が、いつした！？」

言いがかりだ、と効煽は言葉を上げるが榊原氏は効煽をジト目で見つめて言う。

「・・・効煽、やりすぎはダメだといつも言っているだろうが。罰としてしばらく晩飯のおかず抜きだ」

「ええっ!? そんなばかな! 晩飯のおかずが抜きとか俺これから何をやりがい仕事をしていけば・・・」

「・・・そもそもそんなに仕事しとらんだろうが・・・丁度いい機会だ。今までは飴を与えてきたが、これからは鞭を与えようしよう」

「そんなんっ!」 「・・・ざまーみろ、じゃ」

顔を真っ青にし絶望した様子の効煽と、舌を出してあっかんべーを効煽に向ける時神。効煽は「そこをなんとかっ!」と、榊原氏の裾にすがりつくが榊原氏は頑として考えを変えない。

「こーなったら、他の人に仕えてやるゝ!」

と、効煽はやけになって言うが。

「・・・こんな不景気の中で、お前みたいな不真面目な人間を雇うやつは、そうそういないと思うがな」

と、榊原氏に言われ、

「・・・すいませんでした。ずっと、ここにおいでください・・・」
手の平を返して涙目で土下座した。

「くだらぬの・・・。つまらぬし、さて、妾はひと眠りするかの」
ふわああ、と小さく欠伸をかき時神は自分の部屋に戻ろうとする。

「あ、なら俺もひと眠り・・・」

ガシッ!

効煽の襟首をがっしりと榊原氏が掴む。

「・・・お前は仕事しろ。丁度、用事が出来たところだ」

「え、でも俺は寝る前に時神とおしゃべりとかその他もろもろとか・・・な、時神」

と、効煽は時神に助けを求める。基本、榊原氏は何事も時神優先なので、時神が効煽を使いたいと言えば、効煽はどうどうとサボれるのだ。そして今までもそうやって何度か仕事をさばれた事があっ

たのだが。一つ、効煽は忘れていることがあった。

今日の時神は、すごく不機嫌だ。時神は効煽に背を向けて言う。

「・・・今日はいいのじゃ。連れて行っていいぞ、榊原」

「はい、分かりました」

「え、そんなっ！ 俺を裏切るのか時神！ この裏切り者おとおお・・・」

ずりずりずり、と。榊原氏に襟首を掴まれたまま引きずられて連れて行かれる効煽。時神はその様子をちらりと一瞥したが、すぐに前を向き自分の部屋に向かって行った。

C

「うー・・・仕事やーだよー」

「はあ、社会人にもなって言う言葉じゃないな、全く。・・・といっても、今回ばかりはお前に来てもらわなければ話にならんのだが」
「・・・ほう」

襟首をずっと掴まれて引きずられていた効煽だったが、榊原氏の珍しい物言いに興味を示し。ぴよんと飛んで掴まれていた襟首を開放し、立ちあがった。

「旦那様がそんな事を言うなんて珍しい・・・いったい、何があったって言うんです？」

効煽は興味津津の笑みをニヤリと浮かべ、話を聞く態度を見せる。榊原氏はその効煽の態度の豹変にやや呆れつつも答える。

「・・・今朝方、この近くに、どうも異世界から飛来物が来たらしい」

「飛来物？ 隕石かなんかですか？」

「いや、生物・・・だったそうだ。もう絶命しているらしいがな」
飛来物というのはそこまで多くはないものの、決して珍しくないものだった。が、生物が現れた事はあっただろうか。効煽は思い返してみるが・・・記憶にない。

「ほう、しかしそれがどうかしたの？」

「・・・うむ、なにやら良く分からないのだが。その生物の発見者及び周辺に居た人間全てが、発狂して暴れまわっているらしい。上の見解だと飛来物に中^あてられたのではないか、だと」

「それはそれは・・・妙な事になってますね」

中^あてられたと言うのは、飛来物に含まれていた毒にか、それとも飛来物が発生させた不思議な光によるものか。

さらに榊原氏は言葉を続ける。

「それにもなつて、ここら一帯にはそいつらの暴走を押さえるために結界が張られることとなった。そしてこの屋敷もその範囲内に入ってしまったていて、つまり我々も結界の中から出てはいけならしい」

「結界の外に出られない・・・ですか。我々は別に中てられてもいないのにねえ。・・・しかし、それと俺に何の関係が？」

効煽は首をかしげる。だったらここでおとなしくしていれば、やがて調査が終わって対処は対処されるだろうし。しかし、榊原氏の一言で、効煽の事象は変わった。

「・・・結界がとれないと、食う飯がないぞ」

「!?!? それは一大事すぎる！ で、つまりどうしろと？」

三度の飯とサボりが生きがいの効煽にとって、食事を絶たれることは日々の半分が絶望に満たされることと同義。その態度の急変っぷりには呆れるを通り越して驚かざるをえない。

「ああ。とりあえずお前にもそいつらの始末を頼みたい。数は確か数十人ほどだったはずだから。ここら一体の武士や対魔武士らも出ているし、お前も出た方が早く鎮圧できるだろう。・・・ま、無事討伐が終われば晩飯の件、考え直してもいいだろう」

その言葉を耳ざとくキャッチした効煽は、一瞬のうちに目を輝かせ、素早く敬礼。

「わかりました！ それじゃ早速いただきます！」

「・・・行ってきますだろうが・・・どんだけ食い気が強いんだ、

お前・・・」

と、榊原氏は呆れるが、そうこうしているうちに効煽はぴゅー、と走って行ってしまった。・・・ん？ 待てよ、何か伝え忘れているような・・・。

しばらくして効煽が戻ってきた。

「旦那様ー、で、そいつらはどこにいますー？」

・・・はぁ。こんなので大丈夫だろうか・・・と改めて心配になる榊原氏だった。

しかし、そんなことは、これから起こる事に対してそう問題ではなかった。

異世界からの飛来物は、昔、破壊神が気まぐれで飛ばした感染者の一匹だったのだから。

C

「・・・効煽のばーか。・・・そうならそうと、早く言えばよいではないか・・・」

時神は布団の中で呟く。ホントは特に眠たいわけではなかった。

ただ・・・効煽が否定してくれる事をわずかでも期待していたのに、それが叶わなかったから。・・・そもそも、この三年間、ずっとそんな話を聞かなかったもんだから・・・時神自身も信じられなかった。

だが、効煽に嘘をついている様子はない。・・・なら、そう言う事なのだろう。

「・・・ばーか、ばーか、効煽のばーか・・・」

時神は布団の中でずっと効煽を責め続ける。

人の気持ちに鈍感な効煽が、今は・・・嫌いだ。

C

「へっくしゅ・・・ぶえっくしゅ！」

効煽は走りながら大きく二回、くしゃみをする。

「二回か・・・これは誰か俺の悪口を言ってるな」

という効煽の予想は奇しくもあたっていたりそうでなかったりするのだが。とりあえず効煽は人の流れに沿って現場に向かっていった。近くにはここら辺の名家に仕えてるような武士が二人走っているが、効煽のうわさを知っているのか効煽を見ると少し驚いた表情になり、すぐ顔をそむけられる。

（ははは・・・、もう掃除屋は廃業したんだけどなあ・・・）

ま、気さくに話しかけられたい、というわけでもないので別にいいのだが。

さて、距離はあとどれくらいだろうか？ 効煽は綺麗に真っ直ぐ

伸びる道の向こうを見通すが、特に何があるとかは見えない。

（・・・うーん、もうそろそろかな、と思ったんだけれど）

しかし敵も味方も見えない。まさかもう討伐したとか？ いやそ

んなまさか・・・？ っ!？

咄嗟に効煽は上を見上げ刀を抜く。と、同時に、道の脇の建物の上から飛び下りて来る人影。

キンっ！

刀と刀が打ち合い火花が飛ぶ。効煽は咄嗟に反応したため難なく受け止めるが・・・近くを走っていた二人は他に飛び降りてきた二つの人影に人たち浴びていた。

三対一。敵を見ればどうやら武士みたいだ・・・が、おかしい。それぞれ胸や肩や背中に大きな傷口を持っているというのに、まるで痛みを感じていないかのように動いている。これが毒かなんかに中てられた状態ってわけか。・・・しかしこんな傷を負って良く死なないもんだ、と効煽は感心・・・している場合ではなかった。

ブンッ！ スシャッ！

三方向から同時に斬りかかってくる武士たち。効煽はそれをしゃがんで回避し、足を斬る。そして臆を切られて立っていられずにその場に倒れ込む三人。・・・ふう、終わった・・・と思っていた矢先。

(なんっ!?)

シュッ!

また斬撃が襲いかかってきた。しかも、今度斬りかかってきた相手は・・・。

「おいおい・・・嘘だろ?」

さっき武士たちに斬られ絶命したと思われていた、二人の武士だった。・・・蘇った? そんなわけあるかよ。と自問自答しながらも、己の安全確保のため、迷わず斬る。

ザシュッ!・・・キンッ。

そして効煽は刀を鞘におさめ、辺りを見回す。・・・今度こそこれも襲ってこないようだ。しかし・・・、

ずりずり・・・ズリズリ。

・・・臆を切られても、這いずって襲いかかろうとする武士たち。・・・何が原因かは知らないが、こんなみっともない姿をさらし続けるのは、武士にとって恥だろう。効煽はまた一太刀。綺麗な太刀筋で一瞬にして三人の武士らの命を奪った。

「・・・しかし、なんなんだこれは。毒に中てられたんだったら、斬った相手まで毒に中てられるはずがない。光だとしてもまたしかり、ここら一帯に充満でもしていない限り、毒を浴びるはずなんてない・・・だとすれば」

何かを思い立ち、さらに効煽は奥に進む。

スパッ、ザシュ、ズバツ!

立ちふさがり襲いかかってくる人間には容赦なく太刀を浴びせ、道を切り開く。

やがて、効煽が行き着いた街の一角。・・・そこには、酷い乱戦だったんだろうか十数人の武士たちが血まみれで倒れている。この

様子じゃ既に息はないだろう。・・・が、一人、その死体の中で唯一立っている生存者が居た。・・・しかし見れば一太刀浴びた傷が腰にある。・・・つまり、

「こいつもか・・・」

効煽は刀を正眼にかまえる。しかし、その武士はいきなりビクンッ、と痙攣したかと思うと、急に左手で頭をかき、言葉を発した。

「おー、痛てえ痛てえ・・・。って、ア？ なーんか違うナ・・・意識出す場所間違えたカ？ てかここどこダ？」

・・・さて、こいつは何を言っているのだろう。そもそも、今まで効煽を襲ってきた武士たちは一切言葉を発してこなかった。というのに、この男は言葉をしゃべっている。そのこと自体も驚きだ。とりあえず男の言っている意味は分からないが、効煽は返答を試みる。

「・・・ここは人間界の日本ってところだ」

「オ、これはご丁寧にどうモ。・・・ッテ、お前誰ダ？ いや誰だなんてどうでもいい。今の俺はこんなところにかまっている暇はないんだッタ。ちょっと一つの世界を滅ぼしにかかっているところだネ」

世界を滅ぼしに？ ・・・電波かこいつ。

そう内心想いつつ、しかし男の何とも言えない雰囲気、刀を抜く気にもなれず、効煽はとりあえず質問を試みる。

「お前は誰だ？ そして何を言っているんだ？」

すると、男は案外すんなり答えた。

「俺カ？ 俺の名前は破壊神。生物に感染シ、その世界を滅ぼすためのウイルスダ」

・・・さすがの効煽もやっぱり理解できなかった。しかし・・・とりあえずこいつが今回の事件の元凶であろうことは何となく察せられた。

「・・・しかシ、人間界カ。折角だシ、もうちょっと見て回るとしよウ。もしかしたら、これが破壊の下見になるかもしれないナ。く

つくつくク・・・じゃあナ、人間界の住人」

「ちょっと待て、お前をここで逃がすわけにはいかない。この事態の落とし前をつけてもらわなければならんしな」

そう言っただけ効煽は柄に手をかけ構える。その様子を見て、男は笑う。

「いいのか？ 俺にかまっていテ。・・・後口、気をつけた方がいいぜ」

！？ 効煽の足元にいくつもの影が落ちた。それは効煽が目を背にしている、さらに後ろの建物の上にその影の持ち主が立っているから見えたもので。

「くっ・・・」

効煽は前に思いっきり飛ぶ。そして効煽の居た場所には何本もの刀が、その人影とともに突き立った。

振り返ってみれば、その数は十余人。・・・このままでは勝ち目がないのは丸分かりだ。・・・ならば、

「簡易、『百鬼夜行』！」

ブブブブブン。と転移ゲートが効煽の周りに開く。時間がなかったため七つしか開けなかったが、それでも上等。

ニギヤア！ と転移ゲートの中から妖魔が出現。その手に持ったこん棒で武士たちを叩き潰そうとする。武士らはそれにひるまず妖魔の体を斬りつけ刀を刺すが、対妖魔武士のものではない刀で妖魔が動きを止めることなどない。武士たちは、次々に妖魔に潰され裂かれ喰われていく。

とりあえず、ひと段落がついた。・・・しかしその時には既に男の姿がどこにもなかった。今から探しても見つからないだろうし・・・とりあえず一旦戻るか。そう考えた時だった。

ブンッ、ドゴォッ！

「がふっ！・・・なっ！」

効煽は後ろから殴られた。誰に？ 自分に絶対忠誠のはずの妖魔が持つこん棒に。しかもそのこん棒は事故じゃない、明らかに意図

的に振られたれたものだ・・・！

ズサァァ！ そのまま吹き飛ばされ、地面を滑る効煽の体。殴られたのは背中・・・なんとか背骨は折れていないようだったが、それでも動くとき深い痛みがある・・・。

「っ・・・いったい何が」

しかし考えている暇はない。先に出現した妖魔はみな効煽を敵意のある目で見ている。こうなれば、効煽が一人が生身で逃げることは難しい。効煽は新たに七つのゲートから妖魔を呼び出し対抗する。ニギヤァ！ ニギヤァ！ 殴り合う妖魔たち。・・・しかし、なぜ妖魔たちがいきなり己の本能にそむき、効煽を襲うような事をしたのか。効煽にはそれが分からなかったが、とりあえず妖魔たちが戦っている隙に屋敷に戻ろうと走る。

「くっ、つつっ・・・」

背骨が軋んで走るたびに激痛が走る。・・・ホント、背骨が折れていないだけ幸運だったが、それでも走るスピードは鈍る。やがて・・・、効煽に敵意を向ける妖魔は倍の数となって効煽を襲って来た。

ニギヤギヤァ！

「ちっ・・・なんだってんだ、ちくしょう！」

効煽はまたゲートを開こうと集中するが、『刹那の延長』を発動しようとしたその時、

ヒュウウン、ゴッ！

「ぐっ！ っ・・・」

妖魔の一体が投げた石みたいなものが効煽の右眉の上のあたりに直撃した。効煽の体が吹っ飛ぶ事はなかったが、それでも傷口から血がドクドクと出て、顔の右半分を数本の紅い線が走る。

「ちっ・・・この程度っ・・・」

しかし、この時効煽は気づいていなかったが。先ほど投げられた石だと思っていたものは実は石ではない。妖魔が投げつけたのは、どこかの武士が懐に持っていたのであろう玉石だった。そしてそれを持っていた武士はとくに先の場合で死んでおり、その玉石には

武士がやられた時の血が付着している……つまり。

「うぐっ！
・
・
・
頭が、痛い・
・
・
？」

ブブブウブブウブブウウウウウウウウン!!!

「なっ・・・うぐっ！」

その無数のゲートから顔を足を腕を出し、この世に出られた事を喜ぶように一斉に吠える妖魔たち。一度開いたゲートを止める術などなく。妖魔たちは、効煽に敵意を見せる妖魔たちを外敵とみなし向かって行く。

効煽は必死に呼びかけようとするが、頭を走る痛みに邪魔をされる。・・・このままでは、いずれ今出現した妖魔たちも自分を襲うかもしれない。いや、自分を襲うどころか・・・この都中の人間を襲いだすだろう。・・・だが、あの数だ、まだ時間は・・・稼げるはず・・・。効煽はそう考え、頭は痛むが何とか体を奮い立たせ、屋敷に向かおうと足を動かした。

・ ・ ・ 脳に走る痛みは消えない、それどころか、何だか体の動きが鈍ってきている気がする ・ ・ ・ 。効煽には、その原因がこの頭痛と同じものだという事が察せられた。だが、 ・ ・ ・ 今から起こるであろう事態は俺の招いた事 ・ ・ ・ だから、やらなければならぬ事がある。 ・ ・ ・ いずれ、ここら一帯は暴走する妖魔たちが人を襲いだし、これ以上ない混乱に陥るだろう。 ・ ・ ・ だが、その前に ・ ・ ・

。効煽はその一心で破壊神に無意識に抗いながら走っていた。

C

屋敷では丁度時神が外の騒ぎに気付き起きたところだった。見れば、使用人も榊原氏もいない。不穏な静けさを不思議に思いながら縁側まで出て、時神は呼んでみる。

「おい、榊ば——」

と、その時。縁側の上、屋根から一人の人影が降りてきた。そいつの顔は榊原。・・・だが、雰囲気が違う。いつもは時神に対して温和な表情しか向けない榊原だが、今は敵意しか向けてきてはいない・・・！

そして時神は咄嗟の事に反応できないまま榊原に飛びかかれ・・・。

ドゴッ！

誰かに蹴られ、目の前で榊原氏の体が横に思いつきり吹っ飛んだ。時神が見れば、その誰かは効煽だった。・・・しかし様子が変わる。顔がいつもより怖い表情で、顔には血が流れている。

「が、効煽？　これはいったい・・・というかお前、その怪我・・・」

「ふっ・・・身から出た・・・さび、ってやつだ・・・それより、お前こそ無事か？」

そんな体だというのに人の事を心配する効煽に、時神は呆れながらも心配し言う。

「・・・血を垂れ流して、今にも死にそうな顔をしているお前よりは無事じゃ」

「そうか・・・うぐっ！　・・・つつ・・・まじいなあ・・・これ」

効煽が頭を押さえて言う。その顔には苦痛がにじみ出ており時神

はその顔をのぞきこもうと、顔を寄せようとするが。

「っ！ 俺に近づくなッ！」

と怒鳴られ、ビクンと体を震わせる時神。・・・なんでだろ、今日の効煽は・・・なんだか、怖い・・・。

「うぐぐっ・・・っ！」

効煽が苦しんでいると言うのに、近づく事が許されない時神。それがなんだかもどかしくもあり、同時に今の怖い効煽に近づく必要がない事が安心でもあった、その時。

ブオンっ！

空に、広い大きな魔法陣が浮かんだ。それは空一面に描かれ、その線が発する紅い光は地上を照らす。それに気づき、効煽が言う。

「これはっ・・・まさか！ 結界ごと中を焼くつもりかっ！ くそっ・・・朝廷の野郎ども・・・うぐっ！」

つまり、妖魔や感染者を空間ごと消し去ろうと言う意。きわめて正しい判断ではあるのだが、それでも効煽は毒づかざるを得ない。

「な、なんじゃ・・・いったい何が」

困惑した声を時神があげる。榊原が襲ってきて、効煽が血まみれで、空には魔法陣が浮かぶ。だけれどそれら全てどういう事なのか分からない。自分だけがまるで前の時間に取り残されたかのように変わらないでいる。

そして効煽は。

ヒュウンっ！ グサッ！

「ガフッ・・・」

手に持った刀を投げ、今まさに動こうとしていた庭で倒れている榊原に突き刺した。

「ひっ！・・・が、効煽・・・何をしておるのじゃ！？」

時神は自分が襲われた事も忘れ、効煽に問う。・・・だが効煽は無言で答えようとしない。そしてその手は時神の肩に伸び、時神を押し倒した。

ドタンッ！

「っ、・・・が、効煽何を・・・」

戸惑い、時止めを使う事すら頭の中になく時神。そしてその肩を左腕で押さえ、右腕で脇差を握った効煽。何も言わず、何も答えず、ただその刃を時神にへと振り下ろす。

「んっ！・・・」

時神は咄嗟に目をつむる。心の中には恐怖、戸惑いが渦巻く。・・・だが、痛みや気持ち悪い感触はいっこうにやってこない。時神はつむっていた目を恐る恐る開ける。すると、

「っ・・・なに、何やってんだ俺はああ！・・・ぐっ」

そこには、右腕を必死で左腕で抑え込む効煽の姿があった。自分の腕を自分で押さえて、何をわめいているのか時神には分からなかったが、はっ、と時神は気づく。自分の肩を押さえていた腕が今はどかされている、逃げるなら今だ。

そう考えた時神は起き上がり庭の外にへと逃げ、距離を取ってから効煽に問う。

「効煽、一体どうしたのじゃ！・・・何があったのか、妾に説明してくれ！」

「・・・つつつつ、・・・ダメだ、意識が・・・乗っ取られる・・・こんなんじゃ・・・だめだったのに！」

しかし、意味不明の答えしか返ってこない。時神は急に効煽が自分の知らない何かになってしまったかのような感覚に襲われる。・・・そして、時神は効煽に向けて手をかざす。

「なっ、・・・時神。やめろ！」

「あ、安心しろ効煽・・・妾はお前の時を、止めるだけじゃ・・・今のお前は・・・混乱しておるのじゃ。・・・だから、少し落ちつけ・・・」

荒い息をしながら時神は言う。その心の中には、ただただ恐怖だけが渦巻く。ここはどこだ、目の前に居る人間は効煽ではないのか？　まるで知らない世界に迷い込んだかのように、夢なら早く覚めてほしい、そう時神は願った。

だが、これは夢ではなく現実。

「やめろ時神っ！ そんなことをしたら。間に合わ・・・うぐあっ！」

効煽は叫ぶが、時神はかざした手を下しはしない。・・・そして、

『時止め』を実行する。

「効煽っ！」

「ちくしょおおおおおおおおおおお！」

ドスっ！

そして、次の瞬間に響いたのは、時神の腹が、脇差の柄によって強く打たれた音だった。

「な、んで・・・効・・・煽・・・」

ドタっ！ とその場に倒れる時神。その目には涙がうかび、時神が倒れると同時に地面に落ちる。

「・・・すまん、時神」

体感時間を操る『時止め』だが、これには大きな弱点があった。

『刹那』を仕える身として効煽はその攻略法を知っていた。・・・

だが、この説明がはたして、時神の問いの答えなのかは分からない。時神が何を問いたのか、それは分からない。

空の光がいつそう紅くなる。・・・もう時間はないようだ。

効煽は最後にとある妖魔を召喚した。それは効煽の罪そのものである『百心鬼』。それはまるで赤子のような姿をしていた。

「・・・さて、最後の仕上げか。・・・百心鬼、今までご苦労だった。・・・お前の体、封印に使わせてもらう」

そして効煽は封印陣を時神の周りに描く。その光は蒼く光り、空の紅と混ざって紫光をあたりにばらまく。

「・・・そして、償いとして・・・俺も封印の糧となろう。・・・どうせこのままここに居ても助からないんだ・・・ならせめて、俺は最後まで時神の守り人となろう・・・」

効煽はそう呟き。淡々と封印を進める。封印が進むと同時に、次第に百心鬼の体が粒子となって封印陣にへと吸い込まれていく。

ふと、効煽の心の中にまだ見ぬ息子や妻の事が浮かんだ。・・・だが、そんなもの邪念にすぎない。その思いは振り切り・・・しかしふと心配になる事もあった。

「破壊神・・・か」

それが、効煽たちの日々を狂わせた存在。・・・もし、その脅威が将来、子孫や時神に及ぶとしたら。・・・そう考え、効煽は違う封印をもう一つ作る。その中には効煽が持っていた脇差や効煽の研究資料、そして子孫宛てに時神について書き残した手紙を入れた。妖魔を使っていないからいつか封印は解けるだろうけれど、それでも今この時焼かれるのを防ぐことはできるはず。

これで一安心か・・・もう効煽の頭に痛みは襲ってこない。それは効煽が打ち勝ったからとかではなく。既に効煽の肉体が粒子となって封印の糧になろうとしているから。

「・・・楽しかった・・・かな、俺。・・・分かんねえや・・・」

そう寂しく呟き、

「でも・・・時神との日々は楽しかった・・・そして、時神にはもっと楽しい日々を過ごしてほしい。・・・俺はそう願う事にしよう・・・」

安らかな声で・・・効煽は自らその存在を消した。

そして封印は実行され、やがてここら一帯の結界内の空間は、大魔術によって焼かれた。

人妖魔見境なく死んでいく中で、生存者はたった一人、効煽により封印され、別空間にいる時神のみ。

C

「うつ・・・うつ・・・効煽、どうしてしまったのじゃ？ 妾が、邪魔になったのか？」

あれから、どれくらいたったのかは分からない。だが時神は封印のなかで泣いていた。

ただただ悲しくて泣いていた。自分はただ効煽に恋をしていただけなのに。どうしてこんなにも悲しい気持ちにならなければならぬのか。そう三日三晩ほど泣きあかした時。

「と・・・き、神？」

不意に、時神の耳に声が聞こえてきた。封印内なのに、一体誰が？ 時神は見まわしてみるのが、何も見つけられない。・・・しかし、声は確かに聞こえてくる。

「お前は・・・誰じゃ？」

「俺？・・・誰だろ・・・思い出せない。・・・おかしいな、君の名前は知っているのに」

声は本当に不思議そうに呟く。だけれどその優しい声は、それを特に悲観していると言う事もなさそうだった。

「うーん・・・あ、でもこんな名前だったかな？・・・破壊神？確かそんな名前を口にしたような気がする」

「・・・神？もしかして、お前も封印されたのか？」

「封印？・・・んー、多分封印はされてない気がするな。そもそも」

声は言う。その答えはなんとも不思議なものだった。ならなんで時神と会話が出来たのか。・・・しかし、今の時神にとってそんなことはどうでもよかった。今、つぶれそうだった時神の心は、話し相手を見つけた事によって少し晴れたようだった。・・・そして、時神は今までの経緯を声に話していた。見ず知らずの声だが、それでも声は真剣に訊いてくれて、時神をなぐさめた。

「あれ？・・・こんなものがあつたよ」

唐突に、声が声をあげた。何かと思って訊こうとしたその時、いきなり時神の目の前にモニターが現れた。それは、外の世界を移すモニターのようだった。

「これ・・・破壊神が出したのか？」

「え・・・うーん、そんな気がする」

その答えは曖昧なものだったが、それでも時神は声が出してくれ

たのだろうと信じ、

「破壊神『様』じゃな」

そう言って喜んだ。声もまんざらではないようだったので『様』をつけてみる事にした。

そしてそれから時神は、声と一緒に外の世界を見た。そして時神の知らない事があれば、声がそれを教えてくれた。「博学じゃな」と時神が言う。「んー、なんでだろうね」と声は答えた。

しかし月日がたち、時神が効煽の子孫によって封印から一時的に解放されるようになったころ、声はパタリと聞こえなくなった。時神は「破壊神様・・・どこに行かれたのですか・・・妾は・・・寂しいです」と、普段使わなかった敬語まで使って呼びかけてみたが、その声が聞こえてくる事は二度となかった。

・・・そして、物語は現在に至る。ただ、それだけの話である。

C

・・・あいつ・・・メイナが残してくれたこの映像が、空虚だった俺の心の中に灯りをともす。・・・そうだ、俺にも効煽と同じく、守りたい人が居たはずだ。守ると約束した人が。

そして効煽は最後まで己を蝕む者と戦って、そして守りたい人を守った。・・・なら、俺も・・・。

「く・・・ろう・・・君っ」

ん、なんだ・・・？ 今、声が聞こえたような・・・。耳に意識を集中させる。うつらうつらな俺の意識だが、俺はその声を聞き取ろうと、必死に意識を保ち続ける。そして、

「久郎君っ！」

・・・俺は、はっきりとその声を聞いた。ノフィーネ・・・ノフイーネだ。

そうだ・・・俺はノフィーネと約束した。・・・だから、こんなところでくすぶってる場合じゃない！

空虚だった俺の心の中に灯ったあかりは、燃え盛る炎となって心中を渦巻く。

そうだ、そうだ、そうだった！俺には帰らなくてはいけない場所がある。果たさなければならぬ約束がある！だからっ！

ズキンっ！

俺はもがく。この場から逃れようと、外へ出ようとあがく。だが俺を閉じ込める者は必死に俺を抑え込もうとする。何度も抑えつけ俺をおとなしく作用とする。・・・だが、俺はあの声がある限り、何度だってあがきもがける！

ズキン、ズキン、ズキンッ！

だから出せ、それは俺の体だ。一度は捨てようとしたけれど、それでも生きて、ノフィーネとの約束を果たすための体だ！！

ズキズキズキズキンッ！！

メイナ・・・、お前のおかげで目が覚めた。最後の置き土産、ありがとうな・・・。だから、あとはどこかで見ていてくれ。俺は・・・絶対負けん！

『そのいきですよ、久郎様。・・・どうか、ノフィーネさんとお幸せに・・・』

っ！メイナ・・・？生きて・・・るわけではないか。ならばこれは幻聴なのか？・・・いや、それだけは絶対に違う。・・・この声もまた、俺が再び立ち上がると信じてメイナが残してくれたメッセーじなんだ。

・・・メイナが残してくれた思い、無駄にするわけにいくかつ！だからっ、絶対負けられない！負けるかああああああああああ！

Cの37話「未来からの英雄」

「古王。それじゃ、行ってくるよ」

今じゃない時間。男子の子供部屋のような小さな部屋。少年は一本の刀を手にとって腰に差し、脇にいる紅く黄色い頭をした古王に言う。それは今生の別れほど重くも無ければ、ちよと出かける程度ほど軽くも無かった。

「ああ、頼んだぜ」

古王は相変わらずのニヤケ顔で言う。その顔には一片の曇りも無く。まるで今の雰囲気には合致していなかった。

しかし、少年にしてみれば、神妙な古王というのもそれはそれでおかしいし。少年は古王のそんな様子を想像するだけで少し笑えた。「むっ、なんか俺の顔を見ながら笑いやがってなかった？」

「いや・・・そんなことは・・・」

——プルプルプル・・・——しかし少年の笑いの震えは止まらない。古王が少しムツとした表情を作るので、少年はなんとか笑いを止めようと古王に訊く。

「えっと、それで・・・六本目はそこにあるんだよね？」

「ん？ ああ、あるぜ。まあ、あいつがどっかに手放してなきやだけど・・・ま、そんなことはなかったはずだ」

「そっか・・・ふう。やっと収まった」

「収まったって何が？」

「いや、なにも」

少年は顔をそむけつつ、ジト目で見てくる古王に答える。やっと心が落ち着いたのに、また古王の顔を直視して心乱すわけにはいかない。

・・・とはいえ、今度は極度の緊張が少年の心を乱しそうになっていたのだが。その様子を見て古王は言う。

「そんなに体をこわばらせんなよ。ま、気楽にやればいいんだから」

「・・・そうは言われても、さすがにこれは緊張するよ・・・」

ブルブルと今度は違う理由で体を震わせる少年。しかしもうあまり時間も無いので、古王はその少年の脇からすっと数歩後ろに下がり、

「どうっ!」

「えっ!? うわぁ!」

少年の背中を思いっきり蹴っ飛ばした。そして蹴っ飛ばされた少年は、その目の前にあった転移ゲートのようなものに体を思いっきり突っ込ませ。

「う、うわああああああああ・・・」

絶叫を響かせながらその中にへと落ちて行った。

部屋に一人残された古王は呟く。

「さつてと・・・これで駒はそろった。この後未来がどっちに転ぶかは・・・あいつの頑張り次第だつてところだな。・・・ふわああ・・・」

古王は大きく欠伸をかき。首筋をボリボリ掻いた後、腕を組み、そのまま背中を壁に預けて目を閉じた。

・・・今度目を開けた時、古王の目にはどちらの光景がはたして映っているのか。そんなことを思いながら古王は眠りについた。

C

未来の創造によって過去が変わるのか、それとも過去によって未来は不変のものとなるのか。

その矛盾に次元は歪み、そして過去は未来を、未来は過去を喰らおうと渦巻く。

そして我々は、過去と未来の狭間である『今』に存在し、過去と未来、この二つの勝敗を決められるのもまた『今』を生きる我々のみ。

だが・・・創造神の残した希望の種は、歪んだ次元の隙間から、

未来より英雄を一人呼び寄せた。

それによって何が変わるといえるのか・・・その答えもまた、『今』の我々には知る余地もない。

C

それはいつか見た光景。『今』を生きる我々が知っているはずもない光景なのだが、さてなぜ知っているのだろうか。

「・・・・・・・・」

ノフィーネの行く手、道路の真ん中に、イーゼスの小さな体が立ちふさがっていた。

イーゼスは無言で大剣を構え、その刃をノフィーネへと向ける。

「イーゼス君・・・だっけ。・・・そこ、どいてくれないかな？」

「・・・通さない」

イーゼスと言う少年から初めて聞いた声は無機質で、まるで機械か人形が声を出しているかのよう。だけど、その感情のこもっていない声になぜ邪魔されなければいけないのかと、ノフィーネは声を尖らせる。

「通して！」

「・・・通さない」

「なんで!？」

「・・・命令・・・だから」

（・・・そんな、理由で・・・っ!）

人に言われたから、だからやる。・・・そんな理由で立ちふさがるとなんて・・・。普段、温厚なノフィーネだが頭に血が上って、気がつけば無謀にもイーゼスに向かって斬りかかっていた。

「ていやっ！」

「・・・・・・・・」

ガキン!

イーゼスは手にした大剣で受け止める。小柄な体格ゆえに、ノフ

イーネが刀で無理矢理切り払うと、イーゼスの軽い体は後退を余儀なくされるが、それぐらいイーゼスがその体格で戦っていればよくあること。

地に右手をついて踏ん張るイーゼス。そこに左肩を狙い澄ましたノファイネの突きが迫ってくるが、・・・いかんせん鈍い。

「僕は急いでいるんだ、だからっ！」

手加減はしなかった。肩なら大剣を振れなくなれども死にはしない。そんな甘い考えの一撃が、イーゼスに届くはずがない。

ヒュオ！

そして左肩にへとまっすぐ伸びる刃筋。それを避ける術がイーゼスにはある。そして、ポツリと、刀が近づいてきている様子をジッと見つめながら、これまた興味のなさそうな無機質な声で、一応形式上言う。

「・・・戦闘の意志有り・・・気絶させる」

ヒュツ。

「えっ・・・？」

そして刀は何もない空を突く。咄嗟の事に大量の疑問がノファイネの脳を埋め尽くす。・・・無理も無い、イーゼスが転移魔術によって自らの立つ地面にゲートを開き、その穴に自然落下する事によって移動したのだから。

(・・・っ！)

ノファイネは殺気というには味気ない気配を感じ、前に突きだされた刀でそのまま後ろを斬りはらう。

ガキンっ！

そしてぶつかり合う金属の音。イーゼスはゲートで移動した後、空中で構えて大剣を振り下ろした。その表情はゲートを作るところか高難度の魔術をやった後だと言うのに、息を切らしているどころか表情が変化している様子も見せてはいない。だが、それは元来の無表情が招いている副産物によるもので、本当はそれなりに疲労している。・・・だが、戦闘にはさほど影響しない。

（もしや、あらかじめ仕掛けていたってこと？　・・・いや、そうじゃなければ余程の天才だよ、この子はっ！）

そう、イーゼスはその余程の天才なのだ。

ギギギッ・・・。

ノフィーネは刀で大剣を弾こうとする格好だが、腕に大剣の重さによる強い衝撃が襲いかかり、腕がしびれたため弾く事を断念して後ろに下がる。そして、イーゼスはその予想通りの動きに、あらかじめ頭の中で組み立てていた動きを実行。振り下ろした勢いそのままに地面に着地し、すぐに大剣で横に薙ぐ。

「わっ・・・！」

ノフィーネはそれを受け止めずに退く。大剣をこれ以上受け止めるのは不利と判断しての行動だった。大剣はその重さゆえに威力は高いが、斬るスピードはどうしても遅くなってしまう。・・・だから受け止めなくても振り下ろされた後の隙を狙えばいいはず。・・・だが、イーゼスは違った。

ブンッ！　ガキン！

まるで大剣の重さを感じてないかのように即座に斬り上げられる大剣。攻撃に転じようとしていたノフィーネに刀を構えさせ、それを受けさせる。

ブン、ガキン！　ブン、ガキン！　ブン、ガキン！

斬り下ろし、突きだし、斬り上げる。まるで金属バットを振っているかのように軽々と繰り出される斬撃は、小柄な体にあわぬラッシュとなって、ノフィーネを襲う。

「え？　うそ・・・っ！」

そしてイーゼスの思惑通り、一度受け止めてしまったラッシュからノフィーネは逃れられない。大剣の一撃一撃をノフィーネは刀で受け止めるしかなく。そして、

キンっ！　ザスッ！

ノフィーネの手の力が緩んだすきに刀はノフィーネの手より弾き飛ばされ、数メートル離れた地面に突き刺さった。

ノフィーネの持っていた太刀が遠い地面に突き刺さったのを確認し、イーゼスはノフィーネにはもう戦闘能力はないと判断。大剣の腹で殴り気絶させるために大剣を振りかぶる。

急に心が冷めていく感覚がノフィーネの体をスツと走る。だが、まだ諦めちゃいけない、諦めたくない事がある。・・・最後の悪あがきかもしれない、だけれど・・・まだそう遠くへ入っていないはず。

「久郎君……帰ってきてよ、久郎君……！ 久郎君！」
ブウン！

その狂暴な鈍器は、ノフィ―ネの頭部に叩きつけられ・・・ノフィ―ネはその場で気絶し―――気絶―――きぜ―――つ―――きぜ

はははそのそそのb——気絶して——してててt——し
てていなくてて——ノノノフィ——ノフィーネのののフィ

— — — — —

[illegible]

あり得ない出来事。存在しえない出来事に強制終了しようとする物語。

だが、存在しえた出来事は所詮過去の事にすぎず、存在しえない出来事は『今』変えることが出来る事実。

そして『C』による断話は、『S』からの使者によって無効となる。

ガキインツツツ!!

・・・けたたましい刃音が響き、その音にノフィーネが目を開く。すると、そこには・・・手に持った刀でイーゼスの振り下ろした大剣を受け止めている少年が、目の前に立っていた。

少年の背丈は久郎ほど、やや長めの髪を今風に遊ばせ、着ている物はどこかの学園指定ブレザー。しかし、特徴的なのは背中一本、右腰にも一本、左腰には今持っている刀の鞘を含めて二本の日本刀を差していると言う事。そして、ノフィーネには見覚えのない顔だった。

「・・・!」

キインツ!

綺麗な金属音を鳴らして大剣を刀に当て、イーゼスは反動で後ろに下がる。そして、突然現れたイレギュラーの動きを低い姿勢で睨む。

そして少年は大剣に押された刀を構えなおし、口を開く。

「あのー・・・あなたが、ノフィーネさんですか?」

少年が自信なさそうノフィーネに訊いた。見かけによらず、音が
高くて気弱そうな声だった。

そこでハッとしたノフィーネ。左右上下を無意味に確認した後、
（待て待ていや落ちつけ、この状況はいたい何？　そもそも目の
前の少年は誰！？）

と、パニックってろくに考えがまとまらない。えーと、まず何から
訊くべきなのか。というか味方なのか敵なのか。そもそも何者なの
か。

そして、そうこうしているうちにイーゼスが再び動き出した。

「・・・！」

ビーン。

そしてイーゼスは自らが出現させた転移ゲートの中を通り、再び
奇襲をかける。今度はノフィーネの後方にゲートを開く。少年では
なくあくまでノフィーネを狙うが、

「そこかっ！　『怒髪天』っ！」

少年は手に持った刀を地面に突き刺し、背負っている大太刀に手
をかける。その瞬間、大太刀は怪しい紫光を放ち、振り向くと同時
に抜刀し斬りつける。

その大太刀は空を斬るが、その代わりに刀身から斬撃状の衝撃波
が放たれ、転移ゲートから飛び出してきたイーゼスを襲う。

「・・・！」

イーゼスは大剣で防ぐが、その大太刀からの衝撃波によって後ろ
に押し戻される。・・・地面を踏みしめ持ちこたえるイーゼスの表
情は相変わらずだったが、少し動揺しているような雰囲気を感じ取
れる。

一方の少年は涼しい顔で、大太刀を背中に背負った鞘に戻し、地
面に突き刺した刀を抜く。

「ふう・・・危なかった。けど、今のあの人になら、僕だって太刀
打ちできるはず・・・」

そんなことを呟く少年はノフィーネの前に出て、刀をイーゼスに

向けて構える。が、はたと気づき、後ろ目でノフィーネに訊く。

「あ、っと・・・それで、ノフィーネさん・・・ですよね・・・それとも人違いしてますか？」

「え、・・・ああいや、そうだけど・・・ん？ この場合はそうじゃない、って答える方が正しいの？ あーもー、何が何だか分かんなくなってきたー！・・・私は誰？ ここはどこ？」

頭をかかえたノフィーネは、目まぐるしく変わる状況にだいぶテンプアっていた。

「ちょ、落ちついてください！ えーと・・・とりあえず、あなたはノフィーネさんである。マルですか？ バツですか？」

見知らぬ少年にまで落ちつけと言われるノフィーネ。とりま落ち着けと言われて落ちつける状態でもなかったが、一応答える。

「マル・・・だよ」

ノフィーネが困った顔で端的に言うのと、それを聞いて少年はホッと一安心したように胸をなでおろす。そしてイーゼスの顔を見据えたまま言う。

「やっぱりそうでしたか。間に合ってよかったです。・・・そして、僕からあなたに伝えたいことは一つだけ。ここは僕が引き受けますから、ノフィーネさんは早く久郎さんの所に向かってください」

「え、ちよっと待って・・・。なんで君がそんなことを知って・・・と言うか君は誰？」

「僕ですか？ 僕はですね、信じてもらえないかもしれないけれど・・・」

そこまで言って少年はチャキッと刀を構えなおす。そして、ガキイン！

今度は自らの足の跳躍力で一瞬のうちに迫ってくるイーゼスの大剣を、その手に持った刀で受け止める。

「・・・僕は未来から来たんです。あなたを、と言いますか・・・世界を守るために」

「・・・へ？」

未来？　あまりにも素っ頓狂過ぎる答えにノフィーネは間拔けな声をあげてしまう。

「未来・・・って、え？」

ガキン！

それから立て続けに数号打ち合う少年とイーゼス。イーゼスが繰り出す大剣のラッシュを、少年は刀で器用にそらしつつ受け流す。

「あー、とにかく急いでください！　じゃないと、僕が来た意味が無くなります！　とにかく今は、考えるより本心で思うままに行動してください！」

飛び交う金属音の中で少年は叫び。その声に、ノフィーネは我に返り、大切なこと・・・大切な人があることを思い出す。

それは一度あきらめかけていた事。しかし眼の前の少年のおかげで、再びノフィーネの心に灯がともる。

「あ・・・そうだ。僕は・・・久郎君を、助けないと・・・」

そう思い、少年とイーゼスに背を向けて歩き・・・走り出すノフィーネ。

「・・・逃がさない」

イーゼスはそう呟き、転移目術によって一瞬のうちにノフィーネの前に現れるが、

キンっ！

少年がイーゼスに向かって斬り込み、イーゼスはそれを受けるしか無くなる。さらに少年の手には、さっきまでノフィーネが使っていた刀が収まっていた。

「あ、それ僕の・・・」

「あ、ちよっと、使わせてもらいますね」

そう言って少年は、イーゼスを後退させた隙にひょいっとノフィーネの腰から鞘を抜きとり、自分の右腰に差す。そして・・・イーゼスが少年に向かって跳躍したのと同じ、少年はその名を呼び、刀を振るう。

「『白銀の型破』！
しろがね かたやぶり」

その瞬間、少年の持っていた刀は銀光を放ち始めた。それはまるで、刀が持ち主に出合えて喜んでいるかのような。

ん？　そこでノフィーネは何か記憶が引っ掛かった。確かこの刀を初めて使った時に久郎君が何か言ってたな・・・えーと、あれは確か・・・。

『じいさんから聞いた話によると、『幻刀』なんだそうだ』

幻刀？　妖刀じゃなくて？

『じいさんが言うには、あくまで『幻刀』なんだそうだ。なんでも、ある流派でないと、真の力を発揮できないとか』

「あ、もしかして・・・」

この少年が、その流派の継承者・・・？　いや、おそらくそうなんだろう。じゃなければ、あの『幻刀』と呼ばれた刀があんなにも雄々しくて奇妙なオーラを放っているはずがない。

そして少年は再びイーゼスと打ち合う。イーゼスのラッシュに、少年もまた斬撃のラッシュで応じる。

キンッキンッキンッキンッキンッキン！

幾度となく響く刃の音にノフィーネはうかつに動けないでいた。

下手に動けば巻き込まれそうな、そんな勢い。

だが、その斬撃の応酬に一瞬の乱れが生じる。

キンッ！

打ち合う音が響いた後、大剣を弾かれたイーゼスの動きが一瞬止まる。それは疲労によるものか、腕の動きが鈍り、すぐさま大剣を返すことが出来ない。そして、その隙を少年は逃さなかった。

「っ！　はあっ！」

少年は刀を振り切った体勢のまま、刀を構え、突く。それが狙うのは少年の左肩だが・・・、

「・・・かかった」

ビーン！

「なっ・・・」

イーゼスの姿が消える。何と言う事はない、今まで何度も見てきていた転移魔術。今この瞬間にわざと隙を作って、決めにかかった少年の背後を狙うために張ったイーゼスの罠。

そしてイーゼスは刀を突き出した体勢の少年の背後に降り立ち、大剣を振り下ろす。

「あぶないっ！」

ノフィーネが叫ぶ。それは・・・絶対に外れることのない軌道。そして絶対に避けることのできない速度。刀を突きだした体勢の少年では、絶対に避ける事が出来ない・・・はずだった。

キンッ！

そしてその直後だった、イーゼスの大剣が少年の持つ刀『白銀の型破』に斬撃によって軌道をそらされ、地面を砕いたのは。

「・・・！」

イーゼスのかすかに表情に動揺の色を見せている。そしてそれはノフィーネも同じこと。・・・今日の前で起こったことが不思議で仕方無かった。

なぜなら少年の刀が、突きだした勢いがなかったかのように急に取って返して、イーゼスの大剣に向けて振られたからである。しかもその方向は、体の構造、筋肉の構造からしてあり得ない方向、突きだした体勢から、真横に刀を振らせていた。

そのため、少年は不格好な体勢で刀を振り切る。その顔にはやや苦痛の表情。

「え・・・今のは・・・」

ノフィーネがついつい問う。少年は急いで体勢を立て直し、今度はこっちからイーゼスに斬りかかると、言った。

「っと！ えっと、これはこの幻刀『白銀の型破』の力です。この刀は刀身自体に動力があって、よっと！・・・僕の思う方向に向

けて強制的に刀身を動かせるんです。だから『型破り』。・・・そのせいでやや体を痛めますけどね」

と、イーゼスをやや圧倒しながら言う少年。そして、イーゼスも転移魔術を使ったばかりで、少年に抑え込まれている今なら・・・。「さって・・・ノフィーネさん。今のうちに早く行ってください！手遅れになる前に・・・早く！」

キインッ！ と、ひときわ大きな刃音と火花をたてながら、少年は叫ぶ。・・・そして、ノフィーネはもう我を失ってなどいない・・・自分のすべきことをしっかり見定めている。

ノフィーネは少年に言われる前から、既に足を動かしていた。

あの少年は誰で、なんのためにこんなこと・・・そんな疑問は今どうでもいい。

（僕がすべきこと・・・それはっ！）

ノフィーネは一心不乱に走る。まだ・・・まだそう遠くには行っていないはず。

そしてそのノフィーネの後ろ姿を見ながら、少年はイーゼスに刀を構えなおした。

「・・・なんで」

「え？」

イーゼスが、口を開いた。

「・・・なんで、邪魔をする？」

その端的な問いに、少年は答えた。

「それはですね・・・僕たちの未来を守るためです。そして・・・僕が『S』だからです」

「・・・」

キインッ！

分からない、といった様子で首をかしげるイーゼス。そんな無口な少年に刀を持った少年は、今の時点では無意味な言葉を告げた。

「いずれ、あなたにも分かります。なぜなら・・・」

キインッ！

その後の少年の言葉は、刀と大剣の打ち会う音に消された。

C

「うぐッ、・・・はぁ・・・はぁ・・・仮面の下にテ、まだ抗う力！」

破壊神は道の真ん中で伏せ、地に左腕をつけて右腕で顔に付けた仮面を押さえる。・・・否、破壊神は内に手抗う者を抑える。その顔からは苦しみの汗が流れ、息は落ち着く事を知らない。

なんだ・・・いったい何で、ここまで抗える・・・！

「はぁ・・・はぁ・・・。クソッ・・・」

破壊神はよろめきながら立ち上がる。そして飛ぼうと翼を展開しようとするが、今のこんな状態で空を飛んでいては、墜落する危険性がある。

そう考え、仕方なくトボトボと歩きだす破壊神。・・・しかし、一体どこへ行こうとしているのか。・・・いや、どこでもない。破壊神は歩きつつ、内なる者を抑え込んでいく。

そして時間が経つにつれ、次第に内なるものの抗う力が弱まってきた。これなら・・・、

「クッククク・・・ついに勝負はついたようだナア。・・・死ねェ！」

破壊神は、内なる者にさらなる負荷をかける。その重圧を受けた内なる者は、次第に弱っていき・・・潰れていく。

「ヒヤハハハハハ！ ヒヤハハハハ！ ヒヤハハハハハハハハハハハハハ！」

勝利を確信し、猛々しく笑う破壊神。

だが、その時、『過去』の『今』ではできなかった再会が、破壊神を待っていた。

深呼吸で息をめいっぱい吸い込み・・・叫んだ。

「久郎君つつツツッ！」

「!? うぐっ・・・！」

その力強い声に、破壊神の内なる者が目を覚ます。破壊神を宿した少年の体は頭を抱え、その声の主を睨みつける。

「てめェ・・・、もう・・・追いついてきやがったのカ・・・」

「・・・はぁ・・・はぁ・・・、久郎君の体・・・返してもらおうよ」

「はッ！ この体はもう俺のものダ！ あいにく返品には応じてないんだヨッ！」

ビュウン！

少年は、30メートル離れた先にいるノフィーネに向かって槍を投擲する。その槍はグングニル・・・決して心の臓を外すことのない槍。誰に対しても例外なく貫く。

「がふっ！・・・うあっ・・・」

胸の真ん中を貫かれたノフィーネは口から血を吐き、その場によりめく。その様子を目にして、少年は仮面の下をひきつらせながら、笑う。

「クッククク・・・当たった、当たったゾ！ クッハハハハハ！俺はついにこの体を我がものとしタ！ ヒヤッハハハハハ――」ドクンッ！

しかしその笑い声は、響く力強い鼓動によって力を失う。その鼓動はグングニルを伝い辺りに響く。つまり、その鼓動が誰の心臓のモノなのかは明白。

「ハハッハ・・・嘘、だロ？」

そしてノフィーネは、自らの胸を貫く神槍に手をかけ、

「うっ、うあああああああああああああ！」

ブシャアッ！

叫び声とともに一気に引き抜いた。傷口からは紅く飛沫が放たれるが、ノフィーネが少し息を整える間にその傷は完全に塞がる。

「バ・・・カナ・・・心臓だゾ？ 人間が・・・いや人間でなく

破壊神如きに、少年に届けようとする心を壊せるわけがない。

破壊神如きに、破壊神如きに破壊神如きに破壊神如きに――。

破壊神如きに、少年を求め、取り戻そうとする少女の歩みを、止めることなどできるわけがない――！

「うがわああああああアッ！」

少年の叫びが、飛び交う武器の音の中に響く。

ノフィーネは後十メートルというところまで迫り、少年の痛みは増すばかり。

「ッ・・・こうなれバツ！」

少年は頭を抑えていた右腕をはずし、両腕をノフィーネに向けて構える。少年が行おうとするのは重力操作、排外、力学操作。かつてこの体が行ってきた圧倒的な力の行使。だが・・・、

ズキンッツツ！！

「ウガアッ！ くそっ・・・なんでまだ、抗えるんだよオオオオオオ！」

少年は内なる者によって邪魔をされ、それらの力の発動が出来ない。右腕で頭を押さえつつ、仕方なしに左腕をノフィーネに向ける。その左腕にはエネルギーが充填され・・・放たれる。

それは魔導性の光。全てを焼き尽くす冷たい光。それがずっとノフィーネの胸を貫き、ノフィーネの足が少し鈍る。

「うっ・・・くあっ！」

ジリジリ、と体を焼こうとする光。だが・・・『不老不死』の再生能力はそれを上回る。傷はすぐに癒え、ノフィーネは歩みを続ける。

「うっおおおおおおおおおオオ！」

何をやってもかきなく。ノフィーネの歩みは続けられる。

「何カ・・・何かあいつを止める術ハッ・・・！」

少年は慌て、深層バウム内に意識を落とす。何か新たな力で迎え撃たなければ、このままでは・・・。

そんな絶望的な状況の中、破壊神はその何に使わぬ、希望の種を見つけた。

それは深層バイムに刻まれし力、
(ほう。これはア・・・くつくくくくく。こいつなう、あるいハ！)

仮面の奥で少年がニタリと笑い、心は荒々しく高ぶる。そして両腕をノフィーネに対して構え、最後の希望であり最後の絶望をノフィーネに与える。

それは深層バイムのさらに深いところに眠る力。生きとし生けるものすべてに訪れる事を操作する。

「『死^{デス}』！」

ドクンっ！

「うっ・・・！？」

少年がそれを唱えた瞬間、ノフィーネは苦しそうな表情を顔に浮かべその場にへたり込んだ。体に走った衝撃、冷たく、痛く、無で冷徹な、あの時感じそうだった感覚・・・。ノフィーネは荒い息をしながら、その感覚が何だったかを思い出す。

その名は死。少年が使ったそれは、その死を強制的に引き起こすシステム。かつて創造神が用意したが、すぐに無用と判断され封印されたその力が今、破壊神の手に握られている・・・。

「グハハハハッ！ こいつはいイ！ 死を与える力！ 最高ダッ！」

死を強制的に引き起こすシステムとは、個体に絶対死を与えるために身体及び精神に致死量を超えるダメージを無条件で与える力。それは元々この世界が間違った時のために創られたために、この世界で産まれた生物にしか効果はないが、人間であるノフィーネには無論有用。

つまり、この一瞬の間にノフィーネは全身に強いダメージを受け一回死に、そして『不老不死』によって再生したと言う事。

しかし、それをノフィーネが理解することはない。ないが・・・

ノフィーネは再び立ち上がり、少年の元にへと歩きだす。

「例え化けモノだろうと、殺し続ければいつかは死ヌ！ ならばお前が死ぬまデ、俺は破壊を続けよう・・・ヒヤハハハハハハ！ 『死^{デス}』」

ドクンッ！

「うあっ・・・！」

再び全身に酷い痛みが襲い、すぐさま再生するノフィーネの身体。しかし、

「『死^{デス}』『死^{デス}』『死^{デス}』『死^{デス}』！ 『死死死死死（ワールド オブ オンリー デス）』！！」

ドクンンっ！！

「うあっ！ あああああっ！」

一秒間に数十と与えられる死の嵐。そのたびにノフィーネの体は急速に傷つき、そして急速に再生される。

だが・・・死の速度と再生の速度は均衡しており、ノフィーネが一步踏み出した時に鋭い痛みが足に襲う。その痛みはいつか経験した痛みを超え、生物として限界レベルの痛み。

だけれど・・・ノフィーネには、その痛みが不思議と耐えられた。痛いには痛いけれど、それがどうしたと言うのか。ただ一心に求める無心の境地ならば、そんな痛みなど痛みの中に入らない。

本当の痛みは、彼を失う事だからっ・・・！

「っ！・・・っ！」

そして一步、一步、牛歩ではあるけれど、着実に歩を進めていく。「なッ、ありえない・・・。殺し続けているのニ、死なないどころか動けると言うのか！」

少年は手を緩めてなどいない。むしろ強めているほどだ。死を与える力は先の武器の投擲を遥かにしのぐ痛みのはず、それがなぜ！？「僕は・・・久郎君に助けてもらったんだ・・・。だから・・・その恩を返せないまま、ここで倒れるなんて・・・久郎君を取り戻せないまま・・・ここで倒れるなんてことは、絶対にできない！」

ガシッ！

その脚はしっかりと地面を踏みしめ、力強く次の一步を踏み出す。
「はははハ、なんだ？ 愛とか結城とか、そんな綺麗な力で勝てま
しタ、なんて言うつもりかヨ。そんなもン・・・あるわけねえだ
ろうガアアアア！」

死の嵐は一層の激しさを増し、一秒の間に数百と言う死がノフイ
ーネに与えられる。

だが、今更、十倍百倍になってところで・・・、

「がほっ！・・・えっ？」

しかし、そこでノフイーネは、自分が今口から吐いた物を見る。
それは血。これだけの死を受けているのだから、それぐらい吐いて
当然なのかもしれない。・・・だが、ノフイーネは体の中に、ある
違和感を感じていた。

何と言うか・・・傷が治りきっていない気がするのだ。死と再生
のスピードは拮抗していたはず。だが・・・確実にダメージが蓄積
している。

「ハハハハハ！ どうやう、殺し続けていれば、本当に死ぬようだ
ナア！ 『死^{デス}』！」

ドクンっ！

「死ぬ・・・？ 僕が？」

バイム武器庫にある必殺の槍で自分を殺そうと、いつの日かのノ
フイーネは考えていた。それが、どの道無理だったのは今死んでみ
てわかったのだが。

しかしその死が今ノフイーネに与えられようとしている。その理
由は単純明快、深層バイムに刻まれし『不老不死』の力が一秒に百
回という普通は在り得ない想定外のスピードで発動され、消耗した
ために、その刻まれた力が今、焼き切れようとしているのだ。

元々創造神が後付けで創った力。深層バイムにあるとはいえ、こ
まで非常識なほどに連続的に発動しては・・・もつはずがな
い。一方の『死』を与える力は一回も使用されていなかったことと、

世界を創った時に同時に創ったものであるために耐久性は『不老不死』の数倍。今は少しダレてきているものの、その力が焼き切れることはない。

「っ——」

だがノフィーネはそれでも、歩む。

死を望んでいたのは事実。そして、今でも死を待っているのもまた事実。・・・だが、今は死ねない。久郎はノフィーネに『人間として生きさせてくれる』・・・つまりは『人間として死なせてくれる』と約束してくれた。だから・・・まだ死ねない！

数万、数十万とノフィーネは死を受けた。だが、その体は倒れない。『不老不死』はまだ生きている。嵐の前の灯ではあるけれど、それでも生きている！

「・・・何となく分かったよ。僕が、こんな力を持ったことの意味。・・・ううん、本当の意味では違うつてわかってる。けどね、僕はきっと・・・久郎君を助けるためにこの力を手に入れたんだ。これは僕にしかできないから・・・僕にしかできない事だから！」

ノフィーネはさらに強く無理矢理意識を保たせ、悲鳴を上げる体を無理矢理動かす。

ノフィーネと少年、その距離は残り数メートル。少年は焦り、腕を振る。

「バカな・・・。来るんじゃネエ・・・来るナァ！」

そして後ずさりをしようとするが、足が言う事を聞かない。まるで違う意思が足を動かす権利を持っているような感覚。羽根も伸ばせない。転移もできない。ノフィーネの正面から逃げる事を、内なる意思は許さない。少年にできるのは、ただ『死』を強め、ノフィーネを拒む事だけ。

だが、苛烈さを増す死の嵐の中、どんなに拒まれようともノフィーネは少年との距離を詰めていく。

・・・あと3歩、あと2歩、あと一歩・・・そして、ポフッ。

久郎の元にへと辿り着いたノフィーネは、目を閉じ、優しく少年を抱いた。

「ナっ・・・あァ・・・」

「帰ろ、久郎君・・・僕と一緒に」

温かい声で語りかけるノフィーネ。その声はあんな仕打ちをくらったと言うのに安らかで、痛みや苦しみを全く表に出していない。そしてその声の温もりは、少年の内なる者にまで届き、その呪縛を解く。

「滅茶苦茶になっても、またやり直せるんだよ。何度でも・・・久郎君が僕にしてくれたように、人間は、希望があれば何度だってやり直せる・・・」

強くも無く優しくも無く。ただ柔らかく、受け止めるようにノフィーネは少年を抱きしめる。その柔らかな感触は、少年の傷つき疲れ果てた精神を癒し、再び動く力を与える。

「だから、ね・・・帰ろうよ。希望がないのなら、僕と一緒につけてあげる・・・希望があるなら、僕と一緒にそれを追い求めてあげる・・・だから、帰ろ？」

——帰ろ？——

希望を持たせようと、一言一言重みを持たせて告げるその優しい言葉は、少年の心に再び灯をともし・・・！

「ノ・・・フィー、ネ・・・」

「うん」

そして、少年は・・・少年の声をあげた。

訊き返す声に、ノフィーネは答える。

「ノフィー・・・ネ？」

「うん、僕はここに居るよ・・・」

茫然とした様子の少年が再び問う。

ノフィーネは少年を安心させようと、また声をかける。

「ノフィーネ・・・うっ、あああああああああああああああああ
ああ！」

その温かさに、柔らかさに、優しさに、少年は絶叫した。産まれたての赤ん坊のように、ひたすら大声をあげる。それは己が生きていることの喜び。大切な人に自分の存在を示すための証明。

そして・・・破壊神は悲鳴を上げる。

「うガッ・・・ありえん・・・ありえねえよオオオオオ！・・・

うわあああああああああ！」

——パリーンッ！——

少年の顔を覆っていた仮面が割れ、そこには・・・ノフィーネが求め、待ち望んだ・・・久郎が、帰ってきていた・・・。

「お帰り・・・久郎君・・・」

「ああ・・・ただいま、ノフィーネ・・・」

ノフィーネは久郎の帰還を笑顔で迎え、久郎は少し疲れたような笑顔をノフィーネに見せた。

C

（あり得ない・・・、あり得ないあり得ないあり得ないあり得ないあり得ない——）

「・・・何がだ？」

久郎はノフィーネと抱き合った姿勢のまま、身体に未だ残っている破壊神の残留思念に問う。

（一度俺に感染した生物が、再び身体の主導権を取り戻すなんて・・・そんなことガッ——）

「ああ、その通りだな。俺もお前を邪魔することぐらいしかできなかったし、俺一人じゃ主導権を取り戻すなんてできっこなかっただろう。・・・けど、ノフィーネが居てくれたから・・・俺は何度も意識を取り戻せた」

（ハッ、愛の力だともいうわけじゃあるまいナ。そんなもので説明されたラ、色々やってらんねえゼ）

「俺も、そんな小っ恥ずかしいことを言うつもりはないが。・・・

だが、『絆』の力つてのは、確かにあったのかもしれない・・・」

（絆・・・ネエ）

「ああ。創造神がいなければ、古王がいなければ、ハザードがいなければ、時神がいなければ、効煽がいなければ、メイナがいなければ、そしてノフィーネがいなければ、俺が助かっていたかは分からない。・・・つまりは、そう言う事だろう」

（・・・フンツ、まア、参考ぐらいにはしておこウ。・・・だが、まだ俺は負けたわけじゃない。巨人も残っていれば。今お前の中に残っている最後のウイルスで、お前にとっておきのプレゼントを残すこともできる!）」

「・・・」

（最後にくらっとケ! 『細胞破壊』!）

それを最後に破壊神の意志は久郎の中から消えた。だが破壊神が言い残した通り、その代償として・・・、
ガクンっ。

「っ!?　なんだ・・・左腕が」

ノフィーネの背中にまわしていた左腕が力を失い左肩から垂れさがる。その左腕を見れば、いつのまにか全体が黒ずみ、動かそうとしても動かないどころか、感触自体がなかった・・・。さらに、
フラッ・・・。

「!　ノフィーネ!?」

ノフィーネがまるで糸が切れたように力なくその場に倒れ、慌てて久郎は右腕で支えて、曲げた右ひざにその頭を乗せてやる。

「ノフィーネ!　どうした!?」

「・・・ごめんね、久郎君。・・・ちょっと、駄目かもしれないな・・・」

「――っ!」

ノフィーネは久郎の右腕に支えられながら、弱弱しく微笑んだ。

Cの38話「愛の悲しみ悪の怒り」(前書き)

超展開なのは毎回のことながら、次回作では超展開は絶対なしにしようと思います。

Cの38話「愛の悲しみ悪の怒り」

ドサツ。

いきなり倒れたノフィーネの身体、俺はそれを右腕で受け止める。

「ノフィーネ！」

「あはは・・・無理を・・・しちゃったみたいだ。・・・けほっ！」
ノフィーネがせき込むと同時にその口から紅い水滴が吐きだされる・・・！

「なっ、血!？」

バカな・・・傷は『不老不死』の力によってすぐに再生されるはずだろ・・・？　なのに、どうしてノフィーネは血を・・・!？

「うん・・・多分、深層バイムに刻まれた『不老不死』の力が・・・焼き切れたんじゃないかな。・・・一瞬に数十回と起動したんだし・・・無理も・・・ない・・・けほっ！」

ノフィーネは苦しそうにせき込む。おいおい・・・それは何の冗談だよ。やっとな・・・やっとな破壊神を打ち破ったって言うのに・・・。

「喋るな・・・気をしっかり持て・・・」

「それ・・・難しいな・・・だって、喋ってないと・・・今にも意識が飛んじやいそうで・・・」

俺の右腕に支えられ、弱弱しく微笑む彼女。その目からは徐々に力が失われ、けれどその顔はとても安らかで・・・。

いやだ・・・消えるな。せっかく帰ってきたのに・・・お前もまた、俺と約束したのに・・・『希望と一緒に探す』と・・・そう言うってくれたのに・・・。

「それを言われると・・・心苦しい・・・よ。・・・けれど、久郎君は僕との約束を・・・守ってくれたよね・・・」

・・・何を言っている？　俺がお前と約束したことは『人として生きさせてやる』ってことだぞ・・・！

「うん・・・だから、久郎君は僕を、人にくれたよ・・・。他の人を助けるために必死になる・・・こんなこと、化けモノじゃできないから・・・」

ああ・・・そうだろう・・・確かにお前は人間だ！ だけれど、人間としてまだ生きていない・・・生き足りないはずだ！

「・・・でもさ、生きるって事は・・・その長さが大切って、わけじゃないよ。・・・生まれてすぐ死んでしまった赤ん坊だって・・・たった数秒だったとしても、運命に抗おうと、一生懸命生きたんだ・・・。その生もまた、価値あるものだよ・・・」

そんな事を言われても、認めることなんて出来るものか・・・！

「俺のせいで・・・俺のせいでこんな・・・」

「ううん、違う・・・久郎君の、おかげだよ・・・」

ノフィーネは左腕を伸ばし、俺の頬に触れる。

「久郎君のおかげで・・・僕は自らの運命を断つことができた・・・ありがとう・・・久郎君・・・」

やめろ・・・ありがとうなんて言うな・・・まだ、これからなんだ！ これから・・・これからっ！

「ノフィーネっ！ お前は、まだ生きたいはずだっ！ だから・・・だからっ！」

「泣かないでよ、久郎君・・・僕が最後に見る久郎君の顔がそんなだど・・・僕も悲しくなっちゃうから・・・」

「最後じゃない！ 最後になんてさせるものか！ ノフィーネ・・・俺は、お前を——」

その時、ノフィーネは身体を起こし・・・顔を伝う涙で塩辛い俺の口に、柔らかい感触が加わる。

「・・・ははは、しょっぱいな・・・」

ノフィーネは照れ隠しをするようにはにかみ、そして言った。

「・・・好きでした。久郎君の事・・・よくわかんないけど、この気持ちには、きつとそう言う事だから・・・」

「なっ・・・ああ・・・」

俺は言葉を口にできない。俺の中に様々な感情が渦巻き、俺の心中は荒れる。……つく、お前が俺に救われたって言うんなら……。

「俺だって……お前に救われた……。そして俺も……。お前の事が、好きなんだと思う。……。けど、ずるい……。ずるいぞノフィーネ。こんな時に、そんなことを言うなんて……」

「あはは……。ごめん。……。でも、言わないまま終わる……。つてのが嫌で、これが僕の最後のわがままだから……。……。これで、久郎君の中で僕がずっと生きてくれたら……。嬉しいな……」

「ノフィーネ……。！ 止めろ！ ノフィーネ……！」

「僕は、死別って言うのがどれだけ悲しいものか知ってる……。だから、その悲しみを久郎君に味あわせちゃうのは……。心苦しいけど、……。でもきつと、僕みたいになつか乗り越えられる……。そして、幸せになってよ……」

止めろ……。そんな事を言うな……。止めろ、行くな……。ノフィーネ……。！

「……。好きだよ、久郎君。……。そして、さよう……。な……。ら」

まぶたが閉じ……。左腕が落ちる……。

「ノフィーネ！ しっかりしろ！ ノフィーネええええ！」

——うわあああああああああああああああああああああああああああああああ——
あああああああああ——

C

——ビュウ——

「……。創造神、やってのけたみたいだな」

暗黒空間より這い出た古王。しかしその表情は暗く沈んでいる。

しかし……。もう悲しんではいられない。まだ創造神が創りし未来は不安定極まりない。後は……。俺たちの仕事だ。

「しかし・・・これはこれで、嫌な予感がするな・・・久郎たちは、どこだ？」

古王は空より『超太古剣』を取り出し、一気に宙へ跳躍。ビルの間を飛び回り、久郎らを探した。

C

スタっ。

「・・・」

無言でイエゼスが転移ゲートを通って降り立つ。そこには、包帯を片手に仲本の腕の処置している桜井と、座って右腕に包帯を巻かれている仲本がいた。

「あ、おかえりなさいイエゼス君・・・って、大丈夫ですか？ なんか全体的にボロっとしているような・・・」

と、桜井はあいまいな言い方をしたが、手っ取り早く言えば服はところどころ擦り切れ、大剣は刃が欠けていたり酷い事に、おまけに顔には土ぼこりや付いている。・・・まあ言ってしまうと、

「・・・問題ない」

ってことである。

「それはよかった。それで、あの女性は？」

「・・・邪魔された」

「邪魔？」

桜井はイエゼスに問い返してみると、その邪魔者は中々の手練れであった事、しばらく戦っていたが、負が悪くなってきたので撤退してきた事を聞きだせた。

「そうでしたか・・・でも賢明な判断です、少なくとも、仲本さんよりはね？」

桜井はそう言って、座って右腕を差し出している仲本に微笑みかける。すると仲本は少し顔を赤くしてそっぽを向く。

「仲本さんったら。逃げる吸血鬼にしつこく追いつがった挙句、油

断して右腕を爪で斬られたんですよ。・・・ホント、あの吸血鬼が感染者だったらどうなったことか・・・」

「・・・面目ない、隊長」

しよげる仲本。桜井はその背中を叩いて「もう過ぎた事です」とフォローするが、・・・ふと疑問を口にする。

「でも・・・あの吸血鬼、感染者じゃなかったんですね。なのに私たちの敵・・・なんか、おかしいですね」

「・・・」

それを聞いて、ふとイーゼスは後ろを振り向く。当然そこには誰もいないが、その向こうにはイーゼスが邪魔しようとした少女と、イーゼスの邪魔をした少年がいる。・・・その二人の顔を思い返し、ながらイーゼスは、なんとなく思う。

あの二人にはいつかまた会うんじゃないか。本当になんとなく、そう思った。

バサッ。

「・・・！」

そのはばたく音に、三人はそれぞれの武器を構える。

まだ駆逐されていない吸血鬼の群れ、そして新たに吸血鬼にされた元仲間。

イーゼスたちの敵は、まだまだ多い。

C

カラスが一匹。そこに居た。

飛べずにいたカラスを救ってくれた少女は、カラスの脇で眠っていた。

カラスはその光景を見つめながら鳴いた・・・ただひたすらに鳴いた。

C

「……」

「どうやら、俺の左腕はもう使い物にならないらしい。破壊神が最後に言い残したプレゼントとはつまりそう言う事なんだろう。黒ずんだ左腕は動かすどころか感覚すらない。」

「ああ、だがそんなことはどうでもいい。そんなことに何の問題があるのか。あるとすれば、ノフィーネを力いっぱい抱きしめることができないくらいか。」

「……俺はしゃがみ、脇で静かに眠っているノフィーネを見つめる。まだ息をしている。そしてまだ体温もある。……だが、ノフィーネは目を覚まさない。今のノフィーネが生きているのか死んでいるのか、俺には分からない。……いや、今は確かに生きてはいるのだろう。……だがやがては死ぬのだ。ならば今生きていようが死んでいようが、そんなものは意味をなさない。……ノフィーネの心音は次第に弱くなり、体温はぬるくなっていく。」

（だから、諦めるのか？）

「……そして、ノフィーネ自身が言った。「さようなら」と。ならば……ノフィーネが回復する見込みなどない。……ま、たとえノフィーネが助かる方法がまだあるのだとしても、俺はそれを実行などほしくない。」

（なぜ？）

「だってそれがノフィーネの願いだったのだから。だから、俺の我が儘で助けるなんて事を……していいはずが……ない。」

（……それは、本当に俺の我が儘なのか？）

「ならせめて、俺が最後まで見届けよう。ノフィーネの息が絶えるその時まで、俺はずっとここに居続けよう……」

（……）

「俺はさつきから聞こえてくる声を無視する。それは多分、俺の心の声なのだろう。だが、その声に従う事は甘えだ。俺はただ、ここに今居ることだけ……それだけしかできず、それだけでいい。」

「いたぞ！ あそこだ！」

それだけでいいと言うのに・・・それを邪魔する声が後ろからやってきた。横目で後ろを見ると、そこにいたのはバスターの隊員たち。こちらに銃を向け、何かを叫んでくる。

「動くな！ 両腕を上にあげてゆっくり立て！」

その数は九人。・・・なぜ邪魔をするのか。俺はただ、静かにこうしていたい、ただだったのに・・・。

「どうした！ 早くしろ！ さもなくば撃つぞ！」

「・・・なぜ、邪魔をする？」

俺はしゃがんだまま、後ろに問う。すると答えはすぐに帰ってきた。

「なぜだ？ とぼけても無駄だ！ お前が新兵器を焼失させた張本人だって事は、本部から聞かされている！ ・・・増援を要請しろ！」

答えた隊員は後ろに居る通信兵に指示を出す。新兵器を焼失させたっていうには破壊神がやったことだろうが、なるほど、この体を使ったわけだから、周囲には俺がやったと認識されるのか。・・・そして、増援、って事はまだ来るのか。

・・・。

「さあ、早く立て！ そして・・・」

また何か言っているが、そんな指示を俺が聞くわけも無い。

「・・・エリクソス」

俺はしゃたがんだまま空中に縛槍を召喚し、そのまま縛槍を敵に向かわせる。縛槍はその身から鎖を放ち、九人の隊員たちを拘束する。

「うっ・・・がっ・・・！」

「おぐっ・・・うう・・・！」

・・・さっきまでの勢いはどこへ行ったのか。隊員たちは皆、苦しみを表情に浮かべて首を絞める鎖に手をかけている。

・・・目障り、そして耳障りだ。そのままどこかへ連れて行け。

俺がエリクススにそう念じると、宙に止まっていたエリクススは再び刃先が向いている方向にへと動き出し、道の向こうにへと拘束している隊員を連れ去った。

・・・ひとまずは静かになった。だが、それでひと段落とはいくわけがない。

ダダンッ！

銃弾が俺の脇をかすめる。俺が立って後ろを向くと、さっきの通信で駆け付けたのか新たな隊員、そして隊員とは違って鎧を着た剣士やローブをまとった魔術師なんかも、道の向こうからやってきていた。その数は十数人ぐらいか。

「あいつだ！ 撃て！」

「俺が前に出ます。皆さんは援護を！」

「・・・防御は私が」

ガヤガヤと叫んでいるが・・・そんなことは関係ない。再びエリクススを召喚し手に握る。・・・そしてその集団に向けて放つ。

ビュンっ！ ジャララララララ！

槍から放たれた鎖は隊員たちの身体を拘束し、その首を絞める・・・

・かと思ったが、

「えいやっ」

ガキンっ！

「・・・はっ！」

ドゴウンっ！

剣士がその剣で、魔術師がその魔法にて鎖を砕いた。・・・見た限り相当の手練れらしい。隊員たちに絡みつく鎖も断ち切り、隊員たちを鼓舞する。

「皆さんは援護をお願いします！ 俺の神剣『ルートレア』はあらゆる邪悪な力を無効化します！ だから、あいつの使ってくる奇妙な術は俺には効きません！」

邪悪な力・・・ねえ。勇者かなんかなのだろうか・・・いや実際そう言うやつが居てもおかしくない世界なんだったか、この世は。

だがその邪悪な力呼ばわりされてる『排外』や『死^{デス}』を、俺ははなっから使うつもりはない。破壊神と同じ事をするのは気に食わないからだ。・・・くだらない意地だろうか。しかし今の俺には、そんな意地を貫き倒すことぐらいしかやることがない。

「炎術・・・『獄魔葬弾』！」

ドゴウン！

魔術師が俺に向けて炎弾を放つと同時に、他の隊員たちと剣士が動いた。

隊員たちはあくまで後ろから銃弾を放ち、魔術師もその後ろから炎弾を放つ。その援護の中、剣士が俺に迫る。・・・実際、ここまですでにいては、『排外』なんかを使うための集中なんてできないか。・・・いや、そういう俺には『刹那の延長』があるんだった。

・・・俺は、なんかもう、どうでもよくなってきた。とりあえず銃弾と炎弾に対してはバリアで防ぐが。

「でやあっ！」

ガキンっ！

遠距離攻撃だけを遮断するバリアを剣士はすりぬけて、俺の目の前にまで迫りその手に持った長剣を振り下ろす。俺は手にパラギオンを召喚して受弾くが、すぐにピキッと音を立ててパラギオン碎けた。

「・・・！」

「ふっ、俺の神剣『ルートレア』は神光の威力を持つ。この斬撃を受け止められる武器なんて存在しねえ！」

ヒュッ、ガキンっ！ ヒュッ、ガキンっ！

剣士は剣を振り、俺はそのたびにパラギオンを召喚し弾く。・・・俺がこの場を動けば、ノフィーネの脇から離れてしまう。・・・それだけは嫌だ。

だがこのままではいずれパラギオンで弾くことすらままなくなる。・・・俺は右腕で一本だ。身体強化を適応しているとはいえ、弾き続けるなど不可能。そしてバリアも厚く張ったつもりだが、いずれ

は破られる。

ああ、なんで邪魔をする？ 俺はただ、ノフィーネの最後を見届けようとしているだけなのに。死ねと言うなら後で死んでやる。戦えと言うなら後から戦ってやる。だというのに・・・なぜ邪魔をするのか。

・・・邪魔をするなら、排除するしかない。・・・神剣、と言っていたか？ それは神話級武器なのだろうか。もしそうならそもそも神話級武器のレプリカで打倒できるはずがない。なら・・・超太古剣ほどの威力の神話級武器なら打倒できるだろうか。

俺は『刹那の延長』を発動。その中で俺は新たに武器を創造する。バィム武器庫から情報を取りだすのではなく、自らでその大剣を『想像』し『創造』する。

イメージするのは大剣、俺が見てきたその武器の中で一番威力があった大剣・・・それは絶大な力を誇った古王の大剣『超太古剣』。その大剣をイメージの中枢に置くことによって威力の底上げを図り、そして頭の中で武器の全体図を練り上げる。

武器は大剣、柄は紅く、その刃は片刃。色は烏の漆黒。^{クロウ}斬跡には暗い影を残すほどの闇。

大きさは超太古剣に準拠。重さは軽く、その代わりに魔力を使って威力を上げる。その魔力はバイオアムを通して世界より得る。

そして『刹那の延長』を解き、その大剣を俺の手に召喚する。

「終剣『――Fantasy Finishe――』」
ファンタジー ファイニッシャー

ドクンッ！

俺の右手にしっくりと収まったその大剣は、俺が名を呼ぶと同時に鼓動した。そして・・・

「うおおおおお！」

と叫び、迫りくる神剣と剣士に真っ向から立ち向かい、

「邪魔を・・・するな・・・！」

ガキン、ザシュッ——！

漆黒の大剣は神光を闇で覆うように、神剣を砕いて剣士の身体を斬り裂いた。・・・剣士は驚きを表情に浮かべるが、言葉を発することができず、そのままその場に倒れ伏す。

「なっ・・・！」

そして離れたところで倒れ伏す剣士を見て驚愕の表情を浮かべている隊員らや魔術師に向けて、俺は大剣を横に薙ぐ。無論、大剣の刃は届かない。・・・だが、俺が大剣を振ると同時に闇が剣先から真っ直ぐに放出され、闇が延長された刃となってあたりの建物ごと、隊員らの身体を横に一閃した。

「なっ・・・があ・・・！」

ドタツバタツ・・・ドタツ。

うめき声をあげて、倒れる隊員たちと魔術師。闇の刃で切り裂かれた者には外傷は残らない。だが・・・『死』^{デス}のように身体の内側には死に至るだけの傷を負わせる。

・・・そして、俺はそいつらが倒れるのを遠目に見て、再びノフイーネの傍らにしゃがみこんだ。

そして・・・あたりは静かになった。

C

「・・・っ、驚きだな・・・まさか神話級武器を創り上げるとは・・・」

ビルの上の古王は、絶句し、啞然とする。妙な魔力を感じ取り着てみたらそこに久郎がいたって寸法だが・・・。

あの大剣がそれほどの威力を誇ってるって事は、数多の歴史を見

そして拳は振り下ろされる。

「くっ、来るぞ！」

『オッ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！』

グオ・・・パリインっ！

そして結界が少し歪んだかと思うと、その衝撃に耐えきれず粉々に砕け散った。

「くっ、張り直せ！」

「ダメです！ 間に合いません！」

巨人はまた拳を振り上げる。防王も応戦しようと身体動かすが、身体が言う事を聞かない。疲労に痛みを負傷に、防王の身体ももう限界だった。

「くそっ！ 撃てっ、撃てー！」

ダダダダン！

焼け石に水、それでもやらないよりはましと銃や兵器を巨人に向ける隊員たち。しかし巨人の動きが今更そんなもので止まるはずも無く。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！』

巨人が拳を振り下ろす。それは今までの努力を水の泡にする一撃。無情で非情なたった一撃。

だが、その一撃は、

「『去りし歴史の重み』！
グラヴィティ・オブ・レジェンド」

新たな介入者の一撃によって押し返される。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！？』

そしてそのまま巨人は腕につられて後ろに身体をそらせ、そのまま倒れた。

ドゴオオオオオン・・・！

辺りには倒れた時の音や地面の揺れ、それと巨人の巨体によって押された空気の風圧が襲う。

「うわわわっと！ 何が起こった！」

「あれは・・・」

隊長は風圧にひっくり返りつつ状況を確認しようとし、防王は物影からその介入者を見て、呟く。

その介入者は古王。なぜここに古王が現れたのか。不思議に思う防王の元に古王が近づいて行く。

「防王っ！」

「あ、ああ古王か。助かった・・・でもどうしてここに」

妙な汗をかきながら微笑む防王だが、対する古王は険しい表情で防王の胸倉を掴む。

「っ、何をするんです・・・」

「本部に連絡しろ・・・、少年には攻撃するな、と。あいつは破壊神に操られてただけで、今はもう害はない」

始め、古王が何を言っているのか防王には理解できなかったが、古王が説明するうちに、その少年が新兵器の失敗についての連絡を受けていた時に知らされた少年の事だと分かった。

分かった上で、防王は古王に問う。

「・・・じゃあ、なぜ我々に向かって攻撃してくるんです？ 味方だと言うなら、その意思を伝えて、戦闘の意思がないのを示すべきでしょう」

だが、古王は怒号と言ってもいい勢いで言い放つ。

「・・・その理由が、あれを見て分からないってんならお前らの目は余程の節穴だな！ まあお前には見れないんだろうが・・・いいから本部にそう伝えろ！ じゃねえと、今の俺はお前らを潰すことすら厭^{いとわ}わない・・・」

防王の胸倉をつかむ力が強まる。ぐっ、と防王はうめき声をあげ・・・あまりの苦しさにギブアップを宣言。

「分かった！ 今すぐそう連絡する！ だから・・・離して・・・くれ！」

「おっと・・・すまん」

ドサッ、と古王に胸倉を離され、荒い息を繰り返す防王

、そんな防王を古王は早く早くと急かすのだが、その代わりに・・・

と防王が話を切り出す。

「その代わりに、あなたあの巨人を止めるの手伝ってください！
こっちも切羽詰まってるんです！」

見れば、巨人はもうすでに両腕を地面に突き腰を浮かせ、今にも
立ち上がりそうな格好をしている。

古王はそれを一瞥した後、即答した。

「ああ、それぐらいならやってやる。だから早くしろ」

C

「攻撃を止めろ？」

会議室の総帥は、防王からの連絡を聞き返す。その内容は、新兵
器を消失させた少年に対する攻撃を止めろと言う物。当然、それを
聞いた要人たちは猛抗議。

「なんだと！ そんなことが信じられるか！」

「現に、今だって隊員たちに牙を向いておるのだろうか？ そんなも
の、信用できるか！」

こんな時ばかり元気な要人たちであったが、総帥は少し黙考した
後、答えを返す。

「・・・いいだろう、信じよう」

「「「総帥！？」」」

要人たちが揃って席を立ち、動揺をあらわにする。そしてここぞ
とばかりに反論を総帥に浴びせる。

「正気か！？ そんな世迷言を信じると言うのか！？」

「バスター総帥ともあろう者が！ いくらなんでも都合のいい話す
ぎるだろう！」

「あの少年が先ほど、そして今もこちらに被害を与えているのは事
実！ だというのに・・・」

ワイワイガヤガヤと・・・人を非難する時ばかり元気なヤツらで
ある。

しかし、総帥は言う。

「なら、このままあの少年と戦って、無駄に戦力を消耗させた結果、巨人が障壁を破ってもいいと言うのか？」

「な、そんなことは言っていない・・・だが・・・」

要人は反論しようとするが、総帥は言葉を続ける。

「・・・少年がまだ生きているからと、このまま新たに持ってきた新兵器を使わずにいれば、それこそじり貧どころかあの巨人に障壁を破られる。それにその指示をしてきた古王ってやつが今、巨人を止めてくれてるって話だ。なら少なくともそいつは敵ではないだろう？　・・・なら、そいつの言うことを信じてみるとうとうじゃねえか。どうせこのままの状況が続けても、事態は何も変わりはない」

その言葉に要人たちは黙る。要人たちも確かにこの会議場に存在しているが、防王が席をはずしている今、この場を仕切っているのは総帥だ。その言葉に反論する言葉を要人たちが持ち合わせているはずもない。・・・最早、要人たちは総帥と心中する覚悟で臨まなければならない。

プツン。防王との通話が切れた後、すぐさま総帥は現場の指揮官に、少年への攻撃を止めるように、そして次の新兵器の発射準備をするように指示をし、それが終わるとゆったりと椅子に座った。

「いいのか・・・」

ふと、御老体が総帥に訊いてくる。・・・やはり、総帥の言っていることは詭弁であると感じたんだろう。だから、総帥は御老体だけに本音を話す。

「ああ、問題ない。そもそも俺の言っていることは何一つ間違っていないし、俺としても早く新兵器を撃ちたいんだよ。くくく・・・」

そう言う総帥の顔は、まるでクリスマス前の子供のように、期待に満ち溢れていた。

そしてクリスマスは寝なければ訪れない。総帥はまぶたを閉じ眠りに就いた。もうすでに自分の出番は終わったと言っても言うように、

あとはただその時を待つことにした。

C

「・・・ノフィーネ。ゲーセンでの事、覚えてるか？　・・・俺は楽しかった。他のやつと遊ぶのなんて、何年ぶりだったか分からないからな・・・久しぶりに楽しめて、本当に良かった」

しばらく時間が経ち、邪魔をする銃弾がパタリとやんだ頃。久郎は何となく、返事をしないノフィーネの身体に向かって話しかけていた。ノフィーネの身体はだんだんと冷たくなっていき、心音も小さくなる。・・・もう、いつその命が消えてもおかしくない状態だ。「思えば、お前と会ってから一週間しか経ってないんだな・・・でも俺はこんなにもお前の事が好きだ。・・・なんでだろうな？」

ノフィーネが久郎に生きるきっかけをくれたからか？　それとも共同生活をしたから？　はたまたノフィーネの本心を久郎が知ったからか、もしくはノフィーネが久郎を助けてくれたからか。

・・・いや、理由なんかどうでもよかった。今久郎が抱いている感情はまぎれもない事実なのだから。理由を詮索しても仕方ない。「なあ、ノフィーネ。俺はこの後どうすればいい・・・？　希望は失った・・・探す力も無い。・・・周りに誰もいない・・・いたとしても見えない・・・。お前が居ない世界なんて、俺は・・・」

久郎は横に置いていた漆黒の大剣を右腕に取る。その刃は禍々しく光り、触れたものを喰らってしまいそうな、そんな雰囲気秘めている。その刃をじっと久郎は見つめ・・・やがてまた横に置く。

「・・・疲れたな。ここ数日間、疲れたけど、とっても充実していた・・・もう俺に、思い残すことなんて・・・」

と、そこまで言って久郎は言葉を止める。

その右腕は横にある漆黒の大剣にへと伸び・・・久郎はそのしゃがんだ体勢のまま後ろに話しかける。

「・・・邪魔をするなら、たとえお前でも許さないぞ・・・時神」

久郎の後ろ1メートル。そこには右腕を久郎に向けてかざし、無表情で手の平に魔力をためる着物姿があった。そして時神はその久郎の言葉を聞いても右腕を下げる気配がない。

「・・・俺は、ただノフィーネを見守っていたいだけだ。・・・それが分からないなら、斬り捨てるぞ・・・」

久郎は口調を強めて言う。だがしかし、時神は破壊神に操られていたため言葉が通じない。

なのに、久郎は何故、時神に対して言葉をかけるのか。時神は黙って構え魔力を充填させる。その動作に感情的な事は何一つないと言うのに。

「時神・・・もう止めるよ」

久郎は右手に大剣を握ったまま立ち上がり言うが、その言葉に時神はピクリとも眉を動かさない。

だが久郎は・・・告げた。

「分かってたんだよ・・・時神、お前本当は・・・破壊神に操られてなんていないんだろう？」

「!!」

ドゴウン!

放たれる魔弾。それを久郎は振り向きざまに漆黒の大剣で弾きとばす。そして失敗したと察するや否や、距離を取る時神。その顔は一切の動揺が現れてはいない。だというのに・・・その体は震えていた。

「・・・感情を押し殺そうたって、そう簡単にいくはずがない。・・・お前はただ、事実から逃げたいがために、こうして操られたふりをしている・・・」

ドゴウン、ドゴウン!

その久郎の言葉を否定するかのように、続けて飛来する魔弾。それを久郎は二発と弾き、言葉を続ける。

「初めっから分かっていたんだろう? 事の真相を。あれだけ長い期間考える時間があり、目もあった。なら分からないはずはない・・・」

・
」

ドゴウン、ドゴウン、ドゴウン！

魔弾の威力は強まる。だが漆黒の大剣はそれを完全に受け止める。「お前はただ、誤魔化しているだけだ・・・信じたくないから・・・認めたくないから、そうやって分からないふりをして・・・目をつむっているだけだ！」

久郎はさらに声を強めた。すると時神は・・・今まで仮面をかぶっていたかのような顔が崩し・・・苦しそうな表情を浮かべ、口を開いた。

「・・・なにも、誤魔化しててなどおらぬ・・・目をつむってもおらぬ・・・効煽は敵で・・・破壊神様は妾を救ってくれた・・・。何も・・・何も違ってはおらぬ！」

時神はそう叫び、構える。だが今度は魔弾ではなく『時止め』の構え。それはすぐに発動し、久郎にその素子はできない。・・・だが、久郎は最後に叫びそして・・・、

「なら俺が思い出させてやる！ お前に対する義理はここで晴らす！
『――Fantasy Finisher――！』
ファンタジー ファイニッシャー

漆黒の大剣は黒く光り・・・久郎は、目をつむった。
ガスッ！

音が響き、久郎は右腕を振り切った。・・・時神はそれを避ける事が出来ずに落下し、その場に膝をつく。・・・しかし斬られたはずの時神の身体には傷一つない。

そして刃を上にして大剣を持った久郎は、静かに告げる。

「・・・『時止め』の弱点。それは、対象者が目をつむることだ。人間にとって時間感覚は主に目から得られる情報、『視覚』によって感じとられる。変わらぬ景色の中、ボーと立っていると時間を忘れるのはそう言う事。時計の針が刻々と進むのを見て、他人が歩むのを見て、何かが変化するのを見ることによって人は時間が連続していると言う事を認識できる。だから目をつむり視覚をなくすと、時間感覚を失い、操るはずの体感時間自体が消失するわけだ。・・・

つまりこうやって、効煽は『時止め』を無効にして……」

「妾を……助けたわけじゃな。……分かっておる……そんなことは、分かっておるのじゃ……」

そして時神の目には、ボロボロと溢れるものが顔を伝い、地面に落ちて黒い道を彩る。

「……妾が本当に許せなかったのは、あの時効煽を信じてやらなかった妾自身なんじゃ。……あれが、人間としての効煽との最後の別れだったと言うのに、妾は別れも告げられなかった……それが一番悔しくて、辛くて……妾を保ち続けるには、それがまやかしだったと信じ……効煽を悪だと認識するしかなかった……」

時神の告白を、久郎はただ黙って背を向け聞き届ける。

「……効煽は妾に生きてほしいから、妾を封印したのじゃろ？
なら生き続けるしかない……だから効煽の事は恨み続けるしかない……効煽の事を思っ
て生き続けるのに、効煽の事を悪
と思えない矛盾……妾はいつしか……本当にどれが真実だったか見失っていた。だが……あの時、ノフィーネに話して気づいた。効煽が悪なはずはない、それがまやかしだと……。ゆえに妾は……後悔の念に押しつぶされそうになり……そして自分を殺そうと、あ
の場から逃げた」

それが真相。時神の口から吐き出されたそれは、久郎が聞いて受けとめてやる。時神は心なしか嬉しそうに、その顔には笑みを浮かべている

「……すっきりしたのか」

「ああ、ようやく楽になった。……初めから、こうしていればよかったのじゃがな。千年生きて、妾もまだ未熟と言う事か……」

時神は空を見る。球状に張られた結界が光を反射して、黒い空は奇妙なほどに明るい。

ふと、時神は久郎に問う。

「なぜ妾を殺さなかった。邪魔をされるのが嫌じゃったのだろう。……現に、あいつらの命は奪ったと言うのに」

「見てたのか」

久郎が振りかえって時神の方を見ると、時神もまた久郎の顔を見つめていた。

「ああ、見てたのじゃ」

端的な答え。時神は久郎の顔を一心に見て、答えを求める。

そして久郎は一度息をつき、答える。

「……負い目を、感じていた。近くに居たってのに気づいてやれず……そうしてこんな事態になった。もう少し早く気づいていれば……なんてな。ま、少しは一緒に暮らした仲だしな、殺すなんてことは考えらんなかった」

その言葉に、時神は久郎の言葉が少し柔らかくなったのを感じた。……と言うより、柔らかい言葉を聞いて、さっきまでの久郎の言葉が硬かった事に気付いた。その理由は……そこに倒れているノフィーネか。

「ノフィーネは、どうしたのじゃ？ 気を失っておるのか？」

その問いに、久郎は首を微妙に縦に振る。

「……意識がないんだ。無数の『死』を浴びせられて、内臓がロボロになっていっているらしい。本来、『死』ぬほどのダメージを受けるはずなのだから、それに比べては軽いとしても……『不老不死』が焼き切れた今では致命傷だ……」

時神には『死』という物が何であるか分からなかったが、その焼き切れたというワードに少し驚いた。深層バウム内の力はそうそう焼き切れるものではない。

しかし現に焼き切れているのだ。……時神は思った事をそのまま問う。

「じゃが、『命断』の力なら何とかするのはないのか？」

「『命断』の力だって、この世界にできないことはできない。『命断』で医療魔術について調べてみたが、そもそも魔術での医療は機械や器具でやることを代わりに魔術でやるってだけらしい。それ以外だと、自然治癒力を高めることぐらいしかできない……そんな

ことをしたところで、ノフィーネの苦しみを長引かせるだけだ。・
・治療のために、障壁の外に行くこともできない。・・今のノフ
イーネの身体は、動かしただけでもすぐに壊れてしまいそうで・
・」

と、そこまで言って久郎は言葉に詰まる。久郎自身も辛いよ
うなるべく感情を押し殺していたのに、悲しみが沸々と心の奥から
湧き始める。

そんな久郎を慰めようとしてか、時神は声をかけようとするが。

「じゃが・・ぐっ、ううう・・うぐっ！」

その時、時神の表情に陰りが出来た。苦しそうに頭を押さえた時
神。久郎が駆け寄ろうとするが、時神は片手でそれを制し・・口
を開く。

「・・っつ、確かに妾は操られてはおらんかったが・・しかし
確かに感染はしておったのじゃ・・っく、さっきまでは抑えてい
られたのに、これは、こういうことかの・・少しまずそうじゃ・
・ぐっ、ううっ！」

その頭痛は破壊神のウイルスによるもの。それ以外に考えられな
い。・・それが分かっていると言うのに・・久郎には何も出来
ない。出来るとするならば・・、

「時神・・どうする？」

久郎は右腕に持った漆黒の大剣を掲げる。今度は刃を下にして。
・だが、

「諦めるな・・妾と効煽は最早手遅れじゃが、・・まだお前ら
二人は弱っているとは言え生きておる・・だから、まだあきらめ
るでない・・」

その返答は久郎の問いに対するものではなかった。久郎は始め理
解できなかったが。少しして、それが久郎と脇に眠っているノフィ
ーネに対して言っているという事を理解した。

「・・あきらめるな、って。・・そんなの辛いだけだ。どうせ
手段はない・・」

目をそらし、久郎は自嘲気味に言うが。時神は苦しみにを耐えつつ片目をしっかりと開き、久郎に告げる。

「そんなことは、ないじゃろう……。呪われた力……。ノフィーネにつらい思いをさせたそれこそが……。鍵……。……。お前こそ、目をつむっているのでは、ないか？ うっ……。くっ……。」

目をつむっている……。そうなのか？ 時神に指摘した俺自身が、そうやって目を背けていたのか？……。いやだが、呪われた力だったって、俺にはどうしようも……。ないのか？

ビュンっ！

「っっ！」

考えていたせいで反応が遅れた……。！ 突然、何の前触れもなく動き出した時神。久郎は咄嗟に漆黒の大剣を構えるが、時神の狙いは久郎ではなく……。その足元に居るノフィーネ。時神がノフィーネの体に触れる。

「くっ！」

久郎は時神を大剣の腹で弾き、ノフィーネの上からどける。弾き飛ばされた時神は地面を転がり……。そしてあの忌々しい口調がその口から発せられる。

「くっくくク……。油断したナ、久郎……。っっ、久郎……。すまぬ……。すまぬのじゃ」

時神の口からは二つの声が響く。一つは時神自身のもの、一つはその中に巣くう悪鬼のもの……。

「……。どうする？ 時神」

久郎はさっき聞けなかった問いの答えを改めて訊く。

そして時神は、自我を保っているうちに……。答える。

「……。やってくれ、久郎……。これ以上は、生き長らえても仕方ない……。」

「……。」

そして久郎は、その手の大剣を振り切った。時神が苦しまないように、一撃で……。闇の刃で切り裂かれた時神には外傷一つ残ら

ない。

「ありがとう・・・久郎。・・・これで、効焔の後を・・・追える」
バタツ。

それが、時神の最後の言葉だった。

・・・そして、ただ一人、隻腕の少年がそこに残った。

久郎は静寂の中・・・後ろに向けて言う。

「・・・なあ、どれだけお前はやつとできた俺の大切なヤツらを奪えば気が済むんだ・・・答えろ、破壊神！」

久郎の悲痛な叫び、最早その心の中の悲しみは全て、その心中に渦巻く怒りの炎にへと変わっていた。

そして・・・言葉が返ってくる。

「・・・くつくくク、さあネ。俺はただ破壊しているだけだから。・・・だがその問いの答えをあえて言わせてもらおうなら、今の俺はお前の精神が壊れるのをすごく見たい！　ただそれだけだっ！　ハハハハッ！」

その声は・・・寝ていた体を起こし、ゆらりと立って不気味に微笑む、ノフィーネの体から発せられていた。

Cの39話「全ての始まりの一週間」(前書き)

最後まで超展開&話が早いという欠点が治らなくて、面目の使用がないです……。言い訳はエピソードの後書き及び活動報告にて。とりあえずこの場はこれでしめて、本編をどうぞ。

Cの39話「全ての始まりの一週間」

元旦の早朝。まだ初日の出には早い荒廃した街。その中にあるビルに挟まれた大きな道。

そして、その道路の真ん中に立っている俺と。俺に対峙するノフィーネ。今の状況を端的に表すとすれば、そんな感じか。

だが、そのノフィーネはノフィーネじゃない。・・・時神の攻撃からノフィーネに感染し、ノフィーネの身体を操る、破壊神・・・。破壊神はノフィーネの口を借りて、不愉快な笑いの声をあげる。

「なァ、久郎。嬉しいだロ？ お前の大切な奴ガ、また起き上がってお前の名を呼ぶんだ・・・嬉しいだロウ、久郎っ！」

「っ！！」

その言葉を聞いた瞬間、俺の怒りは沸騰し、無意識のうちに手に持った大剣を振りかぶる・・・が、俺は理性を働かせ、振りかぶられた右手を開いて大剣を取り落とさせる。振り下ろすべきものを失った右腕は、そのまま力なく落ちて、まるで左腕と同じように力なく肩から垂れ下がった。

「つく、てめえ・・・」

「いやいやいや、喜んで頂けて嬉しいゾ、久郎。それでこそ、この体を奪った意味があるというもノ」

くつくつく・・・と喉を鳴らせて笑う破壊神。・・・聞いているだけで、本当に不快になる声だ。他人の神経を逆なでさせることに生きがいでも持っているのかと思ってしまうな・・・。

「その口、今すぐふさいでやろうか・・・！」

「ふン、出来るのか？ この体の口をふさぐ？ やってみろヨ」

勝ち誇った顔で言う破壊神。俺はその顔に何かを言い返すことが出来ず。・・・ただ俺の口から洩れるのは、やり場のない怒りの言葉。安い挑発だと分かっているもこればかりは、こらえきれずに出てしまう。

「・・・くそっ」

「いっひっひっヒ・・・はっははっはハ！」

そして、その俺の言葉を聞いて、また満足そうに破壊神は笑う。・・・このまま激昂しても破壊神のペースに巻き込まれるだけ・・・。今は落ちつけ、落ち中いた上で、事態の打開策を探せ・・・。

そう自身に言い聞かせて俺は昂ぶる感情を押し殺し、破壊神に問う。それは、破壊神自身が俺の身体と力を使って、ノフィーネにやったことに対する問い。ノフィーネはもう起き上がれないほどに弱っていた・・・だというのに。

「なぜ・・・ノフィーネの体が動いているんだ？」

その俺の問いに、破壊神はまた笑って返してきやがる。

「はっはっハ、いわゆる破壊神補正ってやツ？ ウイルスに感染した奴は少し身体が強化されるのサ、ウイルスの魔力でナ。ほう、致命傷を受けたやつだって吸血鬼化して生きてんだロ？ あれも吸血鬼化をする体力をウイルスの魔力で維持してやってからのヨ。デ、それはこいつも例外じゃない」

と言って、破壊神は自らの身体を指差す。・・・便宜上、破壊神は自ら、と俺は言っているが、あれはノフィーネの身体だ。あいつのもんじゃない。だから早く取り返さないいけない・・・。

しかし、焦る俺に対し破壊神は余裕の笑みを浮かべ言葉を吐く。絶対優位者の笑みを浮かべながら、楽しげに愉快気に笑う。

「取り返さないと・・・なんて思ってるだロ？ はっハ、無駄無駄！ むしろ、今の状態で俺をこいつから引き剥がせばア・・・こイツ、死ぬぜ」

「・・・！！」

破壊神は、最後の言葉を特に強調して言った。それが意味するところは、大体理解できる。

今のノフィーネの身体は動いた事によって体力を消耗している。そこから破壊神を引きはがせばその分、破壊神のウイルスの魔力も消えるため、その単純な引き算でノフィーネの体力はなくなる・・・。

。

「分かっただろ？ こいつの命は俺が握っている、ってことが。そして・・・お前がどんな状況に陥っているかって事だ」

「・・・」

ああ・・・あの時、すぐに行動ができなかった自分を呪いたいほど、分かっているさ。

ノフィーネの命がかかっている以上・・・俺は破壊神の意に背く行動がとれない。

・・・この状況、もしノフィーネに意識があつたら、「ごめん」って謝ってきそうだな。ま、それも聞けないわけだが。

そして破壊神の話は終わっていない。より一層、愉悦そうな口調は俺に言う。

「俺は今かう、お前に究極の選択を強いることにしよう。そして、俺はその二つの選択肢の狭間でたつぷりと悩ミ、その姿を見て俺は楽しむでしょう」

そして破壊神は、ニヤリとした顔を浮かべながら言葉をそこで止めた。まるでその選択ってのを焦らして、焦らされる俺の態度を楽しもうとするようにだ。・・・ホントに、殺してやりたい・・・！
だがっ、できない・・・！

この一週間で何度目に味わっただろうか無力感。それに俺の心をジリジリと痛めつけられつつ、俺は破壊神に言葉の続きをうながす。
「・・・その選択ってのを早く言え」

「・・・なあに簡単なことだ。・・・俺は今かう、この体でお前に攻撃をすル。ちゃんと血が出るようなキツイやつだ。吸血鬼のように首筋を噛んでもいいナ。・・・デ、そこでお前に強い選択肢は二ツ・・・この体を殺す力、この体に殺される力、だ！」

ヒヤハハハハハハ！

と破壊神は笑う。dead or dead。死、もしくは死。
・・・絶対破壊主義者である破壊神にとって、その二つの間で悩ませるのはこれ以上ない悦楽なのだろう。

だが、俺はそれを聞いて、なーんだ、としか思わなかった。

まあ、きつと破壊神は俺が命が惜しいとか、ノフィーネが大切だとか、そう言う狭間で苦しむ様子を見たかったんだろうが・・・残念だったな。そんな問い、聞かれた瞬間に俺の心は決まっている。せめて、ノフィーネを破壊神が殺すか、俺が殺すか・・・だったら、悩んだのにな。・・・ま、その場合は、お前を殺して俺も死ぬ！ だったと思うが。

俺は数瞬すら迷わなかった。俺は一步前に出て破壊神に告げてやる。

「・・・なら、早くやれよ」

同時に少し笑みを受けべてもみる。今度は、俺が破壊神の反応を楽しむ番だ。悩む事も無く俺が即決したことに對して、破壊神が戸惑う様子を。

・・・だが、相對している破壊神の反応は、予想外のものだった。破壊神はニヤケた顔をだんだんと真顔に戻し、

「・・・やっぱりそうカ」

とボヤいて首を振るだけ。・・・何だ、今のこいつのテンションは。お見通しだったような発言をしているくせに、口調は全然優越そうじゃない。そして、期待外れだった、と言う反応でもない・・・はつきり言って不気味だった。俺は警戒しながら破壊神に問う。

「・・・何の話だ？」

「いや、特に何モ。ただ呆れてるだけだヨ、動物の自己犠牲精神の強さにナ。・・・普通、自分の命を捨ててまで他人を守るカ？ ・・・

・全ク」

・・・気のせいだろうか。なんとなく、ホントに何となくだが、破壊神が発する言葉に少し・・・悲しみが混じっている気がする。・・・俺を動揺させようとする作戦か？ それなら既に術中にはまっているような気がしないでもない。・・・だが、

「何を企んでいる？」

「ン？ なーんにも企んでなんかないガ？ たダ・・・さすがの俺

もブルーなのサ。ずっと俺が破壊してやろうト、思ってたのにナァ・・・。自分で逝っちまうなんテ・・・」

本当に、こいつは何を言っているのだろう。俺には分からない事をこの場で呟やかれても、何がなんだかさっぱり分からない。

動揺を見ようとした俺がむしろ動揺させられているが・・・。しかしそれは狙ってやっている事ではなく、むしろ不意に出た本音・・・のような雰囲気がある。現に、破壊神にはそんな俺を笑う様子もない。術中にはめたのならば、こいつの場合ここは笑うところだ。

「わけがわからないが・・・やるならさっさとやれ」

とまで、俺は急かしてみる。別に死に急ぎたいわけじゃないが、どうせ俺の負けだ。もう早く終わらせたい。

そして、俺の言葉を聞いた破壊神はまたそれを笑うわけでもなく。妙な表情を浮かべて頭をかきながら・・・もやもやした声で言った。「アァー、改めて気分が萎えてきた。こんなの俺らしくもなイ・・・とっとト、終わらせるぜ」

そして破壊神は俺に近づき、そして黙って立っている俺の首筋に口を近づけた。宣言通り、首筋を断ち切るつもりなのだろう。

無論、首には太い血管が通っている。ゆえに噛み切られればそれだけで死ぬ。人間の顎の噛む力は他の動物よりは弱いとは言え、己の体重・・・ノフィーネなら四十キロ程度はある。さすがにそれじゃあ噛み切ることはできないが、ウイルスによって身体強化がなされると言うのなら、噛み切ることもあるいは・・・なのだろう。まあどうせ。噛まれ続ければいずれ血は出てくる。そうやって感染して俺の精神を今度こそ乗っ取れば、俺を殺したのと同義だろう。

「・・・じゃあナ、久郎」

そう言って、破壊神は俺の首筋に歯を突き立ようとする。・・・いわゆる死の直前と言うやつだ。そのせいか妙に時間がゆっくりに感じられる。

そう言えば、俺が死にそうなのはこれで何回目だろうか。こんな

『刹那の延長』に近い感覚になったのは初めの鉄骨、黒服の銃・・・そして今ぐらいか？・・・ま、そんなことはどうでもいいか。

・・・長いな、死ぬまでの時間ってのは。それとも俺の身体が無意識の内に『刹那の延長』を使っているんだろうか。だったら解く必要があるな。

そして俺は解く前にふと、せめて最後はノフィーネの言葉を聞きたかったな、何となく思った。

だが、それは敗者である俺には贅沢だな。諦めろよ俺。・・・そう心に言い聞かせた、その時、

『贅沢・・・か。せっかく力が覚醒したと言うのに、それを使わない方が贅沢だと思うがな』

俺の脳内に声が響いた。その瞬間、俺の脳にあるやつ顔が浮かぶ。そいつはこの声の持ち主で、ノフィーネに『不老不死』を与え、この世界を創った張本人・・・。

「創造神・・・？」

『ああ、そうだ。むしろ、それ以外にだれがいる？』

そう、その声は、創造神の声だった。

C

俺は慌てて『刹那の延長』の解除を止めて、脳内に耳をすます。

耳の内側に耳を澄ますと言うのも変な話だが、とりあえず集中した。そして、さっきの言葉が空耳ではなかった事を知った。

『久郎。俺はお前に期待して色々と任せたんだ。ここで諦めてもらっちゃ困る』

期待って・・・と言うか、お前なんだって俺の脳内から声を響かせてるんだ。

『ん、そうだな・・・話しておくか。とりあえず・・・俺は死んだ』

！？ 冗談のような事を言う創造神だが、その口調にふざけている様子はない。そもそもこんな譲許でふざけた事を言うはずもない。

俺が啞然とする中で、創造神は説明していく。未来を創ったこと、その代償として自らの命を散らせた事。そして、今話せているのは微かに残した意識体・・・つまり霊のような状態で久郎に話しかけているからで、さらにその意識体もあと少しで消滅すること。

・・・つまり、創造神自身はもうこの世には居ないと言う事か。

『そう言う事だ。だが悲しむ必要はない。お前に悲しまれても別に嬉しくも無い』

こんな時まで、そんな口を聞くのか。・・・と思う気力も無い。

で、お前はなんだって俺に最後メッセージを残そうと思ったんだ？ ノフィーネの方がよかったんじゃないのか？

『だが、この意識体がお前を補足するのに今までの時間がかかったのだから、ノフィーネに残していても今のノフィーネには受け取れない。こんな事態は、容易に想像できていた。古王から話も聞いていたしな。だから最後に、俺がお前に遺言代わりの助言をしてやろうと思ったわけだ』

助言・・・ね。なんだって俺に助言なんか。

『お前が、俺と同じ土俵に立てるまでになったからだよ』

同じ土俵・・・？ 俺は創造神の言っている事が分からずに訊き返すと、創造神は答えた。

『深層バイオアムを起動する・・・それすなわち、深層バイムまで影響を及ぼせるようになったってことだ。そんなことができるのは俺とお前しかいない。・・・そして、お前は神話級武器も創り上げている。・・・今のお前になら、深層バイムに力を刻む事も出来るだろうと俺は睨んでいる』

創造神は俺に期待するように明るい声色で言う。だが、そう言われても・・・できるのか？ 俺に。とてもじゃないが出来るとは思えない。

しかし、不安な要素しか思いつかない俺に対し、創造神は「できる」と言っているのける。

『いいか、『不老不死』は正確にはまだ完全に焼き切れてはいない。

ところどころ残ってはいるし、外郭だって残っている。なら、焼き切れた部分を刻んで補えばいい』

・・・なるほど、『不老不死』を創った本人にそう言われると、出来るような気がしてきた。・・・いや、やらなくちゃいけないんだな、ノフィーネのためにも。俺に託した創造神のためにも。

ならやるしかないじゃないか。後はどうやればいいかだが、

『それは俺が教えてやる・・・いいな』

いいも悪いも・・・やらせてもらいたいのはこっちの方だ。

『なら始めよう、俺も時間がない。そして準備が完了するまでには『刹那の延長』をし続けなければならないからお前も時間がない・・・急ぐぞ』

その創造神の言葉の後、俺は早速、創造神の指示通りに意識を集中し始める。

今まで以上の集中で『命断』を使用する必要があるため。まず、一瞬だけ刹那を解除し、『命断』によって形成されていた漆黒の大剣を魔力に戻す。大剣は一瞬で光の粒子となって空中に散っていく。・・・大剣を維持している余裕はない。速く・・・ただただ速く、情報を処理しなければならないからだ。

そして俺は集中した意識の中、ただ創造神が言うがままに意識を動かす。何と言うか、暗闇の中で線を引くような感覚とでも言うのか。小人が白いキャンパスに線を引く感覚と言ってもいいかもしれない。つまり、自分では全体図が見えないが、指示する人間の言うとおりに右へ左へ動く。

『そこを・・・そう、でそこは・・・こうだ。よし、そええでいい。そしてそこそこをつなげろ』

創造神の指示通り、俺ははやる心を押さえて落ちついて、けれども素早く刻む。

次第に創造神の声が薄れて聞こえなくなっていく。・・・急げ、落ちつけ、急げ、落ちつけ、急げ！

そして、『不老不死』の焼き切れた線が全て書き足された。

『よし・・・それで完成だ。よくやった・・・これで、思い残すことはない』

・・・お前もか、少しは何かを思い残したらどうだ。なんて最後に思ってみると。創造神は少し思案したような間を持たせた後・・・言った。

『・・・なら、破壊神を頼む。・・・しっかりやれよ・・・』

そう言って、創造神の意識身体は事切れた。・・・ありがとうぐらいは言ってやるべきだったか。ま、言わなくても伝わっているか。さて・・・創造神への感謝の気持ちは、行動で示す！

『刹那の延長』・・・解除！

そして解除した瞬間、俺の首筋に歯の感触が加わる。その歯は俺の喉の肉に食い込み・・・食い込んだだけで止まる。

その歯には力がこもっていなかった。

「・・・っ」

破壊神・・・いや、ノフィーネの身体は一瞬、苦しげに顔をしかめる。まさか・・・意識が戻ったのか？　だとすれば・・・。

俺はノフィーネがまだ意識を保てていてくれる事を信じ、そのままより一層意識を集中させてノフィーネを、その第二の『不老不死』の対象とする。

——『不老不死』起動——

そんな無機質な文字が俺の脳裏に映る。刻まれた回路に魔力が通り、ノフィーネの身体に変化をもたらす。壊れている物を元通りにへと・・・。

俺はすぐに『命断』から意識を解き、ノフィーネを見る。すると・・・ノフィーネは目を開け、胸に手を当てていた。

「・・・苦しく、ない。・・・どういう事？」

ノフィーネが・・・声を出した。俺は咄嗟にこみ上げる喜びから何をすればいいか分からなくなり、とりあえず叫ぶようにノフィーネに言った。

「ノフィーネ、お前は助かったんだ！」

「え？」

「『不老不死』の修復に成功したんだよ！ 正確には創りなおしたが……、とにかく成功した！ ……あ、でも、この戦いが終わったらすぐにまた『不老不死』の力を戻すからな……」

とりあえず、成功して良かった……。俺は胸をホッとまでおろす。と、同時にちよつと胸からこみ上げてきたものが目から出そうになったのを感じ、慌ててこらえる。

……。しかし、安心するのは早かったらしい。

「……久郎君……。うっ……。ハッ……。まさか、この女を回復させてしまうとハ……。ウグッ……。つつ、あなたは……。引っこんでいて！」

「……。！ 破壊神は『不老不死』で排除できないのか？」

よく考えてみれば、ウイルスとは怪我でも何でもない。『不老不死』とは身体に怒った変化を元に戻すもので、体内に侵入したものを排除する力ではない……。ならどうすれば？ というか俺の場合はどうしたんだったか？ ……。

俺がそのことで頭をいっぱいになっていると、目に活力を完全に戻したノフィーネが俺に訊いた。

「僕、感染してるんだよね。破壊神のマザー体に」

なんでそんな事を訊くのか、と一瞬思ったが。そう言えばノフィーネは気を失っている時に感染したんだったか……。ここで間を空けることは不安がらせるだろうかと思い、俺はすぐに返答を返そうとすれう。

「ああ。感染している……。だが、」

だが……。何と言えがいいのだろうか？ ただ無責任に、「大丈夫だ」とか「俺が何とかしてやる」なんてことを言うわけにもいかない。、こんな時にかかる言葉をすぐに思いつかない俺を俺自身で恨みたくなるが。

俺がかかる言葉を見つける前に、ノフィーネが俺に言う。

「・・・そっか、なら。久郎君。僕の『不老不死』、ずっとそのままにしておいていいよ」

「え？」

俺は、その言葉の意味が分からず、間抜けな声をあげてノフィーネを見つめる・・・と、ノフィーネはいきなり俺の身体を突きとばした。

ドンッ！

「っ？」

突きとばされた俺は倒れ込み総だった身体のバランスを何とか取って後ろに下がるが、その間にノフィーネはたたたっ、と俺から離れる。・・・そして、何が何だか分からない俺に向けて、微笑みかけて言う。

「久郎君、ありがとう・・・そして、ごめんね」

直後、そう言ったノフィーネの周りの地面が円状に蒼く輝き始めた・・・！

C

この蒼い輝き・・・それは確か、ベロ・ランザの身体を封印するときに、俺が使った・・・。

「・・・封印陣!？」

「そうだよ。騙してごめんね、久郎君」

そう言って、申し訳なさそうな笑顔で謝るノフィーネ。なんだ、これはどういう・・・いや、どういう事かなんて分かってる。これは既に古王とともに予測していた事だ・・・。

「・・・僕もね、久郎君のそばで見てたからね。・・・実は覚えてたんだよ。あはは、実は久郎君より僕の方が才能があったなんてね。ま、もっとも僕の場合は妖魔を用意しなくていい分、簡素なつくりだけ」

あくまで笑顔で言うノフィーネ。・・・だが、この封印陣によっ

て得られる結果・・・それは笑顔で迎えられるような事じゃないはずだ。少なくとも・・・俺は笑顔でなんかいられない・・・。

「この封印陣の核は妖魔の代わりに、僕自身を使っているんだ。こうすることは、昨日の晩からずっと考えてたんだ。僕自身の手で破壊神のマザー体を封印して、この世界から隔絶するする。指揮をするはずのマザー体がいなくなれば、破壊神の感染は少し収まるはずだから」

そうだ、そう思って俺たちは破壊神を封印しようとして、そして失敗した。その失敗の原因は破壊神が感染者であるベロ・ランザを殺した事による、マザー体の役割移動。だが・・・ノフィーネなら、「僕なら、破壊神が僕を殺すことができないから、封印し続けられる・・・永遠にね」

・・・それを聞いて、破壊神は絶望してるんだろうか？ それとも笑っているんだろうか？ なんいせよ、あいつにとって好ましくない状況になることは確かだろう。・・・くっ、ノフィーネからこんな事を訊くぐらいなら、破壊神の憎ったらしい言葉を聞いていた方がましだ。

「元から、このために生まれてきたのかもしれないね、僕は」

「！ んなわけあるかよ！ 他人の犠牲になるために生まれてきた人間なんて！ 居てたまるかよ！」

ノフィーネの、自分に言い聞かせるような言葉に・・・今まで黙っていた俺もいよいよ堪忍袋の緒が切れた。・・・結局、助かりたい、って思う気持ちが残ってるから、そうやって言い聞かせてるんだろうが・・・！ なんて、その気持ちを押し殺そうとする！

「だけど、これは僕にしかできないことだよ。僕が世界にできる、たった一つの恩返し・・・これも、僕の本心だよ」

そうか、それがお前の本心と言うのなら！ 俺だって本心を話してやる！

「なぜだなぜだなんだ！・・・『不老不死』で助かったって言うのに、何でお前はまた俺の前からいなくなる！？ 何で俺は二度

もこんな思いをしなくちゃならない！」

「ダメだよ・・・それは我が儘だ。それに、僕は世界を・・・久郎君を失ってしまうのは悲しい」

我が儘・・・ああ、我が儘だろう。だがそれがどうした！ 我が儘を突き通しちゃいけないのか！ 俺はそう叫びそうになるが・・・ぐっ、とこらえる。激情して話していても、ただ冷静さを失うだけだ・・・落ちつけ・・・俺。

あいつの・・・世界が大事だという気持ちも本当だ。なら、確かに俺の思いは我が儘なのかもしれない。・・・つく、だとしたら・・・。

そして俺が次の言葉を発しようとした時、とたんにノフィーネが苦しみだし・・・そして、その表情には破壊神が現れた。

「・・・破壊神！」

「ッ！・・・くっくっク・・・少しは俺にしゃべらせろ。すぐ引っ込んでやるから。・・・しっかシ、まじかヨ・・・。まさか永遠の封印なんかをされるとわナ・・・。マ、そういう事態になってしまっているなう、俺にも考えがある。俺も封印されるとなると退屈だからナ、チョットした趣向ダ」

と言って、破壊神は急に説明をしだす。実際、あの体の中で破壊神はノフィーネをやっこの思いで押し返したところで、すぐにでもまたノフィーネに取り返されそうだからだろう。

だから、破壊神は早口気味にまくしたてた。

「いつかも言ったが、俺は今まで手に入れてきた感染者を亜宙の在る一か所にまとめておいてある。それは相当強力な軍勢ダ。こんな世界ぐらい、すぐに征服してしまうぐらいにナ。デ、俺はそいつらを立った今、この世界に向かわせタ。到着するのは約十年後になるだろうガ・・・それでも必ずここにやってくるように命令しタ！」

そこまで言って、一息・・・だいぶ辛くなってきたらしく、また顔は苦痛にゆがむが、最後に笑みを浮かべながらまた、まくしたてる。

「くつくつく・・・しかモ、もしこの後この女の封印を解けば、より正確なルートで人間界にこれるよう俺が調整できるかう、その期間は短縮されるだろう。・・・つまり、滅亡までの時間が早まるってわけダ・・・くつくつく。さあテ、究極の選択だぞ久郎・・・封印を邪魔する力、それとも封印する力・・・くつくつく、ハッハッハッハッ・・・うぐっ」

と、そこで破壊神はノフィーネの表情から完全に消え去った。代わりに出てくるのはノフィーネ。

ノフィーネはまた、俺に諭すように言う。

「・・・っ。・・・久郎君、封印を絶対に邪魔しちゃ駄目だよ。そして解いてもダメ・・・。世界が破壊神の対策がとれるようになるまで・・・僕が持ちこたえさせなきゃいけないんだ・・・」

「邪魔をするな・・・か。その願いが、俺にとってどんなに酷な事か・・・また離れるなんて、そんなのは・・・」

蒼い光はしだいに収束の色を見せていた。しかし、そんな中で会ってもノフィーネは落ちついた声で、俺に言う。

「よく聞いて。・・・たった1週間の付き合いだよ。よく考えてみて。確かに色んなことがあったけど、僕と君はそんなに深い仲じゃない」

ノフィーネはそう言った。だがそんなのは認めない。なら、少し前、死を覚悟したお前が最後に俺のしたことはなんだったんだ？

「・・・人間、死ぬ間際になれば、そう言う気分にもなるよ？ それが、久郎君を勘違いさせてしまった一端でもあるよね」

なんなんだ勘違いって・・・俺は勘違いなんてしていない。俺は本心をさらけ出す。

「じゃあ、この俺の胸にある寂しさはなんだよ！俺はお前が俺に真実の気持ちを打ち明けてくれた時、本気でこいつを守りたい・・・。そう思ったから約束したんだ！短い付き合い！？そんなの関係ない！ただ俺は寂しいんだよ！お前がいなくなると！それはつまり、そうってことだろ！」

俺はノフィーネの願いを聞き入れるとともに・・・俺自身の気持ちにも決着をつける。

それが、今の俺に言える精一杯の言葉。

「・・・うん、なら僕も譲歩するよ。・・・だから、答え、待つて
るよ。・・・久郎君」

そしてその言葉を最後に蒼い光は収束していき、ノフィーネの姿は俺の目の前から消えた。

『才才才才才才才才才才才才!!』

「ちつくしょうがああああ！」

『去りし歴史の重み』！

ガキ
ツ
イ
イ
イ
イ
ン
！

712

ルギーも少ない。

さすがの古王でも状況は芳しくなかった。古王がなんとか拳を弾き返した後、着地と言う。

「くっ、防王！ ここには俺とお前意外ともに立ち向かえるやつはいないのか！？」

「残念ながらそうみたいです。．．．しかし妙ですね。巨人が迫っていると言うのに派遣されてくるのが一般隊員ばかりだと言うのは．．．ふむ．．．しかしそれは後で訊く事にしましょう。今は我々がやるしか．．．ないっ！」

今度は防王が巨人の前に出て、その手に張ったバリアで左拳を受け止める。

ガキイン！

「っ！ がっ！」

だが、そもそも防王は既に倒れてもおかしくない、なけなしの体力を振り絞って立ち向かっている。バリアは次第に拳に撃ち負け、亀裂が入っていく。

ピキッ、ピキッ！

『オオオオオオオオオオオオオオ！』

「くっ、まずい．．．このままでは！」

「っ！ 『去りし歴史の重み！』」
グラヴィティ・オブ・レジェンド

防王の窮地に古王が咄嗟に放つが、短時間で連続使用した分、威力が落ちているのか、巨人の拳に直撃はしたものの弾かれ、拳は止まらずにそのまま防王を殴りとばして地面にたたきつける。

ガンッッッ！

「ごふっ．．．がはっ！」

防王は勢いよく地面に激突。その衝撃で糸一本でもたせていたような意識は途切れ、防王はもう立ち上がることなくその場で気絶する。

「防王！？ くっ、どちくしょおおおがあああああああ！」
こちらにもボロボロな古王が、吠える。だが手加減している場合で

はないと分かっている、今の古王の体力では、全力を出すことが出来ない。宙に超太古剣を十数本召喚して飛ばし、次に振りかぶられた右腕に次々と突き刺す。

ズブズブズブッ！

だが大剣はただ刺さっただけで、巨人の腕は動きを鈍らせない。この状況、例の必殺技を撃つても威力は期待できず、また古王には拳を受け止めるだけのバリアを張る事は出来ない。

そして拳は振り下ろされ、障壁を守る結界に叩きつけられる。その変わらぬ圧倒的な質量による攻撃に、すでに魔力を摩耗させた魔術師たちの結界は一溜まりも無く。

ゴワァァ・・・パリーン！

ドラを鳴らすような音の後、跡形も無く光の粒子にへと碎け散る。何人かの魔術師は今の衝撃でバタバタと倒れ、障壁は丸裸。その手前で、巨人はその左腕を振り上げる。

「ちっ、こんなだったら一日一回の『半分程度之歴史』、あんな時に使わなきゃよかったなあ、くそがあっ！」

それでも古王はその手に大剣を召喚しては、巨人の全身に向けて投擲する。だがそれも、ズブズブとただ突き刺さるだけで、かいがない。

そしてまた振り下ろされる左拳。その場にいる全員が、今度こそ障壁を破られる・・・そう思った時。

巨人の拳を、闇の刃が切り裂いた。

久郎は、再びその手に漆黒の大剣を創りだし、ポツッと呟いた。
「終わるな・・・か。なら、『物語を終わらせる者』なんて名前は変えるか・・・」

久郎は少し思案する。そして・・・新たにその眼光に力を宿し、己が右腕に握りし漆黒の大剣を振りかぶり・・・

「新たな名受け取れよ、断剣・・・『――Chronicle Starter――』！」

久郎は巨人に向けて、その闇の刃を振り下ろす・・・！ その刃は新しい名を得てより一層鋭さを増し、巨人の拳を切り裂いた。

『オオオオオオオ！？』

切り裂かれた拳からは血が出るわけでも、ましてや腕が動かなくなるわけでもなかったが・・・それでも巨人の腕の動きは確かに鈍った。

「久郎か！？ つ、一人か？」

「ああ、説明は後だ。・・・行くぞ」

「お、おお！」

その頼もしい援軍に、古王の顔はほころぶ。そしてただ防戦一方になるならと、使う事のなかった、圧縮された『超太古剣』をその手に召喚する。

「なあ久郎。あの腕、片方斬り取っちゃえば、楽になるとは思わないか？」

「・・・そんな簡単に言って、できるのか？」

「できん！・・・が、できなきゃやられるだけだぜ！ もう障壁に後はねえ！」

言ってる言葉のわりに楽しそうな古王。こんな苦境なのにも関わらず古王が笑顔の理由が久郎には分からなかったが、とりあえず、次に振りかぶられるだろう右腕の付け根である肩まで、闇の刃を伸ばして斬りつける。

そして古王もその場から跳躍、一気に巨人の頭の高さまで飛び、そこから右肩に向けて全体重も乗せつつ型に剣を突き刺す！

『オオオオオオ！』

そして右肩には大きく開いた傷口。その傷口はすぐにどろどろとした物で修復されるが、修復の間右肩は動かないらしい。その間に二人は、今度は左肩を狙う。

疲れているはずの古王も、その疲れを忘れたかのような余裕の笑みを浮かべ巨人の肩から肩へと駆ける。古王が笑顔な理由。それは久郎の顔が一人ぼっちになった結果のわりに、悲観している様子が

なかったから。それに安心して、なおさら古王は鼓舞される。

そして、左腕にも大きな傷を創り、巨人の両肩をしばらく使用不能にした時、物陰に隠れて通信機で会話をしていた隊員が、たった今来た伝令が周囲全てに伝わるように大声で叫んだ。その伝令とは・
・、

「！ 本部からの通信！ 新兵器が間もなく使用されるとのこと！
急いでシェルターに退避を！」
バスター本部より運び込まれた、二射目の新兵器の発射警告だった。

C

ピッキイイイイイイイイイイイイイイイイン！

その光によって、シェルター近くに引きつけられていた吸血鬼、及び魔物の集合体であった巨人は全て死滅し、人間界にいた全ての破壊神は死滅した。

そして、その後には・
・
・。

Cのエピローグ

「うわあああああ！」

「な、なんだこいつら！ うわあ！」

無事新兵器が起動し、破壊神の脅威を退けて安堵した隊員たちがシエルターから出て、そこで見たもの。

そこに居たのは、新たな脅威の種。

「くそっ、こいつらどこから・・・」

ダダダダダン！ ドゴオン！ ガキイン！

銃声が響く。魔弾が放たれる。剣が振りかぶられる。破壊神の脅威は去ったと言うのに、何故戦わなければならないのか。それは何のために放たれるのか。

ギャオオオオオオオオオオオン！ ウガアアアアアアアアアア！
その答えが、轟いた。

障壁内に木霊するのは無数の獣の咆哮。

竜、幻獣、亜人、合成獣、精霊。人間界に少数しか存在しないはずの魔物たちが、突如開いた異世界に通ずるゲートより、障壁内に溢れ出していた・・・！

C

『本部！ 障壁内にて正体不明の魔物が氾濫している模様！ 出どころも不明、ただいま隊員たちが応戦していますが、敵は強力です！ 形勢は不利！ 既に撤退命令を出しました！』

対策室本部。新兵器の起動成功の知らせを聞いてそこにいる全員が心を休めていたその時、壁に取り付けられたモニターから、軍人風の男が報告した。その表情はひきつっており、額には汗を浮かべている。

「な、どういうことだ？」

その言葉に会議室の要人たちがまたザワザワ騒ぎ始める中、本部の代表としてバスター総帥が答える。

『了解！』

そして少しした後、・・・会議室の中の要人たちは、総帥の指示によって行って行かせたカメラから会議室のモニターに送られてくる映像を見て、さらに騒然となった。

「な・・・なんだ、あれは!？」

「竜！？ 幻獣！？」

モニターには、必死に銃や魔術で応戦する隊員たちと、それに対する竜や幻獣の姿が映されていた。しかもその竜や幻獣はこの世界に生息していない物ばかり。人間界に存在する妖魔や吸血鬼と言った類よりも強力な種ばかり。

ゴアアアアアアアアアアアア！

そして、人間と同じ大きさぐらいの蝙蝠の羽根を付けた蛇のような竜——^{ウィーザル}蝙蝠竜の群れの中に一匹、身体の大きい竜——^{ワイバーン}飛竜が混ざり、空を飛びながら咆哮した。

そして、その咆哮を受けてに怯んだ一人の隊員が、蝙蝠竜にたかれ、あつという間に捕食される。そう、無力な人間は少し油断しただけで、彼らの前で立つことを許されなくなる。そして飛竜は上空より火弾を放ち・・・と、そこでカメラの映像が途切れた。おそらくケーブルが何かを切れたのだろう。・・・しかし、これまでの情報でも中の状況が十分把握できた。

はつきり言って、中の状況は異常だ。かつて人間界に氾濫したことも無い量の魔物たちが、障壁内にあふれかえっている。

しかし、そんな魔物たちが一体どこから現れたと言うのか。・・・そんな疑問が会議室の要人たち全ての頭に浮かぶ中、

「くくく・・・はっはっは！」

・・・こらえきれなくなったように、総帥が笑い始めた。それは壊れた笑いなんかではなく、極めて自分の思い通りになった喜びや嬉しさによる笑い。

そして、それを見た要人たちは一斉に顔から血の気を引かせ・・・恐る恐る総帥に問う。

「ま、まさか・・・総帥、貴様・・・」

「あーはっはは！ ああ、そうだよ。俺の企んだ通りだ。新兵器を五発、狭い空間で放てば、その強力な冷たい光によって、空間が裂け異世界にへと通じるゲートが出来る！ 実に思い通りだ！！」

総帥はバンツ、と立ち上がり、高々と笑う。本当に嬉しそうに、念願がかなったように。

そしてその答えに啞然としていた要人たちも、次第に我を取り戻し。総帥を問い詰める。

「分かっててやったって言うのか・・・貴様、信者だったのか！」

「まさかバスター総帥が裏切り者だったとは・・・守衛！ 守衛よ！！」

と、一人が叫ぶが。そもそもこここの本部を守衛しているのは、バスターの隊員だけ。一大国家並みの軍事力を持つバスターの国家元首たる総帥に逆らうはずがない。

そして総帥は、何とも言えない奇妙な笑みを浮かべて・・・侮蔑するように要人たちに向けて行った。

「ハッ、信者？ 裏切り者？・・・馬鹿ばっかだな。やはりこの

世は馬鹿ばかりだ・・・」

「なんだと！ 貴様・・・」

「おしゃべりはここまでだ。頭の固い老人どもには・・・そうそう

に退場してもらおうでしょう」

「なっ・・・！」

総帥はその席から跳躍するとともに、懷からアーミーナイフを取り出す。そして、立ち上がって逃げようとする要人の鈍い動きに容易に追いつき、その喉笛に向かってナイフを突き出し、払う。

さらに横で呆然としている要人の首元で払い、さらにその横の要人に首を突き、興奮して要人が殴りかかってくれば瞬時に背後にへと周り、首元で払った。

・・・そうして数秒後、会議室に存在しているのは総帥と、御老体と呼ばれた要人だけだった。御老体はこんな事態をあらかじめ知らされていたかのように、初めからそのままの姿勢で座っている。・・・そして、一言呟いた。

「お前の言った通りになったな・・・総帥よ。これがお前の見たヴィジョンか・・・」

「ああ、そうだ。これから楽しくなりそうだろう？ 人間界だって、いつまでもなめられているわけには、いかねえからなあ！！ 人間界ってぬるま湯につかった人間たちを刺激するには、丁度いい場所が出来たぞ！！」

はーっはっはっは！ と笑う総帥はその返り血もあって、まるで悪の組織の総帥のようであった。

だがこの男は、間違いなく対魔の組織、バスターの総帥なのだ。例え、今回の騒動にAランクやSランクをあまり用いず、強力な魔物との戦闘経験があまりない一般隊員ばかりを用いた結果、被害を甚大にさせた張本人であっても。

破壊神、全世界を震撼させるほどの強力な生命体でさえ、総帥にとっては目的を遂行するための踏み台でしかなかった。

C

同時刻、七本の刀を刺した少年が、ビルの上に立って真下で魔物

と戦う見下ろしながら呟いた。

「……すみません、助けたいのは山々なんですが、もう時間なので帰らなくちゃいけません……」

少年は目を伏して、悲しそうな表情を浮かべる。

「……そもそもこの戦いは、大量の血を流すことが目的なので、ここで下手に手を出せばその目的に反する事になります。……そもそも、そうじゃなかったらなぜ、バスターは人類最強レベルの人間達をここで用いなかったのか……。政治は難しいらしいですね。……まあ、実際この空間から破壊神のウイルスが出れば、間違いなく人類は滅んでましたが……。そもそも破壊神のウイルスに対抗できる人間は精神力が強い人間ではありません。……『CES^{セス}TGDF』の七人だけです。バスターが主戦力を出さなかった理由はそこにもありますね……」

少年はまるで誰かと会話しているかのように、長々と話した。しかし少年の周りには誰もいない。少なくとも存在しているようには見えない。

そうして、やがて少年の立つビルの屋上の一角に、少年がこっちに落ちてきた時のような穴が開いた。少年はそれを見つけると、その穴の中にゆっくり足を踏み入れつつ、振り返って言った。

「頑張ってくださいね、久郎さん。次の次である『S』までは、あと六年ですよ」

C

とりあえず、その後の事を離そうと思う。

あの後、シェルターから脱出した俺たちの目の前には魔物の群れがいて、それを古王と俺でなんとか切り倒して外まで脱出した。ゲートに近かったおかげで比較的楽に切り抜けられたが、隊員たちの護衛も兼ねねばならなかったので時間がかかったしまった。ま、隊員たちの中に誰も死人が出なかったただけよかったか。……そして、

あの群れが何だったのか、それは古王に訊いても分からないらしく、ただ一言「なんかの陰謀のにおいがする・・・」とだけ古王は言っていた。

話によれば障壁内での魔物の氾濫騒動は、魔物を障壁内に閉じ込め続ける、つてことで解決したらしい。・・・解決にはなっていないと思うが、それでもそうする以外ないのだろう。

それと、巨人から少し離れたところで気絶していた防王という王は、新兵器が発射される前に古王が背負ってシェルター内に運んだ後、また古王が背負いつつ外に運んで、外にあった野戦病院みたいなどころに持っていておいた。その後の事は知らないが、王はそんな簡単に死なないそうだ。また、気絶していた魔術師や隊員は、手が空いている隊員が次々に運んで行ったから、きっと全員無事だろう。

そして障壁内で起こった出来事は『吸血鬼事件』と呼ばれることになったらしい。主に吸血鬼が破壊神の戦力だったからというのが理由。事件での被害者は想像以上に多く、臨時で作られた死体安置所のような場所には、多くの悲しみの声と感情が溢れていた。その悲しみの中には小さな女の子もいて、女の子が頭を抱えてうずくまっていたことが印象的だった。・・・彼女にとって、トラウマにならないければいいのだが。

そう言えば、ハザードはどうしたのだろうか？ これも古王に聞いても分からないと答えていた。無事に逃げ出せていればいいのだが・・・。もしまだ中にいるとしても、今の俺に助けに行く力はない。一応、敵だったけど協力してくれた奴だ・・・生きていてほしいと思う。

爺さんには手紙を残してきた。・・・多分、悲しむだろうけど。分かってくれると信じている。いつか破壊神との本当の決着がついた時に、また会いたい。だからそれまで生きていてほしいと願っている。

それと、創造神と時神とメイナのために、藤草家の墓の横に、慰

霊碑・・・みたいなものを作ってきた。ただそれぞれの名前を書いただけだけれど、こう言うのは気持ちだと言うし、別にいいと思う。・・・ま、あの三人に墓つてのも似合わないだろう。あと藤草効煽の名前もついでに書いておいた。余談だが、効煽には戦場などでコツコツ集めた宝物などの隠し財産があったらしく、それが今の藤草家の繁栄の糧となっているらしい。

そして時は過ぎ、4月2日。

俺と古王は、古王のつてからとある山奥の田舎にある八音中門商店やねなかどと言う店に、あの夜からずっと寝泊りさせてもらっていた。その理由は俺たちがバスターに何故か指名手配されているために匿ってもらっているのと、ここの店主が俺たちに協力してくれる、と言うからだ。

その八音中門商店と言う変な名前の店は、店長と呼ばれる年齢不詳の男（ただし外見は相当若い）と業ごうと言う名の中学生ぐらいの店員の二人で営業している店で、どうもファンタジー世界にかなり精通しているらしい。裏で色々やっていて、しかもファンタジー世界の深い部分ではここの店長はかなりの有名人らしい。一見するとただの雑貨屋件駄菓子屋なのだが・・・実は売っている物の一部が魔術関連のアイテムだったりするのだから驚きだ。

そして今日、俺はついに決意し、商店の地下に何故かある手術室で左腕を肩から切ってもらった。

「おい久郎。よかったのか、左腕を切っちまって」

と古王には聞かれたが、

「ああ、どうせ使い物にならないしな。だから別にいい」

と言って、手術に踏み切った。

どうやら左腕は本当に壊死していたらしく。細胞がことごとく破壊されていたらしい。ただ、破壊神も急のことだったからだろうが、血管や外側はほぼ無傷な状態で残っており、そのおかげである時、

内出血多量になることもなく、動けていたと言うわけだ。

左腕を今の今まで残していたのは、そう言う理由もあってまた動かせるようになるかもしれない、と思ったからだ。まあ下手に残しておくよりは切った方がいい、と前々からここの店長にも勧められていたからな。

で、今の俺は、手術後の病院服を着ながら俺にあてがわれた部屋で座って休んでいる。そもそも、ただつながっているだけの腕だったのだから特に術後にどうこうと言う事はないらしく。少し疲れただけで済んでいた。ま、魔術を使った手術により恩恵なのかもしれないけれど。

ちなみに切った黒ずんだ左腕は、一応、試したい事があるので取っておいてある。・・・ま、どうでもいい情報だったかもしれない。ガラガラガラ。

ふと部屋の扉が開かれる。そこに居たのは古王。何の用事なのか、そのまま部屋に入ってくる。

「どうしたんだ？ 古王」

俺が訊くと、

「いや、ただこれからどうするのかな、と思ってな」

と、古王は少し興味がある、と言った様子で答えた。

「どうする・・・か。何でそれを今訊くんだ？」

「いやだって、左腕切ったじゃん。だからそろそろ行動すんのかな・・・と思うって」

古王の予想はあながち外れてはいなかった。この後、試したい事を試したら行動に出ようかと思っていたからだ。

「・・・まあな。とりあえずすることは決まっている」

「ほー、何をする気でいるんだ？」

「・・・贖罪だ。・・・あの時、俺が殺めてしまったヤツの、忘れ形見を引き取りに行く。・・・それと、もっと過酷な環境に自分の身を置いてみようとも思う」

「過酷って、戦場とかにか？ まあ死なないようにせいぜいがんば

れよ」

・・・と言う、古王の口調がなんだかムカついた。

「そっちこそ、過去に戻るタイムマシン、さっさと完成させろよ」俺がそう言っていると、古王は、頭の痛そうな顔をして部屋を出て行った。きつとまた、王界にいる時王ってやつと連絡を取るつもりなんだろう。

・・・さてと、ここで俺のこれからの所信表明をしておくとなんかな感じた。

（いつか俺は、ノフィーネとまた会って、あいつの悲しき運命を断つ・・・そのために俺は強くなるろう）

そう心に改めて深く刻み、俺は立ち上がって、早速、試したい事を試すことにした。

強くなるために。世界を救うために。そして何より、ノフィーネに対して答えを出すために。

C

そして、時はそれから六年が経過する。

世界に数々の変化が訪れ、破壊神に対抗するために王界も人間界も奔走することになるその時、人知れずある計画が立てられた。

その計画の名前は『CESTGDF』^{セストグドフ}。Cに始まりFに終わるための計画・・・英雄達の英雄譚であった。

Cのエピローグ（後書き）

と言う事で、これで『命断のクロウ』はおしまいです。こんな駄作をここまで読んで下さった方々、どうもありがとうございました。本当に恩の字です。

さて、展開が早すぎる、超展開過ぎる、と言う事に関しては本当に言い訳のしようがありません。気がついた時には超展開の物語は超展開でしか終わらせられなくなっていました・・・。友達からの指摘ももらっているので、次作ではこう言う事にはしないよう努力します。というかせねばなりません。

さて、最後に次作についてですが、活動報告にて書くと思うので、悪いところを直すのならまた読んであげましょう、という心の広い方はどうかご覧になってください。※追記、次回作上げましたので、よろしければ読んでみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1068h/>

C E S T G D F ～命断のクロウ～

2010年10月8日12時55分発行